平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡

2000

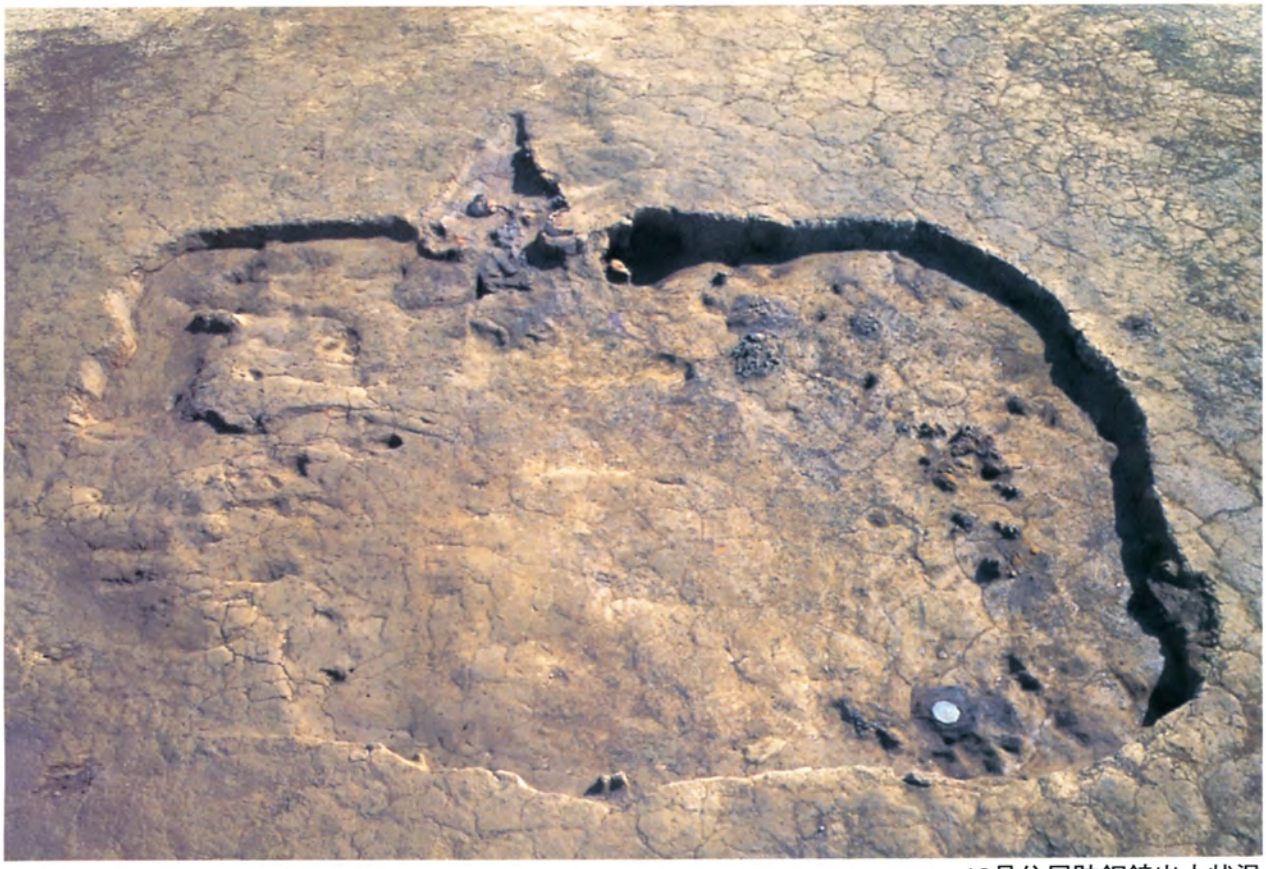
埼玉県熊谷市教育委員会

平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡

2000

埼玉県熊谷市教育委員会



13号住居跡銅鏡出土状況

13号住居跡出土瑞花鴛鴦八稜鏡

1号土器祭祀跡全景（北東より）

1号土器祭祀跡馬頭骨出土状況

序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも原始・古代の集落跡や中世の館跡等の埋蔵文化財が、熊谷市内に広く分布することが知られています。

こうした文化財は、熊谷市の発展やその過程を物語る証であるとともに、子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の創造のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、準用河川新奈良川に付属する調節池の建設に伴い、平成10年６月から平成11年３月に実施された一本木前遺跡の第一次調査の成果をまとめたものです。今回の調査によって、古墳時代から平安時代にかけて生活が営まれた複合遺跡であることが確認され、中でも、古墳時代の土器を用いた祭祀跡の中心から馬頭骨が発見されたこと、平安時代の住居跡から銅製の瑞花鴛鴦八綾鏡が発見されたことなど、貴重な資料が確認され、非常に重要な成果として注目されているところでございます。

本書を、文化財の記録の保存のみならず、郷土の歴史解明、学術研究の資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、文化財保護法の趣旨をご理解いただき、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご協力をいただきました熊谷市建設部河川課、ならびに地元関係者各位に厚くお礼申しあげます。

平成12年３月

熊谷市教育委員会

教育長　飯塚誠一郎

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市大字東別府字一本木前1390番地他に所在する一本木前遺跡第１次調査（平成10年度分）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、新奈良川第３調節池掘削工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、平成10年６月１日から平成11年３月31日であり、整理報告書作成作業期間は、平成11年６月１日から平成12年３月31日である。

5　発掘調査は、寺社下博、佐々木健策、市川康弘、整理報告書作成作業は寺社下がそれぞれ担当した。

6　発掘の写真撮影は、寺社下、佐々木、市川が行い、遺物の写真撮影は、寺社下が行った。

7　出土品の整理及び図版の作成は、市川及び小林貴郎、越前谷理の協力を得て、寺社下が行った。

8　本書の執筆は、寺社下が行った。

9　銅鏡の取上と保存処理については、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団野中仁氏の指導助言を得た。

10　火山灰分析は、パリノサーヴェイ（株）に委託した。

11　遺跡の基準点測量と航空写真は、（株）東京航業研究所に委託した。

12　本書の編集は、寺社下が行った。

13　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管する。

14　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立埋蔵文化財センター、
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大里郡市文化財担当者会

凡　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構の略記号は、次のとおりである。

J　住居跡　　D　溝跡　　E　井戸　　X　性格不明遺構

2　各遺構の番号は、発掘調査時に付したものを、整理時に調査区の北か西へ・北から南への順序で付け直した。

3　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構全測図　1/200　　遺構平面図　1/60　　遺構断面図　1/60

カマド平面図　1/30　　遺物出土状況平面図　1/30

4　遺構挿図中のスクリーントーン等は、原則として次の内容を示す。

地山　灰　焼土　炭化物　鉄滓

5　遺構挿図中のレベル基準線は、標高29.000mで統一した。

6　遺物挿図の縮尺は、原則として1/4である。他の縮尺は、その都度示した。

7　遺物挿図中のスクリーントーンは、灰釉のかかった範囲を示す。

8　遺物観察表中の単位は、全てcmを示す。なお、実測できず、推定復元した場合については推定値として（　）で括って表示した。

9　遺物観察中の胎土は、肉眼で観察できる次のような包含物質について、多い順に数字で示した。

①白色粒子　②黒色粒子　③赤色粒子　④片岩粒子　⑤白色針状物質　⑥礫

10　遺物観察表中の焼成は、次のように3段階に区分して、数字で示した。

①良好（良く焼きしまっている）　②普通　③不良（脆く、崩れやすい）

11　遺物観察表中の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織…2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……7
　1　調査の方法……7
　2　検出された遺構と遺物……7
Ⅳ　遺構と遺物……11
　1　住居跡……11
　2　土器祭祀跡……144
　3　道路状遺構……167
　4　溝跡……169
　5　土坑……183
　6　井戸跡……220
　7　性格不明遺構……221
Ⅴ　調査のまとめ……229

付篇　一本木前遺跡の自然科学分析……243

挿図目次

第1図　埼玉県の地形図……3
第2図　一本木前遺跡周辺遺跡分布図……4
第3図　一本木前遺跡位置図……8
第4図　一本木前遺跡調査区全体図……9
第5図　一本木前遺跡基本土層……10
第6図　1号住居跡及びカマド……11
第7図　2・3号住居跡……12
第8図　2・3号住居跡カマド……13
第9図　4・5号住居跡及び5号住カマド……15
第10図　6号住居跡……17
第11図　1～6号住居跡出土遺物……18
第12図　7号住居跡及び出土遺物……19
第13図　8号住居跡……20
第14図　8号住居跡出土遺物……21
第15図　9号住居跡及びカマド……23
第16図　9・10号住居跡出土遺物……24
第17図　10号住居跡及びカマド……25
第18図　11号住居跡……27
第19図　11・12号住居跡出土遺物……27
第20図　11号住居跡カマド及び遺物出土状況…28
第21図　12号住居跡……29
第22図　13号住居跡……30
第23図　13号住居跡カマド及び遺物出土状況…31
第24図　13号住居跡出土遺物……32
第25図　14号住居跡及びカマド付近遺物出土状況……33
第26図　14号住居跡出土遺物……34
第27図　15号住居跡遺物出土状況……36

第28図　15号住居跡出土遺物……37
第29図　16号住居跡……38
第30図　16号住居跡遺物出土状況……39
第31図　16号住居跡カマド及び出土遺物……40
第32図　17号住居跡……42
第33図　17号住居跡カマド及び出土遺物……43
第34図　18号住居跡……45
第35図　18号住居跡カマド及び遺物出土状況…46
第36図　18号住居跡出土遺物①……47
第37図　18号住居跡出土遺物②……48
第38図　19号住居跡……51
第39図　19号住居跡カマド及び遺物出土状況…52
第40図　19号住居跡出土遺物①……53
第41図　19号住居跡出土遺物②……54
第42図　20号住居跡及びカマド付近遺物出土状況……58
第43図　20号住居跡出土遺物……59
第44図　21号住居跡……60
第45図　21号住居跡カマド及び遺物出土状況・出土遺物①……61
第46図　21号住居跡出土遺物②……62
第47図　21号住居跡出土遺物③……63
第48図　22号住居跡……64
第49図　22号住居跡カマド及び遺物出土状況・出土遺物……65
第50図　23号住居跡……66
第51図　23号住居跡遺物出土状況……67
第52図　23号住居跡出土遺物……68
第53図　23号住居跡カマド……69
第54図　24号住居跡及び出土遺物……70
第55図　25号住居跡及びカマド・出土遺物…72
第56図　26・27号住居跡及びカマド……74
第57図　26・27号住居跡出土遺物……75
第58図　28号住居跡及びカマド・出土遺物…78
第59図　29号住居跡……80
第60図　29号住居跡出土遺物……81
第61図　30号住居跡カマド……81
第62図　30号住居跡……82
第63図　30号住居跡遺物出土状況……83
第64図　30号住居跡出土遺物……84
第65図　32号住居跡カマド……86
第66図　32号住居跡及び遺物出土状況……87
第67図　32号住居跡出土遺物……88
第68図　33号住居跡……90
第69図　34～40号住居跡……91
第70図　40号住居跡カマド……94
第71図　33～35・37号住居跡出土遺物……96
第72図　39号住居跡出土遺物……97
第73図　40号住居跡出土遺物……99
第74図　41・44・45・51・52号住居跡…… 102
第75図　44・51号住居跡カマド…… 105
第76図　41・44・45号住居跡出土遺物…… 107
第77図　42・43号住居跡及び42号出土遺物…109
第78図　42・43号住居跡カマド及び43号住居跡出土遺物…… 110
第79図　46・47号住居跡及びカマド…… 111
第80図　48～50号住居跡…… 112
第81図　47・48号住居跡出土遺物…… 113
第82図　53～55号住居跡…… 116
第83図　53・54号住居跡カマド…… 117
第84図　50～52・54号住居跡出土遺物…… 118
第85図　55号住居跡遺物出土状況…… 119
第86図　55号住居跡出土遺物…… 120
第87図　56・57号住居跡…… 121
第88図　58号住居跡…… 123
第89図　57・59号住居跡出土遺物…… 123
第90図　59～62号住居跡…… 124
第91図　60号住居跡出土遺物…… 126
第92図　60号住居跡遺物出土状況…… 127
第93図　62号住居跡カマド…… 129
第94図　61・62号住居跡出土遺物…… 130
第95図　63・64号住居跡…… 131
第96図　63号住居跡出土遺物…… 132
第97図　64号住居跡出土遺物…… 134

第98図　65～68号住居跡……135
第99図　65号住居跡カマド……136
第100図　65号住居跡出土遺物……137
第101図　69号住居跡……139
第102図　70号住居跡……140
第103図　67～70号住居跡出土遺物……141
第104図　71号住居跡及び出土遺物……143
第105図　1～3号土器祭祀跡位置図……145
第106図　1号土器祭祀跡……146
第107図　1号土器祭祀跡遺物（上）・礫（下）出土状況……148
第108図　1号土器祭祀跡馬頭骨出土状況及び馬頭骨実測図……149
第109図　1号土器祭祀跡遺物復元状況……150
第110図　1号土器祭祀跡出土遺物①……151
第111図　1号土器祭祀跡出土遺物②……153
第112図　1号土器祭祀跡出土遺物③……155
第113図　1号土器祭祀跡出土遺物④……156
第114図　2・3号土器祭祀跡関連図……157
第115図　2号土器祭祀跡遺物（上）・復元（下）状況……158
第116図　2号土器祭祀跡出土遺物……159
第117図　3号土器祭祀跡遺物出土状況①…161
第118図　3号土器祭祀跡遺物出土状況②…162
第119図　3号土器祭祀跡遺物復元状況……163
第120図　3号土器祭祀跡出土遺物①……164
第121図　3号土器祭祀跡出土遺物②……165
第122図　道路状遺構……168
第123図　溝断面①……170
第124図　溝断面②……171
第125図　溝断面③……177
第126図　溝出土遺物……180
第127図　1～11号土坑……184
第128図　12～19号土坑……185
第129図　20～25号土坑……186
第130図　26～30・33号土坑……188
第131図　31・32・34～37・39・40号土坑…189
第132図　38・41～50号土坑……191
第133図　51～63号土坑……193
第134図　64～72号土坑……194
第135図　73～82・92号土坑……196
第136図　83～91・93～97号土坑……197
第137図　98～116号土坑…… 198
第138図　117～128・130～132・139・140号土坑…200
第139図　129・135・136・138・145・146号土坑…201
第140図　133・134・137・147号土坑……202
第141図　141～144・148～150号土坑……203
第142図　151～169号土坑……205
第143図　170～188号土坑……206
第144図　189～198・209・210号土坑……207
第145図　199～208・211～218号土坑……209
第146図　219～226号土坑……210
第147図　227～229号土坑……211
第148図　土坑出土遺物①……212
第149図　土坑出土遺物②……214
第150図　土坑出土遺物③……216
第151図　土坑出土遺物④……217
第152図　土坑出土遺物⑤……218
第153図　1～4号井戸跡……222
第154図　1号不明遺構……223
第155図　2号不明遺構……224
第156図　3号不明遺構……225
第157図　グリッド・トレンチ・表採遺物…226
第158図　1号土器祭祀跡関連遺物①……227
第159図　1号土器祭祀跡関連遺物②……228
第160図　埼玉県内出土八稜鏡……231
付図・1　一本木前遺跡A区検出遺構配置図
付図・2　一本木前遺跡A区住居跡（不明遺構を含む）配置図
付図・3　一本木前遺跡A区溝状遺構（道路状遺構を含む）配置図
付図・4　一本木前遺跡A区土坑状遺構（井戸跡を含む）配置図

表 目 次

第１表　第２図掲載遺跡一覧表……５
第２表　１号住居跡出土遺物観察表……14
第３表　２号住居跡出土遺物観察表……14
第４表　３号住居跡出土遺物観察表……14
第５表　４号住居跡出土遺物観察表……14
第６表　５号住居跡出土遺物観察表……16
第７表　６号住居跡出土遺物観察表……17
第８表　７号住居跡出土遺物観察表……19
第９表　８号住居跡出土遺物観察表……21
第10表　９号住居跡出土遺物観察表……24
第11表　10号住居跡出土遺物観察表……26
第12表　11号住居跡出土遺物観察表……27
第13表　12号住居跡出土遺物観察表……29
第14表　13号住居跡出土遺物観察表……33
第15表　14号住居跡出土遺物観察表……34
第16表　15号住居跡出土遺物観察表……35
第17表　16号住居跡出土遺物観察表……41
第18表　17号住居跡出土遺物観察表……44
第19表　18号住居跡出土遺物観察表……49
第20表　19号住居跡出土遺物観察表……55
第21表　20号住居跡出土遺物観察表……57
第22表　21号住居跡出土遺物観察表……60
第23表　22号住居跡出土遺物観察表……65
第24表　23号住居跡出土遺物観察表……68
第25表　24号住居跡出土遺物観察表……71
第26表　25号住居跡出土遺物観察表……73
第27表　26・27号住居跡出土遺物観察表……76
第28表　28号住居跡出土遺物観察表……77
第29表　29号住居跡出土遺物観察表……79
第30表　30号住居跡出土遺物観察表……85
第31表　32号住居跡出土遺物観察表……89
第32表　33号住居跡出土遺物観察表……89
第33表　34号住居跡出土遺物観察表……90
第34表　35号住居跡出土遺物観察表……92
第35表　37号住居跡出土遺物観察表……93
第36表　39号住居跡出土遺物観察表……98
第37表　40号住居跡出土遺物観察表……98
第38表　41号住居跡出土遺物観察表…… 100
第39表　42号住居跡出土遺物観察表…… 101
第40表　43号住居跡出土遺物観察表…… 103
第41表　44号住居跡出土遺物観察表…… 104
第42表　45号住居跡出土遺物観察表…… 106
第43表　47号住居跡出土遺物観察表…… 108
第44表　48号住居跡出土遺物観察表…… 112
第45表　50号住居跡出土遺物観察表…… 114
第46表　51号住居跡出土遺物観察表…… 115
第47表　52号住居跡出土遺物観察表…… 115
第48表　54号住居跡出土遺物観察表…… 117
第49表　55号住居跡出土遺物観察表…… 119
第50表　57号住居跡出土遺物観察表…… 122
第51表　59号住居跡出土遺物観察表…… 125
第52表　60号住居跡出土遺物観察表…… 127
第53表　61号住居跡出土遺物観察表…… 129
第54表　62号住居跡出土遺物観察表…… 130
第55表　63号住居跡出土遺物観察表…… 132
第56表　64号住居跡出土遺物観察表…… 133
第57表　65号住居跡出土遺物観察表…… 136
第58表　67号住居跡出土遺物観察表…… 138
第59表　68号住居跡出土遺物観察表…… 139
第60表　69号住居跡出土遺物観察表…… 140
第61表　70号住居跡出土遺物観察表…… 142
第62表　71号住居跡出土遺物観察表…… 142
第63表　１号土器祭祀跡出土遺物観察表… 149
第64表　２号土器祭祀跡出土遺物観察表… 157
第65表　３号土器祭祀跡出土遺物観察表… 165
第66表　溝出土遺物観察表…… 181
第67表　土坑出土遺物観察表…… 213
第68表　不明遺構出土遺物観察表…… 223

第69表　表採等遺物観察表…… 226
第70表　1号土器祭祀関連遺物観察表①… 227
第71表　1号土器祭祀関連遺物観察表②… 228
第72表　関東甲信地方住居跡出土の八稜鏡 …236

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景（南より）
図版2　遺跡遠景（南より）
図版3　本年度調査区全景（南より）
図版4　発掘調査風景①
発掘調査風景②
発掘調査風景③
図版5　遺跡近景（北より）
遺跡近景（南より）
図版6　1号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
図版7　7号住居跡
9号住居跡
9号住居跡遺物出土状況
図版8　10号住居跡
11号住居跡検出状況
11号住居跡カマド
図版9　11号住居跡遺物出土状況
11号住居跡
12号住居跡
図版10　13号住居跡検出状況
13号住居跡カマド
13号住居跡スラッグ出土状況①
図版11　13号住居跡スラッグ出土状況②
13号住居跡銅鏡出土状況
13号住居跡銅鏡下炭化材出土状況
図版12　13号住居跡臼玉出土状況
13号住居跡カマド前ピット
13号住居跡
図版13　14号住居跡
14号住居跡遺物出土状況
15号住居跡遺物出土状況①
図版14　15号住居跡遺物出土状況②
15号住居跡遺物出土状況③
16号住居跡検出状況
図版15　16号住居跡カマド
16号住居跡
17号住居跡検出状況
図版16　17号住居跡南カマド
17号住居跡北カマド遺物出土状況
18号住居跡検出状況
図版17　18号住居跡遺物出土状況①
18号住居跡遺物出土状況②
18号住居跡遺物出土状況③
図版18　18号住居跡遺物出土状況④
18号住居跡カマド
19号住居跡検出状況①
図版19　19号住居跡検出状況②
19号住居跡
20号住居跡検出状況
図版20　20号住居跡カマド
20号住居跡遺物出土状況①
20号住居跡遺物出土状況②
図版21　21号住居跡遺物出土状況①
21号住居跡遺物出土状況②
21号住居跡遺物出土状況③
図版22　21号住居跡遺物出土状況④
21号住居跡カマド

21号住居跡カマド内遺物出土状況①
図版23　21号住居跡カマド内遺物出土状況②
21号住居跡カマド内遺物出土状況③
21号住居跡カマド内遺物出土状況④
図版24　22号住居跡検出状況
22号住居跡カマド及び遺物出土状況
22号住居跡カマド内遺物出土状況
図版25　22号住居跡カマド支脚検出状況
23号住居跡検出状況
23号住居跡遺物出土状況①
図版26　23号住居跡遺物出土状況②
23号住居跡カマド
24号住居跡
図版27　25号住居跡検出状況
25号住居跡カマド
26・27号住居跡検出状況
図版28　26号住居跡カマド検出状況
26号住居跡カマド
26・27号住居跡カマド
図版29　27号住居跡カマド検出状況
27号住居跡カマド
27号住居跡遺物出土状況
図版30　28号住居跡検出状況
28号住居跡カマド
28号住居跡カマド内遺物出土状況
図版31　28号住居跡カマド脇遺物出土状況
29号住居跡検出状況
29号住居跡カマド内遺物出土状況
図版32　29号住居跡遺物出土状況
30号住居跡①
30号住居跡②
図版33　30号住居跡遺物出土状況①
30号住居跡遺物出土状況②
30号住居跡遺物出土状況③
図版34　32号住居跡検出状況
32号住居跡カマド
32号住居跡
図版35　33号住居跡
34号住居跡
34号住居跡カマド
図版36　39号住居跡遺物出土状況①
39号住居跡遺物出土状況②
39号住居跡遺物出土状況③
図版37　40号住居跡
41号住居跡
42号住居跡
図版38　43号住居跡遺物出土状況
43号住居跡
44号住居跡
図版39　45号住居跡
47号住居跡遺物出土状況
48号住居跡
図版40　50号住居跡
51号住居跡①
51号住居跡②
図版41　51号住居跡遺物出土状況
51・52号住居跡
54号住居跡
図版42　54号住居跡遺物出土状況
55号住居跡検出状況
55号住居跡遺物出土状況
図版43　56号住居跡
59号住居跡
60号住居跡
図版44　60号住居跡カマド及び遺物出土状況
60号住居跡カマド
62号住居跡カマド
図版45　63号住居跡
64号住居跡
65号住居跡
図版46　65号住居跡遺物出土状況①
65号住居跡遺物出土状況②
65号住居跡カマド
図版47　68号住居跡

70号住居跡
71号住居跡遺物出土状況
図版48　1号土器祭祀跡検出状況①
1号土器祭祀跡検出状況②
1号土器祭祀跡遺物出土状況①
図版49　1号土器祭祀跡遺物出土状況②
1号土器祭祀跡遺物出土状況③
1号土器祭祀跡遺物出土状況④
図版50　1号土器祭祀跡遺物出土状況⑤
2号土器祭祀跡検出状況①
2号土器祭祀跡検出状況②
図版51　2号土器祭祀跡長頸鏃出土状況
3号土器祭祀跡検出状況①
3号土器祭祀跡検出状況②
図版52　3号土器祭祀跡検出状況③
3号土器祭祀跡遺物出土状況①
3号土器祭祀跡遺物出土状況②
図版53　道路状遺構
1号溝（北端）
1号溝（北側・分岐点）
図版54　27・28号土坑
34号土坑
37号土坑
図版55　47号土坑
47号土坑遺物出土状況①
47号土坑遺物出土状況②
図版56　64号土坑
65号土坑
66号土坑
図版57　73号土坑
74号土坑
91号土坑
図版58　92号土坑
93号土坑
125・126号土坑
図版59　129号土坑断面
133号土坑
136号土坑
図版60　142号土坑遺物出土状況
152号土坑遺物出土状況①
152号土坑遺物出土状況②
図版61　153号土坑遺物出土状況
167号土坑遺物出土状況①
167号土坑遺物出土状況②
図版62　186号土坑遺物出土状況①
186号土坑遺物出土状況②
211号土坑
図版63　213号土坑
225号土坑遺物出土状況
227号土坑遺物出土状況
図版64　1号性格不明遺構
2号性格不明遺構
2号性格不明遺構遺物出土状況
図版65　3号性格不明遺構
3号性格不明遺構遺物出土状況
1号井戸跡
図版66　2号井戸跡
3号井戸跡断面
3号井戸跡
図版67　出土遺物Ⅰ・杯類（1）
1号住居No. 1、2号住居No. 2
8号住居No. 4・5・10
9号住居No. 1
図版68　出土遺物Ⅰ・杯類（2）
9号住居No. 2・3・4・5
11号住居No. 2
図版69　出土遺物Ⅰ・杯類（3）
11号住居No. 3、12号住居No. 1
13号住居No. 1・2
14号住居No. 1・2・4
図版70　出土遺物Ⅰ・杯類（4）
16号住居No. 1・5、17号住居No. 2
18号住居No. 3・4・6・7
図版71　出土遺物Ⅰ・杯類（5）

18号住居No. 9 ・10・11・12・14・
15・16・17
図版72 出土遺物Ⅰ・杯類（6）
18号住居No. 18・21
19号住居No. 2 ・ 3 ・ 7 ・ 8 ・ 9 ・10
図版73 出土遺物Ⅰ・杯類（7）
19号住居No. 11・13・14・16・19・
20・22
21号住居No. 1
図版74 出土遺物Ⅰ・杯類（8）
21号住居No. 2 ・ 5 ・ 6 ・ 7
22号住居No. 2
23号住居No. 3 ・ 5 ・ 6
図版75 出土遺物Ⅰ・杯類（9）
23号住居No. 8、24号住居No. 1 ・ 2
26号住居No. 2、28号住居No. 3
29号住居No. 1
図版76 出土遺物Ⅰ・杯類（10）
29号住居No. 2
30号住居No. 1 ・ 5 ・ 6
図版77 出土遺物Ⅰ・杯類（11）
30号住居No. 7 ・ 8
33号住居No. 2 ・ 3
37号住居No. 1
図版78 出土遺物Ⅰ・杯類（12）
37号住居No. 4 ・ 5 ・ 7
39号住居No. 3 ・ 4
図版79 出土遺物Ⅰ・杯類（13）
40号住居No. 2 ・ 4 ・ 9
41号住居No. 1、43号住居No. 1 ・ 3
図版80 出土遺物Ⅰ・杯類（14）
45号住居No. 1
47号住居No. 2 ・ 3 ・ 4
48号住居No. 3、50号住居No. 2
55号住居No. 3
図版81 出土遺物Ⅰ・杯類（15）
57号住居No. 1
60号住居No. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・11
図版82 出土遺物Ⅰ・杯類（16）
61号住居No. 1 ・ 2 ・ 4
62号住居No. 2、64号住居No. 2
65号住居No. 8
図版83 出土遺物Ⅰ・杯類（17）
65号住居No. 9、69号住居No. 2
71号住居No. 2 ・ 3
1号土器祭祀No. 1 ・ 4 ・ 5
図版84 出土遺物Ⅰ・杯類（18）
1号土器祭祀No. 6 ・10・11・15・
19・21・23・24
図版85 出土遺物Ⅰ・杯類（19）
1号土器祭祀No. 25・28・29・35・38
2号土器祭祀No. 3 ・ 7
3号土器祭祀No. 3
図版86 出土遺物Ⅰ・杯類（20）
3号土器祭祀No. 6 ・ 7 ・11・15・
16・17・18・19
図版87 出土遺物Ⅰ・杯類（21）
3号土器祭祀No. 20・21・25・29・
30・32・33
1号溝No. 3
図版88 出土遺物Ⅰ・杯類（22）
1号溝No. 5 ・ 9 ・10
34号土坑No. 1 ・ 2
図版89 出土遺物Ⅰ・杯類（23）
47号土坑No. 1
135号土坑No. 1
その他No. 1 ・ 2
図版90 出土遺物Ⅰ・杯類（24）
37号土坑No. 1
その他No. 1
図版91 出土遺物Ⅱ・高杯（1）
15号住居No. 1 ・ 2 ・ 3
16号住居No. 7
17号住居No. 3

図版92　出土遺物Ⅱ・高杯（2）
18号住居No.22、19号住居No.24
64号住居No.4・5、142号土坑No.3
図版93　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（1）
6号住居No.4、8号住居No.12
14号住居No.7
15号住居No.6・7・10
図版94　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（2）
16号住居No.10
18号住居No.25・29・31・32・34
図版95　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（3）
19号住居No.30・31、20号住居No.4
21号住居No.8・9・10
図版96　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（4）
21号住居No.11・12・13・14・15・16
図版97　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（5）
32号住居No.4、40号住居No.13
47号住居No.5、60号住居No.17
64号住居No.10、67号住居No.1
図版98　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（6）
70号住居No.2、71号住居No.8
142号土坑No.6・8・9・10
図版99　出土遺物Ⅲ・壷、甕類（7）
1号土器No.44・45・46
1号土器関連須恵器大甕
図版100　出土遺物Ⅳ・羽釜
13号住居No.4・5
26号住居No.5、27号住居No.6
30号住居No.10、1号溝No.15
図版101　出土遺物Ⅴ・鉢、甑類（1）
18号住居No.41・42
19号住居No.33・41・43・44
図版102　出土遺物Ⅴ・鉢、甑類（2）
21号住居No.17・18、23号住居No.11
63号住居No.2・4、64号住居No.6
図版103　出土遺物Ⅴ・鉢、甑類（3）
67号住居No.2、4号土坑No.1
45号土坑No.3、142号土坑No.14
167号土坑No.2
図版104　出土遺物Ⅶ・その他の器種
39号住居No.7、1号土器祭祀No.43
3号土器祭祀No.38、133号土坑No.1
152号土坑No.4
図版105　出土遺物Ⅶ・鉄製品
8号住居No.15、20号住居No.5・6
27号住居No.18、29号住居No.4・5
45号住居No.8、2号土器祭祀No.12
224号土坑No.3
図版106　出土遺物Ⅷ・石錘、砥石（1）
1号住居No.2、8号住居No.16・17
13号住居No.7、24号住居No.4・5
30号住居No.17、32号住居No.12
図版107　出土遺物Ⅷ石錘、砥石（2）
37号住居No.11・12、39号住居No.14
48号住居No.5、62号住居No.8
67号住居No.2、135号土坑No.7
図版108　出土遺物Ⅸ・土錘
各遺構出土土錘
図版109　出土遺物Ⅹ・その他（1）
銅鏡―13号住居No.8
図版110　出土遺物Ⅹ・その他（2）
馬歯―1号土器祭祀
図版111　出土遺物Ⅸ・その他（3）
石製模造品―18号住居No.43
1号土器祭祀No.61・62
支脚―57号住居No.5
図版112　出土遺物Ⅹ・その他（3）
鉄塊、スラッグ

Ⅰ 発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成９年10月９日、小林一夫熊谷市長から熊谷市教育委員会教育長に対して、熊谷市大字東別府1390番地他地内の、面積約61.280m²に及ぶ準用河川新奈良川第３調節池開発事業における文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

この協議に対して、開発予定地が周知の遺跡（別府条里遺跡、遺跡番号59―49）縁辺部にあたり、遺跡の存在する可能性が非常に高い地域であるため、事前に埋蔵文化財の所在を確認する試掘調査を必要とする旨、平成９年10月15日付け熊教社収第597号をもって回答した。

この回答に対し、熊谷市長から平成９年10月30日付けで、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査の依頼を受けた。

そして、平成９年12月１日から９日に試掘調査を実施した結果、古墳時代より平安時代に及ぶ復合遺跡であることが確認された（一本木前遺跡遺跡番号59―115）ため、当該地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい旨、平成９年12月19日付け熊教社収第643号で回答した。

その後、保存策について協議を重ねたが、調節池の掘削という工事の性格上、緊急性のある点、また埋蔵文化財へ影響を与えない工事が不可能である点等、工事計画の変更は不可能であると判断されるに至ったため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、平成10年５月27日、熊谷市と熊谷市教育委員会間において、新奈良川改修地内の埋蔵文化財に関する協定書を締結し、同年６月１日より実施することとなった。

発掘調査に先立って、熊谷市長から文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、平成10年４月15日付熊河発第13号で提出された。これに対して埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、平成10年４月27日付け教文第3―42号をもって発掘調査実施の指示通知があった。

熊谷市教育委員会教育長は文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を平成11年４月２日付け熊教社発第10号で提出した。

なお、発掘調査は、平成10年度Ａ地区、平成11年度Ａ地区の北域、Ａ・Ｂ地区間道路部分、Ｄ・Ｅ区、平成12年度にはＢ地区南域とＦ地区、13年度以降にＣ地区とＢ地区北域を実施することとなった。

2　発掘調査・報告書作成の経過

一本木前遺跡の平成10年度調査（第1次調査）は、平成10年６月１日から平成11年３月31日にかけて実施した。調査対象面積は、Ａ地区のうち10,000m²である。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの削平、遺構確認、遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測、写真撮影と、一連の調査を繰り返した。

この間、夏期には大雨による冠水が数度あり、この復旧作業にずいぶん手間どったものである。

整理・報告書作成作業は、平成10年度中に遺物の洗浄と注記の80％を終え、平成11年６月１日から残りの洗浄と注記、復元、遺構の図面と写真の整理と進めた。７月に入っては遺物実測、拓本、遺構・遺物の版組みトレースを行っていった。その後10月からは、遺構写真図版、遺物写真撮影・図版、原稿執筆、割付等を併行して行い、平成12年１月に印刷業者を決定した。その後、２～３月にわたって校正を行った後、本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（1）　発掘調査（平成10年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	坂巻篤
社会教育課長	氏家保男
副参事	鈴木敏昭
課長補佐	北俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下博
主任	渡邉操
主任	吉野健
主事	松田哲
発掘調査員	佐々木健策
発掘調査員	市川康弘
発掘調査員	秋本太郎

（2）整理・報告書刊行（平成11年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	坂巻篤
社会教育課長	氏家保男
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下博
主任	渡邉操
主任	吉野健
主事	松田哲
発掘調査員	市川康弘
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷理

Ⅱ遺跡の立地と環境

一本木前遺跡は、熊谷市大字東別府字一本木前1390番地他に所在し、ＪＲ高崎線籠原駅の北東約３．０km、荒川から北へ約５．２km、利根川から南へ約５．２kmの、両河川のちょうど中間に位置する。

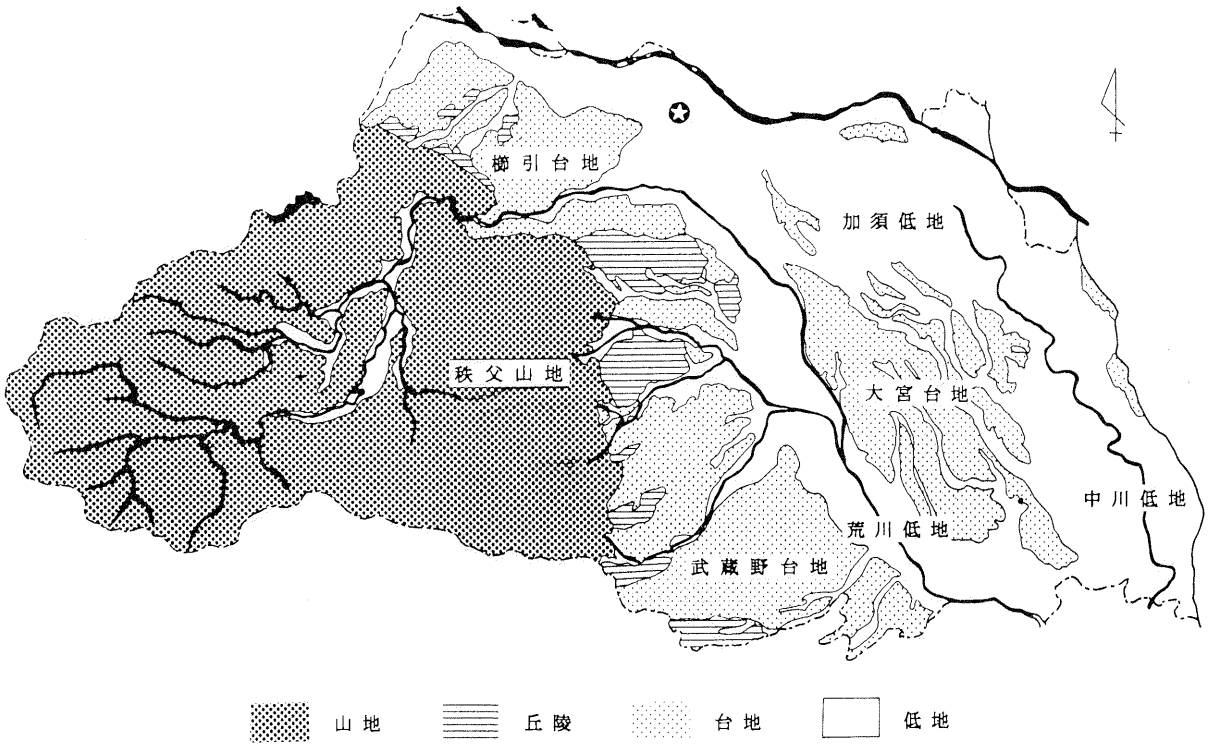
本遺跡の所在する東別府地区は、熊谷市の北西部に当たり櫛挽台地の北東端及びその北から北東に展開する妻沼低地上に立地している。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に、洪積世に形成された荒川扇状地の荒川左岸一帯を示す総称である。妻沼低地は、利根川及びその支流によって形成された沖積地であり、熊谷市の大半に及ぶ新荒川扇状地（沖積扇状地、熊谷低地と呼称）と相接している（第１図）。

本遺跡は、まさにこの両低地の接する位置にあり、標高30m、水田地として利用されていた所である。遺跡は、関東造盆地運動による地盤の沈降及び荒川・利根川の河川氾濫等によって、約１．５ｍの砂・粘土で覆われていた。

さて、本遺跡をとりまく、妻沼低地・熊谷低地・櫛挽台地における歴史的環境の概略をみていくこととする（第２図）。

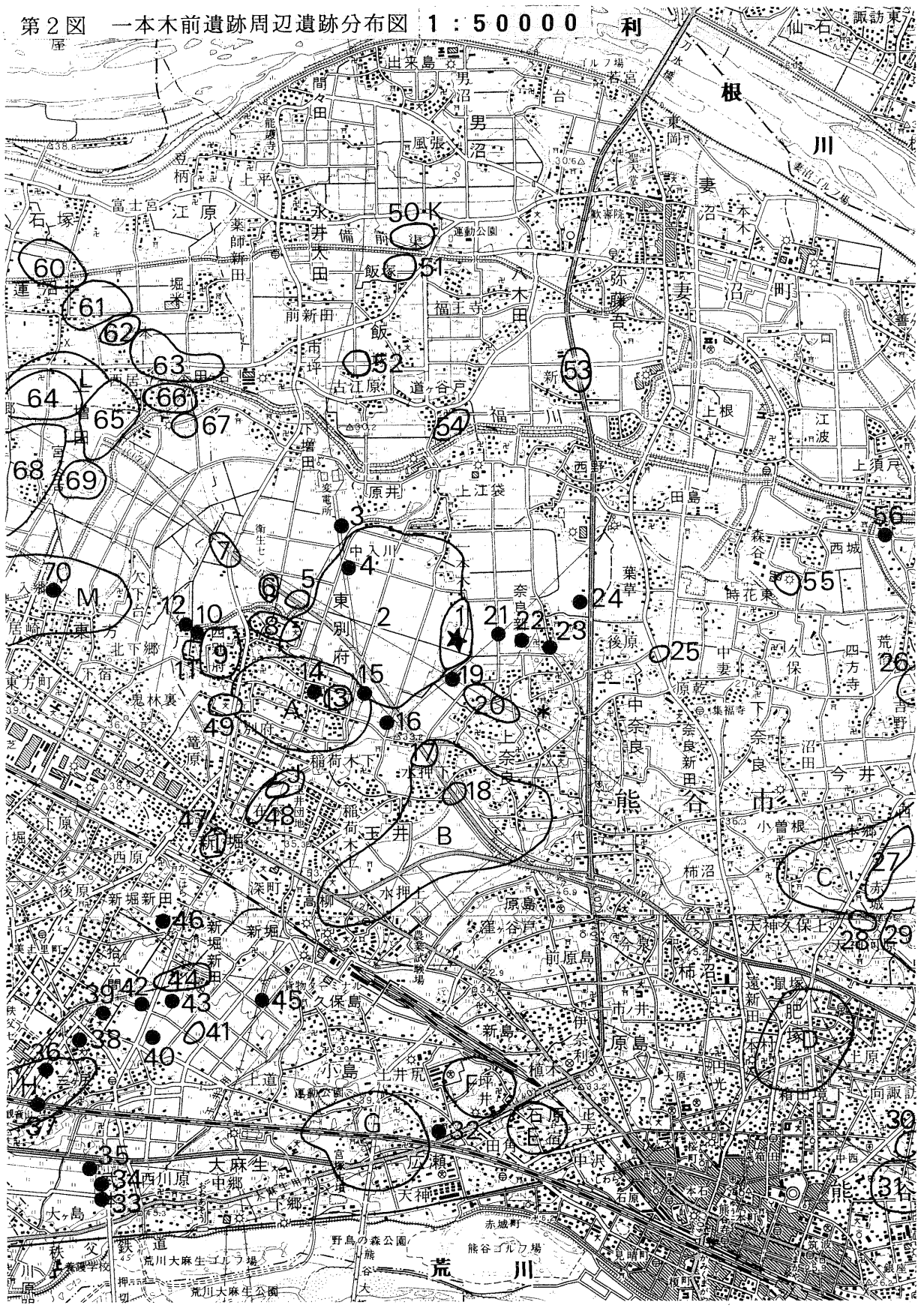
旧石器時代から縄文時代の遺跡は、きわめて少ない。旧石器時代に該当する遺物は、籠原遺跡（47）で平安時代の住居跡覆土中から出土した、黒曜石製尖頭器が、唯一知られるのみである。縄文時代前期の遺跡は、三ヶ尻遺跡内林遺跡（37）、寺東遺跡（15）など、櫛挽台地東縁部に散見されるのみである。

縄文時代中期には、同じ三ヶ尻遺跡内の天王遺跡（36）、寺東遺跡と同様、櫛挽台地の北縁に立地する石田遺跡（８）と、前代同様の分布状況を



第１図　埼玉県の地形図

第２図　一本木前遺跡周辺遺跡分布図 １：５００００



示している。後期に至ると、寺東遺跡をはじめ、入川遺跡（３）や深町遺跡（４）などで豊富な土器群が検出され、妻沼低地への進出が窺えるのである。この状況は、深谷市内でも同じで、原遺跡(65)、前遺跡（67）などが妻沼低地の自然堤防上に展開され、低地への展開が大規模に成されていったことを示している。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては、遺物は散見されるものの、実態は把握されていない。

弥生時代中期・須和田式期に至ると、再葬墓を中心に広い展開がみられるようになる。櫛挽台地上では三ヶ尻遺跡内上古遺跡（38)、妻沼低地上では、再葬墓16基が確認された横間栗遺跡（６)、関下遺跡（５・住居跡)、深谷市の明戸東遺跡(64)、妻沼町飯塚北遺跡（50)、飯塚遺跡（51)、飯塚南遺跡（52）等が群在している。

一方熊谷低地上では、北島遺跡（29)、前中西遺跡（31）が所在する。北島遺跡では再葬墓群と土壙墓群が、また前中西遺跡では再葬墓と方形周溝墓という二つの葬送形態が混在し、特異な様相を呈している。また、前中西遺跡に近在する平戸遺跡（所在地不詳）でも同時期の遺物が出土したと伝えられている。

後期の遺跡としては、深谷市明戸東遺跡、妻沼町弥藤吾新田遺跡（53）等、妻沼低地において大規模な集落が営まれるようになってきている。

古墳時代に入ると、こうした傾向は継続され、増加・拡大されてくる。

前期には、妻沼低地上に横間栗遺跡、根絡遺跡（７)、中耕地遺跡（21)、深谷市の明戸東遺跡、東川端遺跡（69)、妻沼町の弥藤吾新田遺跡、熊谷低地上には、北島遺跡、天神遺跡（28）等、比較的大規模な集落が営まれてくるのである。このうち北島遺跡では、当該期の木製農工具が出土している（北島遺跡の東に隣接する東沢遺跡でも同期の木製鋤・鍬等多量の木製農工具が出土している)。また、東川端遺跡ではパレススタイルの大型壷を伴う２号墓を中心に、方形周溝墓群の存在が確認されている。

中期の遺跡は、熊谷市上中条一帯に広がる中条

第１表　第２図掲載遺跡一覧表　＜周辺の主要遺跡＞

＜熊谷市＞

１一本木前遺跡　２別府条里遺跡　３入川遺跡　４深町遺跡　５関下遺跡　６横間栗遺跡　７根絡遺跡
８石田遺跡　９西別府館跡　10西方遺跡　11西別府廃寺　12西別府祭祀遺跡　13別府氏館跡　14別府城跡
15寺東遺跡　16稲荷東遺跡　17新ケ谷戸遺跡　18水押下遺跡　19天神下遺跡　20土用ケ谷戸遺跡
21中耕地遺跡　22西通遺跡　23東通遺跡　24横塚山古墳　25奈良東耕地遺跡　26光屋敷遺跡　27赤城遺跡
28天神遺跡　29北島遺跡　30藤之宮遺跡　31前中西遺跡　32不二ノ腰遺跡　33社裏南遺跡　34社裏遺跡
35社裏北遺跡　36三ケ尻天王遺跡　37三ケ尻林遺跡　38三ケ尻上古遺跡　39三尻中学校遺跡　40若松遺跡
41黒沢遺跡　42上辻遺跡　43下辻遺跡　44樋の上遺跡　45東遺跡　46堂西遺跡　47籠原裏遺跡
48在家遺跡　49原遺跡　　Ａ別府古墳群　Ｂ玉井古墳群　Ｃ中条古墳群　Ｄ肥塚古墳群　Ｅ石原古墳群
Ｆ坪井古墳群　Ｇ広瀬古墳群　Ｈ三ケ尻古墳群　Ｉ籠原裏古墳群　Ｊ在家古墳群　　＊奈良神社

＜妻沼町＞

50飯塚北遺跡　51飯塚遺跡　52飯塚南遺跡　53弥藤吾新田遺跡　54道ケ谷戸遺跡　55鵜森・入胎遺跡
56東城遺跡　　Ｋ飯塚北古墳群

＜深谷市＞

60ウツギ内遺跡　61砂田遺跡　62柳町遺跡　63城北遺跡　64明戸東遺跡　65原遺跡　66居立遺跡　67前遺跡
68宮ケ谷戸堀ノ内遺跡　69東川端遺跡　70城下遺跡　　Ｌ上増田古墳群　Ｍ木の本古墳群

遺跡群（ほぼ中条古墳群と同範囲で、出現期カマドを検出した権現山遺跡、常光院東遺跡、滑石製模造品が出土した雷電遺跡等が含まれる）や北島遺跡、剣形滑石製模造品を伴う土器祭祀跡が検出された東川端遺跡等が知られているが、全体の様相は、いま一つ不詳である。

古墳時代後期に至ると、櫛挽台地上と低地帯の自然堤防上を問わず、遺跡数は増大し、その規模も拡大してくる。また、その後継続して奈良・平安時代まで集落が営まれる場合が多い。

櫛挽台地東縁部及びそれに接する熊谷低地西端部では、天王遺跡、三尻中学校遺跡（39）、上辻遺跡（42）、下辻遺跡（43）、樋の上遺跡（44）と、大規模な遺跡が集中する様子がうかがえる。

また低地でも、同様な集中傾向を示している。一本木前遺跡に東接する天神下遺跡（19・中期の遺物も確認）、根絡遺跡、深谷市の砂田遺跡（61）柳町遺跡（62）、城北遺跡（63）、原遺跡（65）、居立遺跡（66）、妻沼町の飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡（54）、熊谷市北島遺跡等が知られており、中でも城北遺跡では、住居址内から馬骨が人骨と共に出土しており注目されている。

当地の古墳は、妻沼低地と熊谷低地の境界上に出現してくる。B種横刷毛の埴輪を有する横塚山古墳（24）を嚆矢とし、須恵器高杯型器台・高杯を中心とした墓前祭祀跡の検出された鎧塚古墳、女塚Ⅰ号墳をはじめとした中条古墳群（C）と続く。そして、こうした埴輪祭祀全盛の古墳群が櫛挽台地縁辺部に展開されていく。三ヶ尻古墳群（H）、別府古墳群（A）、深谷市の木の本古墳群（M）などである。なお、これらの古墳群は、埴輪消滅後まで継続している。

一方低地帯では、肥塚古墳群（D）、石原古墳群（E）、坪井古墳群（F）、妻沼町の飯塚北古墳群（K）など、埴輪衰退時に開始された古墳群が存在するようになる。そしてさらに、籠原古墳群（Ⅰ）、在家古墳群（J）、玉井古墳群（B）、広瀬古墳群（G）等々、埴輪消滅以後に開始された古墳群が台地上、低地上に広く展開されていくようになるのである。

このうち、玉井古墳群中の新ヶ谷戸1号墳は、川原石使用の胴張型横穴式石室前庭部周辺から良好な土器が出土しており、当地での埴輪消滅の時期を知る大きな手がかりとなっている。籠原古墳群も同様な川原石使用の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、六角形・八角形を呈する墳丘の存在が確認され、終末期古墳の様相を知る上で重要な位置を占める古墳群である。また広瀬古墳群は、熊谷商業高校地内古墳から出土した蕨手刀の存在や、上円下方墳といわれる宮塚古墳（崩落した裾部の石組を観察すると、下方部は方ではなく、多角形を呈する可能性が高い）の存在など、やはり、当地での終末期古墳の性格を語る上で、欠くことのできない重要な古墳群であるといえる。

こうした古墳とは別に、櫛挽台地の東北端部・西別府では、8世紀初頭に創建されたとされる、西別府廃寺（11）が、二度の発掘調査によって確認されている。墓壇跡・瓦溜まり等から軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・瓦塔等が大量に出土し、それらから8世紀初頭から9世紀後半まで継続したと考えられる。県内でも寺谷廃寺（滑川町）に次ぐ古さをもつ初期寺院である。なお、先述した籠原古墳群とは、直線距離で1．5kmの位置である。

この西別府廃寺北西200mの湯殿神社裏（櫛挽台地北端崖面直下の湧水地）に所在する西別府祭祀遺跡（12）では、古墳時代後期から平安時代にわたる須恵器・土師器と共に、櫛形・馬形・剣形をはじめ約160点の滑石製模造品が出土しており水辺祭祀のあり方を示す好例となっている。

櫛挽台地の北東端から東縁端にかけては、在家遺跡（48）、籠原裏遺跡（47）、堂西遺跡（46）などの遺跡が加わり、奈良・平安時代の集落遺跡が集中して営まれる地となるのである。

Ⅲ遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査は、遺跡全体の北東隅を基点として、一辺10mのグリッド方式をとり、北東隅をA—0グリッドとして南へB・C・D……、西へ1・2・3……と呼称した。また南へのZ以降の呼称はAA・AB・AC……とした。このうちN—2ポイントを、国家座標X＝21.100.000、Y＝42.410.000に合わせて設定している。

98年度調査区域は、南北N～AE、東西2～10の範囲に含まれる。なお遺跡発掘調査予定区は、水田の区割りに合わせてA・B・C・D・E・Fの6区に分割し、98年度調査区域は、A区に該当している（第3図・4図）。

発掘調査は、遺構確認面の上位30cmの保護層を重機によって削除し、上記のグリッド設定を行うところから開始した。

その後、人力によって遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構の手掘りでの掘り下げを行った。途中、検出された土器等の遺物は、写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納した。また遺構においても、掘り下げ途中で、必要に応じて、あるいは完掘時に写真撮影・測量を実施した。

このうち、ACライン以南では、遺構が上下に重復し、遺構の平面形を確認するのに手間どった。

遺構の測量は、グリッド基本杭を基準として、水糸による1mメッシュを設定した簡易遣り方の方法をとった。しかし、遺跡の40%を占める1号溝については、航空写真による5cmコンターの測量とした。

なお、1号土器祭祀跡の東方に広がる入江状の落ち込みは、調査終了時に確認されたため、重機によって形状を確認したものである。

こうして、最後に遺跡全体の空中写真撮影を行い、本調査を完了した。

2　検出された遺構と遺物

調査区の全域にわたって、住居跡・土坑・溝等が、また一部区域では、土器祭祀跡・井戸・道路状遺構等が検出された。

住居跡は、ACライン以南の南区域、グリッドV～Z・4～7の中央区域、グリッド2ラインに沿ってQ～Vの北区域という、3区域に分割集中して、総数71基が検出されている。

総数229基の土坑についても、住居跡と同様な3区域分割集中の傾向を示して検出されている。

溝は、46条検出されているが、幅20mを超える1号溝の屈曲に合わせた形状を示し、強い関連性をうかがわせている。

土器祭祀跡は、中央区域と南区域の間に3ヶ所検出されている。

井戸跡は、中央区域の南辺部に4基が検出されている。

道路状遺構は、井戸跡と同様、中央区域の南辺部で検出されている。

住居跡からは、須恵器・土師器の各器種、刀子・曲刃鎌・角釘・鏃などの鉄製品やスラッグ・砥石、臼玉などの石製模造品、土錘・石錘等が出土している。中でも13号住居跡からは、銅製瑞花鴛鴦八稜鏡が出土し、注目される。

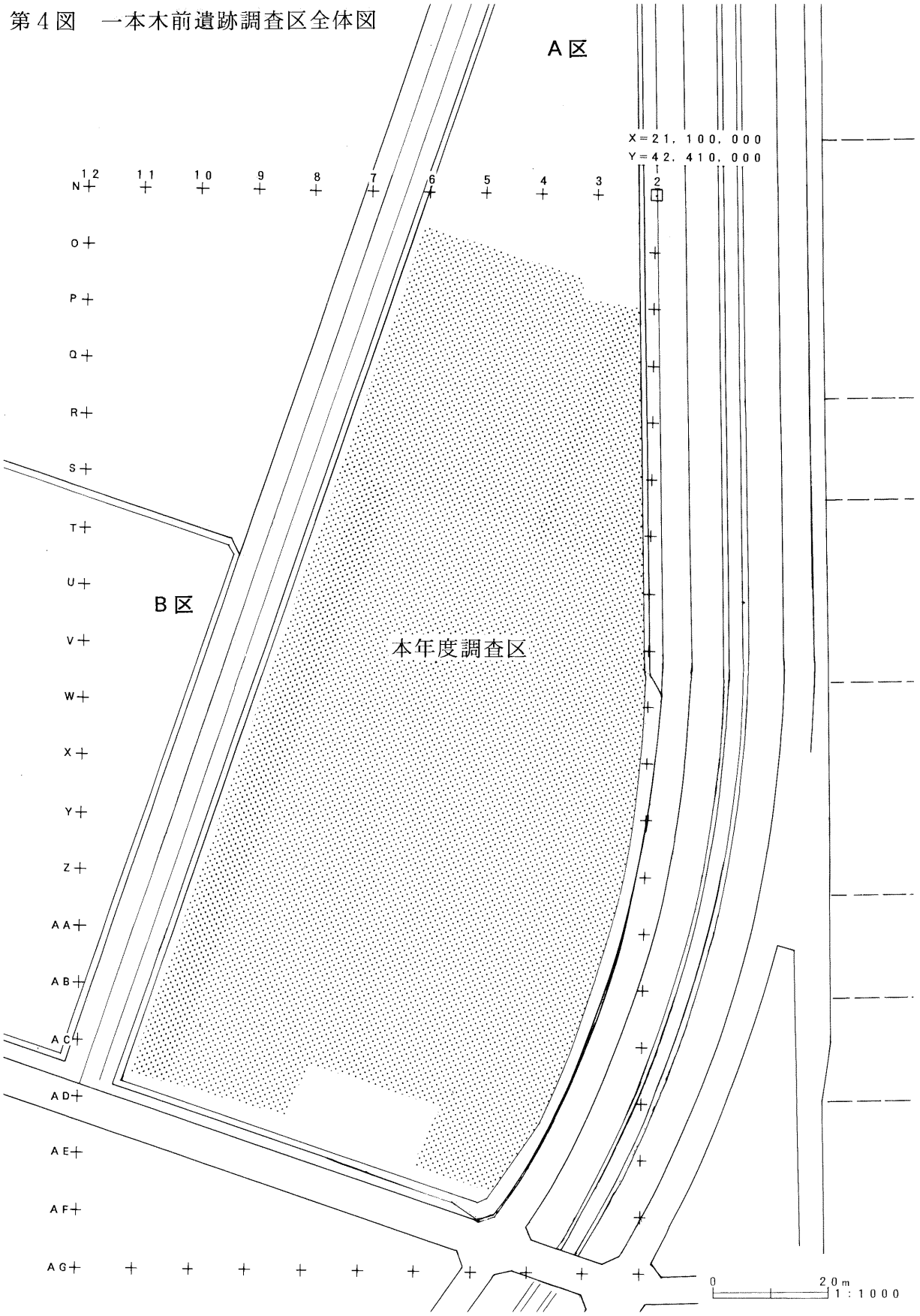
溝や土坑からは、須恵器・土師器・陶器・土錘等が出土している。

土器祭祀跡からは、土師器杯を中心として須恵器杯・堤瓶・甕・土師器甕・壷、臼玉や未製を含む滑石製模造品等が出土している。このうち1号土器祭祀跡では、その中心部から馬頭骨が出土し土器祭祀の性格を知る上で貴重な資料となっている。

なお、本遺跡の基本土層は、標高30.0m付近に現耕作土（厚さ約1m・3層に分離）が堆積し、その下位に浅間A火山灰層を含む暗黄褐色粘土層がみられる。そして、地域によって高低差がある

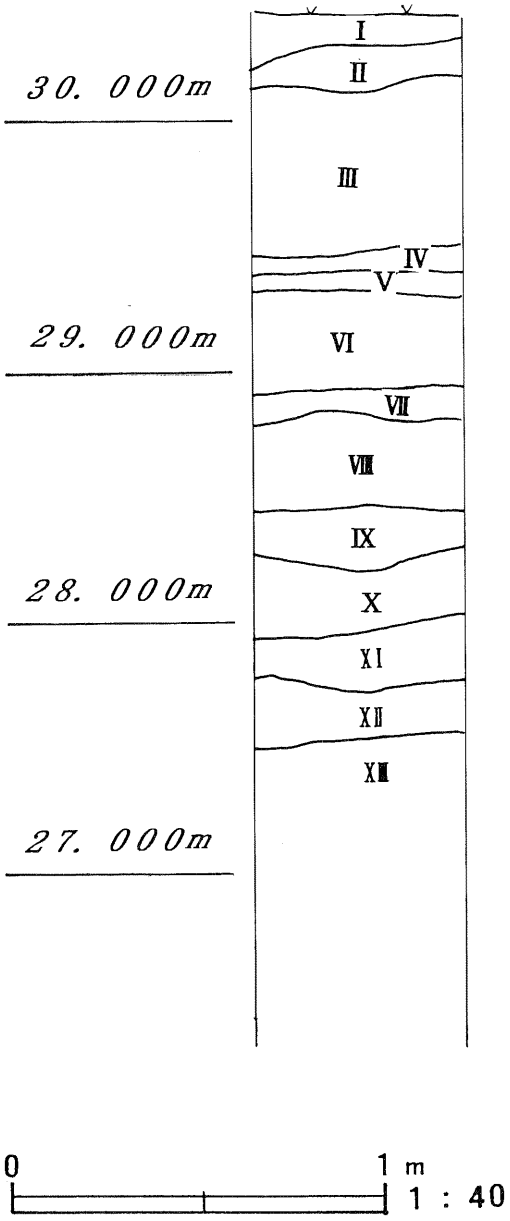
第３図　一本木前遺跡位置図

第４図　一本木前遺跡調査区全体図



ものの、標高29.0mをはさんで遺物を包含するシルト層が3層堆積している。A地区ではそれ以下（第X層以下）の土層には遺物は確認されていない。

第5図
一本木前遺跡基本土層



I　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土。小礫を多く含む。

II　黒褐色（2.5 YR3／2）粘土。小礫を多く含む。

III　黄褐色（2.5 YR5／3）粘土。小礫を多く含む。

IV　暗黄褐色（2.5 YR5／2）粘土。浅間A火山灰、酸化鉄分を多量に含む。

V　オリーブ褐色（2.5 YR4／3）粘土。炭化物粒を多く含む。

VI　にぶい黄褐色（10YR5／4）シルト質粘土。酸化鉄分を多量に含む。

VII　黒褐色（7.5 YR3／1）シルト質粘土。上部では5㎝幅の酸化鉄層が見られ、本層の上面で覆水した可能性がある。遺物包含層。

VIII　黒褐色（10YR3／1）シルト質粘土。炭化物粒、焼土粒を全面に含む。VII層よりシルト化している。遺物包含層。

IX　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質粘土。炭化物粒、焼土粒を全面に含む。遺物包含層。

X　暗灰黄褐色（2.5 YR5／2）シルト質粘土。IX層よりシルト化している。5㎜大の炭化物粒を下位程多く含む。

XI　褐灰色（10YR6／1）粘土。酸化鉄粒を多く含む。

XII　褐灰色（10YR6／1）シルト。酸化鉄粒を多く含む。

XIII　にぶい黄褐色（10YR4／3）砂。XII層との間に1～5㎝幅の炭化物層をはさむ場合が多い。

Ⅳ遺構と遺物

1　住居跡（付図２）

住居跡は、前述したとおり、北・中央・南の3区域に分割集中して検出されている。北地域８基、中央地域20基、南地域41基、単独に２基、計71基を数える。

時期的には、５世紀代から12世紀前後まで断続して構築されたと考えられる。

１号住居跡（第６図）

Q—２グリッドに位置する。東半部分が調査区外に及び、南隅は２号土坑と重復している。新旧関係は、２号土坑によって本住居跡が切断されており、２号土坑より古いとされる。

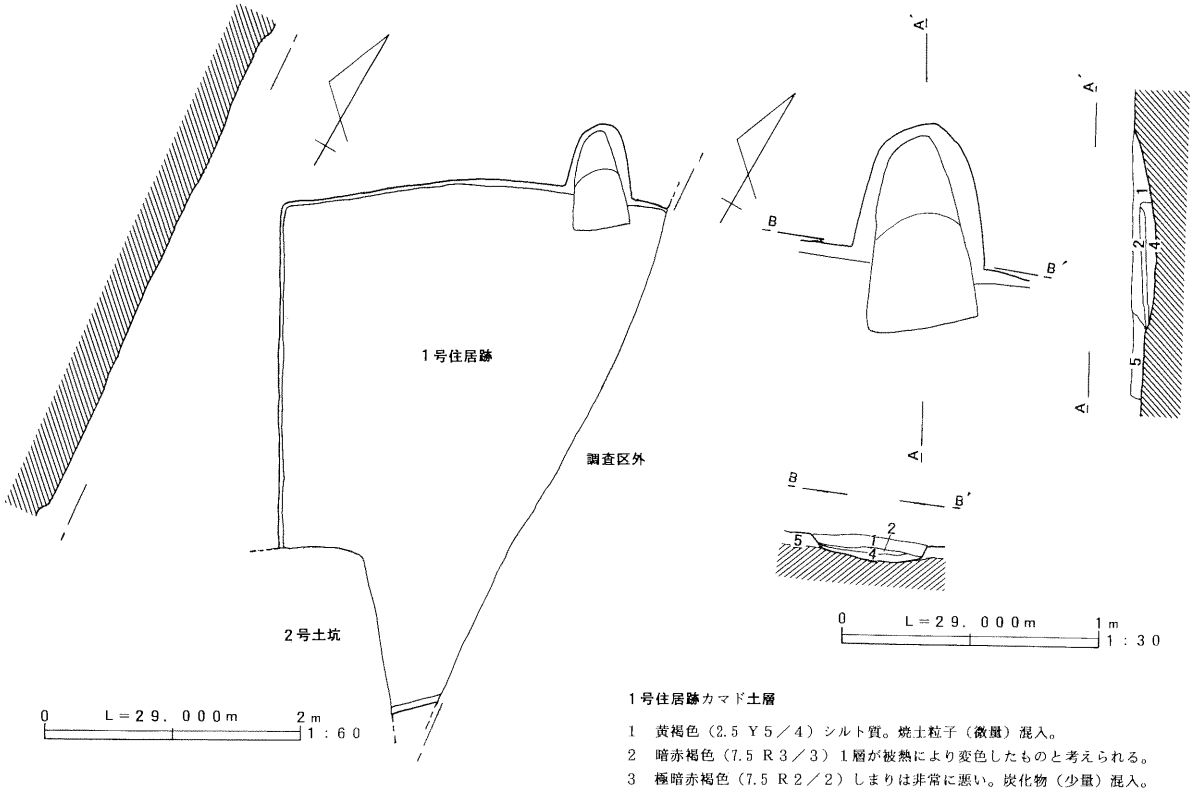
全体の規模は不明であるが、平面は、やや台形状の方形を呈すると考えられる

主軸長は、4.08ｍを測り、主軸方位はN—30°—Wを示す。

カマドは、北西壁を50cm掘り込んで設置されている。火床は、30cm程床面上に張り出して赤黒色に焼け、灰が３～４cmの厚さで堆積している。底面は、緩いスロープを描いて奥壁に至る。煙道部は、確認されていない。

床面は、やや起伏をもつものの概ね平で、付属設備は確認されていない。

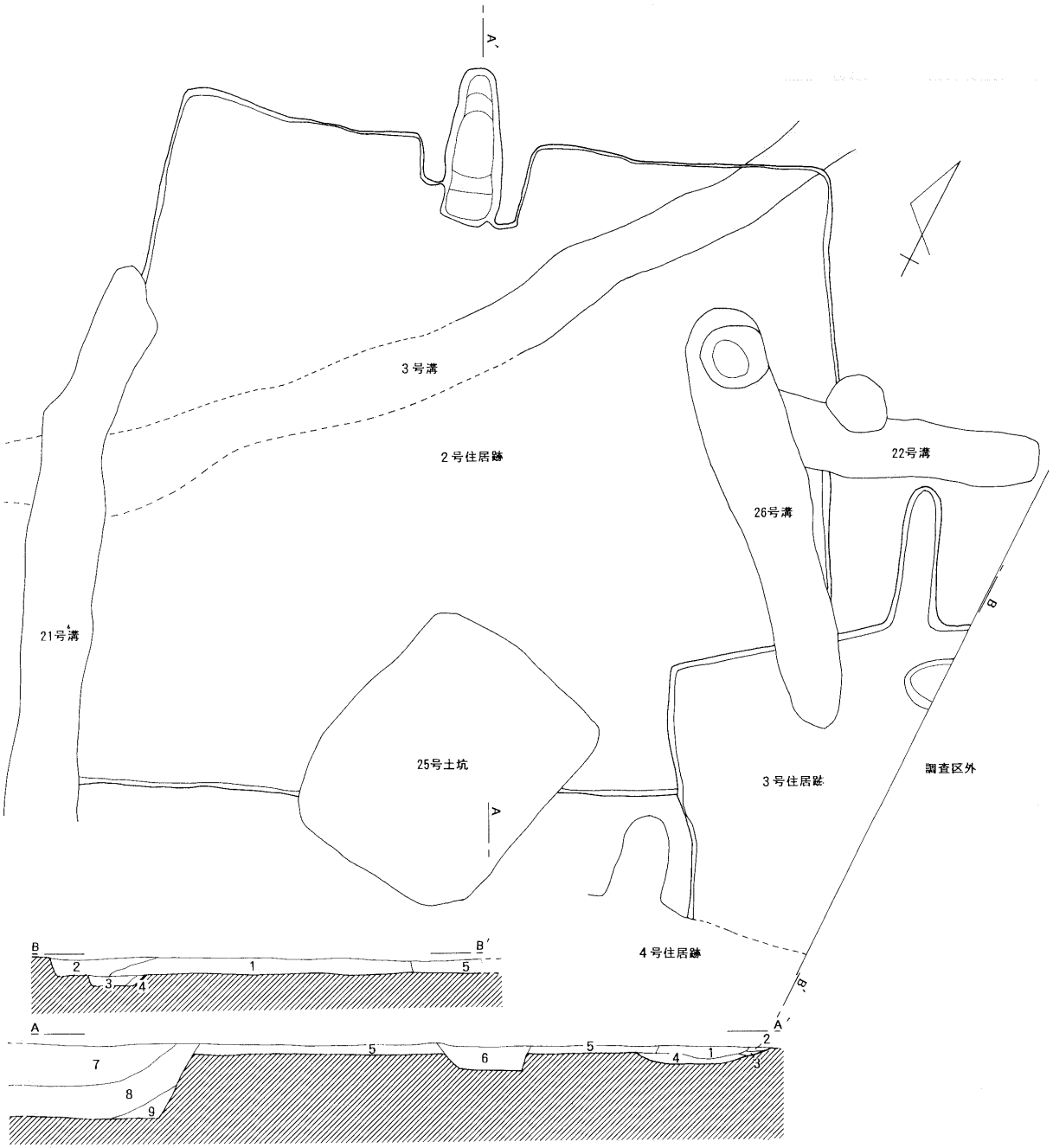
遺物は、土師器杯、石錘、土錘が出土している。



１号住居跡カマド土層

1　黄褐色（2.5 Y５／４）シルト質。焼土粒子（微量）混入。
2　暗赤褐色（7.5 R３／３）１層が被熱により変色したものと考えられる。
3　極暗赤褐色（7.5 R２／２）しまりは非常に悪い。炭化物（少量）混入。
4　赤黒色（１０R1.7／１）灰層。炭化物が充填されている。
5　オリーブ褐色（2.5 Y４／４）ややしまりが悪い。炭化物・焼土粒子（少量）混入。

第６図　１号住居跡及びカマド



2号住居跡土層（A－A´）

1 黄褐色（2.5 Y 5／4）しまり良い。焼土ブロック・炭化物（少量）混入。カマド天井部。
2 黒褐色（7.5 YR 2／2）焼土粒子・炭化物（少量）混入。しまり悪い。
3 黒褐色（7.5 YR 2／2）焼土粒子（多量）混入。しまりは非常に悪い。
4 極暗褐色（7.5 YR 2／3）焼土粒子・炭化物（多量）混入。しまりは良くない。
5 黄褐色（2.5 Y 5／3）シルト質。鉄分を少量含む。
6 緑灰色（10GY 5／1）粘性は非常に強い。混入物皆無。
7 灰オリーブ色（5Y 5／2）粘性は強い。下層の8層の土が多く混入する。
8 暗青灰色（10BG 4／1）粘性は非常に強い。
9 オリーブ褐色（2.5 Y 4／4）混入物皆無。粘性は非常に強い。
10 灰オリーブ色（7.5 Y 5／2）鉄分を含む。粘性あり。

3号住居跡土層（B－B´）

1 オリーブ褐色（2.5 Y 4／4）シルト質。
2 オリーブ褐色（2.5 Y 4／4）ややしまりが悪い。焼土粒子・炭化物（少量）混入。
3 黒褐色（2.5 Y 3／2）しまり悪い。焼土粒子（少量）混入。
4 黒褐色（2.5 Y 3／2）しまり悪い。地山ブロックが混入する。
5 黄褐色（2.5 Y 5／4）シルト質。鉄分を多く含む。

0 L＝29．000m 2m
1：60

第7図　2・3号住居跡

2号住居跡（第7図・8図）

S—2グリッドに位置する。3号、21号、22号、26号溝、25号土坑、3号住居跡と重復している。本住居跡は、これら重復する全ての遺構に切断されており、この中では最も古いとされる。

東西（北辺）、南北（西辺）共に6.16mを測り、平面正方形を呈する。主軸方位は、N—15°—Wを示す。

カマドは、北壁中央やや西寄りに設置されており、床面上に長さ70cmの両袖をもつ形態を示す。燃焼部は、全て床面上に張り出し、火床は、10cm程窪み、緩いスロープを描いて奥壁に至り、さらにスロープが緩くなって煙出しへと連続している。

床面は、やや起伏をもつものの概ね平で、付属設備は確認されていない。

遺物は、全面回転ヘラケズリの須恵器杯、土師器椀、土錘が出土している。

3号住居跡（第7図・8図）

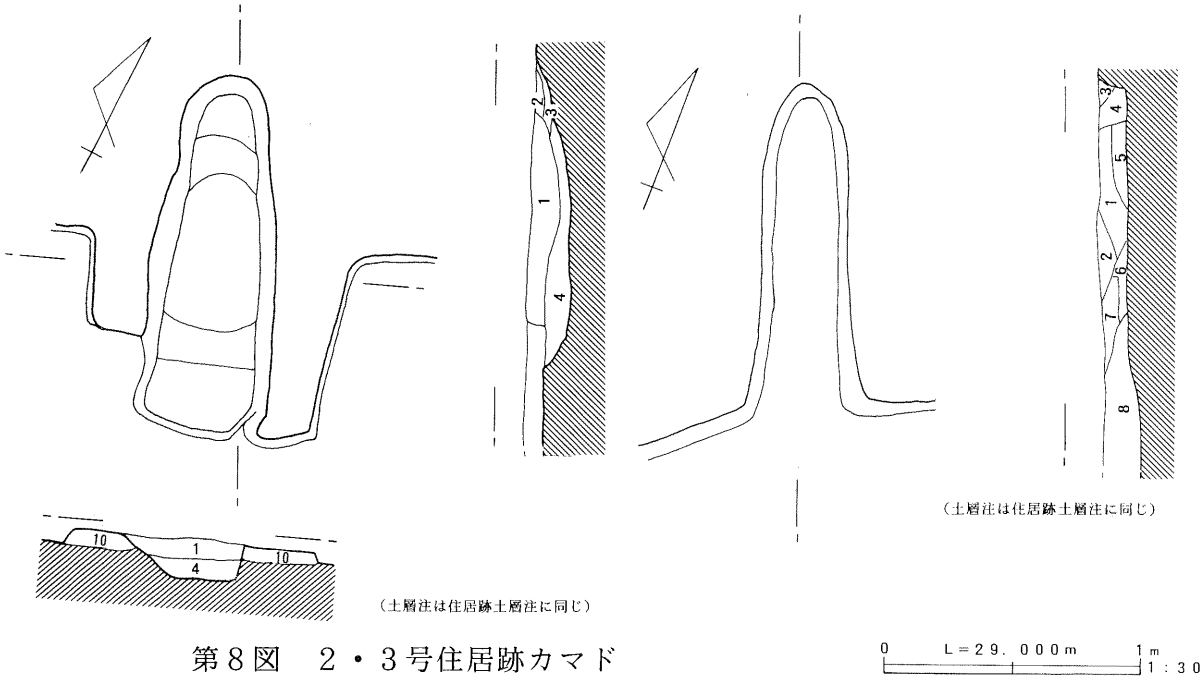
S—2グリッドに位置する。東半部分は調査区外に及び、西隅は2号住居跡、南半部分は4号住居跡と重復している。また、北西部では26号溝とも重復している。

本住居跡覆土のオリーブ褐色シルト層は、2号住居跡のわずかに鉄分を含む黄褐色シルト層を切断し、4号住居跡の鉄分を含む黄褐色シルト層には切断されているところから、2号住居跡より新しく、4号住居跡より古いとされる。また3号溝にも切断されており、同溝より古いとされる。

カマドは北壁に設置されている、焼成面は残存しておらず、詳細な平面形態は不明である。断面は、カマド前の床面より一段高く、煙道部のみが残存していたと考えられる。奥壁は、ほぼ直立している。

床面は、概ね平である。カマド前に位置するピットは、焼土粒子を含む黒褐色粘土層を覆土とし、住居跡覆土のオリーブ褐色シルトを含まないところから、本住居跡より古いピットであるとされる。

本住居跡の形態・規模共に不明である。主軸方



第8図　2・3号住居跡カマド

位はN—25°—Wを示す。

遺物は、土師器杯が覆土中より出土している。

第２表　１号住居跡出土遺物観察表　（第１１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１１．８） 器高　３．９ 底径	④ ① ③	②	にぶい橙 （7.5YR6/4）	１／２	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 体部内外面煤付着。
2	土錘	最大径　１．４ 長さ　８．０ 孔径　０．６				一部欠	
3	石錘	最大径　６．０ 長さ　１０．３ 括れ径　５．０				完形	

第３表　２号住居跡出土遺物観察表　（第１１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径 器高 底径　６．５	① ②	②	にぶい黄橙 （10YR 7/2）	底部のみ	回転ヘラケズリ
2	土師器杯	口径（１２．０） 器高　５．６ 底径	③ ① ④	②	橙 （5YR　6/6）	１／２	内面全面ナデ。 外面口縁部横のナデ。体部外面ケズリの後ナデ、黒斑。
3	土錘	最大径　２．９ 長さ　５．０ 孔径　０．８				完形	

第４表　３号住居跡出土遺物観察表　（第１１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１０．３） 器高 底径	③⑥ ② ①	②	橙 （5YR　7/6）	上半 １／２	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。

４号住居跡（第９図）

S—２グリッドに位置する。東辺部は調査区外に及び、北東隅は３号住居跡、北西隅は25号土坑、南半は５号住居跡と重復している。

３号住居跡との新旧関係は、前述したとおり、本住居跡が新しい。また５号住居跡との新旧関係は、本住居址覆土の明黄褐色シルト層及びにぶい黄色シルト層が切断されているところから、本跡が古いとされる。同様に25号土坑にも切断されており、25号土坑が新しいとされる。

本住居址は、このように切断されており、形態・規模共に不明である。主軸方位はN—20°—Wを示す。

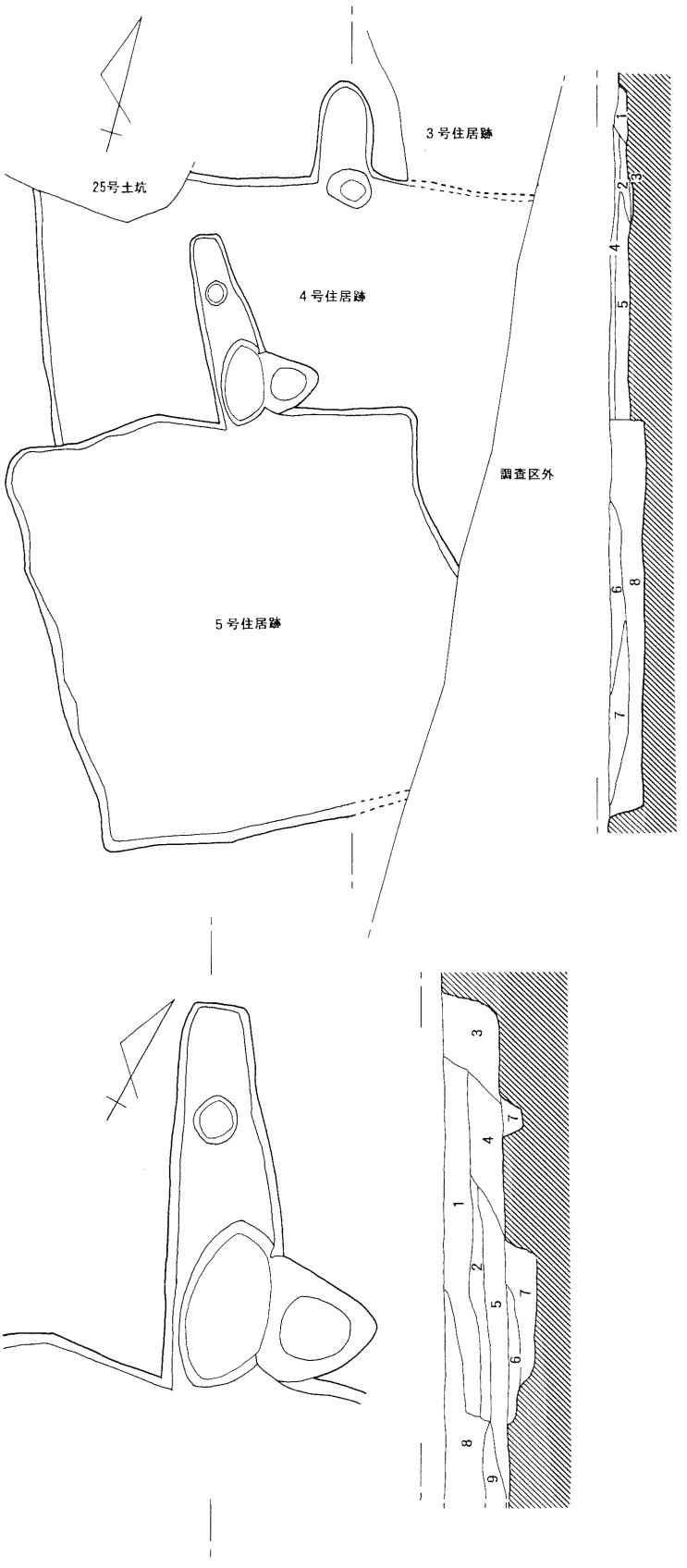
カマドは北壁に設置されている。燃焼部は、住跡北壁ライン上に位置し、ほぼ水平面をもって奥壁に達する。奥壁はわずかに傾斜する。

床面は、起伏をもって安定しない。

遺物は少なく、わずかに土師器甕片が出土したのみである。

第５表　４号住居跡出土遺物観察表　（第１１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器甕	口径（２４．７） 器高 底径	③④ ①⑥ ②	②	橙 （5YR　6/6）	口縁部のみ	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面縦のケズリ。



4・5号住居跡土層

1 灰黄褐色（10YR5／2）粘土質。炭化物・焼土粒（微量）混入。
2 黄褐色（2.5Y5／4）シルト質。炭化物（微量）混入。下部は被熱によるものか、暗赤褐色（10R3／3）に変色している。
3 暗赤灰色（10R3／1）しまりは非常に悪い。炭化物・焼土粒子・ブロック（多量）混入。燃焼部堀形。
4 にぶい黄色（2.5Y6／4）シルト質。
5 明黄褐色（2.5Y6／6）シルト質。
6 黄褐色（2.5Y5／4）シルト質。鉄分を微量含む。
7 オリーブ褐色（2.5Y4／4）シルト質。鉄分を少量含む。
8 オリーブ褐色（2.5Y4／4）ややしまりが悪い。

5号住居跡カマド土層

1 黄褐色（2.5Y5／6）シルト質。若干の鉄分を含む。
2 暗赤褐色（2.5YR3／6）基本的に、1層と同質であるが被熱により赤色化。
3 極暗赤褐色（7.5R2／2）炭化物・焼土粒子を多量に含む。しまりは悪い。
4 暗褐色（10YR3／3）炭化物・焼土粒子を多量に含む。非常にしまりが悪い。
5 黒褐色（10YR3／2）炭化物・焼土粒子を多量に含む。非常にしまりが悪い。
6 赤黒色（2.5YR2／1）炭化物を多量に、焼土粒子を少量含む。しまりは悪い。
7 赤黒色（2.5YR2／1）炭化物・焼土粒子・ブロックを多量に含む。しまりは悪い。下面の地山は被熱により赤色化。
8 黄褐色（2.5Y5／4）シルト質。鉄分を多く含む。
9 オリーブ褐色（2.5Y4／4）ややしまりが悪い。

第9図　4・5号住居跡及び5号住カマド

5号住居跡（第9図）

S—2からT—2グリッドにかけて位置する。東隅は調査区外に及び、北辺で4号住居跡と重復している。

4号住居跡との新旧関係は、前述したとおり、本住居跡が新しい。

東西3.50m（北辺）、南北3.54m（西辺）を測り、平面ほぼ正方形を呈している。主軸方位はN—30°—Wを示す。

床面は、多少起伏はあるものの、安定しており、付属設備等は検出されていない。

カマドは北辺中央やや東寄りに設置されている。燃焼部は、完全に壁外に張り出す位置にあり、東（右）一方に膨らみをもつ。火床は12cm程窪められ、奥壁に向けて水平面をもって移行している。奥壁直下に径18cm、深さ9cmのピットがあり、そこから傾斜をもって上るとみられた。しかし、奥壁と考えられた個所は、炭化物・焼土粒子を多量に含む暗赤褐色（吸熱・吸炭によってできた土）で、崩落した煙道部と考えられるに至ったものである。

遺物は、土師器杯・壷・甕・土錘の他、覆土中からS字口縁台付甕の破片、及びスラッグが出土している。

第6表　5号住居跡出土遺物観察表　（第11図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（11.0） 器高 3.9 底径	②④ ③ ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。
2	土師器壷	口径 （9.0） 器高 底径	①② ④ ③	②	明褐色 (5YR 5/8)	1／4	全面ナデ。内面に輪積痕。
3	土師器壷	口径 器高 底径 5.0	②① ③⑥ ④	②	明褐灰色 (7.5YR7/4)	底部のみ	内面全面ナデ。 外面ケズリ、黒斑。
4	土師器甕	口径（20.8） 器高 底径	① ④ ②	②	橙 (7.5YR7/6)	口縁部のみ	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横のケズリ。
5	土師器甕	口径（18.6） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR5/6)	口縁部のみ	S字状口縁。
6	土錘	最大径 1.4 長さ 4.4 孔径 0.6				完形	

6号住居跡（第10図）

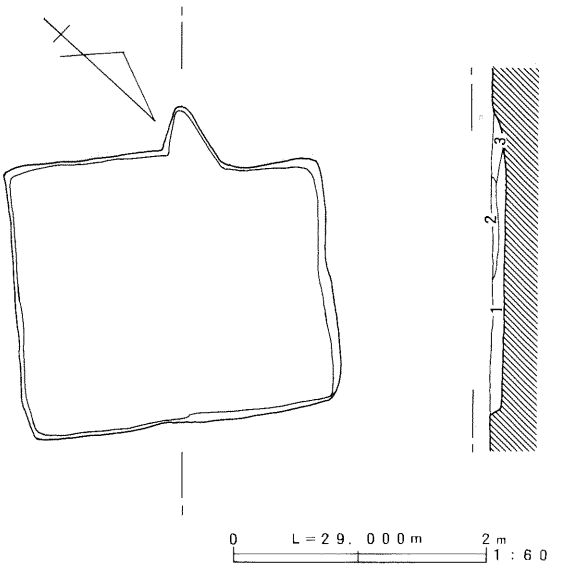
S—4グリッドに位置する。1号溝の東斜面に在り、上面を1号溝によって削平されている。このことから、本住居跡は1号溝より古いとされる。

北東辺2.54m、南東辺2.18m、南西辺2.50m、北西1.94mを測り、平面段違いの長方形を呈する。主軸方位はN—130°—Wを示す。

床面はほぼ水平で安定しているが、付属設備等は検出されていない。

カマドは南西辺中央やや北西寄りに設置されている。平面形は概ね三角形を呈し、北西壁が南東壁より長く、そのまま住居の壁へ移行しているため、カマド右側の住居壁が張り出す形となったものである。床面は奥壁に向けて緩やかにカーブを描いていく。

遺物は、土師器杯・甕等が出土している。



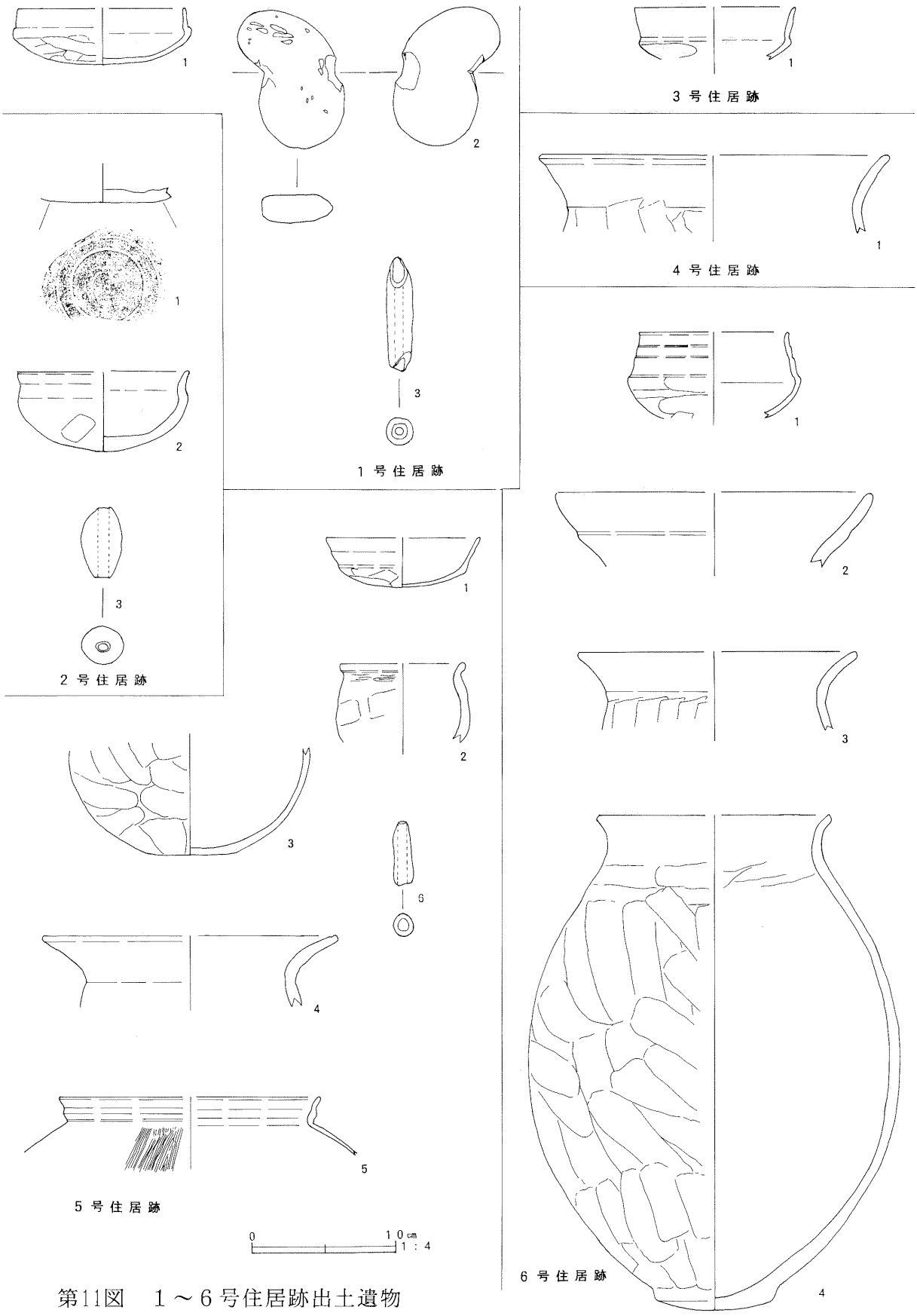
6号住居跡土層

1 黄灰色（2.5 Y 4／1）砂粒（少量）混入。
2 暗黄灰色（2.5 Y 4／2）砂粒・焼土粒子（少量）混入。
3 暗黄灰色（2.5 Y 4／2）焼土粒子・ブロック（多量）混入。しまりは非常に悪い。

第10図　6号住居跡

第7表　6号住居跡出土遺物観察表（第11図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（10.4） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上位	口縁部横ナデ（3段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器壺	口径（22.0） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	口縁部のみ	内外面ナデ。
3	土師器甕	口径（19.6） 器高 底径	②④ ③⑥ ①	②	橙 (5YR 7/6)	上位	口縁部内外面ナデ。 胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。
4	土師器甕	口径（16.0） 器高（34.5） 底径（8.0）	①④ ②⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	2／3	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面上位横のケズリ、中位～下位斜のケズリ。丸底。



第11図　1～6号住居跡出土遺物

7号住居跡（第12図）

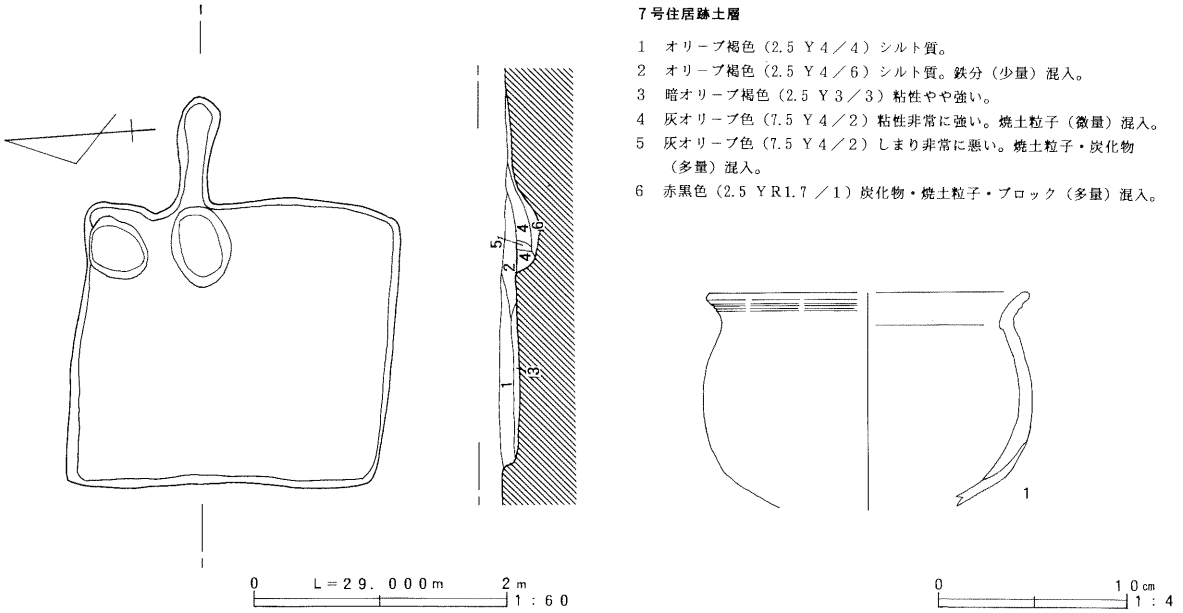
S—6グリッドに位置し、他遺構との重復はない。

東西（北辺）2.24m、南北（西辺）2.46mを測り、平面ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN—96°—Eを示す。

床面は中央部が最も窪み、四壁に向けて緩やかにカーブを描いて盛り上る。カマド左脇、北東隅には、径55cm程、深さ15cm程のピットがみられる。覆土には、住居跡最下面覆土と同一の暗オリーブ褐色シルト層が堆積しており、本住居跡に伴う施設と成し得る。

カマドは、東壁の北東隅近くに設置されている。燃焼部は床面上に張り出し、20cm程掘り窪められている。奥壁に向けては緩やかな傾斜をもつ。

遺物は少なく、わずかに土師器甕を出土したのみである。



第12図　7号住居跡及び出土遺物

第 8 表　7 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表　（第 1 2 図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土 色 帖）	残存率	調 整 ・ 手 法 の 特 徴 等
1	土師器甕	口径（19.2） 器高 底径	① ③ ④	②	赤 （10R　5/8）	胴　部 1／3	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、下位ナデ付け。 外面縦のケズリの後ナデ、内外面吸炭。

8号住居跡（第13図）

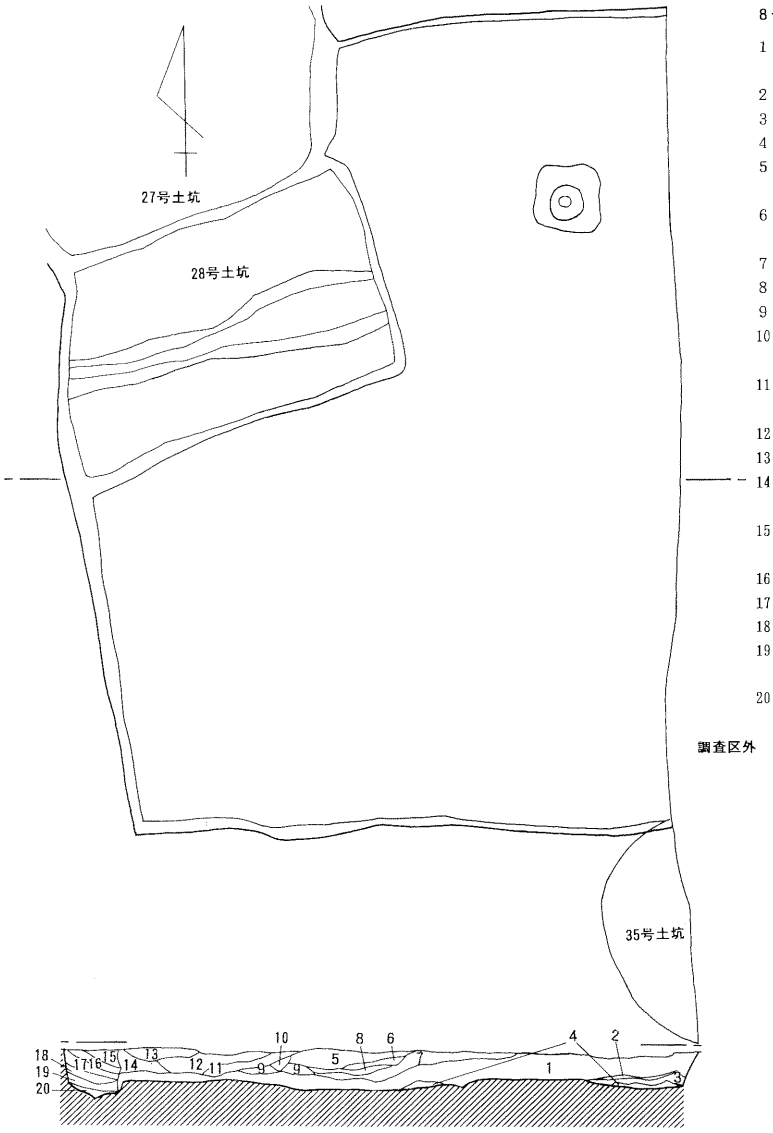
T—2グリッドに位置する。東半部は調査区外に及び、北西隅は27号・28号土坑と、東南部では35号土坑と重復している。27号・28号土坑には切断されているものの、35号土坑を切断している。よって、新・27号、28号土坑→本住居址→35号土坑・古という新旧関係となろう。

規模は、南北6.46mを測るものの、他は計測不能であり、形態も不明である。

床面は、中央部及び周辺部が一段高くなり、その間の部分が低い状態であったが、全体として安定した面を成している。中央北壁寄りに、径50cm、深さ15cm程のピットがあり、灰・炭化材・焼土粒の混在層が堆積していた。

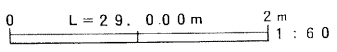
覆土は、明黄褐色粘土・炭化材・焼土・灰が混在し、投入土の観を呈している。また、ピットと北壁の間では、特に灰と焼土の分布が密であったが、形を成さず、壁の掘り込みも検出できなかった。カマドの存在は不明である。

遺物は、須恵器蓋、土師器杯・鉢・甕、土錘、砥石、鉄釘（角）等、多量に出土している。

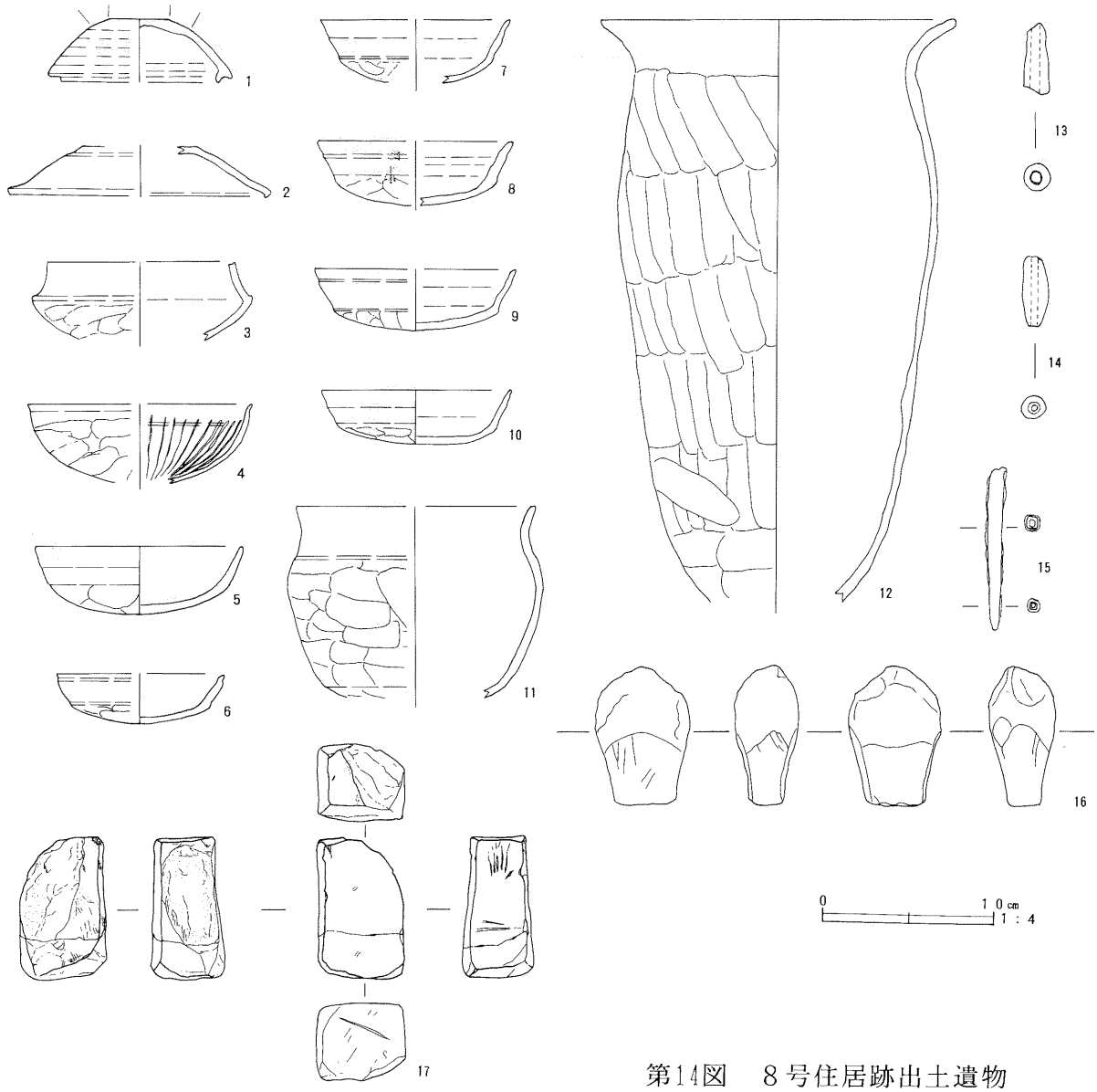


8号住居跡土層

1 明黄褐色（2.5 Y 6／6）粘土質。灰黄褐色（2.5,Y 5／1）炭化材・焼土・灰が混在する。
2 炭化材を主体として、焼土粒・炭が混在する。
3 1層と同様であるが灰の混在率が高い。
4 1層の基本粘土混在層。3層との間に純炭化材が分布。
5 明黄褐色（2.5 Y 6／6）炭化材粒・焼土粒・灰（主体）粘土粒混在層。
6 明黄褐色（主体ブロック）・炭化材粒・焼土粒・灰（主体）ブロック）粘土混在層。
7 5層とほぼ同一。
8 炭化材粒・焼土粒（主体）・灰混在層。
9 炭化材粒・焼土粒・灰（主体）明黄褐色粘土混在層。
10 焼土粒・灰（主体）・明黄褐色粘土（主体・ブロック）混在層。
11 5層とほぼ同一であるが焼土粒5㎜大のものが多い。（炭化物もやや多く全体で黒ずむ）
12 5層とほぼ同一。
13 灰（主体）・明黄褐色粘土（主体）混在層。
14 13層とほぼ同一であるが、わずかに焼土粒・炭化材粒を含む。
15 明黄褐色（2.5 Y 6／6）粘土ブロックを主体にして焼土粒・炭化物粒・灰を混在する。
16 5層とほぼ同一。
17 15層とほぼ同一。
18 5層とほぼ同一。
19 15・17・20層とほぼ同一であるが、最下面に11層とほぼ同一層を混在する。
20 15層とほぼ同一。



第13図　8号住居跡



第14図　8号住居跡出土遺物

第 9 表　8 号住居跡出土遺物観察表　(第１４図)

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 (土 色 帖)	残存率	調 整 ・ 手 法 の 特 徴 等
1	須恵器 蓋	口径（１０．８） 器高　３．６ 天井径（３．６）	① ② ③	①	灰 (N　4/)	１／６	ロクロ整形。天井部回転ケズリ。
2	須恵器 蓋	口径（１５．４） 器高　２．８ 天井径（６．６）	② ①	②	灰白 (5Y　8/1)	１／５	ロクロ整形。天井部糸切り。
3	土師器 杯	口径（１１．０） 器高 底径	② ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	上　位	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。表面黒赤褐。
4	土師器 杯	口径（１３．３） 器高 底径	④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	１／２	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ後、放射状暗文。 外面ケズリ。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
5	土師器杯	口径 12.1 器高 3.9 底径	②④ ① ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ。外面ケズリ、黒斑。
6	土師器杯	口径（9.8） 器高 底径	① ③ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／5	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。
7	土師器杯	口径（11.2） 器高 底径	④③ ② ①	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。
8	土師器杯	口径（11.4） 器高（3.7） 底径	②③ ① ④	②	褐灰 (7.5YR4/1)	口縁部 1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。
9	土師器杯	底径（11.6） 口径 器高	① ④	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面煤、内面炭化物付着。
10	土師器杯	口径 11.1 器高 3.0 底径	② ① ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。
11	土師器鉢	口径（14.2） 器高 11.0 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1／3	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、外面横のケズリ、一部縦のケズリ。底部ケズリ。ケズリの丸底。
12	土師器甕	口径 20.6 器高 33.5 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/8)	3／4	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。 煤付着。
13	土錘	最大径 1.4 長さ 4.1 孔径 0.4				完形	
14	土錘	最大径 1.6 残存長 4.2 孔径 0.6				1／2	
15	角釘	長さ 9.4 器高 底径				完形	鉄製。
16	砥石	長さ 8.1 幅 厚さ				一部欠	4面使用。
17	砥石	長さ 8.0 幅 5.0 厚さ 4.5				一部欠	6面使用。

9号住居跡（第15図）

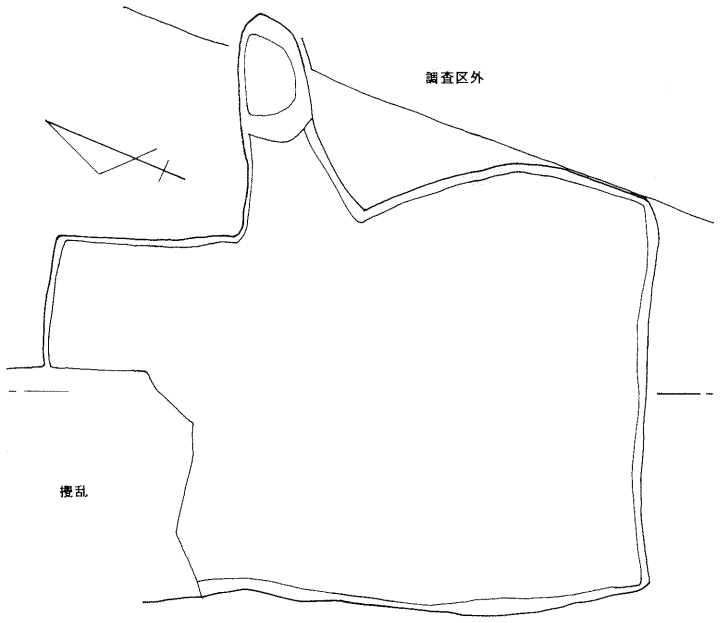
U—2グリッドに位置する。カマド煙道部の一部が調査区外に及ぶ。また、北西隅は現代の掘削によって一部破壊を受けている。

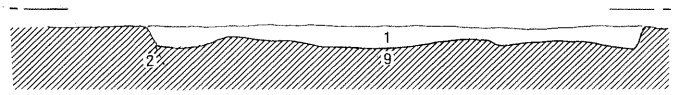
北西側2.90m、南西側4.76m、南東辺3.16m、北東辺4.80mを測り、略長方形を呈する。主軸方位はN—65°—Eを示す。

床面は安定せず、起伏がはげしい。他の付属設備は検出されていない。

カマドは、北東壁北寄りに設置されている。燃焼部は全て壁外に位置し、奥に向けてにぶい黄褐色粘土を貼って一段高い面を作り出している。奥壁は緩やかな傾斜をもつ。

遺物は、須恵器杯・椀、土師器杯・甕等が出土している。なお、周辺部へラケズリの須恵器椀底部には「土」字の墨書が認められる。また、スラッグ、羽口残片も出土している。

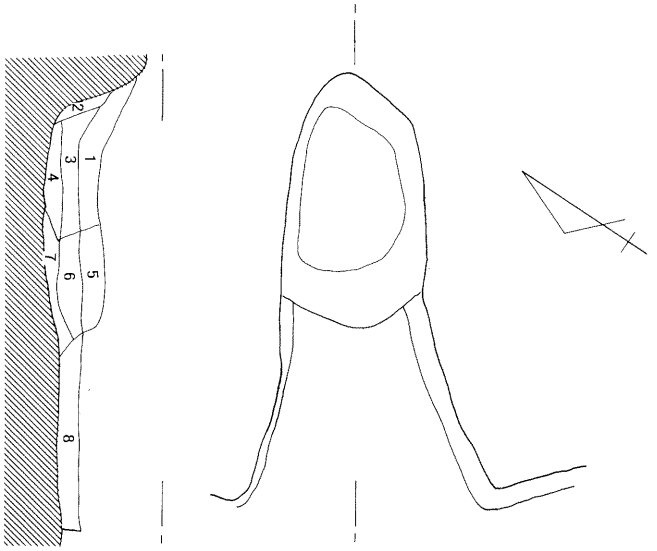




0　L＝29.000m　2m
1：60

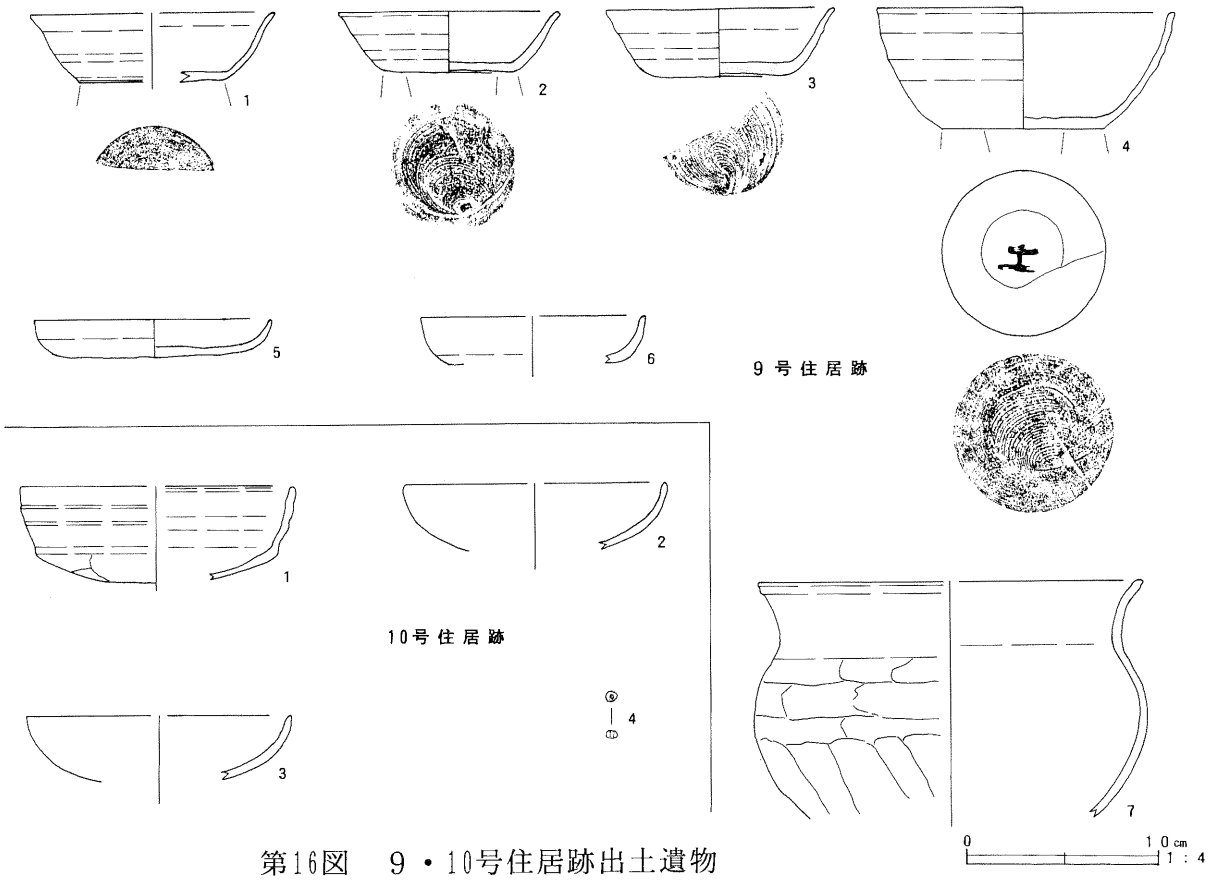
9号住居跡土層

1　褐灰色（10YR4／1）明赤褐色ブロック（5Y.R5／8）多量に含む。炭化物、やや多く含む。土師器片含む。
2　黄褐色（10YR5／6）
3　黄褐色（10YR5／6）・黒褐色ブロック（5YR3／1）やや多く含む。やや粘性あり。
4　にぶい黄褐色（10YR4／3）・黒褐色ブロック（5YR3／1）・黄灰色ブロック（2.5Y4／1）を含む。粘性あり。
5　明黄褐色（10YR6／6）・黄灰色（2.5Y6／1）粒、多量に含む。
6　黄褐色（10YR5／6）・黄灰色（2.5Y6／1）粒、多量に含む。炭化物やや多く含む。
7　にぶい黄褐色（10YR5／3）・褐灰色ブロック（10YR4／1）赤褐色粒（2.5Y4／8）含む.
8　オリーブ褐色（2.5Y4／6）・灰色粒（5Y5／1）多量、炭化物・橙色粒（5YR6／8）少量含む。
9　黄灰色（2.5YR4／1）・黄褐色ブロック（5YR5／6）多量に含む。炭化粒、やや多く含む。ややシルト質。粘性なし。



0　L＝29.000m　1m
1：30

第15図　9号住居跡及びカマド



第16図　9・10号住居跡出土遺物

第10表　9号住居跡出土遺物観察表　(第16図)

No.	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調(土色帖)	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径(12.6) 器高 3.5 底径(7.5)	⑤ ② ①	①	灰白 (N 8/10)	1／4	底面回転ヘラケズリ。
2	須恵器杯	口径 11.8 器高 3.1 底径 7.0	② ①	②	灰白 (7.5Y 7/)	一部欠	底面糸切り後、周囲回転ヘラケズリ。
3	須恵器杯	口径 12.0 器高 3.3 底径 7.0	② ①	②	灰白 (N 7/)	一部欠	底面糸切りのまま。
4	須恵器椀	口径 15.7 器高 6.2 底径 8.5	②⑤ ① ④	②	青灰 (5PB 6/1)	体部 4／5 欠	底面糸切り後、周囲回転ヘラケズリ。 底面に墨書「土」有り。
5	土師器杯	底径 12.4 口径 2.0 器高 10.0	②⑥ ① ③	②	にぶい橙 (5YR 6/4)	1／2	口縁部横ナデ。 内面剥離。体部外面ケズリ。
6	土師器杯	口径(12.1) 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	口縁部 1／3	表面剥離。
7	土師器甕	口径(14.6) 器高 底径	③④ ① ②	①	橙 (5YR 6/6)	口縁部 1／3	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面肩横のケズリ、中位斜のケズリ。

10号住居跡（第17図）

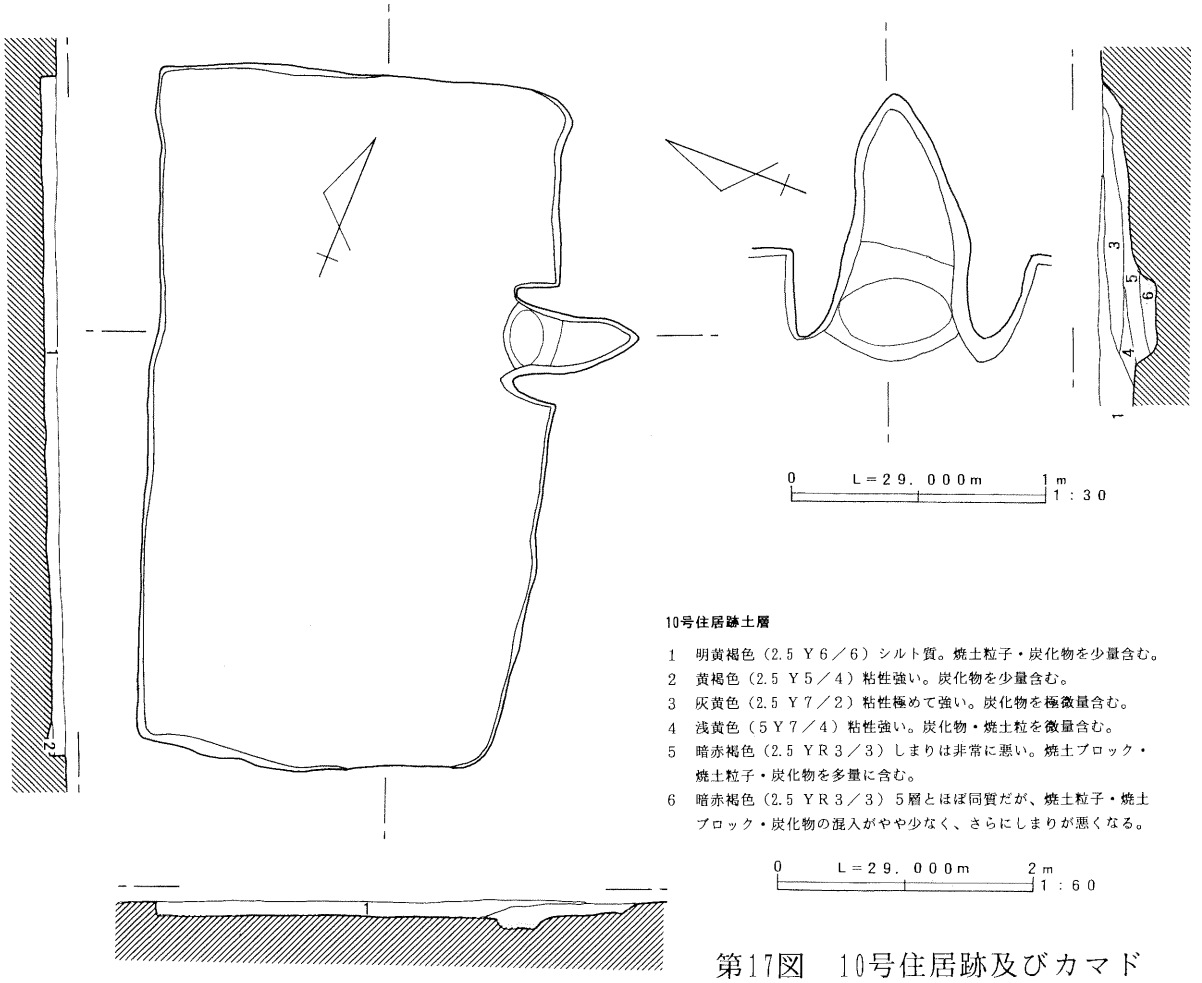
Ⅴ—2グリッドに位置する。本住居跡確認面の上層に16号溝が存在する。

長辺5.38m、短辺は北辺が3.16m、南辺が2.82mを測る。東南隅が丸味をもって変形しているものの、概ね平面長方形を呈している。主軸方位はN—70°—Eを示す。

床面は平坦で安定している。南辺直下で一部窪みがみられたが、溝等の形を成してはいない。

カマドは、東壁北寄りに設置されている。切り残しの両袖をもち、燃焼部は壁内に位置する。奥壁部に向けて緩やかに傾斜し、奥壁に至ってこの傾斜を強めている。

遺物は、土師器杯、滑石製臼玉、鉄（釘と思われるが本体の残存状態が悪く、取り上げできなかった）等が出土している。



10号住居跡土層

1 明黄褐色（2.5 Y 6／6）シルト質。焼土粒子・炭化物を少量含む。
2 黄褐色（2.5 Y 5／4）粘性強い。炭化物を少量含む。
3 灰黄色（2.5 Y 7／2）粘性極めて強い。炭化物を極微量含む。
4 浅黄色（5 Y 7／4）粘性強い。炭化物・焼土粒を微量含む。
5 暗赤褐色（2.5 YR 3／3）しまりは非常に悪い。焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を多量に含む。
6 暗赤褐色（2.5 YR 3／3）5層とほぼ同質だが、焼土粒子・焼土ブロック・炭化物の混入がやや少なく、さらにしまりが悪くなる。

第17図　10号住居跡及びカマド

第１１表　１０号住居跡出土遺物観察表　（第１６図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１４．６） 器高 底径	③④ ① ②	①	橙 （5YR6/6）	口縁部 １／３	口縁部横ナデ（３段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。
2	土師器杯	口径（１３．９） 器高　３．１ 底径　７．０	②④ ③礫 ①	②	橙 （5YR6/6）	１／４	内外面剥離。 体部外面ケズリか。
3	土師器杯	口径（１４．３） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR6/8）	口縁部 １／６	口唇部横ナデ。口縁部内外面ナデ。 体部外面ケズリ。
4	臼　玉	最大径　０．５ 厚さ　０．４ 孔径　０．１５				完　形	滑石製。

11号住居跡（第18図・20図）

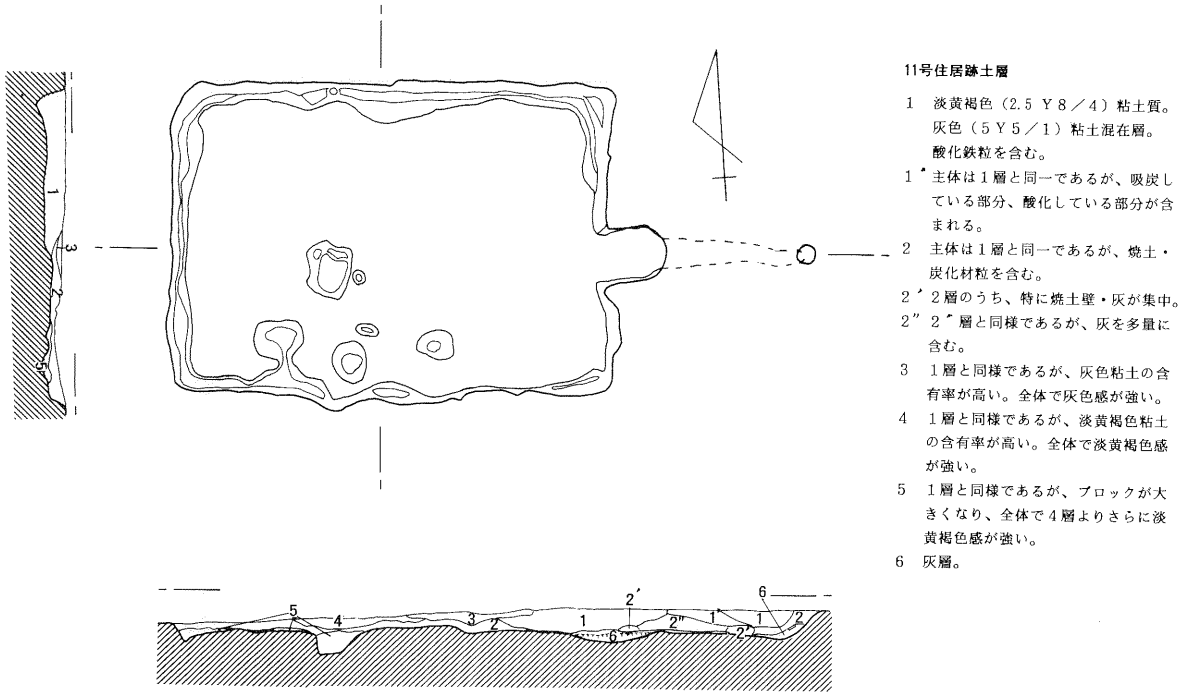
Ｖ—３からＶ—４グリッドにわたって位置する。

長辺（南辺）3.46m、短辺（西辺）2.44mを測り、平面長方形を呈する。主軸方位はＮ—84°—Ｅを示す。

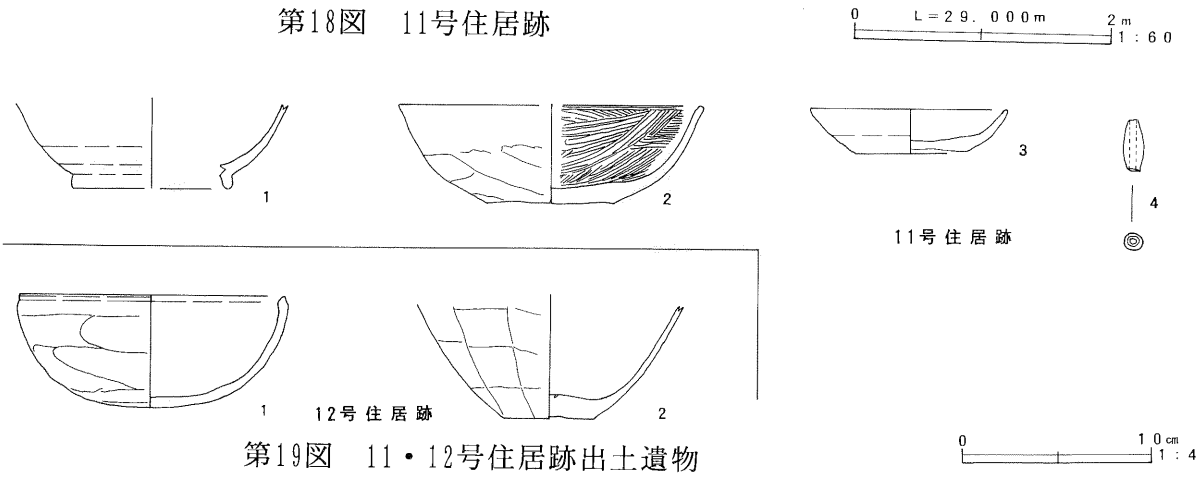
床面は凹凸をもち、特にカマド前が一段低くなっている。中央から西・南寄りには４つのピットと２つの小ピットが穿たれている。一番中央寄りのピットは、平面略方形を呈し、深さ20cmを測る。酸化鉄を含む淡黄褐色粘土と灰色粘土の混在層で住居跡全体の覆土より灰色粘土ブロックが大きくなったものである。本層の上層は、多量の焼土・炭化材粒と共に、多量のスラッグ、羽口残片、鉄粒が集中して検出されている（第20図中濃いアミ部分）。また、東南部分を除いて周溝がみられる。

カマドは、東壁中央やや南寄りに設置されている。残存状態が非常に良く、当該期の指標となるものである。燃焼部は全て壁外に張り出し、方形を呈する。両壁はほぼ垂直で、２cm以上の厚さの焼土面を成している。幅44cm.奥行42cmを測る。火床は固く吸炭し、濃い小豆色を呈している。煙道部の床面はほぼ水平であるが、天井部が奥に向けて徐々に低くなるため、煙道自体が細くなっていく。なお煙道の壁はそれほど変化せず移行するが、最奥部（Ｅ—Ｅ′）に至って少し蛇行し、急に狭くなる。煙出しは約52°の傾斜で作り出されており、壁全体が吸炭して小豆色を呈している。カマド全体の長さは、1.74mを測る。

遺物は、灰釉杯（No.１）が西南部、中央寄りのピットからは土錘（No.４）、ピット脇からは土師質杯（内面に二次加熱を受け、煤が付着している—No.３）、カマド内を中心に、内黒処理された土師器椀（No.２）が出土している。また、幅３mm程の細い棒状鉄製品が２点出土したが、いずれも残存状況が悪くサビのみで、取り上げは不可能であった。



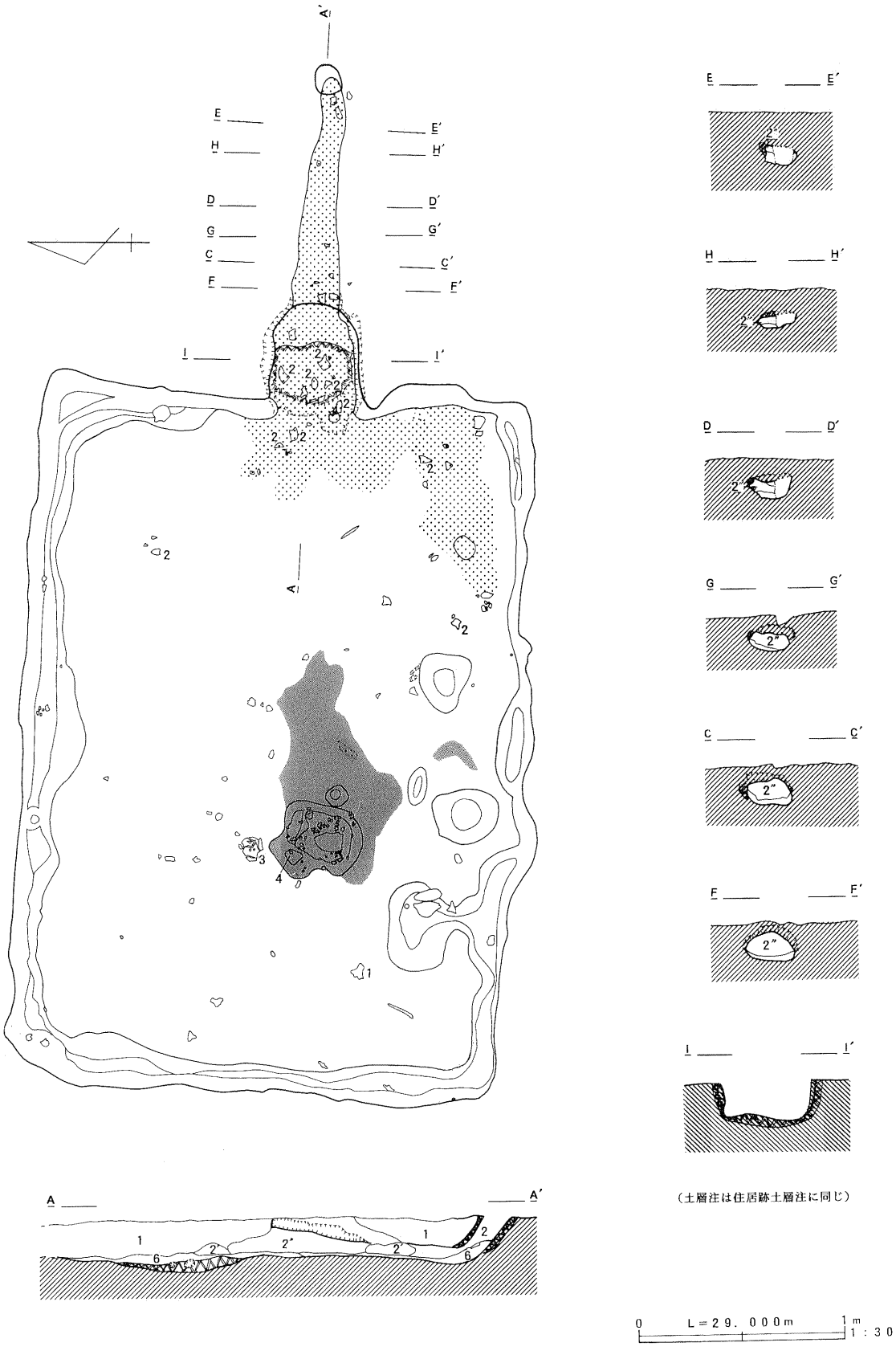
第18図　11号住居跡



第19図　11・12号住居跡出土遺物

第12表　11号住居跡出土遺物観察表　（第19図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	灰釉壺	口径 器高 底径　（8.4）	①	①	灰白 （N 7／0）	底部 1／4	ロクロ整形。
2	土師器 椀	口径（13.9） 器高　3.1 底径　7.0	① ③ ②	①	明黄褐 （10YR 7/6）	1／2	内黒。口縁部外面ナデ。 体部及び底面外面ケズリ、内面磨き。
3	土師器 杯	口径（10.7） 器高　2.4 底径　6.0	① ③ ④	③	浅黄橙 （10YR 8/3）	口縁部 一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面回転ナデ、糸切り底。
4	土錘	最大径　1.0 残存長　2.8 孔径　0.3				完形	



第20図　11号住居跡カマド及び遺物出土状況

12号住居跡（第21図）

U—6からV—6グリッドにかけて位置する。南端から北端にかけて38号土坑と重復している。

本住居跡の覆土である、マンガン粒を多量に含む黄灰色粘土層の上面に、焼土粒・炭化材粒をわずかに含む（マンガン粒は多量に含む）黄灰色粘土層を覆土とする38号土坑の北端部（38号土坑は4号溝の北端部に位置する）が存在し、本住居跡が土坑より古いことを示している。

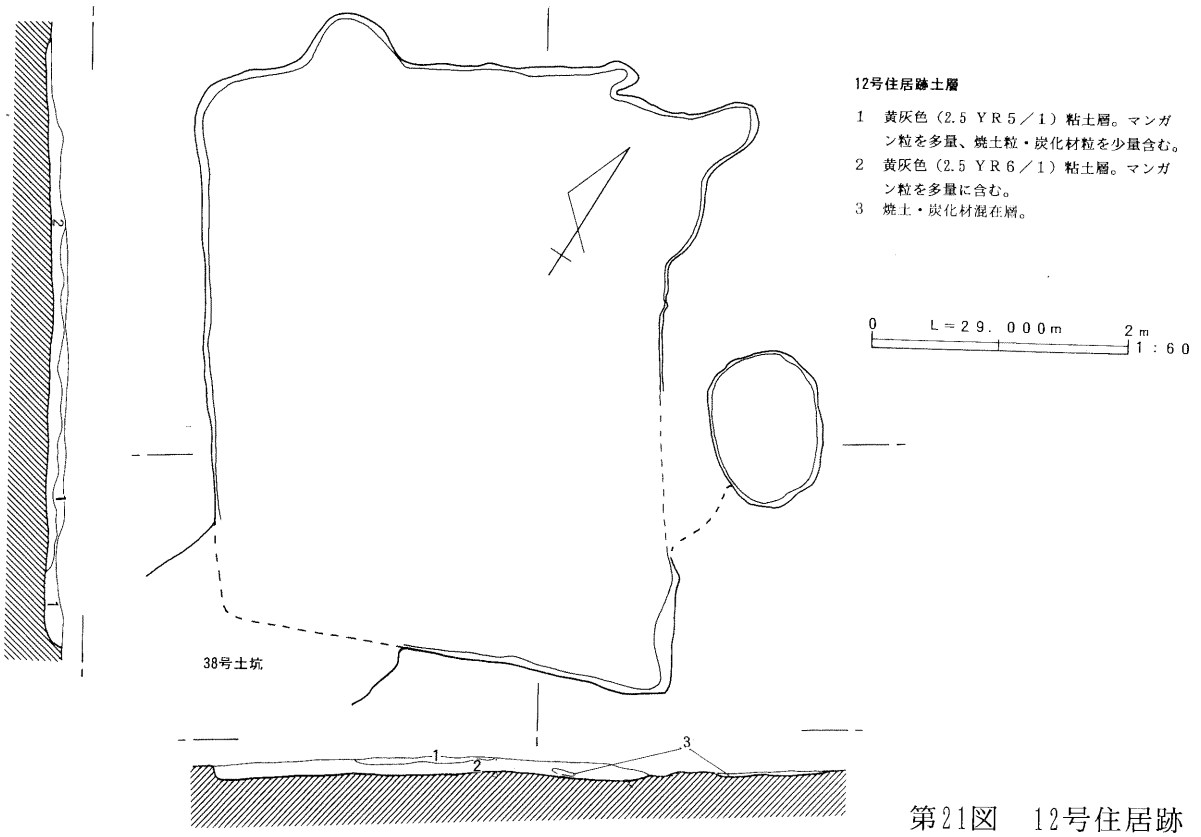
北西辺3.44m、南西辺推定5.20m、南東辺推定3.58m、北東辺4.96mを測る。平面は、不整形ではあるものの概ね長方形を呈する。

床面は、緩やかな起伏をもち、安定していない。壁は、北西辺西隅寄りと北東辺北隅に張り出し部分をもつ。前者は他部分と同一土層であったが、後者部分は、焼土粒・炭化材粒が混在しており、カマドが存在していた可能性がある。

しかしながら同様の覆土をもつ深さ5cmの土坑が北東壁外に存し、あるいは同様の土坑が住居跡北隅に存した可能性もある。いづれにしても、土層断面からは確認できなかった。

一応北隅の張り出しを本住居跡のカマドと考えると、主軸方位はN—57°—Eを示す。

遺物は、土師器椀、甕等の他、16×6.5cm大の長円形礫が7点出土している。



第21図　12号住居跡

第13表　12号住居跡出土遺物観察表　（第19図）

No.	器種	法量（cm）	胎土　焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器 椀	口径 14.0 器高 6.0 底径	①④ ②　② ③	明赤褐 (2.5YR5/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面放射状の磨き様ナデ、外面ケズリ。
2	土師器 甕	口径 器高 底径 4.8	④③ ①　② ②	にぶい橙 (7.5 YR6/4)	底部のみ	外面全面ケズリ。 内面ナデ。

13号住居跡（第22図・23図）

Ⅴ—5からⅤ—6グリッドにかけて位置する。北端は、削平されている。

長軸4.35m、短辺2.90mを測り、隅の丸い長方形を呈する。主軸方位はN—125°—Eを示す。

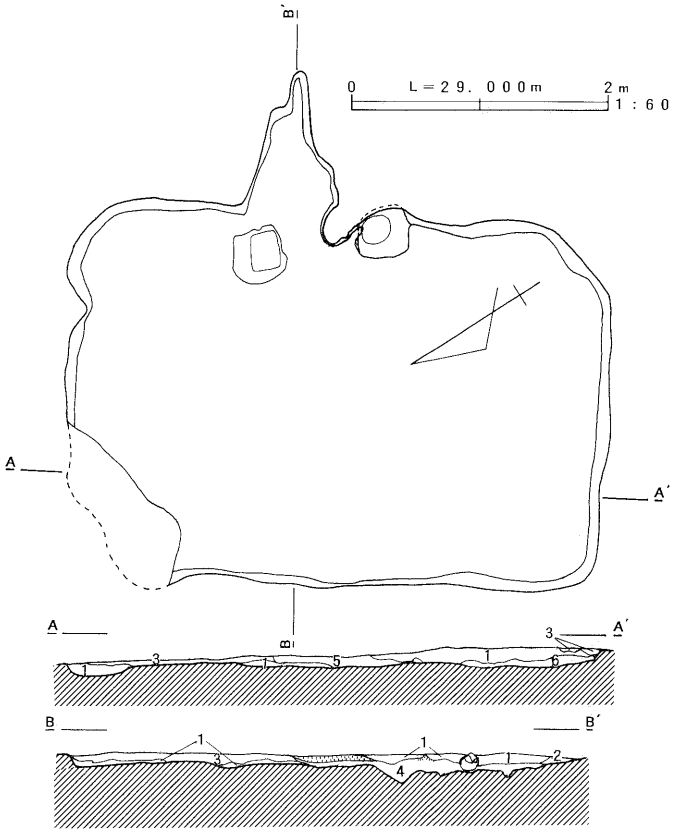
覆土は、浅黄色粘土を主体として、マンガン粒、焼土粒、炭化材を含み、その含有量で分層された。

床面は、起伏はあるものの固くしまり、安定している。カマド前には、一辺40cmの方形（底面長方形）を呈するピットが穿たれ、上面には、カマドから連続する純灰層が堆積していた。底面は概ね水平で、深さ14cmを測る。また、カマド右脇（南側）には、隅丸方形（底面円形）を呈するピットも確認されている。西から南斜面には、純炭化材、木炭が流入していた。径40cm、深さ12cmを測る。このカマド脇ピットから住居跡西隅にかけて、純炭化材層が床面直上に分布している。木炭の状態を維持したものも多かった。また炭化材層には多量のスラッグが含まれており、特に集中する部分には第23図中濃いアミをかけて表示した。本層下の床面には他の施設は検出されていない。

カマドは、南東辺中央より、北東に寄った位置に設置されている。右袖は28cm程住居跡内に張り出し、内側（燃焼部側）を羽釜（No.4）で補強していた。左袖は7cm程の張り出しで補強はされていない。燃焼部の火床は、左右袖の凹凸に合わせて、S字状に広がる。火床最奥部に包み込まれる位置には自然石が立脚し、上面に右袖に使用された羽釜の一部と椀（No.2）が被せられ、支脚として利用されていた。この燃焼部から平面形は三角形と変化し、最奥部でさらに細まる。この間の床面は緩い傾斜をもって上昇しており、純灰層が堆積している。

遺物は、上記の他、カマド内から羽釜（No.5）、カマド右脇ピットから高台椀（No.1）、炭化材上から椀（No.3）、床面中央部から砥石、滑石製臼玉等が出土している。また、住居跡西隅から北寄りの、壁直下純炭化材層中から、鏡面を上に向けほぼ水平の状態で、銅鏡が出土している。

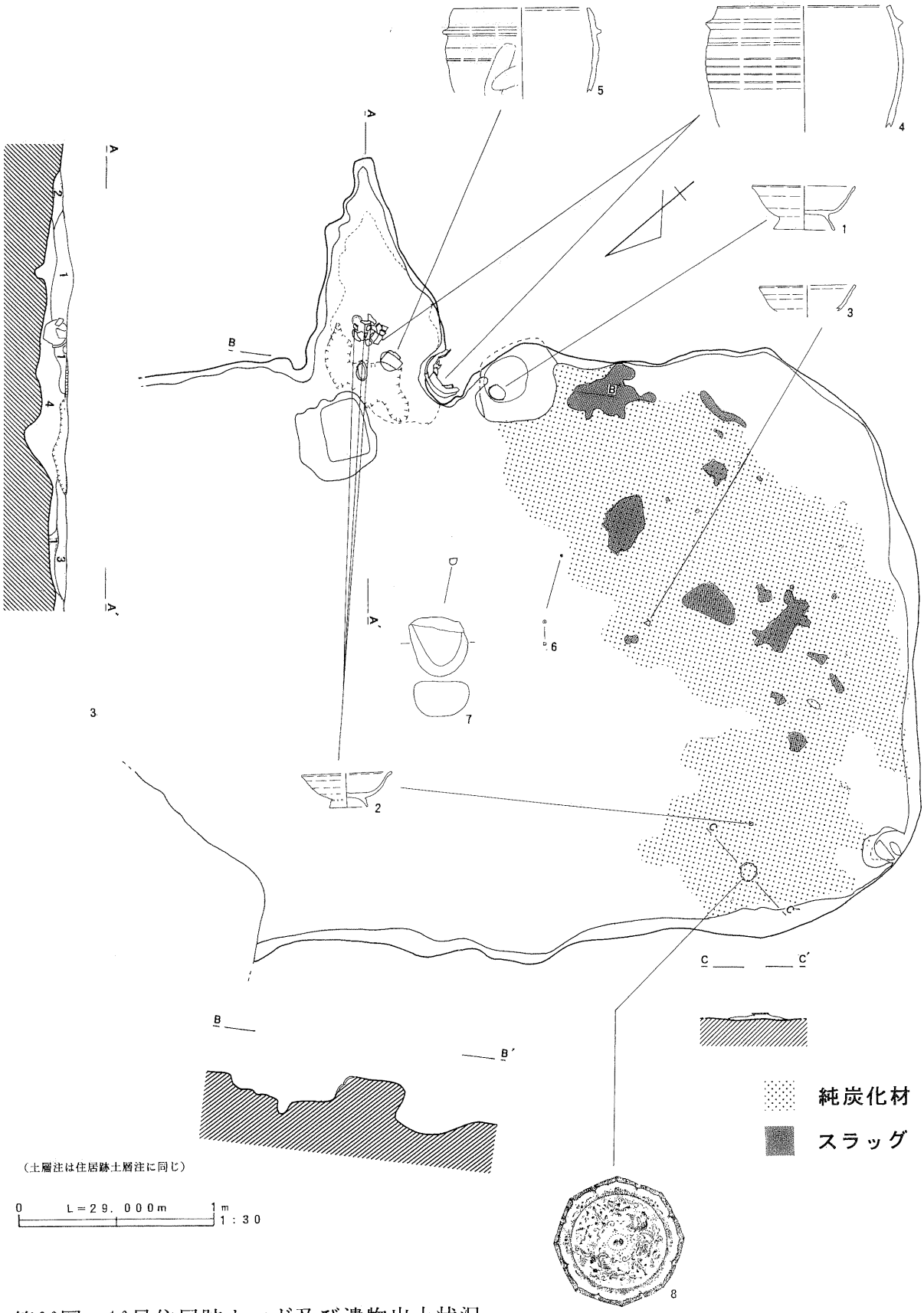
銅鏡の背面には、1～1.2mm間隔で編み上げられた麻布状の繊維痕が、背面文様の凹凸に合わせて、捩れた状態で付着していた。さらに鏡の下面には、漆塗木片が検出されている。



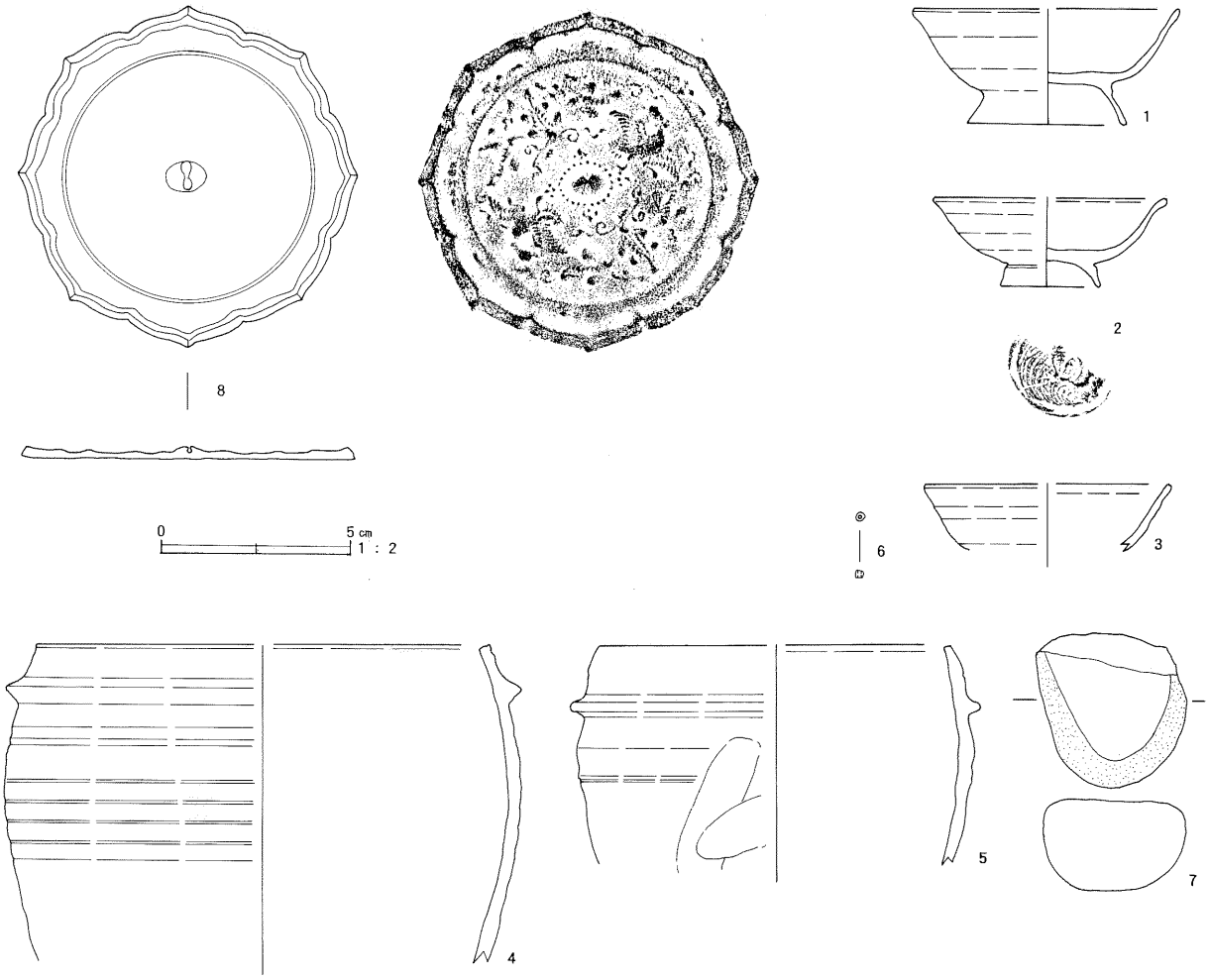
13号住居跡土層

1　浅黄色（5Y7／4）粘土・マンガン粒を多量、焼土粒・炭化材粒をわずかに含む。
2　浅黄色（5Y7／4）吸炭ブロック・粘土混在層。
3　浅黄色（5Y7／4）粘土・焼土粒・炭化材粒を多量に含む。
4　純灰層。
5　浅黄色（5Y7／4）粘土・焼土粒を含む。
6　純炭化材層。スラッグを含む（集中する部分もある）。

第22図　13号住居跡



第23図　13号住居跡カマド及び遺物出土状況



第24図　13号住居跡出土遺物

14号住居跡（第25図）

V—7グリッドに位置する。西半部分を1号溝によって切断されている。また、残存した大部分で2号溝と重復している。

2号溝覆土は、軽石粒を含む黒褐色粘土（1号溝覆土と同一）であり、本住居跡覆土浅黄色土層の上面を占める。

規模・形態共に不明であるが、残存する壁の平面形から、方形を呈するものと思われる。主軸方位はN—44°—Eを示す。

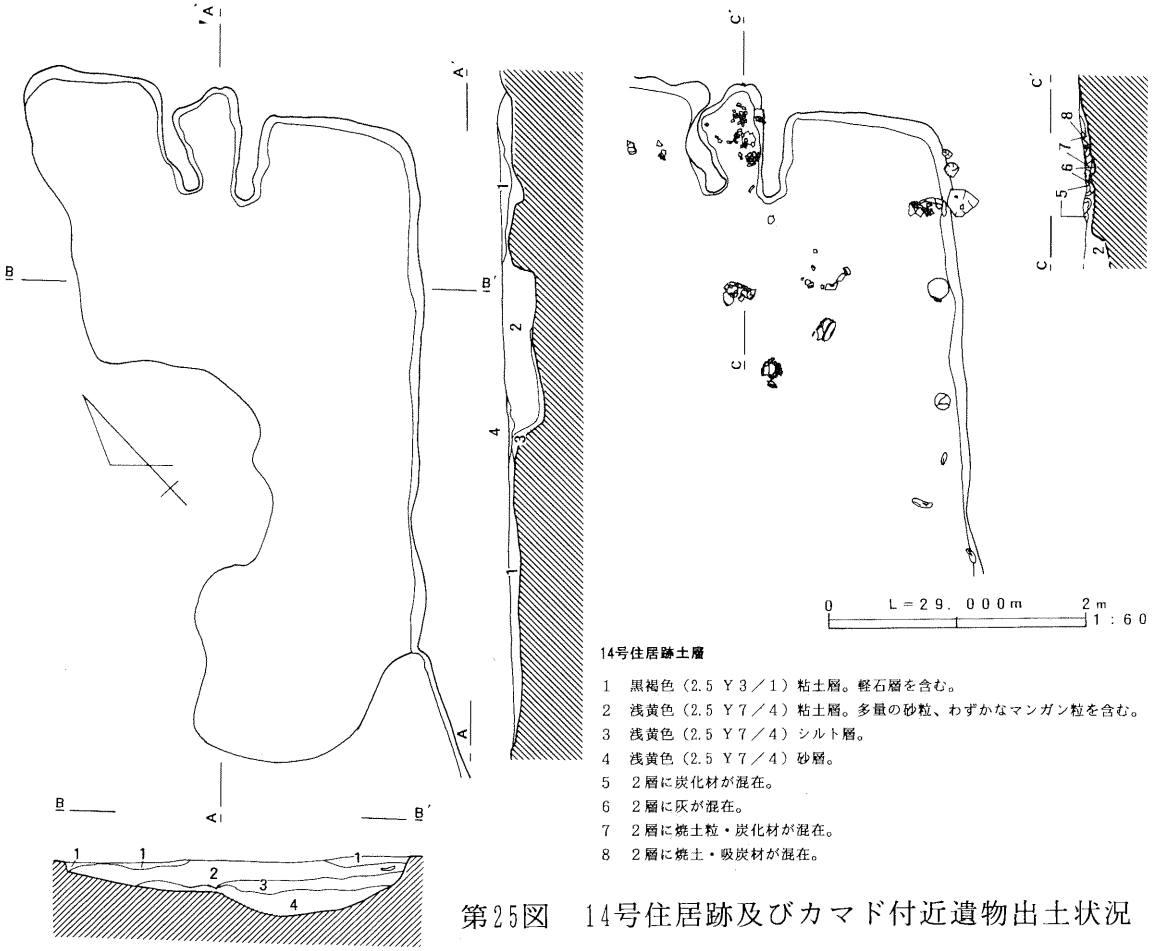
床面は安定せず、起伏が大きい。カマド前では深さ20～25cmに窪むが明確な形状を示さない。

カマドは北東壁に設置されている。床面上に70～85cm張り出した両袖をもつ。両袖内土層は安定せず、炭化材・焼土粒・灰・天井及び壁体（吸炭土）が混在する。燃焼部の最奥部は住居跡壁より7cm程張り出すが、煙道部等、奥の構造は確認されていない。

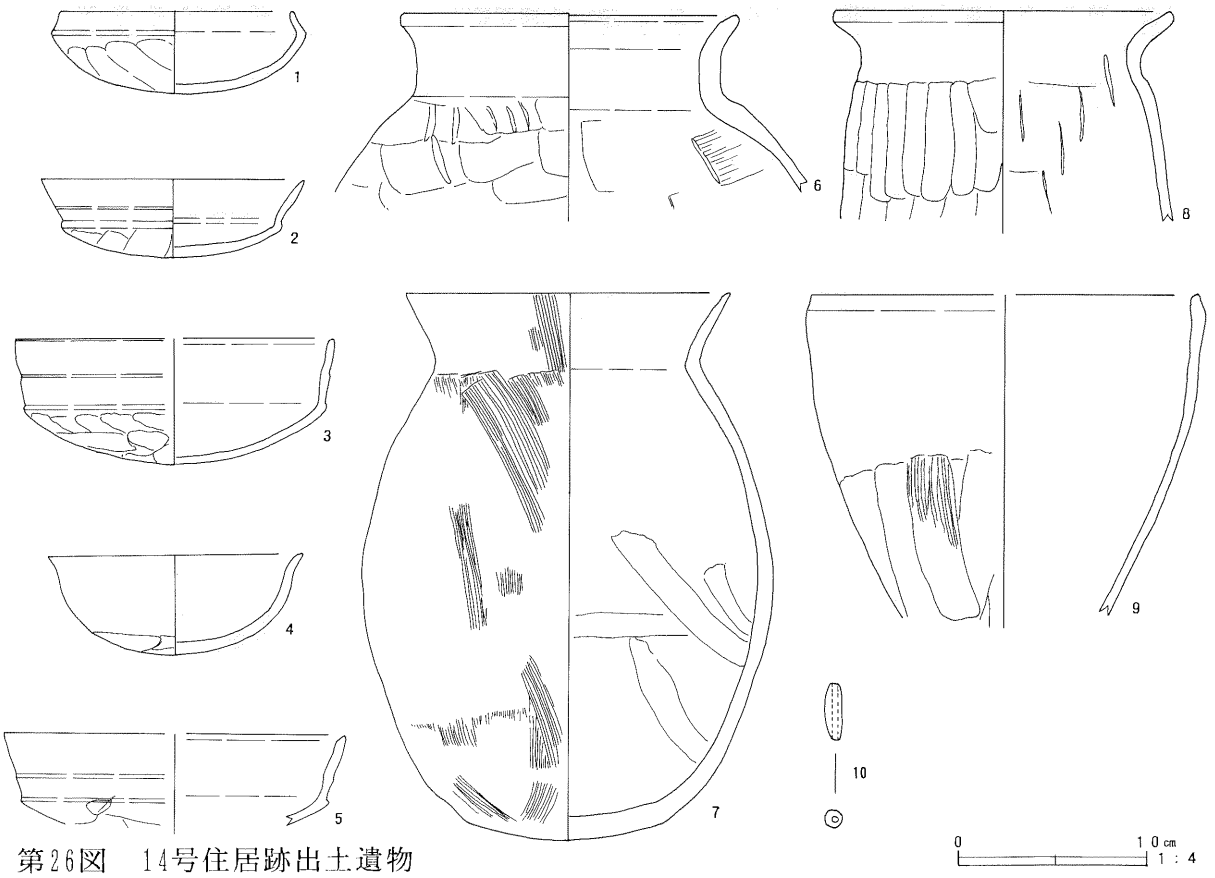
遺物は、カマド内や床上から、土師器杯、甕、甑、土錘等が出土している。

第１４表　１３号住居跡出土遺物観察表　（第２４図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器（軟質）高台椀	口径（１４．４） 器高　６．２ 天井径　８．６	③ ④	③	にぶい橙 (7.5YR7/4)	１／２	表面剥離。付け高台。
2	須恵器（軟質）高台椀	口径　１２．４ 器高　４．６ 底径　５．４	①④ ② ③	③	明赤褐 (5YR 5/8)	１／２	ロクロ整形。糸切り底。付け高台。
3	（軟質）椀	口径（１３．１） 器高 底径	②④ ③ ①	③	浅黄橙 (10YR 8/3)	口縁部 １／５	ロクロ整形。内面吸炭。
4	羽釜	口径（２４．２） 器高 底径	②⑥ ③ ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上半 １／２	ロクロ整形。 内面炭化物、外面煤付着。
5	羽釜	口径（１９．０） 器高 底径	③⑥ ① ②	③	明赤褐 (2.5YR5/8)	口縁部 １／４	内外面ナデ。輪積痕を残す。
6	臼玉	最大径０．４５ 厚さ　０．４ 孔径　０．２				完形	滑石製。
7	砥石	残存長　８．２ 幅　７．７ 厚さ　４．９				１／２	花崗岩製。１面使用。
8	銅鏡	径　９．０ 縁厚　０．２６ 重さ　４８ｇ				完形	厚さ内区０．１５　表面に布目痕。 外区０．２０ 銅製瑞花鴛鴦八稜鏡。



第25図　14号住居跡及びカマド付近遺物出土状況



第26図　14号住居跡出土遺物

第15表　14号住居跡出土遺物観察表　(第26図)

No.	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調(土色帖)	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径 12.2 器高 4.3 底径	③④ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	2／3	表面剥離。 鉄分が剥落し、多くの孔が見られる。
2	土師器杯	口径 (14.0) 器高 4.1 底径	①④ ③ ②	②	橙 (2.5YR6/8)	完形	内面剥離。 口縁部横ナデ(2段)。 体部外面ケズリ。
3	土師器杯	口径 17.0 器高 6.6 底径	②① ③⑥ ④	②	にぶい橙 (5YR 6/3)	1／2	口縁部横ナデ(2段)。体部内面ナデ、外面ケズリ。胎土はマーブル状を呈する。 二次加熱。
4	土師器杯	口径 13.5 器高 5.2 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
5	土師器杯	口径 (18.2) 器高 底径	①⑥ ③ ④	②	橙 (2.5YR6/8)	上半 1／2	口縁部横ナデ(2段)。体部内面ナデ、外面ケズリ。胎土はマーブル状を呈する。 二次加熱。
6	土師器甕	口径 18.2 器高 底径	① ③ ②	②	橙 (2.5YR6/8)	口縁部のみ	口縁部横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面横のケズリ。 黒斑。
7	土師器甕	口径 (17.2) 器高 28.8 底径	①④ ② ③	②	橙 (5YR 6/6)	1／3	口縁部横ナデ、外面縦のナデが加わる。 胴部内面ナデ、外面刷毛目整形。 内面炭化物、外面煤付着。
8	土師器甕	口径 18.0 器高 底径	① ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	上半のみ	口縁部横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面縦のケズリ。 内外面吸炭。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
9	土師器 甑	口径（２０．６） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	底部欠	口唇部横ナデ。 胴部上半内外面ナデ。 下半内面ナデ、外面刷毛目整形。
10	土錘	最大径０．９５ 長さ　３．０ 孔径　０．３				完形	

15号住居跡（第27図）

W—5からW—6グリッドに位置する。

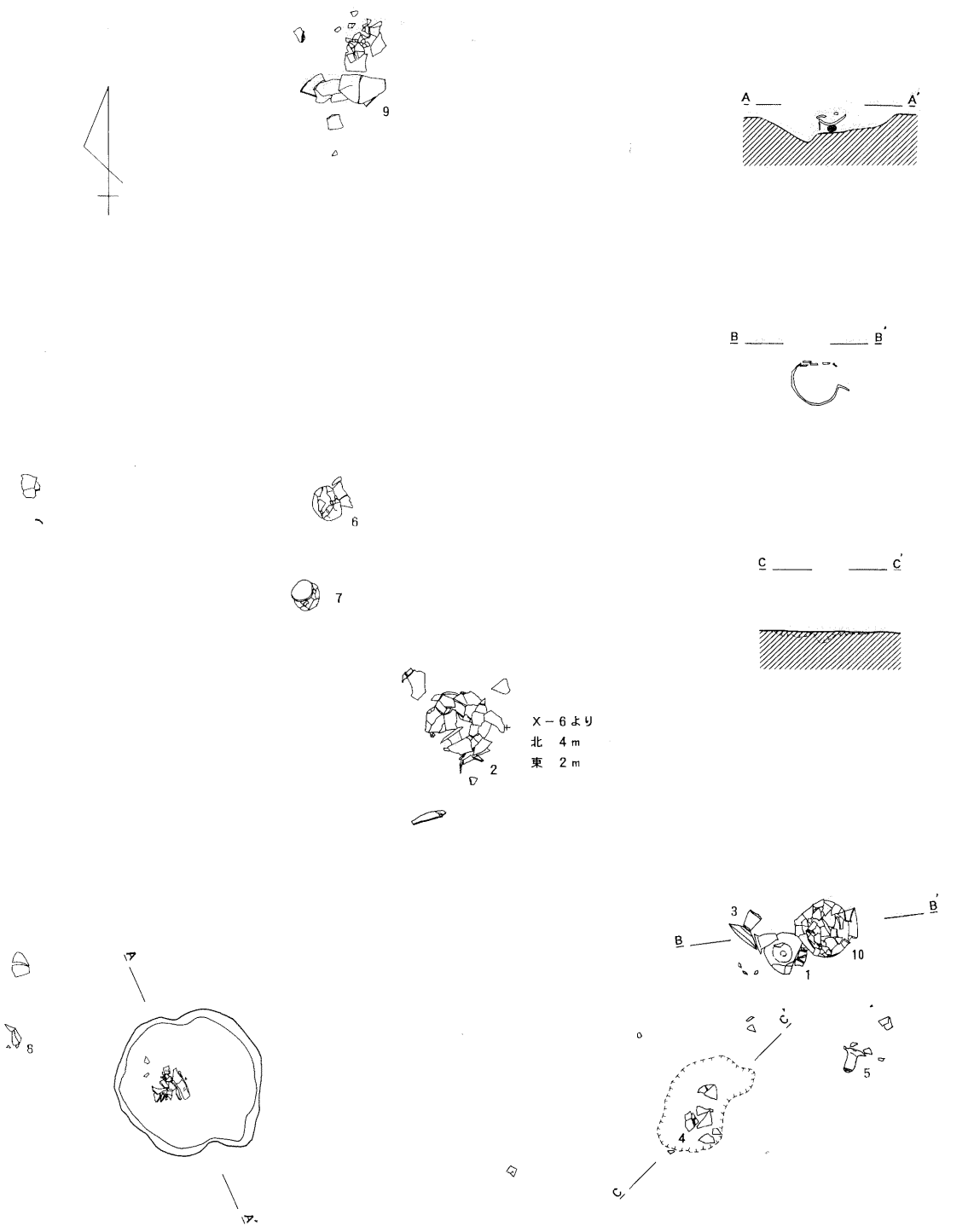
遺物は浅黄色シルト層に含まれており、基盤となる土層とほとんど区別がつかなかった。このため、規模・形態共不明であるが、遺物が同一レベルから検出されたこと、さらにこの面で炉が検出されたことから、固い床面を構成しているものではないが、住居跡と判断したものである。また、遺物の広がりが北西から南東に長く（約5.7m）、南西から北東方向に短い（4.0m）ことから、こうした長短をもつ長方形を主体とした形態が推定される。同様に、炉の形態から、主軸方位はN—140°—E前後を示すと推定される。

炉は、推定長軸方向に25cm、同短軸方向に53cmの広がりをもつ。中央部が最も火床が厚く、7cmの厚味が計測された。また火床上から高杯々部（No.4）が出土している。

遺物は、炉脇から高杯・甕、推定中央部から坩・高杯、同炉対辺部から甕が出土している。

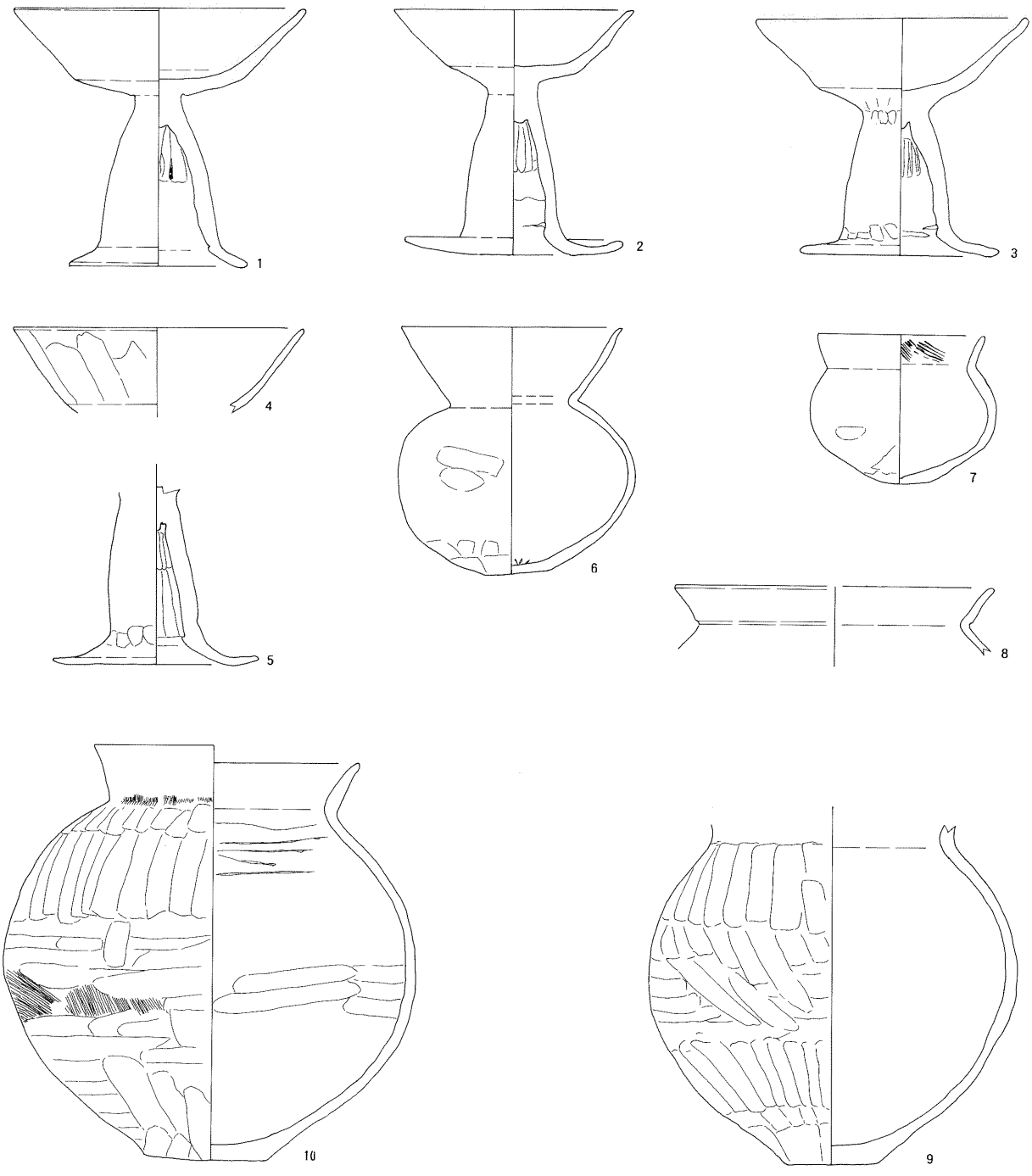
第16表　15号住居跡出土遺物観察表　（第28図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器 高杯	口径　１８．０ 器高　１６．１ 底径　１１．０	②④ ①⑥ ③	②	浅黄橙 (7.5Y 8/4)	完形	表面剥離。脚部内面ヘラによるナデ付け。 ホゾ接合。
2	土師器 高杯	口径　１５．１ 器高　１５．３ 底径　１３．６	③② ①⑥ ④	②	橙 (2.5Y 7/8)	完形	表面剥離。脚部内面ヘラによるナデ付け。 ホゾ接合。
3	土師器 高杯	口径　１６．７ 器高　１４．８ 底径　１２．２	①④ ② ③	②	にぶい橙 (10YR 7/2)	一部欠	脚部外面縦のナデ、内面ヘラによる ナデ付け。
4	土師器 高杯	口径　１８．２ 器高 底径	①⑥ ④ ③	②	橙 (5YR 6/6)	杯部のみ ２／３	内面横のナデ。外面縦のケズリ様ナデ。
5	土師器 高杯	口径 器高 底径　１２．８	① ③ ④	②	橙 (2.5YR6/8)	脚部のみ	外面ナデ。内面ヘラによるナデ付け。 ホゾ接合。
6	土師器 坩	口径　１３．８ 器高　１５．４ 底径　４．１	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR7/8)	一部欠	口縁部横ナデ。下位縦のナデ。 胴部横のナデ。底面及び胴部下位横のケズリ。 外面一部朱塗。
7	土師器 坩	口径　１０．２ 器高　９．０ 底径	③② ④ ①	②	橙 (5YR 7/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 胴部外面縦のケズリ後、ナデ。 内外面黒斑。
8	土師器 甕	口径（２０．０） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (7.5YR7/6)	口縁部 １／４	口縁部横ナデ。 胴部外面横のケズリ。
9	土師器 甕	口径 器高 底径　６．０	②③ ① ④	②	橙 (5YR 6/6)	口縁部欠	胴部上位斜のケズリ、中位横のケズリ、下位縦のケズリ。内面横のナデ、炭化物付着。 籾殻圧痕。外面煤付着。
10	土師器 甕	口径　１６．４ 器高　２６．１ 底径　７．６	①④ ② ③	①	橙 (5YR 6/4)	一部欠	口縁部横のナデ。胴部外面上位、下位縦のケズリ、中位横のケズリ。煤付着。 内面斜のナデ。炭化物付着。



第27図　15号住居跡遺物出土状況

0　L=29.000m　1m
1:30



第28図　15号住居跡出土遺物

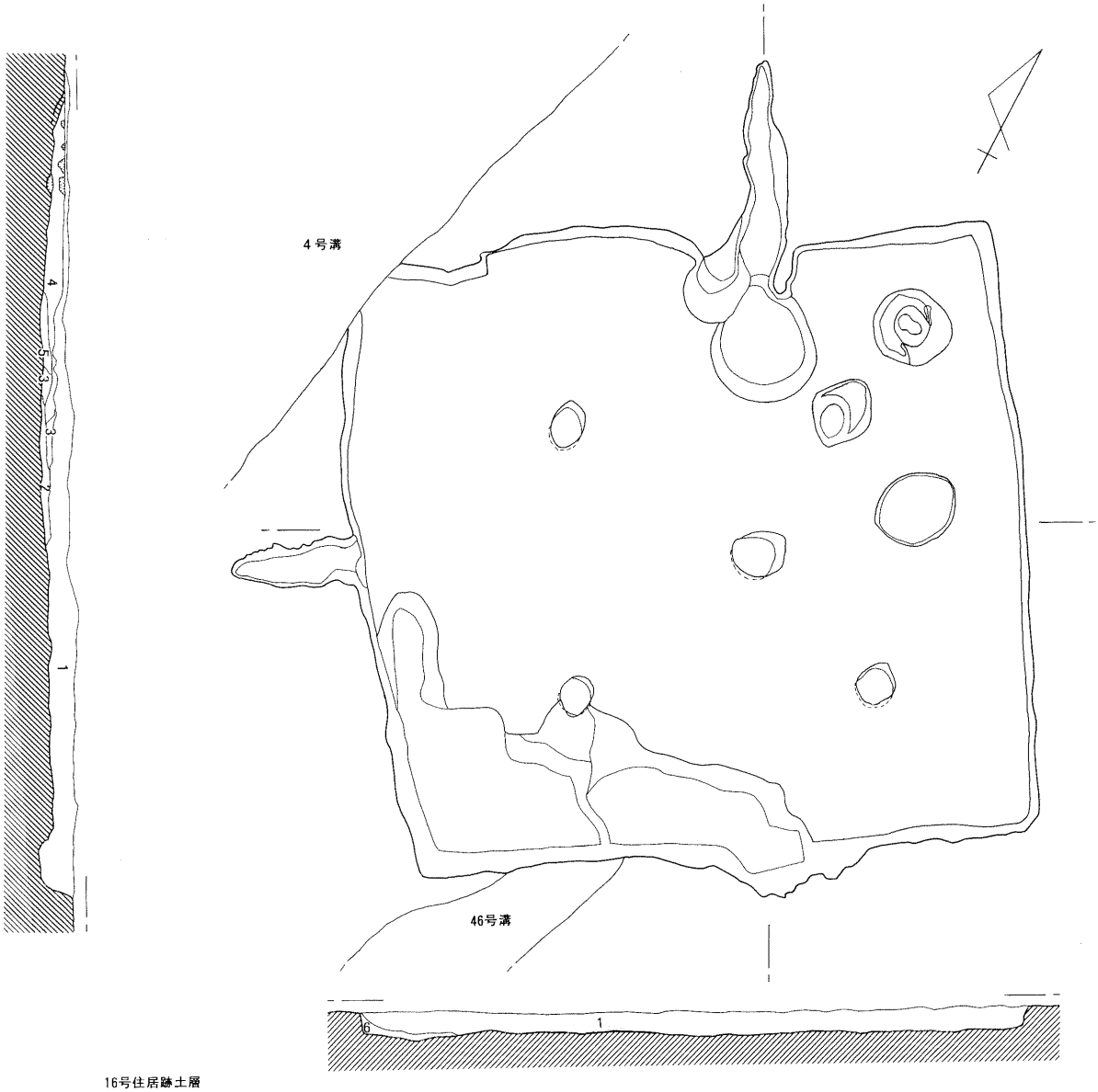
16号住居跡（第29図・30図）

W—6グリッドを中心に、北隅・カマドの一部がV—6グリッド、西隅がW—7グリッドに位置する。西隅は4号溝、南隅部で46号溝と重復している。いずれの溝共、本住居跡より新しい。

東辺5.30m、南辺5.40mを測り、ほぼ正方形を呈している。主軸方位はN—33°—Wを示す。

床面は、カマド前と南隅に窪みをもつが、比較的固くしまり、安定している。北隅（カマド右脇）には、径66cm、断面は一旦７cmほどで平になり、中央部のみがさらに窪む形態を示すピットが穿たれている。最深部は18cmを測る。浅い落ち込みは中央部北東寄りに２ヶ所みられる。いずれも深さ６cmを測る。径は、壁寄りが65cm、中央寄りが45cmを測る。

住居跡四隅からの対角線上には、４本の柱穴が配されている。径22～34cmで、深さは35cm前後



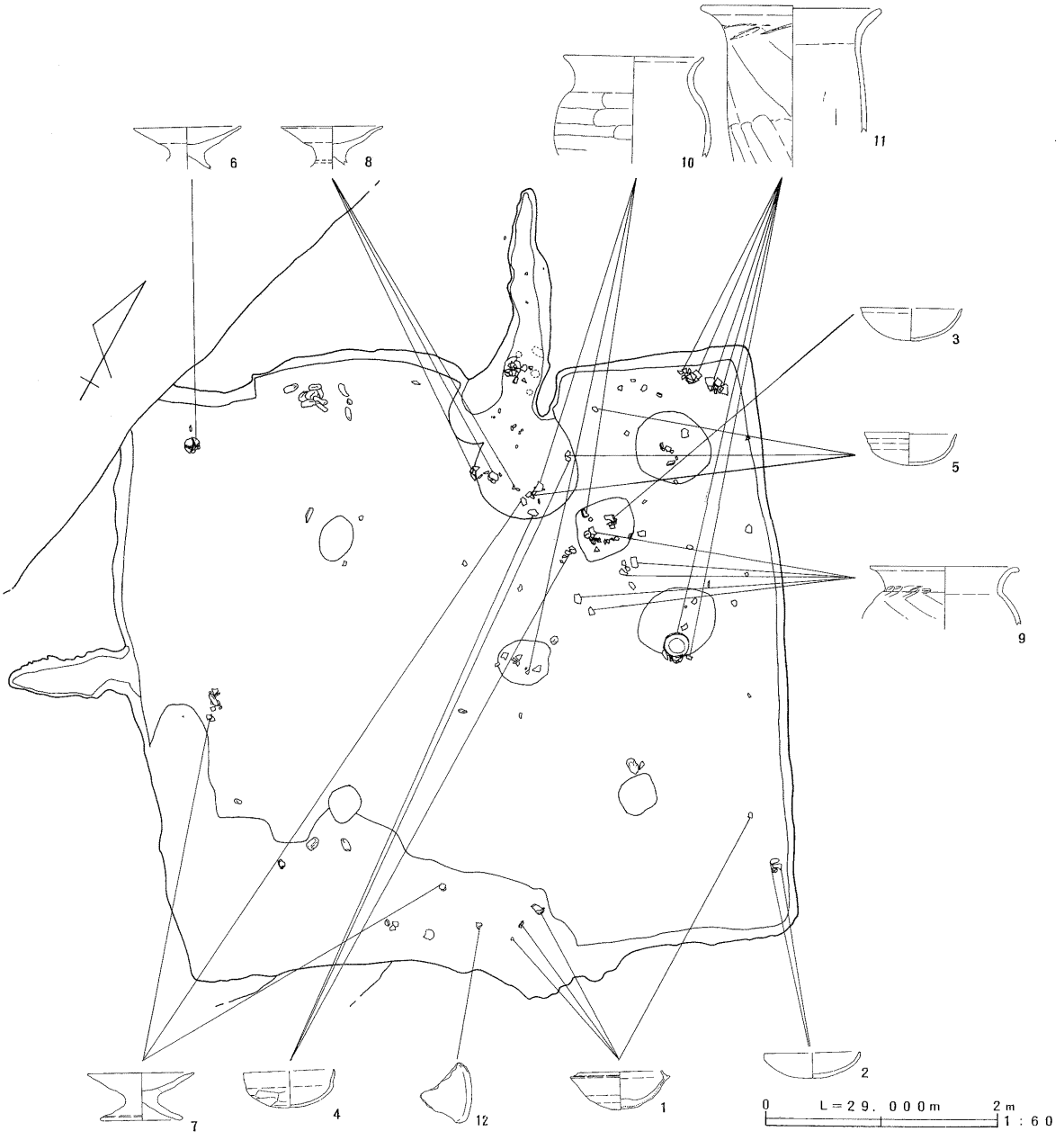
16号住居跡土層

1　黄褐色（2.5 Y 5／4）粘土を核にして、黄灰色シルト（2.5 Y 6／1）マンガン粒（多量）・焼土粒（少量）含む。
2　マンガン粒・黄灰色砂（2.5 Y 6／1）混在層。
3　マンガン粒・黄灰色砂シルト（2.5 Y 6／1）混在層。
4　3層に焼土粒を多量に含む。（一部灰を含む）
5　3層に炭化材粒を多量に含む。
6　3層とほぼ同一であるが、マンガン粒が多い。
7　灰層。

第29図　16号住居跡

(北隅穴は42cm) を測る。いずれも、南から北へ、わずかな傾斜をもつなど、4穴の共通点が多い。

カマドは、北西辺中央やや北寄りに設置されている。両袖は住居内に張り出すが、左右で大きく異なる。右袖は幅18cm、長さ46cm、左袖は幅55cm、長さ62cmを測る。左袖は、火床を包み込むようにその前面に廻り込む形態をとっている。この両袖の前面には、長さ1.00m、幅0.90m、平面卵形の窪みがみられ、炭化材粒が多量に堆積していた。両袖の間から奥へは緩やかに上昇し、最奥部で急傾斜となる。この角度変換部手前56cm間は天井部が残存し、幅15cm、高さ4～6cmとなっている。また、最奥（煙道）部から手前1.04mの所では屈曲し、中軸線は直線とならない。全体では2.08m

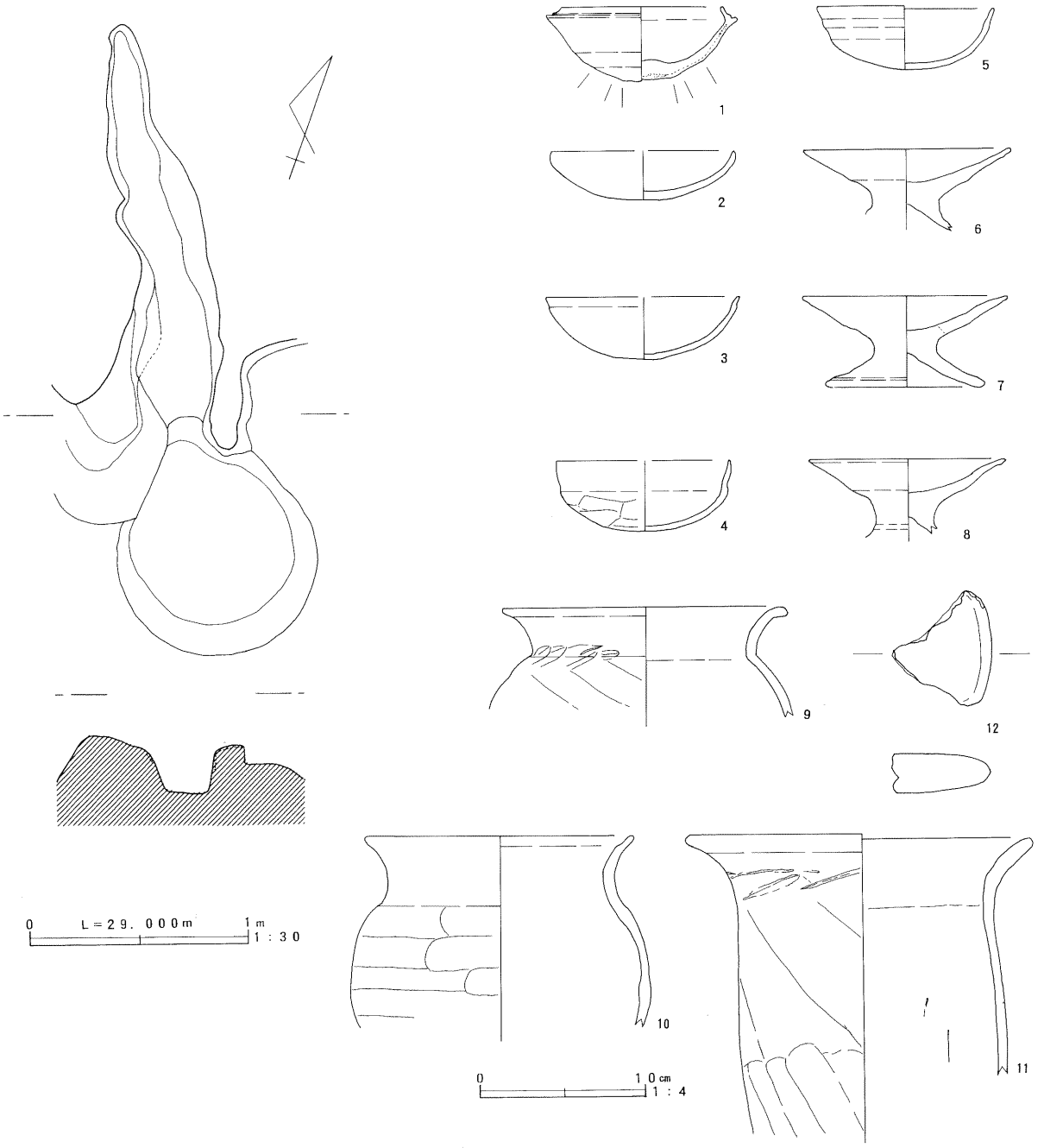


第30図　16号住居跡遺物出土状況

を測る。逆くの字形を示す長大なカマドであるといえる（手前土坑を入れると2.97mになる）。

また、南西辺中央には、長さ1.15m、幅0.34mの掘り込みが、住居床上に15cmの高さから壁外に穿たれている。覆土は住居跡覆土第１層と同一であったが、焼土粒が多量に含有されており、本住居跡第一次カマドの残がいと考えられる。なお住居跡には施設は残存していない。

遺物は、全体から土師器杯・高杯が出土している。カマドの右脇には土師器甕が集中する様子をみせ、また、カマド対辺壁下では須恵器杯・砥石が出土している。さらにカマド左脇では、14×5cm前後の長円形礫が12個集中して出土しており、編物石であった可能性を示している。なお、カマ



第31図　16号住居跡カマド及び出土遺物

ド燃焼部内では、骨片も出土している。

第17表　16号住居跡出土遺物観察表　（第31図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 杯	口径 9.9 器高 4.6 底径 3.1	① ②	①	青灰 (5B 5/1)	3／4	内外面、ロクロ整形。 内面底部布目圧痕（水式）。外面下位～底部回転ケズリ。
2	土師器 杯	口径（11.0） 器高 3.0 底径	① ②	③	橙 (2.5YR6/8)	1／2	内外面剥離。 体部外面ケズリ。
3	土師器 杯	口径（12.0） 器高 3.8 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	口縁部横のナデ。 体部内面ナデ、外面横のケズリ。 黒斑。
4	土師器 杯	口径（10.6） 器高 4.3 底径	① ②	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／3	口縁部横のナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 全面吸炭。
5	土師器 杯	口径 10.8 器高 3.9 底径	②	③	橙 (5YR 6/8)	3／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ。 外面一定方向のケズリ。
6	土師器 高杯	口径 12.7 器高 底径	②④ ① ③	②	赤褐 (5YR 5/6)	裾部欠	杯部内面ナデ。 口唇部横ナデ。体部外面及び脚部外面縦のケズリ。脚部内面横のナデ。
7	土師器 高杯	口径 12.6 器高 5.6 底径（9.8）	②④ ① ③	③	橙 (7.5YR7/6)	一部欠	杯部上位横ナデ。内面下位ナデ。外面下位～杯部上位縦のケズリ。脚裾部横ナデ。内面横のナデ。黒斑。
8	土師器 高杯	口径 11.8 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (7.5YR7/6)	一部欠	杯部上位内面全面横ナデ。外面下位～脚部上位縦のケズリ。裾部外面下位、内面全面横ナデ。中央部指頭によるナデ付け。黒斑。
9	土師器 甕	口径 17.7 器高 底径	② ① ③	③	にぶい赤褐 (5YR 4/4)	口縁部のみ	口縁部横のナデ。 胴部外面縦のケズリ、内面横のナデ。 全面吸炭。
10	土師器 甕	口径 16.4 器高 底径	① ② ③	③	橙 (7.5YR6/6)	口縁部のみ	口縁部横のナデ。胴部内面横のナデ、外面横のケズリ。 外面一部吸炭。
11	土師器 甕	口径 21.2 器高 底径	①③ ④ ②	②	橙 (5YR 7/6)	上半部のみ	口縁部横ナデ。 内面横のナデ。胴部外面斜ケズリ、
12	砥石	長さ 7.1 幅 6.1 厚さ 3.0					2面使用。 花崗岩製。

17号住居跡（第32図・33図）

W—5からX—6グリッドにわたって位置しており、西側では3号溝と重復している。

3号溝覆土（砂層であり酸化面によって分層される）が、本住居跡覆土である砂・マンガン粒・焼土粒を含む浅黄色粘土層を掘り込んでいるところから、3号溝が新しいといえる。

南北5.90m、東西5.90＋αmを測り、ほぼ正方形を呈すると推定される。主軸方位はN—17°—Eを示す。

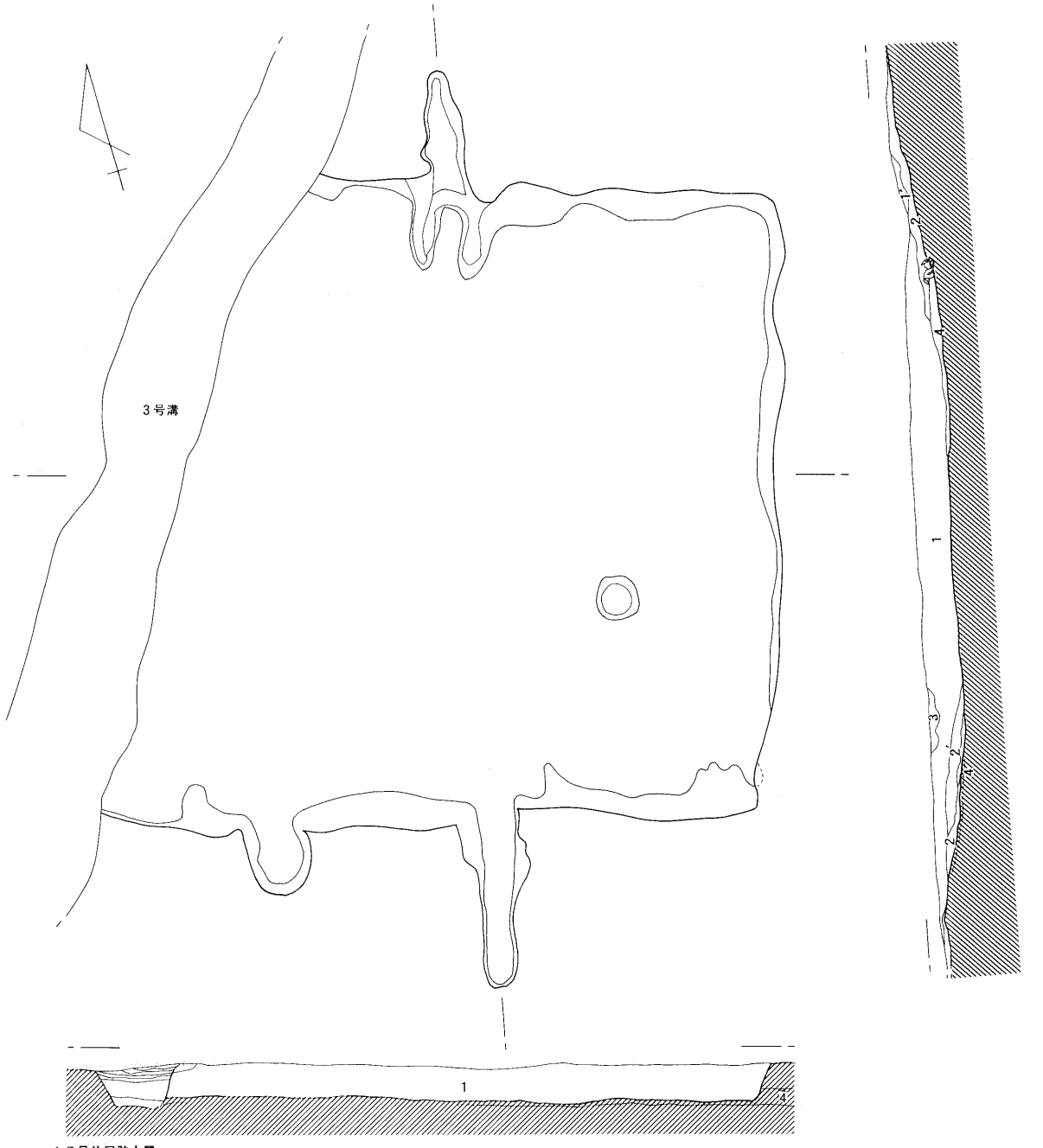
床面は、やや起伏があるものの、北カマド前等に固められた面をもつなど、安定しているといえる。床中央東南寄りに径37cmのピットがあるが、7cmと浅く底面も安定していない。

カマドは、北辺中央に設置されている。両袖が平行して90cmの長さで設けられ、幅28cm、奥行80cmの燃焼部を形成している。底面は緩斜面を形成している。燃焼部奥では段をもって煙道部へと続く。煙道部はさらに緩やかな傾となり、幅も狭まって最奥部へと移行している。—北カマド—

一方、南辺中央やや東寄りにもう一基カマドが

設置されている。完全に壁外に張り出して設けられている。燃焼部幅29cm、奥行63cm、煙道部幅27cm、奥行1.03mを測る。底面は全て緩斜面を成すが、燃焼部と煙道部の境は段を成している。

遺物は、北カマド前から長脚の土師器高杯脚部(No.3)、右脇から土師器杯(No.1・2)、同甕(No.4)が出土している。このうち脚は、割れ口にホゾ接合の痕が明瞭に観察できる。またNo.1

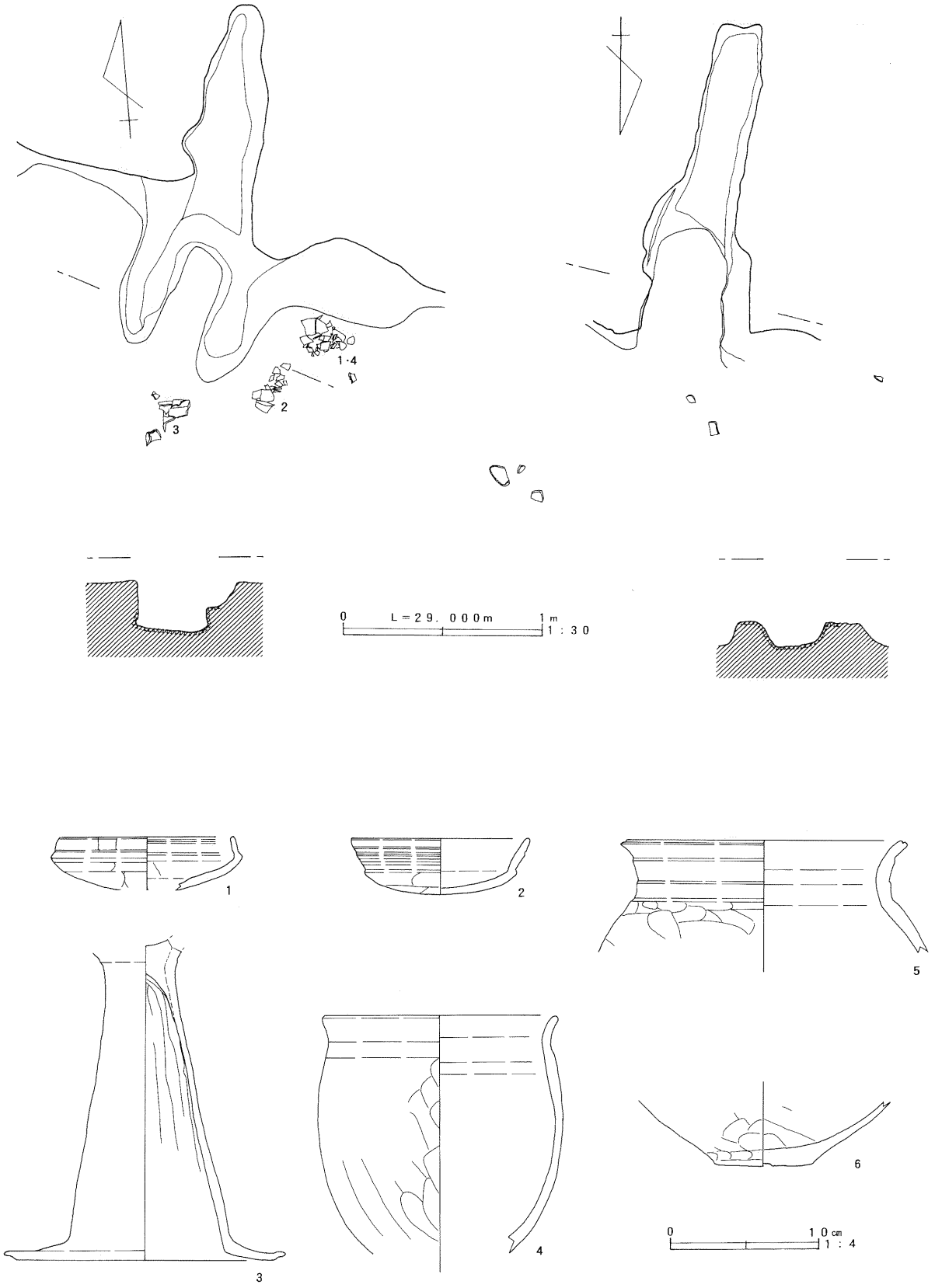


17号住居跡土層

1　浅黄色(2.5Y7／4)粘土・砂混在層(マンガン粒・焼土粒を含む)
1'　1層と同様であるが、粘土分が密でしまる。
2　1層と同様であるが、砂分が多く、焼土粒・炭化材粒を含む。
2'　2層と同様であるが、焼土はブロック状を呈する。
3　暗灰黄色(2.5Y5／2)粘度・砂混在層。マンガン粒を含む。
4　黄灰色(2.5Y5／1)砂層。

第32図　17号住居跡

0　L=29.000m　2m
1:60



第33図　17号住居跡カマド及び出土遺物

～４の東脇でNo.５・６の甕も出土している。

このような状況から、南カマドを第一次カマド、北カマドを第二次カマドとし、南から北へ移設されたものと推定している。

第１８表　１７号住居跡出土遺物観察表　（第３３図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器 杯	口径（１１．８） 器高　３．７ 底径	① ④	①	褐 (7.5YR4/4)	１／２	口縁部横ナデ。 体部内面水拭き、外面ケズリ。
2	土師器 杯	口径（１２．０） 器高　３．８ 底径	①④ ② ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	３／５	内面は橙（7.5 ＹＲ 6/6）。 口縁部横ナデ（２段）。 体部内面剥離、外面ケズリ。
3	土師器 高　杯	口径 器高 底径（１９．０）	① ④	①	黄褐 (10YR 5/6)	脚　部 の　み	内面は明赤褐（5 ＹＲ 5/6）。 脚部外面縦のナデ、内面放射状ナデ付け、 裾部横ナデ。ホゾ接合。杯部内面ナデ。
4	土師器 甕	口径（１６．０） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	明赤褐 (5YR　5/6)	２／５	口縁部横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面斜のケズリ。 内外面に吸炭。
5	土師器 甕	口径　１９．５ 器高 底径	①④ ②⑥ ③	②	明褐 (10YR 5/6)	口縁部 の　み	口縁部横ナデ（３段）。 胴部内面横ナデ、外面横のケズリ。 吸炭。
6	土師器 甕	口径 器高 底径　６．８	②③ ①⑥ ④	②	橙 (5YR　6/6)	底　部 の　み	内面は褐灰（10YR 4/1）。 胴部内面斜のケズリ、外面縦のケズリ。 底面内外面ナデ付け。内面は全面吸炭。

18号住居跡（第34図・35図）

Ｗ－６、Ｘ－６、Ｗ－７、Ｗ－８の４グリッドにわたって位置する。中央部を南西から北東にかけて46号溝と、北隅で47号土坑と重復する。

46号溝は、本住居跡覆土の浅黄色シルト層の上面に位置し、本跡より新しいといえる。47号土坑は、プラン確認時にわずかに重復が確認されたものであるが、本跡覆土の一部が削り取られているところから、本跡の方が古い遺構であるといえる。

床面は、起伏はあるものの安定している。しかし、南隅とカマドの間は、壁から55cm程方円形に張り出し、この床面も凹凸がはげしい。

本住居跡覆土である浅黄色シルト層は、灰白色粘土やマンガン粒を多量に含むが、下位では、灰白色粘土の粒が細かくなり、より一層シルト化した土層となって床面を覆っている。この両層の間には、炭化材粒が多く分布し、所によって純層で堆積（第34図中アミ部・第５層）している。

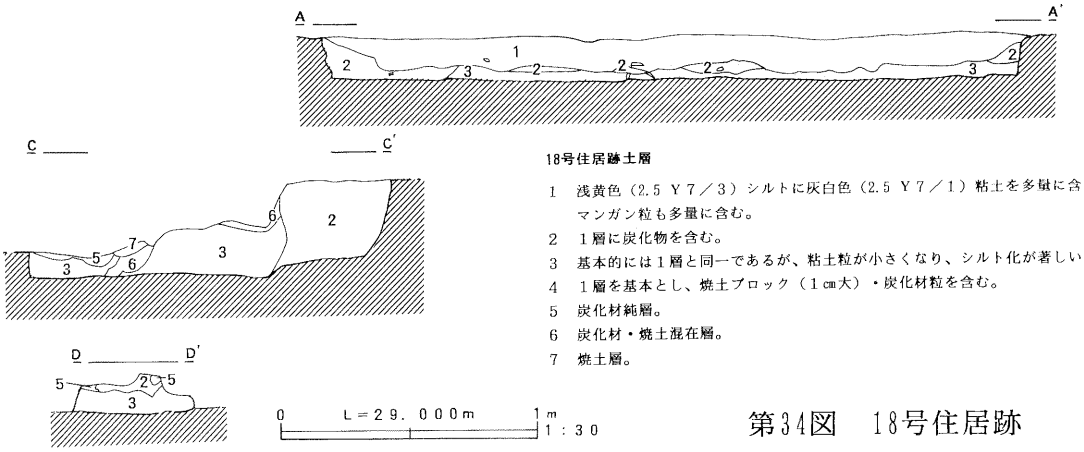
本住居跡は、南辺5.66ｍ、東辺5.08ｍ、北辺6.38ｍ、西辺5.30ｍを測り、方形を基本とはしているものの、不整形を呈している。主軸方位はＮ－115°－Ｗを示す。

カマドは、南辺中央東寄りに設けられている。住居跡床面より13～15cm程高く、幅30cmで、奥行90cmに及ぶ火床が形成されている。ただし前面の30cm分には袖が及んでいない。底面は同一水平面がさらに30cm続き11cmの段差をもって煙道へ移行する。煙道最奥部は上面を46号溝に削られており形状ははっきりしないものの、緩斜面をもって上昇しているようである。袖先端から30cm奥の、袖に囲まれた火床中央部には、高杯（No.23）が伏せられた状態で立っており、支脚として利用されていた。

遺物は、カマド周辺から張り出し部、及び北壁中央部に集中して出土しされている。このうち、後者からは、17個の滑石製臼玉が純炭材層中（第34図Ｄ－Ｄ´ライン部・第３層上）から出土して

いる。しかしながら本臼玉は、盗難にあって現存していない。また、この臼玉群から東南に２ｍの位置からは、滑石製双孔円板の未成品（No.43）も出土している。

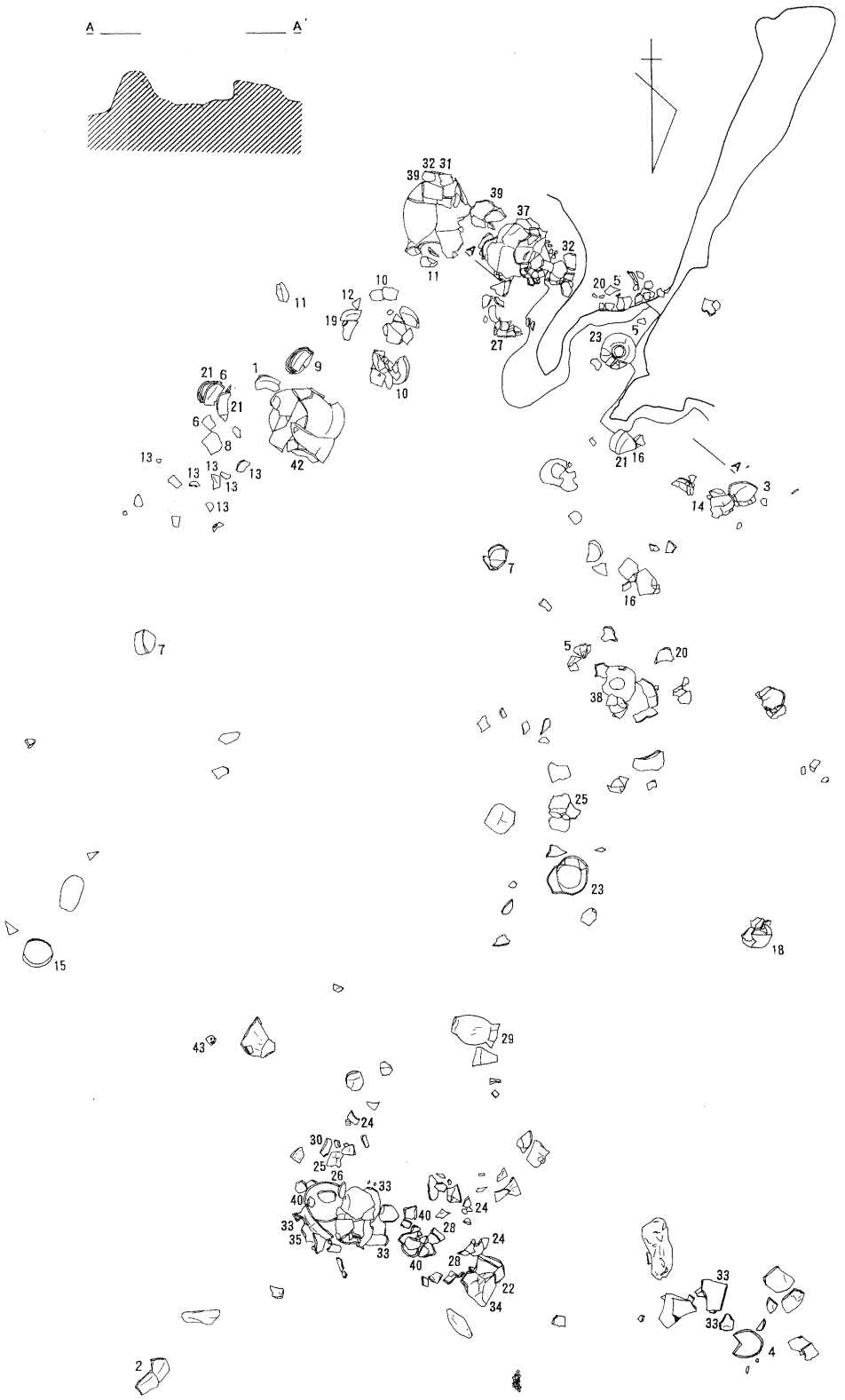
出土土器は全て土師器で、杯、椀、高杯、坩、甕、甑等が含まれている。



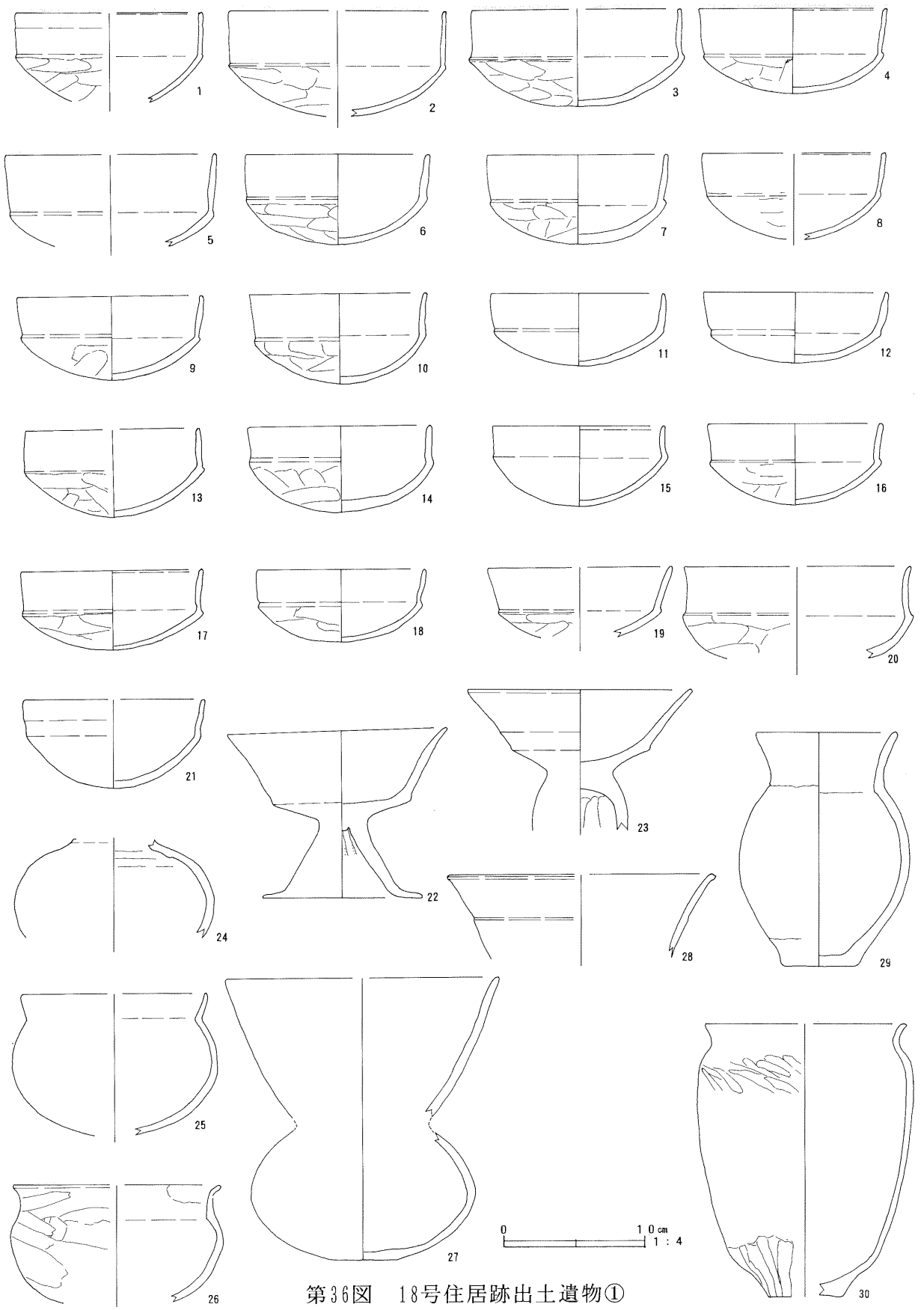
18号住居跡土層

1　浅黄色（2.5 Y 7／3）シルトに灰白色（2.5 Y 7／1）粘土を多量に含む。マンガン粒も多量に含む。
2　1層に炭化物を含む。
3　基本的には1層と同一であるが、粘土粒が小さくなり、シルト化が著しい。
4　1層を基本とし、焼土ブロック（1㎝大）・炭化材粒を含む。
5　炭化材純層。
6　炭化材・焼土混在層。
7　焼土層。

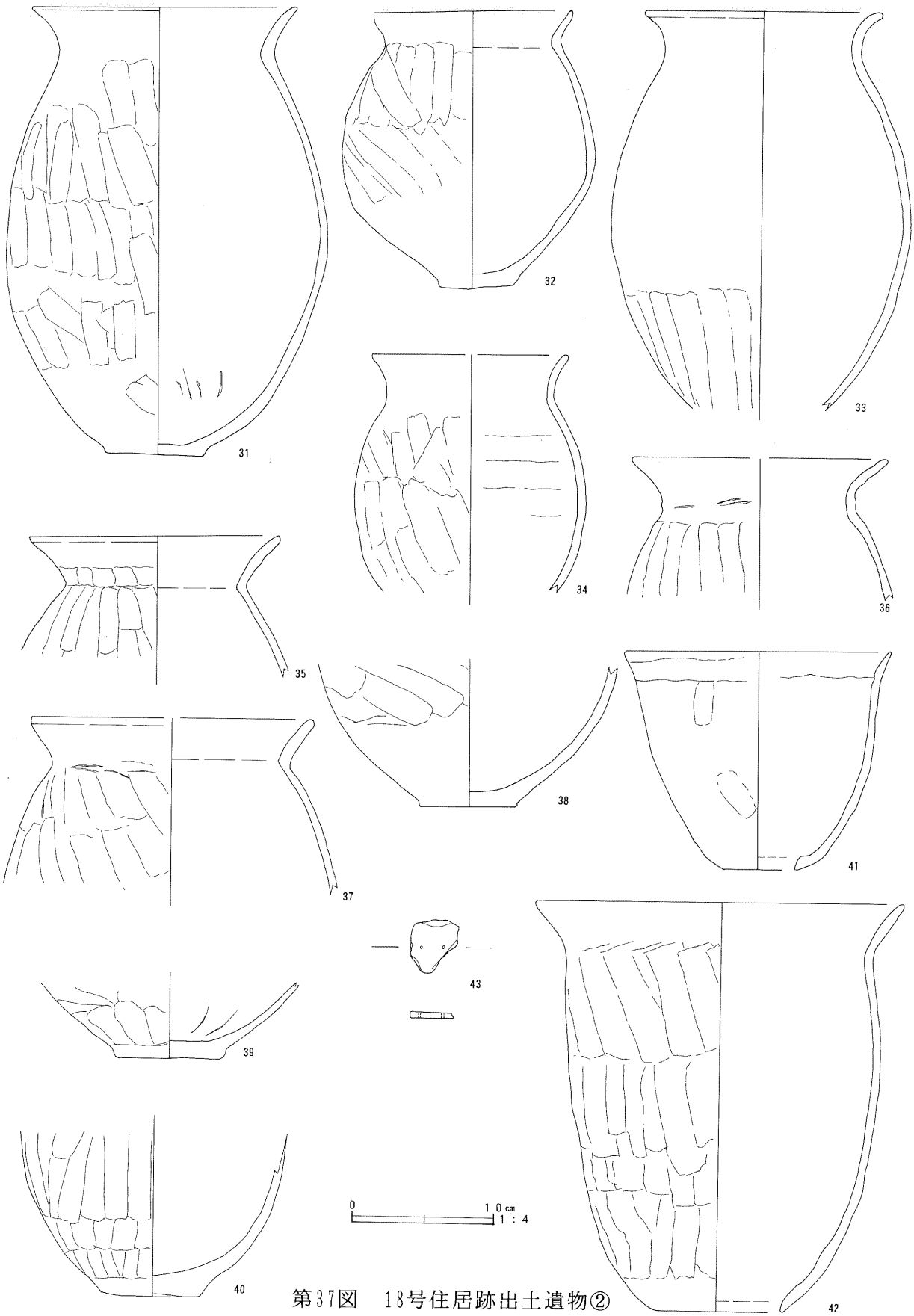
第34図　18号住居跡



第35図　18号住居跡カマド及び遺物出土状況



第36図　18号住居跡出土遺物①



第37図　18号住居跡出土遺物②

第１９表　１８号住居跡出土遺物観察表　（第36・37図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１３．１） 器高 底径　３．１	①④ ③ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	１／３	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内面に炭化物付着。
2	土師器杯	口径（１５．４） 器高 底径	③④ ② ①	②	橙 (2.5YR6/8)	１／２	内外面剥離。
3	土師器杯	口径　１４．６ 器高　６．８ 底径	③ ① ④	②	橙 (2.5YR6/8)	１／２	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
4	土師器杯	口径　１３．１ 器高　６．０ 底径	③ ① ②	①	橙 (5YR　6/6)	完　形	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 朱塗。
5	土師器杯	口径（１４．８） 器高 底径	③④ ② ①	②	橙 (2.5YR6/8)	１／３	内外面剥離。
6	土師器杯	口径　１３．０ 器高　６．３ 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR　6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。黒斑。
7	土師器杯	口径　１２．７ 器高　６．４ 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR　6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
8	土師器杯	口径（１３．０） 器高 底径	③ ① ②	②	橙 (5YR　6/6)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 内外面吸炭。
9	土師器杯	口径　１３．１ 器高　５．９ 底径	① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 内外面吸炭。
10	土師器杯	口径　１２．５ 器高　６．４ 底径	③ ④ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
11	土師器杯	口径　１２．２ 器高　５．１ 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR　6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 二次火熱。
12	土師器杯	口径　１３．０ 器高　５．１ 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。外面に籾圧痕。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
13	土師器杯	口径（１２．２） 器高　６．２ 底径	③ ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	１／３	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
14	土師器杯	口径　１３．０ 器高　６．０ 底径	②④ ③ ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
15	土師器杯	口径　１２．２ 器高　５．７ 底径	② ① ③	②	橙 (7.5YR6/6)	完　形	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面は剥離。 内外面に黒斑。
16	土師器杯	口径　１２．４ 器高　５．８ 底径	③④ ① ②	②	にぶい橙 (5YR　6/4)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面横ナデ、外面ケズリ。 朱塗。
17	土師器杯	口径　１２．７ 器高　５．７ 底径	①④ ② ③	①	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面横ナデ、外面ケズリ。
18	土師器杯	口径　１２．０ 器高　５．１ 底径	③ ① ②	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面ケズリの後ナデ。 布目痕。朱塗。
19	土師器杯	口径（１３．２） 器高 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR　7/6)	１／３	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ。外面ケズリの後ナデ。 黒斑。
20	土師器杯	口径（１７．８） 器高 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ。外面ケズリの後ナデ。
21	土師器杯	口径　１２．８ 器高　６．３ 底径	③ ①	①	明赤褐 (2.5YR5/6)	３／４	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ。外面ケズリの後ナデ。
22	土師器高杯	口径　１５．５ 器高　１２．０ 底径（１１．３）	③④ ① ②	①	橙 (2.5YR6/8)	１／２	杯部横ナデ。底面ナデ。 脚部内面放射状ナデ付け、外面ナデ。 裾部横ナデ。内外面煤付着。ホゾ接合。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
23	土師器 高杯	口径 15.7 器高 底径	①④ ③ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	裾部欠	杯部横ナデ。底面ナデ。内面全面朱塗。 脚部縦のケズリの後ナデ。内面ナデ付け。 外面吸炭。
24	土師器 坩	口径 器高 底径	② ③ ①	②	橙 (5YR 6/8)	胴部上半のみ	内外面ナデ。内面に接合痕。
25	土師器 坩	口径（13.2） 器高 10.0 底径	③ ① ②	②	橙 (2.5YR5/6)	1／3	口縁部横ナデ。 胴部内外面ナデ。 二次加熱。
26	土師器 坩	口径（14.6） 器高 底径	②	②	橙 (7.5YR6/6)	1／3	内外面木口状工具によるナデ。 炭化物付着。 内面に種子圧痕。
27	土師器 坩	口径（19.2） 器高（20.0） 底径	③ ② ①	②	橙 (2.5YR6/8)	1／4	口唇部横ナデ。口縁部内面横ナデ、外面縦のナデ。胴部内面横のナデ、外面横のケズリ。 朱塗。
28	土師器 壷	口径（19.0） 器高 底径	③④ ① ②	①	明赤褐 (2.5YR5/8)	口縁部1／3	口縁部横ナデ（2段）。
29	土師器 甕	口径 10.1 器高 11.5 底径 5.5	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	完形	口縁部内面ナデ、外面刷毛目。 胴部内面横のナデ、外面刷毛目、底面ケズリ。 口縁と胴部の接合痕が外面に顕著である。
30	土師器 甕	口径（13.2） 器高 底径（5.0）	①④ ③ ②	②	明赤褐 (10YR 6/6)	1／4	内外面木口状工具によるナデ。 内外面炭化物付着。
31	土師器 甕	口径 18.5 器高 31.5 底径 7.0	③④ ② ①	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ、下半斜のケズリ。底面ケズリ。内外面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
32	土師器 甕	口径 14.1 器高 19.8 底径 5.3	① ③ ⑥	②	赤 (10R 5/6)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。底面ケズリ。内面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。
33	土師器 甕	口径 16.8 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／2	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ、外面ケズリの後ナデ。内外面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。
34	土師器 甕	口径 14.0 器高 底径	①② ⑤ ③	③	赤褐 (2.5YR4/8)	上半 1／2	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ。輪積痕有り。外面縦のケズリの後ナデ。 内外面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
35	土師器 甕	口径 17.7 器高 底径	① ② ③	③	橙 (7.5YR7/6)	上半のみ	口縁部横ナデ。 胴部内面ケズリ様ナデ、外面縦のケズリ。 内外面吸炭。
36	土師器 甕	口径 18.0 器高 底径	①④ ② ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	上半のみ	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ、内外面一部吸炭。 二次加熱。
37	土師器 甕	口径（20.0） 器高（29.3） 底径	②③ ① ④	②	にぶい橙 (5YR 7/4)	上半 1／2	№39と同一個体か。口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 内外面一部吸炭。
38	土師器 甕	口径 21.2 器高 底径 7.0	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	下半	胴部内面ナデ、外面横のケズリの後ナデ。 底面ケズリ。内外面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。
39	土師器 甕	口径 器高（29.3） 底径 7.6	②③ ① ④	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	底部	胴部内面ナデ、外面横のケズリ。 底面ナデ付け。 内外面吸炭。外面黒斑。
40	土師器 甕	口径 器高 底径 7.3	① ③ ④	③	赤 (10R 5/6)	下半	胴部内面横のケズリ様ナデ、外面縦のケズリ。 内面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。
41	土師器 甑	口径 18.9 器高 14.8 底径 4.8	① ③ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横のナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 二次加熱。
42	土師器 甑	口径 25.7 器高 29.0 底径 8.8	① ③ ④	①	橙 (5YR 6/6)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 外面黒斑。孔の内面横のケズリ。
43	双孔 円板	長さ 3.4 幅 3.3 厚さ 0.5					未製品。滑石製。

19号住居跡（第38図・39図）

X－4グリッドに位置し、4号溝、5号溝、54号土坑と重復している。

重復する全ての遺構は、本住居跡上層の明黄褐色粘土層の上部を掘り込んでおり、明らかに本跡より新しいといえる。

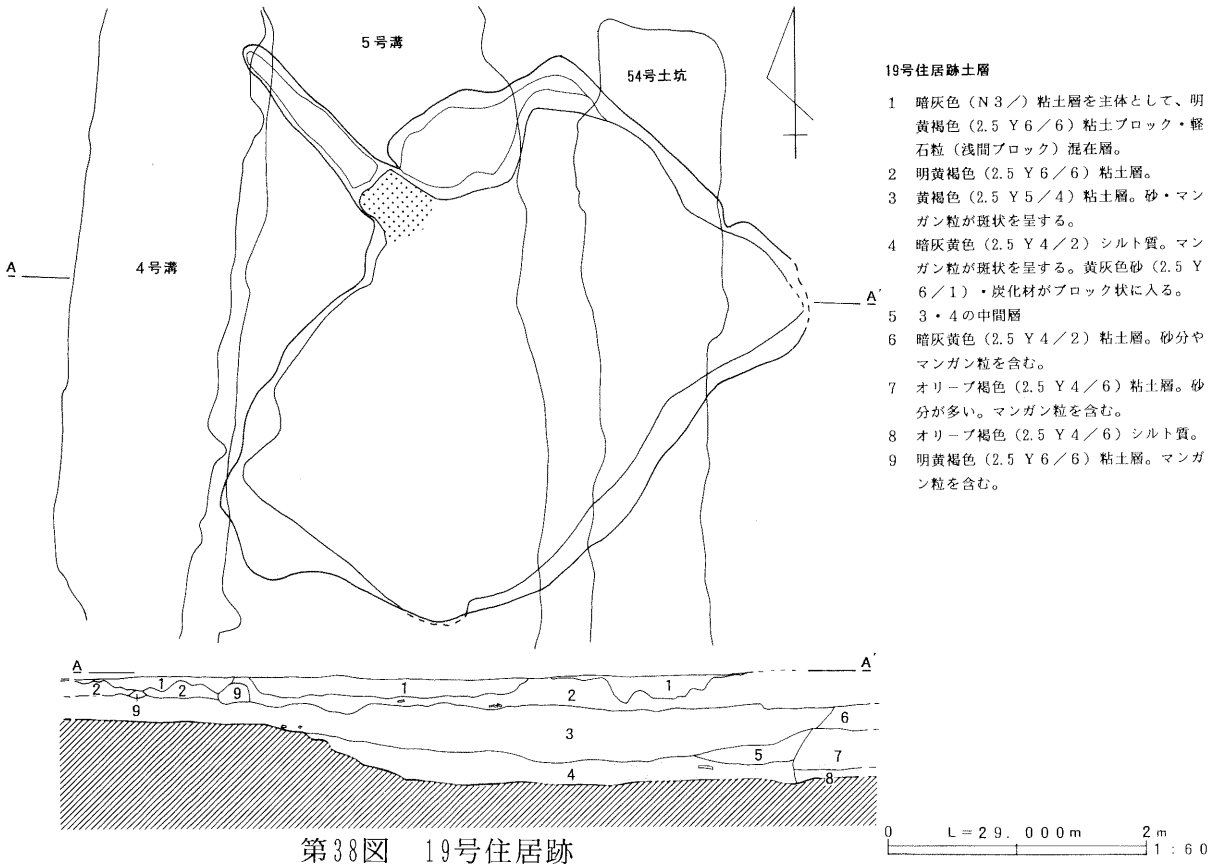
北西辺4.48m、南西辺2.10m、東南辺4.08m、北東辺2.92mを測る。隅が丸味をもち、長方形を主体とした不整形を呈している。主軸方位はN－46°－Wを示す。

本住居跡の覆土は、マンガン粒が班状に入り、さらに黄灰色砂・炭化材が混入した暗灰黄色シルト層であり、上層には同様の含有物をもつ黄褐色粘土層（第6層との区別がつきにくく、含有物量の差で分層）が堆積している。このうち暗灰黄色シルト層は投入上の特徴を示し、本住居廃棄後、多量の土器群と共に投棄されたものと判断された。

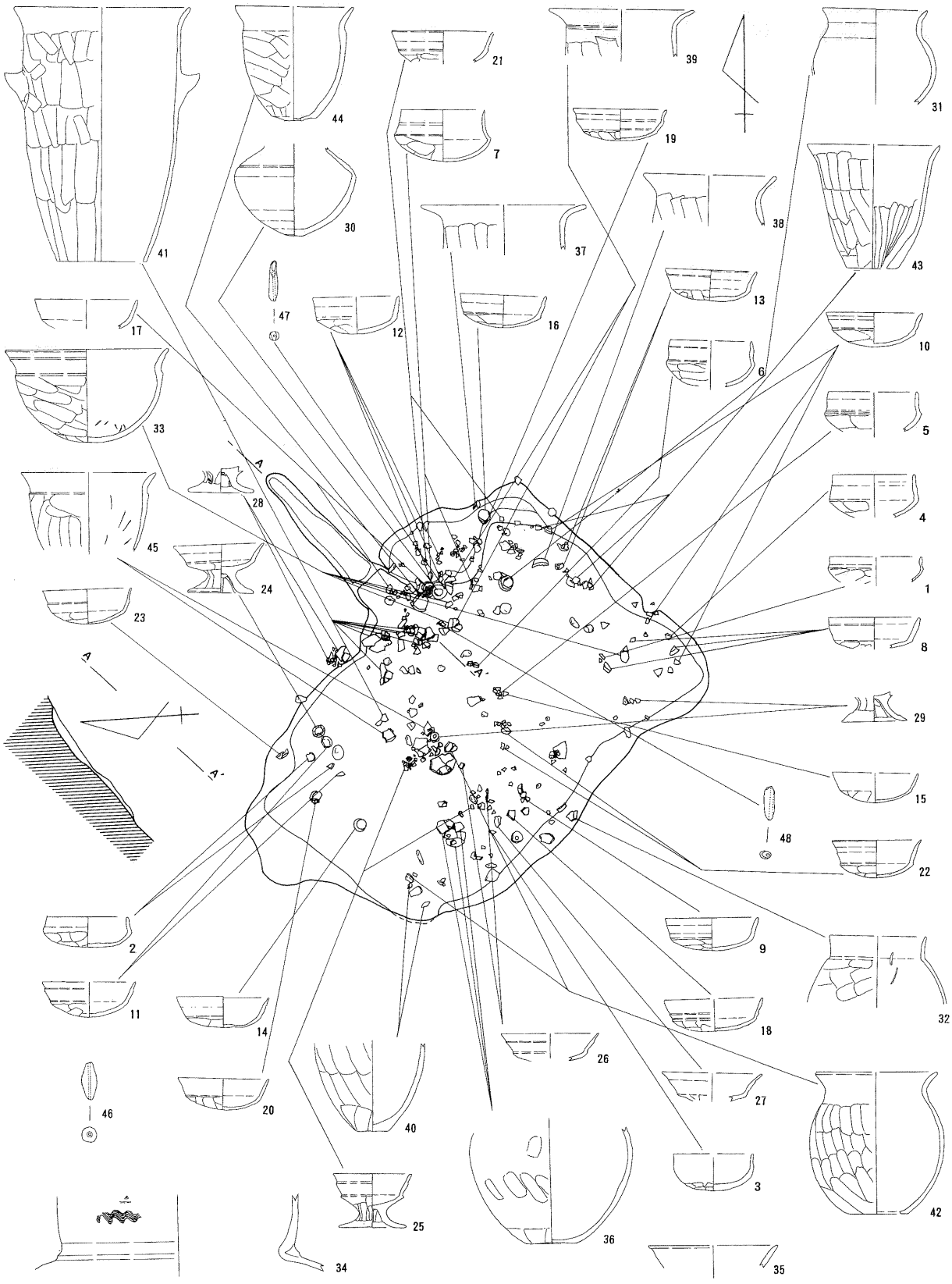
床面は緩い凹面を呈し（特に北西壁は、直立しない）安定していない。

カマドは北西辺中央やや北寄りに設置されており、袖は住居内に張り出さず、全て壁外に設けられている。燃焼部は、幅42cm、奥行47cmの箱形を呈し、火床は水平面を成して焼土化し、大量の炭化材・灰をのせている。この燃焼部から段差をもって煙道部へ移行する。煙道部は燃焼部側の幅30cmから煙出し部幅20cmに向けて、徐々に幅を狭めていく。底面は緩斜面を成して上昇し、煙出し部で急斜面を成している。段差から最奥部までの長さは1.50mを測る（全体では2mの長さに達する）。

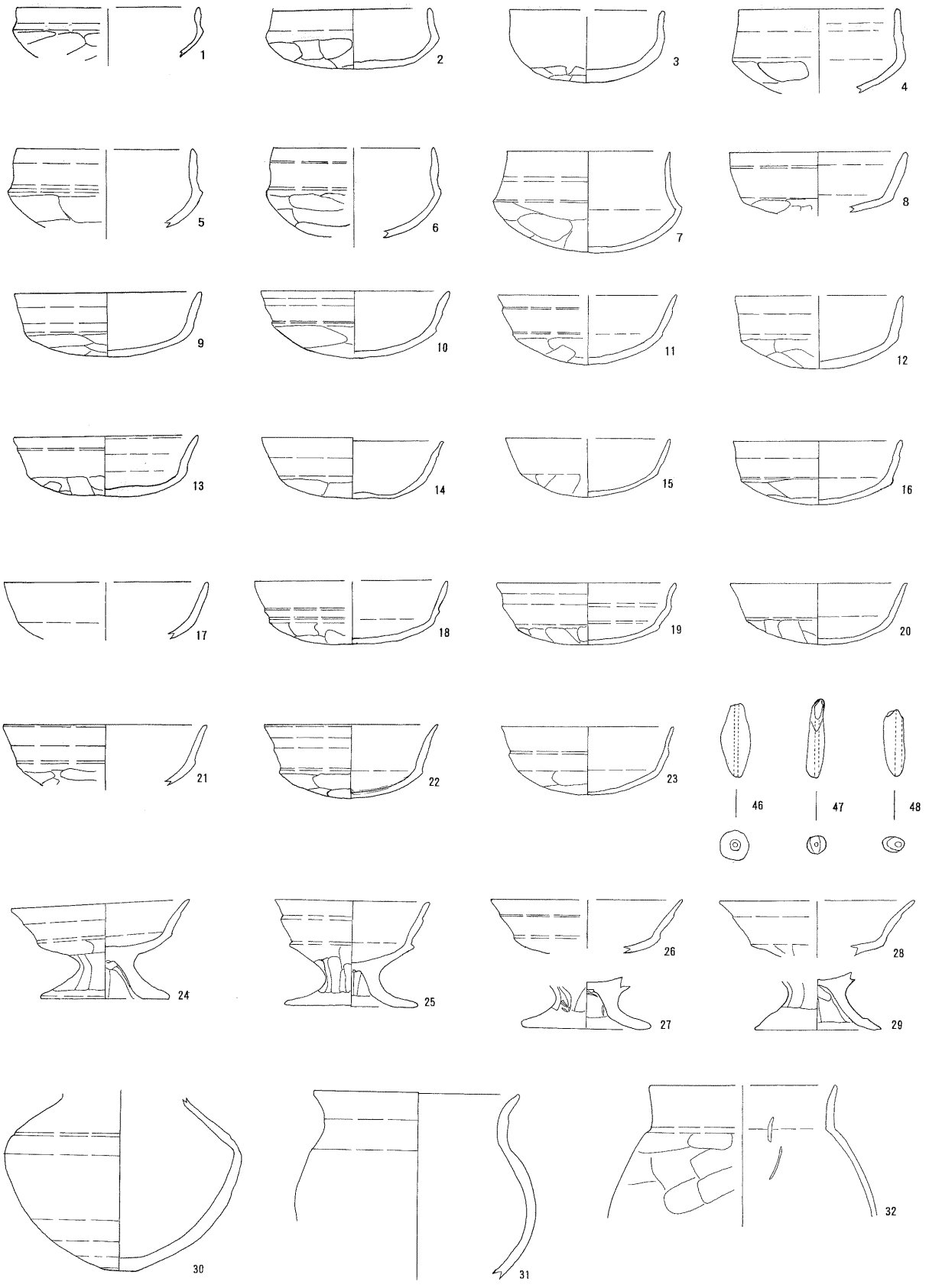
遺物は、北から南にかけて一括投入された状況を呈し、須恵器壷・甕、土師器杯・高杯・鉢・甕・甑・土錘等、大量に出土している。



第38図　19号住居跡

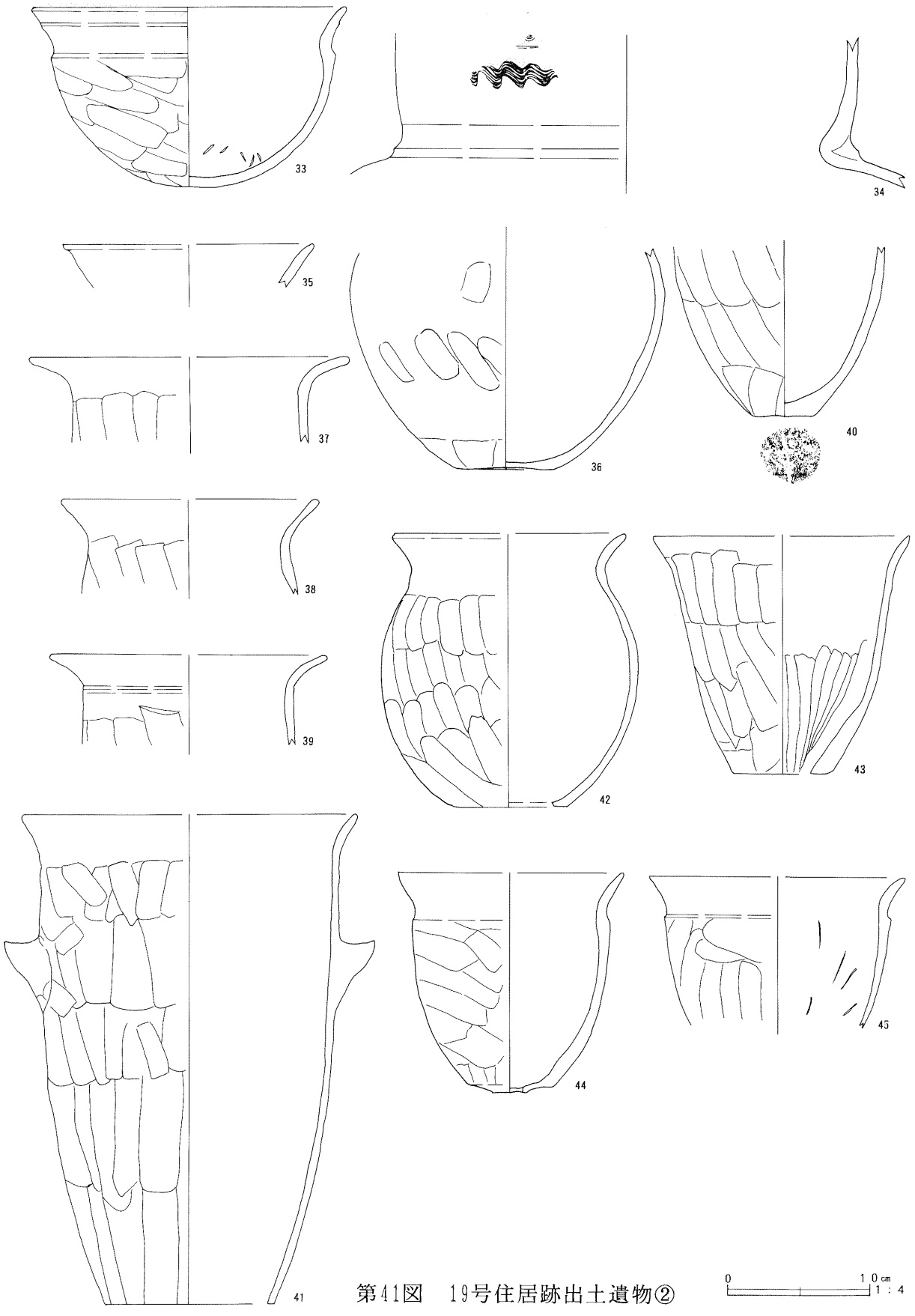


第39図　19号住居跡カマド及び遺物出土状況



第40図　19号住居跡出土遺物①

0　10cm
1：4



第41図　19号住居跡出土遺物②

0　10cm
1：4

第２０表　１９号住居跡出土遺物観察表　（第40・41図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１２．６） 器高 底径	④③ ② ①	②	橙 (5YR　6/6)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。
2	土師器杯	口径　１０．６ 器高　　４．２ 底径	②③ ① ④	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
3	土師器杯	口径　１０．８ 器高　　５．０ 底径	④② ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	一部欠	体部外面ケズリ、他は全てナデ。 内外面黒斑。
4	土師器杯	口径（１１．０） 器高 底径	①③ ② ④	②	赤褐 (2.5YR4/6)	１／３	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面煤付着。
5	土師器杯	口径（１２．２） 器高 底径	②① ④ ③	②	にぶい赤褐 (5YR　4/3)	１／４	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
6	土師器杯	口径（１１．０） 器高 底径	④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	１／４	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
7	土師器杯	口径　１１．４ 器高　　７．０ 底径	②④ ①⑥ ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	一部欠	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横の磨き様ナデ、外面ケズリ。 内外面黒斑。
8	土師器杯	口径　１２．２ 器高 底径	②	②	灰褐 (7.5YR5/2)	３／４	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。
9	土師器杯	口径　１２．８ 器高　　４．４ 底径	② ① ④	②	灰白 (10YR 8/2)	３／４	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
10	土師器杯	口径　１３．２ 器高　　４．６ 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	１／２	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
11	土師器杯	口径　１２．２ 器高　　４．８ 底径	② ① ④	②	灰白 (10YR 7/1)	一部欠	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面一部吸炭。外面黒斑。
12	土師器杯	口径（１１．５） 器高　　５．０ 底径	②④ ①⑥ ③	②	赤褐 (2.5YR4/8)	１／５	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
13	土師器杯	口径　１２．８ 器高　　４．１ 底径	②④ ③ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
14	土師器杯	口径　１２．７ 器高　　４．２ 底径	② ③	②	橙 (5YR　7/8)	完　形	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。
15	土師器杯	口径（１１．２） 器高　　４．０ 底径	④ ③ ①	②	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	１／３	口縁部表面剥離。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。外面黒斑。
16	土師器杯	口径　１１．７ 器高　　５．４ 底径	② ③ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	完　形	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内外面一部吸炭。外面に黒斑。
17	土師器杯	口径　１４．１ 器高 底径	④ ① ③	③	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	１／２	口縁部横ナデ。体部内面横のナデ、外面ケズリ。剥離部分が多い。 内外面吸炭。外面黒斑。
18	土師器杯	口径（１３．６） 器高　　４．４ 底径	④③ ② ①	②	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	１／３	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面磨き様ナデ、外面ケズリ。
19	土師器杯	口径　１２．２ 器高　　４．２ 底径	④② ① ③	②	橙 (7.5YR6/6)	２／３	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面一部吸炭。
20	土師器杯	口径　１１．２ 器高　　４．２ 底径	① ③ ④	②	橙 (5YR　6/6)	２／３	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 体部外面煤付着。他面に吸炭。
21	土師器杯	口径（１４．０） 器高 底径	②④ ③ ①	②	橙 (5YR　7/6)	１／６	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内面煤付着。二次加熱。
22	土師器杯	口径　１２．２ 器高　　５．０ 底径	② ① ④	②	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	１／２	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。
23	土師器杯	口径　１３．８ 器高　　４．７ 底径	② ④	③	浅黄橙 (10YR 8/3)	１／２	口縁部横ナデ（２段）。体部内面ナデ、外面ケズリ。内外面吸炭。外面黒斑。 内面烈点状剥離。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
24	土師器 高杯	口径 12.4 器高 7.0 底径 9.1	②④ ③ ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	杯口縁部横ナデ（2段）。体部内面ナデ。 外面横のケズリ。脚部にかけて縦のケズリ。 脚部裾横ナデ、脚部内面横の連続ケズリ。
25	土師器 高杯	口径（10.7） 器高 7.3 底径 9.1	③ ① ④	②	橙 (2.5YR6/8)	2／3	杯口縁部横ナデ（2段）。体部内面ナデ。 外面横のケズリ。脚部にかけて縦のケズリ。 脚部裾横ナデ、脚部内面横の連続ケズリ。
26	土師器 高杯	口径 13.2 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	杯部 1／3	No.27と同一個体か。 口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面剥離。
27	土師器 高杯	口径 器高 底径 9.0	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	脚部 のみ	No.26と同一個体か。外面杯部にかけて縦のケズリ。裾横のナデ。内面横の連続ケズリ。 内面黒斑。
28	土師器 高杯	口径 13.4 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (5YR 5/6)	杯部 1／4	No.29と同一個体か。口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面横のケズリ。
29	土師器 高杯	口径 器高 底径 8.6	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	脚部 のみ	No.28と同一個体か。外面杯部にかけて縦のケズリ。裾横ナデ。 内面横の連続ケズリ。
30	須恵器 壺	最大径16.4 残高 12.0 底径	① ⑥	①	暗青灰 (5PB 3/1)	口縁部 欠	肩に一条の沈線。 上位ロクロ整形、下位回転ケズリ。
31	土師器 甕	口径 14.3 器高 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上半 のみ	口縁部横ナデ（3段）。 胴部内面横のナデ。炭化物付着。 外面剥離。二次加熱。
32	土師器 甕	口径（12.9） 器高 底径	②⑥ ① ④	②	黄灰 (2.5Y 4/1)	上半 1／6	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ。外面横～斜ケズリ。 全面吸炭。
33	土師器 鉢	口径 21.9 器高 12.6 底径	②④ ① ③	②	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	一部欠	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横～斜のケズリ。 全面に吸炭。
34	須恵器 甕	頸径 32.0 器高 底径	① ②	②	暗青灰 (5PB 4/1)	頸部 1／6	内面ナデ、外面ナデの後、櫛描波状文（2段・中間に一条の沈線）。胴部外面平行叩き。断面三角形の補強帯をもつ。
35	土師器 甕	口径 17.8 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	赤褐 (5YR 4/6)	口縁部 のみ	内外面横のナデ。煤付着。
36	土師器 甕	口径 器高 底径 7.0	③④ ②⑥ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	胴部 のみ	内面ナデ、外面斜のケズリの後ナデ。 吸炭、黒斑。
37	土師器 甕	口径（22.5） 器高 底径	①④ ②⑥ ③	②	明黄褐 (10YR 7/6)	上位 1／6	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜～縦のケズリ。 二次加熱。
38	土師器 甕	口径（18.2） 器高 底径	②③ ①⑥ ④	②	にぶい褐 (7.5YR6/3)	上位 1／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 二次加熱。
39	土師器 甕	口径（19.8） 器高 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上位 1／4	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。
40	土師器 甕	口径 器高 底径 4.2	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	下半 のみ	内面は褐灰（10YR5/1）。胴部内面ナデ、吸炭、外面斜～縦のケズリ。底部付近面取り状に斜のケズリ。木の葉底。二次加熱。
41	土師器 甑	口径（23.5） 器高 34.5 孔径（11.8）	②⑥ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	4／5	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。煤付着。 角状把手。孔底水平のケズリ。
42	土師器 甑	口径（16.4） 器高（19.2） 底径（8.0）	② ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	1／5	甕の転用甑。口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。底部付近、一部横のケズリ。 底を欠いた後孔に整形。孔径6.0。
43	土師器 甑	口径（18.2） 器高 16.7 底径 7.0	②③ ④ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	2／3	口縁部横ナデ。胴部内面上位ナデ、下位放射状ナデ。外面縦のケズリ。 底面ケズリ。外面黒斑。孔径4.2。
44	土師器 甑	口径（5.8） 器高 15.5 底径 6.0	①② ④⑥ ③	②	暗赤褐 (5YR 3/2)	1／2	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜～横のケズリ。底面ケズリ。穿孔後外面からの調整なし。全面吸炭。孔径2.2。
45	土師器 甑	口径 18.0 器高 底径	③⑥ ① ②	②	橙 (2.5YR6/8)	上半 1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面上位横、下位縦のケズリ。 一部吸炭。
46	土錘	最大径 2.1 長さ 5.2 孔径 0.3				完形	

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
47	土　錘	最大径　1．3 長さ　5．4 孔径　0．3				完　形	
48	土　錘	最大径　1．5 残存長　4．7 孔径　0．4				2／3	

20号住居跡（第42図）

X－4からY－4グリッドにわたって位置している。カマドの煙道部が4号溝と重復している。

4号溝覆土除去後、本住居跡カマド煙出しプランが確認されており、本跡が4号溝より古いとされる。

東辺4.10m、北辺2.42m、西辺3.66m、南辺2.00mを測る。平面形は長方形を呈すると思われるが隅は全て丸く、不整形といわざるを得ない。主軸方位はN－102°－Eを示す。

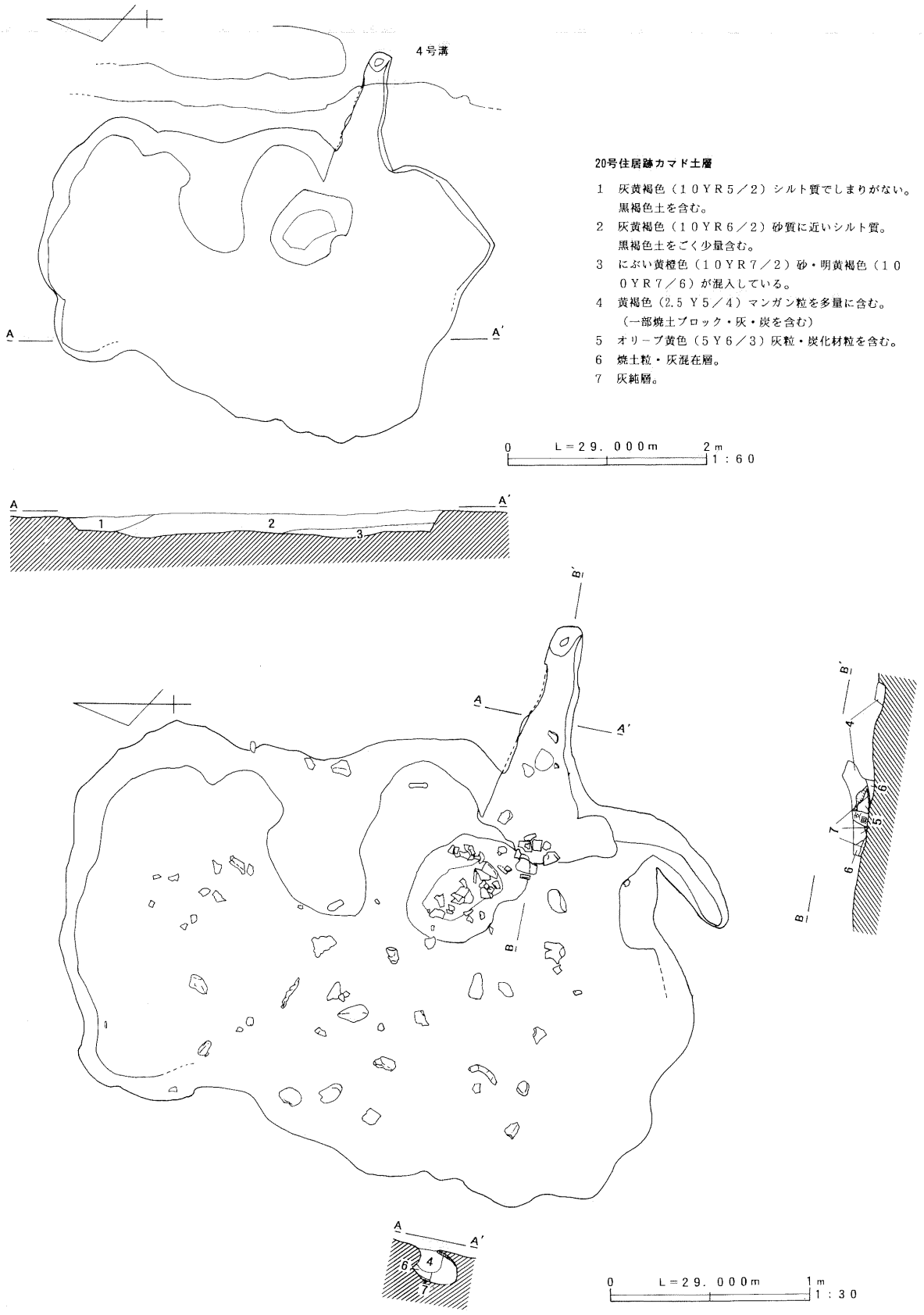
床面は摺鉢状を呈し、特に西側では、壁と床面に括れが見出せないほどである。カマド左前には60×43cm、深さ25cmのピットが穿たれ、カマドと連続する焼土粒・灰混在層と共に甕（No.4）が出土している。

カマドは、東壁南隅寄りに設置されている。住居内に張り出さず、全て壁外に位置する。燃焼部は前面幅95cm、奥幅52cm、奥行1.00mを測り、平面台形を呈する。前面から50～70cmの中央部には円錐形自然石が支脚として使用されていた。奥部から段をもって煙道に移行しているが、明瞭な稜はみられず、緩やかに上昇する。そして、一旦水平になった後、最奥部でほぼ垂直に立ち上る。煙道部は幅20cm前後で平面形は少し蛇行しているようである。また、残存していた天井から、燃焼部奥では31cmあった高さが、煙道部では20cmとなり、煙出し部に至ると10cmとなっていたことがわかる。本カマドの全長は1.98mを測る。

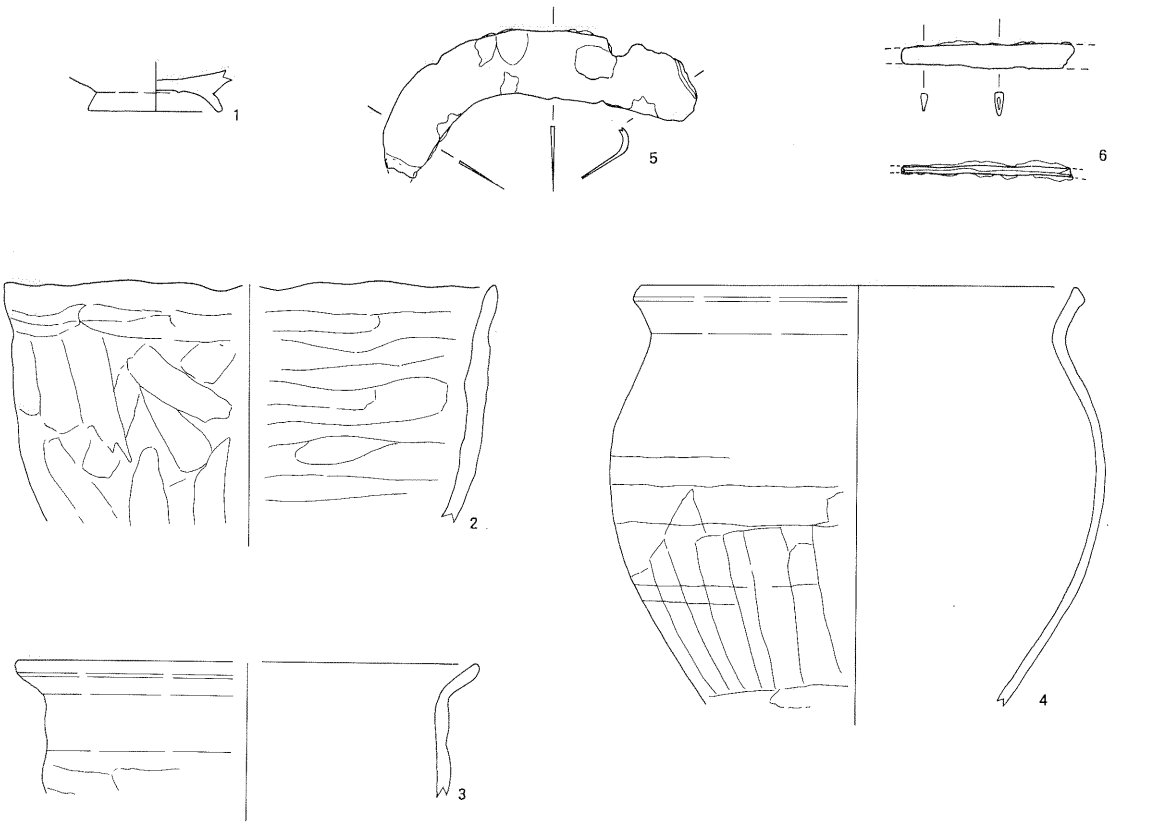
遺物は、カマド前ピットを中心として、ほぼ全面から手捏様鉢、土師器甕、内黒高台杯の土器、鉄製刀子・曲刀鎌の他、煤の付着した8×15cm大礫が多量に出土している。礫は平坦面をもっており、磨滅はみられるものの、擦痕はみられない。

第21表　20号住居跡出土遺物観察表　（第43図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質 高台椀	口径 器高 底径　7．0	③ ②	②	浅黄橙 （7.5YR8/4）	底　部 の　み	内黒。 底面糸切り後付け高台。
2	土師器 鉢	口径（26．2） 器高 底径	①⑥ ② ③	②	褐灰 （5YR　4/1）	上　半 1／3	内面及び口縁外面は、指頭によるナデ。 胴部外面ケズリ。 全面吸炭。
3	土師器 甕	口径（24．6） 器高 底径	③ ④ ①	②	浅黄橙 （7.5YR8/4）	上　位 1／8	口縁部横ナデ。口唇部横ナデ付加。 胴部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 一部吸炭。
4	土師器 甕	口径　23．0 器高 底径	②⑥ ① ④	②	にぶい黄橙 （10YR 7/3）	4／5	口縁部横ナデ。口唇部横ナデ付加。 胴部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 一部吸炭。外面に輪積痕残る。 内面一部炭化物付着。
5	曲刃鎌						
6	刀　子	長さ　9．1 刃部幅　1．3 茎部幅　1．0					



第42図　20号住居跡及びカマド付近遺物出土状況



第43図　20号住居跡出土遺物

21号住居跡（第44図・45図）

Ｘ－５からＹ－５グリッドにわたって位置している。南西隅は、22号住居跡カマドと重復する。

22号住居跡は、本住居跡覆土のマンガン粒を多量に含む浅黄色シルト層を掘り込んでおり、本跡より新しいといえる。

東西5.12m、南北3.90m、を測り、平面長方形を呈する。主軸方位はＮ－86°－Ｅを示す。

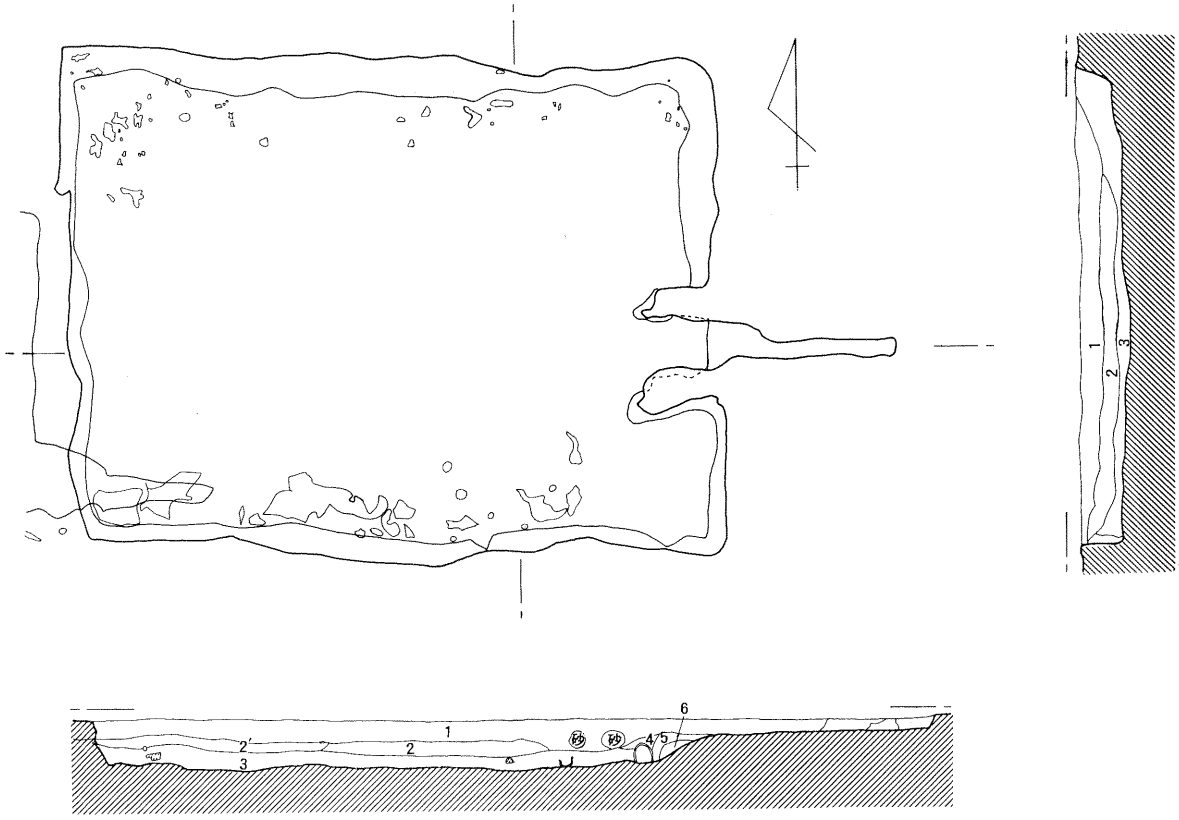
覆土は、包含される砂とマンガン粒の多少によって分層されるが、大差ない。しかし、最下層は砂・マンガン粒共に多量になり、一部ピンク状を呈する砂（第44図中細線内）が壁直下に多く堆積している。

床面は、起伏はあるものの、やや固く安定している。

カマドは、東辺中央やや南寄りに設置されている。両袖が70cm程床上に張り出し、幅48cm、奥行60cm、平面方形の燃焼部を形成している。中央部には土師器杯３枚（No.２・４・７）、椀（No.９）が重ねられて支脚となり、うえに甕（No.12）が乗せられていた。また前面には杯（No.１）、甕（No.13・14）が、右袖上には杯（No.５・６）、右袖脇からは小型甕（No.10）と小型甑（No.17）が入子状に組まれたまま出土している。燃焼部床はほぼ水平であるが、煙道部は緩斜面となって上昇する。1.20m奥で急斜面となり、屋外へ達する。煙道部幅は、13cm程、高さは９cm前後である。本

カマドの全長は、2.55mを測る（火床は、両袖より48cm前まで及んでいる）。

遺物は、前記の他、No.10・17の南で杯（No.3）、甕（No.15・16）、甑（No.18）が、カマド前面では椀（No.8）、カマド北では壷（No.11）が出土している。全て土師器である。



21号住居跡土層

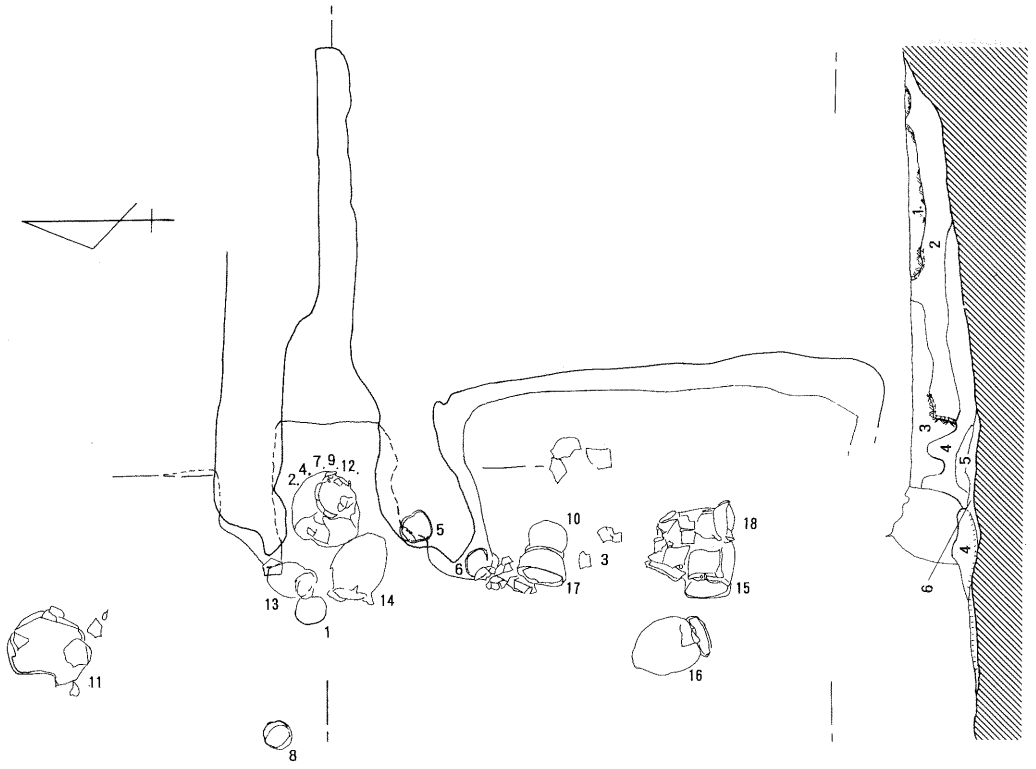
1　浅黄色（2.5 Y 7／4）シルト質。マンガン粒を多量に含む。
2　1層と同様であるが砂分が多く、マンガン粒が少ない。
2´ 2層と同一であるが、砂がブロック状を呈する
3　2層よりさらに砂分が多くなる。マンガン粒が増す。
4　1層と同一であるが、炭化材を含む。
5　1層と同一であるが、灰を含む砂分が多い。
6　1層と同一であるが、焼土ブロック・灰を多く含む。

第44図　21号住居跡

0　L＝29.000m　2m
1：60

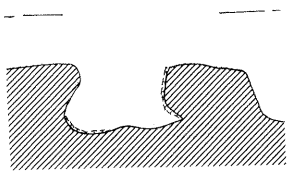
第22表　21号住居跡出土遺物観察表　（第45・46・47図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径 12.6 器高 5.1 底径	③④ ① ②	①	橙 (2.5YR6/6)	完形	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器杯	口径 12.2 器高 5.5 底径	② ③ ①	②	橙 (2.5YR6/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
3	土師器杯	口径 (12.4) 器高 底径	② ① ③	③	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／5	内外面烈点状剥離。 体部外面黒斑。
4	土師器杯	口径 (14.4) 器高 5.5 底径	③① ④ ②	①	明褐 (7.5YR5/6)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
5	土師器杯	口径 12.0 器高 4.8 底径	③ ①	②	赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	内外面烈点状剥離。 体部内面ナデ、外面黒斑。

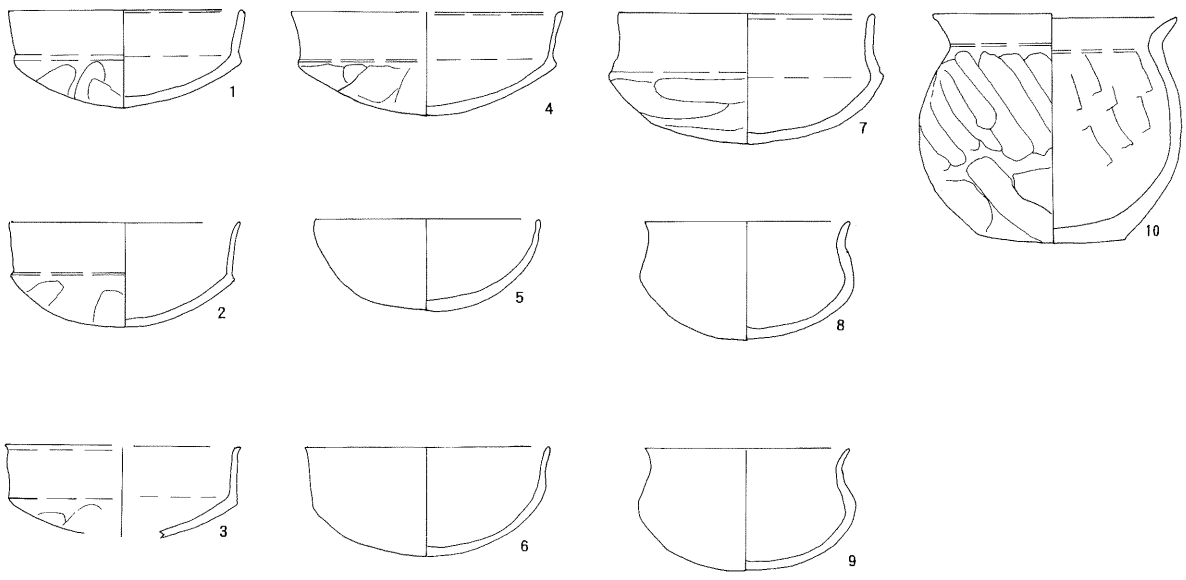


21号住居跡カマド土層

1　青灰色（5B5／1）シルト質。焼土ブロック・マンガン粒混在。一部天井部残存。
2　浅黄色（2.5Y7／4）シルト質。マンガン粒・灰含む。
3　1層とほぼ同一であるが2層が混在する。
4　灰・焼土・炭粒混在層。
5　灰色シルト質。マンガン粒含む。
6　純灰層。

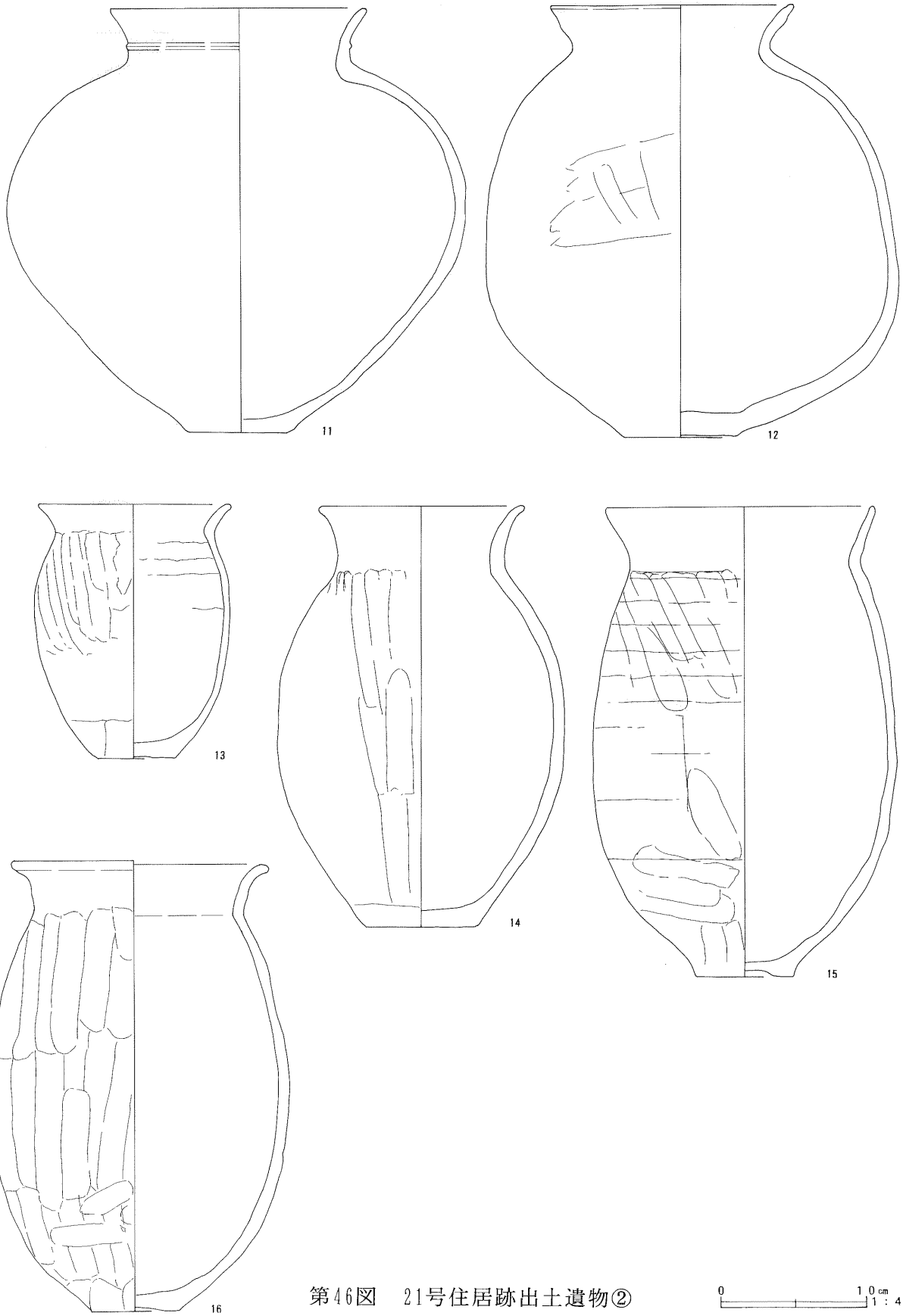


0　L＝29.000m　1m
1：30



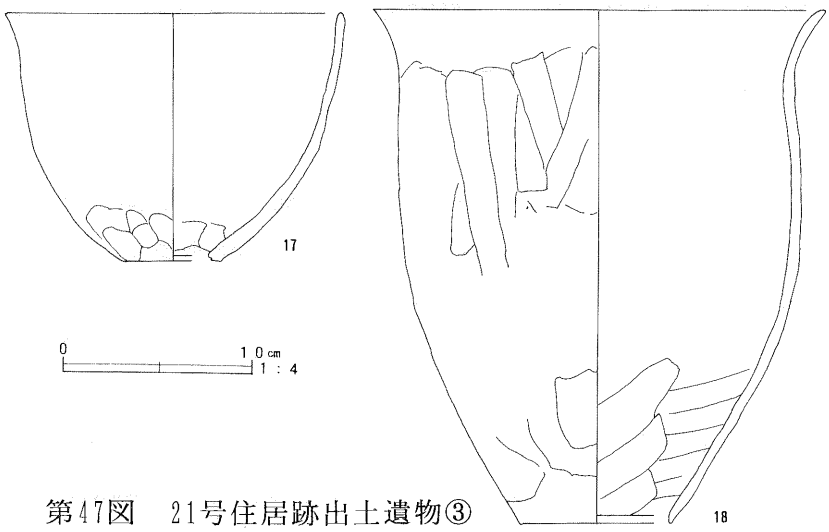
第45図　21号住居跡カマド及び遺物出土状況・出土遺物①

0　10cm
1：4



第46図　21号住居跡出土遺物②

0　10cm
1：4



第47図　21号住居跡出土遺物③

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
6	土師器 杯	口径 13.0 器高 5.7 底径	①④ ② ③	③	橙 (5YR 7/6)	完形	内外面烈点状剥離。 体部外面黒斑。
7	土師器 杯	口径 13.4 器高 6.9 底径	③ ② ①	①	橙 (5YR 6/6)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。
8	土師器 坩	口径 10.9 器高 6.2 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	完形	内外面烈点状剥離。 底部外面黒斑。
9	土師器 坩	口径 10.8 器高 6.9 底径	②④ ③ ①	②	橙 (5YR 6/6)	完形	外面及び口縁部内面剥離。 胴部内面ナデ、炭化物付着。 二次加熱。
10	土師器 甕	口径 13.0 器高 12.2 底径 7.8	③ ①	②	浅黄橙 (7.5YR8/3)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。底部付近横のケズリ。底面ケズリ。 黒斑。No.17甑と組み合って出土。
11	土師器 壷	口径（17.5） 器高 29.8 底径 7.0	① ② ③	②	橙 (5YR 6/8)	3／4	表面剥離。 外面黒斑。
12	土師器 壷	口径（16.9） 器高 25.0 底径 7.3	① ② ⑥	①	橙 (2.5YR6/6)	一部欠	口縁部横のナデ。胴部内面横のナデ。炭化物付着。外面上位ナデ、下位横のケズリ。全面吸炭。底面ケズリ。激しい二次加熱。
13	土師器 甕	口径 13.3 器高 17.6 底径 5.4	① ② ③	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。炭化物付着。外面縦のケズリ。底部付近横の面取り様ケズリ。底面ケズリ。黒斑。煤付着。
14	土師器 壷	口径 14.7 器高 29.6 底径 7.7	①③ ② ④	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2／3	口縁部横ナデ。胴部内面ケズリ様ナデ、外面ナデ。底面ナデ。 全面吸炭、煤付着。激しい二次加熱。
15	土師器 甕	口径 18.7 器高 32.9 底径 6.8	① ② ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、炭化物付着。外面斜のケズリ、下位横のケズリ。吸炭。煤付着。輪積痕残る。底部高台状ナデ。
16	土師器 甕	口径 17.9 器高 31.4 底径 6.0	② ① ③	②	赤橙 (10YR 6/8)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。底部付近横のケズリ。底部ナデ。 底面以外炭化物付着。二次加熱。
17	土師器 甑	口径 17.6 器高 13.0 底径 5.0	② ③ ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	口縁部横ナデ。胴部内外面ナデ。孔付近内外面横のケズリ。内面炭化物付着。 No.10甕と組み合って出土。孔径4.0 。
18	土師器 甑	口径 23.5 器高 27.0 底径 7.8	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	完形	口縁部横ナデ。胴部内面上～中位までナデ、下位横のケズリ。外面縦のケズリ。外面の底から上へ5.5 cmの個所に幅0.5 ～1 cmの吸炭リングがあり、それより上位に吸炭。 二次加熱。

22号住居跡（第48図・49図）

Y－6グリッドを中心にX－5、Y－5、X－6グリッドにわたって位置している。カマド部分が21号住居跡と、西側が23号住居跡と重復している。

本住居跡が21号・23号両住居跡を切断しており、3住居跡のうち最も新しいといえる。

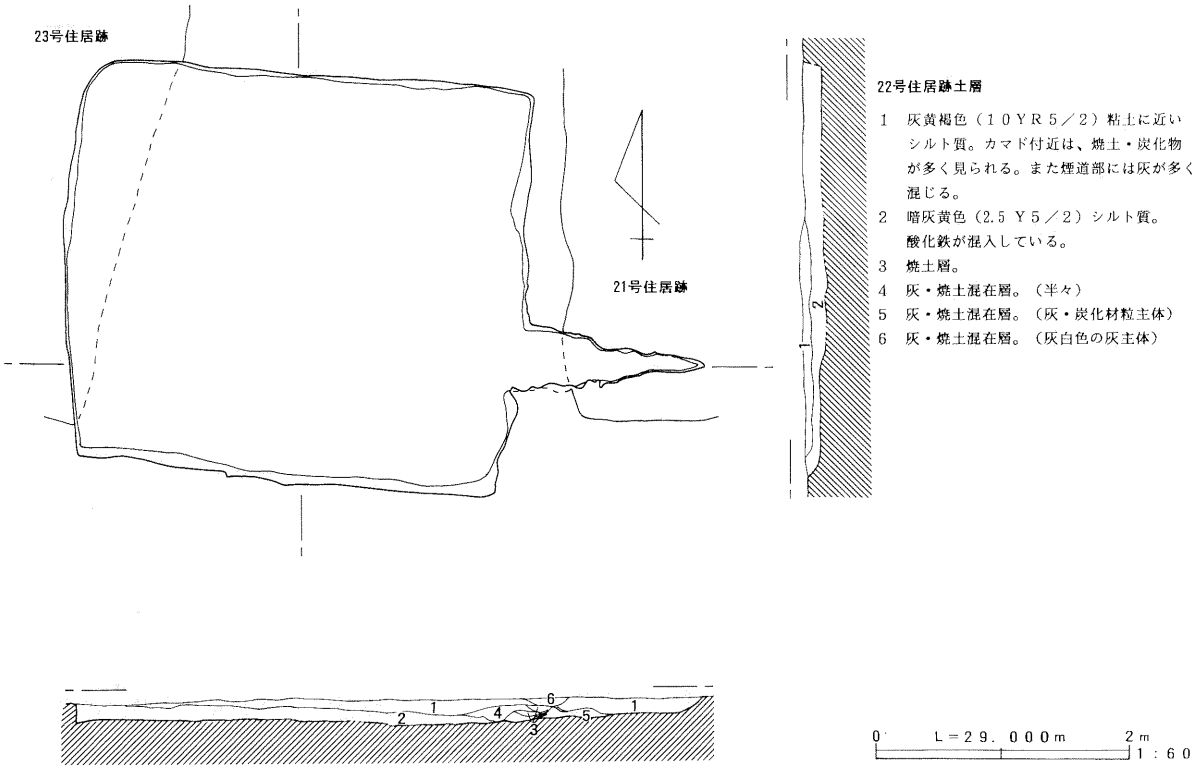
北辺3.50m、西辺3.18m、南辺3.32m、東辺3.20を測り、やや歪ながら平面正方形を呈すといえる。主軸方位はN－94°－Eを示す。

覆土は上層が、若干シルト化した灰黄褐色粘土層、下層が酸化鉄の混入した暗灰黄色シルト層である。

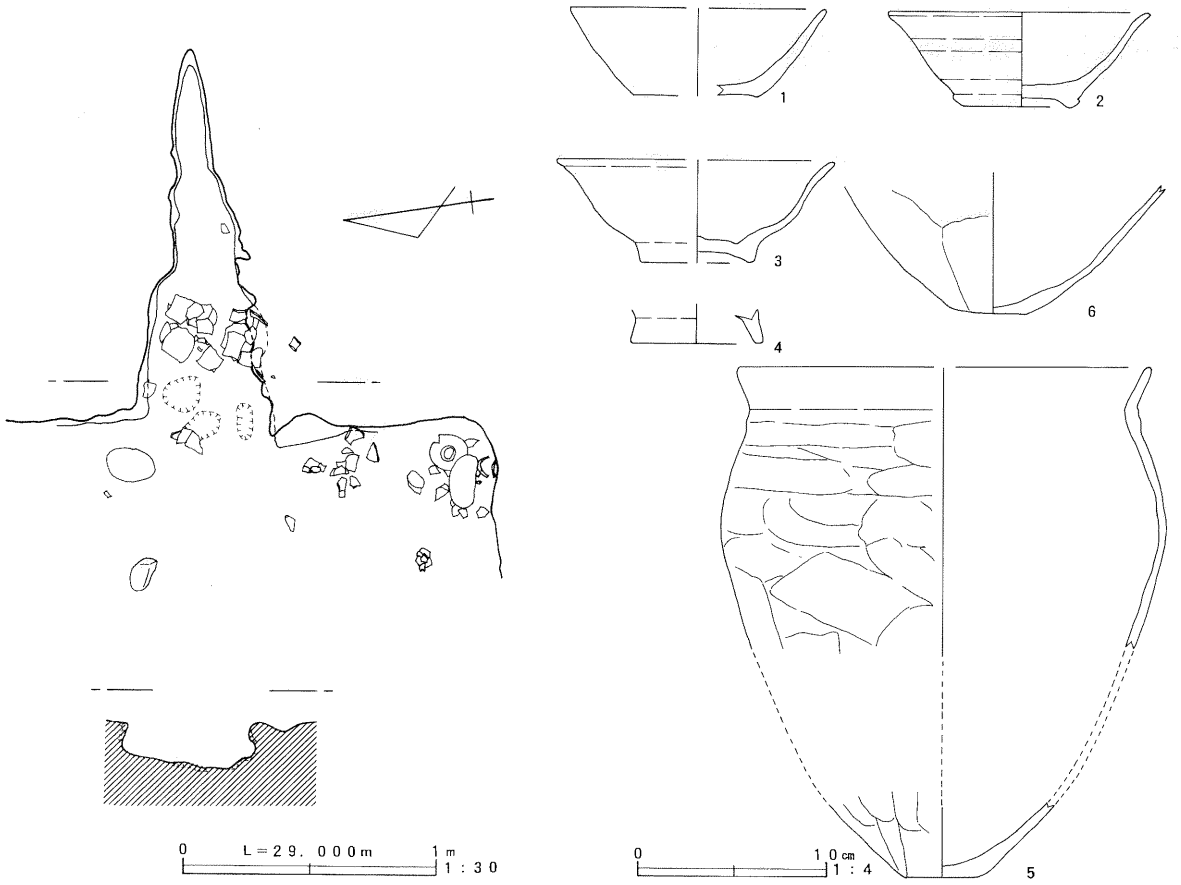
床面は、多少起伏はあるものの安定しており、他の施設は付属していない。

カマドは、東壁の南隅寄りに、全てを壁外に張り出して設置されている。燃焼部は前面幅52cm、奥幅40cm、奥行66cmの平面やや台形の長方形を呈している。中央よりやや北奥側には、自然石が立脚し、加熱によってヒビ割れしていた。周辺部には土師器甕（No.5）が出土している。煙道部入口は幅25cmであるが、奥に移行するに従って三角状に狭まる。床面は、火床から煙道にかけて段差をもたず、全体に緩斜面を成し、最奥部で急斜面となる。本カマドの全体長は1.56mを測る。また、カマド袖は、右（南）が長いが、カマド前から出土した円礫が2次加熱を受けており、左袖前面を成していた可能性が高い。

遺物は、この他土師質や須恵器の椀・高台椀・土師器等が、カマドから東南隅に集中して出土している。



第48図　22号住居跡



第49図　22号住居跡カマド遺物出土状況・出土遺物

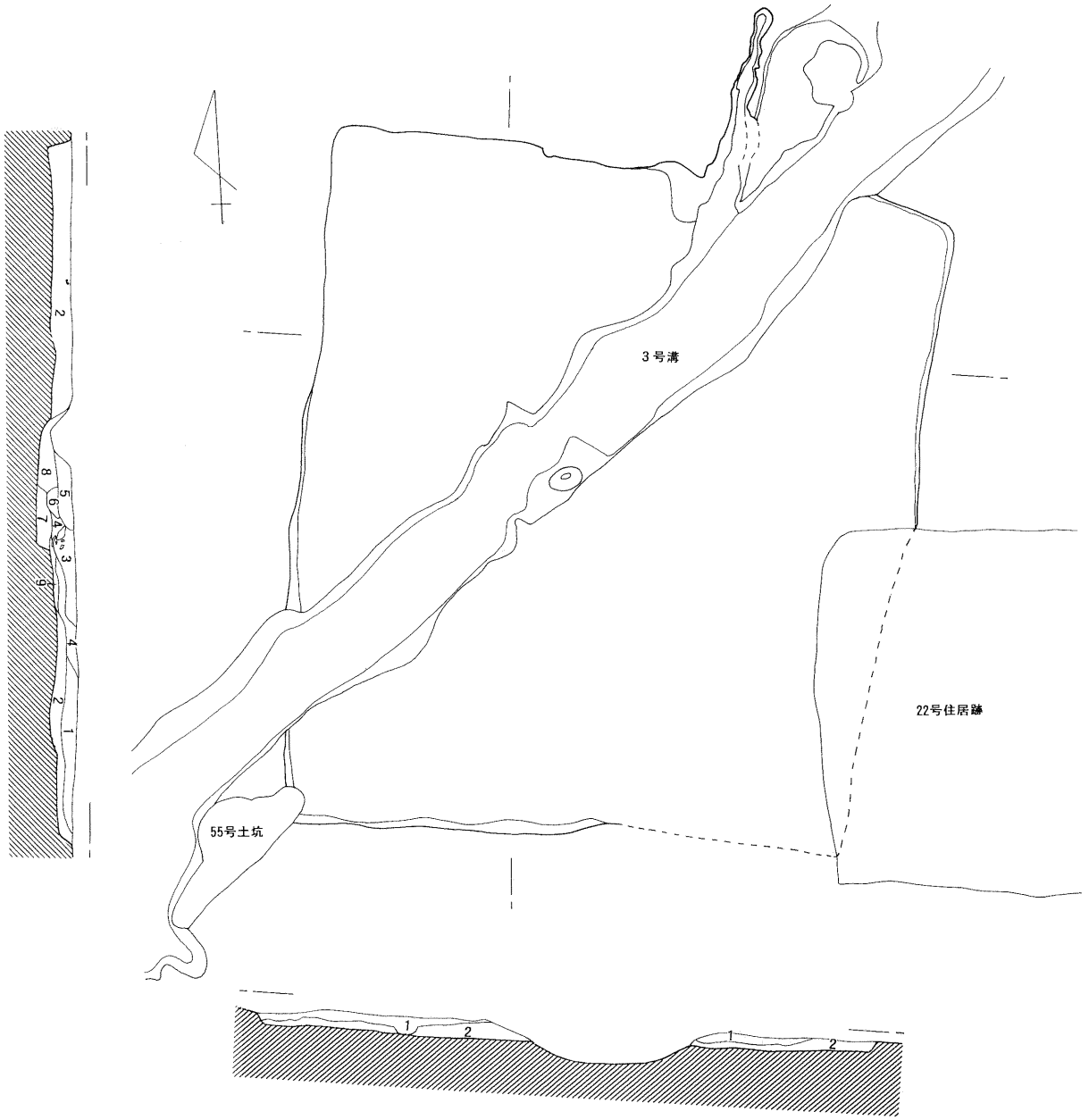
第23表　22号住居跡出土遺物観察表　（第49図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質杯	口径（13.6） 器高（4.6） 底径（6.7）	②④ ③ ①	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1／4	表面剥離。
2	須恵器高台椀	口径 13.8 器高 5.0 底径 5.1	① ②	③	灰白 (5Y 7/11)	一部欠	表面剥離。 糸切り後付け高台。
3	土師質高台椀	口径（14.6） 器高 5.4 底径 6.0	① ② ③	②	橙 (7.5YR6/6)	1／2	横ナデ。 糸切り後付け高台。 内外面炭化物付着。
4	須恵器高台椀	口径 器高 底径 7.1	② ① ③	③	灰白 (2.5Y 7/1)	高台部3／4	付け高台のみ。
5	土師器甕	口径（21.8） 器高（27.0） 底径 4.0	② ① ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	胴部中位欠	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面肩より上位横のケズリ、以下斜のケズリ。底部付近縦の面取り様ケズリ。底面ケズリ。 内外面一部吸炭。
6	土師器甕	口径 器高 底径 4.0	②④ ① ③	③	橙 (5YR 7/6)	底部のみ	胴部内面ナデ。外面は斜のケズリ。底部付近面取り様横のケズリ。底面ケズリ。 内外面吸炭。激しい二次加熱。

23号住居跡（第50図・51図・53図）

Ｘ－６グリッドを中心に、Ｙ－６グリッドにかけて位置する。南西隅から北東隅にかけて３号溝と、南西隅は55号土坑と、南東隅は22号住居跡と重復している。本住居跡は、いずれの遺構に切断されており、重復する中では一番古いといえる。

北辺5.55m、西辺6.22mを測り、やや不整なが



23号住居跡土層

1　黄褐色（５Ｙ７／６）粘土層。マンガン粒・砂粒を含む。
2　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）シルト層。マンガン粒（５㎜大）を多量に含む。
3　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）粘土。マンガン粒・炭化材粒を多量に含む。
4　２・３混在層。
5　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト層。
6　灰白色（１０ＹＲ８／１）粘土層。粘土に３層を混在。
7　褐灰色（7.5 ＹＲ５／１）シルト層。炭化材・マンガン粒を多量に含む。
8　明褐灰色（7.5 ＹＲ７／１）砂層。マンガン粒を含む。
9　４層を基にして炭化材・焼土を多量に含む。

第50図　23号住居跡

0　L＝29．000m　2m
1：60

らも長方形を呈する。主軸方位はＮ－13°－Ｅを示す。

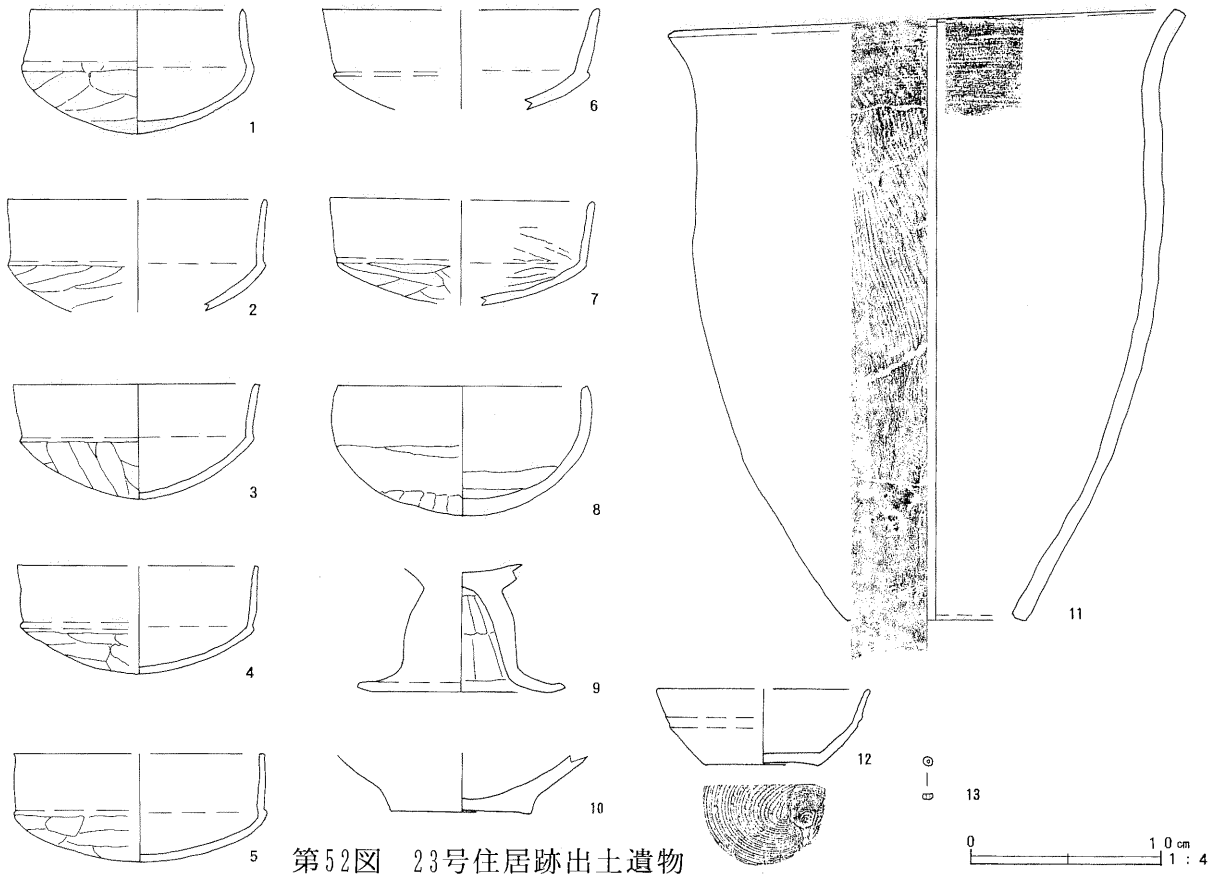
本住居跡覆土は、５㎜大マンガン粒を多量に含む灰黄褐色シルト層であるが、一部上位にマンガン粒・砂を含む黄褐色粘土が堆積する部分もある。

床面は、多少起伏はあるものの安定している。中央部では、東西1.5ｍの範囲で、床面がわずかな窪みをもち、炭化材と焼土粒の混在層が検出されている。

カマドは、北辺中央から北東隅りに設置されている。右袖は、大部分が３号溝に削除されているが、左袖（西袖）は床上に50cm張り出している。燃焼部の床はほぼ水平面を成すが、平面形は整っていない。煙道部への移行は、段差（明瞭な稜は成さない）を有し、ほぼ水平面を成す。奥部で床が吸炭して変色を成す部分から急傾斜をもつ、この部分は天井部が焼土化して残存しており、高さ５～8cmを計測できる。本カマドの全体長は、2.20ｍ以上である。

遺物は、前述した中央部の炭化材と焼土粒の混在層中から土師器杯（No.２・３・４・５・６・７）椀（No.８）、住居跡東南壁下では杯（No.１）、高杯（No.９）、甕（No.10）、甑（No.11）が、いずれも床面直上から出土している。また北西隅の床面上からは、滑石製臼玉（No.13）も出土している。なお､須恵器杯（No.12）は、覆土（第１層）中よりの出土である。

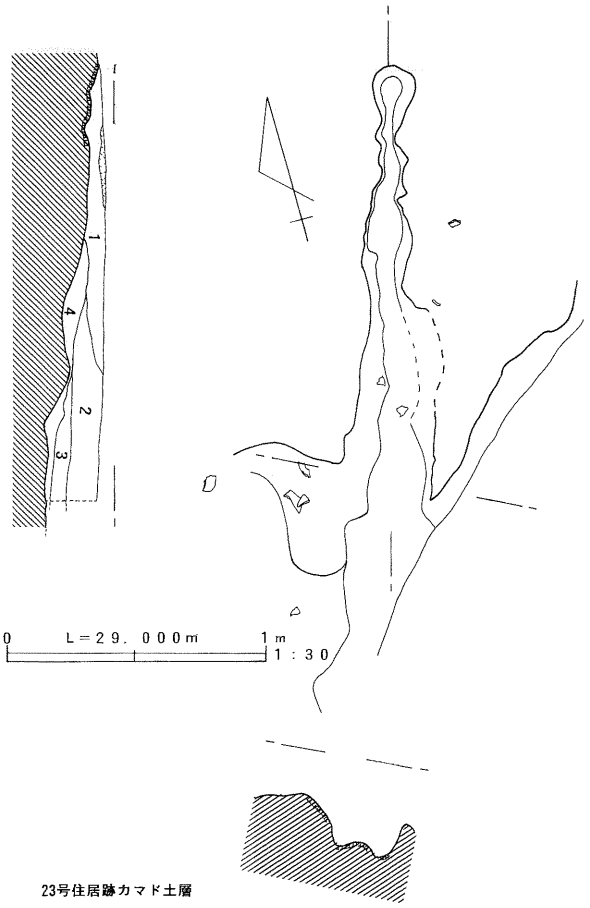
第51図　23号住居跡遺物出土状況



第52図　23号住居跡出土遺物

第24表　23号住居跡出土遺物観察表　（第52図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（11.2） 器高 6.5 底径	③ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 煤付着。
2	土師器杯	口径（13.8） 器高 底径	① ③	①	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。煤付着。
3	土師器杯	口径 12.9 器高 6.0 底径	① ③ ②	①	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
4	土師器杯	口径（12.8） 器高 5.6 底径 12.4	①	①	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／4	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
5	土師器杯	口径（13.2） 器高 5.7 底径	③④ ① ②	②	橙 (7.5YR6/8)	1／2	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
6	土師器杯	口径 13.6 器高 底径	② ③ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	2／3	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面一部吸炭。 全面烈点状剥離。
7	土師器杯	口径（14.0） 器高 底径	③ ① ②	②	橙 (5YR 7/8)	1／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。

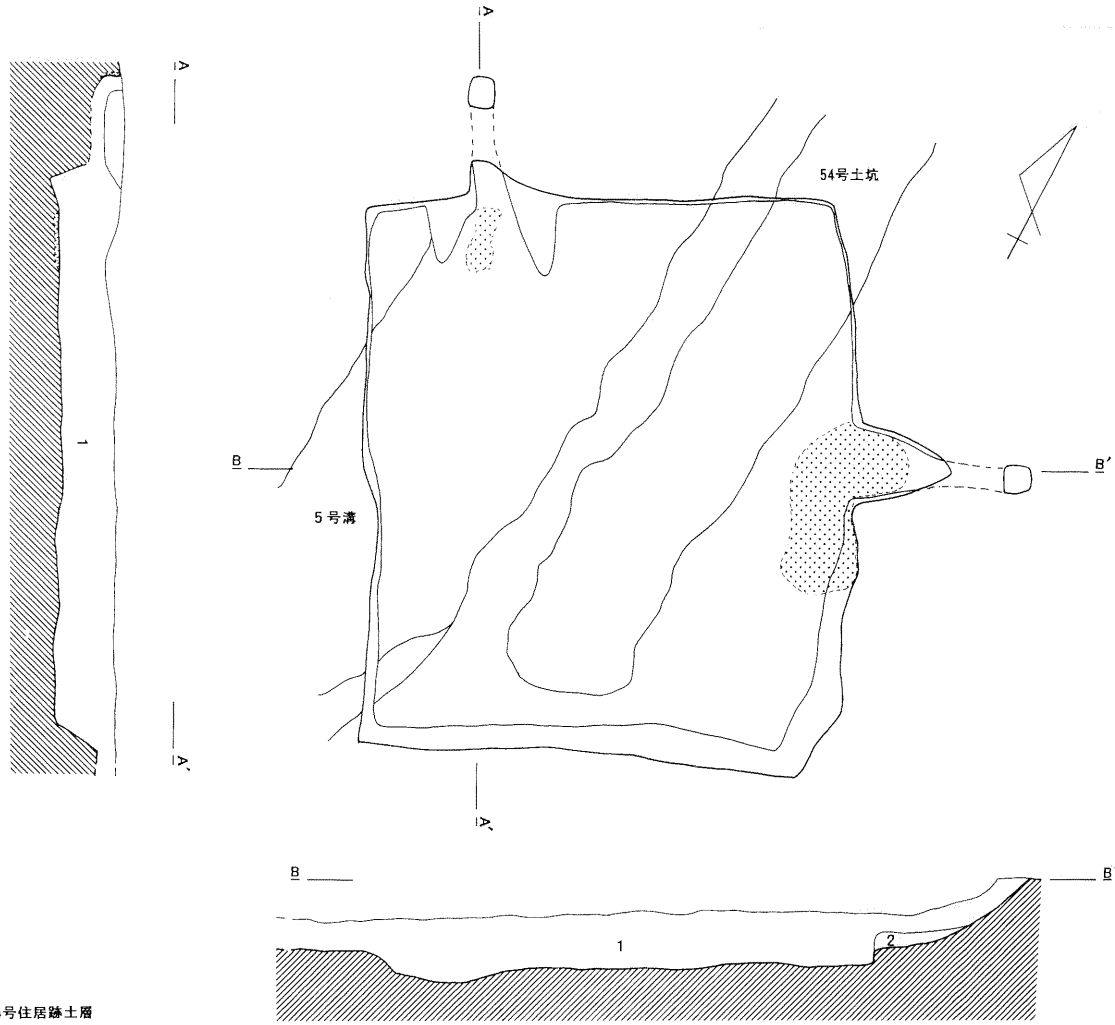


23号住居跡カマド土層

1　浅黄色（2.5 Y 7／4）粘土質。焼土粒・マンガン粒を
　多く含む。奥部は吸炭した粘土ブロックも含む。
　吸炭した粘土ブロックも含む。
2　浅黄色（2.5 Y 7／4）粘土質。マンガン粒・砂を含む。
3　青灰色（5 B 5／1）シルト質。灰をわずかに含む。
4　灰色及び青灰色（5 B 5／1）シルト混在層。

第53図　23号住居跡カマド

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
8	土師器 椀	口径 13．2 器高 6．8 底径	① ② ③	②	赤 (10R 5/8)	完形	口縁部横ナデ。体部内外面磨き様ナデ。 内外面円形に煤付着。一部烈点状剥離。 二次加熱。
9	土師器 高杯	口径 器高 底径 13．0	③ ①	①	橙 (2.5YR6/8)	脚部のみ	脚内面横の連続ケズリの後ナデ。 他は全面ナデ。
10	土師器 甕	口径 器高 底径 7．5	③ ① ④	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	底部 1／2	内外面ナデ。 外面黒斑、吸炭。
11	土師器 甑	口径 27．2 器高 31．7 底径 9．2	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	完形	口縁部横ナデの後、内面横の刷毛目整形。 胴部内面ナデ付け。外面刷毛目整形。 内外面一部炭化物付着。黒斑。
12	須恵器 杯	口径 11．4 器高 3．8 底径 6．0	⑤ ① ②	①	青灰 (5B 5/1)	1／2	ロクロ整形。 糸切りのまま。 口唇部外面吸炭。
13	臼玉	最大径0．55 厚さ 0．3 孔径 0．15				完形	滑石製

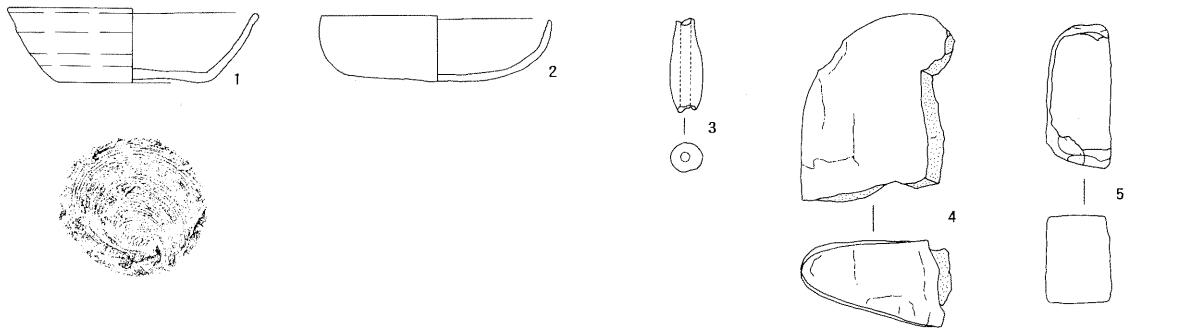


24号住居跡土層

1　黄褐色（2.5 Y 5／6）粘土・マンガン粒・黄灰色（2.5 Y 5／1）砂・混在層。（下位部分は、植物の根による攪乱が多い）

2　1層とほぼ同一であるが、砂分が多くシルト化している。

0　L＝29．000m　2m
1：60



0　10cm
1：4

第54図　24号住居跡及び出土遺物

大部分がＹ－４グリットであるが、一部Ｘ－４、Ｙ－３グリットにわたって位置している。５号溝及び54号土抗と重複しているが、本住居跡覆土の最上面に存在しており、本跡が最も古いといえる。

覆土は、マンガン粒及び黄灰色砂を含む黄褐色粘土層であるが、基盤層となる黄褐色シルト層との区別がほとんどつかず、わずかな砂分の多少によって分層したものである。

北西辺3.70m、南西辺4.20m、南東辺3.54m、北東辺4.56mを測り、多少不整形ではあるが、平面長方形を呈しているといえる。主軸方位はＮ－28°－Ｗを示す。

床面は、安定したものではなかった。

カマドは、北西辺西隅寄りと、北東辺中央の２ヶ所に設置されていた。

北西カマドは、床上に両袖が50cm程張り出し平面台形の燃焼部を形成している。前面幅67cm、奥幅40cm、奥行50cmを計る。火床から奥へ25cm移行した所から高さ22cmの段を有し、緩斜面をもって煙出しへ移行する。煙出し部は直立し、奥壁面が吸炭している。

一方北東カマドは、平面形は北西カマドと同一であるが、全て壁外に張り出して設置されている。断面形も同様に25cmの段をもって煙道に移行するが、煙道部は弓状を呈する。

両カマド共、燃焼部に灰、炭化物の混在層が堆積しているものの、焼土面は残存しておらず、新旧は不明であるが、北西カマドの袖が残されていたところから、こちらが新しいとしたものである。

遺物は、北隅付近から須恵器杯、土師器杯、中央付近から、土錘、砥石が出土している。

第２５表　２４号住居跡出土遺物観察表　（第５４図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径　１３．４ 器高　４．０ 底径　８．０	①⑥ ③ ④	③	灰 (5Y　6/1)	一部欠	ロクロ整形。 糸切りのまま。内外面吸炭。 炭化物付着。二次加熱。
2	土師器杯	口径　１２．１ 器高　３．５ 底径　９．５	② ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	２／３	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。二次加熱。
3	土錘	最大径　１．７ 残存長　５．０ 孔径　０．５					
4	砥石	残存長１０．０ 幅　８．０ 厚さ　４．６					２面使用。吸炭。
5	砥石	残存長　７．６ 幅　３．４ 厚さ　４．６					４面使用。

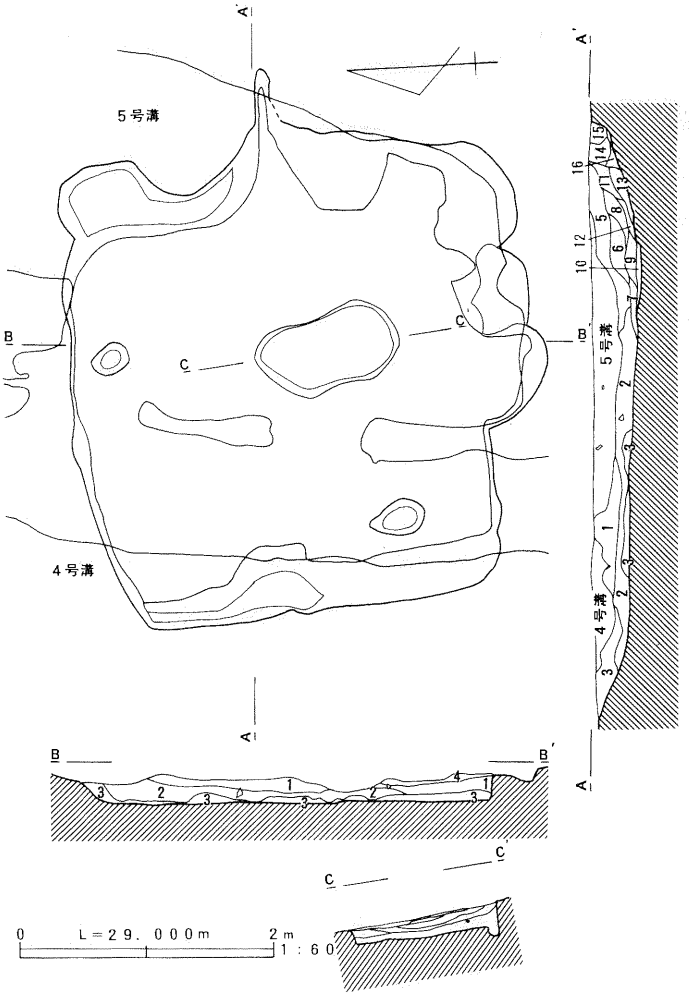
25号住居跡（第55図）

Ｙ－４区に位置している。４号溝・５号溝と重復しているが、いずれも本住居跡覆土最上層を掘り込んでおり、本住居跡が古いとされる。

北辺3.60m、西辺2.96m、南辺3.50m、東辺3.26mを測る。東壁は、崩落した状況で検出されており、本来は平面長方形を呈していたと推定される。主軸方位は、Ｎ－88°－Ｅを示す。

本住居跡覆土は、上層がマンガン粒・砂を含む浅黄粘土層、下層が焼土粒・炭化材粒を含む褐灰色シルト層である。部分的にマンガン粒を含む浅黄色シルト層が最下層に入る。

床面は、ほぼ水平で安定しており、中央部に土坑、北東部と南西部にピットが穿たれている。土坑は本跡覆土と異なり、酸化鉄面が伴う灰色粘土

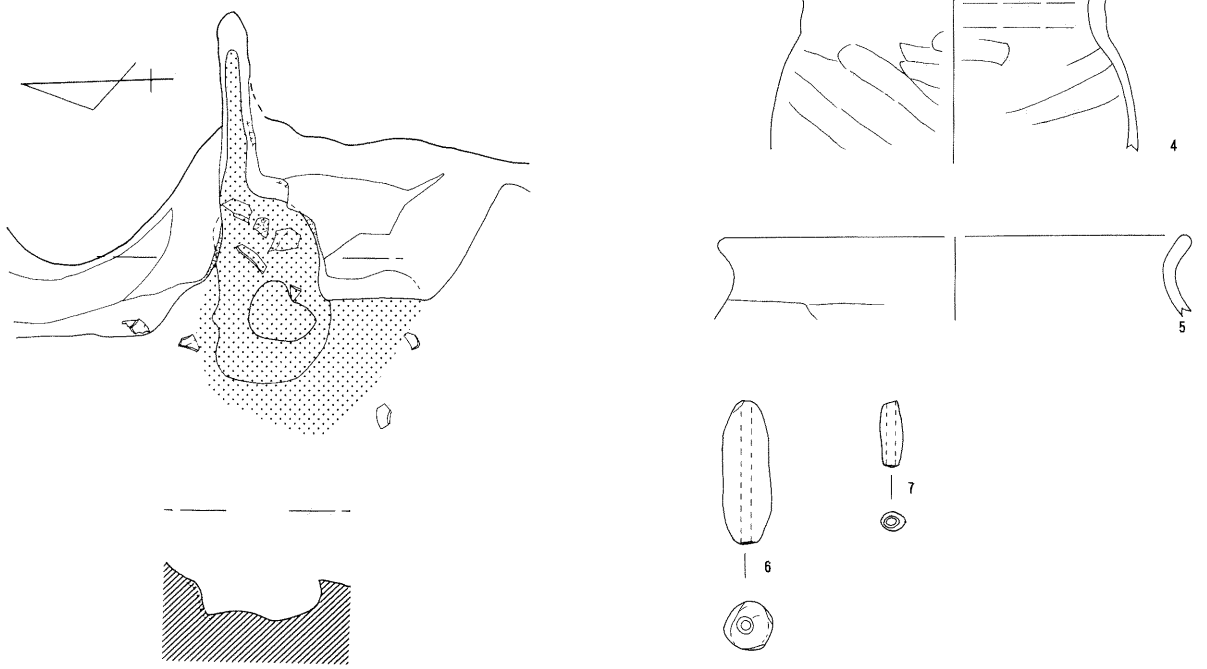


25号住居跡土層（A－A'、B－B'）

1 浅黄色（2.5 Y 7／4）マンガン粒を含む、わずかに砂分を含む粘土層。
2 褐灰色（7.5 YR 4／1）シルト層。焼土粒・炭化材粒を含む。
3 1層とほぼ同一であつがシルト化している。
4 黒褐色（7.5 YR 3／1）粘土層。炭化物・炭化材粒を多量に含む。
5 黄灰色（2.5 Y 6／1）粘土層。炭化物粒を含む。
6 1層とほぼ同一。
7 6層に多量の焼土・炭化材塊（いずれも5～10mm大）を含む。
8 青灰褐色（5B 6／1）シルト。マンガン粒を多量に含む。
9 8層に多量の焼土、灰が混在。
10 灰層。
11 8層と同様であるが、マンガン分が少ない。
12 11層と同一であるが灰を含む。
13 12層と同一であるがさらに砂分が多い。
14 にぶい黄橙色（10YR 6／4）粘土層。マンガン粒を含む。
15 褐灰色（10YR 5／1）粘土層。
16 8層と同様であるが、マンガン粒が少ない。

25号住居跡内土坑 （C－C'）

全体に灰色（N 6／）粘土層が入るが、分層は酸化鉄面（各層下面）による。なお最下層はシルト化している。



第55図 25号住居跡及びカマド・出土遺物

（最下層はシルト）が堆積し、上面が本跡に削平されているところから本跡前の土坑と考えられる（54×105cm、深さ17cm）。他の２ピットは、いずれも本跡最下層の浅黄色シルトが堆積しており、本跡に伴うものとされる。北東ピットは径22×30cm、深さ26cm、南西ピットは径28×46cm、深さ28cmを測る。いずれも長円形を呈している。

カマドは、東辺中央に設置されている。全て壁外に張り出すが、火床前面は一部床面上に脹れる。燃焼部は、幅42cm、奥行74cmで箱形を呈する。煙道部は、この燃焼部左（北）壁の延長線上に、幅12cm、長さ72cmで設けられている。このためか、燃焼部の左壁は、焼土化が著しい。断面形は、水平に作られた燃焼部から7cmの段をもち、傾斜して煙出しに移行し、奥壁は垂直に立ち上る形態をとっている。

遺物は、いずれも表面剥離した土師質の高台椀や杯、土師器甕、土錘などが出土している。

第２６表　２５号住居跡出土遺物観察表　（第５５図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質高台椀	口径 器高 底径（１１．４）	③ ② ①	③	橙 （5YR　7/6）	高台部 １／３	表面剥離。二次加熱。
2	土師質杯	口径（１１．６） 器高（　２．９） 底径（　６．０）	① ③ ②	③	橙 （5YR　7/6）	１／４	表面剥離。
3	土師質杯	口径（１５．３） 器高 底径	④③ ② ①	③	橙 （7.5YR7/6）	口縁部 １／４	表面剥離。
4	土師器甕	口径（１６．２） 器高 底径	④③ ① ②	②	浅黄橙 （10YR 8/3）	口縁部 １／４	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ。 外面横～斜のケズリ。
5	土師器甕	口径（２５．０） 器高 底径	②① ③ ④	②	にぶい黄橙 （10YR 7/2）	口縁部 １／６	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ。 外面横のケズリ。
6	土　錘	最大径　２．６ 長さ　７．５ 孔径　０．５				完　形	
7	土　錘	最大径　１．２ 残存長　３．５ 孔径　０．５					

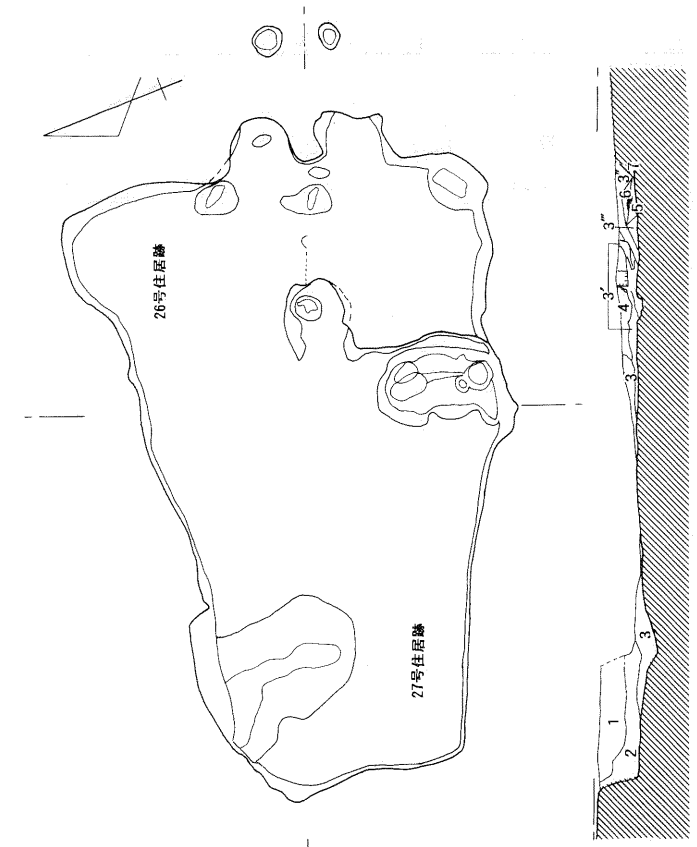
26号・27号住居跡（第56図）

Ｙ－３からＹ－４グリットにわたって位置している。当初一基ととらえたものが、調査の進行に伴って２基重復と判明したものであり、27号住居跡カマド及び東辺プランが確認されるに至って、27号跡が新しいとされた。また、両住居跡共に北辺が削平されており、明確な平面形は確認されていない。

26号住居跡は、東辺3.10m、南辺残長1.40mを計る。平面形は不明である。主軸方位はＮ－66°－Ｅを示す。

床面は、ほぼ水平であり、安定している。

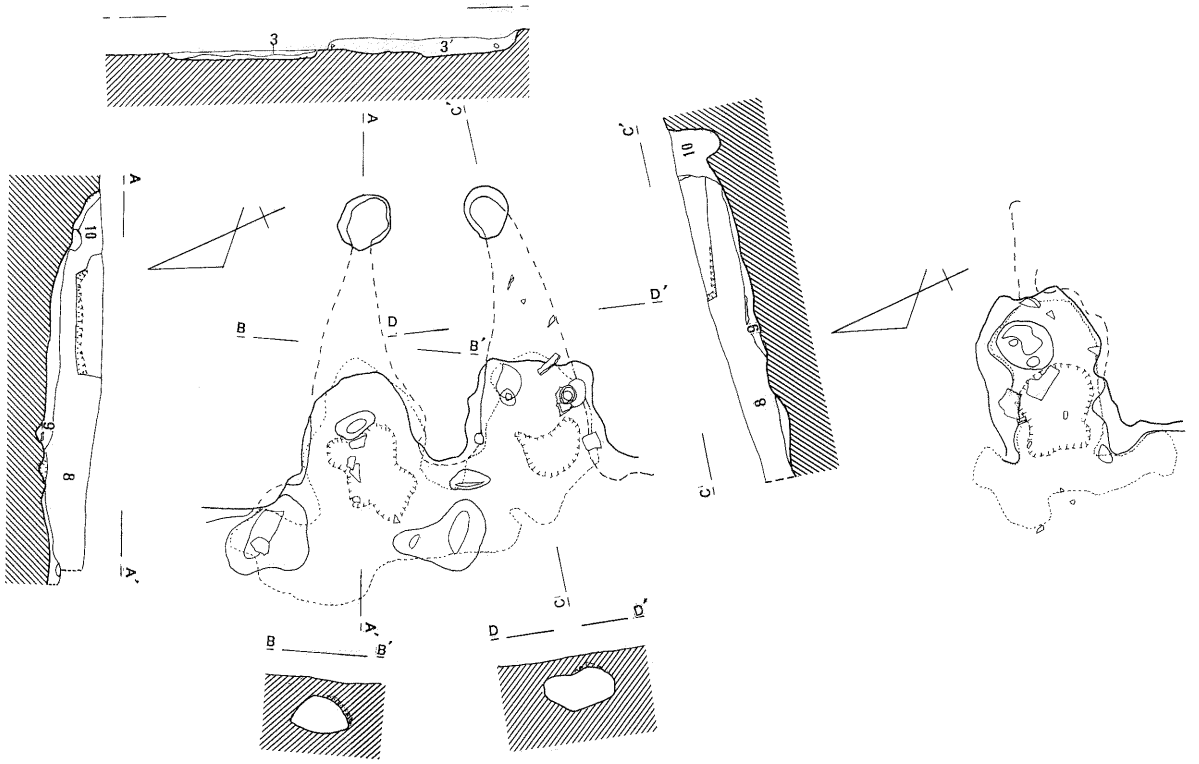
カマドは、東壁中央とやや南寄りに２基隣設されている。いずれも煙道部天井が残存していた。中央カマドは、燃焼部前面の両脇に、東西に長径をもつピットが穿たれ、河原石を袖に転用していた状態を示している。同様に火床奥に接しても石を抜いた穴が検出され、河原石転用支脚がど同位置に立てられていたことを示している。燃焼部は、前面で70cmあった幅が、支脚位置では45cmまで狭まる形態をとる。そしてこの狭まりは煙出しまで



26・27号住居跡カマド土層

1　黒色（5Y2／1）明黄褐色（2.5Y6／6）混在粘土。マンガン粒・炭化物粒混入。
2　明黄褐色（2.5Y6／6）粘土層。炭化物粒を含む。
3　黄灰色（2.5Y5／1）粘土層。炭化物粒を含む。
3′　黄灰色（2.5Y5／1）灰層。炭化物粒を含む。
3″　黄灰色（2.5Y5／1）純灰層。
3‴　黄灰色（2.5Y5／1）灰層。焼土粒を含む。
4　明黄褐色（2.5Y6／6）粘土層。炭化物粒・焼土粒を含む。
5　焼土粒・灰混在層。
6　黄灰色（2.5Y5／1）灰層。炭化物がブロック状に含まれる。
7　明黄褐色（2.5Y6／6）シルト質粘土（基盤層）
8　明黄褐色（2.5Y6／6）粘土層。灰・焼土粒・炭化物粒を含む。
9　黄灰色（2.5Y5／1）灰層。焼土ブロック・炭化物粒を多く含む。
10　黒褐色（2.5Y3／1）粘土層。炭化物粒を含む。

0　L＝29.000m　2m
1：60



0　L＝29.000m　1m
1：30

第56図　26・27号住居跡及びカマド

連続し、最狭部では8cm幅となる（この部分は高さも8cmとなる）。断面形は、支脚位置を頂点とした弓状を呈し、煙出し部のみ屈曲が強くなる。平面形は、全体で三角形を呈するが、北壁はほぼ直線的に狭まるが、南壁は支脚の位置で強く括れ、煙道部は三角状に狭まる。全長は、1.43mを測る。

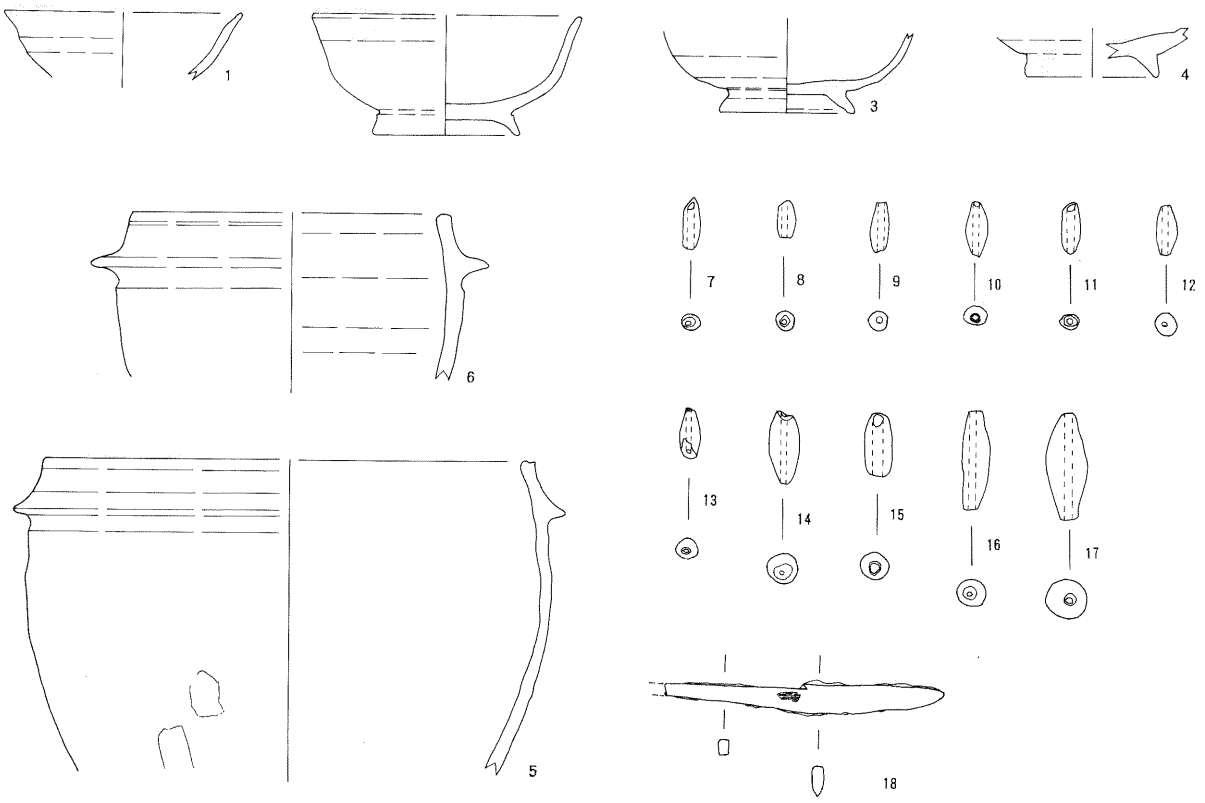
南寄りカマドは、すべて壁外に張り出して設置されている。燃焼部前面幅50cm、最奥部幅12cm、全体長1.42mを測る。全体では三角形を呈するが、煙道部はわずかに北方向に屈曲している。火床の奥15cm程離れて石抜きの穴がみられ、やはり河原石転用支脚が用いられていたことを示している。燃焼部は76cmの奥行をもち、奥部の天井は垂直方向に強く焼土化していた。煙道部の高さは燃焼部との堺で13cm、最奥部で4cmと狭められていく。断面形はほぼ水平で、煙道部奥がわずかに上昇している程度である。煙出し部は、ほぼ直立している。

中央カマド前の石抜き穴に炭化材が充填されていたこと、遺物の出土状態、灰の分布等から、当初中央カマドが設置され、後に南寄りカマドへ移行したものと考えられた。

遺物は、両カマドに集中していた。中央カマドでは内黒処理された土師質高台椀（No. 1・2）が、同カマドが前石抜き穴からNo. 4が出土している。また南寄りカマドからは、土師質高台椀（No. 3）、羽釜（No. 5）が出土している。

27号住居跡は、26号住居跡の西半に重復して構築され、南壁は南東隅がわずかに張り出すものの、26号住居跡のほぼ延長線上にのっている。壁が隅から隅まで確認できたのは南辺のみで、3.30mを測る。北半分の壁は全く確認されていない。

床面は、26号住居跡とほぼ同一レベルにあり、



第57図　26・27号住居跡出土遺物

北半部ではその区別ができなかった。南東隅には57×102cmの規模で長円形の土坑が穿たれている。断面は摺鉢状を呈し、最深部で18cmを測る。また北西部にも最深部7cmの落ち込みがみられたが、不整形であり、床面凹凸の一部とされた。

カマドは、東壁に設置されていたが、東壁の北半が確認できなかったため、位置は不詳である。燃焼部は前面幅40cm、奥幅42cm、奥行68cmを測り箱形を呈する。火床は前半分に形成され、中央北寄りに、石抜き穴（支脚）がみられる。煙道は、中央につくられ、幅6～8cm、長さ45cmを測る。断面形は、摺鉢状の火床から5cmの段差をもって煙道部に移行し、煙道部は半までほぼ水平であるが、半から煙しにかけて弓状に急角度で上昇していく。煙道部天井は、燃焼部側が強く焼土化しているが、この焼土化した面は、床面段差の5cm奥である。煙道部の高さは8cmから6cmへと移行している。

遺物は、カマド内から羽釜（No.6）東南隅土坑内から土錘（No.7～17）、カマド北の床面から鉄製刀子（No.18）スラッグが出土している。

第27表　26･27号住居跡出土遺物観察表　（第57図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質椀	口径（12.4） 器高 底径	④ ①	③	にぶい橙 (5YR 6/4)	口縁部 1／4	ロクロ整形。 内外面吸炭。黒色化。 （26号住）
2	土師質高台椀	口径（14.4） 器高 6.3 底径（8.0）	① ② ④	③	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1／4	ロクロ整形後、ナデを加える。内面磨き。 糸切り後付け高台。 内外面吸炭、黒色化。（26号住）
3	土師質高台椀	口径 器高 底径（7.0）	③ ① ④	③	浅黄橙 (7.5YR8/4)	下半のみ	ロクロ整形。体部内面磨き。一部吸炭、内黒。 糸切り後付け高台。 （26号住）
4	土師質高台椀	口径 器高 底径（7.0）	① ④	①	にぶい橙 (7.5YR6/4)	下位 1／2	ロクロ整形。体部内面磨き。吸炭、内黒。 糸切り後付け高台。 （26号住）
5	羽釜	口径（25.8） 器高 底径	①④ ② ③	②	赤褐 (2.5YR4/6)	上半 1／5	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ。外面は回転ナデ、一部縦のケズリ。（26号住）
6	羽釜	口径（16.6） 器高 底径	① ③ ④	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	上半 1／4	口縁部横ナデ。 胴部内面回転ナデ。外面横のナデ。
7	土錘	最大径 1.0 残存長 2.7 孔径 0.3					
8	土錘	最大径 1.0 残存長 1.9 孔径 0.3					
9	土錘	最大径 1.0 長さ 2.7 孔径 0.35				完形	
10	土錘	最大径 1.2 残存長 2.9 孔径 0.3					
11	土錘	最大径 1.0 残存長 2.7 孔径 0.3					
12	土錘	最大径 1.2 長さ 2.7 孔径 0.3				完形	
13	土錘	最大径 1.2 残存長 2.7 孔径 0.3					
14	土錘	最大径 0.6 残存長 3.8 孔径 0.25					

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
15	土　錘	最大径　1．5 残存長　3．4 孔径　0．55					
16	土　錘	最大径　1．5 長さ　5．2 孔径　0．3				完　形	
17	土　錘	最大径　2．2 長さ　5．7 孔径　0．35				完　形	
18	刀　子	長さ　14．8 刃部幅10．6 厚さ　0．6					茎部幅0.8 。 茎部に木質残存。

28号住居跡（第58図）

Y－4、Y－5、Z－4、Z－5グリッドにわたって位置する。本住居跡の北から南にかけて、現代の掘削によって破壊されている。

このため、正確な規模・形態は不詳であるが、南北2.70m、東西3.00mのほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方位はN－100°－Eを示す。

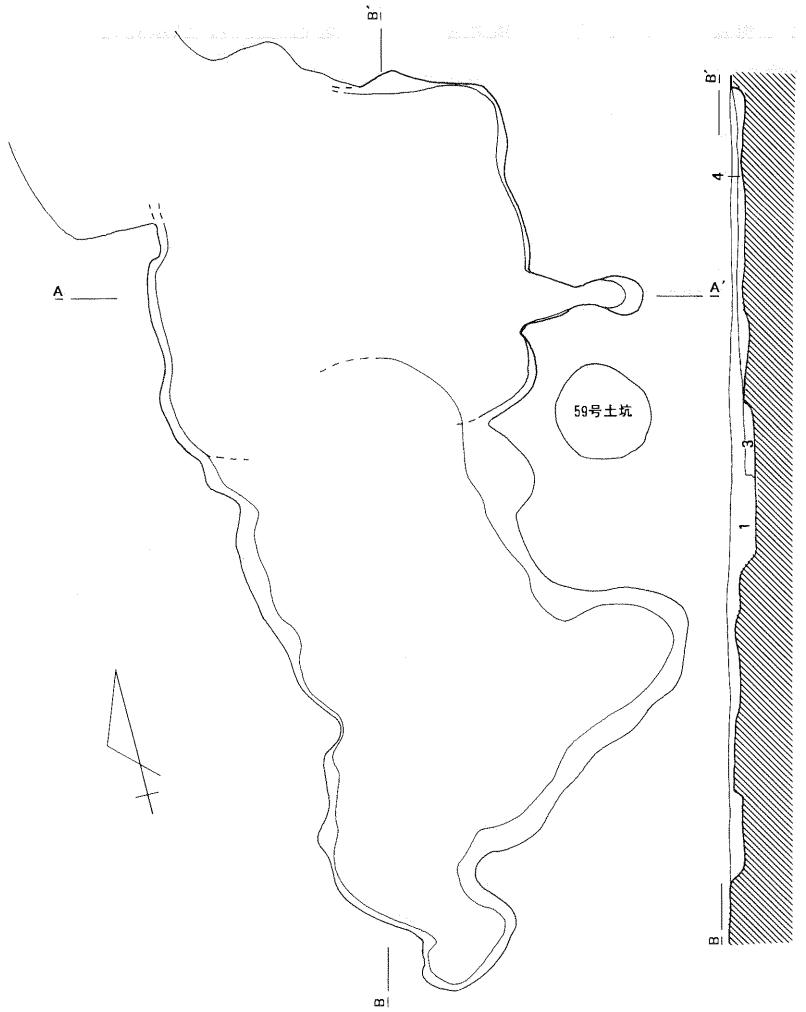
本跡の覆土は、明青色粘土を含む明黄褐色粘土であるが、大部分で床直上まで削平されていた。しかしながら、残存した床面はほぼ水平で安定したものであった。

カマドは、東辺南隅寄りに設置されている。両袖は、床面上に扁平な河原石（左・北は緑泥片岩）を使用している。この幅は38cm、燃焼部奥幅29cm、同奥行51cmを測る。煙道部は短く、30cmしかない。幅12cm、高さ9cmを測る。天井部は、燃焼部に面した立面から強く焼土化している。断面形は、火床が窪み、煙道部はほぼ水平で、煙出しに至ると一度窪む。煙出し奥壁は、この窪みから約35°で上昇し、一旦平坦面をもった後直立する。全体長は110cmを測る。

遺物は、全て土師質高台椀（杯）で、カマド内からNo.1、カマド右脇・東南隅からNo.2・3が出土している。

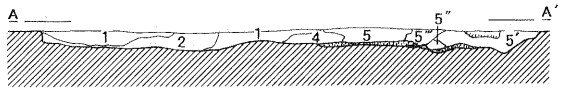
第28表　28号住居跡出土遺物観察表　（第58図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質 高台椀	口径 器高 底径　7．5	④ ①	③	橙 (2.5YR6/6)	下　半 の　み	ロクロ整形。 糸切り後付け高台。 内外面一部吸炭。
2	土師質 高台椀	口径 器高 底径　8．0	②	②	にぶい橙 (5YR　7/4)	下　半 の　み	ロクロ整形。 糸切り後付け高台。 内外面吸炭。内面炭化物付着。
3	土師質 高台杯	口径　15．5 器高　6．1 底径　9．0	②③ ④ ①	②	にぶい橙 (7.5Y　7/3)	3／4	ロクロ整形。 糸切り後付け高台。 内外面吸炭。内面炭化物付着。

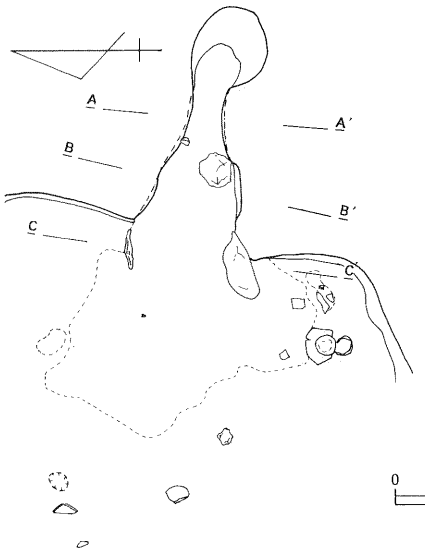


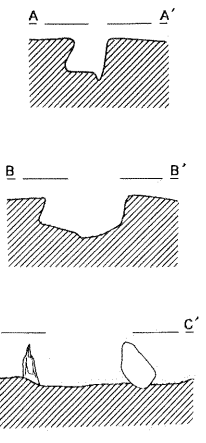
28号住居跡土層

1　青灰色（５ＰＢ６／１）粘土（Ａ火山灰含む）
　明黄褐色（１０ＹＲ６／６）粘土を含む。
2　１層及び黒色シルト混在。
3　青灰色（５ＢＧ）シルト。マンガン粒多量に含む。（基盤層）
4　明黄褐色（2.5 Ｙ７／６）粘土を主体として明青色（５ＰＢ７／１）粒土混在。
5　組成はほぼ４層と同一であるが、炭化材粒を含み全体に褐色味を増す。
5′　５層とほとんど同一。一部灰を含む。
5″　５層とほとんど同一。焼土粒が入り炭化材粒が大粒となる。
5‴　５層とほとんど同一。焼土粒が主体となる。

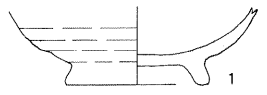


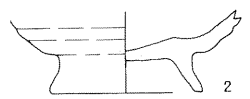
0　L＝29．000m　2m
1：60

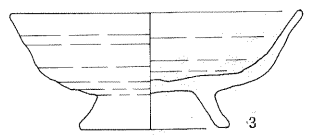




0　L＝29．000m　1m
1：30







0　10cm
1：4

第58図　28号住居跡及びカマド・出土遺物

29号住居跡（第59図）

Ｚ－４グリッドに位置する。

北辺2.30ｍ、西辺3.47ｍ、南辺2.35ｍ、東辺3.55ｍを測り、平面隅の丸い長方形を呈する。主軸方位はＮ－100°－Ｅを示す。

覆土は、焼土粒・炭化材粒を含む黄灰色粘土である。カマド前には、炭化材（灰を含む）が広がり、さらにこれと一部重復して鉄錆粉が、東南部1/4範囲の床面上から検出されている（濃いアミ部分）。

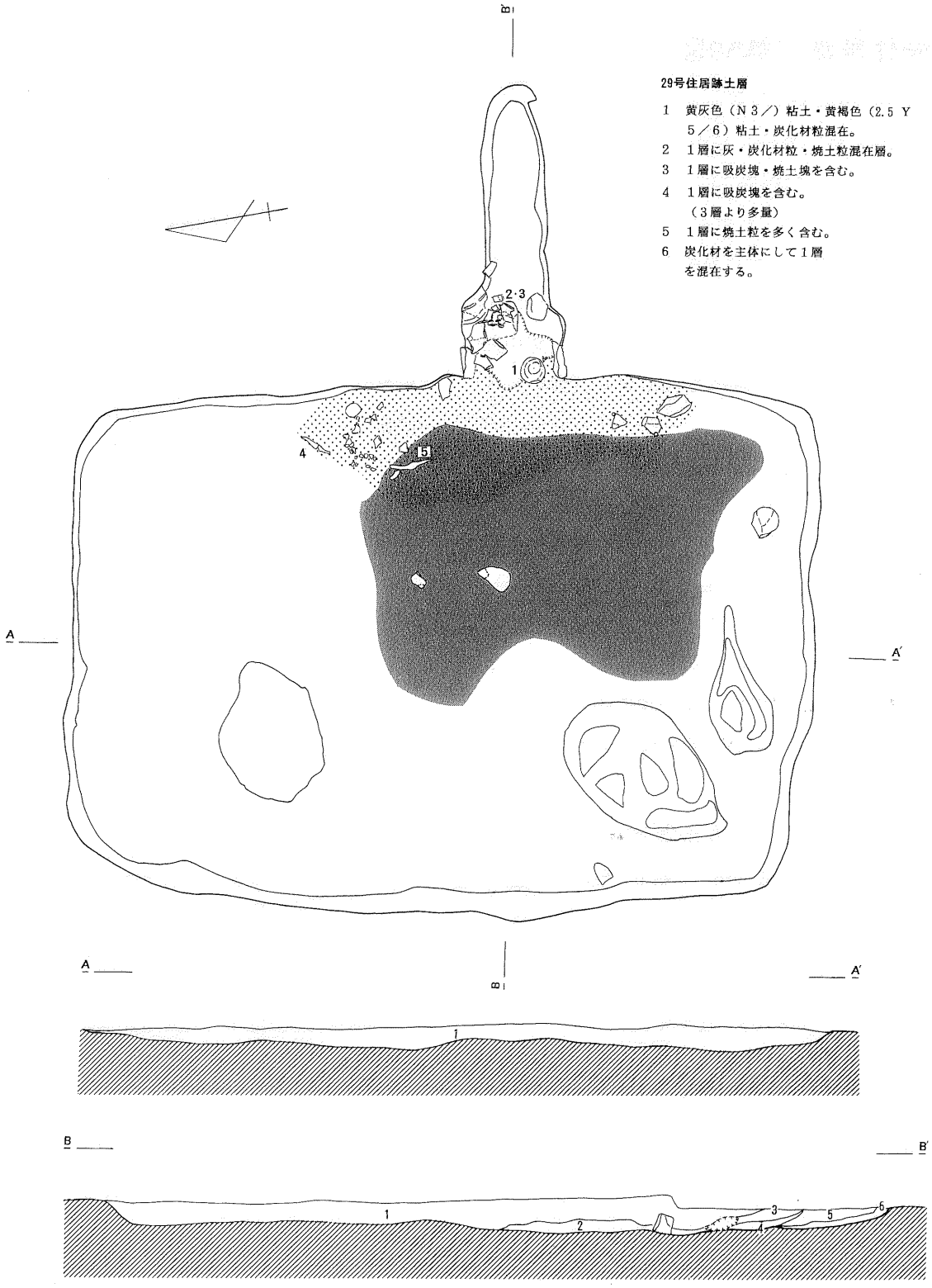
床面は、起伏があるものの安定している。西南隅に２つの土坑が穿たれている。北側土坑は、89×55cmの卵形を呈し、中は５小坑に分かれている。中央坑が最も深く29cm、北から西回りに18cm、20cm、16cm、24cmの深さをもつ。南土坑は、いちぢく形を呈し、30×68cmの規模をもつ。南から東に段をもち、最深部では15cmの深さをもつ。これらの土坑からカマドにかけての床面上には、10×15cm大の礫が５個出土している。

カマドは、東壁中央やや南寄りに設置されている。全て壁外に張り出し、燃焼部前面・住居壁際には、緑泥片岩割石を両袖として壁に貼り付けている。燃焼部の前面幅42cm、奥幅40cm、奥行47cmを測る。ほぼ全面に火床が広がり、奥には中央左（北）と右（南）隅に礫が立脚しており、支脚の用を成していたとみられる。このうち左支脚上には甕（No.３）が乗せられた状態で出土している。煙道は、燃焼部中央に幅25～28cmの広さで奥壁に至る。断面形は、全体に緩い弓状を呈し、燃焼部と煙道の堺は３cmの段差をもつ。全長は1.43ｍを測る。

遺物は、カマド内及び炭化材分布範囲に集中している。カマド内からカマド右にかけては土器類（No.１～３）、カマド左（北）では鉄製品の刀子（No.４）及び鏃矢（No.５）が出土している。

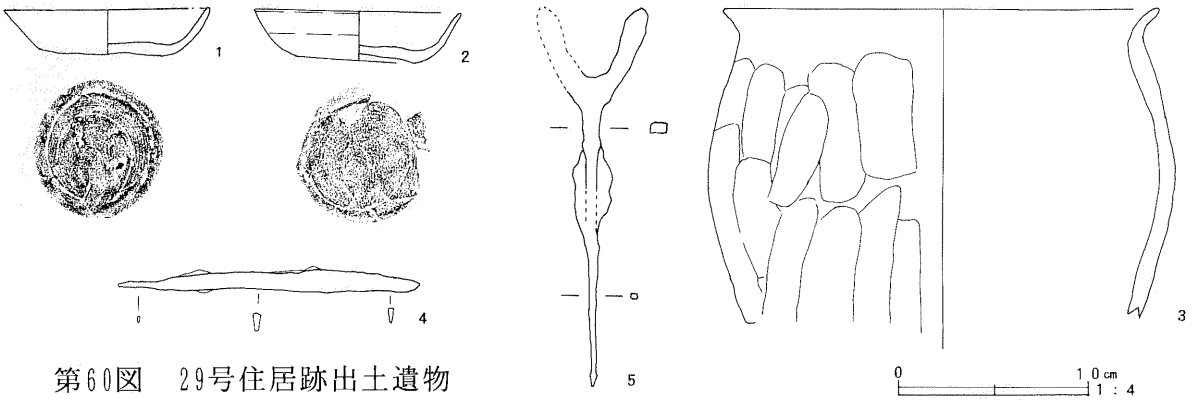
第２９表　２９号住居跡出土遺物観察表　（第６０図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質杯	口径　１０．７ 器高　２．５ 底径　６．３	③ ② ①	②	橙 (7.5Y 7/6)	完形	ロクロ整形。 糸切り底。 内面炭化物付着。外面一部吸炭。
2	土師質杯	口径　１２．９ 器高　２．７ 底径　６．７	② ① ③	②	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	１／２	ロクロ整形。 糸切り底。 内外面吸炭。
3	土師質甕	口径　２３．０ 器高 底径	③④ ① ②	②	橙 (5YR 6/6)	２／３	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。内面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。
4	刀子	残存長１５．６					
5	鉄鏃	全長　１９．７					



第59図　29号住居跡

0　L＝29．000m　2m
1：60

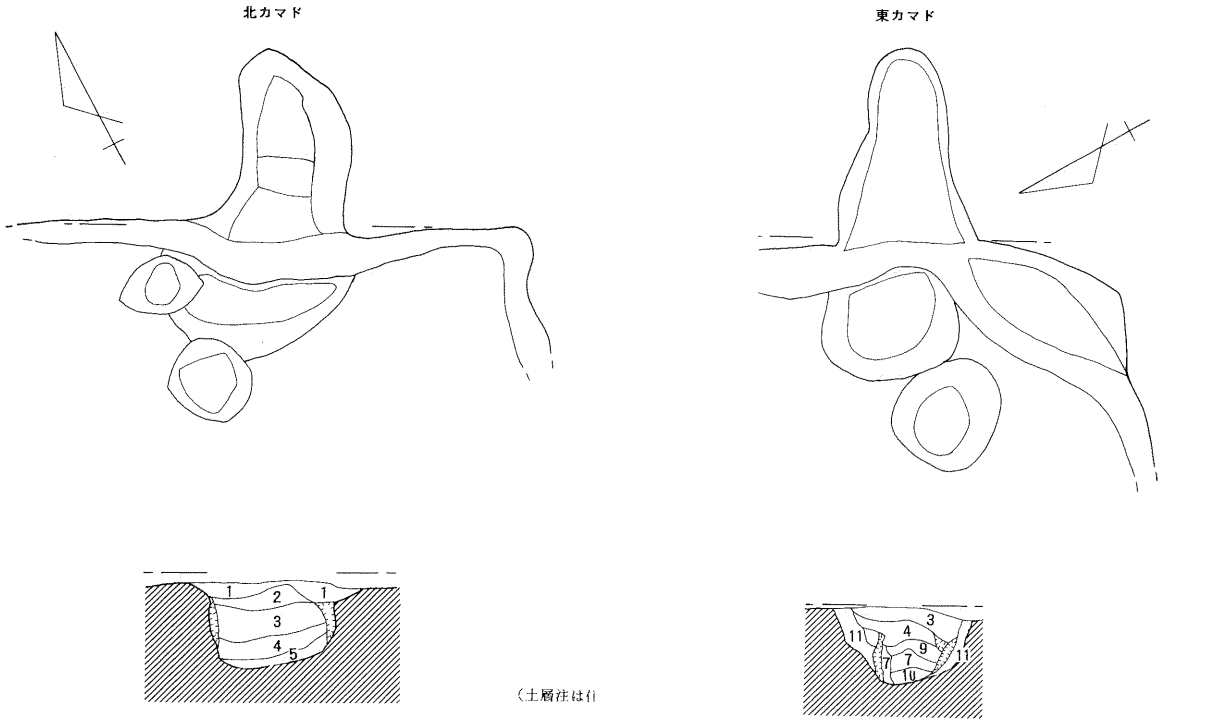


第60図　29号住居跡出土遺物

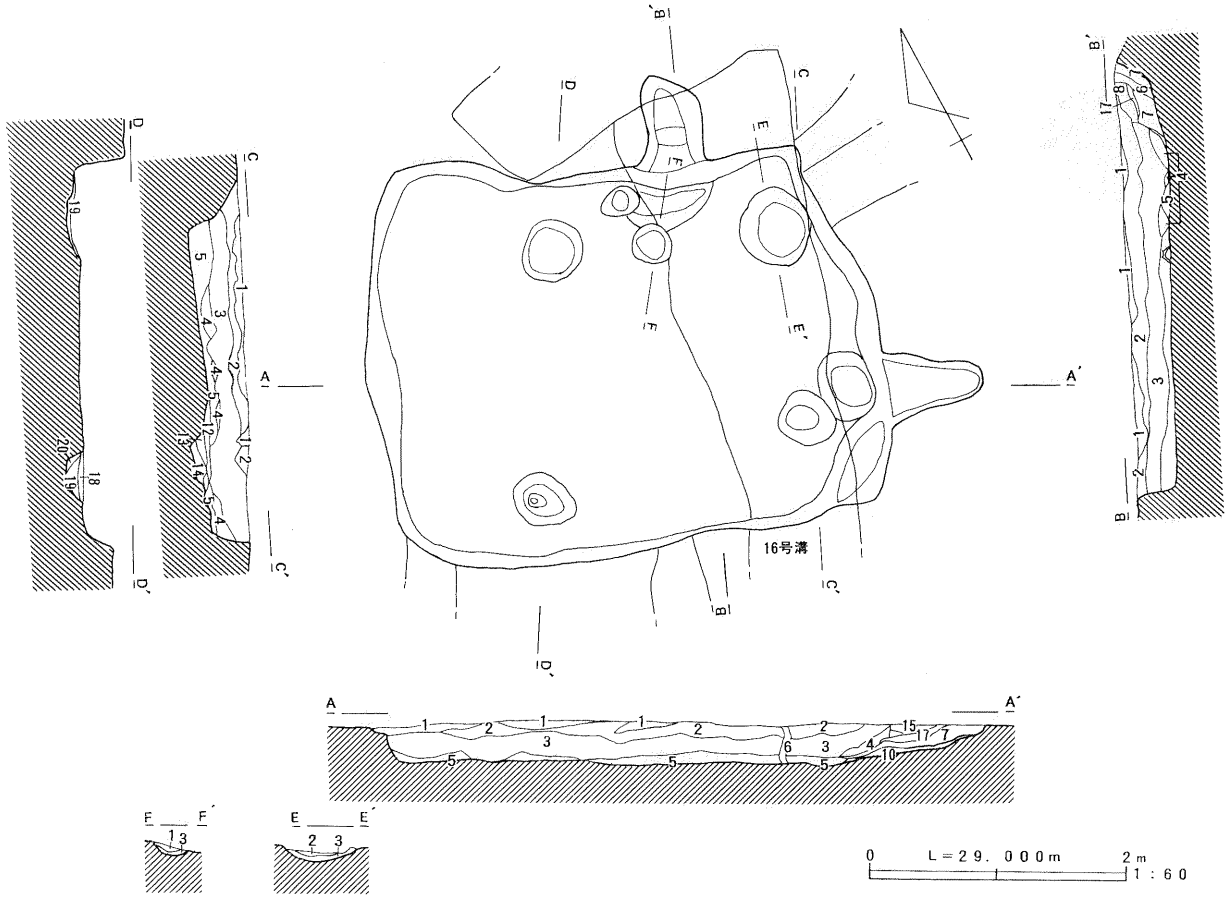
30号・31号住居跡（第61図・62図・63図）

ＡＣ－４グリッドを中心に、ＡＢ－４、ＡＢ－５、ＡＣ－５グリッドにかけて位置している。12号溝、13号溝、14号溝、15号溝、16号溝、41号溝と重複している。

16号溝以外の溝は、全て本住居跡によって掘削されており、本跡より古いとされる。また16号溝は、本住居跡覆土最上層を掘り込んでおり、本跡より新しいとされる。当初、別々の住居の重複と考え、連続の住居跡名を付したが、覆土に切り合いはは認められず、また床面も単独であるところから、本来、一住居であったと考える方が妥当であるとした。よって、31号は欠番とする。



第61図　30号住居跡カマド



30・31号住居跡土層

1 暗褐色（10YR3／3）シルト質。しまり良く硬質。鉄分を含み島状に堆積している。
2 黒色（2.5Y2／1）シルト質。しまりは良いが1層ほど硬質ではない。浅間系と思われる白色微粒子の火山灰を、一面に多く含んでいる。
3 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。しまり良く粘性がある。炭化物や焼土の粒子を含み、遺物を包含するのもこの層から下が中心である。
4 暗褐色（10YR3／4）シルト質。しまり良く粘性が高い。粘土質に最も近い土質。ブロック状に混じっている。（或いは住居壁面などの崩落と考えられる。）
5 黒褐色（10YR3／2）シルト質。しまり良く粘性がある。3層に近似しているが、全体的に3層より細かい粒子の層で、含有する焼土は3層より大きい。
6 にぶい黄色（2.5Y6／3）砂質。噴砂。
7 黒褐色（10YR3／2）シルト質。やや粘性がある。炭化物及び焼土の微粒子を含む。
8 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。緻密、硬質であるが粘性はなくサラサラしている。カマド－2の天井部と思われ、下部は焼けている。
9 黒褐色（10YR3／2）シルト質。やや粘性があるがしまりは良くない。焼土ブロックを多く含んでいる。（天井部分崩落の堆積と思われる）
10 暗褐色（10YR3／4）シルト質。粘土質に近く粘性があり、しまり良い。炭化物及び焼土の粒子を多く含む。
11 暗褐色（7.5YR3／3）シルト質。粘性、しまりともに良くない。
12 炭化物層。カマド－1にともなうものと思われる。
13 褐色（10YR4／4）4層に近いがやや黄味がかっている。土質も4層に近似。
14 黒褐色（10YR3／2）5層に近似。5層よりじまりが悪く軟質。炭化物・焼土の微粒子を含む。
15 にぶい黄橙色（10YR5／4）シルト質。粘性は乏しくしまりは良くないが乾くと硬質になる。
16 にぶい褐色（7.5YR5／4）シルト質。15層と同一であると思われるが、熱を強くうけていて焼土化しつつある。完全な焼土ではないが焼けている。
17 焼土。カマドの天井。
18 黒褐色（7.5YR3／2）シルト質。粘性は乏しい。炭化物の微粒子を含む。
19 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。やや粘性があり、しまりも良い。
20 暗褐色（10YR3／4）シルト質。粘性が高く、しまりも良い。

Pit土層

1 炭化物の堆積。黒色炭化物と焼土ブロックを含む層。
2 暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）粘土質に近いシルト質。粘性が強く、焼土・炭化物の粒子を含む。
3 褐色（10YR4／4）シルト質。やや粘性を含む。2層より黄味が強い。

第62図　30号住居跡

北辺3.36m、西辺3.10m、南辺3.80m、東辺2.90mを測り、平面長方形を呈する。主軸方位はN－120°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が炭化物・焼土粒を含む灰黄褐色シルト層、下層がやはり炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルト層である。

床面は、ほぼ水平で安定しているが、床面上には6ケ所に浅いピットがみられ、いずれも覆土が異なり、上面に本住居跡覆土の層の黒褐色シルト層が堆積しており、本住居跡に伴うものではない。

カマドは、北壁北東隅寄りと東壁南東隅寄りの2ケ所に設置されている。

北カマドは、大部分が壁外に張り出し、全長は1.22mを測る。燃焼部は床上に脹らみ、壁際幅40cm、奥行80cmを測る。煙道は、天井が残存しており、高さは12cmを測る。断面形は、僅かに窪んだ燃焼部から、煙道は直線的に緩傾斜をもって上昇し、奥壁は急傾斜をもって立ち上がる。

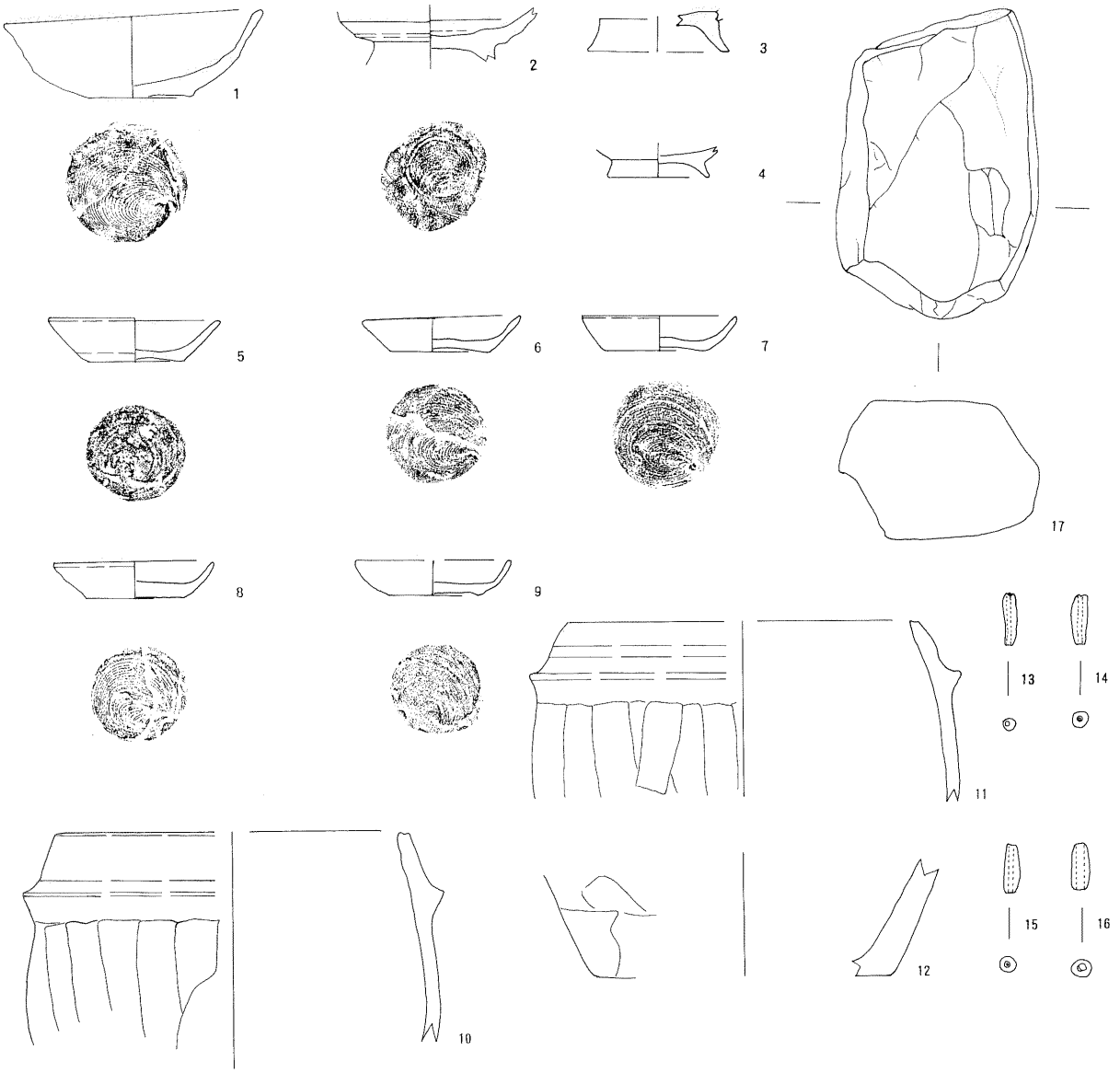
東カマドは、煙道が壁外に張り出し、全長は1.33mを測る。燃焼部は床上に脹らみ、奥行55cmを測る。壁際は煙道との接点で、幅30cmを測る。煙道は天井が残存しており、高さは7cmを測る。断面形は、僅かに窪んだ燃焼部から、煙道は、起状のある緩傾斜をもって上昇し、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、ほぼ全面から出土しているが、特に東

第63図　30号住居跡遺物出土状況

カマド前面に集中して、土師質杯・高台椀、羽釜、砥石、土錘等が出土している。その他、北カマド前からは土師質杯（No.６・８）が、西壁寄りからは土師質高台椀（No.４）や羽釜（No.10）が出土している。

この様な遺物の出土状態から、当初北カマドが設置され、これが廃された後、東カマドが設置され、住居廃絶時まで継続したものとみられる。



第64図　30号住居跡出土遺物

第３０表　３０号住居跡出土遺物観察表　（第６４図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質杯	口径　１４．９ 器高　５．０ 底径　６．７	② ③	③	黄橙 (7.5YR8/8)	２／３	ロクロ整形。 糸切り底。 内外面一部吸炭。
2	土師器高台杯	口径 器高 底径	② ①	②	橙 (2.5YR6/6)	下半のみ	ロクロ整形。 糸切り後、付け高台。 二次加熱。
3	土師質高台椀	口径 器高 底径　８．０	②④ ① ③	③	橙 (5YR　7/6)	高台部１／２	糸切り後、付け高台。
4	土師質高台椀	口径 器高 底径	② ① ③	②	浅黄橙 (10YR 8/3)	底部のみ	内面磨き、内黒。 糸切り後、付け高台。
5	土師質杯	口径　９．９ 器高　２．５ 底径　５．６	③④ ② ①	②	橙 (5YR　6/8)	完形	表面剥離。 内外面煤付着。 歪となる。
6	土師質杯	口径　９．１ 器高　２．１ 底径　５．７	②③ ④ ①	②	浅黄橙 (10YR 8/4)	完形	体部回転ナデ。 底部内面は回転ナデ。 内外面煤付着。歪となる。
7	土師質杯	口径　９．０ 器高　２．０ 底径　６．２	②④ ③ ①	②	にぶい黄橙 (10YR7/2)	完形	体部回転ナデ。 底部内面は回転ナデ。 内外面煤付着。歪となる。
8	土師質杯	口径　９．１ 器高　２．１ 底径　５．７	④③ ② ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/3)	完形	体部回転ナデ。 底部内面は回転ナデ。 内外面煤付着。歪となる。
9	土師質杯	口径（　９．０） 器高　２．０ 底径　５．５	②④ ① ③	②	灰白 (7.5YR8/2)	２／３	体部回転ナデ。 底部内面は回転ナデ。 内外面煤付着。歪となる。
10	羽釜	口径（２０．０） 器高 底径	②④ ③ ①	②	橙 (5YR　6/6)	上半１／２	口縁部横ナデ。 胴部内面は横のナデ。外面は縦のケズリ。 二次加熱。
11	羽釜	口径（２０．０） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR　6/6)	上半１／２	口縁部横ナデ。 胴部内面は横のナデ。外面は縦のケズリ。 二次加熱
12	羽釜	口径 器高 底径（１７．０）	②④ ① ③	②	橙 (7.5YR7/6)	底部１／５	胴部内面は横のナデ。 外面底部付近は横のケズリ。 二次加熱。
13	土錘	最大径　０．８ 残存長　３．１ 孔径　０．２				一部欠	
14	土錘	最大径　０．９ 残存長　２．９ 孔径　０．２					
15	土錘	最大径　０．９ 残存長　２．８ 孔径　０．２					
16	土錘	最大径　１．２ 残存長　２．７ 孔径　０．４					
17	砥石	残存長１７．８ 幅　１１．３ 厚さ　７．９					１面使用。

32号住居跡（第65図・66図）

大部分がＡＣ－４グリッドに、西南隅がＡＣ－５グリッドに位置しており、15号溝、16号溝と重複している。

溝は全て、本住居跡確認面より上層に存在しており、本跡より新しいとされる。

北辺3.00ｍ、西辺3.10ｍ、南辺3.24ｍ、東辺3.10ｍを測り、平面ほぼ正方形を呈する。主軸方位はＮ－28°－Ｅを示す。

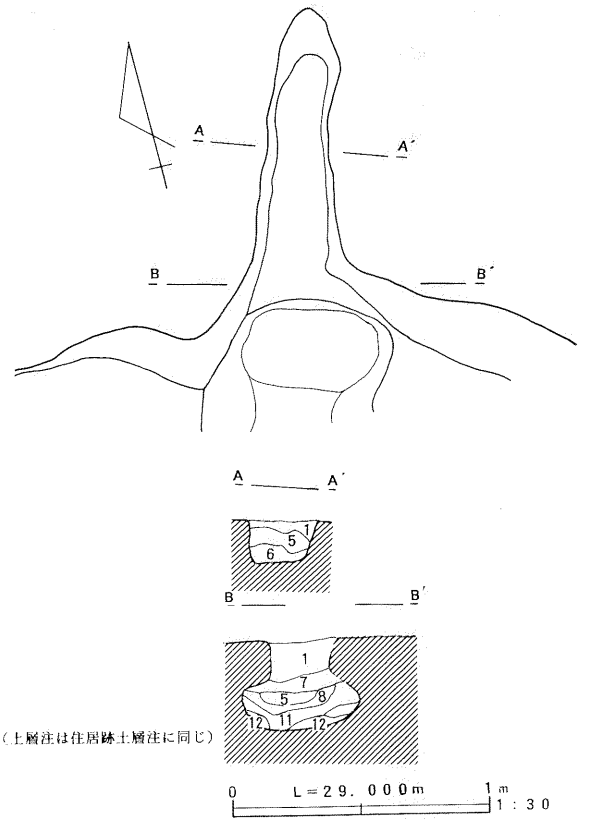
本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄粒を含む暗灰黄色シルト層、下層がやはり酸化鉄粒を含む暗オリーブ褐色シルト層、最下層が黒褐色シルト層である。

床面は、起伏があるものの安定している。

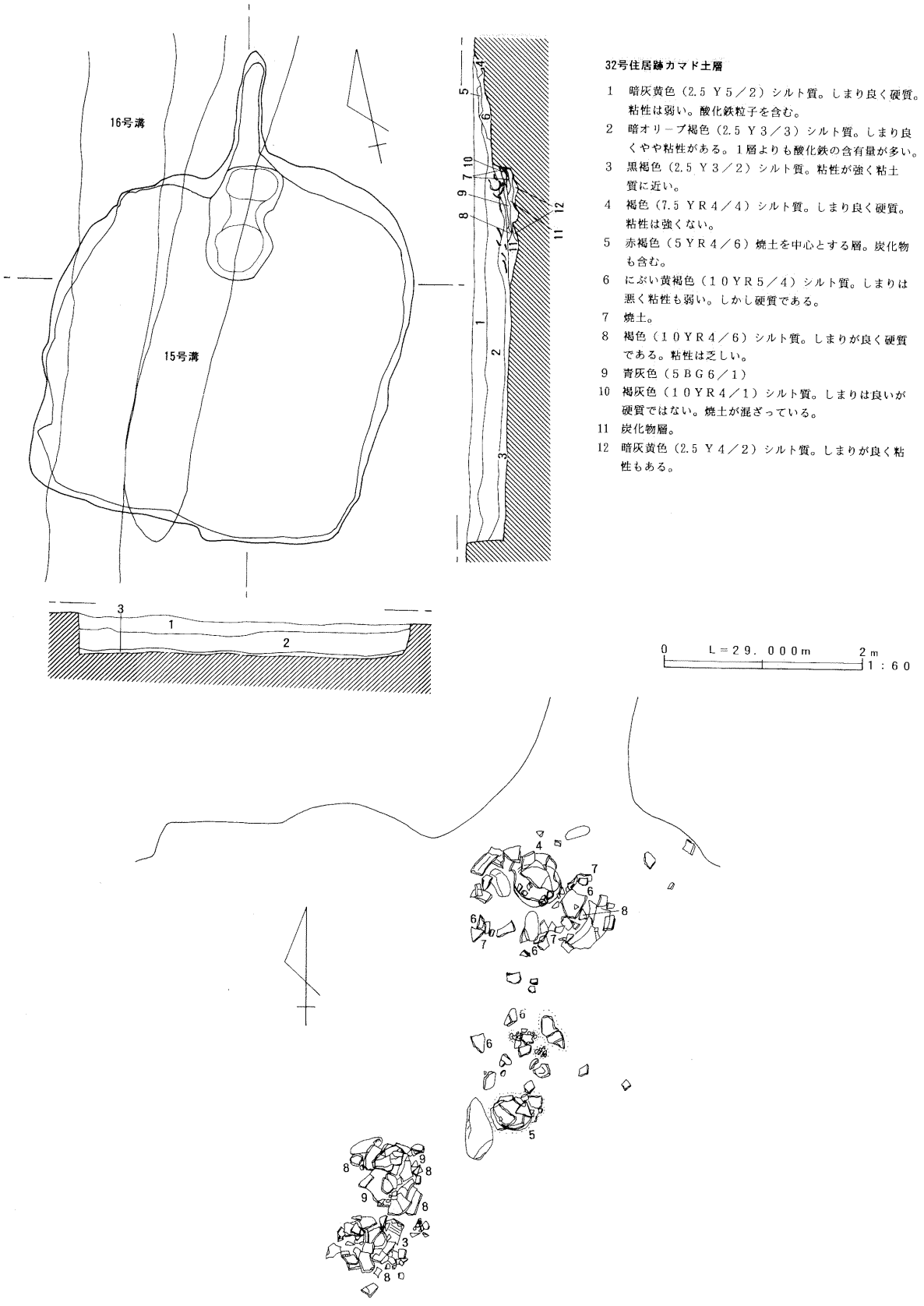
カマドは、北壁中央やや西隅寄りに設置されている。大部分が壁外に張り出し、全長は1.58ｍを測る。燃焼部は、幅60cm、奥行55cmを測る。煙道は、燃焼部西壁に沿って、幅20cmで奥壁に至る。断面形は、窪みをもって作られた燃焼部から、高さ18cmの段をもち、煙道に至る。煙道は緩傾斜をもって上昇し、奥壁近くで傾斜をやや急にして立ち上がる。

火床の前面には、火床と同様の窪みがあり、炭化物が充填されていた。

遺物は、ほぼ全面から出土しているが、特にカマド火床と前面の窪みに集中している。火床からは、土師器甕（No.４・６・７）が、前面の窪みからは土師器、須恵器の甕（No.５・８、３）が出土している。また、南壁寄りからは、砥石（No.12）が出土している。



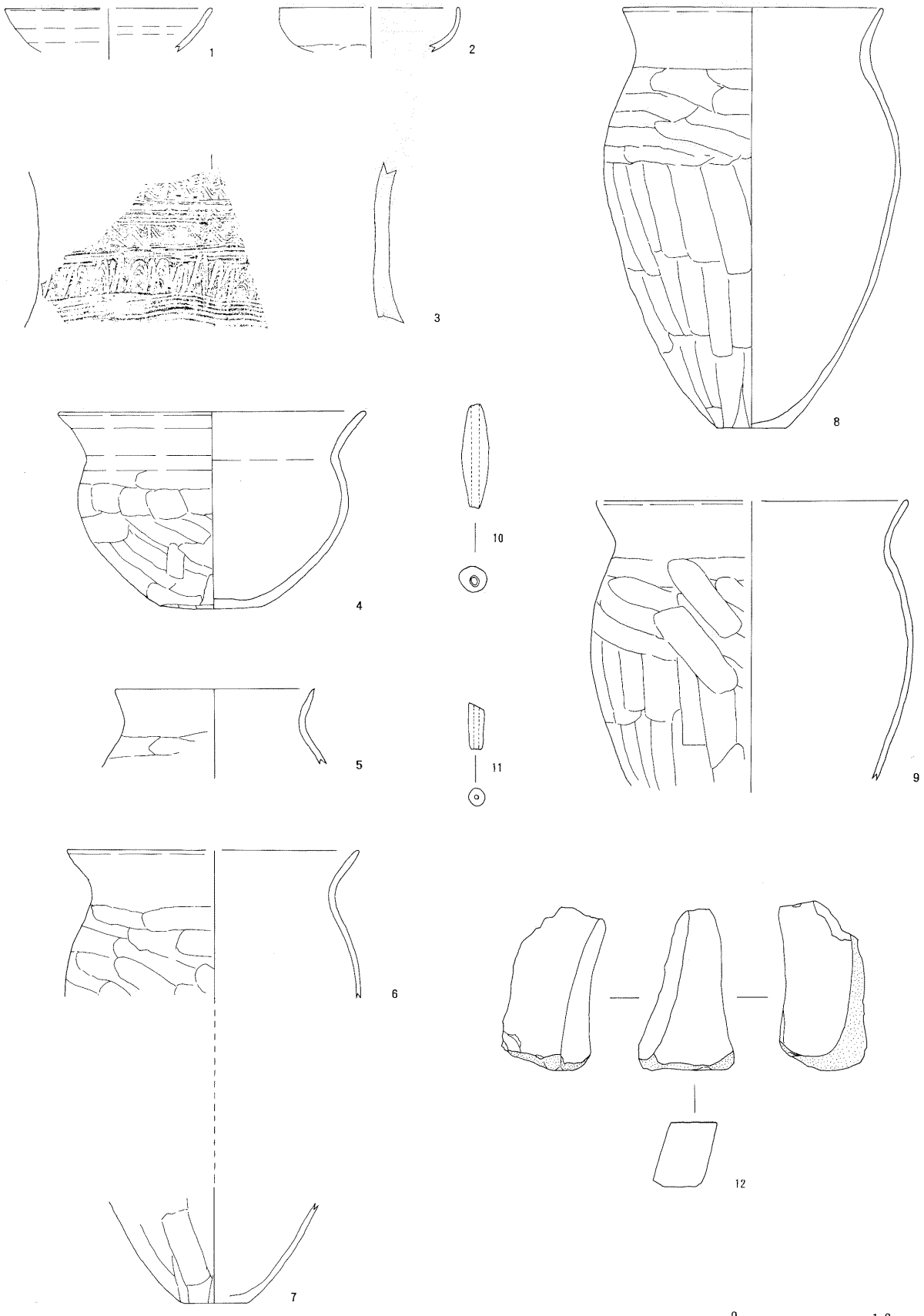
第65図　32号住居跡カマド



32号住居跡カマド土層

1　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）シルト質。しまり良く硬質。粘性は弱い。酸化鉄粒子を含む。
2　暗オリーブ褐色（2.5 Y 3／3）シルト質。しまり良くやや粘性がある。1層よりも酸化鉄の含有量が多い。
3　黒褐色（2.5 Y 3／2）シルト質。粘性が強く粘土質に近い。
4　褐色（7.5 YR 4／4）シルト質。しまり良く硬質。粘性は強くない。
5　赤褐色（5YR 4／6）焼土を中心とする層。炭化物も含む。
6　にぶい黄褐色（10YR 5／4）シルト質。しまりは悪く粘性も弱い。しかし硬質である。
7　焼土。
8　褐色（10YR 4／6）シルト質。しまりが良く硬質である。粘性は乏しい。
9　青灰色（5BG 6／1）
10　褐灰色（10YR 4／1）シルト質。しまりは良いが硬質ではない。焼土が混ざっている。
11　炭化物層。
12　暗灰黄色（2.5 Y 4／2）シルト質。しまりが良く粘性もある。

第66図　32号住居跡及び遺物出土状況



第67図　32号住居跡出土遺物

第３１表　３２号住居跡出土遺物観察表　（第６７図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 杯	口径（１４．４） 器高 底径	② ① ⑤	①	灰 （N　6/ ）	口縁部 １／５	ロクロ整形。 口唇外面吸炭。
2	土師器 杯	口径（１４．４） 器高 底径	② ④	②	橙 （5YR　7/6）	１／４	全面、横を中心としたナデ。
3	須恵器 甕	頸部径（２５．０）	① ②	②	灰 （N　4/ ）	頸部 １／４	櫛描波状文の間（一部上面）に櫛描平行文。
4	土師器 甕	口径　２１．２ 器高　１３．４ 底径　７．５	②④ ① ③	②	橙 （2.5YR6/6）	一部欠	口縁部横ナデ（３段）。胴部内面ナデ。 外面上位下位は横、中位は斜のケズリ。 底面ケズリ出し、丸味をもつ。黒斑。
5	土師器 甕	口径　１３．２ 器高 底径	①④ ② ③	②	にぶい赤褐 （2.5YR5/4）	上位 のみ	口縁部横のナデ。 胴部内面ナデ、外面横のケズリ。 内外面吸炭。
6	土師器 甕	口径　２０．１ 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	上位 のみ	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面肩横のケズリ、中位斜のケズリ。内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。No.７と同一個体と思われる。
7	土師器 甕	口径 器高 底径　４．８	②④ ① ③	②	明赤褐 （2.5YR5/6）	下位 のみ	胴部内面ナデ、外面底部付近面取り様斜のケズリ。内面炭化物、外面煤付着。 二次加熱。No.６と同一個体と思われる。
8	土師器 甕	口径（１７．８） 器高　２８．８ 底径　４．５	③④ ② ①	②	橙 （2.5YR6/8）	１／３	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面肩横のケズリ、中位以下縦のケズリ。底面付近面取り様。煤付着。二次加熱。
9	土師器 甕	口径（２１．４） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	上半 １／４	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面肩横のケズリ、中位縦のケズリ。煤付着。 二次加熱。
10	土　錘	最大径　１．９ 残存長　７．１ 孔径　０．５					
11	土　錘	最大径　１．１ 残存長　３．３ 孔径　０．３					
12	砥　石	残存長１１．０ 幅　４．３ 厚さ　４．４					３面使用。

第３２表　３３号住居跡出土遺物観察表　（第７１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 杯	口径（１２．２） 器高　３．１ 底径　８．６	①③ ⑤ ②	③	灰白 （2.5YR8/1）	１／８	表面剥離。 底面少くとも周辺部へラケズリ。
2	土師器 杯	口径　１３．１ 器高　３．３ 底径	② ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	３／４	口縁部横のナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
3	土師器 杯	口径　１３．２ 器高　３．０ 底径	② ① ③	②	明赤褐 （2.5YR5/6）	一部欠	口縁部横のナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内面炭化物付着。
4	土師器 杯	口径（１２．６） 器高　３．３ 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	１／３	口縁部横のナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内面炭化物付着。
5	土　錘	最大径　２．４ 残存長　４．８ 孔径　０．５					

33号住居跡（第68図）

大部分がＡＤ－４グリッドに、西南隅がＡＤ－５グリッドに位置しており、192号土坑と重複している。

192号土坑は、本住居跡を寸断しており、本跡より新しい。

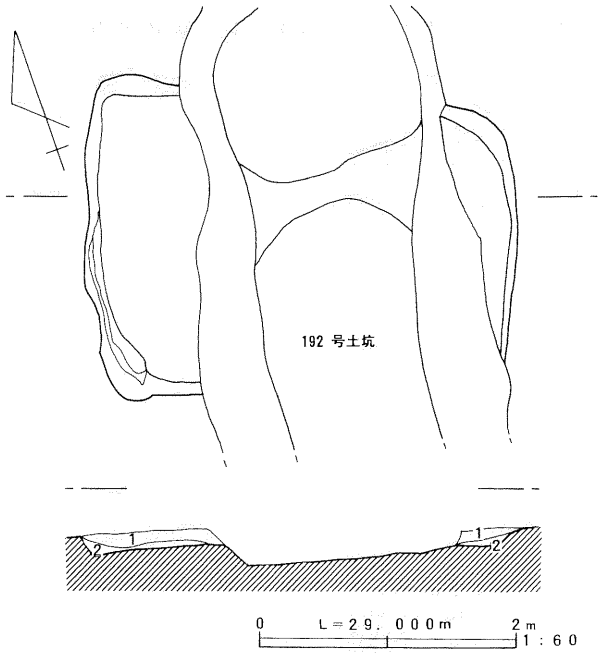
北辺3.28m、西辺2.50mを測り、平面長方形を呈する。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が炭化物粒を多く含む黒褐色シルト層、下層がやはり炭化物粒と焼土粒を含む黄褐色シルト層、最下層が黒褐色シルト層である。

床面は、やや起伏があるものの安定している。

カマドは、検出されていない。

遺物は、須恵器・土師器の杯、土錘等が出土している。



33号住居跡土層

1　黒褐色（7.5 ＹＲ３／１）シルト質。しまり良い。焼土・炭化物粒子を多く含む。

2　黄褐色（１０ＹＲ５／４）シルト質。しまり良い。１層よりは少ないが、焼土・炭化物粒子が若干含まれる。

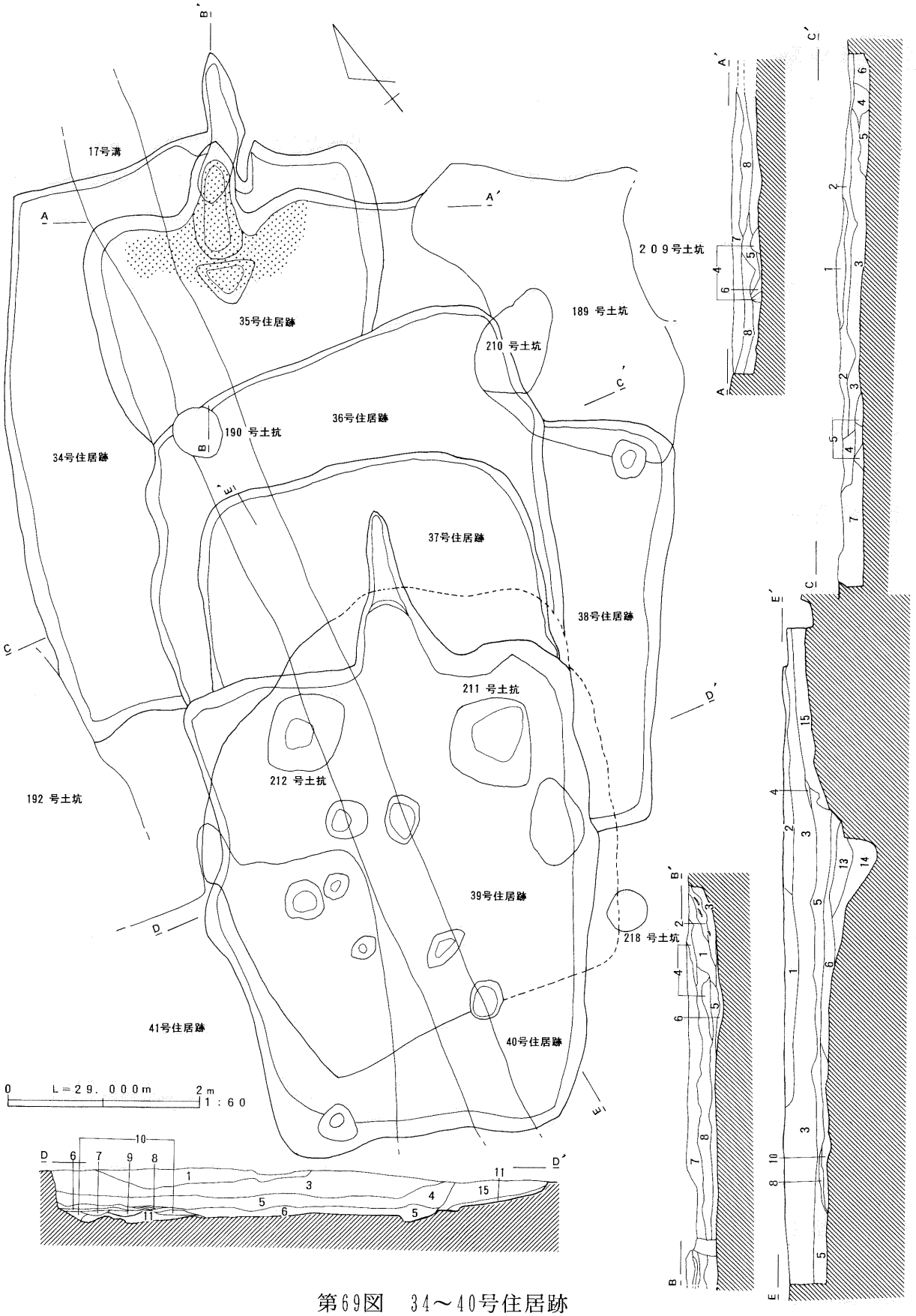
第68図　33号住居跡

34号～40号住居跡（第69図・70図）

大部分がＡＤ－４グリッドに、39号・40号住居跡南半がＡＥ－５グリッドに位置している。すべての住居跡が重複しており、さらに、39号・40号住居跡は、41号住居跡と重複している。また、すべての住居跡にまたがって17号溝が重複している。

第３３表　３４号住居跡出土遺物観察表　（第７１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器甕	口径 器高 底径　４．６	②④ ③ ①	②	淡赤橙 (2.5YR7/3)	１／３	胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。底面付近面取り様横のケズリ。底面ケズリ。内面一部吸炭。外面全面煤付着。二次加熱。
2	土錘	最大径　１．９ 長さ　６．７ 孔径　０．５				完形	
3	土錘	最大径　１．４ 残存長　６．３ 孔径　０．５					
4	土錘	最大径　１．９ 残存長　５．１ 孔径　０．６					



第69図　34～40号住居跡

34号住居跡

36号・37号住居跡に切断され、35号住居跡を切断している。

北辺3.07m、西辺5.95mを測り、南辺、東辺は不明であるものの、平面ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－33°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が少量の炭化物粒・焼土粒を含む暗灰黄色シルト層、下層が酸化鉄粒を含む鈍い黄褐色シルト層、最下層が焼土ブロックを少量含む黒褐色シルト層である。

床面は、起伏もなく安定している。

カマドは、北壁中央やや東隅寄りに設置されている。燃焼部が床上に張り出し、全長は1.90mを測る。燃焼部は、幅32cm、奥行82cmを測る。煙道は、燃焼部から左（北）に屈曲して、幅25cm（高さ15～14cm）で奥壁に至る。断面形は、窪みをもって作られた燃焼部から、弓状に緩傾斜をもって上昇する煙道を経て、ほぼ垂直に立ち上がる奥壁に至る。

遺物は、土師器長甕、土錘等が出土している。

35号住居跡

本住居跡は、34号住居跡の下面で確認されたもので、床面もほとんど重複している。南半を36号住居跡に、東半を189号土坑に切断され、形態・規模共に不明である。

主軸方位は34号住居跡と同じくN－33°－Eを示す。

カマドは、北壁西隅寄りに設置されている。両袖は削平されて存在しないものの、燃焼部及び煙道の一部が床上に張り出す形態をとるものである。全長は1.65mを測る。燃焼部は三角形に窪み、幅60cm、奥行50cmを測る。煙道は、燃焼部中央から、幅25cmで奥壁に至る。断面形は、窪みをもって作られた燃焼部から、僅かな段をもち、煙道に至る。煙道は緩傾斜をもって上昇し、奥壁近くで傾斜やや急にして立ち上がる。煙道部・燃焼部及びその両脇には、炭化物が拡散して堆積していた。

遺物は、土師器杯・甕が出土している。

第34表　35号住居跡出土遺物観察表　（第71図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（13.0） 器高 底径	② ③ ①	②	灰白 (2.5Y 8/2)	上半 1／3	口縁部横ナデ（3段）。口唇部内面に段。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 二次加熱。
2	土師器椀	口径（19.0） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	にぶい赤褐 (2.5YR6/4)	上半 1／6	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面横のケズリ。吸炭
3	土師器甕	口径（19.4） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	にぶい橙 (5YR 7/4)	上半 1／8	口縁部横ナデ（2段）。口唇部再調整。 胴部内面横のナデ、外面斜のケズリ。

36号住居跡

37号・40号住居跡に切断され、34号・35号住居跡を切断している。

北辺は3.07mを測るが、西辺、南辺、東辺は不明であり、平面形態は不明といわざるを得ない。しかしながら、各辺の様子から、方形の形態をとるものと推定される。主軸方位はN－32°－Eを

示す。

本住居跡の覆土は、上層が少量の炭化物粒・焼土粒を含む鈍い黄褐色シルト層、下層が黄褐色シルト層で、部分的に少量の炭化物ブロックを含むオリーブ褐色シルト層のみられる部分もある。

床面は、やや起伏はあるものの安定しており、住居の床と判断されたものである。

カマドは、検出されていない。

遺物もほとんど出土していない。

37号住居跡

40号住居跡に切断され、34号・36号住居跡を切断している。

北辺は3.52mを測るが、西辺、南辺、東辺は不明であり、平面形態は不明といわざるを得ない。しかしながら、北西・北東の隅に丸みをもち、方形の形態をとるものと推定される。

主軸方位は、36号住居跡と同じくN－32°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が少量の炭化物粒を含む鈍い黄褐色シルト層、下層が炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色シルト層、最下層が焼土ブロック・炭化物ブロックを含むオリーブ褐色シルト層である。なお、36号住居跡に部分的にみられるオリーブ褐色シルト層とほとんど区別がつかないが、僅かに炭化物ブロックの存在で区別したものである。

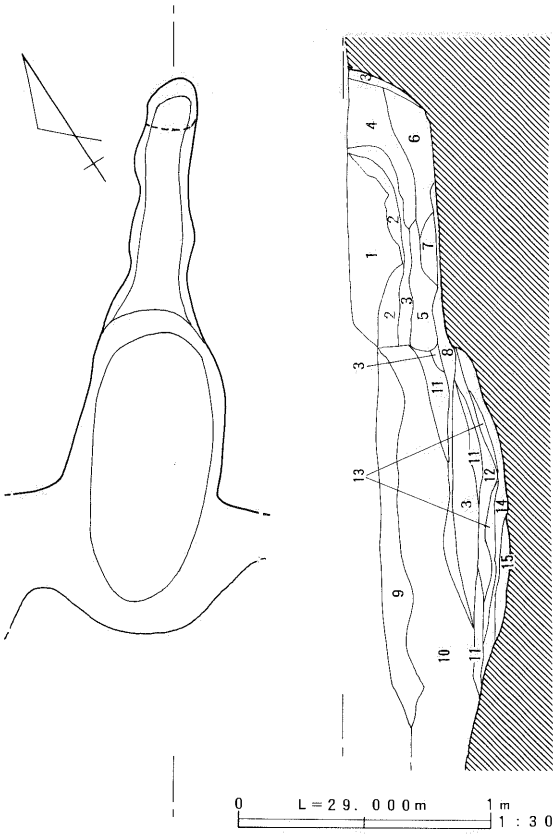
床面は、やや起伏はあるものの安定している。

カマドは、検出されていない。あるいは、南辺に設置されて（36号住居跡も同様か）いたとも思われる。

遺物は、覆土中より、須恵器・土師器杯、土師器甕、石錘、砥石等が出土している。

第35表　37号住居跡出土遺物観察表　（第71図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径（11.0） 器高（4.0） 底径	② ①	①	灰 （N 6/ ）	1／2	ロクロ整形。 底部外面回転ヘラケズリ（2段）。 外面煤付着。
2	土師器杯	口径（11.2） 器高 底径	② ③ ④	②	明赤褐 （2.5YR5/8）	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内面一部炭化物付着。
3	土師器杯	口径 13.0 器高 底径	②① ③ ④	③	明赤褐 （2.5YR5/8）	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 烈点状剥離。
4	土師器杯	口径 11.8 器高 3.3 底径	②④ ① ③	②	橙 （7.5YR7/6）	2／3	口縁部横ナデ（2段）。 全体表面剥離。
5	土師器杯	口径 11.0） 器高（3.5） 底径	②④ ① ③	③	橙 （2.5Y 6/8）	一部欠	口縁部横ナデ（2段、一部3段）。 全体表面剥離。外面黒斑。
6	土師器杯	口径（11.0） 器高 3.7 底径	②④ ① ③	③	橙 （5YR 6/8）	1／4	口縁部横ナデ（2段）。全体表面剥離。 内面炭化物付着。
7	土師器椀	口径 16.2 器高 底径	② ①	②	明赤褐 （2.5YR5/8）	1／2	口唇部横ナデ。体部内面放射状暗文。 外面ケズリ、一部吸炭。
8	土師器甕	口径（18.8） 器高 底径	②④ ③ ①	②	にぶい黄橙 （10YR 7/3）	上位 1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。胴部内面斜のナデ、外面斜のケズリ。 口縁部内面煤付着。
9	土師器甕	口径 13.8 器高 底径	②④ ③ ①	②	にぶい橙 （7.5YR7/4）	上位 1／2	口縁部横ナデ。内外面吸炭。 胴部内面斜のナデ、外面最上位横のケズリ、上位斜のケズリ。内外面吸炭。



34･35･36号住居跡土層　東西・南北（A－A´，B－B´）

1　暗褐色（10YR3／3）シルト質。しまり良い。粘性が少しある。焼土及び炭化物粒子を含む。
2　黒褐色（10YR4／1）シルト質。しまり良い。粘性が少しある。焼土及び炭化物粒子を含む。
3　褐色（7.5 YR4／3）シルト質。しまり良い。粘性が高い。焼土及び炭化物粒子は、1・2層に比して少ない。
4　焼土層。
5　黒褐色（10YR3／1）シルト質。しまりはあまり良くなく、粘性も乏しい。焼土ブロックを少量含む。
6　黒色炭化物層。
7　暗灰黄色（2.5 Y4／2）シルト質。硬質でしまり良いが粘性は乏しい。少量の焼土、炭化物粒子を含む。
8　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。硬質でしまり良く粘性もややある。1層に比して酸化鉄の割合が多い。

34･36･37･38 号住居跡土層　東西（C－C´）

1　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性は乏しく、しまりも良くない。焼土および炭化物粒子を含む。
2　暗褐色（10YR3／3）シルト質。1層よりも粘性、しまり、ともに良く焼土・炭化物も多く含む。
3　オリーブ褐色（2.5 Y3／3）シルト質。粘性は乏しくしまりも良くない。焼土
（2㎝大）炭化物（2㎝大）のブロックを多く含む。遺物を多く包含する。
4　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性がありしまりも若干良い。少量の焼土粒子を含み、炭化物粒子も含む。
5　黄褐色（2.5 Y5／4）シルト質。粘性があり、しまりも良い。炭化物・焼土は含まない。
6　オリーブ褐色（2.5 Y4／3）シルト質。粘性、しまりともあまり良くない。少量の炭化物を含む。
7　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）シルト質。粘性はややあり、しまり乏しい。焼土・炭化物の微粒子を含む。

38･39･40号住居跡土層　東西（D－D´）

1　黒色（10YR2／1）シルト質。粘性、しまりとも乏しい。炭化物・焼土を多く含み、下層に遺物を多く包含する。
2　E－E´、F－F´の9層と同一。
3　E－E´、F－F´の10層と同一。
4　暗灰黄色（2.5 Y4／2）シルト質。若干の粘性があり、しまりも良い。焼土・炭化物が5㎜の大きさで混じる。
5　褐色（10YR4／4）シルト質。若干の粘性はあるが、しまりは5層より弱い。焼土・炭化物などは少量含む。
6　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）シルト質。粘性、しまりはほとんどない。灰層。
7　暗赤褐色（5YR3／2）シルト質。粘性があるがしまりはあまり良くない。1㎝大の焼土ブロックも多く含み、焼土を中心とする層。炭化物も含む。
8　褐色（10YR4／4）6層と同質。
9　暗灰黄色（2.5 Y4／2）シルト質。粘性、しまりとも乏しい。焼土・炭化物5㎜程を含むが、量は極めて少ない。
10　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）シルト質。砂質に近い。1㎝大の焼土と5㎜程の炭化物を含む。
11　黒色（10YR2／1）シルト質。粘性が若干あり、ややしまっている。焼土ブロック1㎝程を多く含み、炭化物を壁とする層。
12　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）シルト質。粘性があり、しまりも良い。炭化物5㎜前後を多く含む。
13　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）砂質。12層と比べ砂っぽい。
14　黒色（10YR2／1）シルト質。炭化物を中心とする層。焼土も含む。1層よりも炭化物の量が多く黒色が強い。
15　黄褐色（10YR5／6）シルト質。少量の炭化物と焼土粒子を含む。

37.39.40号住居跡土層　南北（E－E´、F－F´、40号住居跡カマド）

1　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。硬質でしまり良い。粘性は乏しい。浅間系と思われる火山灰を、全体的にまんべんなく少量含む。焼土の微粒子も含まれている。
2　黒褐色（7.5 YR3／2）1層と同質。ただしカマド、煙道の影響をうけて焼けている。
3　焼土層。8割以上を焼土がしめる層。
4　褐色（7.5 YR4／3）シルト質。やや粘性がありしまり良い。焼土粒子を少量含む。
5　暗褐色（10YR3／3）シルト質。やや粘性がありしまり良い。焼土粒子及び炭化物ブロックを含む。
6　黒褐色（10YR3／1）シルト質。粘性が強くしまり良い。焼土ブロックを多く含み、炭化物粒子も含む。
7　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性が強くしまり良い。焼土ブロックなどは含まない。炭化物は少量含む。
8　黒色炭化物層。8割以上を炭化物が占める層。
9　褐色（10YR4／4）シルト質。極めて微粒、粘性は乏しくしまりも良くない。焼土粒子を少量含む。
10　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性は乏しくしまりも良くない。1層よりも多く焼土粒子を含む。
11　黄灰色（2.5 YR4／1）シルト質。若干粘性を含み、炭化物を多く含む。焼土粒子も混じる。
12　浅黄色（2.5 YR7／3）粘土質。灰層。粒子が極めて細かく、しまりの良くないサラサラした層。炭化物・焼土等は混じっていない。
13　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性はあまりないがしまりは良い。所々に焼土を含む。
14　暗褐色（10YR3／3）粘土質。炭化物を中心とする層。焼土粒子を含む。
15　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性はあまりなく、しまりも良くない。炭化物粒子を少量含む。

第70図　40号住居跡カマド

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
10	土師器甕	口径（21．4） 器高 底径	④ ③ ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁部 1／4	口縁部横ナデ。吸炭。 胴部内面斜のナデ、外面斜のケズリ。 黒斑。
11	石錘	長さ 7．4 幅 6．2 厚さ 1．2				完形	
12	砥石	長さ 9．0 幅 10．0 厚さ 3．0				完形	1面使用。

38号住居跡

36号・37号・40号住居跡に切断されている。

東辺は4.26mを測るが、西辺、南辺、北辺は不明であり、平面形態は不明といわざるを得ない。しかしながら、東辺から南辺、北辺への接続がそれぞれが直角を示し、方形の形態をとるものと推定される。

主軸方位は、N－40°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、少量の炭化物粒・焼土粒を含む鈍い黄褐色シルト層である。

床面は、起伏をもつすり鉢状であり、安定していない。住居跡としたものの、土坑である可能性も高い。

カマドは、検出されていない。

遺物もほとんど出土していない。

39号住居跡

40号住居跡の上位層中に構築されている。

南辺は3.20mを測るが、西辺、東辺、北辺は丸く脹らみ、それぞれの辺長は計測できない。一応、南北の距離は4.52mを測り、方形を基本とした不整形とする。

主軸方位は、N－20°－Eを示す。

覆土は、大量の炭化物粒・焼土粒を含む黒色シルト層で下位に遺物を多く含む。

床面は、起伏をもち、安定していない。住居跡としたものの、土坑である可能性も高い。

カマドは、検出されていない。

遺物は須恵器杯・高台椀・横瓶、土師器甕、土錘、砥石等が出土している。

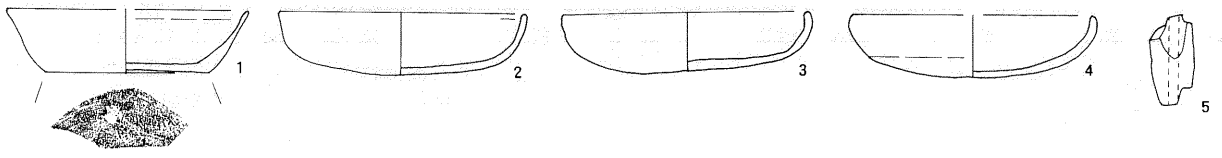
40号住居跡

34号～38号住居跡及び41号住居跡を切断している。また、39号住居跡は、本住居跡の上層中に構築されている。さらに南部では、213号土坑を切断している。

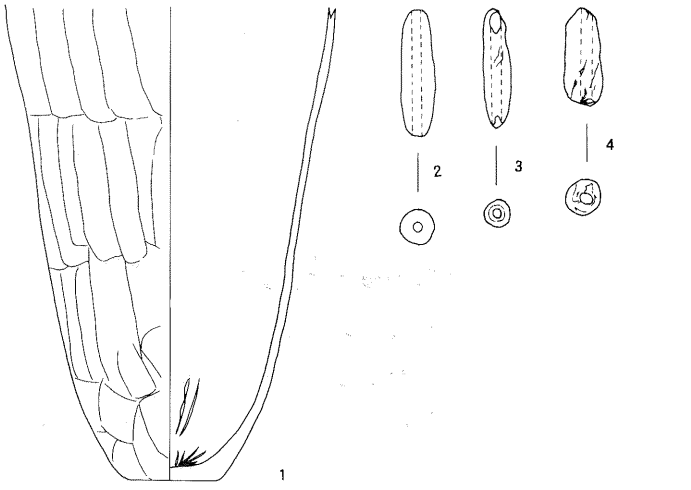
北辺4.02m、西辺5.00m、南辺3.10m、東辺は5.12mを測り、不整形であるものの、平面ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N－34°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が焼土粒を含む鈍い黄褐色シルト層、下層が少量の炭化物粒・焼土粒を含む黄褐色シルト層、最下層が少量の灰・炭化物粒・焼土粒を含む暗オリーブ褐色シルト層である。

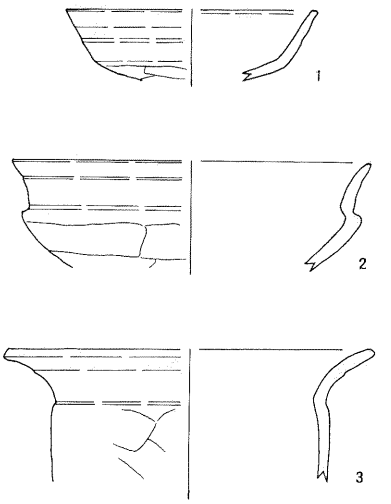
床面は、やや起伏はあるものの、安定している。カマド両脇には、左（西・212号土坑）に60×70cm、右（東・211号土坑）に70×80cmの方形土坑



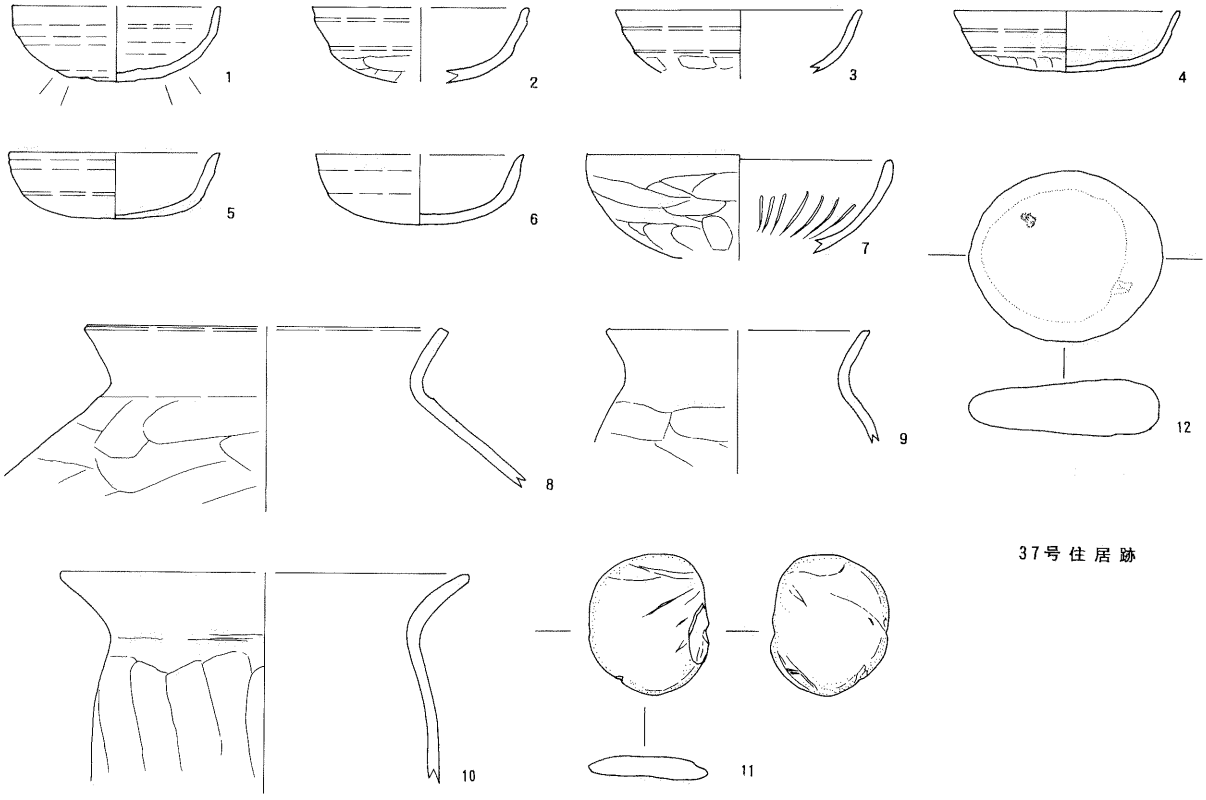
33号住居跡



34号住居跡



35号住居跡



37号住居跡

第71図　33～35・37号住居跡出土遺物

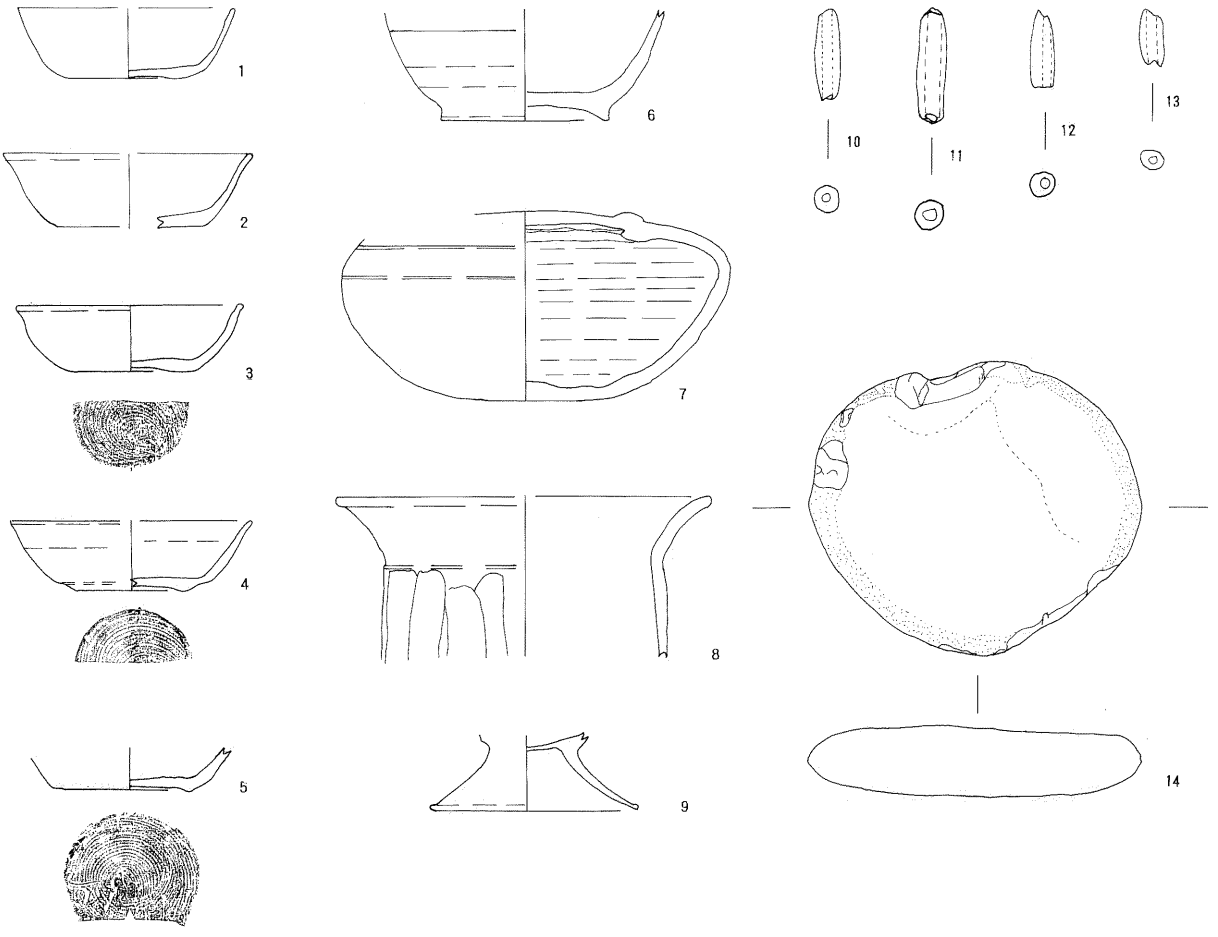
0　10cm
1：4

が見られる。深さは、左48cm、右32cmである。いずれも本住居跡より古く、土坑上面に本跡最下層・暗オリーブ褐色シルト層が堆積している。また、中央部には、７ケ所にピットが見られるが、北側のものが深さ45cm測るほかは、いずれも数cmのものばかりである。しかしこれらピットの覆土は、本住居跡覆土と同一である。

カマドは、北壁中央に全体に壁外に張り出して設置されているが、燃焼部の前面には床上に張り出す形態をとるものである。全長は2.26ｍを測る。燃焼部は長円形に窪み、幅60cm、奥行1.20ｍを測る。煙道は、燃焼部中央から、幅23cmで奥壁に至る。断面形は、窪みをもって作られた燃焼部から、８cmの段を持ち、煙道に至る。燃焼部の窪みは、使用につれて平らに埋もれ、最終時点では、煙道との段差は無くなった。煙道はほとんど水平であるが、直線的に僅かに上昇し、奥壁近くで傾斜を急にして、ほぼ垂直に立ち上がる。煙道の高さは13cmである。燃焼部前面には、炭化物が拡散して堆積していた。

遺物は、灰釉蓋、須恵器杯・椀、土師器杯・甕、土錘等が出土している。

以上の結果、住居跡間の新旧関係は、35号→38号→34号→36号→37号→40号→39号となる。



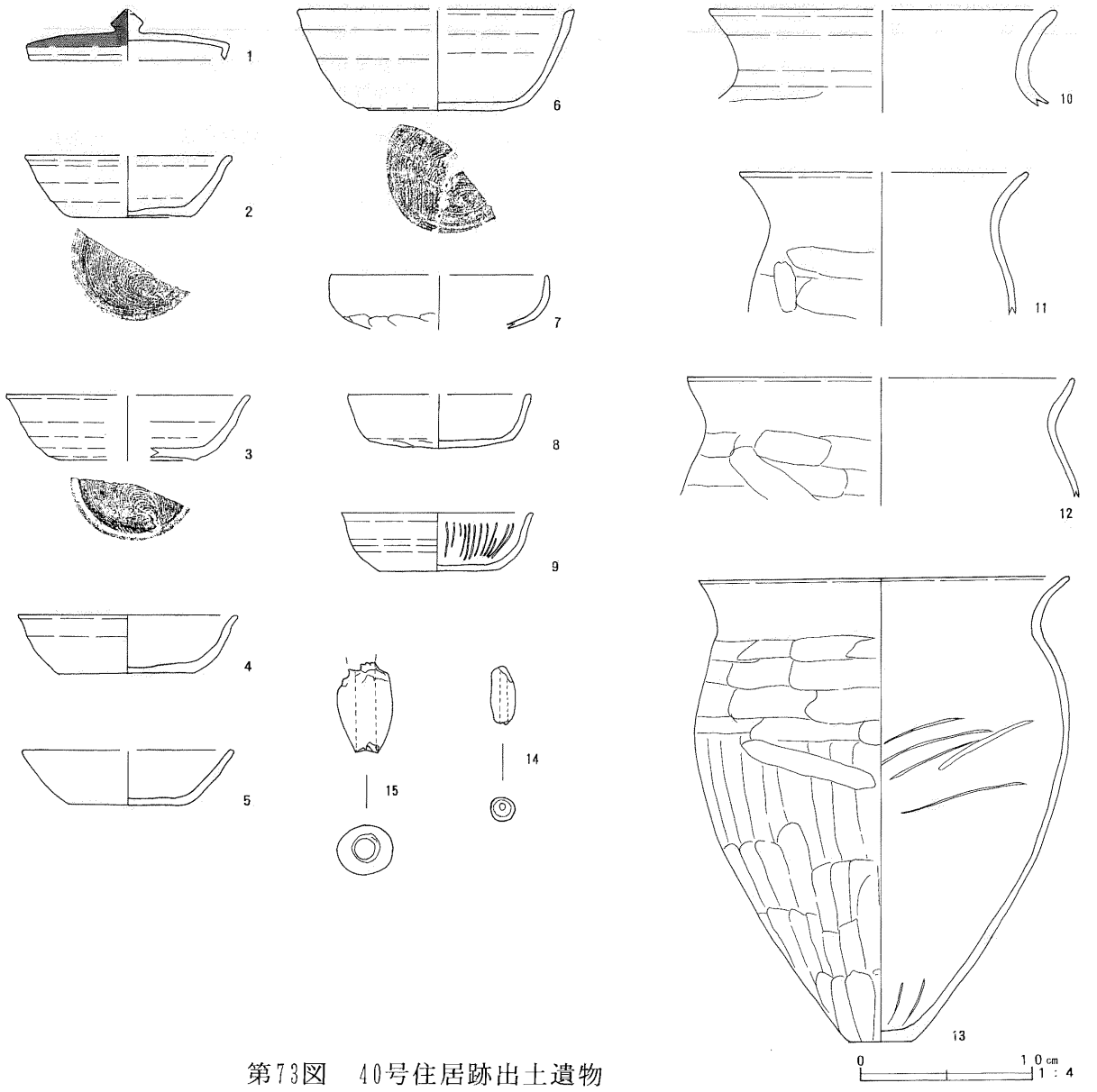
第72図　39号住居跡出土遺物

第３６表　３９号住居跡出土遺物観察表　（第７２図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 杯	口径（ 6．4） 器高（ 3．6） 底径（ 7．0）	① ③ ②	③	灰褐 (5YR 6/2)	1／4	ロクロ整形。 口縁部吸炭。糸切り底。
2	須恵器 杯	口径（13．2） 器高 3．9 底径（ 8．0）	①③ ④ ②	③	灰黄 (2.5Y 6/2)	1／3	ロクロ整形。 表面剥離。還元不全。
3	須恵器 杯	口径 12．2 器高 3．5 底径 7．6	① ⑤	①	灰 (N 4/)	1／2	ロクロ整形。 口唇部吸炭。糸切り底。
4	須恵器 杯	口径（14．6） 器高 3．7 底径 5．6	②	②	灰白 (N 7/)	1／2	ロクロ整形。 口唇部吸炭。糸切り底。
5	須恵器 杯	口径 器高 底径 7．5	① ⑤	①	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	底部のみ	ロクロ整形。 糸切り底。還元不全。
6	須恵器 高台椀	口径 器高 底径（ 9．0）	① ② ④	③	灰白 (5Y 7/1)	1／3	内面炭化物付着。 外面煤付着。
7	須恵器 横瓶	口径 器高 底径	① ② ⑤	①	黄灰 (2.5Y 6/1)	1／2	ロクロ整形。天井部で接合。上面に釦。 肩部から上面にかけて４条の沈線。 下部平行叩き。底部ケズリ。
8	土師器 甕	口径（19．8） 器高 底径	③ ①	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	上位 1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。胴部内面ナデ、 外面縦のケズリ。 内面に吸炭。
9	土師器 台付甕	口径 器高 底径 11．2	② ④	③	淡橙 (5YR 8/3)	脚部のみ	内外面ナデ。 外面一部吸炭。
10	土錘	最大径 1．4 残存長 4．7 孔径 0．5				一部欠	
11	土錘	最大径 1．5 残存長 6．0 孔径 0．7				一部欠	
12	土錘	最大径 1．4 残存長 4．0 孔径 0．5					
13	土錘	最大径 1．2 残存長 2．9 孔径 0．5					
14	砥石	残存長15．5 幅 17．6 厚さ 3．7					片面使用。

第３７表　４０号住居跡出土遺物観察表　（第７３図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	蓋	口径（13．4） 器高 2．9 底径	②	①	灰黄 (2.5Y 6/2)	1／3	灰釉。
2	須恵器 杯	口径（12．2） 器高 3．6 底径（ 7．0）	①⑤ ② ④	①	灰 (N 5/)	1／2	ロクロ整形。口唇部吸炭。 外面底糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ。
3	須恵器 杯	口径（14．0） 器高 底径 8．0	②④ ① ③	③	灰白 (7Y 7/1)	1／3	ロクロ整形。糸切り底。 外面底吸炭。
4	須恵器 杯	口径 12．8 器高 3．4 底径	③④ ①⑥ ②	③	灰白 (2.5YR7/1)	1／2	ロクロ整形。 表面剥離。還元不全。 糸切り底。
5	須恵器 杯	口径（12．3） 器高 3．2 底径	③④ ①⑥ ②	③	浅黄 (2.5YR7/3)	1／3	ロクロ整形。表面剥離。 糸切り底。還元不全。



第73図　40号住居跡出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
6	須恵器 椀	口径（16.2） 器高　5.9 底径（7.8）	② ①	②	灰白 （N　7/ ）	1／4	ロクロ整形。 口唇部再調整。 糸切り後、周辺部ヘラケズリ。
7	土師器 杯	口径（12.8） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	上半 1／4	口縁部横ナデ、下位ナデ。 体部ケズリ。
8	土師器 杯	口径（10.8） 器高　3.2 底径	②	①	にぶい橙 （5YR　6/4）	1／3	口縁部横ナデ、下位ナデ。 体部ケズリ。
9	土師器 杯	口径　11.4 器高　3.4 底径　6.8	① ③ ②	①	橙 （2.5YR6/8）	1／2	口縁部横ナデ。体部内面ナデ後、放射状暗文。 底面ケズリ。
10	土師器 甕	口径（20.2） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 （2.5YR6/8）	上位 1／3	口縁部横ナデ（3段）。 胴部横のケズリ。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
11	土師器甕	口径 17.0 器高 底径	②④ ③ ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	上位 1／5	口縁部横ナデ。胴部横のケズリ。 内面煤付着。
12	土師器甕	口径（22.6） 器高 底径	② ①	②	橙 (2.5YR6/6)	上位 1／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面最上位横ケズリ、上位斜のケズリ。煤付着。
13	土師器甕	口径 21.6 器高 27.3 底径 4.0	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	2／3	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面上位横のケズリ、中位縦のケズリ。
14	土錘	最大径 1.5 残存長 3.5 孔径 0.4					
15	土錘	最大径 3.2 残存長 5.3 孔径 1.2					

41号住居跡（第74図）

ＡＤ－４、ＡＥ－４、ＡＤ－５、ＡＥ－５グリッドにかけて位置している。東半部で40号住居跡に切断されており、逆に西半部で45号住居跡を切断している。また南部では213号土坑を切断している。

北辺3.56m、西辺3.86m、南辺3.65m、東辺推定4.00mを測り、隅の丸い正方形を呈するものの、北辺東半が北に張り出すため、平面長方形の感を呈する。主軸方位はＮ－32°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が少量の炭化物・焼土粒を含むオリーブ褐色シルト層、下層がやはり焼土ブロックを含む黄褐色シルト層であり，壁際に、砂に近い灰黄褐色シルト層がみられる。

床面は、かなり凹凸がみられ不安定である。

カマドは、北東壁中央やや北隅寄りに設置されている。大部分が40号住居跡に切断されており、全体の形態・規模は不明であるが、壁外に平面三角形に張り出している。燃焼部は床上に脹らみ、火床は、40号住居跡床面下に存する（第74図・Ｄラインセクション図７～10層）。

遺物は、須恵器杯が出土している。

第３８表　４１号住居跡出土遺物観察表　（第７６図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径 13.0 器高 3.6 底径 7.4	①④ ②⑥ ③	③	明褐灰 (7.5YR7/2)	一部欠	ロクロ整形。 表面剥離。還元不全。
2	須恵器杯	口径 器高 底径（7.8）	① ⑤	①	灰 (N 6/)	底部 1／2	ロクロ整形。 糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ。

42号・43号住居跡（第77図・78図）

ＡＥ－４グリッドから、ＡＥ－５グリッドにかけて位置している。43号住居跡が42号住居跡を切断している。また、42号住居跡の覆土より上面に17号溝が存しており、42号住居跡は、220号土坑を切断している。なを、43号住居跡は、東・南の大部分が調査区外に及んでいる。

42号住居跡

北辺4.10m、西辺3.40m、南辺3.42m、東辺推定3.60mを測り、不整形ながら平面正方形を呈する。主軸方位はN－32°－Eを示す。

覆土は、上層が炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルト層であり、43号住居跡上層と同一である。下層は、炭化物を主体に焼土ブロックの混在層、最下層が少量の炭化物・焼土粒を含む灰黄褐色シルト層である。また、壁際に焼土ブロックを少量含む炭化物がみられる。

床面は,ほぼ水平で安定しており、北東壁下中央に37×68cm、深さ9cmのピットがみられる。

カマドは、北壁東隅に設置されている。左（西）袖が床面上に67cm張り出すのに対し、右（東）袖は28cmしか張り出さず、また、燃焼部の奥行方向も西に振れているためアンバランスな形態を示す。燃焼部は、前面幅58cm、奥幅37cm、奥行82cmを測る。煙道は、主軸方位と一致し、前面幅26cm、奥幅13cm、奥行102cmを測る。断面形は、窪んだ燃焼部から10cmの段をもち、煙道は直線的に緩傾斜をもって上昇する。全長は1.84mを測る。

遺物は、土師器杯、須恵器甕・壷・スラッグが出土している。

第39表　42号住居跡出土遺物観察表　（第77図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（15．6） 器高 底径	③④ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	口縁部横ナデ。 口縁部内外面ナデ。 体部ケズリ。
2	土師器杯	口径（17．2） 器高　3．5 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR　7/8)	1／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 内面炭化物。
3	須恵器大甕	口径（31．4） 器高 底径	①	①	灰 (N　5/)	口縁部 1／8	ロクロ整形。 折り返し口縁。内面に落下壁付着。 外面一部溶解している。
4	須恵器壷	口径 器高 底径（　9．4）	① ②	①	黄灰 (2.5Y 4/1)	下半 1／3	ロクロ整形。 底部内面一部灰釉。
5	土錘	最大径　1．4 残存長　5．0 孔径　0．35					

43号住居跡

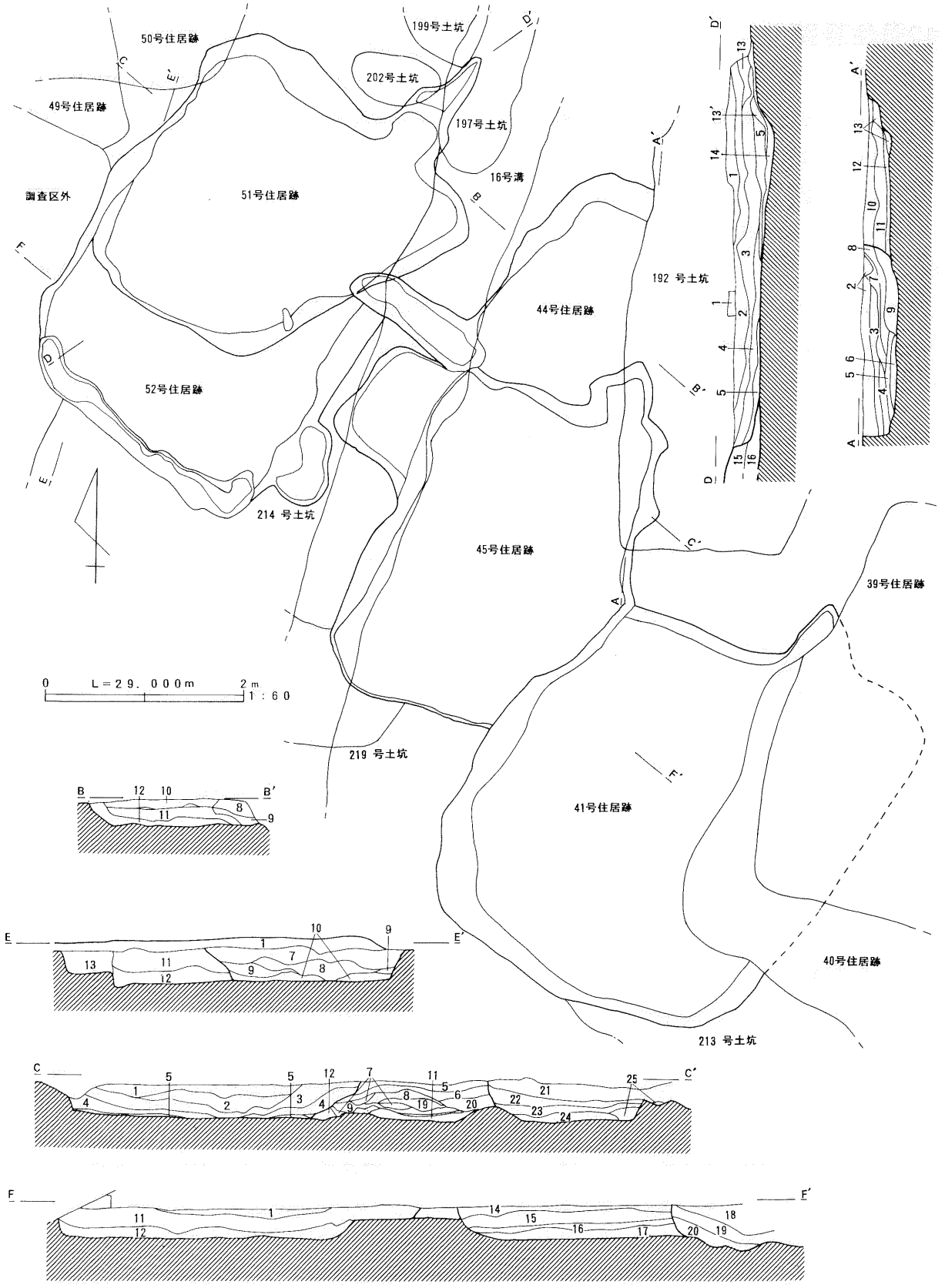
北辺と西辺の一部のみの調査であり、規模・形態共に不明であるが、平面方形を呈すると思われる。主軸方位はN－34°－Eを示す。

覆土は、上層が炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルト層であり、42号住居跡上層と同一である。下層は、暗灰黄褐色シルト層である。また最下層として、部分的に灰黄褐色シルト層がみられる。

床面は、ほぼ水平で安定している。

カマドは、北壁に設置（詳細な位置は不明）されており、すべて壁外に張り出す形態をとって、上下2面確認されている。

上面（第Ⅱ期カマド）は、主軸方位に対して西に振れ（第78図中Aライン方向）、下面（第Ⅰ期カマド）は、主軸方位を示す（第78図Bライン方向）。燃焼部は、ほとんど同一の規模をもち、幅59cm、奥行76cmを測る。　また煙道奥行は、上面が50cmを測り、下面が84cmを測る。断面形は,窪んだ燃焼部から上面が10cm、下面が8cmの段をもち、煙道は弓状に傾斜して上昇する。全長は、上面が1.26m、下面が1.60mを測る。本来、住居跡



第74図　41・44・45・51・52号住居跡

44・45 号住居跡土層（Ａ－Ａ´，Ｂ－Ｂ´）

2　褐色（7.5 ＹＲ４／４）シルト質。少し灰色が混じる。しまり良い。
3　暗褐色（7.5 ＹＲ３／４）シルト質でしまり悪い。少量の焼土ブロックが入る。
4　明褐色（7.5 ＹＲ５／６）８層と同一段階の堆積と思われ、レベル的には同一。８層より炭化物・焼土の混じりが少ない。土質は同一。
5　黄褐色（１０ＹＲ５／６）シルト質。しまり良い。５層下部には酸化鉄が少量認められる。
6　褐色（１０ＹＲ４／６）５層よりもしまりが悪く、色調も暗めである。
7　にぶい赤褐色（５ＹＲ４／４）焼土を中心とする層。（カマド天井崩落部分）
8　褐色（7.5 ＹＲ４／３）焼土が混じる。炭化物を中心とする層。
9　にぶい赤褐色（５ＹＲ４／３）シルト質でやや粘性がある。下部には炭化物を主体とする灰層がある。
10　褐色（7.5 ＹＲ４／４）シルト質でやや硬めである。同じシルト質の灰色が混じる。浅間系と思われる。白色微粒子（火山灰）がまんべんなく混じっている。
11　褐色（7.5 ＹＲ４／４）１０層よりも灰色の混じりが多い。サラサラしている。
12　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）土質的には１１層に近い。シルト質でしまり良い。
13　褐色（１０ＹＲ４／６）軟質で砂質の強いシルト質。しまりは良くない。

45・51号住居跡土層（Ｃ－Ｃ´，Ｄ－Ｄ´）

1　黒褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質。しまり良い。炭化物及び焼土の微粒子を含む。酸化鉄も多い。
2　灰褐色（7.5 ＹＲ４／２）シルト質。しまり良い。１層よりも粘性が強く含有する。焼土ブロック・炭化物ブロックも大きい。３層の土がブロック状に少量含まれる。
3　暗灰黄色（2.5 Ｙ５／２）シルト質。しまりやや良い。粘性は弱い。炭化物ブロック・焼土ブロックなどは含まない。浅間系の白色軽石微粒子を含む。炭化物も少量入っている。
4　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。しまり良く粘性が強い。炭化物ブロック・焼土ブロックが少量含まれている。
5　褐灰色（7.5 ＹＲ４／１）シルト質。しまり良く粘性が感じられる。
6　褐灰色（１０ＹＲ４／１）シルト質。しまりやや悪い。粘性は弱く砂質に近い。炭化物・焼土の微粒子を含む。
7　焼土ブロック。
8　黒褐色（１０ＹＲ２／１）シルト質。しまりやや良く砂っぽい。炭化物のやや大きめのブロックが入っている。焼土の量も多い。
9　黒褐色（7.5 ＹＲ３／２）シルト質。粘性が強くしまり良い。焼土・炭化物のブロックが入っている。含有量も比較的多い。灰白色の灰が少量入っている。
10　暗灰黄色（2.5 Ｙ４／２）粘土質。しまり良い。
11　９層と同一。
12　７層と同一。
13　にぶい赤褐色（2.5 Ｙ４／３）焼土を中心とする層。13´層は焼土ブロック赤色（１０Ｒ５／８）を中心とする層で、天井の崩落部分と思われる。
14　炭化物層。カマドの灰層。
15　暗灰黄色（2.5 Ｙ５／２）シルト質。しまりやや悪く、粘性は弱い。土質、土色的には３層に近いが、浅間系火山灰や炭化物・焼土ブロックは含まない。
16　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。砂っぽく粘性は弱い。
17　灰黄褐色（１０ＹＲ５／１）シルト質。しまり良い、粘性は弱い。
18　褐色（１０ＹＲ４／４）シルト質。しまりやや良い、粘性は弱いが１７層よりはある。
19　暗オリーブ褐色（2.5 Ｙ３／２）シルト質、粘性は弱く砂っぽい。小指大の焼土ブロックが混じる。
20　暗褐色（１０ＹＲ３／３）シルト質。しまりやや良い。焼土や炭化物の微粒子を多く含む。
21　別図面　４４号・４５号カマドの１層と共通。
22　別図面　４４号・４５号カマドの２層と共通。
23　別図面　４４号・４５号カマドの５層と共通。
24　別図面　４４号・４５号カマドの７層と共通。
25　黒褐色（7.5 ＹＲ３／２）シルト質。炭化物を中心とする層。焼土ブロックも多く含む。

41・45・51・52 号住居跡土層（Ｅ－Ｅ´，Ｆ－Ｆ´）

1　黒褐色（１０ＹＲ３／１）シルト質。酸化鉄粒子を多く含む。
7　灰褐色（7.5 ＹＲ４／２）５１号の２層。
8　暗灰黄褐色（2.5 Ｙ５／２）５１号の３層。
9　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）５１号の４層。
10　褐灰色（7.5 ＹＲ４／１）５１号の５層。
11　暗灰黄色（2.5 Ｙ５／２）５２号の１層。５１号の図面の１５層。
12　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）５２号の２層。５１号の図面の１６層。
13　褐色（１０ＹＲ４／６）シルト質。しまりはあまり良くないが硬質。焼土・炭化物などは含まない。
14　別図面　　４４号・４５号カマドの１層と共通
15　別図面　　４４号・４５号カマドの２層と共通
16　別図面　　４４号・４５号カマドの５層と共通
17　別図面　　４４号・４５号カマドの７層と共通
18　オリーブ褐色（2.5 Ｙ４／３）シルト質。粘性、しまりとも乏しい。焼土・炭化物の粒子を少量含む。
19　黄褐色（2.5 Ｙ５／３）シルト質。粘性しまりとも乏しいが１８層より硬質焼土ブロックが少量入る。（量は１８層より少ない）
20　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。砂質に近い。粘性、しまりとも乏しい。炭化物・焼土等は見当たらない。

主軸方位と一致して設置されたものを、何らかの理由で、燃焼部の上部構造を利用しながら、煙道のみを付け替えたものとすることができる。なお、両面のカマドとも、燃焼部から床面上に灰層が広く堆積していた。

遺物は、須恵器杯・高台椀が出土している。

第４０表　４３号住居跡出土遺物観察表　（第７８図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径（１２．８） 器高　４．７ 底径（５．６）	⑤ ①	①	緑灰 (N　5/1)	２／５	ロクロ整形。 糸切り底。 外面一部吸炭。
2	須恵器杯	口径（１３．２） 器高　４．０ 底径（６．５）	③ ① ②	③	灰白 (2.5Y 7/1)	１／４	ロクロ整形。 糸切り底。
3	須恵器高台椀	口径（１４．６） 器高　６．３ 底径　７．２	② ① ⑥	①	灰 (N　4/)	１／２	ロクロ整形。 内面炭化物付着。 糸切り底。付高台。

44号・45号住居跡（第74図・75図）

ＡＤ－４グリッドから、ＡＤ－５グリッドにかけて位置している。共に、東半部で192号土坑に切断されている。また西部では16号溝が両住居跡の覆土上面に存している。

44号住居跡

東半部で192号土坑に切断されており、また南半部は45号住居跡に切断されている。

このため、形態・規模共に不明である。主軸方位はＮ－55°－Ｗを示す。

本住居跡の覆土は、褐色シルト・灰色シルト混在層であり、白色軽石微粒子（浅間系か）を多量に含んでいる。

床面は、やや起伏があるものの安定している。

カマドは、西壁に設置（詳細は不明）されている。カマド自体の残存状況が悪く、すべての壁が剥落した状態であり、さらに45号住居跡による削平もあって、形骸のみであるといわざるを得ない。しかし、遺物の残存状況からすると、燃焼部が床上に脹らむ形態をとるものとみられる。

遺物は、カマド周辺から、土師器杯・甕等が出土している。

第４１表　４４号住居跡出土遺物観察表　（第７６図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１１．５） 器高 底径	④ ①	②	橙 (5YR 6/6)	上半 １／４	口縁部斜ナデ。 胴部内面縦のナデ、外面縦のナデ。
2	土師器甕	口径（２２．４） 器高　５．０ 底径	①④ ③ ②	②	橙 (2.5YR6/6)	上位 １／４	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ。外面横のケズリ、一部斜のケズリ。吸炭。
3	土師器甕	口径（２５．２） 器高（３１．７） 底径　４．２	④ ① ③ ②	②	明赤褐 (5YR 5/6)	１／４	口縁部横ナデ。胴部内面上位ナデ、下位斜のナデ。外面最上位横ケズリ、上下位斜のケズリ。一部炭化物付着。吸炭。底面付近面取り様横のケズリ。底面ケズリ。

45号住居跡

東半部で192号土坑及び41号住居跡に切断されており、北半部では44号住居跡を、また西部では219号土坑を切断している。

南北3.46m、東西2.50mを測り、平面長方形を呈する。また北隅は、南北1.18m、東西1.00mの規模で西側に張り出す。主軸方位はＮ－22°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が少量の炭化物・焼土粒を含む褐色シルト層、中間上層が炭化物粒を含む鈍い黄褐色シルト層、中間下層が炭化物・焼土ブロックを含む黒褐色シルト層、下層が黄褐色シルト層である。

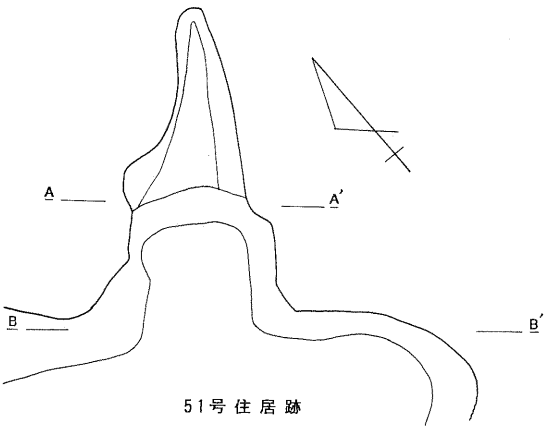
床面は、ほぼ水平に安定している。

カマドは、北東壁東隅に設置されている。大部分が192号土坑に切断されており、全体の形態・規模は不明であるが、燃焼部が壁外に平面三角形に張り出す形態をとるものとみられる。また燃焼部は床上に脹らみをもっていたらしく、灰層が、192号土坑切断面に広がる。煙道等は確認されていない。

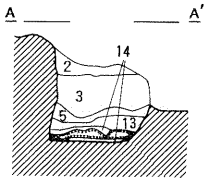
遺物は、須恵器・土師器杯、鉄製刀子、土錘等が出土している。

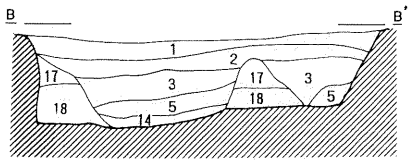
44号住居跡カマド土層

1　褐色（7.5 ＹＲ４／３）シルト質。焼土粒・炭化物粒を含む。
2　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質。１層よりも大きい炭化物が混じっている。砂分は１層以上である。
3　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質。２層とほぼ同質。炭化物等の混入は少ない。４層の土がブロック状に少量入る。
4　オリーブ褐色（2.5 ＹＲ４／３）シルト質。やや粘性がある。２層・３層・４層は一連の堆積土のようである。
5　黒褐色（7.5 ＹＲ３／１）シルト質。やや粘性がある。炭化物・焼土の小ブロックが混じっている。
6　黒褐色（7.5 ＹＲ３／１）シルト質。粘性は弱い。少量の炭化物が含まれる。黄褐色（2.5 ＹＲ５／３）のブロックが入る。
7　黄褐色（2.5 ＹＲ５／３）シルト質。４５号の堀形と思われる。上面には若干の硬化面が見られる。
8　４４号・５１号　　５層。
9　４４号・５１号　　６層。
10　４４号・５１号　　８層。
11　４４号・５１号　　19層。
12　黒褐色（7.5 ＹＲ３／１）シルト質。硬質。焼土が大半を占める。壁面の焼けた土と思われる。
13　４４号・５１号　　11層。
14　炭化物層。　カマドの灰層。
17　灰黄褐色（１０ＹＲ５／１）シルト質。しまり良く粘性は弱い。
18　褐色（１０ＹＲ４／４）シルト質。しまりはやや良い。粘性は弱い。



51号住居跡





（土層注は住居跡土層注に同じ）

第75図　44・51号住居跡カマド

0　L＝29．000m　1m
1：30

第４２表　４５号住居跡出土遺物観察表　（第７６図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径（１４．８） 器高　３．４ 底径　１０．０	② ①	③	灰白 (5Y　7/1)	１／３	回転ナデ。 底面回転ヘラケズリ。 全面吸炭。
2	須恵器杯	口径 器高 底径	①⑥ ② ⑤	①	灰 (N　5/)	底部 １／２	回転ヘラケズリ。
3	須恵器杯	口径 器高 底径	① ② ⑥		灰 (N　6/)	底部 １／２	糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ。
4	土師器杯	口径（１６．２） 器高（　３．５） 底径	④ ①	②	橙 (7.5YR7/8)	口縁部 １／８	内外面ナデ。
5	土師器杯	口径（１５．０） 器高（　２．８） 底径	④ ② ③	②	橙 (5YR　6/6)	口縁部 １／８	内面磨滅。 外面横ケズリ。
6	土錘	最大径　１．７ 残存長　５．２ 孔径　０．６					
7	土錘	最大径　２．０ 残存長　２．６ 孔径　０．７				１／２	
8	刃子	残存長　７．０					

46号・47号住居跡（第79図）

ＡＣ－５グリッドからＡＤ－５グリッドにかけて位置している。両住居跡の上面に９号溝・10号溝が存する。

46号住居跡

南半部は47号住居跡に、中央北寄りは168号土坑に切断されている。

北辺2.70ｍ、西辺3.00ｍ、南辺2.66ｍ、東辺3.40ｍを測り、平面長方形を呈する。主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。

床面は、やや起伏があるものの安定している。

カマドは、東壁中央やや南寄りに設置されている。燃焼部は47号住居跡によって切断され、詳細は不明であるが、奥部が壁外に張り出し、平面三角形を呈し、床上にも脹らむ形態をとるものとみられる。煙道は、幅20cm、長さ1.24ｍの規模をもつ。断面形は、僅かに窪む火床から５cmの段をもって煙道に移行し、煙道は緩く上昇し、直立する奥壁に至る。

遺物は、ほとんど出土していない.

47号住居跡

東半部で48号住居跡を、北半部で46号住居跡を切断している。

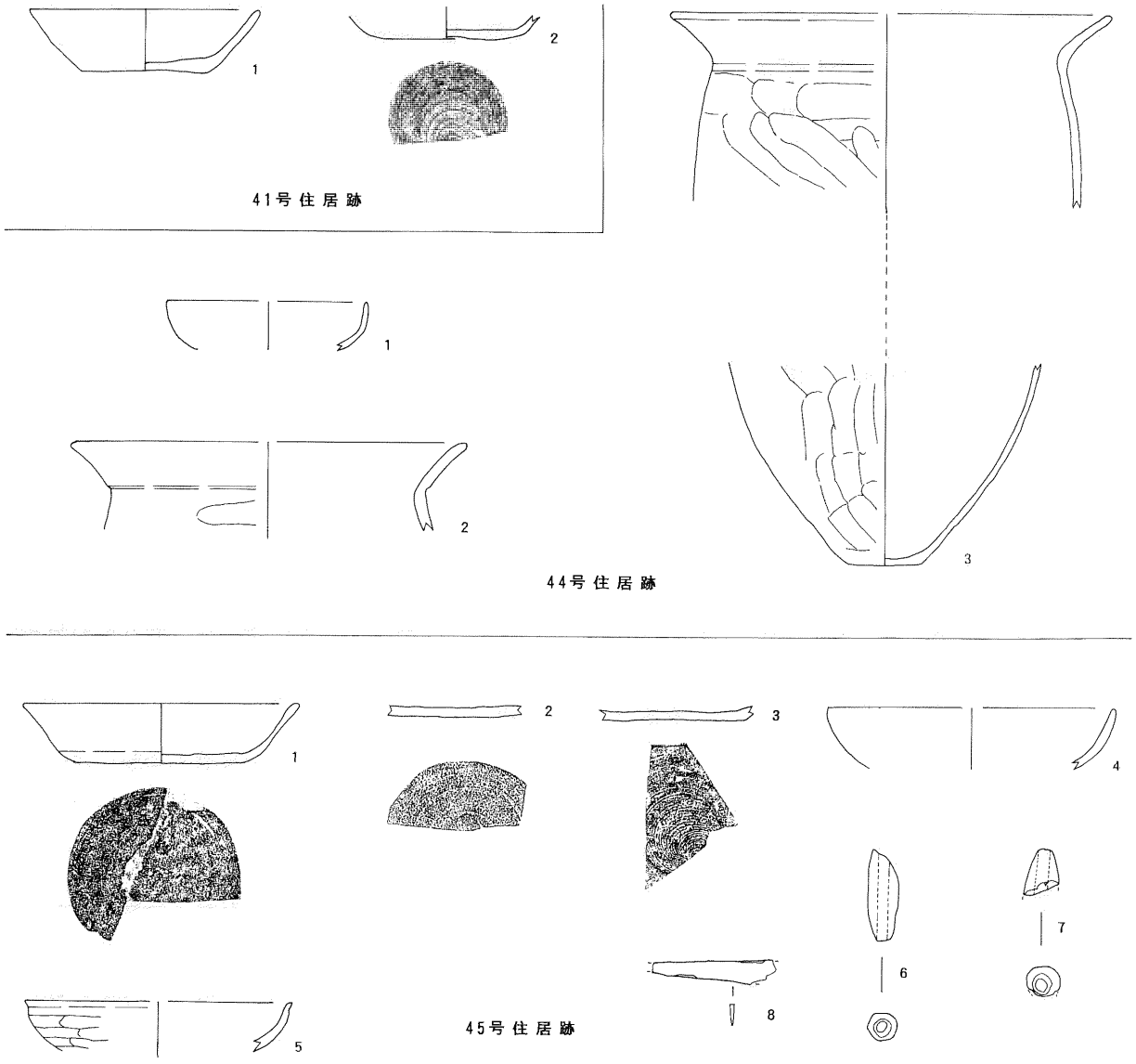
北辺3.90ｍ、西辺3.50ｍ、南辺3.30ｍ、東辺3.70ｍを測る。西壁が脹らみやや不整形であるが、

平面正方形を呈する。主軸方位はN－36°－Eを示す。

床面は、やや起伏があるものの安定しており、壁に沿って4つのピットが穿たれている。規模は、東から43×65cm、35×35cm、28×33cm、27×35cmであり、深さはそれぞれ、28cm、14cm、8cm、10cmである。

カマドは、北東壁の東隅寄りに設置されている。両袖は床上に張り出し（西袖は30cm）、全体の平面形は凸形を呈し、煙道の極端に短い特徴をもっている。全体長は、1.53mを測る。燃焼部は床上にも脹らみ、幅55cm、奥行1.16mを測る。煙道は、幅20cm、奥行37cmの規模をもつ。断面形は、僅かに窪む火床から角度を変えて煙道に移行し、煙道はほぼ水平に続き、直立する奥壁に至っている。

遺物は、須恵器蓋、土師器杯・甕、土錘等が出土している。



第76図　41・44・45号住居跡出土遺物

第４３表　４７号住居跡出土遺物観察表　（第８１図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器蓋	口径　１４．８ 器高 底径	②④ ①⑥ ③	③	橙 (2.5YR6/6)	口縁部 １／６	ロクロ整形。 表面剥離。還元不全。
2	土師器杯	口径　１３．４ 器高　３．２ 底径	①④ ② ③	②	橙 (5YR　7/6)	一部欠	内面ナデ。 外面口縁部ナデ、体部横のケズリ。
3	土師器杯	口径　１２．６ 器高　３．８ 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	完　形	内面ナデ。 外面ケズリの後ナデ。
4	土師器杯	口径　１１．６ 器高　３．０ 底径	① ② ④	②	橙 (2.5YR6/8)	完　形	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、一部剥離。 外面横のケズリの後、横のナデ。 炭化物付着。
5	土師器甕	口径　２２．０ 器高 底径	③ ① ②	②	橙 (5YR　7/8)	上半 の　み	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。内外面頸部にリング状炭化物付着。 二次加熱。
6	土師器甕	口径（２２．４） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上半 １／４	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面上位斜のケズリ、炭化物付着。中位斜のケズリ、一部横のケズリ。煤付着。二次加熱。
7	土師器甕	口径 器高 底径（　４．４）	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	底部 の　み	内外面斜のケズリ。 底面付近、面取り様横ケズリ。底面ケズリ。
8	土師器甕	口径 器高 底径	①④ ② ③	③	にぶい橙 (7.5YR7/3)	底部 の　み	全面ナデ。
9	土　錘	最大径　１．５ 残存長　５．０ 孔径　０．６					

48号～50号住居跡（第80図）

ＡＣ－５グリッドからＡＤ－５グリットにかけて位置している。

48号住居跡

西部で47号住居跡を、また大部分で49号住居跡・50号住居跡を切断している。壁は、池（調査区外）、191号土坑、206号土坑によって分断されている。

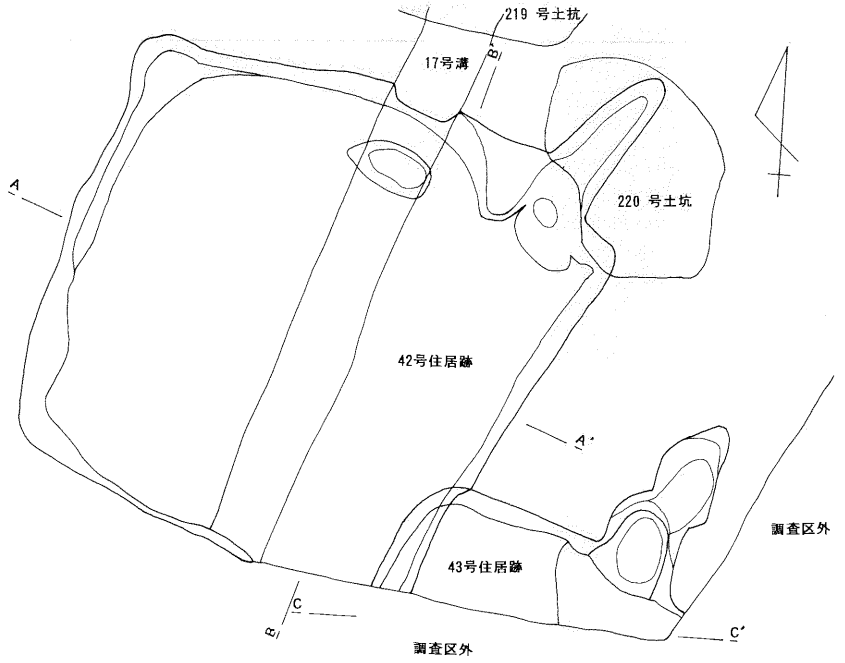
北辺3.60ｍ、西辺3.60ｍ、南辺3.54ｍ、東辺3.00ｍを測り、西隅が丸みをもち、やや不整形ながら平面正方形を呈する。主軸方位はＮ－25°－Ｅを示す。

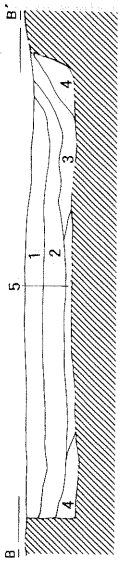
覆土は、上層が焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色シルト層、下層が褐色シルト層である。

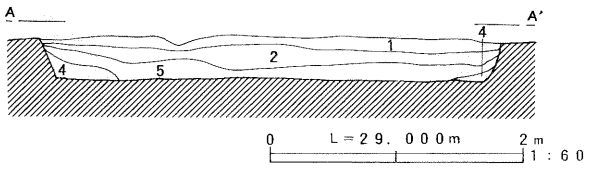
床面は、やや起伏があるものの安定している。西側には３本ピットが穿たれている。いずれも褐色シルト層と50号住居跡の最下層である黄褐色シルト層が流入しており、本住居に伴うものとされる。

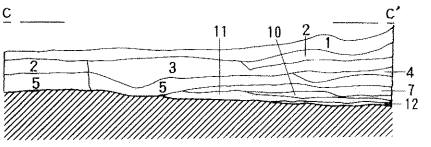
カマドは、北壁中央と東隅の中間に設置されているが、大部分が191号土坑によって切断され、詳細は不明である。床面の状況から、箱形の燃焼部と、この右（東）壁延長線上に煙道を設ける形態をとるものとみられる。煙道は、30cmの長さをもち、煙道の極端に短い特徴をもっている。全体長は１ｍほどであろうか。

遺物は、須恵器杯・盤、土師器杯・甕、砥石、スラッグ等が出土している。



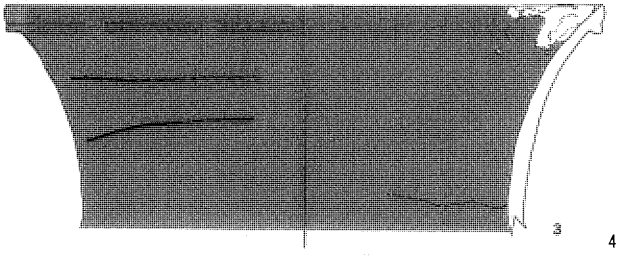


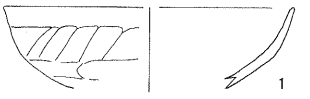


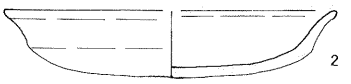


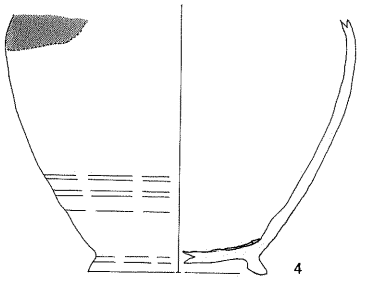
42・43 号住居跡土層

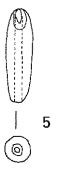
1　黒褐色土（１０ＹＲ３／２）シルト質で粘性は弱い。焼土ブロックおよび炭化物を含む。
2　炭化物層。焼土ブロックを含む。
3　暗灰黄褐色土（2.5 Ｙ５／２）砂質の強いシルト質。炭化物・焼土などは含まない。
4　炭化物層。２層と異なり、ピュアな炭化物層。焼土ブロックを含む。
5　灰黄褐色土（１０ＹＲ５／２）３層よりやや赤味があるが土質は近い。
6　炭化物層。２層や４層とは異なり薄いが、有機質が強い。焼土ブロックを含む（第Ⅱ期カマドの灰層）。
7　灰黄褐色土（１０ＹＲ５／２）５層に近いがやや砂っぽい。
8　焼土層。焼土層カマド天井の崩落。
9　暗赤褐色土（５ＹＲ３／６）焼土を中心とする層であるが焼け具合の甘い層。
10　炭化物層。一番しっかりしている炭化物層のカマド（第Ⅰ期）に伴う炭化物であると思われる。
11　灰黄褐色土（１０ＹＲ５／２）７層に近い。
12　灰層　灰白色の灰層、他の炭化物層とは異なる。
13　褐色土（１０ＹＲ４／４）シルト質。焼土ブロック及び炭化物ブロックが少量混ざる。
14　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質であるがやや粘土っぽいカマドの堀かた。







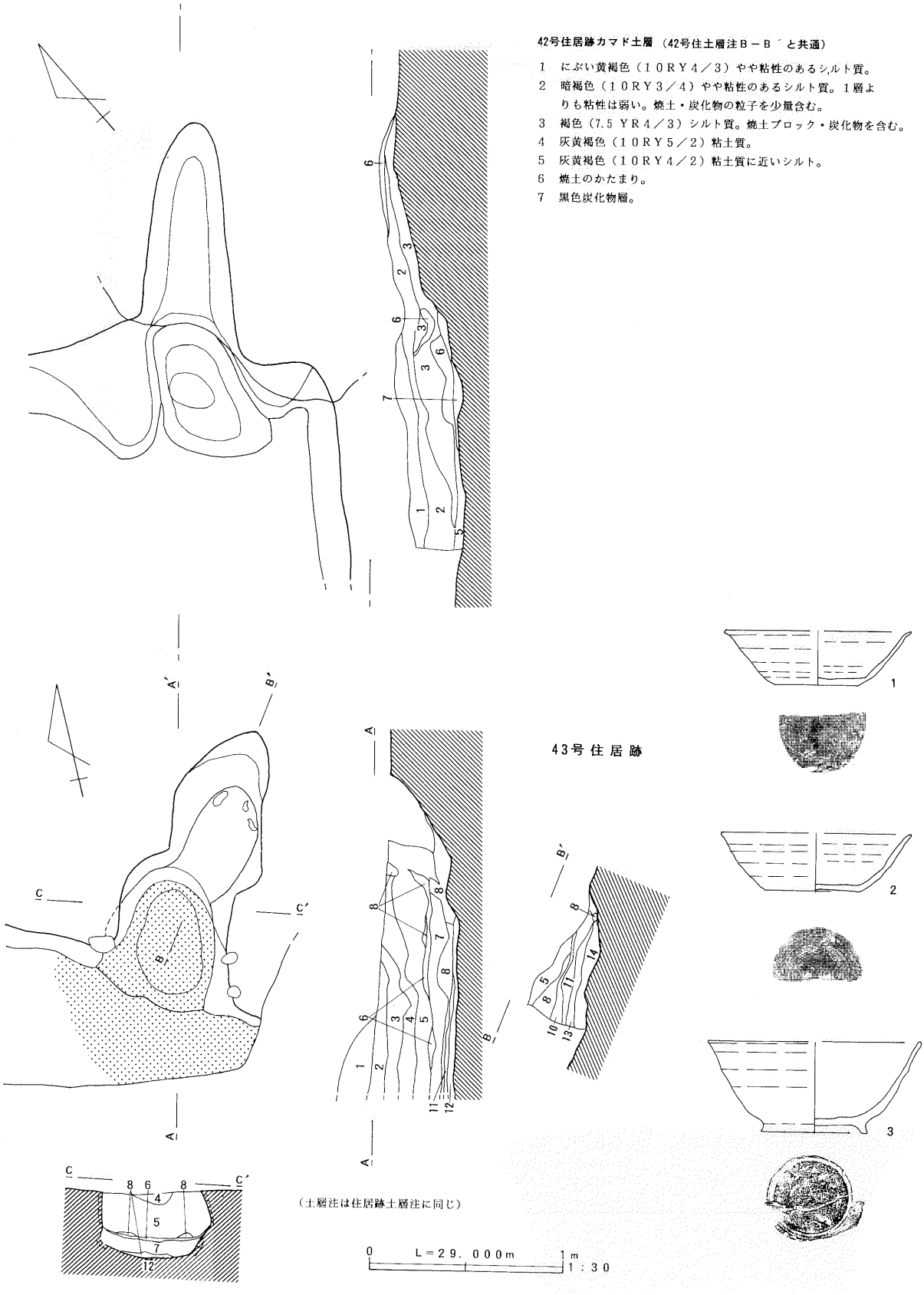




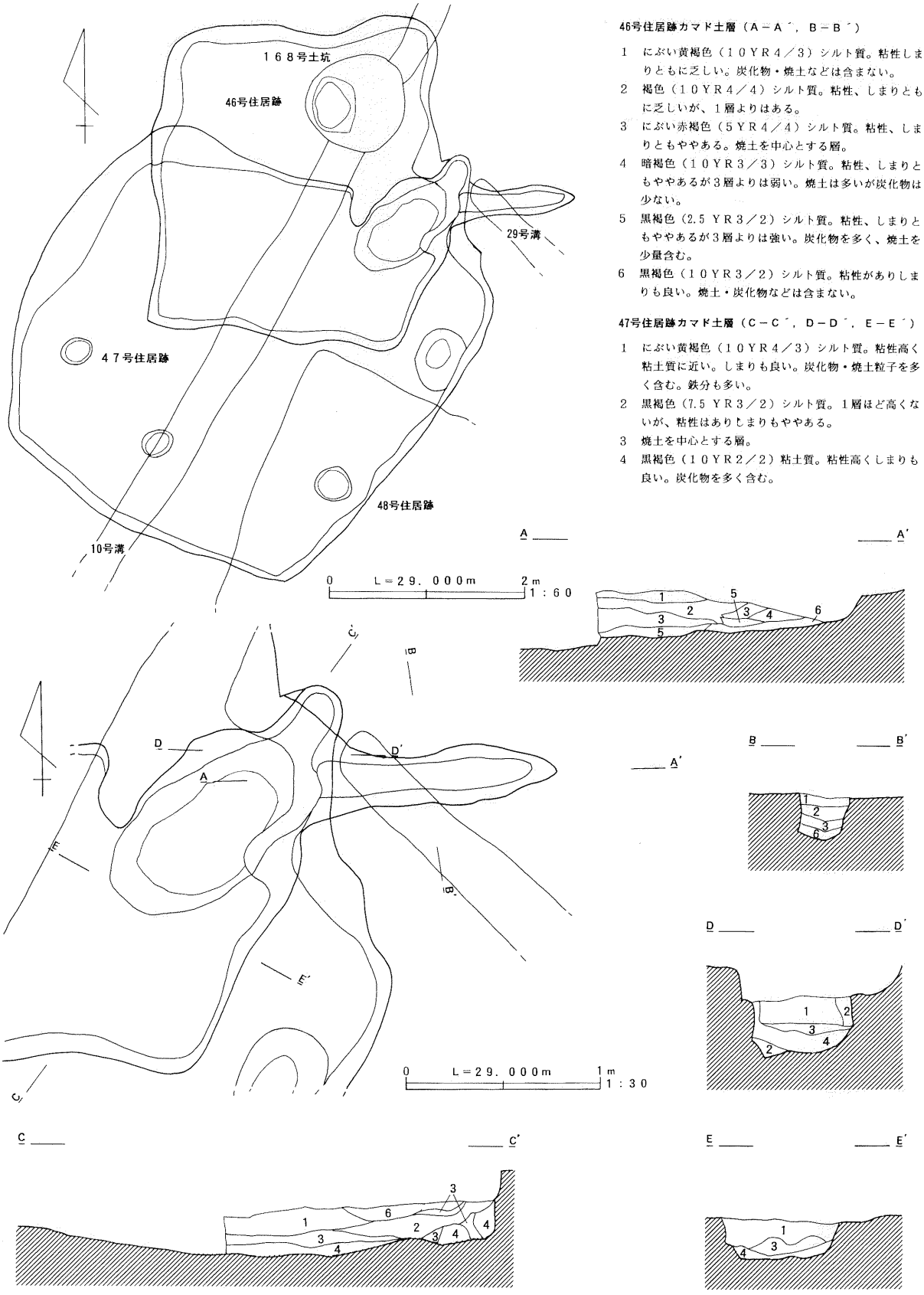
42号住居跡

第77図　42・43号住居跡及び42号出土遺物

0　10cm
1：4



第78図　42・43号住居跡カマド及び43号住居跡出土遺物



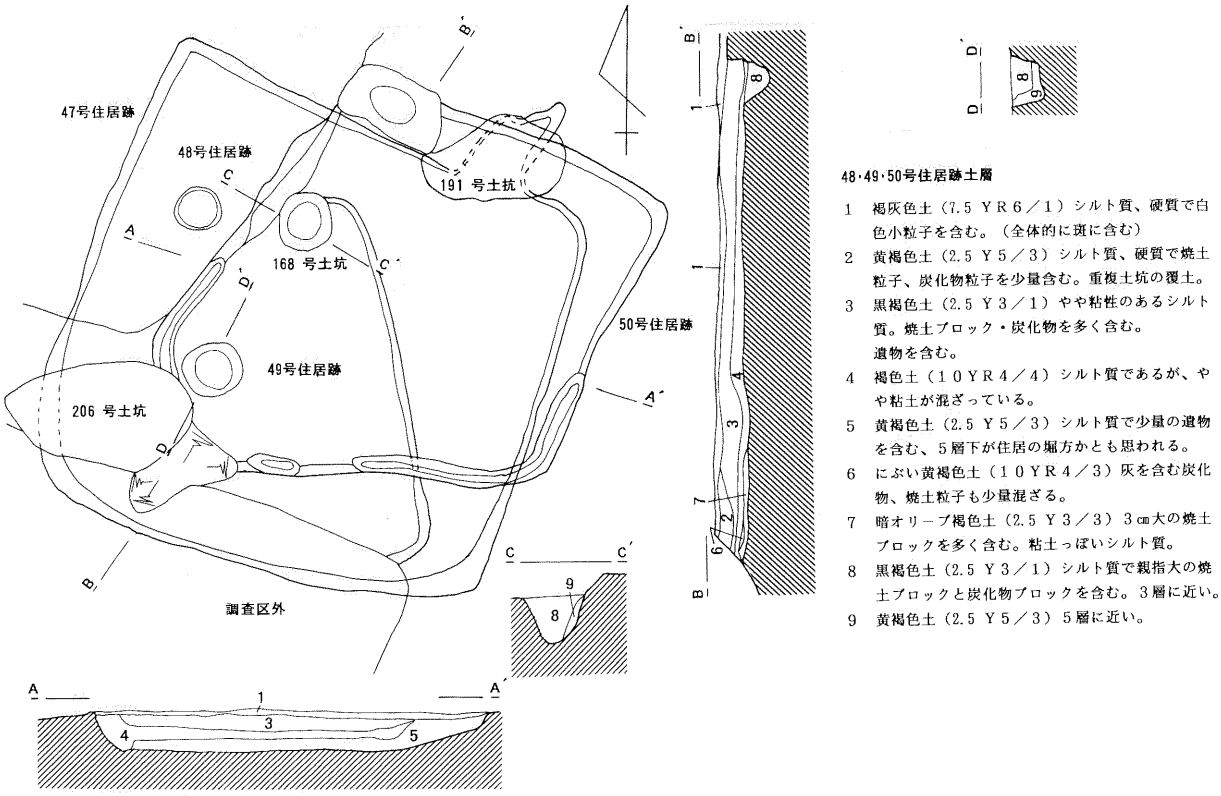
46号住居跡カマド土層（A－A´，B－B´）

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性しまりともに乏しい。炭化物・焼土などは含まない。
2 褐色（10YR4／4）シルト質。粘性、しまりともに乏しいが、1層よりはある。
3 にぶい赤褐色（5YR4／4）シルト質。粘性、しまりともややある。焼土を中心とする層。
4 暗褐色（10YR3／3）シルト質。粘性、しまりともややあるが3層よりは弱い。焼土は多いが炭化物は少ない。
5 黒褐色（2.5YR3／2）シルト質。粘性、しまりともややあるが3層よりは強い。炭化物を多く、焼土を少量含む。
6 黒褐色（10YR3／2）シルト質。粘性がありしまりも良い。焼土・炭化物などは含まない。

47号住居跡カマド土層（C－C´，D－D´，E－E´）

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性高く粘土質に近い。しまりも良い。炭化物・焼土粒子を多く含む。鉄分も多い。
2 黒褐色（7.5YR3／2）シルト質。1層ほど高くないが、粘性はありしまりもややある。
3 焼土を中心とする層。
4 黒褐色（10YR2／2）粘土質。粘性高くしまりも良い。炭化物を多く含む。

第79図　46・47号住居跡及びカマド



第80図　48～50号住居跡

第44表　48号住居跡出土遺物観察表　（第81図）

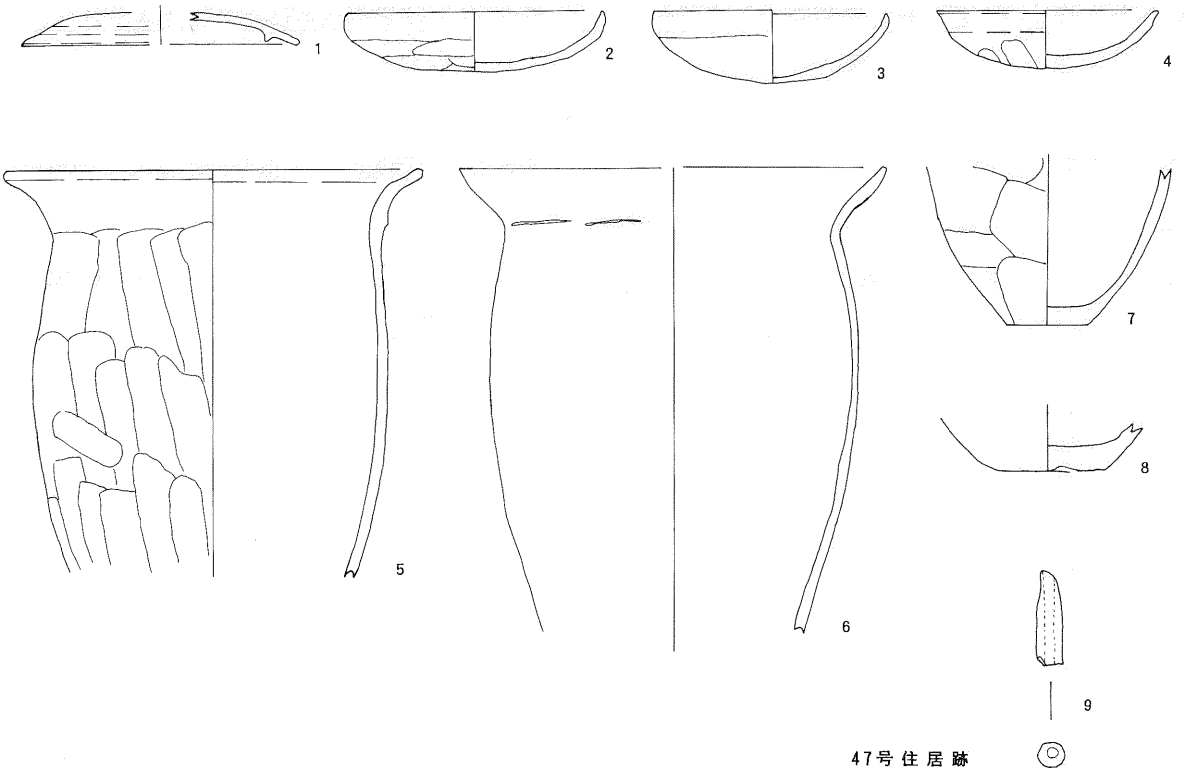
No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 杯	口径 11.8 器高 底径	② ① ③	②	暗青灰 (10BG 4/1)	上半 のみ	ロクロ整形。 外面の一部が溶解している。
2	土師器 杯	口径 13.8 器高 底径	② ① ④	②	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	上半 1／8	口縁部は横ナデ。 体部内面横のナデ、外面横のケズリ。
3	須恵器 盤	口径 18.4 器高 4.8 底径 13.8	① ② ⑥	①	灰白 (N 7/0)	2／3	ロクロ整形。 底面回転ヘラケズリ後、付高台。
4	土師器 甕	口径 18.2 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 7/6)	上位 のみ	口縁部横ナデ（3段）。煤付着。 胴部上位横ケズリ。炭化物付着。
5	砥石	長さ 6.8 幅 5.0 厚さ 3.9					4面使用。

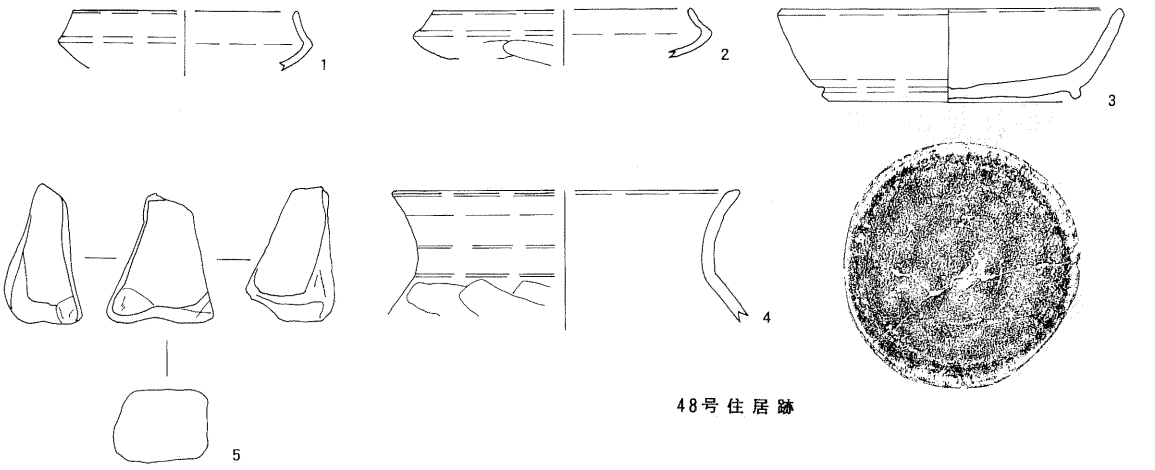
49号住居跡

48号住居跡・50号住居跡の床面下に、東壁最下面のみが検出されたものである。

東辺は3.70mを測るものの、全体の形態・規模は共に不明である。東辺方位はN－12°－Wを示す。

床面は、やや起伏があるものの安定している。





第81図　47・48号住居跡出土遺物

50号住居跡

西部で49号住居跡を切断し、大部分で48号住居跡に切断されている。

北辺2.70m、西辺2.94m、南辺3.20m、東辺2.40mを測り、南西隅が飛び出してはいるものの、基本的には正方形を呈しているといえる。主軸方位はN－121°－Wを示す。

本住居跡の覆土は、最下層の黄褐色シルト層が確認されているのみである。　床面は、概ね水平で安定しており、東・西壁下の南半及び南壁下には、周溝が断続している。

カマドは、南壁の南西隅寄りに設置されている。しかし、206号土坑によって破壊されており、詳細は不明である。

遺物は、土師器杯、土錘等が出土している。

第45表　50号住居跡出土遺物観察表　（第84図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（13．0） 器高 底径	③ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	上　半 1／4	口縁部内面ナデ、外面横ナデ（2段一部3段） 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器杯	口径（14．0） 器高　3．9 底径	② ① ③	②	橙 (5YR　6/8)	1／2	口縁部外面横ナデ。 体部外面横のケズリ、内面全体ナデ。
3	土　錘	最大径　1．4 長さ　7．0 孔径　0．4				完　形	
4	土　錘	最大径　1．6 残存長　4．8 孔径　0．6					
5	土　錘	最大径　1．4 残存長　3．8 孔径　0．5					
6	土　錘	最大径　1．6 残存長　3．3 孔径　0．5					

51号・52号住居跡（第74図・75図）

ＡＤ－５グリッドに位置している。

51号住居跡

北隅で50号住居跡を、カマドは197号土坑及び202号土坑を、全体で52号住居跡の大半を切断している。また南東壁中央部では44号住居跡カマドを切断している。

北東辺3.00m、北西辺2.70m、南西辺1.92m、南東辺2.60mを測る。南西辺が極端に短く、台形を呈する。主軸方位はＮ－40°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が焼土・炭化物ブロックを含む灰褐色シルト層、中位層が白色軽石微粒子（浅間系か）を含む暗灰黄色シルト層、下位層が少量の焼土・炭化物ブロックを含む灰黄褐色シルト層であり、部分的に最下層として褐灰色シルト層がみられる。

床面は、やや起伏があるものの安定している。

カマドは、北東壁中央東隅寄りに設置されている。壁・天井が崩落した状態で検出されている。燃焼部は箱形を呈し、煙道は三角形を呈している。断面形は、窪みをもつ火床から12cmの段をもち、直線的に僅かに上昇する煙道へと移行する。煙出部は残存していない。全体の残存長は1.50mを測る。

遺物は、須恵器蓋、土師器杯・甕、滑石製臼玉等が出土している。

第４６表　５１号住居跡出土遺物観察表　（第８４図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器蓋	天井径（５．９） 器高 底径	①	①	灰 （N　6/ ）	１／４	ロクロ整形。 天井部回転ヘラケズリ。
2	土師器杯	口径（１６．５） 器高 底径	② ① ④	②	にぶい橙 （7.5YR7/4）	上　半 １／５	内面ナデ放射状磨き。 外面横ナデ。
3	土師器甕	口径（１７．０） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR　6/6）	上　位 １／２	口縁部横ナデ。 胴部上位内面ナデ。 外面横のケズリ。
4	臼　玉	最大径　０．７ 厚さ　０．４ 孔径　０．２５					滑石製。

52号住居跡

北半は51号住居跡によって切断され、西壁の上部は池（調査区外）によって削除されている。また東壁南隅付近は、214号土坑によって切断されている。

南辺は2.62ｍを測るものの、他辺は計測できず、規模は不明である。形態は、方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－34°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が暗灰黄色シルト層、下層が灰黄褐色シルト層である。

床面は、やや起伏があるものの安定している。南壁下には、周溝がみられる。

カマドは、検出されていない。

遺物は、土師器杯等が出土している。

第４７表　５２号住居跡出土遺物観察表　（第８４図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１２．８） 器高 底径	② ① ③	②	橙 （2.5YR6/8）	上　半 １／５	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面横のケズリ。 吸炭。

53号～55号住居跡（第82図・83図・85図）

ＡＤ－５からＡＥ－５グリッドにかけて位置している。

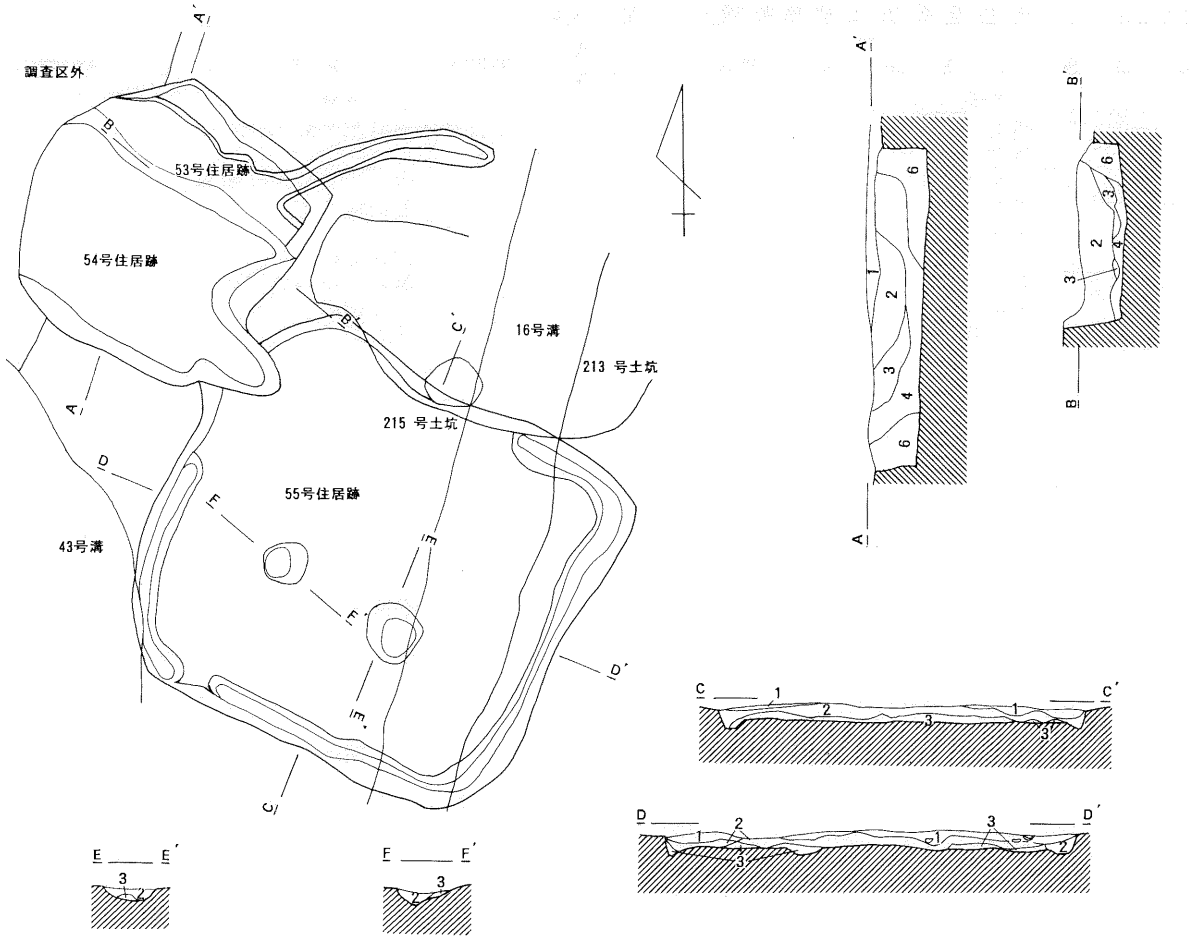
53号住居跡

西半は、池（調査区外）によって削除されている。また、残った大部分を54号住居跡によって切断されている。

このため、形態・規模は共に不明である。

主軸方位はＮ－38°－Ｅを示す。

カマドは、北壁東隅に、壁・天井が崩落した状態で検出されている。また燃焼部は、54号住居跡に切断されている。煙道は、幅10cm、長さ1.80ｍを測り、中央付近で大きく右（東）へ屈曲する特異な形態をとっている。断面形は、窪みをもつ火床から、煙道は、緩傾斜で上昇し、一旦平坦面をもつが、奥に移行するに従って（東へ屈曲する手前から）再び緩やかな角度をもって上昇する。奥壁は、急傾斜で立ち上がる。



53・54 号住居跡土層（A－A´，B－B´）

1　黒褐色（10YR3／1）シルト質。酸化鉄粒子を多く含む。
2　黒褐色（7.5 YR3／1）粘性の高いシルト質。1層よりも粘土質が強い。炭化物及び焼土ブロックを多く含む。
3　褐色（7.5 YR4／4）シルト質。酸化鉄粒子を含む。
4　黒褐色（7.5 YR3／2）粘土質。しまり良い。焼土及び炭化物のブロックを含む。
6　黄褐色（10YR5／6）粘土質。

55号住居跡土層（C－C´，D－D´，E－E´，F－F´）

1　褐色（7.5 YR4／4）シルト質。
2　黒褐色（7.5 YR3／2）シルト質。焼土ブロック（小指頭）炭化物を含む。遺物の包含量も多い。
3　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。少量の粘土粒子を含み、やや粘性があるように感じられる。

第82図　53～55号住居跡

0　L=29.000m　2m
1：60

遺物は、ほとんど出土していない。

54号住居跡

西半は、池（調査区外）によって削除されている。またカマドは、55号住居跡を切断している。

南東辺は1.36mを測るものの、他辺は計測できず、規模は不明である。形態は、残存している北東辺・南西辺がいずれも南東辺より長いことから、長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－124°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄粒を多量に含む黒褐色シルト層、中層が多量の炭化物・焼土ブロックを含む黒褐色シルト層、下層が褐色シルト層である。

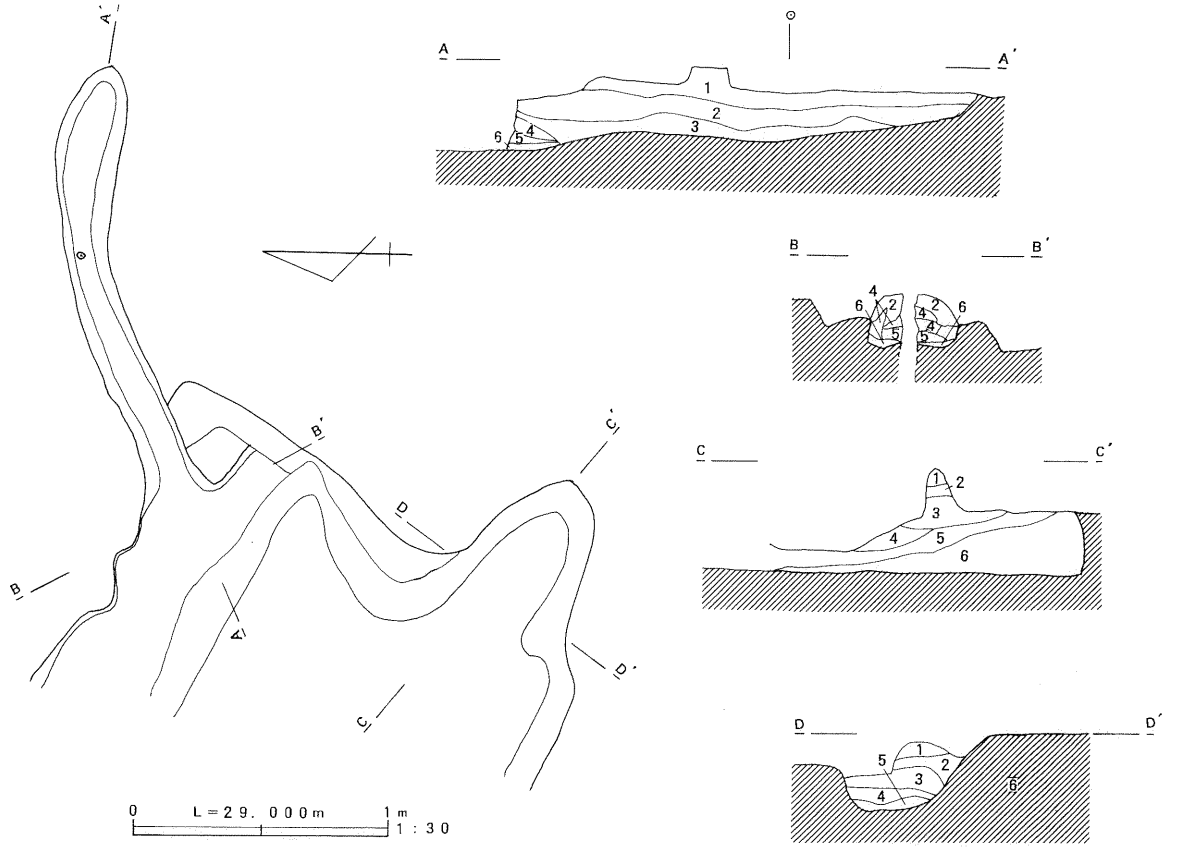
床面は、やや起伏があるものの安定している。

カマドは、南東壁南隅に設置されており、壁・天井が崩落した状態で検出されている。断面形は、窪みをもつ火床から、煙道は、緩傾斜で上昇する遺物は、土師器杯等が出土している。

53号住居跡は、54号住居跡の南西壁外へは伸びておらず、また南東壁がほぼ一致していることから、本来両住居跡は、同一住居であった可能性も高い。

第48表　54号住居跡出土遺物観察表　（第84図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（15.2） 器高　3.7 底径	②	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1／8	口縁部ナデ。 体部内面ナデ、外面はケズリ。



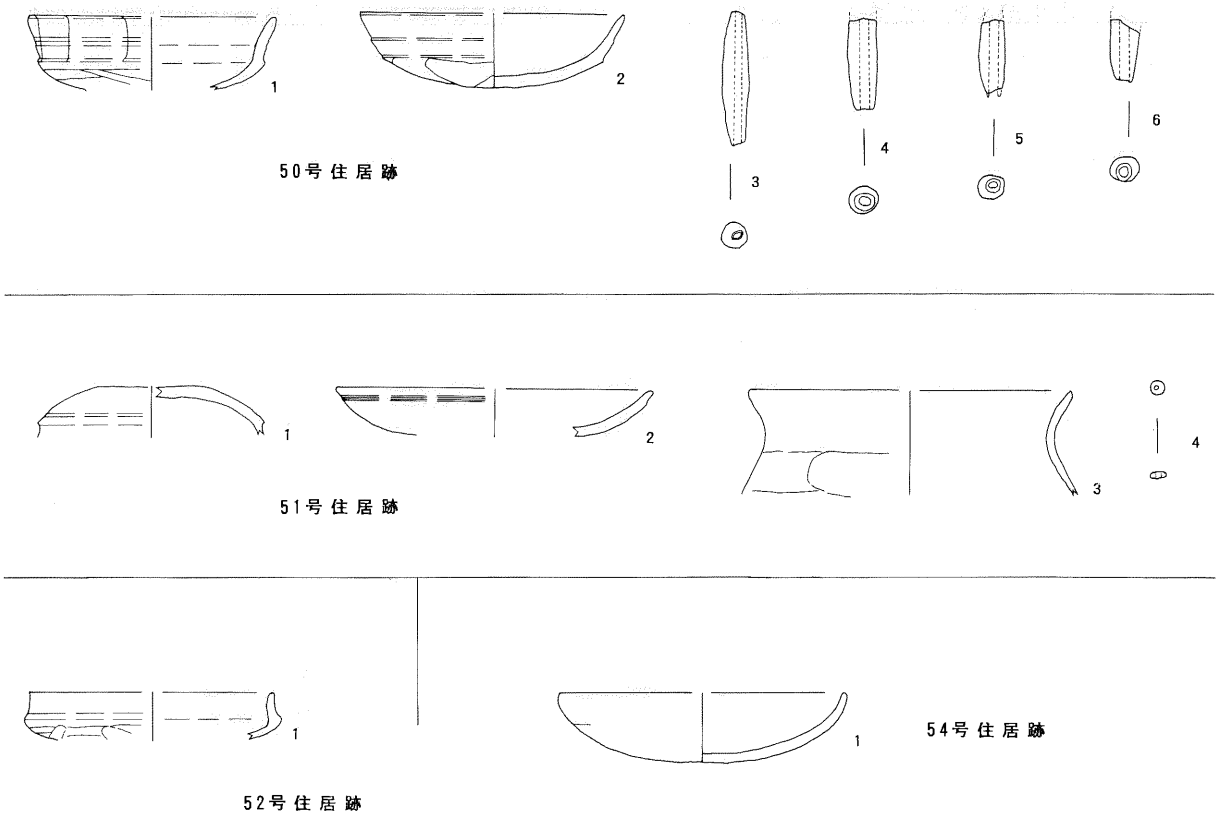
53号住居跡カマド土層　（A－A´，B－B´）

1　褐色灰（10YR4／1）シルト質。粘性は弱い、焼土及び炭化物の微粒子を少量含む。
2　褐色（10YR4／4）シルト質。若干粘性がある。1層よりも大きめの焼土・炭化物を含む。
3　暗オリーブ褐色（2.5Y3／4）シルト質。粘性がありしまり良い。焼土はあまり見当たらないが指頭大の炭化物が少量含まれる。
4　焼土層。
5　にぶい赤褐色（5YR4／4）シルト質。粘性は弱くサラサラ、焼土・炭化物の小ブロックを含む。
6　黒色炭化物。上面に薄く白色灰層がある。

54号住居跡カマド土層　（C－C´，D－D´）

1　黒褐色（7.5YR3／1）シルト質。しまり良い、焼土ブロックを多く含む。炭化物は焼土ほど多くない。
2　黒褐色（7.5YR3／1）シルト質。1層よりしまり良く粘質。1層ほどは多くないが焼土ブロックを含む。
3　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。しまりは良いが粘性は弱い。4層との接点に炭化物の層を有し、炭化物ブロックを多く含む。
4　黒褐色（10YR4／3）シルト質。しまり良く、粘性が強い。炭化物・焼土ブロックを多く含む。焼土は煙道では少ない。
5　黒褐色（10YR3／2）粘土質。しまり良く、炭化物や焼土は含まない。
6　褐色（7.5YR4／4）粘土質。しまり良い。他山。

第83図　53・54号住居跡カマド



第84図　50～52・54号住居跡出土遺物

55号住居跡

北東辺を213号土坑に、西隅を43号溝にそれぞれ切断されている。

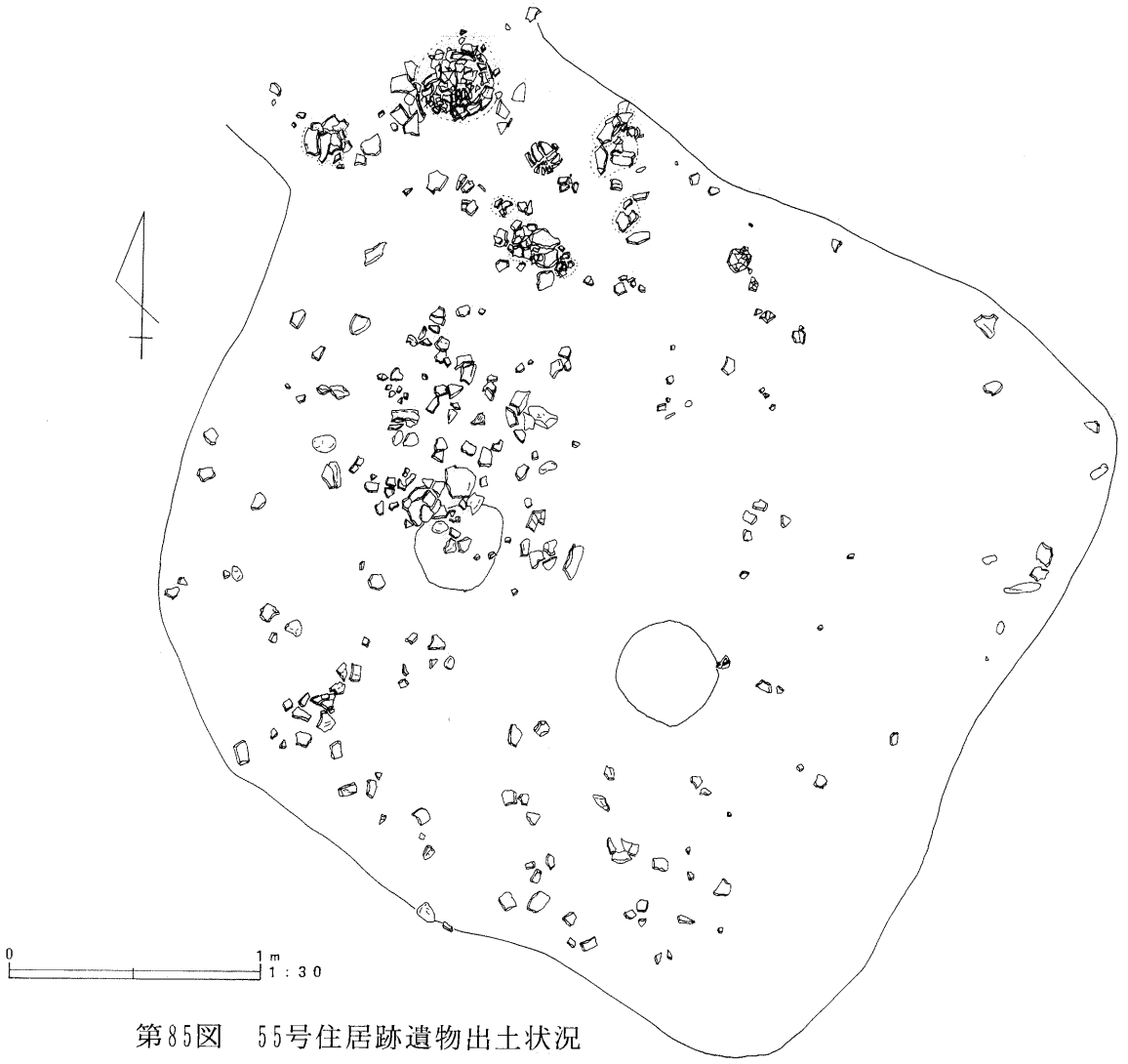
北東辺3.06m、北西辺3.00m、南西辺2.80m、南東辺2.70mを測り、平面はぼ正方形を呈する。主軸方位はN－61°－Wを示す。

本住居跡の覆土は、上層が炭化物・焼土ブロックを含む黒褐色シルト層、下層が鈍い黄褐色シルト層であり、最上層として褐色シルト層が堆積している部分もある。

床面は、やや起伏があるものの安定している。北隅と西隅の一部を除いて周溝がみられる。また、中央に2ケ所のピットがみられるが、いずれも浅い。

カマドは、検出されていないが、北西辺中央やや北隅寄りの壁（54号住居跡カマド部分）が外に張り出し、前面に炭化物が分布していたことから、この部分に設置されていた可能性が高い。また、遺物も北西半に集中して出土（第85図）しており、このことを裏付けている。

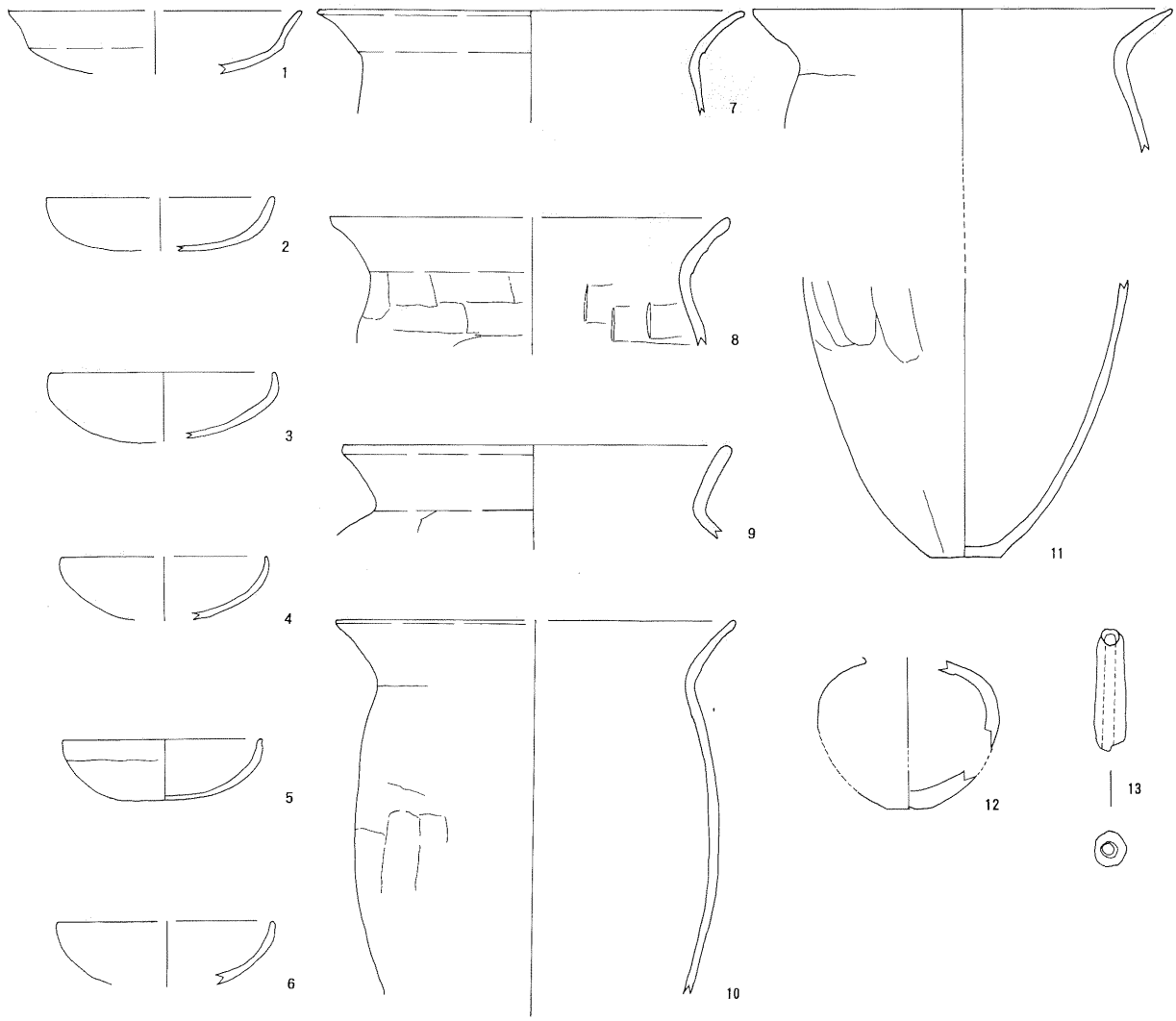
遺物は、土師器杯・壷・甕、土錘等が出土している。



第85図　55号住居跡遺物出土状況

第49表　55号住居跡出土遺物観察表　（第86図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器 杯	口径（16．2） 器高（ 3．5） 底径（14．0）	②	②	橙 (2.5YR6/6)	1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ケズリ様のナデ、外面横のケズリ。
2	土師器 杯	口径（12．4） 器高（ 2．9） 底径	① ②	②	橙 (5YR 6/6)	1／4	口縁部横ナデ。 体部内外面ナデ。
3	土師器 杯	口径（12．4） 器高 3．8 底径	②	②	橙 (5YR 6/6)	3／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
4	土師器 杯	口径（11．3） 器高 底径	① ④ ②	①	橙 (5YR 7/6)	1／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
5	土師器 杯	口径 11．1 器高 3．3 底径	③④ ② ①	②	にぶい赤褐 (5YR 5/3)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
6	土師器 杯	口径（11．8） 器高 底径	④ ①	②	橙 (5YR 6/6)	上半 1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 二次加熱。
7	土師器 甕	口径 23．6 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上位 1／2	口縁部横ナデ。 胴部上位内面ナデ、外面横ナデ。 吸炭。

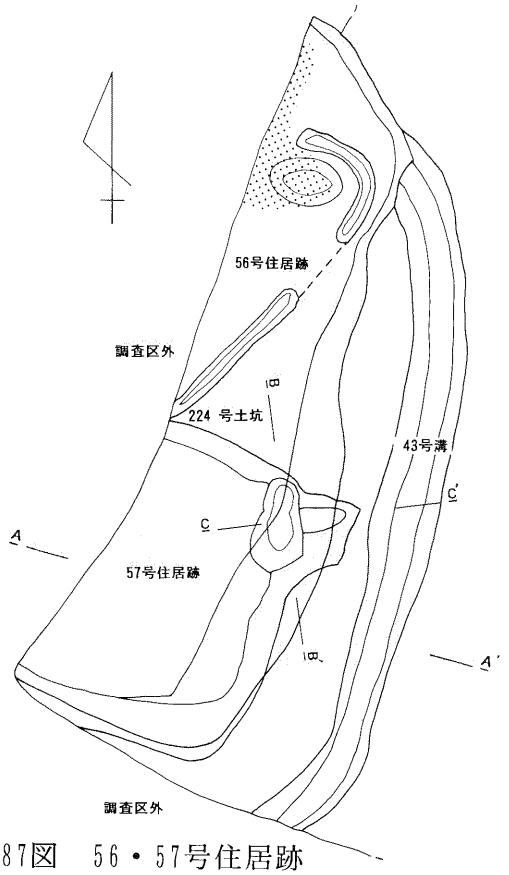


第86図　55号住居跡出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
8	土師器甕	口径（22.0） 器高 底径	① ②	②	橙 (5YR 6/8)	上位 1／4	口縁部横ナデ。 胴部上位横のナデ。 吸炭。
9	土師器甕	口径（20.8） 器高 底径	①	②	橙 (2.5YR6/8)	上位 3／4	口縁部横ナデ。 胴部上位内外面横のケズリ。 吸炭。炭化物付着。
10	土師器甕	口径（22.0） 器高 底径	① ②	③	橙 (2.5YR6/8)	上半部 1／3	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 煤付着。
11	土師器甕	口径（23.0） 器高 底径 4.0	① ②	②	橙 (2.5YR6/8)	中位欠	口縁部横ナデ。吸炭。胴部上位内面ナデ、外面横のケズリ、一部斜のケズリ。下位内面ナデ、外面斜のケズリ。底面付近面取り様横のケズリ。底面ケズリの後ナデ。吸炭。
12	土師器壷	口径 器高 底径（2.4）	① ④	①	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／2	胴部内面ナデ、外面ナデ、一部下位横のケズリ。 吸炭。
13	土錘	最大径 1.8 残存長 6.6 孔径 0.7					

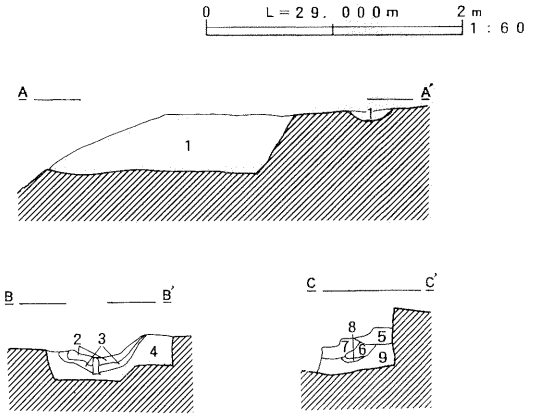
56号・57号住居跡（第87図）

56号住居跡は、ＡＤ－５からＡＥ－５グリッドにかけて、57号住居跡は、ＡＥ－5グリッドに位置している。また両住居跡共、224号土坑によって削平されている。



56･57 号住居跡土層

1 黒褐色（１０ＹＲ３／２）しまりの強いシルト質。遺物を多く含む。土色、土質とも変化が見られず、分層出来なかった。地山は黄褐色が強いため、遺構覆土であることは間違いないものと思われる。
2 にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質。粘性がややある。少量の炭化物粒子を含む。
3 暗赤褐色（2.5 ＹＲ３／６）砂質の強いシルト質。焼土を中心とする。
4 灰褐色（7.5 ＹＲ５／２）砂質。酸化鉄を含む。
5 暗灰黄色（2.5 Ｙ４／２）シルト質。しまりは悪くサラサラの土。鉄分を含む。
6 暗灰黄色（2.5 Ｙ４／２）シルト質。１層と同質。やや砂っぽさを感じる。
7 赤褐色（2.5 Ｙ４／６）シルト質。ややしまりがあり、粘性もある。焼土を中心とする層で少量の炭化物が混じる。
8 暗褐色（１０ＹＲ３／３）粘土質。しまり良く粘性強い。焼土を中心とする土質。
9 にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）砂質。



第87図　56・57号住居跡

56号住居跡

西半は、池（調査区外）によって削除されている。また224号土坑によって、床面直上まで削平されているため、形態・規模は共に不明である。しかしながら、東隅及び南東辺に周溝がみられ、南端で西に折れる様相を伺わせているため、南東辺長は、2.50mであったことが知れる。これを基にすると、形態は方形であり、主軸方位はＮ－35°－Ｅを示すといえる。

床面はあまり起伏が無く、安定している。東隅には36×58cm、深さ７cmの浅いピットが穿たれている。このピットから床面東隅付近、さらには壁外に弓状に張り出して、炭化材が検出されている。

このことから、北東壁東隅寄りにカマドが設置されていたと思われる。

遺物は、はとんど出土していない。

57号住居跡

西半は、池（調査区外）によって削除されている。上面は、224号土坑によって削平されている。

東辺は2.20mを測るものの、他辺は計測できず、規模は不明である。形態は、基本的には方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－112°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は黒褐色シルト層である。

床面は、起伏も無くほぼ水平で、安定している。

カマドは、東壁北隅に設置されている。壁・天井が崩落した状態で検出されており、詳細は不明である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器高杯、中央に孔の穿たれた土製支脚等が出土している。

第５０表　５７号住居跡出土遺物観察表　（第８９図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径　１２．８ 器高　３．０ 底径	④ ② ①	①	にぶい橙 (7.5YR6/4)	一部欠	口縁部横ナデ、一部に煤付着。 体部内面ナデ、外面ケズリ、炭化物付着。
2	土師器杯	口径（１３．６） 器高　３．８ 底径	④ ① ②	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	２／３	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。
3	須恵器高杯	口径 器高 底径	① ③ ⑥	②	灰 (N　4/)	脚部 １／３	内面回転のナデ、外面横のナデ。 裾部の接合に１条の凸帯。
4	土師器甕	口径（１５．８） 器高 底径	① ④ ②	②	橙 (5YR　6/8)	上位 １／４	口縁部横ナデ、１条の沈線。胴部上位内面ナデ、外面横のナデ、一部吸炭。
5	土製支脚	口径　３．８ 器高　１５．０ 底径　８．５	②⑥ ① ④	①	橙 (2.5YR6/6)	一部欠	内面上位ナデ付け、中位以下横への連続ナデ。 外面ナデ。上面に木の葉痕。 煤付着。吸炭。二次加熱。

58号住居跡（第88図）

ＡＣ－７グリッドに位置している。

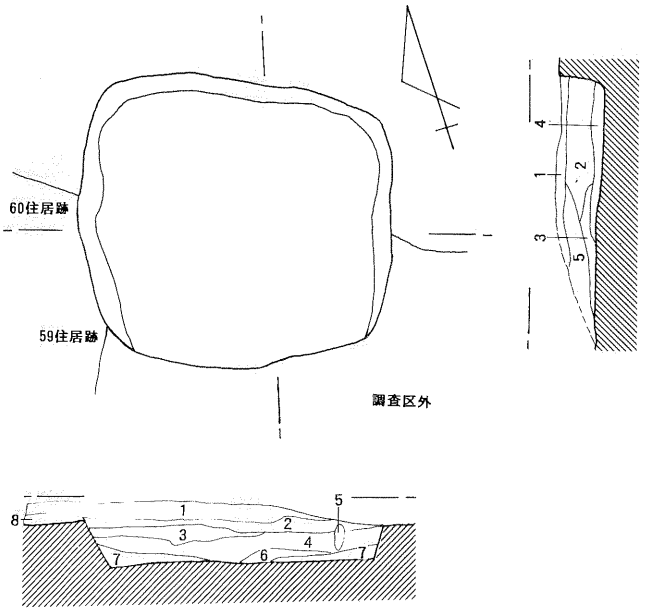
南半は、池（調査区外）によって削除されている。また西側では、59号住居跡・60号住居跡を僅かに削平している。

北辺は2.16mを測るが、他辺は計測不能である。よって、形態・規模は共に不明であるが、西辺の丸まりから、南辺もさはど多く削平されておらないと考えられ、形態は方形を呈するとされる。主軸方位はＮ－18°－Ｅを示す。

本住居跡の覆土は、上層が褐灰色シルト層、下層が軟化鉄を含む灰黄色シルト層であり、部分的に炭化物・焼け土を含む鈍い黄褐色粘土層や、酸化鉄を含む褐灰色シルト層が最下層として堆積している。

床面はあまり起伏が無く、安定している。

遺物は、ほとんど出土していない。

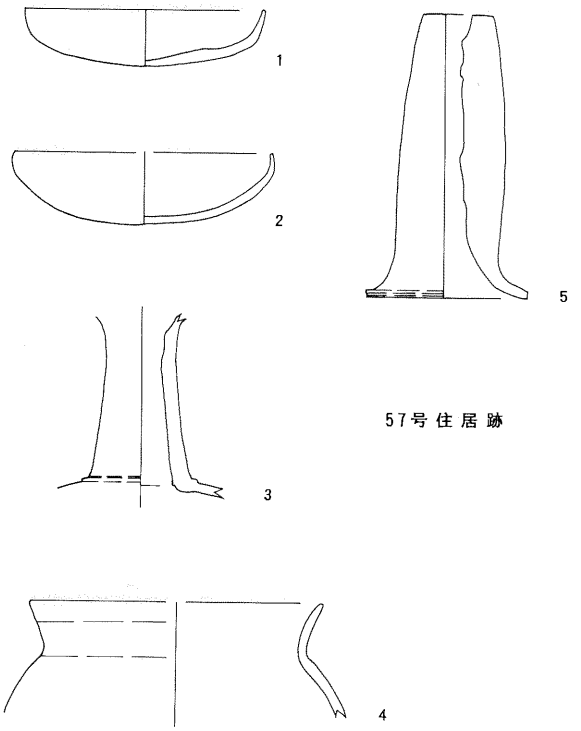


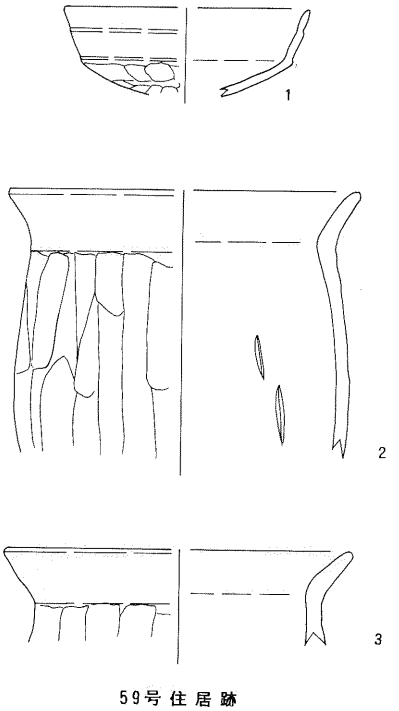
58号住居跡土層

1　灰白色（2.5 Y 7／1）耕作土。ビニールが混ざる。
2　褐灰色（10YR 6／1）シルト質。しまりにかける。
3　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）粘土質。焼土・炭化物が多く入る。
4　灰黄色（2.5 Y 6／2）砂に近いシルト質。酸化鉄が混ざる。
5　黒褐色（2.5 Y 3／2）根などによるカクラン。しまりにかける。
6　にぶい黄褐色（10YR 4／3）粘土質。焼土・炭化物が混ざる。（3層よりは少ない）
7　褐灰色（10YR 4／1）シルト質。酸化鉄が混ざる。
8　にぶい黄色（2.5 Y 6／3）シルト質。やや粘性あり。
9　灰黄色（2.5 Y 7／2）2層に近いが、炭化物が少量混ざる。

第88図　58号住居跡

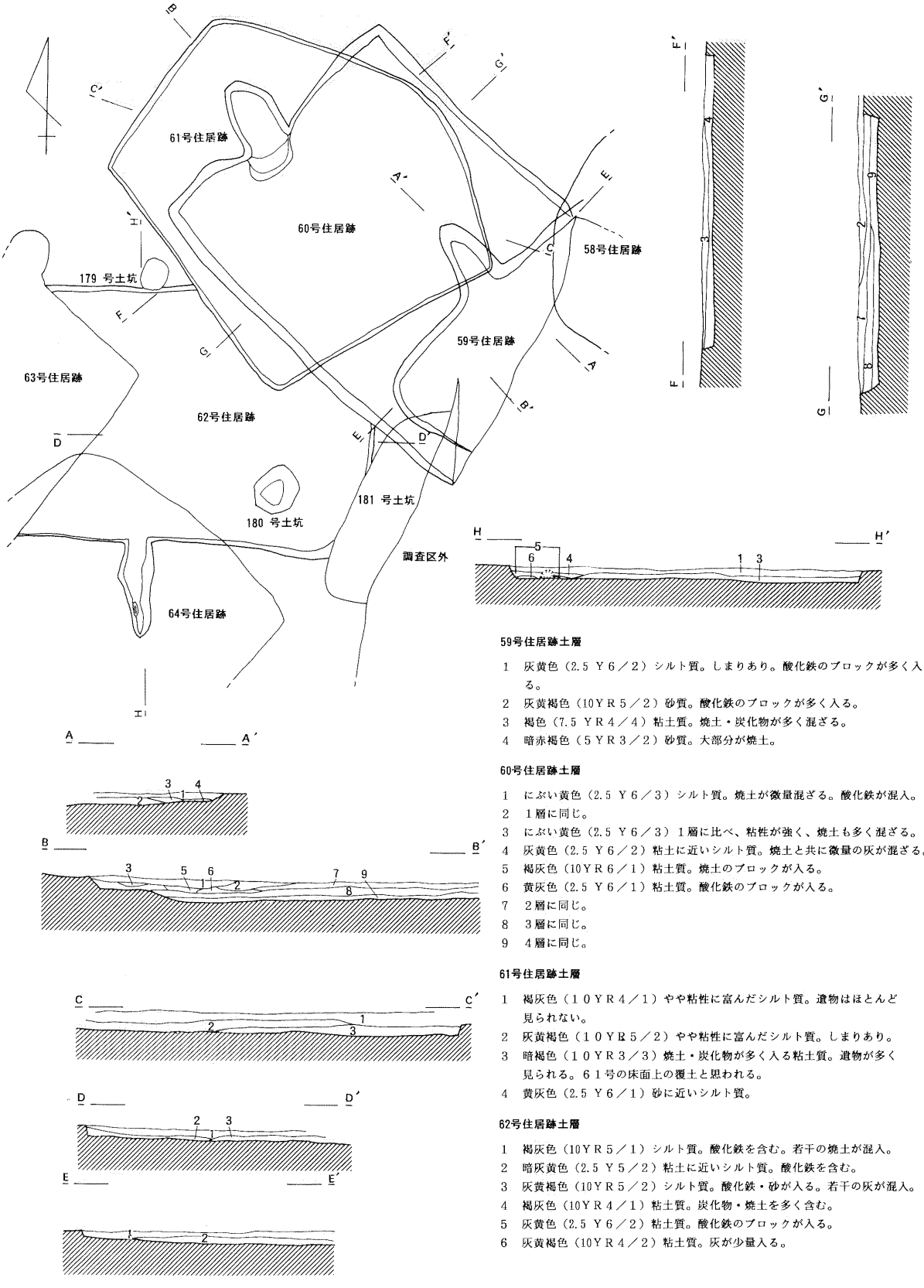
0　L＝29.000m　2m
1：60





第89図　57・59号住居跡出土遺物

0　10cm
1：4



59号住居跡土層

1　灰黄色（2.5 Y 6／2）シルト質。しまりあり。酸化鉄のブロックが多く入る。
2　灰黄褐色（10Y R 5／2）砂質。酸化鉄のブロックが多く入る。
3　褐色（7.5 Y R 4／4）粘土質。焼土・炭化物が多く混ざる。
4　暗赤褐色（5 Y R 3／2）砂質。大部分が焼土。

60号住居跡土層

1　にぶい黄色（2.5 Y 6／3）シルト質。焼土が微量混ざる。酸化鉄が混入。
2　1層に同じ。
3　にぶい黄色（2.5 Y 6／3）1層に比べ、粘性が強く、焼土も多く混ざる。
4　灰黄色（2.5 Y 6／2）粘土に近いシルト質。焼土と共に微量の灰が混ざる。
5　褐灰色（10Y R 6／1）粘土質。焼土のブロックが入る。
6　黄灰色（2.5 Y 6／1）粘土質。酸化鉄のブロックが入る。
7　2層に同じ。
8　3層に同じ。
9　4層に同じ。

61号住居跡土層

1　褐灰色（10Y R 4／1）やや粘性に富んだシルト質。遺物はほとんど見られない。
2　灰黄褐色（10Y R 5／2）やや粘性に富んだシルト質。しまりあり。
3　暗褐色（10Y R 3／3）焼土・炭化物が多く入る粘土質。遺物が多く見られる。61号の床面上の覆土と思われる。
4　黄灰色（2.5 Y 6／1）砂に近いシルト質。

62号住居跡土層

1　褐灰色（10Y R 5／1）シルト質。酸化鉄を含む。若干の焼土が混入。
2　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）粘土に近いシルト質。酸化鉄を含む。
3　灰黄褐色（10Y R 5／2）シルト質。酸化鉄・砂が入る。若干の灰が混入。
4　褐灰色（10Y R 4／1）粘土質。炭化物・焼土を多く含む。
5　灰黄色（2.5 Y 6／2）粘土質。酸化鉄のブロックが入る。
6　灰黄褐色（10Y R 4／2）粘土質。灰が少量入る。

第90図　59～62号住居跡

0　L＝29.000m　2m
1：60

59号～62号住居跡（第90図・92図・93図）

全てＡＣ－８グリッドに位置している。

59号住居跡は58号・60号住居跡によって、60号住居跡は58号・61号住居跡によって、それぞれ上面が削平され、62号住居跡は60号・61号・63号・64号住居跡及び181号土坑によって切断されており、64号住居跡に削平されている。また59号・60号住居跡の東南部は、池（調査区外）によって削除されている。

59号住居跡

60号住居跡による削平と、池（調査区外）による削除によって、各辺は全て計測不能である。よって、形態・規模は共に不明であるが、北西辺から北東辺にかけての下端が、58号住居跡床面下に確認され、北西辺の下端長2.70ｍであったことが知れる。60号住居跡と同様な形態を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－45°－Ｗを示す。

本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄粒を含む灰黄色シルト層、下層が酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層である。

床面はあまり起伏が無く、安定している。

カマドは、北西辺中央に壁外に張り出して設置されている。煙道部・壁等は削平され、燃焼部下面のみが残存している。燃焼部下面の平面形は、三角形を呈している。

遺物は、土師器杯・甕等が出土している。

第５１表　５９号住居跡出土遺物観察表　（第８９図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１３．０） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	１／２	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器甕	口径（１８．６） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	上半 １／４	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、炭化物付着。 外面縦のケズリ、全体に煤付着。
3	土師器甕	口径（１８．６） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	上位 １／３	口縁部横ナデ。胴部上位内面ナデ、外面縦のケズリ。内面煤付着。 二次加熱。

60号住居跡

61号住居跡による削平と、池（調査区外）による削除を受けているが、北西辺は2.90ｍを測り、南西辺4.06ｍ、北東辺2.83ｍの残存長が知れる。このことから、本住居跡の形態は、長方形を呈するとされる。主軸方位はＮ－41°－Ｗを示す。

本住居跡の覆土は、上層が焼土粒・酸化鉄粒を含む鈍い黄色シルト層、中層がやはり焼土粒をやや多く含む鈍い黄色シルト層（粘性がやや強い）、下層が焼土粒・灰を含む灰黄色シルト層である。

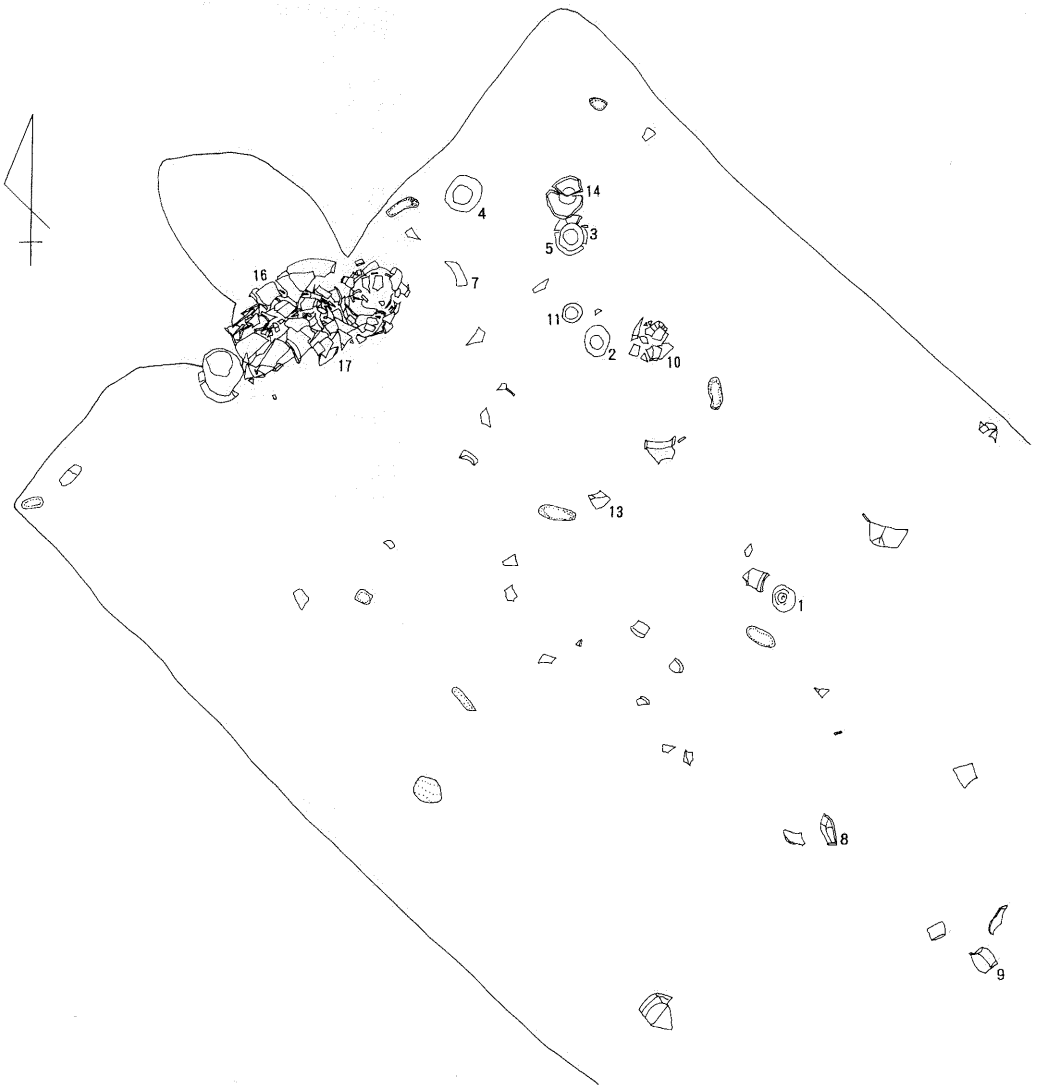
床面はあまり起伏が無く、安定している。

カマドは、北西辺中央やや西隅寄りの壁外に張り出して設置されている。壁際には、土師器甕を両脇に伏せて立たせ、両袖としている。この両袖間には、右（北東）袖側に底部を向けて土師器甕が入子状（No．17―右にNo．16―左が入り込む）に横たわって検出されている。壁はほとんど崩落

第91図　60号住居跡出土遺物

しているが、平面形は、概ね三角形を呈する。断面形は、僅かに挟まれた燃焼部（床上に位置する）のみが僅かに窪み、奥はほぼ水平面を成す。奥壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物は、土師器椀・杯・甕等の他、４×13cm前後の長円礫も出土している。



第92図　60号住居跡遺物出土状況

0　1m
1：30

第52表　60号住居跡出土遺物観察表　（第91図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径　11．0 器高　4．5 底径	② ① ⑥	②	灰白 (10YR 8/1)	完形	口縁部内面ロクロ整形。 体部外面横のケズリ。 底面回転ヘラケズリ。歪み有り。
2	土師器杯	口径　11．6 器高　3．5 底径	②④ ③⑥ ①	②	橙 (5YR 6/6)	完形	口縁部横ナデ（２段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。煤付着。 二次加熱。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
3	土師器杯	口径 11.8 器高 3.2 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 7/6)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。煤付着。 内外面表面剥離。二次加熱。
4	土師器杯	口径 11.8 器高 4.2 底径	② ① ⑤	②	明赤褐 (5YR 5/6)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内面表面剥離。内外面煤付着。
5	土師器杯	口径 11.9 器高 4.1 底径	② ① ③	③	橙 (5YR 6/6)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 烈点状剥離。煤付着。 二次加熱。
6	土師器杯	口径 (12.8) 器高 4.0 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
7	土師器杯	口径 (14.8) 器高 4.4 底径	② ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、一部表面剥離、外面ケズリ。 煤付着。二次加熱。
8	土師器杯	口径 (12.5) 器高 3.9 底径	①③ ② ④	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 二次加熱。内面剥離。
9	土師器杯	口径 (13.5) 器高 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR5/4)	1／5	口縁部横ナデ（2段）。 体部内外面ナデ、外面ケズリ。 煤付着。二次加熱。
10	土師器杯	口径 (13.4) 器高 5.0 底径	②④ ① ③	②	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	1／2	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。煤付着、黒斑。 内面表面剥離。二次加熱。
11	土師器杯	口径 10.2 器高 3.7 底径	①④ ③⑥ ②	②	橙 (5YR 7/6)	完形	口縁部横ナデ。一部煤付着。 体部内面烈点状剥離、外面ケズリ。 黒斑。
12	土師器杯	口径 (11.6) 器高 底径	②③ ①⑥ ④	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 表面剥離。吸炭。
13	土師器杯	口径 (13.8) 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (5YR 5/8)	上半 1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。内面表面剥離。 二次加熱。煤付着。
14	土師器甕	口径 器高 底径 6.2	② ① ③	②	灰褐 (7.5YR4/2)	下位のみ	内面木口状工具によるナデ。 外面縦のケズリ。底面ケズリ。 全体に吸炭。外面煤付着。
15	土師器甕	口径 (14.0) 器高 底径	② ①	③	浅黄橙 (7.5YR8/4)	上位 1／4	口縁部横ナデ（3段）。 胴部上位内面ナデ、外面斜のケズリ。 吸炭。二次加熱。
16	土師器甕	口径 (18.8) 器高 底径	②① ③⑥ ④	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上半 1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。 吸炭。二次加熱。
17	土師器甕	口径 18.0 器高 39.5 底径 5.0	②⑥ ① ③	②	橙 (5YR 7/6)	3／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。底部周辺横のケズリ、底面ケズリ。下位煤付着。二次加熱。
18	土師器甕	口径 22.0 器高 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	底部欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面上位斜のケズリ、中位以下縦のケズリ。 吸炭。煤付着。黒斑。二次加熱。
19	土師器甕	口径 (22.0) 器高 底径	③④ ② ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上位 1／5	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部上位内面横のナデ、外面縦のケズリ。 吸炭、炭化物付着。
20	土師器甕	口径 器高 底径 4.5	②④ ① ③	②	にぶい褐 (7.5YR5/4)	底部のみ	内面ナデ、外面縦・斜のケズリ。 底面表面剥離。吸炭。 二次加熱。

61号住居跡

上面を耕作によって削平され、下部のみが残存していた。また60号・62号住居跡を切断している。

北西辺は1.96m、南西辺2.90m、南東辺2.60m、東辺1.70m、北東辺2.50mを測り、本跡の形態は、

不整形を呈するといわざるを得ない。主軸方位は南西辺を基にすると、N—42°—Wを示す。

覆土は、褐灰色シルト層である。

床面はやや起伏があるものの、安定している。

カマド等は検出されていない。

遺物は、須恵器杯・高台杯、土師器杯、土錘等が出土している。

第53表　61号住居跡出土遺物観察表　（第94図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師質杯	口径　11．9 器高　3．4 底径　5．8	④③ ② ①	③	浅黄橙 (10YR 8/4)	完形	ロクロ整形。 糸切り底。
2	土師質高台杯	口径　13．8 器高　4．8 底径　7．0	④③ ② ①	③	浅黄橙 (7.5YR8/4)	高台欠	ロクロ整形。 表面剥離。
3	土師器杯	口径（12．5） 器高 底径	②③ ④ ①	②	橙 (7.5YR6/6)	1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内外面ナデ、煤付着。二次加熱。 内面炭化物付着。
4	土師器杯	口径（11．8） 器高（6．4） 底径	② ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/3)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。内面の一部に炭化物付着。体部内面ナデ、吸炭、外面ケズリ。 煤付着。
5	土錘	最大径　3．0 長さ　7．8 孔径　1．2				完形	

62号住居跡

60号・61号・63号住居跡及び181号土坑によって切断されており、64号住居跡に削平されている。

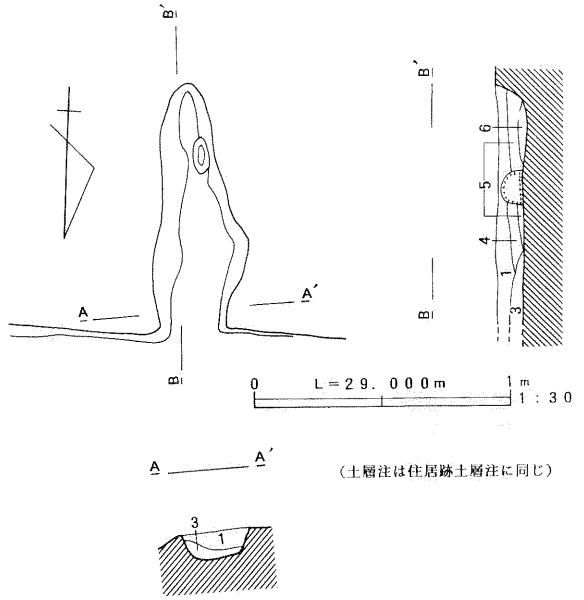
このため全体の規模は不明であるが、南北間は2.60m、東西は残長3.60mを測り、長方形を呈するとされる。主軸方位はN—179°—Wを示す。

本住居跡の覆土は、上層が僅かな焼土粒を含む褐灰色シルト層、下層が灰・酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層もしくは軟化鉄粒を含む暗灰黄色シルト層である。

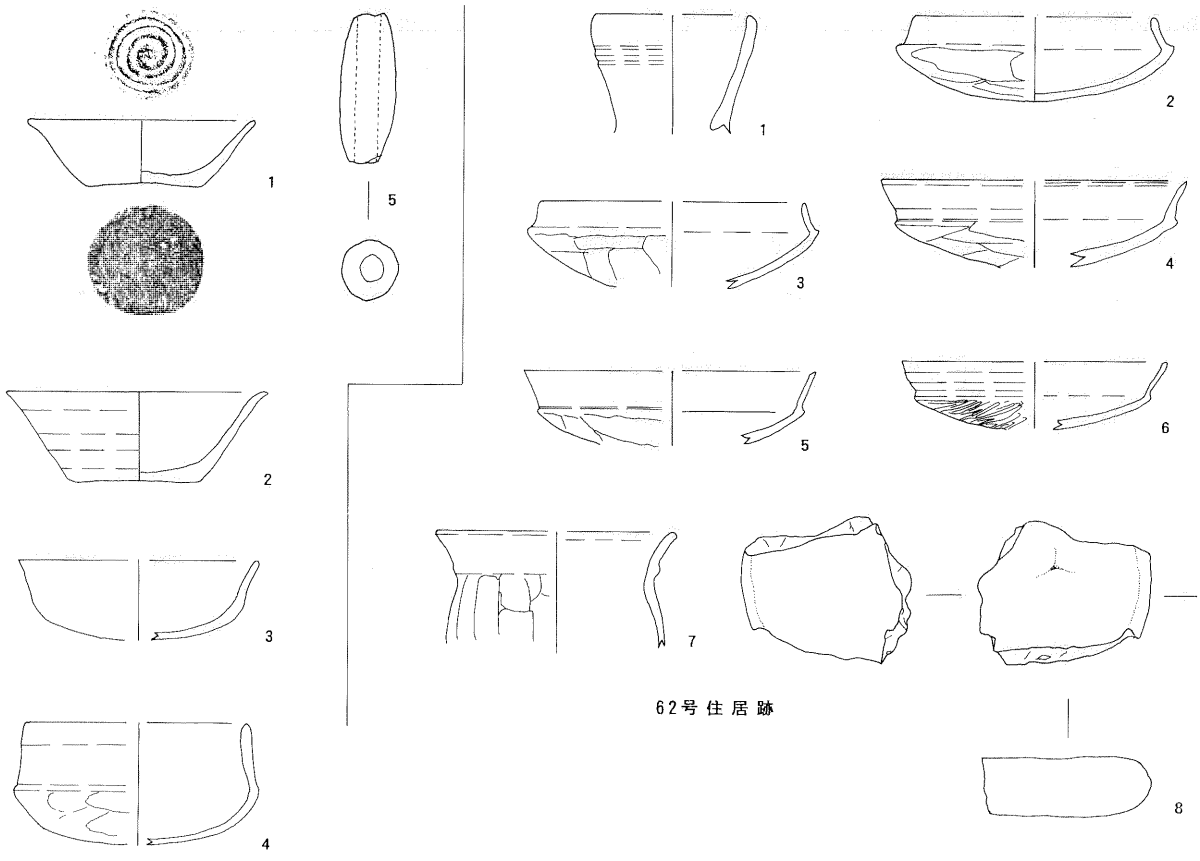
床面はあまり起伏が無く、安定している。東南部に45×50cm、深さ15cmの180号土坑がみられるが、覆土が灰黄褐色シルト層であり、本住居跡に伴うものとみられる。

カマドは、南辺中央付近（詳細は不明）に、全て壁外に張り出して設置されている。燃焼部は、前面幅25cm、中ほどから幅を狭め、奥行は72cmを測る。奥左（東）には粘土を盛った形で支脚が作り出されている。煙道は、左壁の延長線上に設けられ、長さ32cmを測る。

遺物は、須恵器横瓶、土師器杯・甕、砥石等が出土している。



第93図　62号住居跡カマド



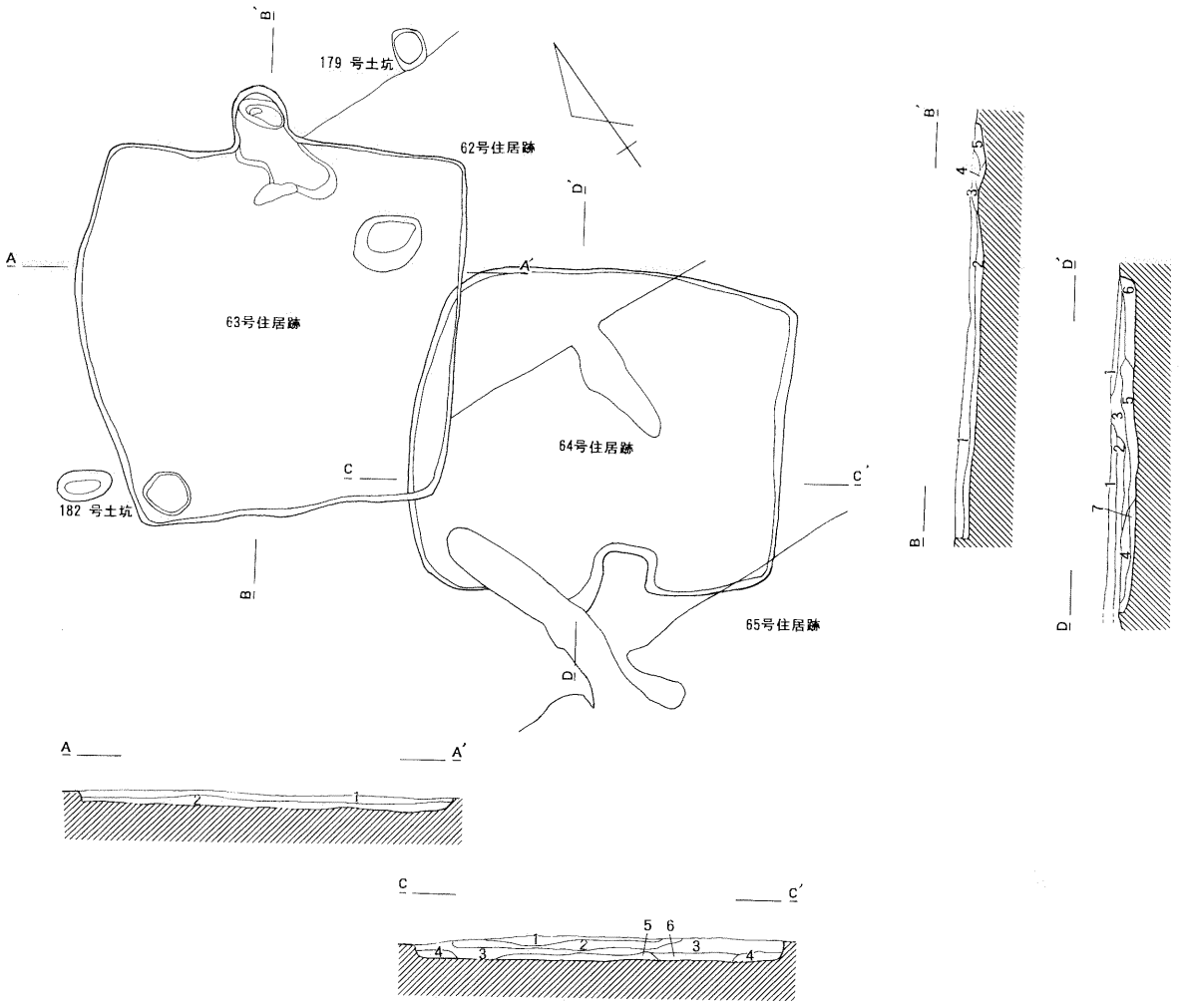
第94図　61・62号住居跡出土遺物

第54表　62号住居跡出土遺物観察表　（第94図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 横瓶	口径（8.2） 器高 底径	② ①	③	灰白 （N 7/ ）	口縁部 1／4	ロクロ整形。 表面磨滅。
2	土師器 杯	口径 12.6 器高 4.4 底径	④① ② ③	②	にぶい橙 （7.5YR7/3）	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。
3	土師器 杯	口径（14.0） 器高 底径	③ ① ②	①	灰褐 （7.5YR5/2）	1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面水拭き整形。一部炭化物付着。 外面ケズリの後ナデ。全体に吸炭。
4	土師器 杯	口径（16.0） 器高 底径	③④ ① ②	①	にぶい赤褐 （5YR 5/4）	1／3	口縁部横ナデ（2段）。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 二次加熱。吸炭。
5	土師器 杯	口径（15.6） 器高（3.9） 底径	③ ②	③	明赤褐 （2.5Y 5/6）	1／4	口縁部横ナデ，一部炭化物付着。口唇部再調整。体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面全体に吸炭。
6	土師器 杯	口径（8.8） 器高 底径	①④ ② ③	②	灰黄褐 （10YR 6/2）	1／6	口縁部横ナデ（3段）、吸炭。 体部内面ナデ、外面ケズリの後磨き。 全体に吸炭。
7	土師器 甕	口径（12.8） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 （5YR 6/6）	上位 1／6	口縁部横ナデ、一部斜のケズリ。口唇部再調整、炭化物付着。胴部上位内面ナデ、外面斜のケズリ。二次加熱。全体に吸炭。
8	砥石	残存長 9.2 幅 6.8 厚さ 3.2					2面使用。 炭化物付着。

63号・64号住居跡（第95図）

両住居跡共、ＡＣ－８グリッドに位置している。63号住居跡は64号住居跡を削平し、62号住居跡を切断している。64号住居跡は62号住居跡を削平し、63号・65号住居跡によって削平されている。



63号住居跡土層

1　黄灰色（2.5 Ｙ６／１）シルト質。部分的に炭が入る。
2　灰黄褐色（１０ＹＲ６／２）シルト質。１層より粘性が強い。酸化鉄を含む。
3　灰白色（１０ＹＲ７／１）粘土に近いシルト質。焼土・炭化物が多く混ざる。
4　にぶい黄褐色（１０ＹＲ６／３）粘土質。少量の焼土混入
5　灰黄色（2.5 Ｙ７／２）粘土に近いシルト質。灰が若干混ざる。

64号住居跡土層

1　にぶい黄橙色（１０ＹＲ７／３）シルト質。酸化鉄のブロックが入る。
2　にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／３）粘土に近いシルト質。酸化鉄のブロックが入る。
3　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。炭化物・焼土がその大半を占める。
4　黄褐色（2.5 Ｙ５／３）シルト質。焼土が若干混ざる。
5　にぶい黄色（2.5 Ｙ６／３）シルト質。炭化物が多く混ざる。
6　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）砂に近いシルト質。粒状に酸化鉄が混ざる。
7　焼土層。

第95図　63・64号住居跡

0　L＝29．000m　2m
1：60

63号住居跡

64号住居跡を削平し、62号住居跡を切断している。

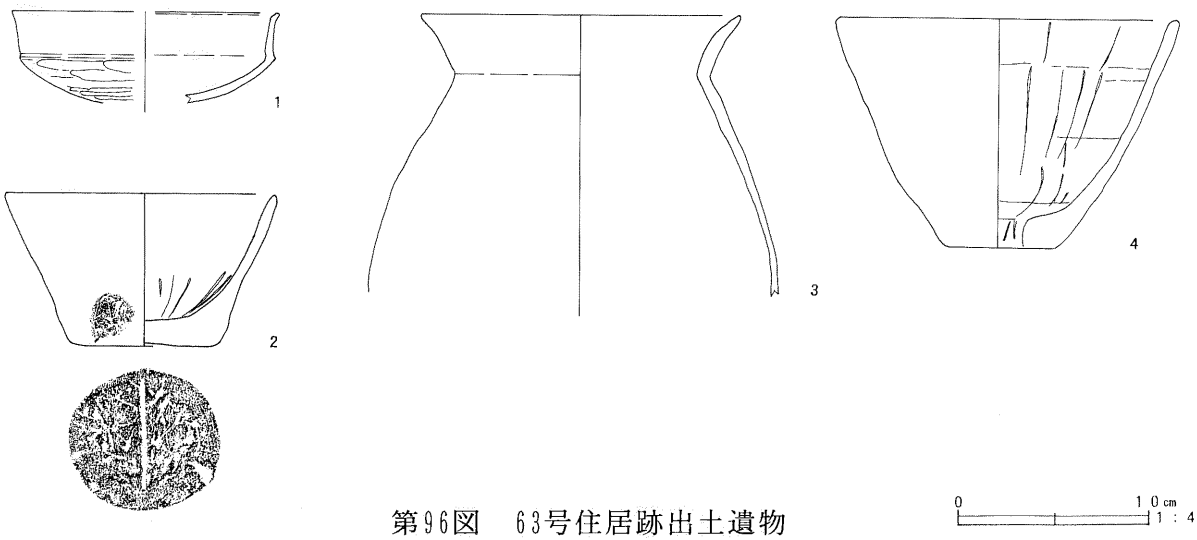
北東辺2.80m、北西辺3.00m、南西辺2.34m、南東辺2.64mを測る。平面形は、北西辺が脹らみ、やや変形ながら、正方形を呈する。主軸方位はN－35°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が炭化物を含む黄灰色シルト層、下層が酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層である。

床面はあまり起伏が無く、安定している。南西隅（42×37cm深さ5cm）と北東隅付（46×58cm深さ20cm）の2ケ所で掘り込みが確認されている。

カマドは、北東辺中央やや西隅寄りの壁外に、燃焼部が張り出して（前面は10cmほど床面側に脹らむ）設置されている。燃焼部の壁は崩落し、煙道部は削平されて残存していない。カマドの右（南東）側の壁が奥まり、左壁がせり出しているため、カマド全体が（北）方向にゆがんでいる感を呈するが、燃焼部の壁外への堀方平面形は、奥が徐々に丸みをもつ箱形を呈している。断面形は摺鉢状を呈し、煙道へは6cmの段差をもって移行する。最奥中央左側から土製支脚が、また前面からは15×37cm大の礫が出土している。同様の礫は住居跡南西隅でも出土している。

遺物は、土師器杯・鉢・甕・甑が出土している。



第96図　63号住居跡出土遺物

第55表　63号住居跡出土遺物観察表　（第96図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（14．0） 器高 底径	③ ① ④	②	橙 (2.5YR6/8)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器鉢	口径　14．2 器高　8．0 底径　8．0	②④ ③ ①	②	橙 (5YR　7/6)	一部欠	口縁部横ナデ。吸炭。 銅部内面は横方向連続のナデ、外面はナデ。 下位に木の葉痕。木の葉底。
3	土師器甕	口径　16．8 器高 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上半のみ	口縁部横ナデ、吸炭。胴部内面ナデ、外面はナデ、吸炭。二次加熱。
4	土師器甑	口径　18．0 器高　18．0 底径　5．5	①④ ②⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/6)	完形	口縁部、銅部内面（中～下位）横ナデ。外面ナデ、上位に黒斑。胴部内面下位横方向連続のナデ。偏穿された孔径2cm。

64号住居跡

62号住居跡を削平し、63号・65号住居跡によって削平されている。

北東辺、2.64m、北西辺2.65m、南西辺2.70m、南東辺2.20mを測る。平面形は、北西辺が脹らみ、やや変形ながら、正方形を呈する。主軸方位はN－37°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄粒を含む鈍い黄橙色シルト層、中層が酸化鉄粒を含む鈍い黄橙色シルト層（粘土分が多い）、下層が多量の炭化物粒・焼土粒を含む褐灰色粘土層であり、再下層として、若干の焼土粒を含む黄褐色シルト層、多量の炭化物を含む鈍い黄色シルト層、酸化鉄粒を含む黄灰色シルト層が部分的に堆積している。

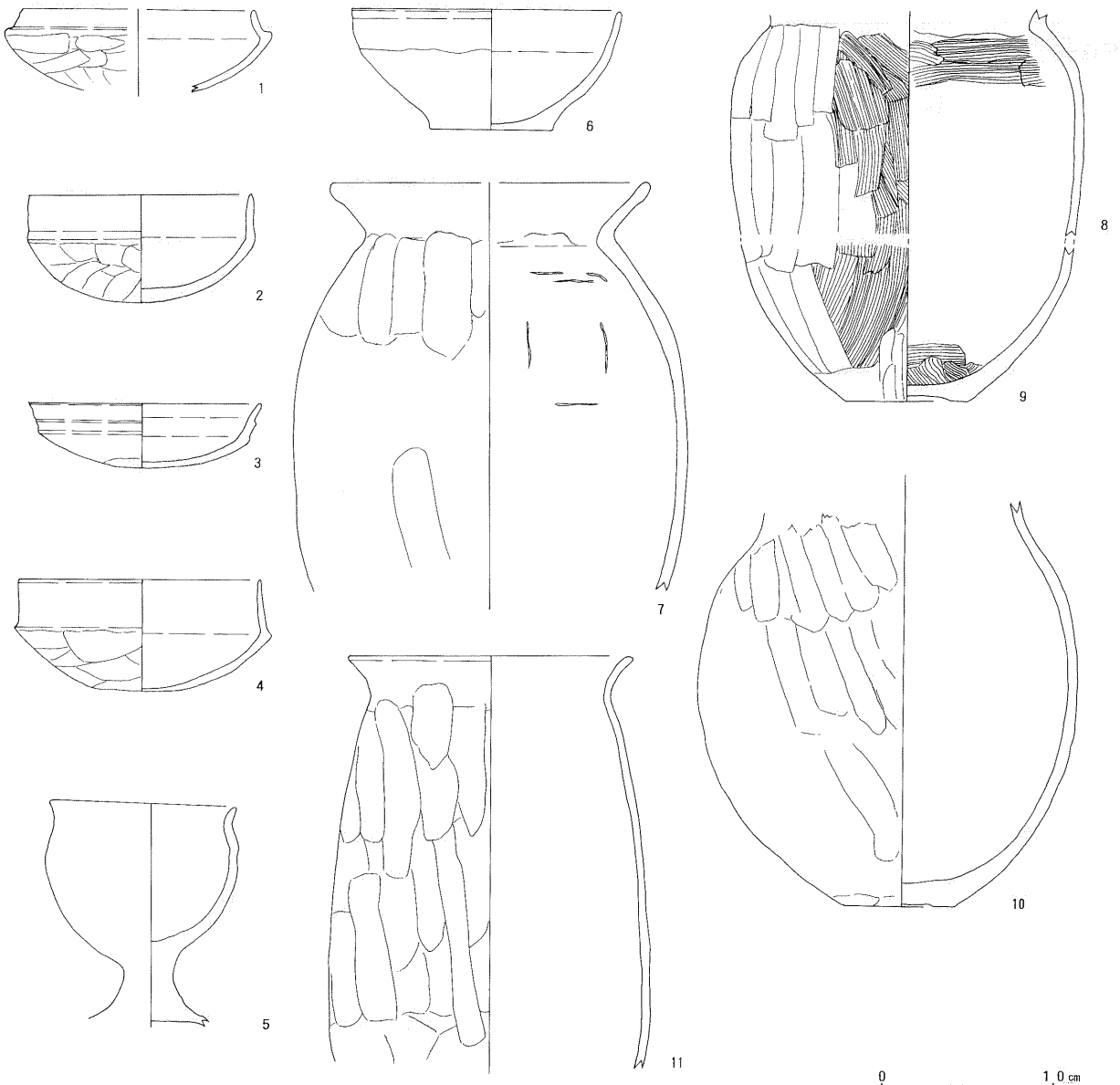
床面は起伏が無く、安定している。

カマドは、南西辺中央やや西隅寄りに設置されている。右（西）袖及び煙道は、65号住居跡カマドによって削平されている。左袖は、35cm床面に張り出している。燃焼部は概ね三角形を呈し、断面形はほぼ水平である。

遺物は、土師器杯・高杯・鉢・甕・手捏高杯等が出土している。

第56表　64号住居跡出土遺物観察表　（第97図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（13.2） 器高 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/3)	1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。
2	土師器杯	口径 12.8 器高 6.2 底径	①④ ②⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、煤付着。
3	土師器杯	口径 13.3 器高 3.7 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (5YR 7/4)	1／2	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面口縁から全面にナデ、外面ケズリ。 黒斑。
4	土師器高杯	口径 14.0 器高 6.4 底径 5.0	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	脚部欠	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面横のケズリ。 吸炭、煤付着。二次加熱。
5	手捏高杯	口径 10.7 器高 12.8 底径	②④ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	一部欠	雑然とした手捏くね風ナデ。 輪積痕残る。
6	土師器鉢	口径 15.3 器高 7.0 底径 7.0	②④ ①⑥ ③	③	橙 (2.5YR6/6)	完形	口縁部水拭き。胴部内面ナデ、外面手捏くね風ナデ、接合痕残す。底面ナデ付け。 内面炭化物、全体に吸炭。二次加熱。
7	土師器甕	口径 18.4 器高 底径	①④ ②⑥ ③	②	にぶい橙 (5YR 7/4)	上半	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリの後ナデ。 二次加熱。
8	土師器甕	口径 器高 底径	② ① ③	②	赤 (10R 4/8)	胴部上半	No.9と同一個体。 内面横のナデ、外面縦のケズリ。 激しい二次加熱。
9	土師器甕	口径 器高 底径（7.0）	② ① ③	②	赤 (10R 4/8)	底部1／2	内面ナデ、外面縦のケズリ。 底部付近ナデ付け。 激しい二次加熱。
10	土師器甕	口径 器高 底径 6.2	②⑥ ③ ① ④	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1／2	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、一部吸炭。外面上半斜のケズリ、下半斜のケズリの後ナデ、煤付着。底部周囲横のケズリ、底部中央窪み、周囲ケズリ。二次加熱。
11	土師器甕	口径 16.3 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	上半	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。 内面吸炭。外面吸炭、煤付着。二次加熱。

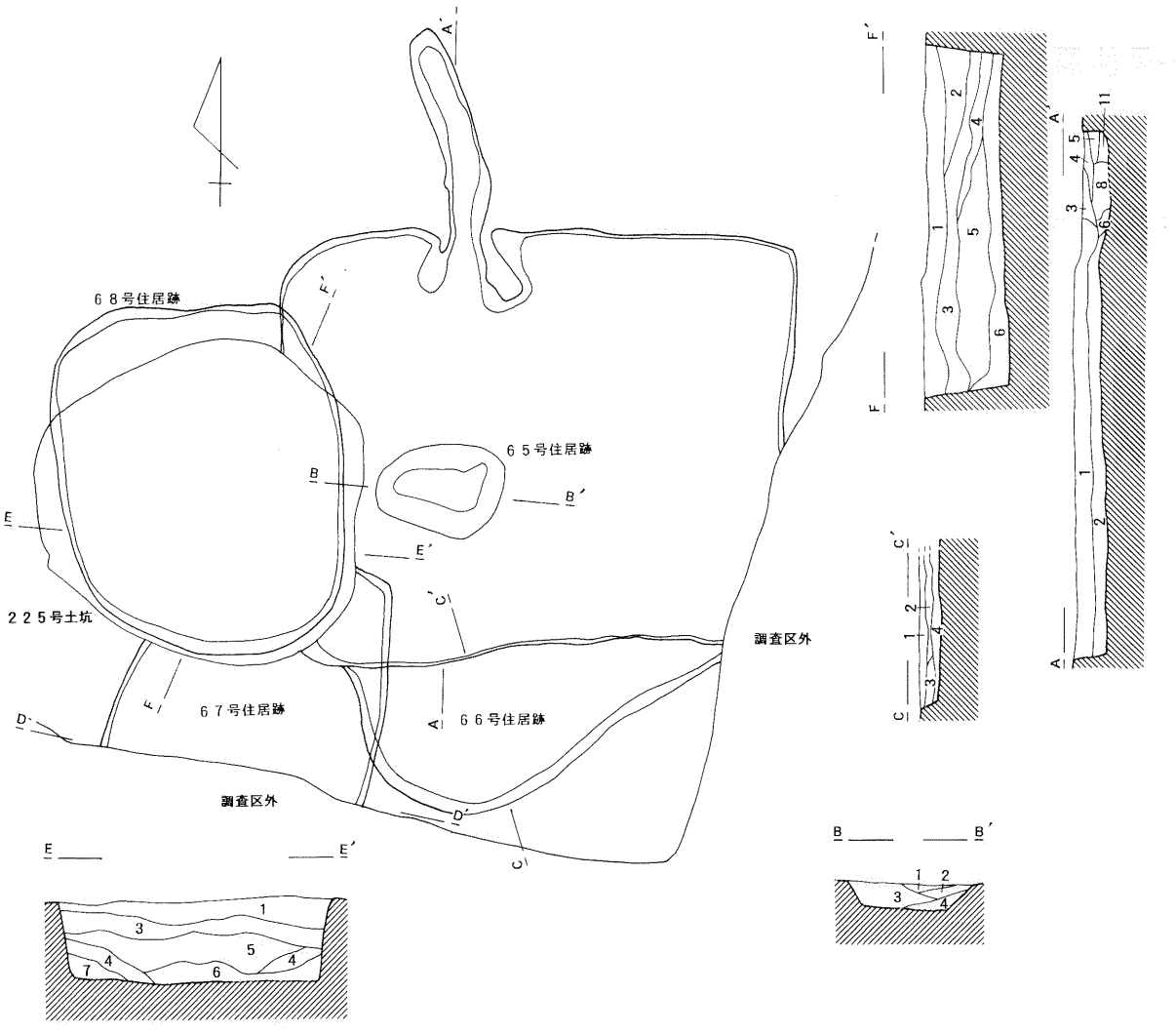


第97図　64号住居跡出土遺物

65号～68号住居跡（第98図・99図）

大部分がＡＤ－８グリッドに位置しているが、65号住居跡カマドはＡＣ－８グリッドに位置している。

65号住居跡は225号土坑によって切断されており、66号・67号・68号住居跡を削平している。また東南部は、池（調査区外）によって削除されている。66号住居跡は65号住居跡によって切断されており、67号住居跡を削平している。67号住居跡は65号・66号住居跡によって削平され、225号土坑によって切断されている。また南半は、調査区外に及んでいる。68号住居跡は65号住居跡・225号土坑によって削平されている。



65号住居跡土層

1　灰黄褐色（10ＹＲ５／２）やや粘性に富んだシルト質。比較的しまっている。
2　灰黄褐色（10ＹＲ５／２）粘土質。部分的に炭が入る。
3　焼土層。
4　褐灰色（7.5 ＹＲ５／１）しまりなし。焼土が多く混ざる。やや砂っぽい。
5　暗黄灰色（2.5 ＹＲ５／２）粘土質。焼土が少量混ざる。
6　にぶい黄褐色（10ＹＲ５／３）粘土質。炭・焼土が多く入る。
7　にぶい黄褐色（10ＹＲ５／３）６層に比べると砂っぽく焼土の含有率が高い。
8　褐灰色（１０ＹＲ５／１）炭化物・焼土・粘土が混入。
9　焼土・灰層。
10　にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）シルト質。焼土が微量混ざる。
11　灰黄色（2.5 ＹＲ５／２）粘土質。焼土は見られない。
12　灰黄褐色（10ＹＲ５／２）粘土質。焼土・灰が多く混ざる。

Ｐｉｔ土層

1　灰黄褐色（１０ＹＲ２／５）粘土質だが、粘性はやや弱い。
2　基本的に１層の土と同じであるが、炭化物を非常に多く含む。
3　灰黄褐色（１０ＹＲ３／５）シルト質。しまりあり。
4　暗灰黄色（2.5 Ｙ２／５）粘土質。粘性強い。

66号住居跡土層

1　褐灰色（１０ＹＲ４／１）粘性がやや強いシルト質。鉄分が粉状に入り込む。
2　黄灰色（2.5 Ｙ６／１）粘土質。火山灰が多く混じる。
3　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）粘土質。２より粘性が強い。
4　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。しまりに欠ける。焼土・炭化物が点々と混じる。

67号住居跡土層

1　灰色（５Ｙ５／１）シルト質。しまりなし。客土。
2　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）粘土に近いシルト質。酸化鉄のブロックが混じる。
3　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。しまりなし。根穴か？
4　黒褐色（１０ＹＲ３／２）粘土質。６７号を切る別土抗の覆土。焼土が若干混じる。
5　にぶい黄色（2.5 Ｙ６／３）粘土質。酸化鉄の細かい粒が混じる。
6　黄褐色（2.5 Ｙ５／３）粘土質。遺物の出土が顕著。

68号住居跡土層

1　にぶい黄色（2.5 Ｙ６／３）砂に近いシルト質。粘土のブロックが島状に入る。
2　黄褐色（2.5 Ｙ５／３）砂質。酸化鉄が多く混じる。
3　灰色（５Ｙ６／１）粘土質。１の土が若干混じる。
4　明黄褐色（2.5 Ｙ７／６）砂質。全体的に酸化している。焼土が若干混じる。
5　灰黄褐色（１０ＹＲ６／２）粘土質。粘土のブロックが島状に入る。
6　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。粘性は５層よりも強い。酸化した砂が部分的にわずかに混じる。
7　黄褐色（2.5 Ｙ５／３）砂質。２層に近いが６層の土がブロックになって部分的に混じる。

0　L＝29．000m　2m
1：60

第98図　65～68号住居跡

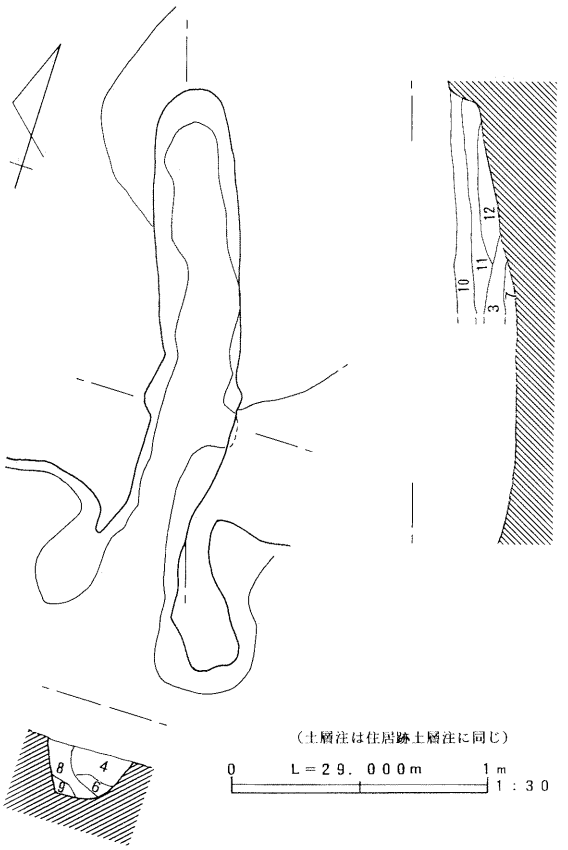
65号住居跡

225号土坑による削平と、池（調査区外）による削除によって、辺長が計測できるのは北辺のみであるが、削除が部分的であるため、東西4.10m、南北3.36mの規模をもつことが知れる。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN－1°－Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が灰黄褐色シルト層、下層が炭化物粒を含む灰黄褐色シルト層である。

床面は、多少起伏があるものの、安定している。中央西寄りに74×90cm、深さ20cmのピットがあり、住居跡覆土が流入しているところから、本跡に伴うものとされる。

カマドは、北辺中央西寄りに設置されている。両袖は、床面上に張り出して（右一東70cm、左一西56cm）いる。前面が『八』字状に広がり、壁外に移ると幅26cmで箱形になる。両袖前面から1.13mの地点で左に屈曲しており、ここで煙道部へ移行しているようであるが、燃焼部と煙道部の境界は明確でない。屈曲部から奥壁までは、1.32mを測る。断面形は、燃焼部・火床は弓状に窪み、煙道は僅かに直線的になって上昇する。奥壁は、垂直に近い角度で立ち上がる。

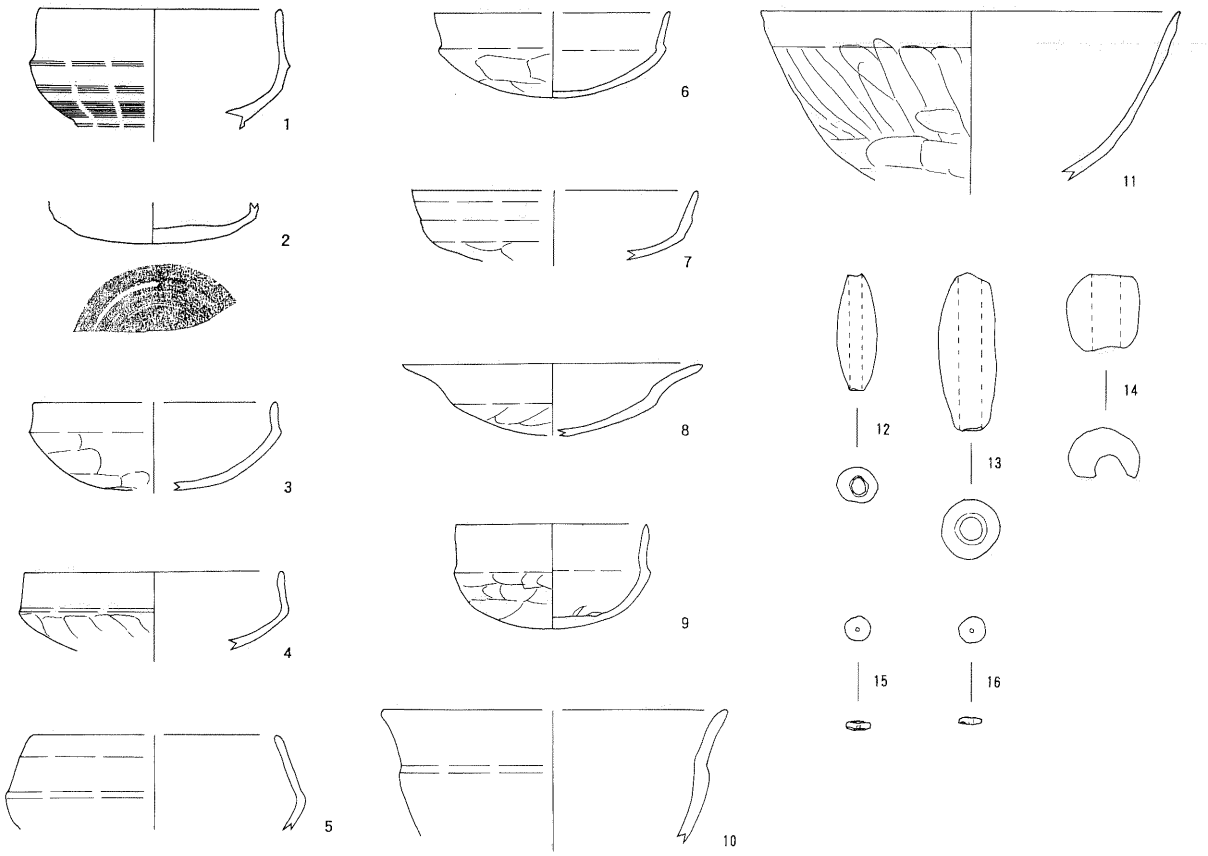


第99図　65号住居跡カマド

遺物は、須恵器杯・高杯、土師器杯・鉢・甕、土錘、滑石製臼玉等が出土している。

第57表　65号住居跡出土遺物観察表　（第100図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 高杯	口径（12．6） 器高 底径	① ②	①	暗灰 （N　3/）	杯部 1／4	ロクロ整形。 体部内面灰付着。
2	須恵器 杯	口径 器高 底径（　8．2）	① ②	①	灰 （N　5/）	底部 1／2	ロクロ整形。 底面回転ヘラケズリ。 内面の一部に炭化物付着。
3	土師器 杯	口径　13．0 器高 底径	② ① ③	②	橙 （2.5YR6/8）	1／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、磨滅。 外面ケズリ、黒斑。
4	土師器 杯	口径（13．6）	②④ ①	②	明赤褐 （2.5YR5/8）	上半 1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
		器高 底径	③				黒斑。二次加熱。
5	土師器 杯	口径（13．2）	② ①	③	赤褐 （5YR　4/6）	上半 1／3	口縁部横ナデ（2段）。内面烈点状剥離。 体部横のケズリ。
		器高 底径	③				内外面吸炭。外面の一部に煤付着。
6	土師器 杯	口径（12．3） 器高　4．5	③ ①	②	橙 （2.5YR6/8）	1／3	口縁部横ナデ。 体部外面ケズリ。
		底径	②				表面剥離。
7	土師器 杯	口径（15．2）	① ③	②	にぶい赤褐 （2.5YR5/4）	1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。
		器高 底径	②				全体に吸炭。



第100図　65号住居跡出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
8	土師器 杯	口径 16.7 器高 3.8 底径	②④ ③ ①	②	橙 (2.5YR7/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部の内面磨滅。外面ケズリ。 吸炭。
9	土師器 杯	口径 10.0 器高 5.5 底径	② ③ ①	②	橙 (5YR 7/8)	完形	口縁部横ナデ、一部吸炭。 体部内面ナデ、横方向の連続ナデ。 外面渦巻き状のケズリ。
10	土師器 鉢	口径（18.4） 器高 底径	③⑥ ① ④	③	明赤褐 (2.5YR5/8)	上半 1／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。 外面斜のケズリの後ナデ。 口縁部から胴部にかけ一部吸炭。二次加熱。
11	土師器 鉢	口径（22.0） 器高 底径	②⑥ ① ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上位 1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 黒斑。
12	土錘	最大径 2.2 長さ 6.0 孔径 0.6				完形	
13	土錘	最大径 3.0 残存長 8.3 孔径 1.2				一部欠	
14	土錘	最大径 3.8 残存長 4.0 孔径 1.5				1／2	
15	臼玉	最大径 1.3 厚さ 0.4 孔径 0.2					滑石製。
16	臼玉	最大径1.45 厚さ 0.4 孔径 0.2					滑石製。

66号住居跡

65号住居跡によって切断されており、67号住居跡を削平している。このため、形態・規模共に不明である。残存する壁から、主軸方位はＮ－33°－Ｗを示すと思われる。

本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄粒を含む褐灰色シルト層、中層が火山灰を含む黄灰色粘土層、下層が焼土粒・炭化物粒を含む灰黄褐色シルト層である。

床面は、やや起伏があるものの、安定している。

カマド等は、検出されていない。

遺物も、ほとんど出土していない。

67号住居跡

65号・66号住居跡によって削平され、225号土坑によって切断されている。また南半は、調査区外に及んでいる。

よって、各辺長は計測できないが、東西2.16m、南北1.70m以上の規模をもつことが知れる。平面形は長方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ—20°—Ｅを示す。

覆土は、上層が酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層、下層がやはり酸化鉄粒を含む鈍い黄色粘土層、最下層が黄褐色粘土層である。

床面は、ほとんど起伏が無く水平で、安定している。

カマド等は検出されていない。

遺物は、土師器甕・甑、砥石等が出土している。

第５８表　６７号住居跡出土遺物観察表　（第１０３図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器甕	口径（１３．０） 器高　８．８ 底径　５．５	②⑥ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	２／３	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ケズリ。 底面ナデ付け。吸炭。二次加熱。
2	土師器甑	口径　１４．３ 器高 底径	②⑥ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	完形	口縁部横のナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。孔は内面より削り出し。 孔径3.0 cm。吸炭、炭化物付着。
3	砥石	長さ　２０．６ 幅　１２．１ 厚さ　９．５					一面使用。

68号住居跡

65号住居跡・225号土坑によって削平されている。

南北は2.97m、東西は2.29mを測る。特に南辺・東辺が脹らみをもつが、全体では長方形を呈するといえる。主軸方位はＮ—６°—Ｗを示す。

本住居跡の覆土は、すべて投入された土層の特色をあらわしている。

床面は、ほとんど起伏が無く水平で、安定している。

カマド等は、検出されていない。

遺物は、土師器壺等が出土している。

第５９表　６８号住居跡出土遺物観察表　（第１０３図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器壷	口径（２０．８） 器高 底径	③② ④ ①	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部 １／３	有段口縁。口縁部内面磨滅、外面ナデ。 吸炭、黒斑。炭化物付着。 二次加熱。
2	土師器壷	口径 器高 底径　７．６	③④ ① ②	③	橙 (7.5YR6/6)	底　部 の　み	No.１と同一個体か。内外面ナデ。 底面ナデ付け。 吸炭、炭化物付着。二次加熱。

69号住居跡（第101図）

ＡＣ－８、ＡＤ－８、ＡＣ－９グリッドからＡＤ－９グリッドにかけて位置している。

226号土坑によって削除されており、227号土坑を削平している。

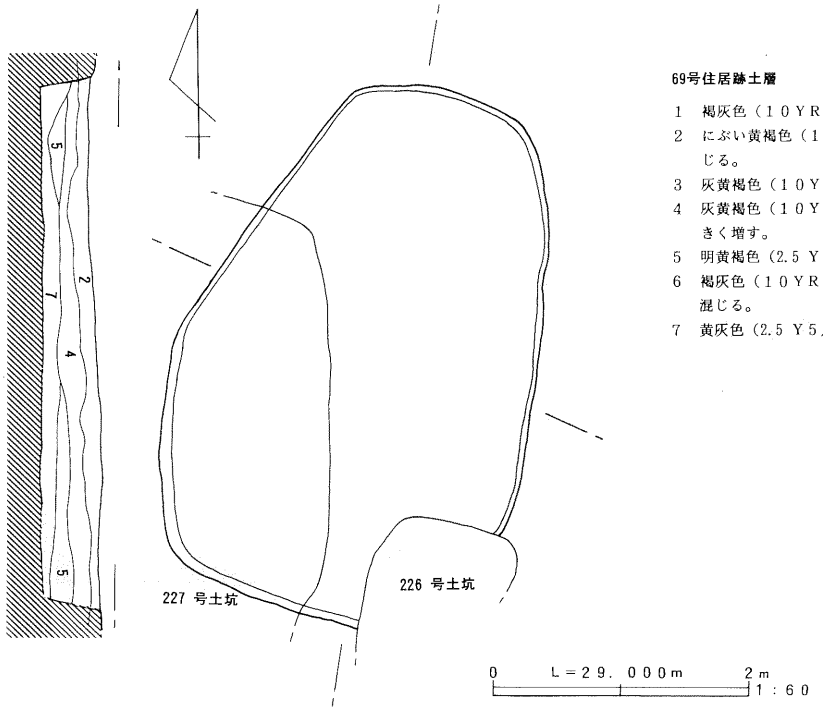
南北4.30m、東西2.80mを測るが、西北側が狭まり、全体の平面形は不整形であるといわざるを得ない。主軸方位はＮ―８°―Ｅを示す。

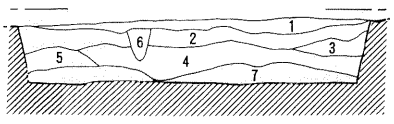
本住居跡の覆土は、上層が多量の酸化鉄を含む鈍い黄褐色シルト層、中層が灰黄褐色シルト層、下層が多量の酸化鉄を含む黄灰色シルト層である。また中層と下層の間（壁際が多い）には、炭化物を含む鈍い褐灰色粘土層をレンズ状に挟んでいる部分もある。

床面は、ほとんど起伏が無く水平であり、安定している。

カマド等は、検出されていない。

遺物は、土師器杯・甕、土錘等が出土している。





69号住居跡土層

1　褐灰色（１０ＹＲ４／１）シルト質。しまりなし。
2　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）砂に近いシルト質。酸化鉄が多く混じる。
3　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）シルト質。酸化鉄が多く混じる。
4　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。この層から土器の出土量が大きく増す。
5　明黄褐色（2.5 Ｙ７／６）シルト質。
6　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。有機物のものと思われる炭化物が混じる。
7　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）砂質。酸化鉄が多く混じる。

第101図　69号住居跡

第６０表　６９号住居跡出土遺物観察表　（第１０３図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径（１１．９） 器高 底径	② ①	②	青灰 (5PB 6/1)	口縁部 １／５	ロクロ整形。
2	土師器杯	口径（１４．６） 器高　４．４ 底径	②④ ③ ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	２／１	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。
3	土師器杯	口径（１３．０） 器高　３．７ 底径	② ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内面磨滅、外面ケズリ。 黒斑。炭化物付着。
4	土師器甕	口径（１０．２） 器高 底径	②⑥ ① ③	③	橙 (5YR 6/8)	上位 １／２	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 吸炭。
5	土師器甕	口径　１７．４ 器高 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (5YR 6/8)	上位 ２／３	口縁部横ナデ。胴部上位内面ナデ、外面縦のケズリ。 一部吸炭。
6	土師器甕	口径 器高 底径　７．５	②⑥ ①	②	赤褐 (2.5YR4/6)	下半 １／２	胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 底部の周辺及び底はケズリ。 吸炭。二次加熱。
7	土錘	最大径　１．５ 残存長　５．２ 孔径　０．５				完形	
8	土錘	最大径　１．７ 残存長　４．４ 孔径　０．６					
9	土錘	最大径　３．４ 残存長１０．０ 孔径　１．３					

70号住居跡（第102図）

ＡＢ－８、ＡＣ－８、ＡＢ－９グリッドからＡＣ－９グリッドにかけて位置している。

136号土坑を削除している。

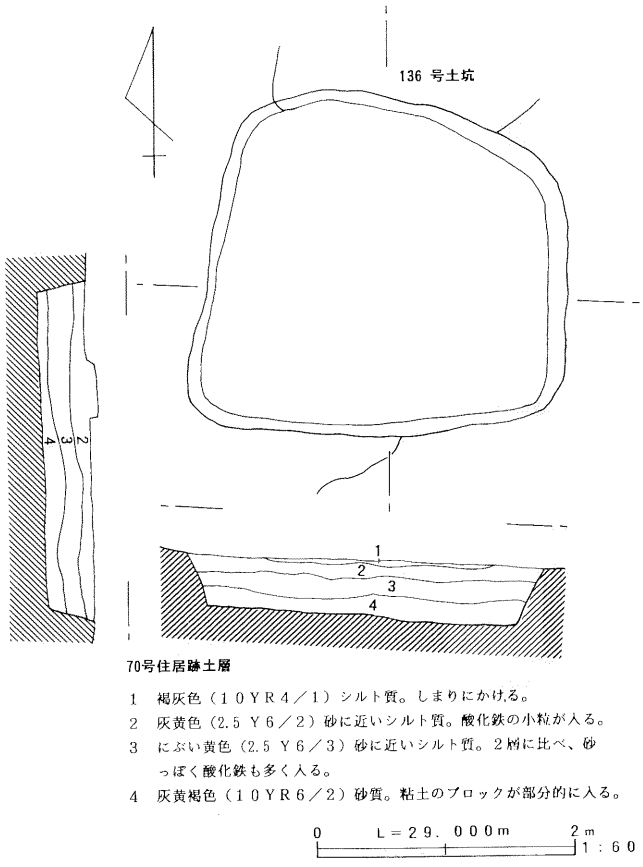
北辺は丸みをもって2.44m、西辺2.40m、南辺2.80m、東辺1.80mを測る。全体の平面形は、正方形を基本とした不整形であるといわざるを得ない。主軸方位はN―2°―Eを示す。

本住居跡の覆土は、上層が酸化鉄を含む灰黄色シルト層、中層が多量の酸化鉄を含む鈍い黄色シルト層、下層が粘土粒を含む灰黄褐色砂層である。

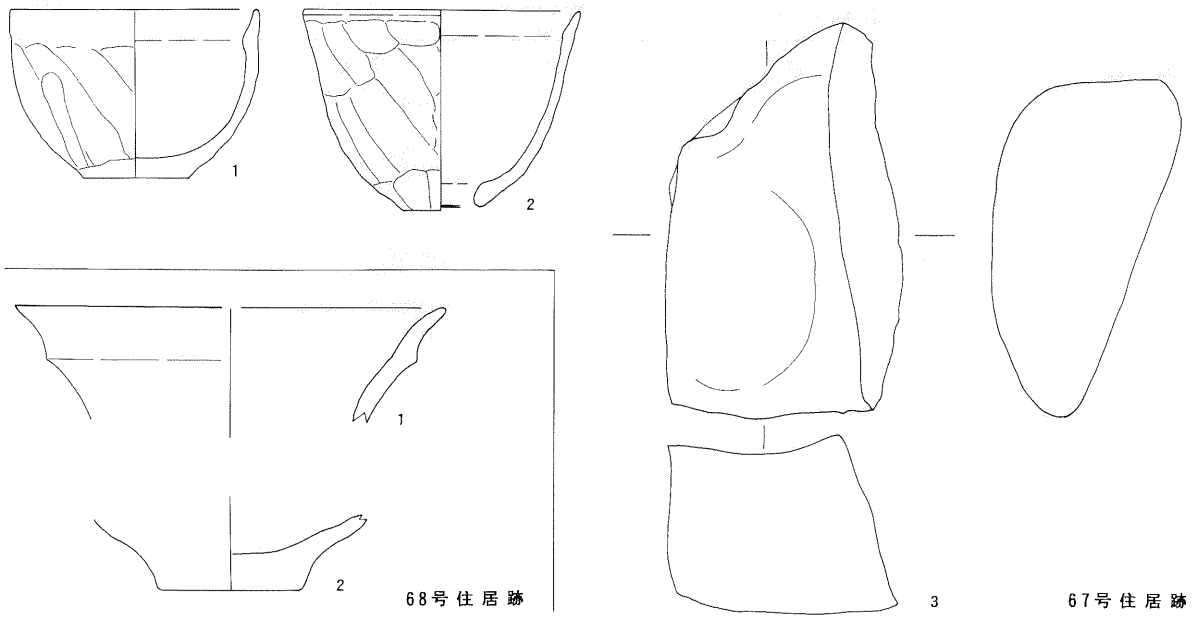
床面は、やや起伏はあるが、安定している。

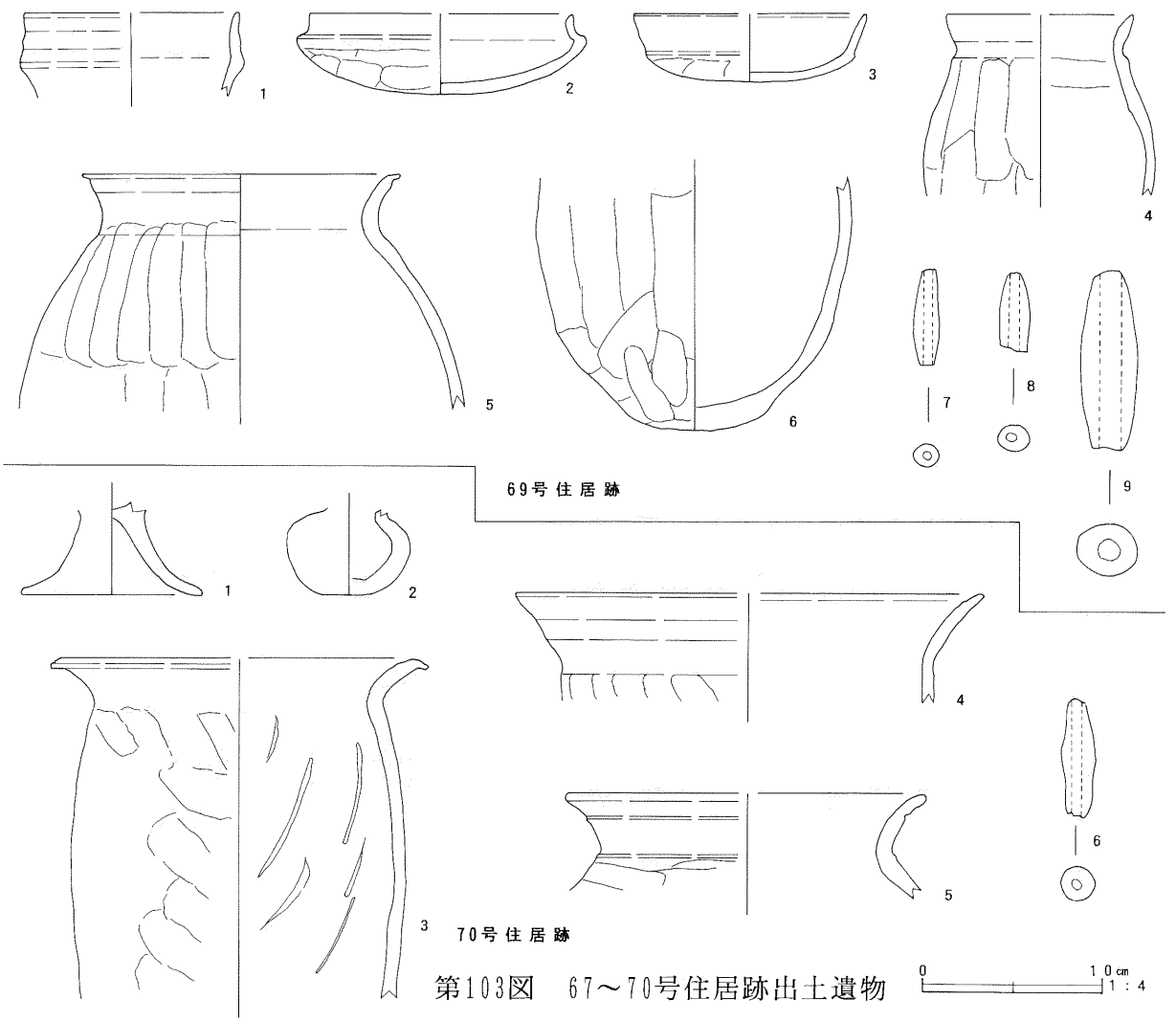
カマド等は、検出されていない。

遺物は、土師器高杯・甕、手捏柑、土錘等が出土している。



第102図　70号住居跡





第103図　67～70号住居跡出土遺物

第６１表　７０号住居跡出土遺物観察表　（第１０３図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器高杯	口径 器高 底径（９．８）	①⑥ ② ③	②	橙 （5YR　7/8）	脚部のみ	内面横の回転ナデ。 外面ナデ。 ホゾ接合。
2	手捏坩	口径 器高 底径	②④ ③ ①	②	橙 （5YR　6/8）	体部のみ	内面ナデ付け。 外面手捏ね風ナデ。
3	土師器甕	口径（２０．８） 器高 底径	②④ ③ ①	②	浅黄橙 （7.5YR8/4）	上半 １／３	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ケズリ。 内面吸炭、黒斑。
4	土師器甕	口径（２６．０） 器高 底径	① ④ ③	②	にぶい橙 （7.5YR6/4）	上位 １／４	口縁部横ナデ（内２段・外３段）。 胴部上位内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。
5	土師器甕	口径（２０．０） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （2.5YR6/8）	上位 １／３	口縁部横ナデ（２段・段部に１条の沈線）。 胴部上位内面ナデ、外面ケズリ。
6	土錘	最大径　１．９ 残存長　６．５ 孔径　０．６					

71号住居跡（第104図）

Ｘ－７グリッドを中心に位置していると思われる。

浅葱色シルト層上に、須恵器蓋、土師器杯・甕、土錘等がほぼ同一レベルで出土したものである。包含層と基盤層との区別がつかず、プランの確認はできていない。しかしながら、遺物がほぼ同一レベルで出土したこと、また同一面で２ケ所に焼土が検出されたことから、本跡を住居跡とした。よって、形態・規模等は不明である。

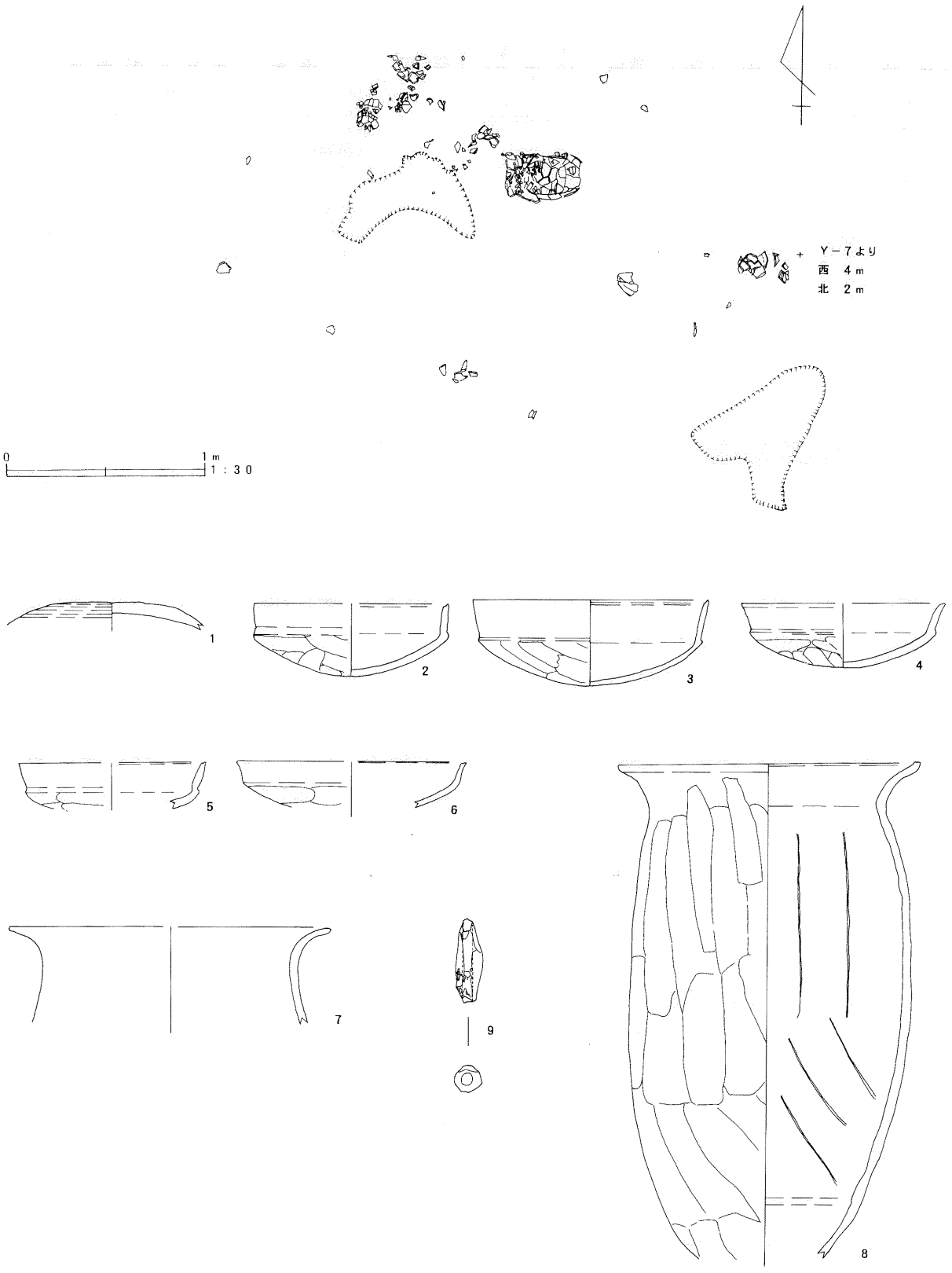
２ケ所のうち北西側の焼土は、焼土粒子が集中したものであるのに対し、南東側の焼土は、浅葱色シルト層が焼土化したものである。

このことから、南東側の焼土は、カマドの火床であった可能性も考えられる。もしそうであるならば、カマドを南東辺に設置した住居跡であるといえる。

なお、遺物及び焼土の広がりは、北西―南東方向が3.26ｍ、南西―北東方向が2.12ｍの範囲である。

第６２表　７１号住居跡出土遺物観察表　（第１０４図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器蓋	口径 器高 底径	① ② ③	③	灰 （10Y　6/1）	１／３	ロクロ整形。 摘み部分に接合痕。
2	土師器杯	口径（１２．８） 器高　４．９ 底径	① ② ③	①	赤褐 （10R　4/4）	１／２	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 全体に炭化物付着。二次加熱。
3	土師器杯	口径（１５．８） 器高　５．８ 底径	①③ ④⑥ ②	①	明赤褐 （5YR　5/8）	１／２	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、炭化物付着。外面ケズリの後ナデ。
4	土師器杯	口径（１３．８） 器高　４．３ 底径	①④ ② ③	①	橙 （5YR　7/8）	１／２	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ナデの後ケズリ。
5	土師器杯	口径（１２．６） 器高 底径	①⑥ ② ③	①	橙 （7.5YR7/6）	上位 １／４	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、吸炭。 外面ケズリの後ナデ。



第104図　71号住居跡及び出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
6	土師器 杯	口径（15．6） 器高 底径	③④ ① ②	②	にぶい褐 (7.5YR5/4)	上位 1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 黒斑。
7	土師器 甕	口径（21．4） 器高 底径 0．5	①⑥ ② ③	②	にぶい橙 (5YR 7/4)	上位 1／6	口縁部横ナデ。 体部内外面ナデ。
8	土師器 甕	口径 20．0 器高 底径 8．6	② ③	③	にぶい橙 (7.5YR7/3)	底部 欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。体部内面ナデ、外面縦のケズリの後ナデ。黒斑。底部割れ口は磨耗、甑に転用されたものか。
9	土錘	最大径 1．4 残存長 5．6 孔径 0．8				一部欠	

2　土器祭祀跡（第105図・114図）

大量の土器が集中出土した地点は、本遺跡内で４ケ所に及ぶ。

南北グリッドＹ～ＡＡ、東西グリッド２～４に及ぶ範囲には、最深部1.10m程の、池沼もしくは入り江状に澱んだ河川（東側が調査区外に及ぶためどちらか断定できないが、遺跡全体で東への傾斜が認められ、本遺跡東縁に河川が存在した可能性が高く、これに繋がる河川の入り江であった可能性が高い）が広がる。

土器の集中出土地点は、入り江の西端・最奥部・ＡＡ－４グリッドからＡＡ－５グリッドにかけて位置するもの１ケ所、入り江の南・ＡＣ－３グリッドからＡＣ－４グリッドにかけて位置するもの１ケ所、最も南側のＡＣ－３グリッドに位置するもの２ケ所の、計４ケ所である。

これら４ケ所の集中出土地点に対して、北側から順次、１号土器祭祀跡・２号土器祭祀跡・３号土器祭祀跡とした。なお３号土器祭祀跡は、最も南側の２ケ所の集中地点から出土した土器片の内、範囲を越えて接合されたものが見られたため、一つの遺構として統合したものである。

１号土器祭祀跡（第106図～109図）

大部分がＡＡ－４グリッドに位置し、西端がＡＡ－５グリッドに及ぶ。

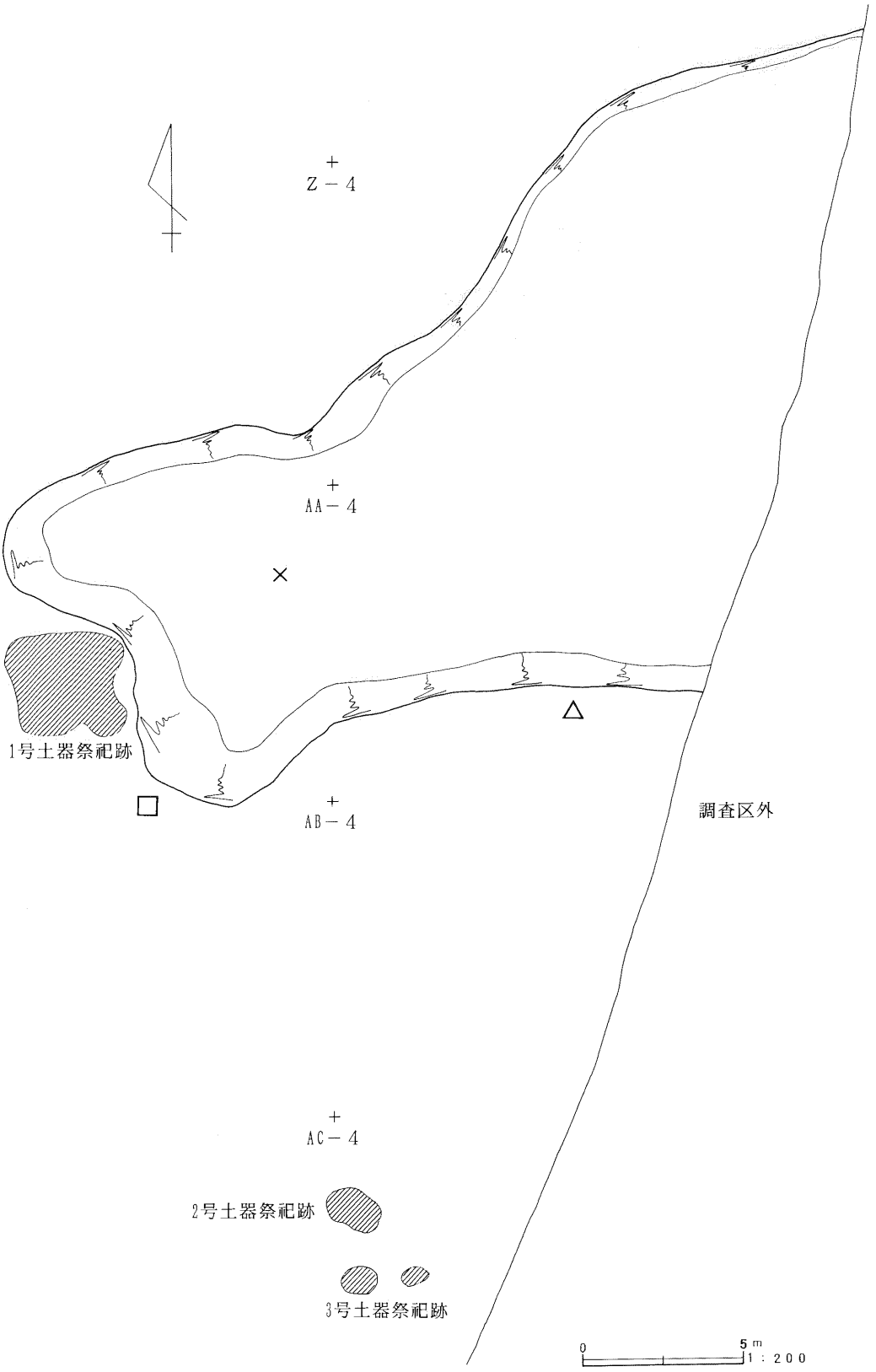
東から西へ伸びる入り江は、西に移るに従って徐々に幅を狭めてくるが、最奥部から７ｍほどの所で最も狭まり、9.5mになる。

土器群は、この入り江の最奥野中央、僅かに張り出した部分を要にして、20cm程掘り窪めて作り出された平坦面から出土している。

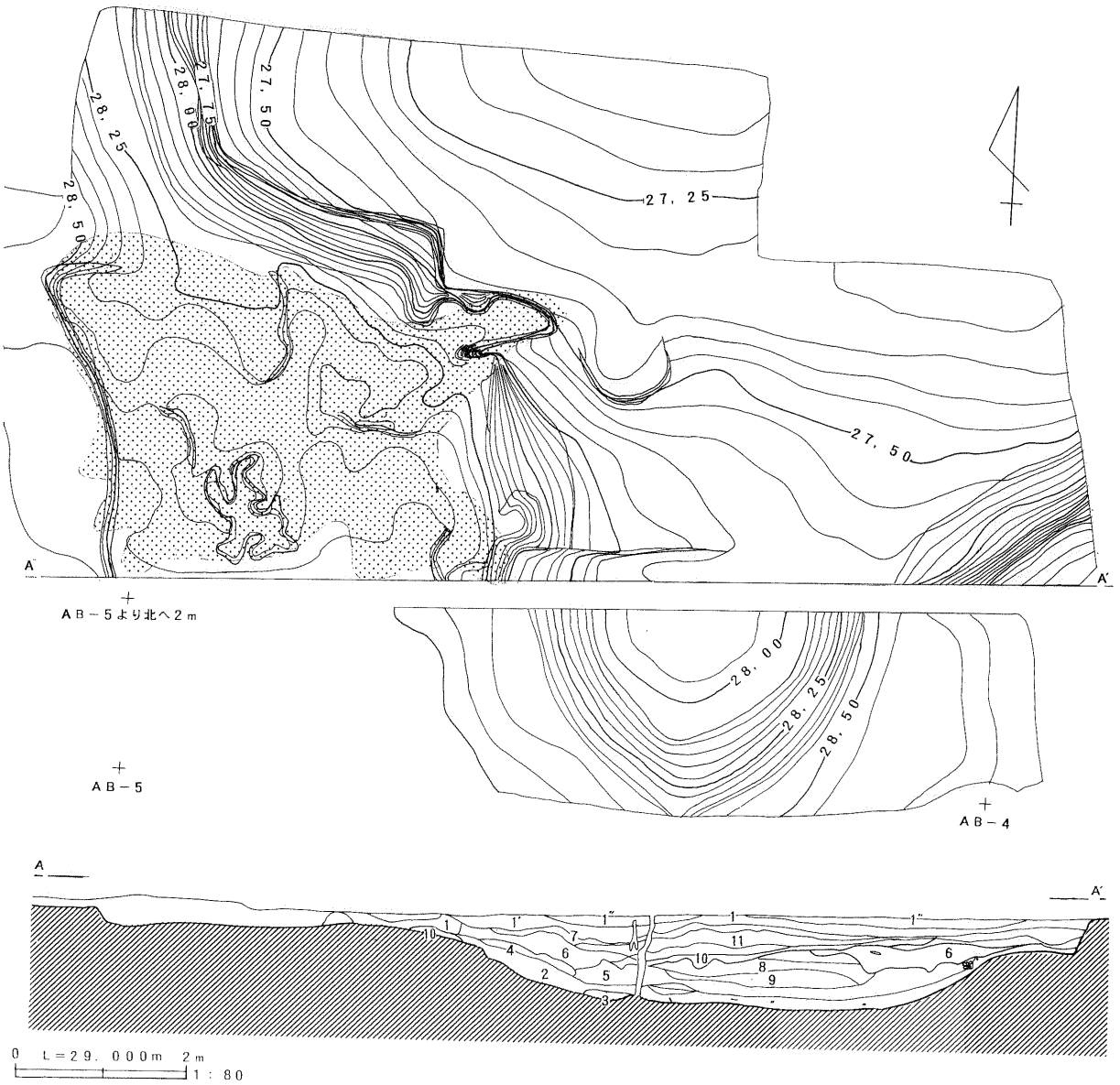
作り出された平坦面は、東西４ｍ、南北3.4ｍに及ぶ。平坦面の先端部には、灰・焼土粒を大量に含む炭化材層がみられ、入り江の最下層として連続している。炭化材層中には、平坦面から出土した杯・甕と接合されるもの（No. 22、24、58）が含まれている。

また、最上層である灰褐色シルトと黄褐色粘土混在層中から出土した須恵器甕破片が、No. 41甕本体と接合されている。

さらには、平坦面北東隅の張り出し部分から５ｍ東北東の入り江底面（第105図×印地点・最深部）から、須恵器提瓶（No. 43）、須恵器甕（No. 46）が、ほぼ完形で出土しており、平坦面の先端部から転落した様相を呈している。



第105図　1号～3号土器祭祀跡位置図



1号土器祭祀土層

1　灰褐色（10YR5／1）シルト質。にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土混在層。
1′　1層と同一であるが、酸化鉄粒を多量に含む。
1″　1層と同一であるが、酸化鉄粒がブロック状を呈する。
2　炭化材・灰・焼土ブロック混在。
3　酸化鉄ブロックを多量に含む。緑灰色砂（5G5／1）
4　黄灰色（2.5 Y6／1）酸化鉄粒・炭化材粒を含む。
5　4層とほぼ同一であるが、酸化鉄が3㎝のブロック状を呈する。
6　黄灰色（2.5 Y5／1）粘土質。酸化鉄粒・マンガン粒を多量に含む。
7　灰色（7.5 Y6／1）粘土質。酸化鉄粒・マンガン粒を多量に含む。
8　青灰色（5B5／1）酸化鉄粒・マンガン粒を含む
9　灰色（5Y5／1）粘土質。酸化鉄粒・マンガン粒を含む。
10　暗灰色（N3－）粘土質。マンガン粒・砂を多量に含む。
11　黄灰色（2.5 Y6／1）マンガン粒を含む。

第106図　1号土器祭祀跡

こうしたことから、沼もしくは河川の入り江は、平坦面の作り出し時と同時に掘削された、人工的なものであり、埋没にもさほどの時間がかからなかったものと成し得る。

平坦面北東隅・張り出し部分には、10×20cm～5×5cm大の礫が敷かれている。礫は、平坦面全域にみられるが、特にこの北東部の部分に集中しており、その上面には、馬の右下顎を中心にした頭骨の一部が検出されている。

土器類は、この馬の頭骨を要として、西へ南へ、さらには南東へと広がって配置されている。

出土遺物の内、実測可能なものは須恵器杯１、土師器杯41、須恵器甕３（５）、須恵器提瓶１、土師器甕12であった。このほか、滑石製模造品、滑右製臼玉、土錘等がみられる。

礫敷東側の平坦面東瑞部には、北から須恵器甕(No. 41)、土師器甕（No. 55)、その内側に土師器杯（No. 32・20）が配されている。恐らく、No. 43・46の須恵器提瓶・甕は、この部分から転落したものと思われる。

礫敷西側の平坦面北端部には、No. 52・50・54の土師器甕が並ぶ。

また、この南側にはやはりNo. 53の土師器甕と、No. 44の須恵器甕が配されている。さらに、No. 44須恵器甕の南側平坦面東瑞部には、復元はできなかったものの、須恵器甕片（No. 69・70）が分布していた。

No. 52・50・54の土師器甕の西側には、30cmの間隔をあけて、平坦面北端部にNo. 57・49・56・51・47の土師器甕、その内側にNo. 9・12・16・30・26・35・38の土師器杯、及びNo. 62の滑石製模造品が配されている。

この西側、作り出し平坦面の西北隅では、土師器杯（No. 41・23・7）３個体が配されている。

作り出し平坦面の南西部では、須恵器杯（No. 1)、土師器杯（No. 2・3・4・5・6・8・10・11・13・14・15・17・18・19・22・24・25・27・28・29・31・33・34・37・39・40)、滑石製模造品（No. 61)、滑石製臼玉（No. 63～68)、土錘（No. 59・60）が配されている。この地域に、甕類は配されていない。

このほか、作り出し部の南（ＡＢライン上、４ポイントから6.00ｍ地点・第105図□印）より、鳥（頭部）形滑石製模造品が出土している。しかしながら本品は、盗難にあい、現存していない。

また、ＡＢ－３ポイントから北2.80ｍ、西2.40ｍ地点（第105図△印）の入り北部には、須恵器大甕（第157図）が単独で、潰れた状態で検出されている。発掘調査時に、本土器祭祀跡との関連性が把握されなかったため、参考資料とした。

配置についてまとめると、以下の７点に集約される。

① 平坦面北東隅・張り出し部の礫敷上に、馬の頭骨の一部が検出されている。

② 土器類は、この馬の頭骨を要として、西へ南へ、さらには南東へと広がって配置されている。

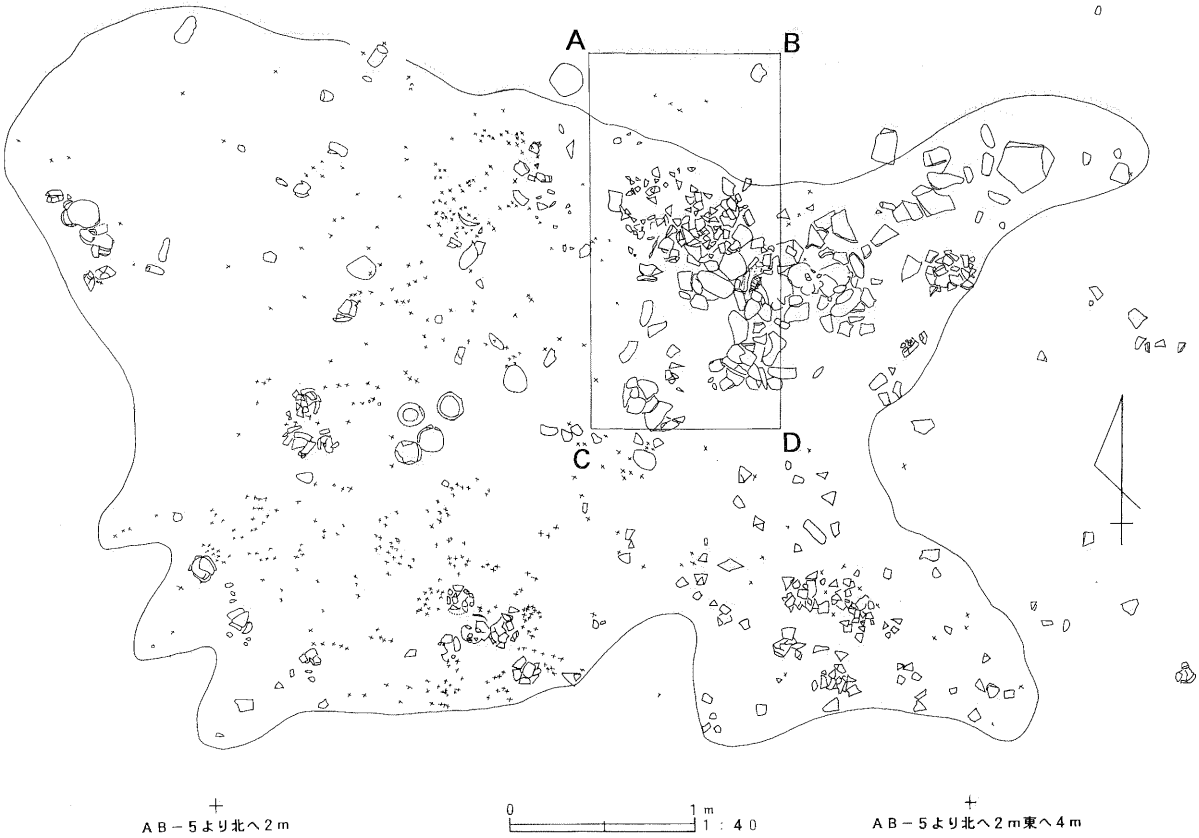
③ 器種についてみると、入り江に落ち込む際の平坦面端部に甕類を配し、逆に、平坦面中央部から南西部の地域では、甕類は配されておらず、杯類を中心にして滑石製模造品及び土錘が配されている。

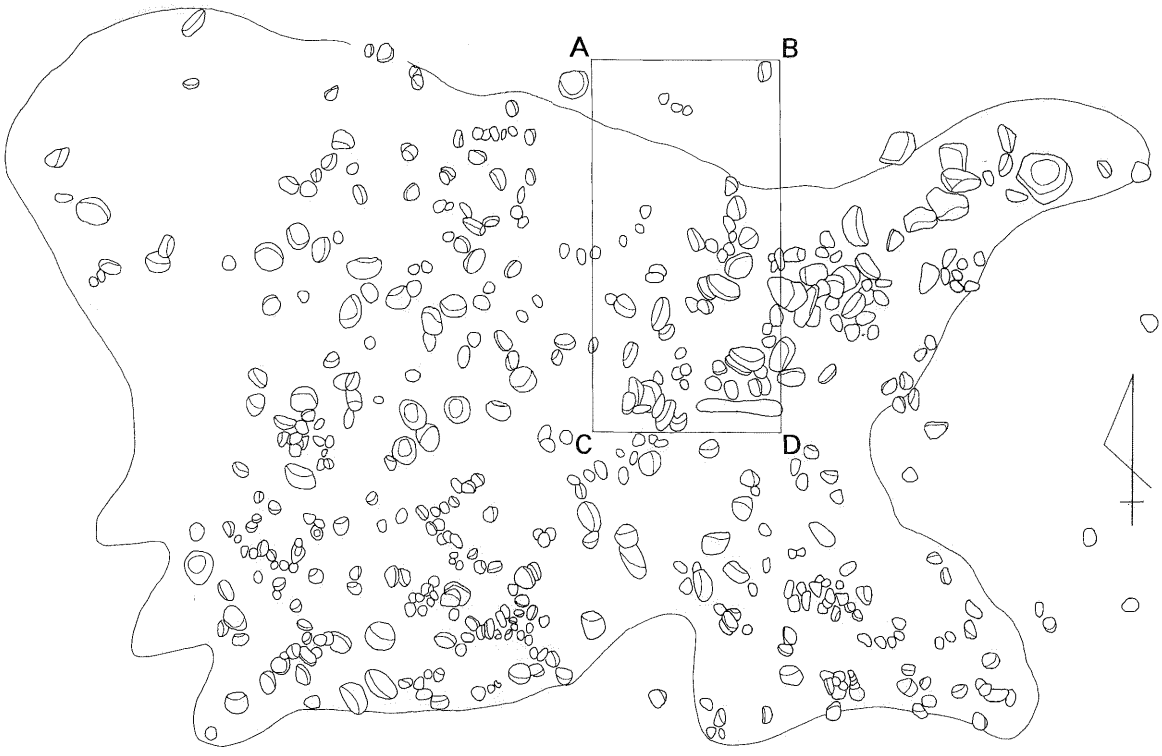
④ 同じ甕類でも、北端側には土師器甕を、東端側には須恵器甕をという区別も明確に成されている。

⑤ 出土した杯類は、すべてが上向き水平でNo. ２とNo. ６、No. ４とNo. 10、No. ５とNo. 25（いずれも前者が上の３組は、上下に２枚重ねられているもの）全て単独で配されているという特色をもつ。

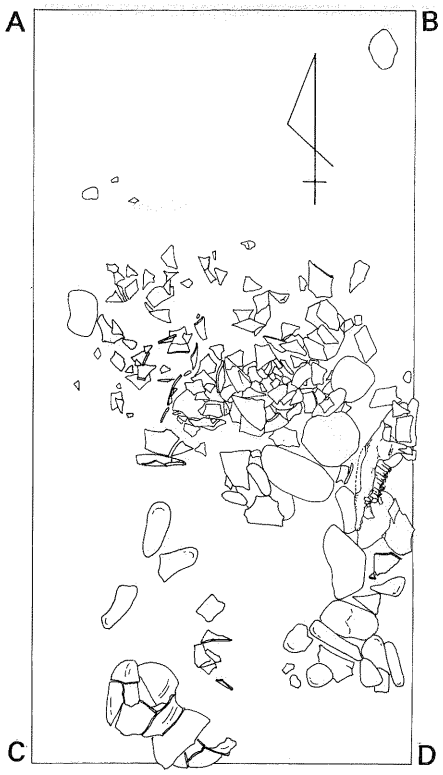
⑥ 配置にはまとまりをもち、甕とその他の器種の間には、間隔があけられている。

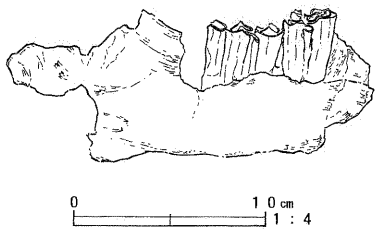
⑦ 平坦面から、入り江の南岸上に沿って滑石製模造品及び須恵器大甕が配され、平坦面よりさらに拡大した土器祭祀跡が想定される。





第107図　1号土器祭祀跡遺物（上）・礫（下）出土状況



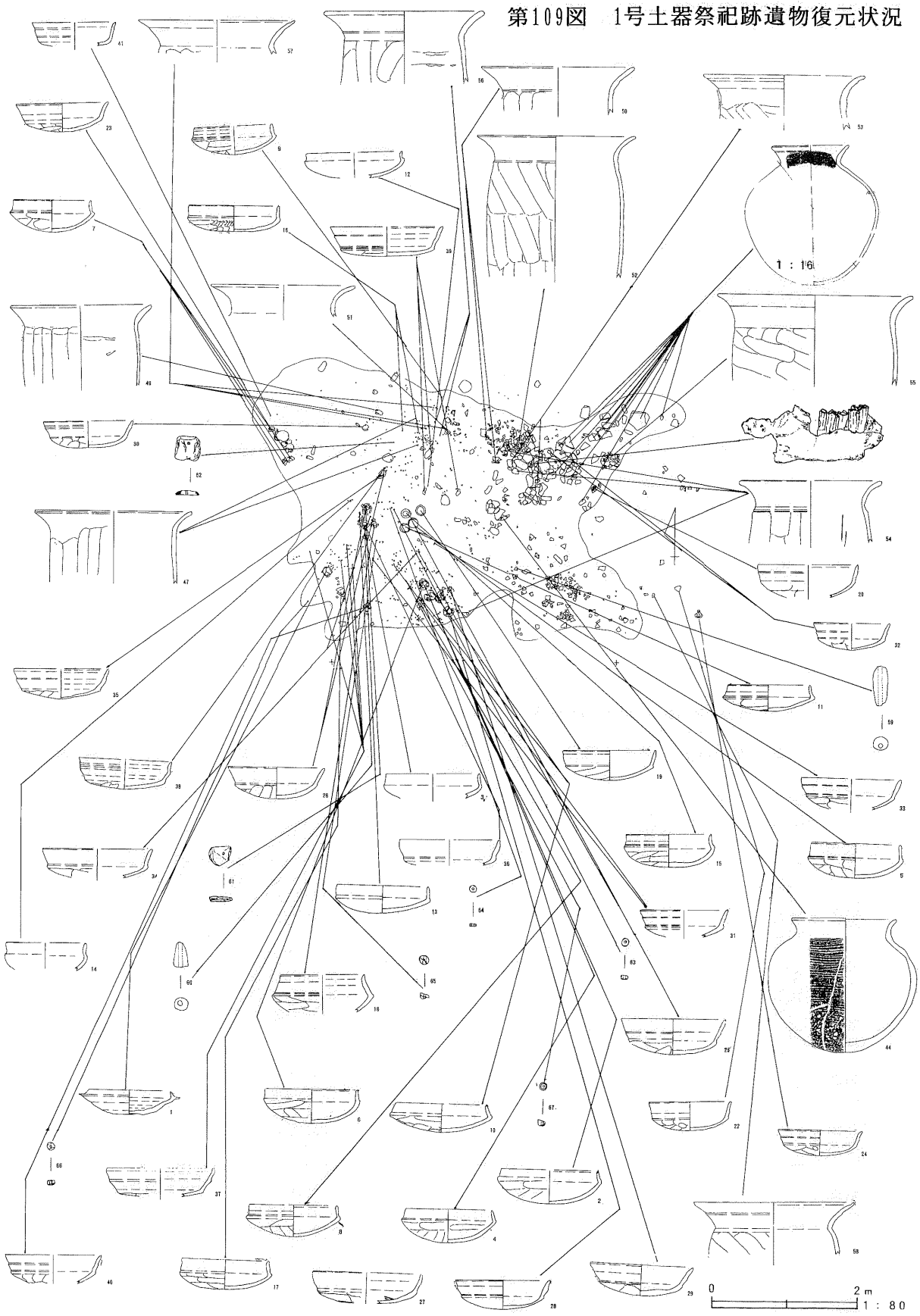


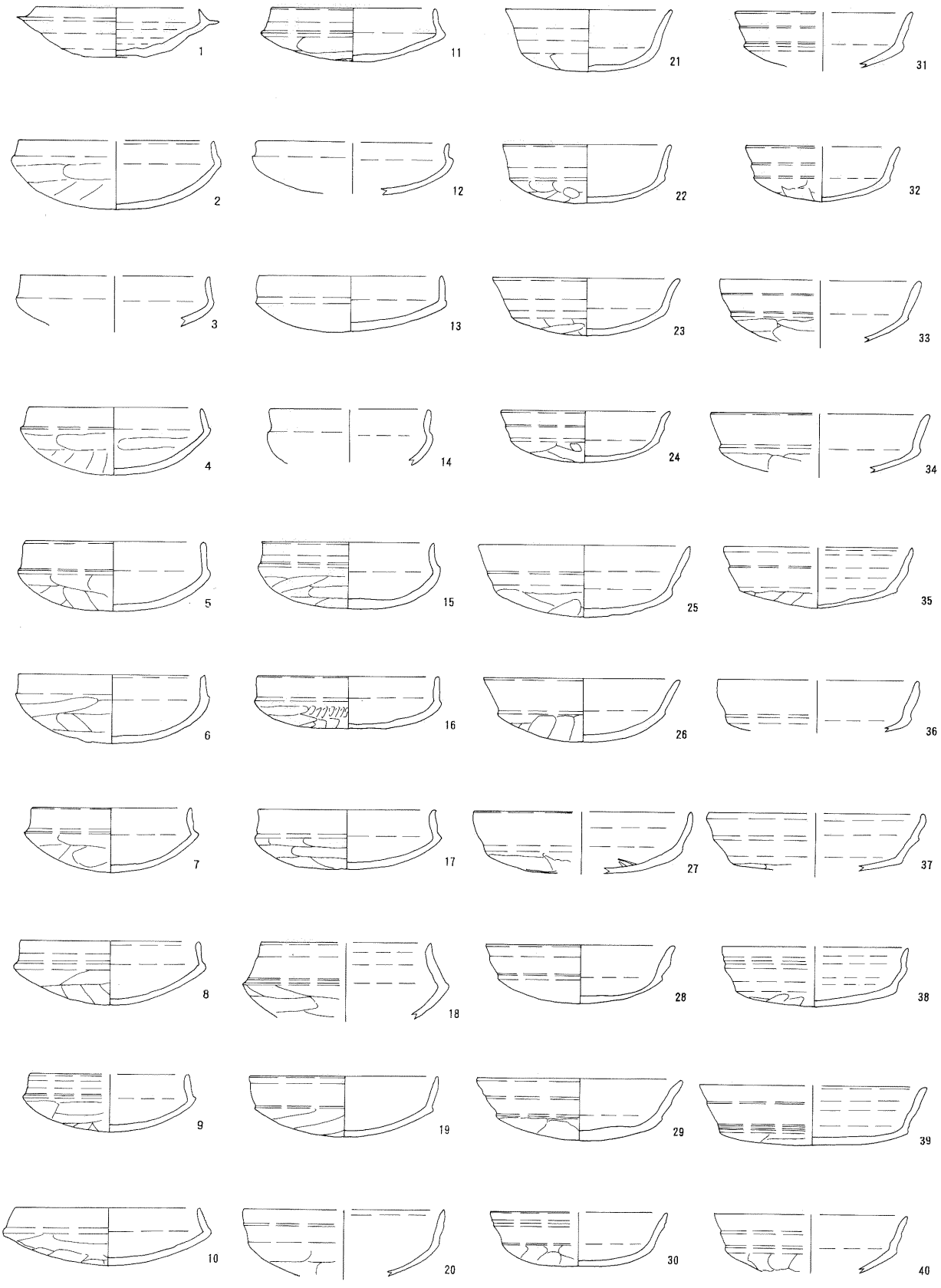
第108図　1号土器祭祀跡馬頭骨出土状況
及び馬頭骨実測図

第63表　1号土器祭祀出土遺物観察表　（第110図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器杯	口径 11.2 器高 3.4 底径	①⑥	③	灰褐 (7.5YR4/2)	一部欠	内面は明赤褐（10R2／3）。 ロクロ整形。 底面回転のケズリ。
2	土師器杯	口径 (13.8) 器高 4.7 底径	①④ ② ③	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面烈点状剥離。外面ケズリ。 表面剥離。吸炭、煤付着。
3	土師器杯	口径 (13.0) 器高 底径	③ ②	②	橙 (5YR 6/8)	上位 1／3	口縁部横ナデ。 体部内外面磨滅。
4	土師器杯	口径 11.8 器高 4.7 底径	③④ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	4／5	口縁部横ナデ。 体部内面はナデ、外面はケズリ。 炭化物付着。
5	土師器杯	口径 12.6 器高 4.8 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面一定方向のケズリ。
6	土師器杯	口径 12.8 器高 4.8 底径	① ③ ④	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面に黒斑。
7	土師器杯	口径 10.8 器高 4.5 底径	②④ ③ ①	②	橙 (2.5YR7/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、黒斑、煤付着。
8	土師器杯	口径 (11.9) 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	1／2	口縁部横ナデ。体部内面は横のナデ、外面はケズリの後ナデ。 底面炭化物付着。
9	土師器杯	口径 (11.0) 器高 4.0 底径	② ① ③	②	橙 (5YR 7/8)	1／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
10	土師器杯	口径 13.6 器高 4.0 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR7/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面一定方向のケズリ。 吸炭、黒斑、煤付着。

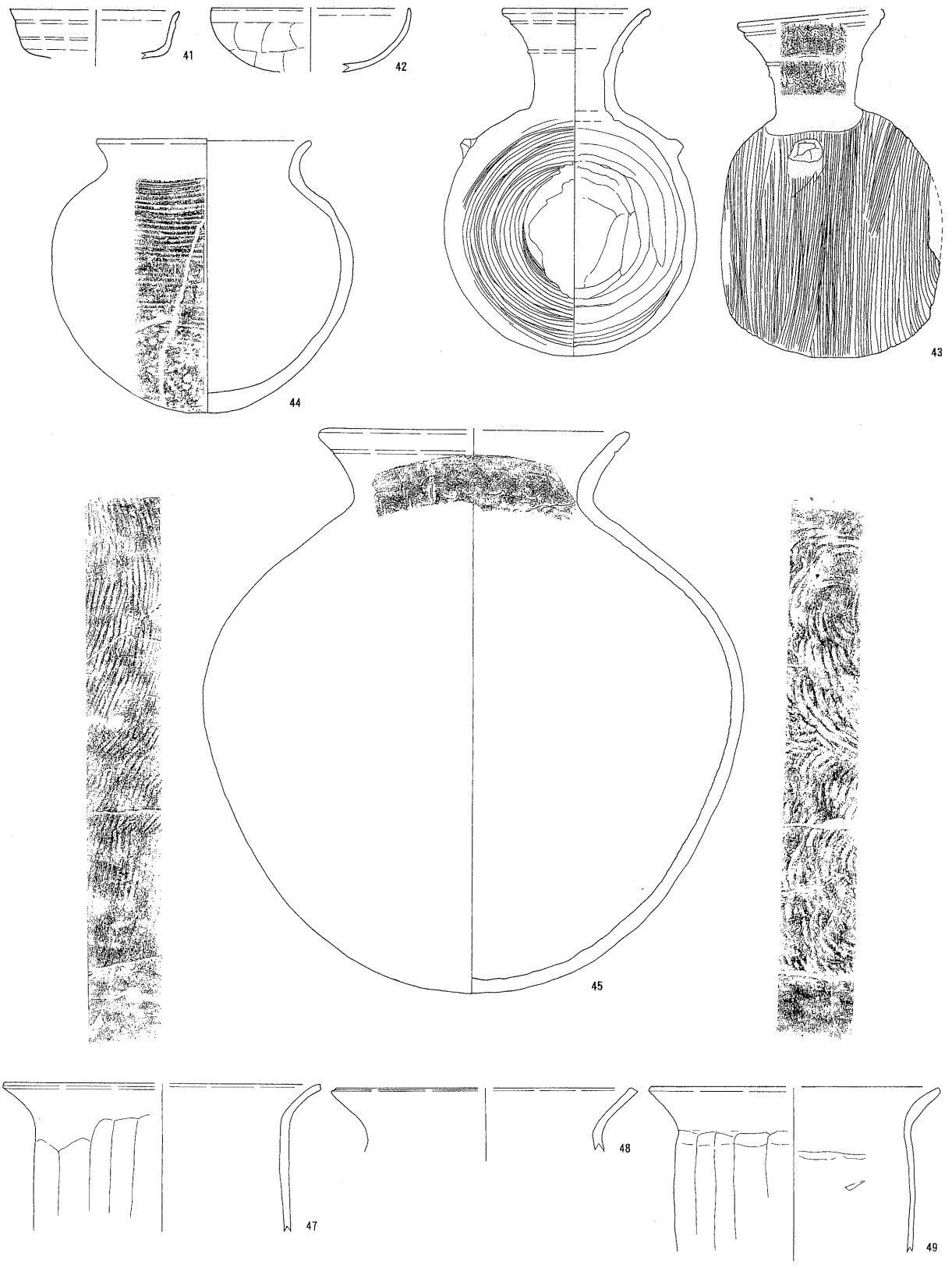
第109図　1号土器祭祀跡遺物復元状況





第110図　1号土器祭祀跡出土遺物①

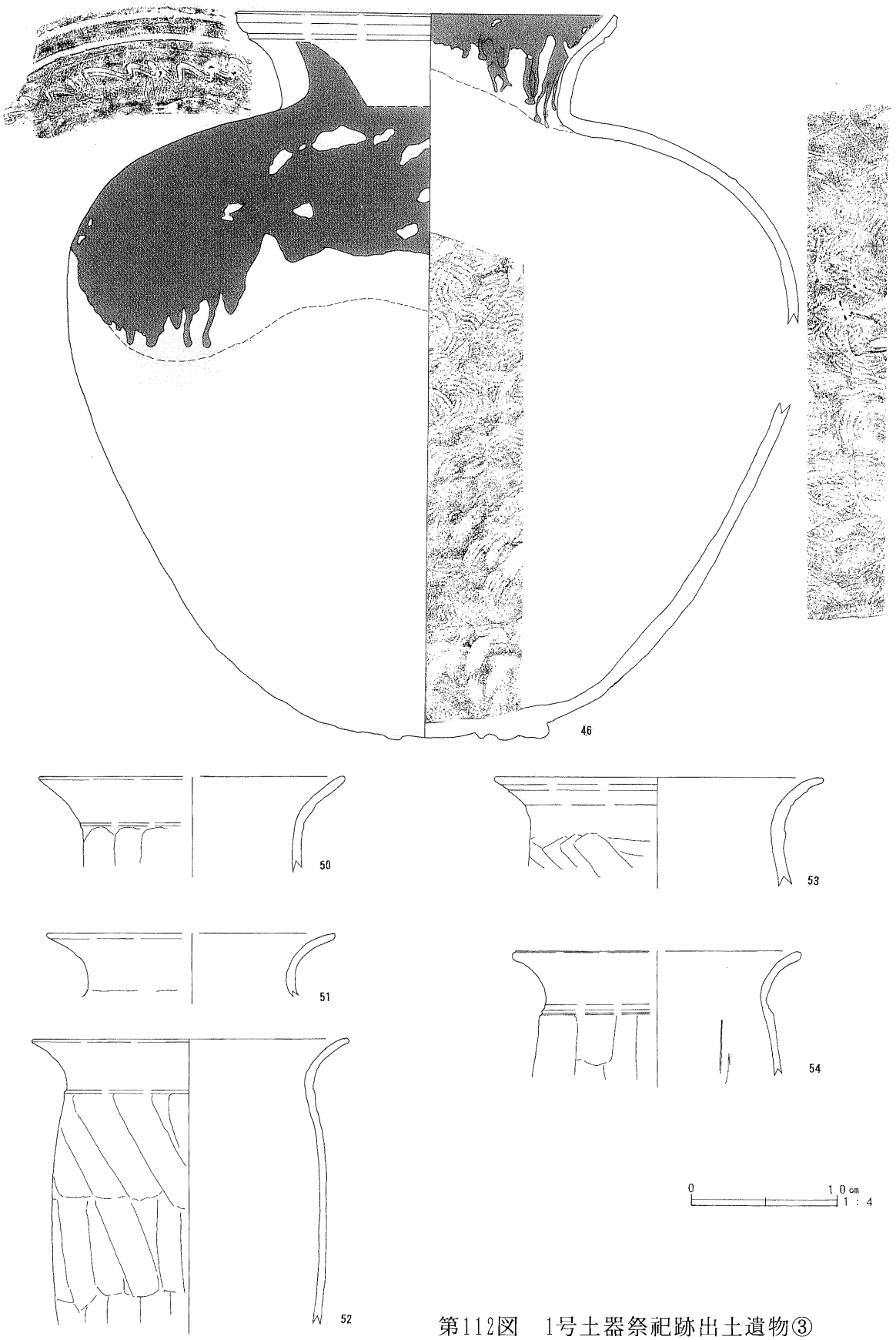
No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
11	土師器杯	口径 11.4 器高 3.6 底径	②④ ① ③	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面一定方向のケズリ。 炭化物付着。
12	土師器杯	口径（13.4） 器高 底径	① ② ④	③	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	磨滅。
13	土師器杯	口径（12.8） 器高（3.9） 底径	②① ④ ③	②	橙 (5YR 6/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
14	土師器杯	口径（11.2） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	上位 1／4	磨滅。
15	土師器杯	口径 11.9 器高 4.5 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/8)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 黒斑。
16	土師器杯	口径 12.5 器高 3.6 底径	② ① ④	②	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面一定方向のケズリ。 内面吸炭。外面吸炭、黒斑、煤付着。
17	土師器杯	口径 12.0 器高 4.1 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR 6/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。
18	土師器杯	口径 11.9 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 7/8)	上位 1／2	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
19	土師器杯	口径 13.0 器高 4.2 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	完形	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
20	土師器杯	口径（12.0） 器高 底径	② ①	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	上位 1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 全面煤付着。
21	土師器杯	口径 11.6 器高 4.3 底径	②④ ①⑥ ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。
22	土師器杯	口径 11.8 器高 4.0 底径	②④ ①⑥ ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1／2	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 煤付着。
23	土師器杯	口径 12.8 器高 4.0 底径	②④ ① ③	②	橙 (7.5YR7/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
24	土師器杯	口径 11.8 器高 3.5 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 7/6)	2／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
25	土師器杯	口径 14.6 器高 5.0 底径	①④ ② ③	②	浅黄橙 (7.5YR8/6)	一部欠	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。二次加熱。
26	土師器杯	口径 13.6 器高 4.4 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	2／3	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面一定方向のケズリ。 炭化物付着。
27	土師器杯	口径（15.2） 器高 底径	④ ① ③	①	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 全面煤付着。
28	土師器杯	口径 13.2 器高 4.0 底径	②⑥ ① ③	②	橙 (5YR 7/8)	4／5	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面はナデ、外面はケズリ。 吸炭、黒斑有り。二次加熱を受ける。
29	土師器杯	口径 14.0 器高 4.2 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR6/6)	3／4	口縁部横ナデ（2段・段部に2条の沈線）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、炭化物付着。
30	土師器杯	口径（12.2） 器高 3.7 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	1／3	口縁部横ナデ（2段・段部に1条の沈線）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、炭化物付着。
31	土師器杯	口径（12.4） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/8)	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。
32	土師器杯	口径（10.6） 器高 3.8 底径	① ② ④	②	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1／4	口縁部横のナデ（2段）。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 全面煤付着。



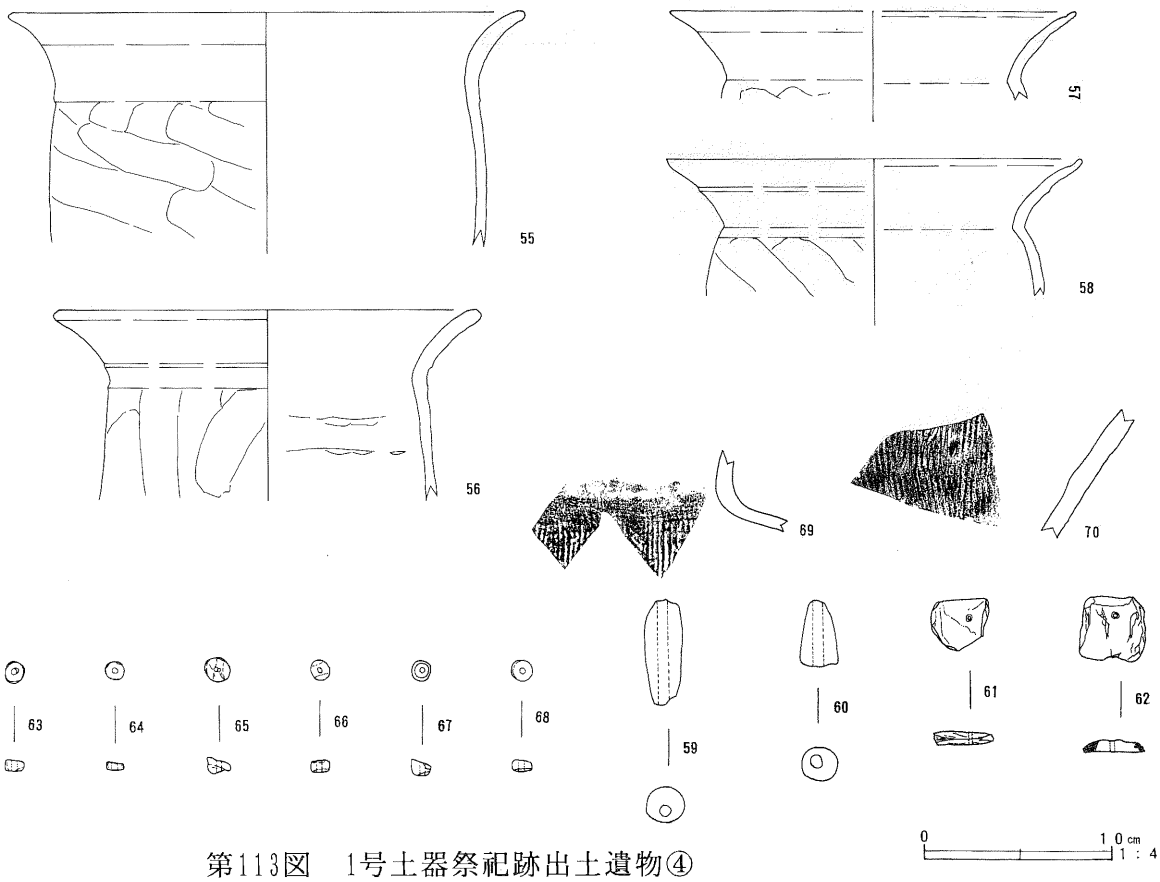
第111図　1号土器祭祀跡出土遺物②

0　10cm
1：4

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
33	土師器 杯	口径（14.0） 器高 底径	③② ④ ①	②	橙 （5YR 6/6）	上位 1／4	口縁部横ナデ（2条の沈線）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
34	土師器 杯	口径（15.2） 器高 底径	③ ② ①	②	橙 （5YR 7/6）	上位 1／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。炭化物付着。
35	土師器 杯	口径 13.0 器高 4.2 底径	④ ③ ①	②	橙 （5YR 7/6）	1／2	口縁部横のナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
36	土師器 杯	口径（13.6） 器高 底径	①④ ②⑥ ③	②	橙 （5YR 7/8）	口縁部のみ	口縁部横ナデ。
37	土師器 杯	口径（15.2） 器高 底径	② ① ③	②	橙 （5YR 7/6）	上半 1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
38	土師器 杯	口径（12.8） 器高 4.1 底径	② ③	②	にぶい橙 （7.5YR7/4）	1／3	烈点状剥離。 全面に煤付着。
39	土師器 杯	口径（15.5） 器高 4.1 底径	②④ ③ ①	②	明赤褐 （5YR 5/6）	1／2	口縁部横ナデ（2段・段部に1条の沈線）。 口唇部再調整。体部内面ナデ、外面ケズリ。 全面吸炭、煤付着。
40	土師器 杯	口径（13.4） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 （5YR 7/8）	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
41	土師器 杯	口径（11.6） 器高 底径	② ① ④	③	にぶい橙 （7.5YR7/4）	上半 1／4	口縁部横ナデ（2段）。 全面表面剥離。
42	土師器 杯	口径（13.4） 器高 底径	③ ②	②	黒 （5Y 1/2）	2／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 全面煤付着。
43	須恵器 提瓶	口径 9.8 器高 23.7 底径	① ②	①	紫灰 （5P 5/1）	一部欠	ロクロ整形。頸部に2段の櫛描波状文。波状文の上端に1条づつの沈線。 胴部カキ目、釦状の把手。
44	須恵器 壷	口径 15.3 器高 18.6 底径	① ② ③	③	灰白 （N 7/ ）	一部欠	ロクロ整形。 胴部カキ目。 胴部下半叩き。
45	須恵器 甕	口径（21.1） 器高 38.7 底径	② ①	②	灰 （N 6/ ）	1／3	頸部に櫛描波状文、波状文の上端に1条の沈線。胴部内面青海波文、外面叩き。
46	須恵器 甕	口径 26.5 器高 49.5 底径	② ①	①	青灰 （5PB 5/1）	一部欠	自然釉、落下壁付着。頸部に櫛描波状文、 波状文上端に1条の沈線。胴部内面叩き、 外面青海波文。土圧による歪み。
47	土師器 甕	口径（21.6） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 （5YR 6/6）	上位 1／3	口縁部横ナデ、口唇部再調整。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 吸炭、煤付着。
48	土師器 甕	口径（20.8） 器高 底径	①⑥ ② ③	②	にぶい黄橙 （10YR 7/3）	口縁部 3／8	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 吸炭。
49	土師器 甕	口径（20.0） 器高 底径	③ ① ⑥	②	にぶい橙 （7.5YR7/4）	上位 1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。
50	土師器 甕	口径（21.0） 器高 底径	②④ ① ③	②	にぶい黄橙 （10YR 6/3）	上位 1／4	口縁部横ナデ。 胴部内面はナデ、外面は縦のケズリ 吸炭（一部還元）。
51	土師器 甕	口径（20.0） 器高 底径	④ ① ②	③	にぶい橙 （7.5YR6/4）	上位 1／3	口縁部横ナデ。 胴部内面はナデ、外面は横のケズリ
52	土師器 甕	口径 21.7 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR 7/6）	1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 吸炭。二次加熱。
53	土師器 甕	口径 22.6 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 （5YR 7/8）	上位 6／7	口縁部横ナデ（3段）。 胴部内面はナデ、外面は斜めのケズリ。 一部吸炭、炭化物付着。二次加熱。
54	土師器 甕	口径（20.0） 器高 底径	③ ②	②	にぶい橙 （7.5YR6/4）	上位 1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、外面縦のケズリ。 吸炭。



第112図　1号土器祭祀跡出土遺物③



第113図　1号土器祭祀跡出土遺物④

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
55	土師器甕	口径　27.2 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR　6/8)	上位 のみ	口縁部横ナデ（2段）。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 吸炭。二次加熱。
56	土師器甕	口径　32.6 器高 底径	②⑥ ③ ④	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上位 のみ	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部内面ナデ、一部剥離。外面ケズリ。 吸炭。二次加熱。
57	土師器甕	口径（21.4） 器高 底径	①④ ② ③	②	淡橙 (5YR　8/4)	上位 1／5	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面斜のケズリ。 吸炭。二次加熱。
58	土師器甕	口径（21.8） 器高 底径	①④ ② ③	②	淡橙 (5YR　8/4)	上位 3／5	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。 吸炭。二次加熱。
59	土錘	最大径　2.0 残存長　5.6 孔径　0.6					
60	土錘	最大径　1.9 残存長　3.6 孔径　0.6					
61	石製模造品	残存長　2.8 残存幅　3.1 孔径　0.2					未製品。
62	石製模造品	残存長　3.5 残存幅　3.3 孔径　0.2					未製品。
63	臼玉	最大径　1.0 厚さ　0.6 孔径　0.3					未製品。
64	臼玉	最大径　1.0 厚さ　0.4 孔径　0.3				完形	

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
65	臼　玉	最大径　1．3 厚さ　0．8 孔径　0．3					未製品。
66	臼　玉	最大径　1．0 厚さ　0．6 孔径　0．3				完　形	
67	臼　玉	最大径　1．0 厚さ　0．8 孔径　0．3					未製品。
68	臼　玉	最大径　1．1 厚さ　0．5 孔径　0．3				完　形	

2号土器祭祀跡（第115図）

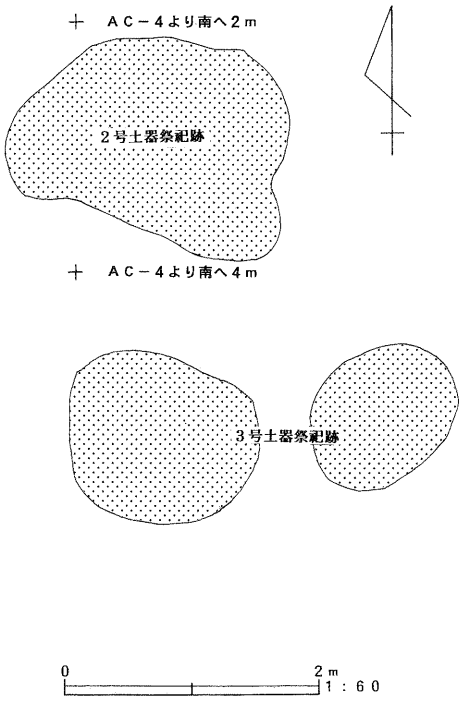
大部分がＡＣ－３グリッドに位置するが、西端の一部がＡＣ－４グリッドに及ぶ。

南北1.65m、東西2.30mの範囲に、土器が潰れた状態で、一面に集中出土している。

土器の包含層は、３号土器祭祀跡包含層第１層と同一の、白色軽石粒子及び火山ガラス粒子を含む黒褐色シルト層である。

遺物は、土師器甕（No.４・９）を中心として土師器杯（No. １～７）がまとまり、これより南東方向に30cm離れた位置に、土師器甕（No. 10・11）及び片刃式鉄鏃（No. 12）がまとまって出土している。

本跡は、３号土器祭祀跡と同一の包含層をもち、近接しているところから、単一の遺構である可能性が高いが、３号土器祭祀跡の項でみるような下面の構造が認められず、別遺構としたものである。



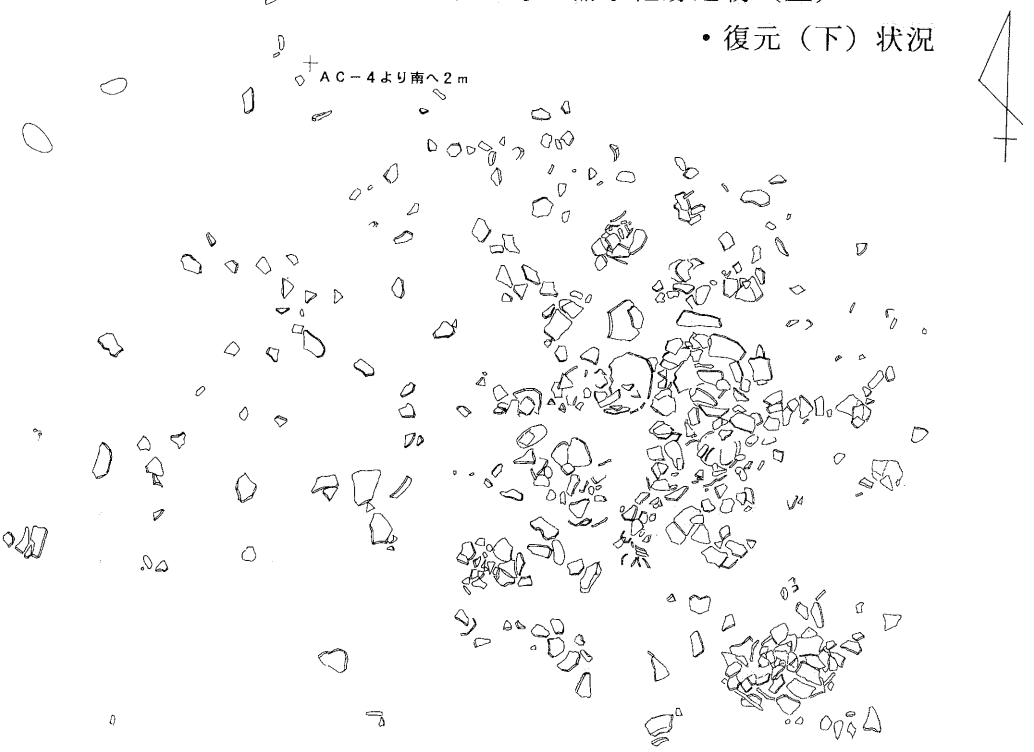
第114図　2号・3号土器祭祀跡関連図

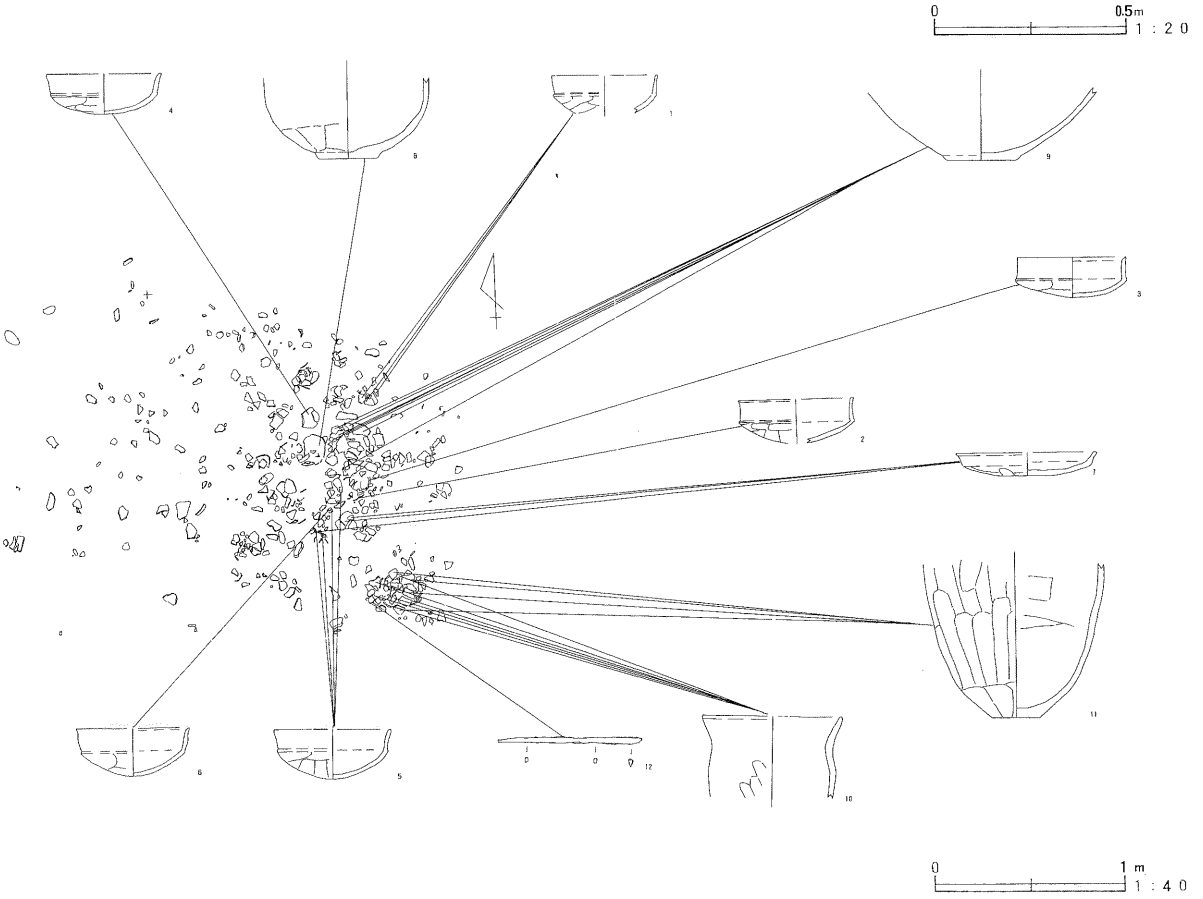
第６４表　２号土器祭祀跡出土遺物観察表　（第１１６図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径（１１．２） 器高 底径	① ② ④	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	１／４	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
2	土師器杯	口径　１２．２ 器高 底径	①④ ② ③	②	赤褐 (2.5YR4/8)	１／２	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。
3	土師器杯	口径　１１．５ 器高　４．２ 底径	③④ ① ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 外面全体に炭化物付着。

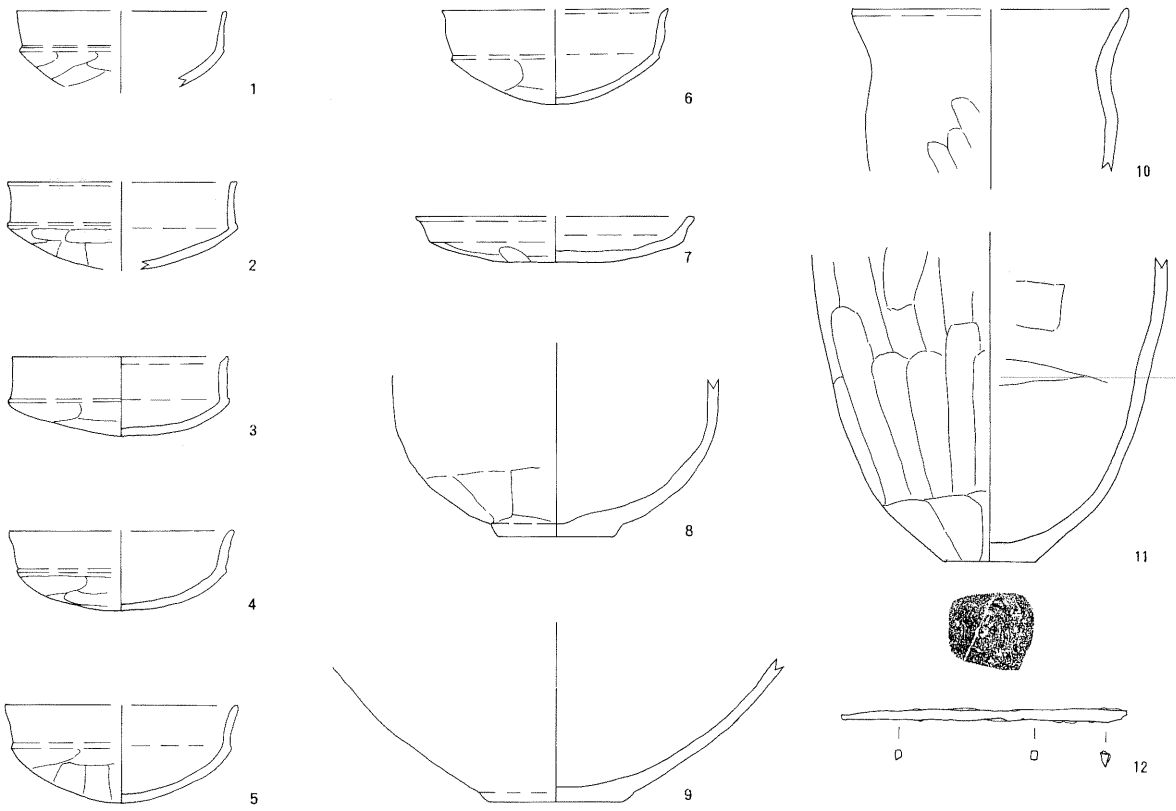
第115図　2号土器祭祀跡遺物（上）

・復元（下）状況





No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
4	土師器 杯	口径（１２．０） 器高　４．２ 底径	②④ ① ③	②	黒褐 (7.5YR1/3)	１／３	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面煤付着。
5	土師器 杯	口径（１２．２） 器高　５．２ 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (5YR　7/8)	２／３	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。
6	土師器 杯	口径（１２．２） 器高　５．０ 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (5YR　7/8)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内外面ナデ。 内面剥離。
7	土師器 皿	口径（１４．８） 器高　２．４ 底径　６．０	①④ ② ③	②	にぶい赤褐 (5YR　4/4)	２／３	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭、一部炭化物付着。
8	土師器 壷	口径 器高 底径　６．０	②④ ①⑥ ③	③	橙 (2.5YR6/6)	下位のみ	体部（下位）から底部内面ナデ、異質粘土付着。外面ナデ。底部外面ケズリの後、周辺部ナデ。黒斑、炭化物付着。
9	土師器 壷	口径 器高 底径　８．０	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR　6/6)	底部のみ	全面磨滅。 体部（下位）外面に黒斑。
10	土師器 甕	口径（１４．６） 器高 底径	①④ ② ③	②	にぶい橙 (7.5YR6/4)	上位のみ	口縁部、体部内面はナデ。 外面ナデ及びケズリ。
11	土師器 甕	口径 器高 底径　４．８	①④ ③⑥ ②	②	明赤褐 (5YR　5/6)	下半のみ	体部内面ナデ、外面縦のケズリ。底面付近に面取り様ケズリ。木の葉底。ナデ加わる。 吸炭、黒斑、炭化物付着。二次加熱。
12	長頸鏃（片刃式）	残存長１４．９ 刃部幅0.5 ～0.6 茎部幅0.4 ～0.5					



第116図　2号土器祭祀跡出土遺物

3号土器祭祀跡（第117図～119図）

2号土器祭祀跡の南側へ0.80m離れた、AC－3グリッドに位置する

土器集中地点は、東西2ケ所に分離している。

東の集中地点は、N—45°—Eの方向に長軸をもち、長軸90cm、短軸60cmの範囲に、土器が重なって潰れた状態で、一面に集中出土している。

西の集中地点は、これより75cm離れており、南北1.15m、東西1.30mの範囲に、土器が複数重なって潰れた状態で、一面に集中出土している。

破片は、この両集中地点を中心にして、南北径3mの範囲に及んでいる。

土器は、白色軽石粒子・火山ガラス粒子及び少量の炭化物を含む黒褐色シルト層（第1層）を中心にして、一部が、下層である少量の白色軽石粒子・火山ガラス粒子を含む暗褐色シルト層（第2層）に包含されている。第1層は、2号土器祭祀跡包含層と同一である。

重なった土器間の堆積土は、少量の炭化物小粒子を含む、酸化鉄と黒褐色シルトの混在層、及び褐灰色シルトであり、土器との接点では、酸化鉄が層を成している。

出土遺物のうち実測可能なものは、東の集中地点から土師器杯12点、西の集中地点から土師器杯26点（内1点は重複）、土師器甕6点、壺3点が出土している。

東の集中地点からは、土師器杯（No. 1・4・6・11・14・21・27・33・34・35・36・37）が出土している。このうち、No. 27は、西の集中地点出土の破片と接合されている。

西の集中地点では、土器の重なりが激しく、厚さ15cmの中に最高七重（第119図中、上位よりⅠ～Ⅶ面）に重なりあっていた。

最下面（第Ⅶ面）では、土師器杯（No. 2・10・15）、土師器甕（No. 44）が出土している。また最上面では、土師器杯（No. 5・12・20・22・24・25）土師器甕（No. 41）が出土しており、この間の5面に、各々が所在する。

このうち、最下面から出土したNo. 2とNo. 15は、上面である第Ⅵ面の破片と接合されている。同様に、最上面から出土したNo. 20は、下面である第Ⅱ面の破片と接合されている。

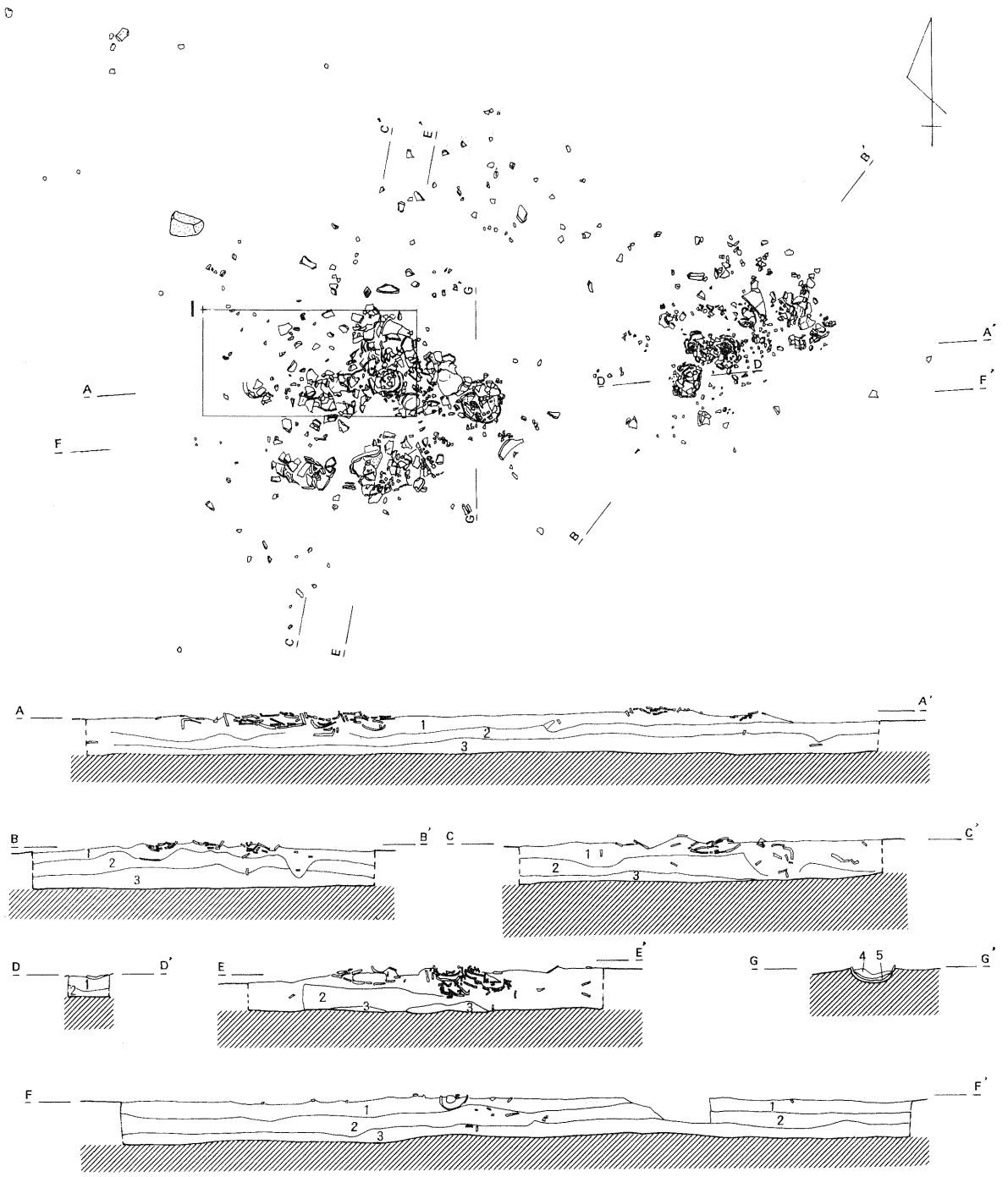
この様に、上下の面を越えて接合されるものも多く、中でもNo. 38の壺は、口縁部が第Ⅲ面から、胴部が第Ⅵ面からというように、面を飛び越えて、かけ離れた高さから出土している例もある。

2号・3号土器祭祀跡については、遺物の出土状況により、一応土器祭祀跡とはしたものの、以下の理由により、土器祭祀跡ではない可能性が高いといわざるを得ない。

① 遺物の出土レベルは高く、基盤層は発掘調査時に、平安時代の遺構確認面として認識されていた層である。

② 遺物包含層である黒褐色シルト層中に含まれる白色軽石粒子・火山ガラス粒子は、分析結果（詳細は後述）から、浅間B軽石であることが判明している。

③ 出土した土器間に、時期差が顕著である。



3号土器祭祀土層

1　黒褐色（10YR3／2）やや粘性のあるシルト質。乾くと硬質。白色軽石粒子と火山ガラス粒子（浅間系と思われる）が含まれている。炭化物も少量含む。

2　暗褐色（10YR3／4）シルト質。1層よりもしまりが悪くサラサラ。1層同様の火山灰の痕跡が見られるが、1層よりも少い。

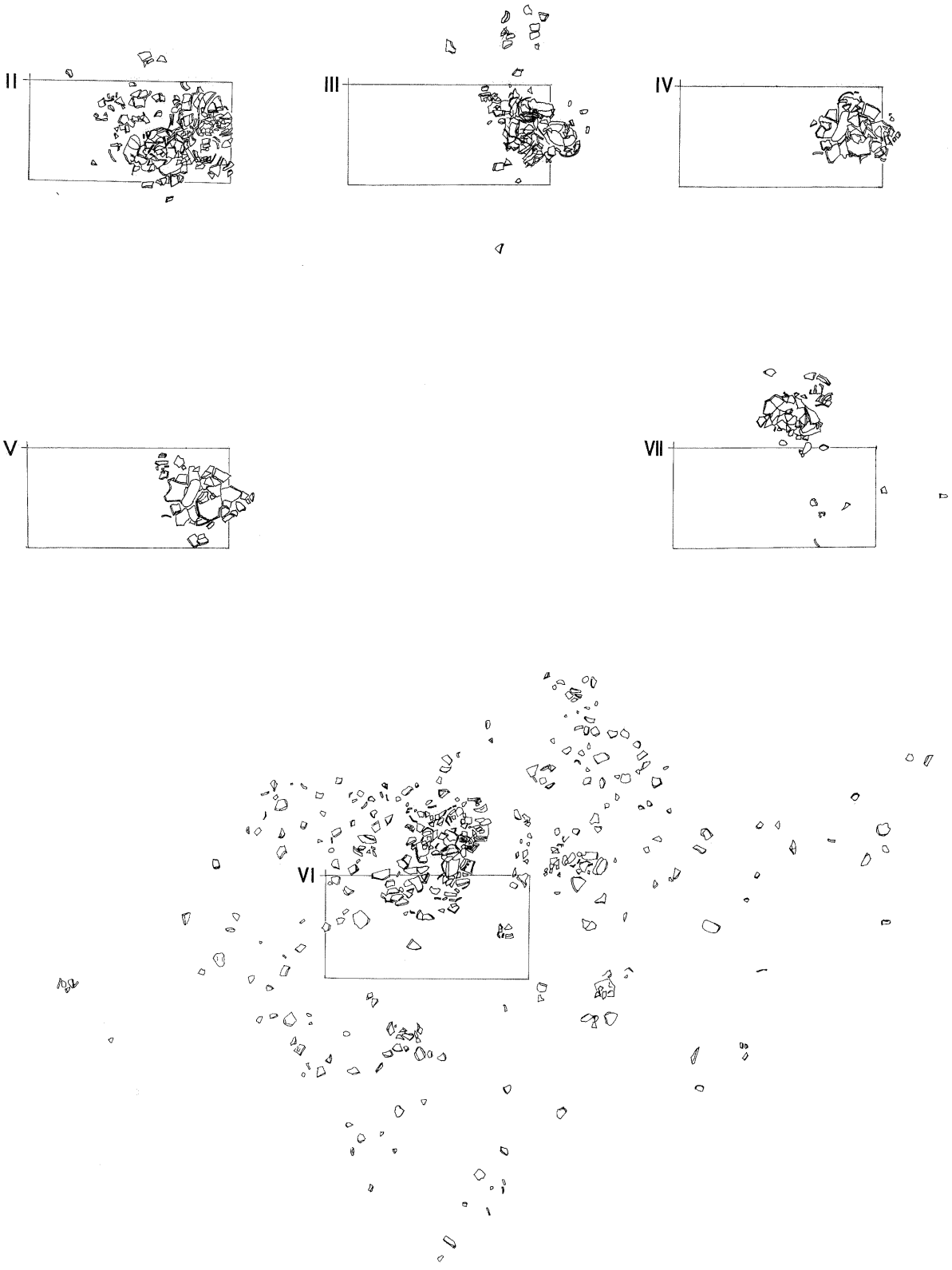
3　黄灰色（2.5Y4／1）シルト質。酸化鉄を含み、部分的にはにぶい黄褐色（10YR4／3）に見える。2層と大差ない土質とも思われるが敢えて線を入れれば、入れられるという事で分層した。

4　黒褐色（7.5YR3／2）シルト質。しまりはやや悪く、サラサラ。炭化物の小粒子を少量含む。やや黄味がかった黒褐色（7.5YR3／1）の酸化鉄の土が混ざる。

5　褐灰色（10YR4／1）シルト質。しまりはやや悪いが4層よりも硬質でしまっている。暗褐色（10YR3／3）を呈する酸化鉄の土が混ざっており、土器との接点には層状に溜まっている。

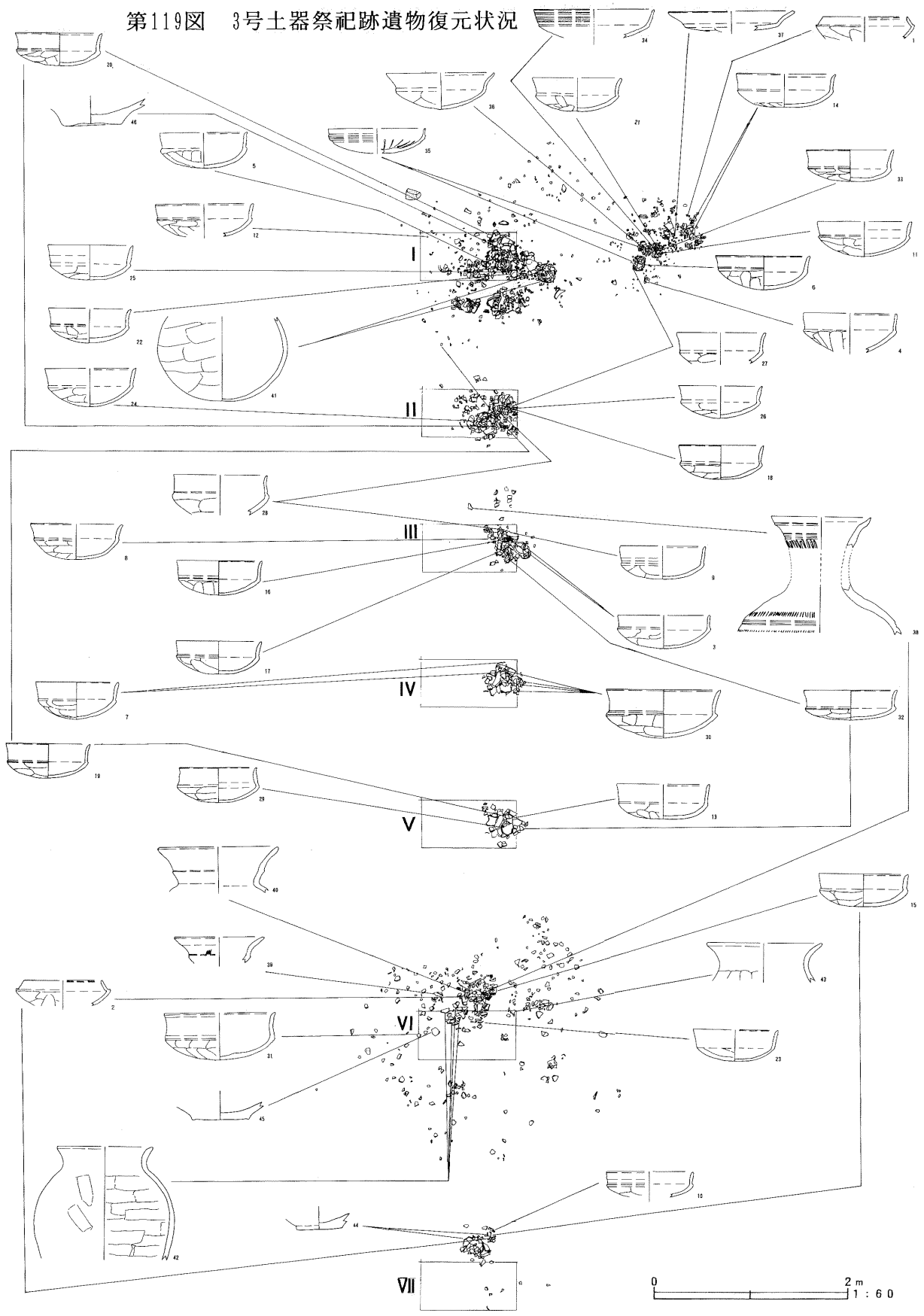
第117図　3号土器祭祀跡遺物出土状況①

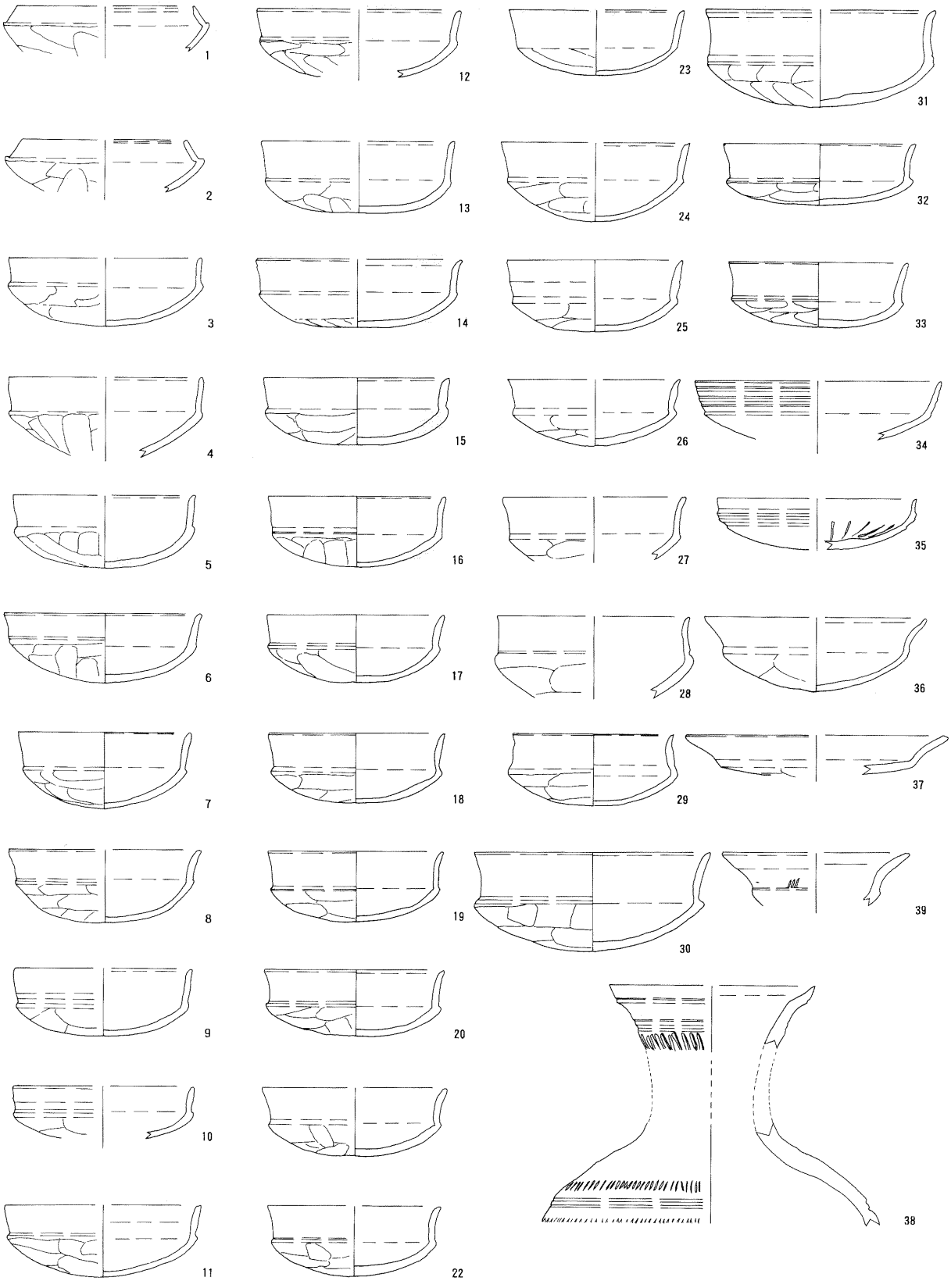
0　L＝29.000m　1m　1：30



第118図　3号土器祭祀跡遺物出土状況②

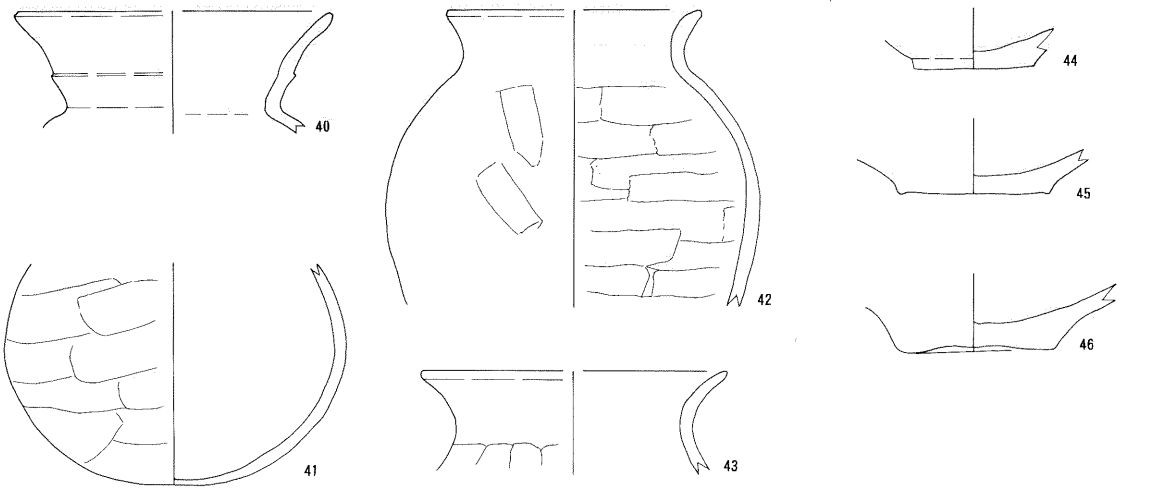
第119図　3号土器祭祀跡遺物復元状況





第120図　3号土器祭祀跡出土遺物①

0　10cm
1：4



第121図　3号土器祭祀跡出土遺物②

第65表　3号土器祭祀跡出土遺物観察表　(第120・121図)

No.	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調(土色帖)	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器杯	口径(12.0) 器高 底径	③ ② ①	②	明褐 (7.5YR5/6)	上位 1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 煤付着。
2	土師器杯	口径(11.0) 器高 底径	① ②	①	赤 (10R 4/8)	上位 1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。
3	土師器杯	口径(13.1) 器高 4.6 底径	②⑥ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	2／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
4	土師器杯	口径(13.2) 器高 底径	①④ ② ③	①	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
5	土師器杯	口径(12.4) 器高 4.9 底径	① ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面磨滅。 一部黒斑。
6	土師器杯	口径 13.3 器高 4.7 底径	③④ ②⑥ ①	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ、口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。二次加熱。
7	土師器杯	口径 11.8 器高 5.2 底径	① ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面はナデ、外面はケズリ。
8	土師器杯	口径(13.0) 器高 4.9 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 7/6)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面はナデ、外面はケズリ。 黒斑。二次加熱。
9	土師器杯	口径(12.1) 器高 4.5 底径	③④ ②⑥ ①	③	橙 (2.5YR6/8)	1／2	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。二次加熱。
10	土師器杯	口径(12.2) 器高 底径	③④ ①⑥ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／3	口縁部横ナデ。黒斑。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 表面剥離。
11	土師器杯	口径 13.4 器高 4.8 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	3／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。
12	土師器杯	口径 13.7 器高 底径	③④ ①⑥ ②	②	橙 (5YR 6/6)	1／4	口縁部横ナデ。炭化物付着。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。
13	土師器杯	口径 13.0 器高 4.8 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。吸炭。二次加熱。
14	土師器杯	口径 13.8 器高 4.6 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	1／4	口縁部横ナデ(2段)。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、黒斑。二次加熱。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
15	土師器杯	口径（12．6） 器高 4．5 底径	①④ ② ③	③	灰褐 (7.5YR4/2)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。全面吸炭、煤付着。
16	土師器杯	口径 11．8 器高 4．8 底径	②⑥ ① ③	②	橙 (5YR 7/8)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面はナデ、外面はケズリ。 吸炭、黒斑。二次加熱。
17	土師器杯	口径 11．9 器高 4．6 底径	③④ ②⑥ ①	②	橙 (5YR 7/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面剥離、外面ケズリ。
18	土師器杯	口径 12．1 器高 4．7 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 7/6)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面炭化物付着。二次加熱。
19	土師器杯	口径 11．8 器高 4．8 底径	③⑥ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
20	土師器杯	口径 12．3 器高 4．5 底径	③④ ①⑥ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ及びナデ。 炭化物付着。
21	土師器杯	口径（12．6） 器高 4．6 底径	① ② ③	①	赤 (10R 5/8)	2／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
22	土師器杯	口径（11．8） 器高 4．7 底径	③④ ① ②	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。二次加熱。
23	土師器杯	口径（11．6） 器高 4．4 底径	③ ② ①	②	橙 (5YR 7/8)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
24	土師器杯	口径（12．8） 器高 5．3 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑、炭化物付着。
25	土師器杯	口径（12．0） 器高 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	1／2	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑、炭化物付着。
26	土師器杯	口径（11．6） 器高 4．5 底径	① ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
27	土師器杯	口径 12．6 器高 底径	③ ① ②	②	橙 (2.5YR6/8)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
28	土師器杯	口径（13．0） 器高 底径	① ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	1／5	口縁部横ナデ。口唇部磨滅。 体部内面ナデ、外面はケズリ。黒斑。 内外面炭化物付着。
29	土師器杯	口径 11．1 器高 4．8 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	2／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。二次加熱。
30	土師器杯	口径 16．2 器高 6．7 底径	②④ ① ③	②	赤 (10R 5/8)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
31	土師器杯	口径（15．4） 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。
32	土師器杯	口径 13．0 器高 4．1 底径	①④ ②⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	2／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。二次加熱。
33	土師器杯	口径 12．1 器高 4．4 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/6)	一部欠	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭。二次加熱。
34	土師器杯	口径（16．7） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	上 半 1／4	口縁部横ナデ（4段）。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 炭化物付着。全面吸炭。煤付着。
35	土師器杯	口径（13．4） 器高 底径	① ② ③	①	灰褐 (7.5YR4/2)	1／2	口縁部横ナデ（3段）。体部内面はナデ、 放射状暗文。外面ケズリの後ナデ、炭化物付着。全面吸炭。煤付着。
36	土師器杯	口径 15．0 器高 5．0 底径	③ ① ②	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、炭化物付着。 外面ケズリ。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
37	土師器 皿	口径 14.6 器高 底径	① ② ④	①	明赤褐 (2.5YR5/8)	上位 1／6	口縁部横ナデ、口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
38	壷	口径 14.0 器高 底径	① ③	③	黒褐 (2.5Y 3/1)	上位	口縁部は受口状を呈し、下位に1条の沈線を配する。頸部には斜のヘラ描沈線が櫛描状に配され、2条の沈線を挟んで繰り返される。肩部もまたヘラ描沈線→2条の沈線→ヘラ描沈線と繰り返される。全体に剥離が激しく、吸炭している。
39	土師器 坩	口径（12.6） 器高 底径	③④ ① ②	②	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	口縁部 1／4	口縁部横ナデの後、斜のヘラ描沈線を配する。 内面横の磨き様ナデ。 全体に吸炭。
40	土師器 壷	口径（16.4） 器高 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	口縁部	口縁部横ナデ（2段）。 全体表面剥離。
41	土師器 丸底壷	口径 器高 底径	①⑥ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	胴部のみ	胴部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑、二次加熱。
42	土師器 甕	口径（13.4） 器高 底径	③ ① ②	①	明赤褐 (2.5YR5/8)	1／4	口縁部横ナデ。 胴部内面横のナデ、吸炭、外面ケズリ及びナデ、黒斑。二次加熱。
43	土師器 甕	口径（16.0） 器高 底径	①⑥ ② ③	②	にぶい橙 (7.5YR7/3)	上位 1／4	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。 吸炭、煤、炭化物付着。二次加熱。
44	土師器 甕	口径 器高 底径 6.4	③ ② ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	最下位のみ	胴部（最下位）～底部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、煤付着。
45	土師器 甕	口径 器高 底径 8.0	① ③ ②	②	橙 (2.5YR6/8)	最下位のみ	胴部（最下位）～底部内面ナデ、吸炭。 胴部外面ケズリ。 底部外面一定方向のケズリ。煤付着。
46	土師器 甕	口径 器高 底径 8.3	②⑥ ③ ①	②	にぶい橙 (7.5YR7/4)	下位のみ	胴部内面剥離、外面ケズリ。 底部内面ナデ、外面ヘラ先によるナデ付け。 吸炭、煤付着。

3　道路状遺構

道路状遺構（第122図・付図4）

Y－5グリッドから、Y－6、Y－7グリッドにかけて位置している。

本遺構の覆土は、粗い砂層であり、特に最下面では酸化鉄が凝固し、1cm以上の厚さになる。3号溝・4号溝・24号溝・25号溝の覆土も同一である（溝の酸化鉄面は、それぞれが薄く、最高8層まで確認されている）。

遺構は、東西に連なり、主軸の方位は、Y－5グリッドからY－6グリッドにかけてはN－75°－W、Y－7グリッド範囲では少し南に折れて、N－87°－Wを示す。

この屈曲地点から3号溝、西端地点からは、やはり4号溝が、北東方向に伸びている。また、西端の南側には25号溝、Y－5グリッドからY－6グリッドにかけての北側には24号溝が平行して所在している。

Y－5グリッドでは、東端で2.70m、西端で1.50mの幅を持つ溝の中に、溝の主軸方位と直交する土坑は1ケ所もなく、北半部の、北壁から1.20m～1.80mの範囲でさらに一段溝状に落ち込

み、凝固した酸化鉄面が所在している。

Y－6グリッドにおいては、幅1.50mの溝の中に、東部では溝の主軸方位と正確に直交しない長円形土坑（1.45×0.50m前後の規模）が1ケ所、円形土坑（径30～60cm前後の規模）が4ケ所（溝内南側）穿たれている。西に移行するに従って、長円形土坑と円形土坑が交互に配されるようになり、円形土坑が消滅した時点で、長円形土坑が溝と正確に直交するように配されてくる。

Y－7グリッドでは、全体を包括する溝は浅く、図化できるほどの深さをもっていないが、東から連続して穿たれている。溝と正確に直交する長円形土坑は、東側最後の土坑から2.60mの間隔をもって穿たれてくる。西に移行するに従って、土坑は南北に分離して配されるようになり、結果、全体幅も2.80mと広がりをもつようになる。

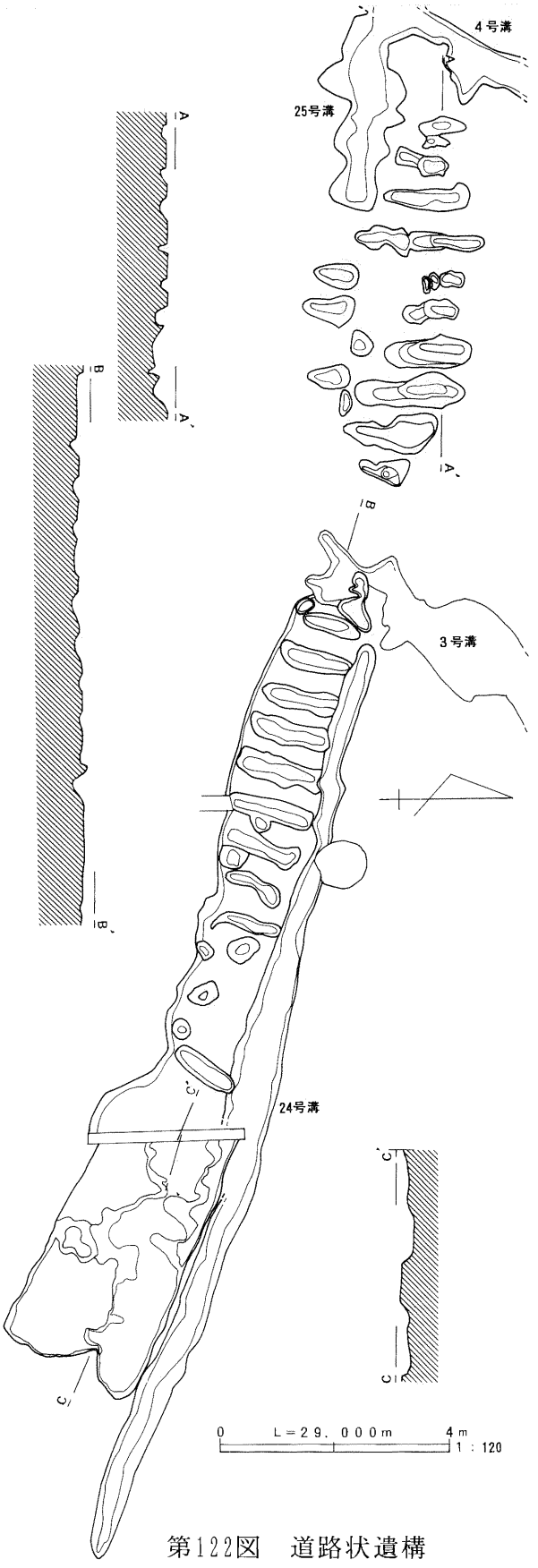
本遺構の全長は、確認された範囲で24.5mに及ぶ。

遺物は、ほとんど出土していない。

24号溝は、Y－5グリッドからY－6グリッドにかけて、本遺構の北端に平行して接しており、また、覆土も同一であるところから、本遺構に伴うものとされる。東端が、本遺構の東端よりさらに東へ2.90m伸びている。幅40～70cm、深さ20～40cmを測る.

25号溝は、Y－7グリッドにおいて、本遺構の南端に平行して接しており、幅60～80cm、深さ40～50cmを測る。また、覆土も同一であるところから、24号溝同様、本遺構に伴うものとされる。

3号溝は屈曲地点から、4号溝は西端地点から、それぞれ北東方向に伸びている。覆土が24号溝・25号溝同様本遺構と同一であり、本遺構の節目から北東方向に穿たれている　ところから、やはり、本遺構に伴うものとされる。3号溝及び4号溝は、北へ移行するほど浅くなるが、本来地形的に北が高かったものと思われ、溝底のレベルをみると、溝の深さは逆に、北が若干深かったとされる。



第122図　道路状遺構

以上の状況から、本遺構は、屈曲地点及び西端で北東方向に接続するものであり、本遺構以外の部分では、側溝のみが残存していたものとなし得る可能性が高いといえる。

こうしてみると、本遺構の時期を示す直接の資料は4号溝出土灰釉土器（No. 2）以外ほとんどない。しかし、3号溝及び4号溝が、重複する2号住居・12号住居・15号住居・17号住居・23号住居・38号土坑・47号土坑等、すべての遺構を切断もしくは削除しているところから、おおよそ、4号溝出土灰釉土器（No. 2）の年代をあてはめても良いように思われる。

4　溝跡（付図3）

溝跡は、1号溝跡～46号溝跡まで、調査区域全体に及んでいる。中には、中断しているものの覆土の同一性から一遺構としたもの（2号・3号・4号・6号・45号溝跡）、数条の溝に分離しているものの、やはり覆土の同一性から一遺構としたもの（1号・4号・5号・7号・14号・27号溝跡）がある。

1号溝跡（第123・124図・付図3）

1号溝跡は、幾筋もの溝が合流して成り立っている。その占める面積は、本年度調査区全体の約50%に及んでおり（付図4中、コンター実測部分）さらに、西・北・南方向に連続するものと思われる。

溝の東上端は、（P－1）グリッドから、Q－2、R－2・R－3、S－3、T－3、U－4、U－5、V－6、W－7、X－7、Y－8グリッドと連続し、Z－9ポイント付近で東に大きく屈曲する。東に屈曲した溝の北上端は、Z－8、Z－7、Z－6、AA－5グリッドと連続し、さらに南に大きく屈曲する。溝の東上瑞は南方向に連続し、AB－5、AC－5、AD－5グリッドまで確認されている。

一方西上端は、S－7、S－6、R－5、Q－5・Q－4、P－4グリッドと連続し、P－4グリッド内で西に大きく屈曲する。西に屈曲した溝の南上端は、さらにP－5グリッド内で南西に屈曲し、P－6グリッドへと連続する。

全体の流れを統括すると、以下の5筋となる。

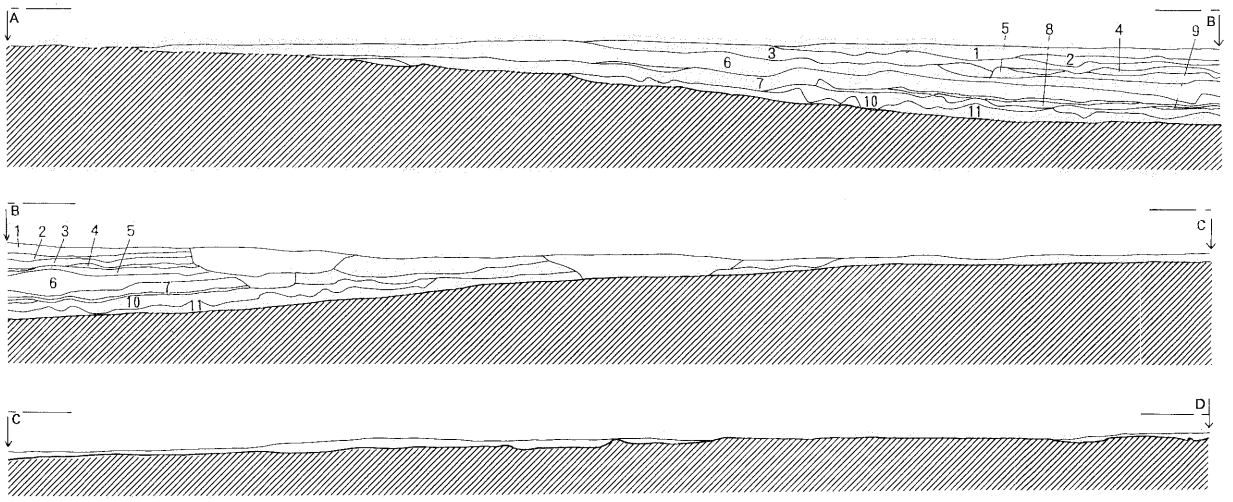
（Ⅰ溝）N－60°－Eで、P－6グリッドからO－5グリッドに至り、方向をN－10°－Eに変換して北上する流れである。深さは70cm前後を測る。

（Ⅱ溝）N－60°－Eで、P－6グリッドからO－5グリッドに至り、Ⅰ溝と分岐して方向をN－106°－Eに変換して東流し、P－3グリッドに至る流れである。深さは70～80cmを測る。

（Ⅲ溝）Z－9・Y－9グリッドから、N－23°－EでX－8、W－8、・V－8、V－7グリッドへと連続し、T－7・T－6グリッドで方向をN－54°－Eに変換して北東流し、さらにS－6・S－5グリッドで方向を再びN－25°－Eに変換してR－5・R－4グリッドへと連続する。

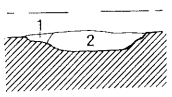
S－5グリッドでは、N－147°－E方向へ、長さ14m程、断面V字形を呈して、入り江状に張り出す。

N－25°－Eの方向でR－5・R－4グリッド



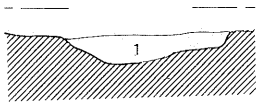
1号溝（Ⅲ溝）跡土層

1　灰白色（2.5 Y 7／1）粘土層。明黄褐色（2.5 Y.7／6）粘土ブロックを多量に、マンガン粒・軽石粒を少量含む。
2　黄灰白（2.5 Y 6／1）粘土層。上面に明黄褐色（2.5 Y 7／6）粘土をベルト状に持つ。マンガン粒・軽石粒を少量含む。
3　黄灰白（2.5 Y 5／1）粘土層。明黄褐色（2.5 Y 7／6）粘土をブロック状に含む。マンガン粒・軽石粒を少量含む。
4　黄灰白（2.5 Y 5／1）粘土層。明黄褐色（2.5 Y 7／6）粘土のブロックを多量に含む。マンガン粒・軽石粒を少量含む。
5　黄灰白（2.5 Y 4／1）粘土層。明黄褐色（2.5 Y 7／6）粘土粒・軽石粒を含む。（1～2㎜大）
6　黒褐色（2.5 Y 3／1）粘土層。軽石粒（1～3㎜大）を多量に含む。明黄褐色（2.5 Y 7／6）粘土粒（1～5㎜大）を含む。
7　黒褐色（2.5 Y 3／1）粘土層。軽石粒（1～3㎜大）を多量に含む。（6層よりも多量）
8　灰白色（2.5 Y 8／1）粘土層。
9　黒色（2.5 Y 2／1）粘土層。軽石粒（1㎜以下）・炭化物を多量に含む。
10　軽石粒純層。
11　黒褐色（10 Y 3／1）粘土・暗褐色（10 Y 2／2）粘土混在層。



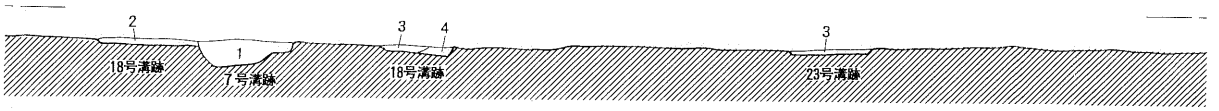
6号溝土層

1　黒褐色（10 YR 1／3）シルト質。混在物はなし。
2　黒褐色（10 YR 1／3）シルト質。黄褐色土のブロックが混ざる。白色顆粒が多い。



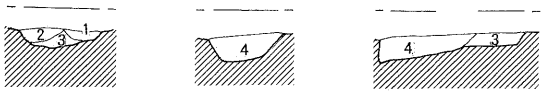
23号溝

1　砂質。砂の層、焼土・炭化物等は含まない。



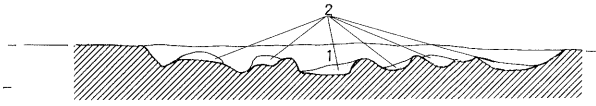
7・18・23号溝土層

1　黒褐色（10 YR 3／1）シルト質。粘性は若干あるが、しまりは良くない。浅間系の白色小粒子を含む。
2　灰黄褐色（10 YR 4／2）シルト質。粘性、しまりともに乏しい。鉄分を多く含む。
3　灰黄褐色（10 YR 4／2）シルト質。粘性、しまりともに乏しい。2層に近いが鉄分が少い。
4　灰黄褐色（10 YR 4／2）シルト質。粘性、しまりともに乏しい。鉄分を含む。



12・42号溝土層

1　褐灰色（10 YR 4／1）シルト質。粘性がありしまりも良い。酸化鉄を多く含む。
2　暗オリーブ褐色（2.5 Y 3／5）シルト質。やや粘性がありしまりもある。42号溝の覆土。
3　褐色（10 YR 4／4）シルト質。1、2層に比べて粘性が高い。粘性は強くないがしまりは良い。（42号溝の覆土）
4　暗オリーブ褐色（2.5 Y 3／3）シルト質。粘性が極めて高くしまりも良い。酸化鉄を含み遺物も含有する。（12号溝の覆土）

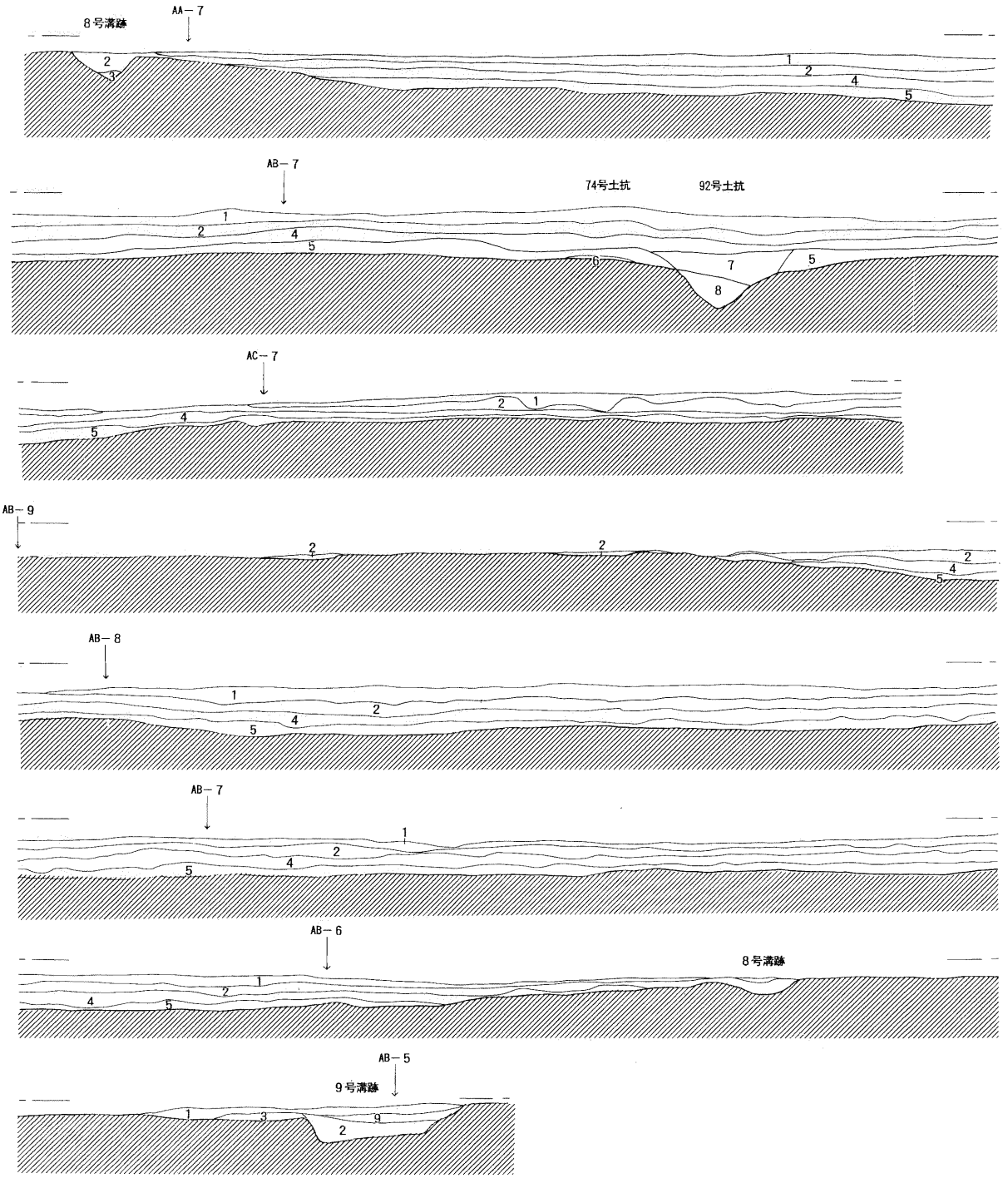


14号溝土層

1　褐灰色（10 YR 3／2）シルト質。粘性は乏しい。しまりは良く硬質。酸化鉄を含む。浅間系と思われる火山灰（白色小粒子）を含む。
2　オリーブ褐色（2.5 Y 6／4）シルト質。やや粘性があり、しまりも良い。

第123図　溝断面①

0　L＝29.000m　2m
1：60



1号溝（V溝）土層

1　黄灰褐色（2.5 Y 5／1）シルト。明黄褐色（10YR 7／6）粘土を含む。
2　褐灰色（10YR 4／1）シルト。白色軽石粒（浅間B火山灰）を含む。
3　明黄褐色（10YR 7／6）シルト。
4　褐灰色（10YR 4／1）シルト。明黄褐色（10YR 7／6）粘土、白色軽石粒（浅間B火山灰）を含む。
5　灰黄褐色（10YR 4／2）粘土。酸化鉄粒を多く含む。
6　黄灰色（2.5 Y 4／1）粘土。灰白色粘土を少量含む。（74号土坑覆土）
7　黒褐色（2.5 Y 3／1）粘土。灰白色粘土ブロックを少量含む。（92号土坑覆土）
8　灰白色（5Y 8／2）粘土。酸化鉄粒をやや多く含む。（92号土坑覆土）
9　灰黄色（2.5 Y 7／2）シルト。酸化鉄粒を少量含む。（9号溝覆土）

第124図　溝断面②

へと連続した溝は、Rライン上で方向をN－54°－Eに変換して、Q－4・Q－3グリッドに至る。その後、Qライン上で方向をN－9°－Eに変換した後、P－3グリッドでⅡ溝と合流し、さらに北（調査区外）上する流れとなる。溝幅は、上端で22m、深さは60～80cm、最深部は82cmを測る。

（Ⅳ溝）西（調査区外）からN－96°－EでAB－10グリッドに至り、AB－10グリッド内で方向をN－15°－E　に変換して、AB－9、AA－9グリッドに至る。そして、Z－9・Y－9グリッドからⅢ溝に合流する流れである。深さは20～40cmを測る。

（Ⅴ溝）南（調査区外）からN－24°－EでAC－7・AC－6グリッドに連続し、AB－6・AA－6グリッドで方向をN－68°－Wに変換して、AB－7・AA－7、AA－8グリッドに至り、AA－9・Z－9グリッドにおいてⅢ溝に合流する流れである。深さは40～50cmを測る。

溝幅は、Ⅲ溝以外計測不能であるが、コンターの在り方からすると、Ⅲ溝と同程度であったと推定される。溝底は、全体に南・西（Ⅴ溝のみは東側）が浅く、北・東（Ⅴ溝のみは西側）が深いことが分かる。断面形は、全て緩いU字形を呈する。

溝の覆土は、Ⅰ溝～Ⅳ溝全てがほとんど同一であり、最下層が黒褐色粘土と暗褐色粘土の混在層（第11層一厚さ10cm）である。この混在層の上位に、白色軽石粒の純層（第10層－厚さ3～4cm）が堆積している。純層の上位には、灰白色粘土層（第8層）を挟んで、軽石粒と炭化物粒を多量に含む黒色粘土層（第9層）が薄く堆積している。これより上層は、第9層－黒色粘土層に明黄褐色粘土が混在し、色調が褐色化してくる（上層ほど顕著）が、いずれも軽石粒を多量に含む（第7層・第6層）。さらに上位には黄灰色を主体に明黄褐色粘土を含み、より明度を増した土層が堆積している（第5層～第1層）。いずれも白色軽石粒を含み（上層ほど量は減少）、第5層～第1層にはマンガン粒も含んでいる。

こうした中にあってⅤ溝の覆土は、白色軽石粒の純層はみられず、最下層に酸化鉄粒を多量に含む灰黄褐色粘土層、中間層に白色軽石粒を多量に含む褐灰色シルト層（下部ほど明黄褐色粘土粒を多く含む）、上層には、明黄褐色粘土粒を含む黄灰色シルト層が堆積している。これらの土層は、Ⅰ溝～Ⅳ溝の第5層～第1層に見合う土層である。

遺物は、灰釉皿・高台杯・壷、須恵器壷、土師質杯・高台椀、土師器甕、羽釜、土錘（この内Ⅴ溝出土遺物は、No.3土師質杯）等が出土している。

なお、第10層以上の土層にみられる白色軽石粒は、後に詳述されるように、浅間B軽石粒であり、本遺構使用時に第10層・純層が堆積したものとし得る。

本溝跡は、V－7グリッドにおいて14号住居跡の西半を切断しており、またS－4グリッドにおいて8号住居跡の上面を削平しているところから、これら住居跡より新しく、浅間B軽石粒降下直前の時期に人為的に掘削されたものとされる。この内Ⅴ溝跡は、浅間B軽石粒降下後、付加掘削されたものとされる。

2号溝跡（第125図・付図3）

本溝跡は、1号溝を構成するⅢ溝の東上端やや内側の、Q—2グリッドからW—7グリッドにかけて、Ⅲ溝の上端に平行して断続している。

溝幅は60～80cm、深さは5～15cmを測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）を含む黒褐色粘土であり、遺物は、出土していない。

本溝跡は、１号溝の外縁内側に沿って掘削されていること、覆土が１号溝覆土の第７層に相当する土層であること等から、１号溝に付属する溝跡であるとされる。

４号溝跡（付図３）

本溝跡は、Ｖ―６グリッドからＹ―８グリッドにかけて、１号溝を構成するⅢ溝の東上端部（２号溝跡の東）に、２号溝跡とほぼ平行して断続している。この部分の溝幅は、50cm前後（一部１ｍとなる部分もある）、深さは５cm前後を測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）を含む青灰色粘土である。

しかし本溝跡は、８ライン上で一旦とぎれたものの、Ｙ―７グリッドから、方向を東南東に変換し、溝も３条に分離して現れてくる。そして、Ｚ―６グリッドで再度とぎれ、溝も２条となる。２条となった溝跡は、Ｚ―４グリッドで北に折れ、Ｗ―４グリッドまで達する。

この部分の覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）・明黄褐色粘土ブロックを含む暗灰色粘土であり、２号溝跡とほぼ平行していた部分より明度を増している。こちらも遺物は、出土していない。

本溝跡は、２号溝跡同様、１号溝の外縁に沿って掘削されていること、覆土が１号溝覆土の第７層と第６層の中間層に相当する（２号溝跡平行部分の方が第７層に近い）土層であること等から、２号溝跡以後に構築された、１号溝に付属する溝跡であるとされる。

５号溝跡（付図３）

４号溝に密着平行して、Ｗ―４グリッドからＹ―４グリッドにかけて連続している。

溝幅は1.80～2.60ｍ、深さは20cm前後を測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）・明黄褐色粘土ブロックを含む暗灰色粘土であり、平行する４号溝とほとんど同一である。

遺物は、土師質高台椀、土錘が出土している。

６号溝跡（第123図・付図３）

本溝跡は、Ｙ―８グリッドからＺ―６グリッドにかけて、１号溝を構成するＶ溝の北上端部（８号溝跡の北）に、８号溝跡とほぼ平行して断続している。

溝幅は80cm～1.20ｍ、深さは10cm前後を測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）・黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト層である。

本溝跡は、２号溝跡同様、１号溝（Ｖ溝）の外縁内側に沿って掘削されていること、覆土が１号溝覆土の第７層に相当する土層であること等から、１号溝に付属する溝跡であり、１号溝の内、Ｖ溝構築以前に構築された溝跡であるとされる。

遺物は、須恵器の脚部が出土している。

7号溝跡（第123図・付図3）

本溝跡は、調査区外からＡＡ—2・3・4・5グリッドにかけてほぼ東西に連続し、ＡＡ—5グリッドにおいて北に屈曲している。この屈曲部東3mのところまで2条に分離している。1条にまとまった溝跡は北に屈曲し、60号土坑と重複するところから、再び東に屈曲し、Ｚ—4グリッドまでほぼ東西に伸びる。

溝幅はかなり狭広が激しく、60cm～1.45mまである。深さは20cm前後を測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）を含む黒褐色シルト層である。

遺物は、ほとんど出土していない。

8号溝跡（第124図・125図・付図3）

本溝跡は、1号溝を構成するＶ溝の北及び東上端やや内側の、Ｚ—8グリッドからＡＣ—6グリッドにかけて、Ｖ溝の上端に平行して連続している。本溝跡の外側（北及び東側）に6号溝跡（北側）・9号溝（東側）跡が位置する。

溝幅は50～60cm、深さは15～25cmを測る。

覆土は、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）を含む褐灰色シルト層である。

遺物は、須恵器杯及び土錘が出土している。

本溝跡は、2号溝跡同様、1号溝（Ｖ溝）の外縁内側に沿って掘削されていること、覆土が、1号溝（Ｖ溝）覆土の中間層に相当する土層であること等から、1号溝（Ｖ溝）に付属する溝跡であるとされる。6号溝との関係では、6号溝跡覆土より明るさを増す褐灰色シルト層であることから、6号溝跡より若干新しく、Ｖ溝の構築に合わせて構築されたものとされる。

9号溝跡（第124図・付図3）

本溝跡は、1号溝（Ｖ溝）の東縁を画するような形で、ＡＡ—5グリッドからＡＤ—6ポイントにかけて連続し、さらに南調査区外まで延伸している。

溝幅は1.20～2.20m、深さは30cm前後を測る。

覆土は、8号溝跡とほとんど同一で、白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）を含む褐灰色シルト層である。

遺物は、土師器杯及び土錘が出土している。

本溝跡は、8号溝跡同様、1号溝（Ｖ溝）の外縁に沿って掘削されていること、覆土が、8号溝跡覆土とほとんど同一色であることから、6号溝跡より若干新しく、8号溝跡とほぼ同時期に構築されたものとされる。（28号溝跡は、本溝跡の一部である）

10号溝跡（第125図・付図3）

本溝跡は、9号溝跡の東側に接し、9号溝跡に平行してＡＢ—5グリッドからＡＣ—5・ＡＤ—5グリッド、さらには、南調査区外まで延伸している。

溝幅は、50～85cm、深さは7cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層であり、遺物は、出土していない。

11号溝跡（第125図・付図３）

本溝跡は、10号溝跡の東側に接し、ＡＣ―５グリッドに位置している。10号溝跡に平行しているものの、南端は、鍵形に屈曲している。西南端部を167号土坑に切断されている。

溝幅は、60cm前後、屈曲部までの長さ6.30ｍ、底面は東側に傾斜し、最深部は15cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む暗オリーブ褐色シルト層である。

遺物は、出土していない。

12号溝跡（第123図・付図３）

本溝跡は、10号・11号溝跡の東側に接し、11号溝跡の終結地点から北北東に伸び、全体がＡＣ―５グリッドに位置している。42号溝跡を切断している。

溝幅は、60cm前後、長さ6.50ｍ、深さは20cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む暗オリーブ褐色シルト層であり、11号溝跡とほとんど同一であるが、溝自体の構造が異なり、別遺構とした。

遺物は、出土していない。

13号溝跡（第125図・付図３）

本溝跡は、12号溝跡の東側に平行して接し、全体がＡＣ―５グリッドに位置している。42号溝跡を切断しているものの、30号住居跡によって切断されている。このため、長さは不明である。

溝幅は60cm前後、底面は東側に傾斜し、最深部は15cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む暗オリーブ褐色シルト層であり、遺物は、出土していない。

14号溝跡(第123図・付図3)

本溝跡は、調査区外からＡＣラインに沿って、ＡＢ―３・４グリッドからＡＣ―３・４グリッドにかけて、ほぼ東西に連続している。西端は、30号住居跡によって切断されている。

底は、凹凸が激しく、ＡＢ―３・ＡＣ―３グリッド内では３条に分離している。そして、ＡＢ―４・ＡＣ―４グリッド内に至ると２条に、30号住居跡付近では１条にまとまっている。１条の溝幅は1.20ｍ前後、深さは30～46ｃｍ前後を測る。

覆土は、上層が白色軽石粒(浅間Ｂ軽石粒)・酸化鉄粒を含む褐灰色シルト層、下層がオリーブ褐色シルト層である。

下層であるオリーブ褐色シルト層は、11号溝跡・12号溝跡・13号溝跡覆土と同一であり、これら各溝が北側で一旦とぎれた後、東に屈曲して、本溝跡を切断している30号住居跡中で連続していた可能性が強い。

遺物は、土錘が出土している。

15号溝跡(付図3)

本溝跡は、N—25°—Eの方向を示し、全体がＡＣ—４グリッドに位置している。30号住居跡・31号住居跡を削平しており、16号溝跡に削平されている。

溝幅は70～75cm、長さ6.80m、深さは15cm前後を測る。

覆土は、灰褐色シルト層である。

遺物は、土師質高台椀が出土している。

16号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、ＡＥ—５グリッドの南側調査区外から、N—20°—E方向に延伸し、Ｖ—２グリッドで直角に屈曲し、東側調査区外に及んでいる。南側調査区外から屈曲部までの長さは、98mに及ぶ。

溝幅は、上端で2.05m、深さは1.30mを測る。

覆土は、本来灰オリーブ色シルト層であるが、これがさらに掘り込まれ、白色軽石粒(浅間Ａ軽石粒)・ビニール等を多量に含む褐灰色シルト層が大部分を占める。本溝跡は、浅間A軽石粒降下より古い時代から存在し、現代に再度掘削されたことを物語っている。また、この両層の間(両壁付近)には、酸化鉄が帯状に分布し、水の流れがあったことを示している。

遺物は、木片等が出土している。

17号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、ＡＥ—４グリッドの南側調査区外から、N—20°—E方向に延伸し、Ｗ—２グリッドまで及んでいる。南側調査区外からの長さは、85mに及ぶ。

本溝跡は、最下面のみが調査され、上部の詳細は不明であるが、底面のレベルや構造からみると、16号溝跡と幅・深さ共にほぼ同一であったと思われる。

覆土は、明黄褐色粘土粒を含む褐灰色シルト層である。

遺物は、木片等と共に須恵器杯、瓦等が出土している。

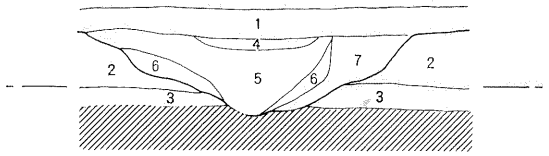
本溝跡は、16号溝跡とは覆土が異なるものの、16号溝跡と同一方向であり、さらに同溝跡との間に5.40～5.80mの間隔を保ったまま、終始平行しているところから、16号溝跡・17号溝跡は、この間に存在した道の両側溝であった可能性が高いといえる。また17号溝跡の北端は、東へ直角に屈曲した16号溝跡から、南へ5.40mの地点にあり、ここからさらに、東へ連続する様相を伺わせている。

両溝に挟まれ、この地点で東に屈曲する道跡は、旧地籍に記載されている、旧奈良村と旧別府村の境を成していた道路と一致するものである。

なお、この両溝の開始時期は、16号溝跡でみたように、浅間A軽石粒降下より古い時代であったとされる。それを、現代に至るまで改修しながら、継続使用してきたものであろう。

18号溝跡(第123図・付図3)

本溝跡は、東調査区外からＡＡ—２・３・４・５グリッドにかけて、７号溝跡と重複しあいながら、ほぼ東西に連続している。２条に分離しているが、７号溝跡による削平のため、１条に合流す



16号溝土層

1　基本土層　Ⅳ層。
2　基本土層　Ⅵ層。
3　基本土層　Ⅶ層。
4　褐灰色（１０ＹＲ５／１）シルト質。ややしまりが悪い。浅間のものと思われる火山灰白色粒子を、まんべんなく含んでいる。プラスチックやビニールが含まれている。
5　暗灰黄色（2.5 Ｙ４／２）粘性があるシルト質。この層にもビニールが入っている。
6　褐灰色（7.5 ＹＲ４／１）砂質。鉄分を帯びているため、やや赤味がかっている。
7　灰オリーブ色土（５Ｙ４／２）砂っぽさの強いシルト質。粘性もややある。本来の１６号の覆土と思われ、７層で埋没後再び掘られ、４～６層で埋まったものと思われる。

17号溝土層

1　褐灰色（１０ＹＲ１／４）粘性が強く、しまりがある。
明黄褐色土が少量混ざる。

19号溝土層

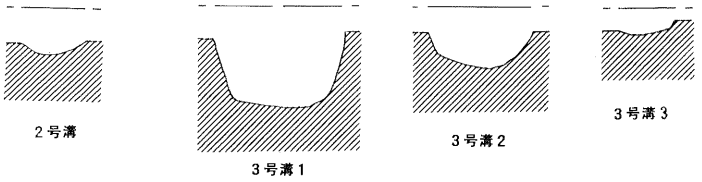
1　黒褐色（１０ＹＲ３／１）シルト質。ややしまりに欠ける。
2　黄灰色（2.5 Ｙ４／１）粘土に近いシルト質。黄褐色土粒が多く入る。

20号溝

44号溝

20・44 号溝土層

1　黒褐色（１０ＹＲ３／１）粘土に近いシルト質。
黄褐色土粒が多く入る。

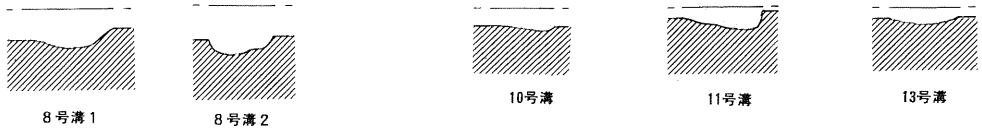


2号溝

3号溝1

3号溝2

3号溝3



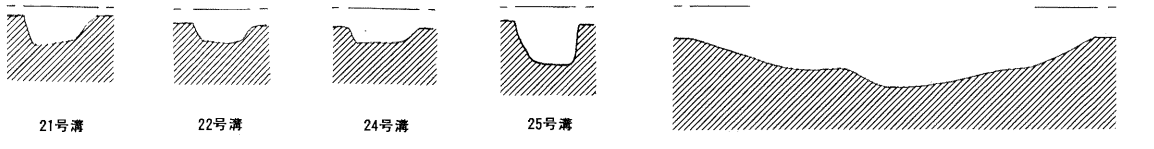
8号溝1

8号溝2

10号溝

11号溝

13号溝



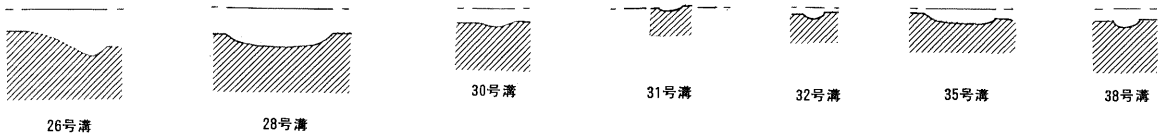
21号溝

22号溝

24号溝

25号溝

27号溝



26号溝

28号溝

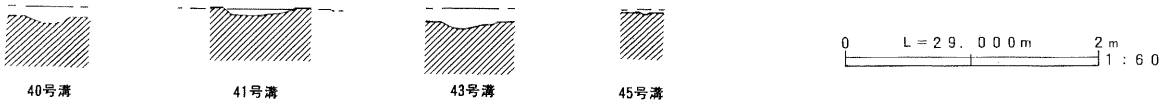
30号溝

31号溝

32号溝

35号溝

38号溝



40号溝

41号溝

43号溝

45号溝

第125図　溝断面③

るかどうかは不明である。また、16号溝跡・17号溝跡にも削平されている。

溝幅はかなり狭広が激しく、45cm～1.00ｍまである。深さは６cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層であり、酸化鉄粒の含有率によって分層される。

覆土が同一であるところから、10号溝跡・23号溝跡との関連性が伺われる。

遺物は、ほとんど出土していない。

19溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、ＡＣ―9グリッドからＡＣ―10グリッドにかけて、くの字状に連続している。

溝幅はかなり狭広が激しく、1.00～1.60ｍまである。深さは13cm前後を測る。

覆土は、上層が黒褐色シルト層、下層が黄褐色粘土粒を含む黄灰色シルト層である。

本溝跡の存在する位置は、１号溝跡を構成するⅣ溝が、西(調査区外)から北へ方向を転換する外側に当たり、方向性も一致する。

遺物は、須恵器甕、大型土錘等が出土している。

20号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、ＡＢ―９グリッドに位置している。

溝幅はかなり狭広が激しく、55cm～1.70ｍまであり、長さは8.40ｍ、深さは５cm前後を測る。

覆土は、黄褐色粘土粒を含む黒褐色シルト層である。

本溝跡の存在する位置は、１号溝跡を構成するⅣ溝が、西(調査区外)から北へ方向を転換した直後の外側に当たり、方向性も一致する。

遺物は、ほとんど出土していない。

21号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、Ｓ―２グリッドからＴ―２、Ｕ―２グリッドにかけて位置している。Ｔライン付近で一度二股に分離するが、一方はその時点で終結している。

溝幅は70cm前後、長さは21.5m、深さは17cm前後を測る。

覆土は、黄褐色シルト層であり、２号住居跡を切断している。

遺物は、土錘が出土している。

22号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、Ｓ―２グリッドに位置しており、２号住居跡を切断しているものの、26号溝跡に切断されている。

溝幅は60cm前後、深さは25cm前後を測る。

覆土は、黄褐色シルト層である。

遺物は、土師器杯が出土している。

23号溝跡(第123図・付図3)

本溝跡は、ＡＢ—３ポイントの北側調査区外から、ほぼ東西に延伸し、ＡＡ—３グリッドからＡＡ—４グリッドに位置している。そしてＡＢ—５ポイント付近で９号溝跡に切断され、一部９号溝跡の西側に及んで南に屈曲している様相を示すが、その南側は不明である。

溝幅は、0.80～1.20m、深さは7cm前後を測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む灰黄褐色シルト層である。この覆土は、ＡＢ—５グリッドからＡＣ—５・ＡＤ—５グリッド、さらには、南調査区外まで延伸する10号溝跡と同一であり、両溝は、本来同一溝であった可能性が高い。

また、本溝跡の北側に平行している、18号溝跡の覆土も同一であり、本溝跡及び、10号溝跡との関連性を伺わせている。

遺物は、出土していない。

44号溝跡(第125図・付図3)

本溝跡は、Ｚ—８グリッドからＺ—９グリッドにかけて位置し、１号溝跡を構成するV溝の底に掘削されている。

溝幅は0.80～1.20m、長さは11.0m、深さは10cm前後を測る。

覆土は、黄褐色粘土粒を含む黒褐色シルト層であり、20号溝跡と同一である。

本溝跡の存在する位置は、１号溝跡を構成するV溝が、同じく１号溝跡を構成するⅣ溝に合流する位置に当たり、V溝と方向性も一致する。

遺物は、ほとんど出土していない。

45号溝跡(第125図・付図3)

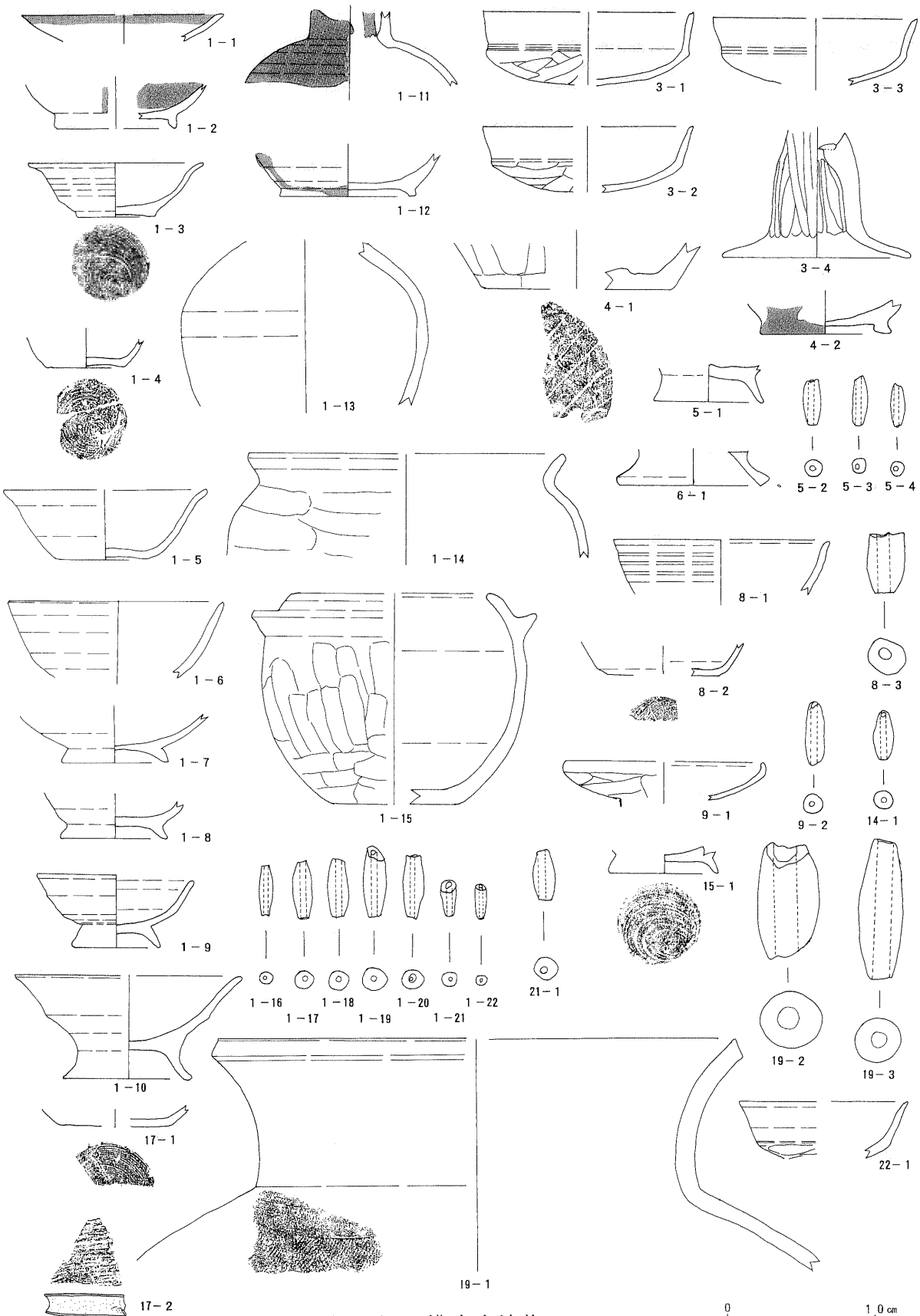
本溝跡は、１号溝跡を構成するⅢ溝の底に掘削されており、Ｙ—９グリッドの西調査区域外から東南方向に伸び、同グリッド内で直角に屈曲してＹ—８グリッドからＸ—８グリッドへ連続している。そして、Ｘ—８グリッド内で一度断絶した後、再びＷ—８グリッドまで延伸している。

溝幅は70cm前後、深さは5cm前後を測る。

覆土は、黒褐色粘土と暗褐色粘土の混在層であり、Ⅲ溝の最下層と同一である。

本溝跡の存在する位置は、１号溝跡を構成するⅢ溝が、同じく１号溝跡を構成するⅣ溝・V溝に合流する位置に当たり、ここで鍵状に西へ直角に屈曲していることからすると、あるいはⅢ溝がこの地点で終結していた可能性もある。しかし本溝跡は、西の調査区域外へ延伸していることから、あるいは、Ⅲ溝も西の調査区外へ延伸していた可能性も、また強い。いずれにしても、本溝跡・Ⅲ溝共に底面が、強く西高東低の状況を呈しているところから、遠からず、両溝共に終結するであろうとされた。

遺物は、ほとんど出土していない。


1－1
1－2
1－3
1－4
1－5
1－6
1－7
1－8
1－9
1－10
17－1
17－2
1－11
1－12
1－13
1－14
1－15
1－16
1－17
1－18
1－19
1－20
1－21
1－22
19－1
3－1
3－2
3－3
3－4
4－1
4－2
5－1
5－2
5－3
5－4
6－1
8－1
8－2
8－3
9－1
9－2
14－1
15－1
21－1
19－2
19－3
22－1
0
10cm
1：4

第126図　溝出土遺物

第６６表　溝出土遺物観察表　（第１２６図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1－1	灰釉皿	口径（１４．０） 器高 底径	② ①	①	灰白 （5Y　7/1）	口縁部 １／６	ロクロ整形。口唇部灰釉。
1－2	灰釉高台杯	口径 器高 底径（　８．４）	② ①	①	灰白 （5Y　7/1）	底部 １／４	ロクロ整形。底部ケズリの後付け高台。
1－3	土師質杯	口径　１１．７ 器高　３．７ 底径　５．６	②④ ①⑥ ③	②	橙 （5YR　6/8）	完形	ロクロ整形。 糸切り底。
1－4	土師質杯	口径 器高 底径　５．６	② ①	②	浅黄橙 （7.5YR8/4）	底部のみ	ロクロ整形。 糸切り底。 二次加熱。
1－5	土師質杯	口径　１４．０ 器高　４．７ 底径　６．４	② ③ ④	③	浅黄橙 （10YR 8/3）	４／５	ロクロ整形。 糸切り底。磨滅。
1－6	土師質高台椀	口径（１５．０） 器高 底径	② ①	③	灰白 （5Y　7/1）	上位 １／５	ロクロ整形。 全体に吸炭、口縁部煤付着。
1－7	土師質高台椀	口径 器高 底径　７．４	② ① ③	②	橙 （5YR　7/6）	底部のみ	糸切り後付け高台。 内黒処理。 二次加熱。
1－8	土師質高台椀	口径 器高 底径　７．４	②④ ① ③	②	浅黄橙 （7.5YR8/4）	底部のみ	ロクロ整形。 外面一部吸炭、磨滅。 二次加熱。
1－9	土師質高台杯	口径　１０．９ 器高　５．０ 底径　６．２	②④ ① ③	②	橙 （5YR　7/6）	２／３	ロクロ整形。 内外面一部吸炭。
1－10	土師質高台椀	口径（１０．９） 器高　５．０ 底径　６．２	②④ ① ③	②	橙 （5YR　7/6）	１／２	ロクロ整形。 糸切り後付け高台。 二次加熱。
1－11	灰釉壷	口径 器高 底径	② ①	②	灰白 （2.5Y 7/1）	胴肩部 １／２	ロクロ整形。 頸部接合痕。割れ口に灰釉。
1－12	灰釉壷	口径 器高 底径　９．５	② ① ④	②	灰白 （2.5Y 7/1）	底部 １／２	ロクロ整形。 高台部灰釉。№11と同一個体か。
1－13	須恵器壷	口径 器高 底径	②⑥ ① ④	③	灰白 （10YR 7/1）	胴部 １／３	磨滅。ロクロ整形。芯吸炭。 二次加熱。
1－14	土師器甕	口径（２２．０） 器高 底径	②④ ① ③	②	浅黄橙 （10YR 8/3）	口縁部 １／４	磨滅。炭化物付着。 二次加熱。
1－15	羽釜	口径（１３．２） 器高　１４．３ 底径　８．３	②④ ①⑥ ③	②	にぶい橙 （7.5YR7/4）	１／３	口縁部横ナデ。口唇部再調整。胴部内面横のナデ、外面上位～中位縦のケズリ。底部周辺横のケズリ。底面ナデ。全面吸炭。 内面炭化物、外面黒斑。二次加熱。
1－16	土錘	最大径　０．９ 長さ　３．５ 孔径　０．３				完形	
1－17	土錘	最大径　１．３ 長さ　３．９ 孔径　０．４				完形	
1－18	土錘	最大径　１．４ 長さ　４．０ 孔径　０．４				完形	
1－19	土錘	最大径　１．７ 残存長　４．８ 孔径　０．４					
1－20	土錘	最大径　１．５ 残存長　４．４ 孔径　０．３					
1－21	土錘	最大径　１．１ 残存長　２．５ 孔径　０．３					
1－22	土錘	最大径　０．８ 残存長　２．４ 孔径　０．２５					
3－1	土師器杯	口径（１４．４） 器高　５．０ 底径	①④ ② ③	②	橙 （5YR　6/6）	１／３	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面横のナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
3-2	土師器 杯	口径（14.6） 器高 4.5 底径	②④ ① ③	①	橙 (5YR 7/6)	1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 炭化物付着。
3-3	土師器 杯	口径（14.0） 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	1／3	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 黒斑。
3-4	土師器 高杯	口径 器高 底径 12.8	①④ ③ ②	②	浅黄橙 (10YR 8/4)	脚部 3／4	脚部内面放射状ナデ。外面縦のケズリの後裾にかけて縦の磨き。ホゾ接合。 内外面炭化物付着。
4-1	甕	口径 器高 底径（13.0）	①④ ② ③	②	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	底部 1／3	内面、灰黄（2.5Y 6/2） 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ。底部周辺横のケズリ。木の葉底。吸炭、煤付着。
4-2	灰釉 壷	口径 器高 底径（9.0）	② ①	①	灰白 (2.5Y 7/1)	底部 1／4	ロクロ整形。 底部内外面高台部に灰釉。
5-1	土師質 高台椀	口径 器高 底径（7.6）	④ ① ③	②	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	底部 1／2	ロクロ整形。糸切り後付け高台。 底部内面吸炭。 高台部内外面炭化物。
5-2	土錘	最大径 1.3 長さ 3.1 孔径 0.4				完形	
5-3	土錘	最大径 1.0 長さ 3.3 孔径 0.35				完形	
5-4	土錘	最大径0.95 長さ 3.0 孔径 0.35				完形	
6-1	須恵器 脚	口径 器高 底径（11.0）	②④ ①⑥ ③	③	灰白 (5Y 7/1)	脚部 1／4	表面剥離。
8-1	須恵器 杯	口径（15.0） 器高 底径	①⑤ ② ③	②	黄灰 (2.5Y 5/1)	口縁部 1／6	ロクロ整形。 外面一部、暗赤褐（2.5YR3/2）
8-2	須恵器 杯	口径 器高 底径（8.0）	① ⑤ ③	②	褐灰 (10YR 5/1)	底部 1／5	ロクロ整形。 糸切り底。 内面、褐灰（5YR4/1）
8-3	土錘	最大径 2.6 残存長 4.1 孔径 0.9					
9-1	土師器 杯	口径（13.6） 器高 底径	④① ② ③	②	橙 (5YR 6/6)	口縁部 1／8	口縁部横ナデ。内折り。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
9-2	土錘	最大径 1.3 残存長 4.4 孔径 0.4					
14-1	土錘	最大径 1.4 長さ 3.4 孔径 0.4				完形	
15-1	土師質 高台椀	口径 器高 底径（8.8）	③② ④ ①	③	明赤褐 (2.5YR5/8)	底部 1／2	ロクロ整形。糸切り後付け高台。 底部内面吸炭。 二次加熱。
17-1	須恵器 杯	口径 器高 底径（7.5）	① ③	②	赤灰 (2.5YR5/1)	底部 1／3	ロクロ整形。 糸切り底。
17-2	瓦	残存幅 5.5 厚さ 1.5	①③ ② ④	②	青灰 (10BG 5/1)	一部	表面条痕。 裏面ナデ。
19-1	須恵器 甕	口径（36.0） 器高 底径	② ① ⑥	③	黄灰 (2.5Y 5/1)	上位 1／4	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 頸部横のナデ。 胴部上位内面横のナデ、外面叩き。輪積痕。
19-2	土錘	最大径 4.3 残存長 7.9 孔径 1.5					
19-3	土錘	最大径 3.2 長さ 9.5 孔径 1.15				完形	
21-1	土錘	最大径 1.6 長さ 3.5 孔径 0.5				完形	
22-1	土師器 杯	口径（11.6） 器高 底径	④② ① ③	①	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	上位 1／4	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 全面吸炭。

5　土坑（付図４）

土坑は、1号土坑～229号土坑まで、調査区域全体に及んでいるが、住居跡と同様な集中傾向をみせている。この内、1号～5号・7号・8号・12号・13号・19号・20号～25号・26号～30号・31号・32号・35号・36号・57号・66号・125号・126号・134号・138号・141号・143号土坑のように、共通の特徴をもち、重複が激しいものの、ほぼ同時期に構築されたものと思われる例もある。

1号～5号・7号・8号土坑（第127図）

Q－2グリッド及びR－2グリッド(一部Q－3及びR－3グリッドに及ぶ)に位置している。

全て、各隅が強く角張る長方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平を成す特徴を有している。

覆土は、上から黄褐色粘土層・暗灰黄色粘土層・灰オリーブ色粘土層が堆積している。黄灰色粘土ブロックを多量に含み、投入土の様相を呈するという共通性も、合わせもっている。

規模は、以下のとおりである。

1号　(長辺)2.10×(短辺)1.15m、(深さ) 70cm
2号　(長辺)2.87×(短辺)2.05m、(深さ) 20cm
3号　(長辺)　　×(短辺)1.60m、(深さ)　5cm
4号　(長辺)2.84×(短辺)2.30m、(深さ) 72cm
5号　(長辺)4.30×(短辺)2.34m、(深さ) 74cm
7号　(長辺)2.58×(短辺)1.60m、(深さ) 88cm
8号　(長辺)2.40×(短辺)1.50m、(深さ) 70cm

遺物は、２号から灰釉壷、４号から甕(弥生)が出土している他は、全く出土していない。

9号土坑（第127図）

R－2グリッドに位置している。

長円形を呈し、95×66cm、深さ12cmを測る。

覆土は、灰黄褐色シルト層であり、遺物は、土師器甕が出土している。

12号・13号・19号土坑（第128図）

12号・13号土坑はR－2グリッド(一部R－3グリッドに及ぶ)、19号土坑はS－3グリッド(一部R－3グリッドに及ぶ)に位置している。

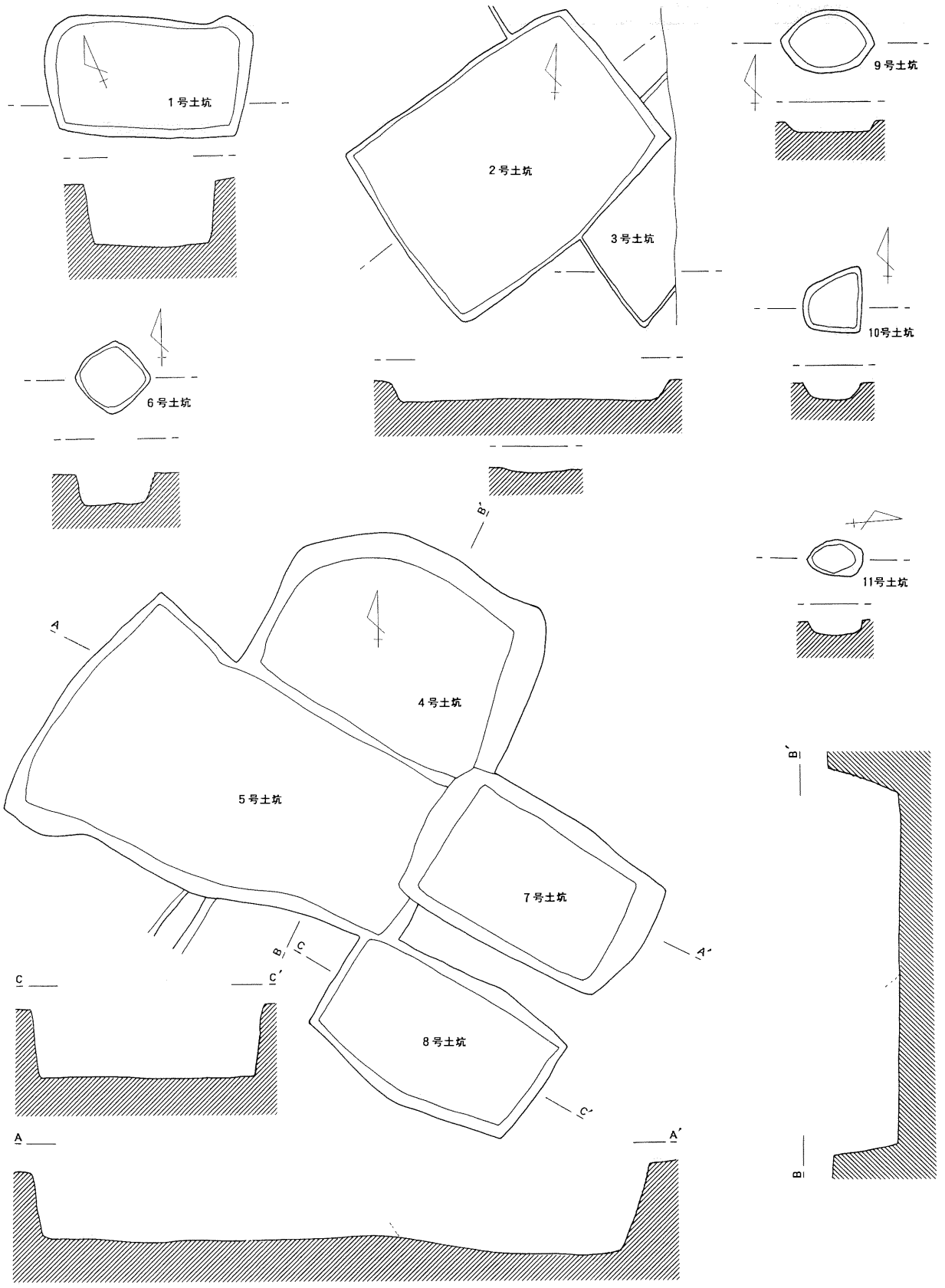
全て、各隅が強く角張る長方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平を成す特徴を有している。

また、覆土は、暗灰黄色粘土層・灰オリーブ色粘土層が堆積し、多量の黄灰色粘土ブロックを含み、投入土の様相を呈するという共通性も合わせもっている点は、１号～５号・７号・８号土坑と同一である。

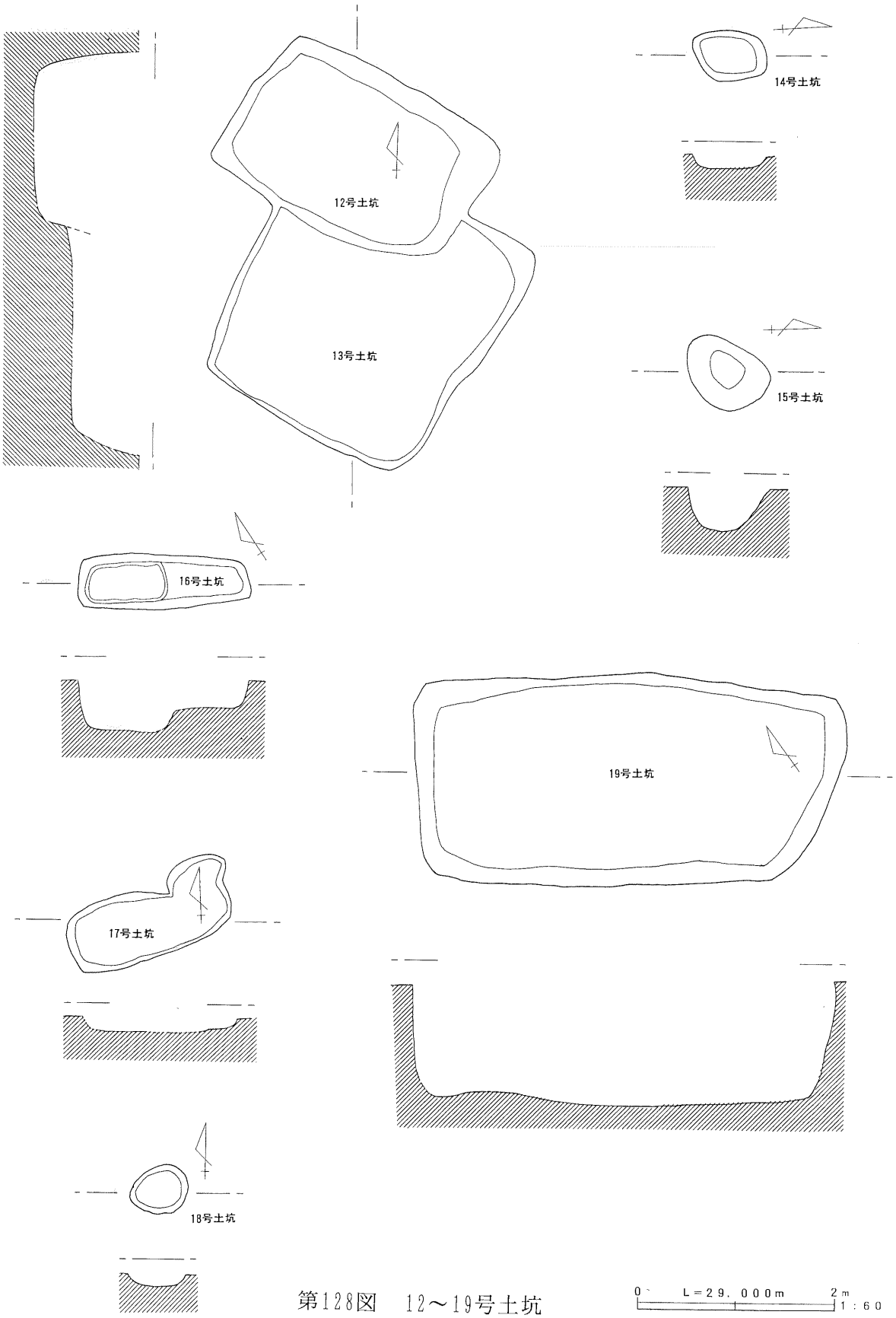
規模は、以下のとおりである。

12号　(長辺)2.60×(短辺)1.78m、(深さ) 97cm
13号　(長辺)2.82×(短辺)2.71m、(深さ) 70cm
19号　(長辺)4.45×(短辺)2.25m、(深さ)130cm

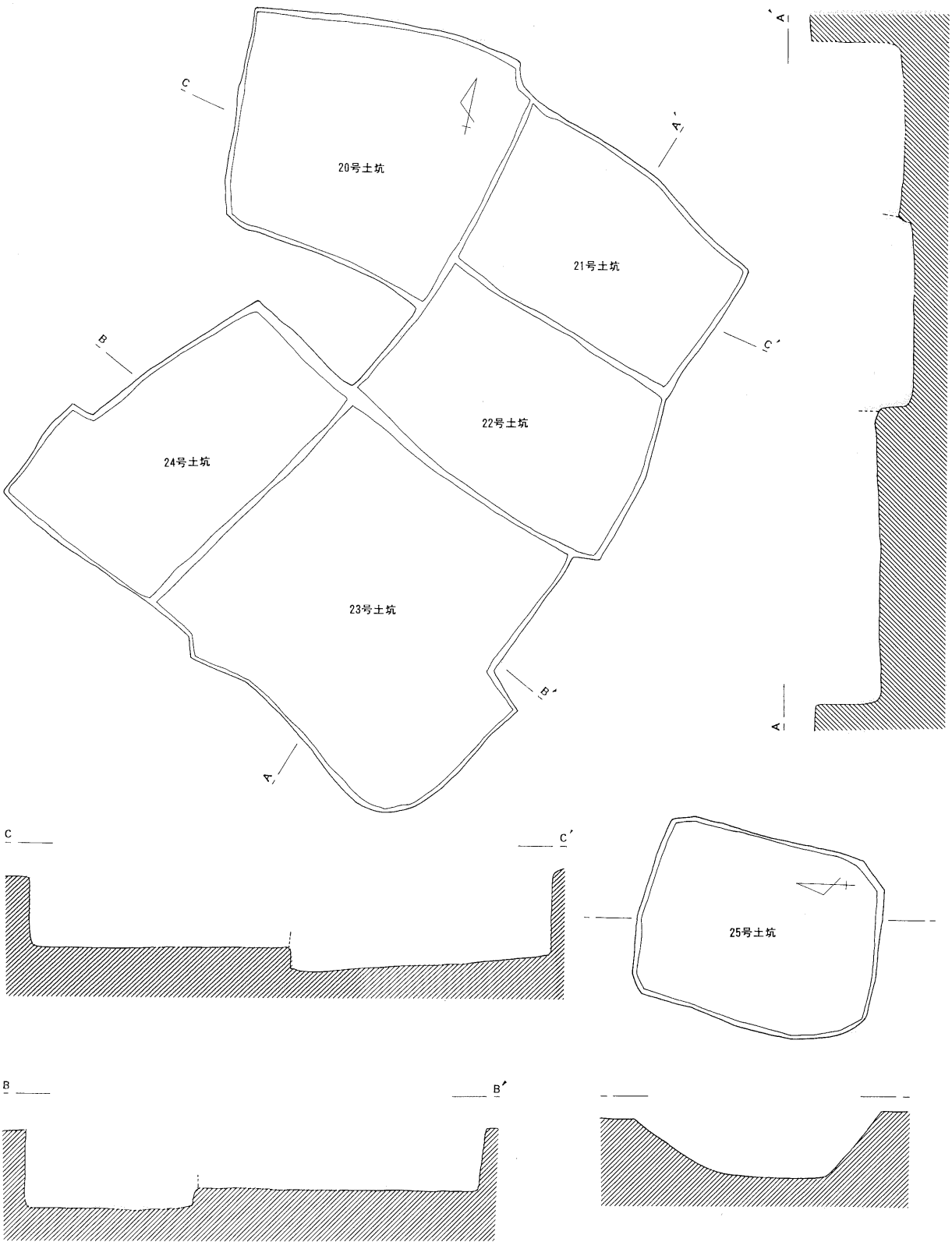
遺物は、全く出土していない。



第127図　1～11号土坑



第128図　12～19号土坑



第129図　20～25号土坑

0　L＝29.000m　2m
1：60

20号～25号土坑（第129図）

大部分がS－3グリッド(一部S－4グリッド・T－3グリッドに及ぶ)に位置している。

全て、各隅が強く角張る長方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平を成す特徴を有している。また、覆土は、暗灰黄色粘土層・灰オリーブ色粘土層が堆積し、多量の黄灰色粘土ブロックを含み、投入土の様相を呈するという共通性も合わせもっている点は、1号～5号・7号・8号・12号・13号・19号土坑と同一である。

規模は、以下のとおりである。

20号　(長辺)2.76×(短辺)2.55m、(深さ) 75cm
21号　(長辺)2.75×(短辺)1.30m、(深さ) 90cm
22号　(長辺)2.90×(短辺)1.90m、(深さ)105cm
23号　(長辺)3.45×(短辺)3.00m、(深さ) 72cm
24号　(長辺)3.16×(短辺)2.00m、(深さ) 85cm
25号　(長辺)2.50×(短辺)1.98m、(深さ) 60cm

遺物は、20号土坑から土師器坩が出土している他は、全く出土していない。

26号～30号土坑（第130図）

26号土坑はS－6グリッド(一部T－6グリッドに及ぶ)、27号・28号土坑はT－2グリッドに位置している。また29号土坑はT－3グリッド、30号土坑がT－4グリッド(一部T－3グリッドに及ぶ)に位置している。

全て、各隅が強く角張る長方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平を成す特徴を有している。また、覆土は、暗灰黄色粘土層・灰オリーブ色粘土層が堆積し、多量の黄灰色粘土ブロックを含み、投入土の様相を呈するという共通性も合わせもっている点は、前にみた土坑と同一である。

この内27号・28号土坑は、これら覆土に、焼土及び炭化材のブロックや粒子を多量に含んでおり、他と異なった特徴を示している。

規模は、以下のとおりである。

26号　(長辺)2.65×(短辺)2.16m、(深さ) 72cm
27号　(長辺)2.75×(短辺)2.70m、(深さ) 70cm
28号　(長辺)2.90×(短辺)1.19m、(深さ) 52cm
29号　(長辺)2.13×(短辺)1.86m、(深さ) 78cm
30号　(長辺)2.42×(短辺)2.10m、(深さ) 76cm

遺物は、全く出土していない。

31号･32号･35号･36号土坑(第131図)

31号・32号土坑はT－4グリッドに位置している。また35号土坑はU－2グリッド(東半部は、調査区域外に及ぶ)、36号土坑はU－4グリッドからV－4グリッドにかけて位置している。

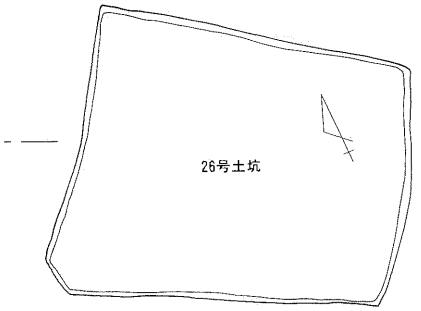
各隅が強く角張る長方形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平を成す特徴を有しているが、35号土坑は隅が丸味をもつ。

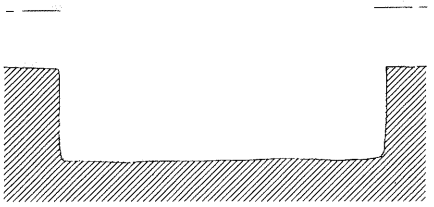
覆土は、やはり暗灰黄色粘土層・灰オリーブ色粘土層が堆積し、多量の黄灰色粘土ブロックを含み、投入土の様相を呈するという共通性も合わせもっている点は、前にみた土坑と同一である。

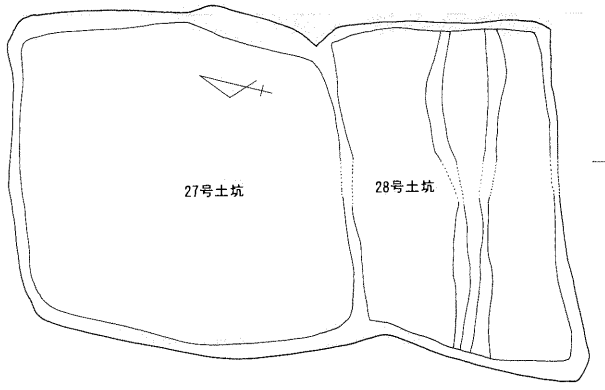
規模は、以下のとおりである。

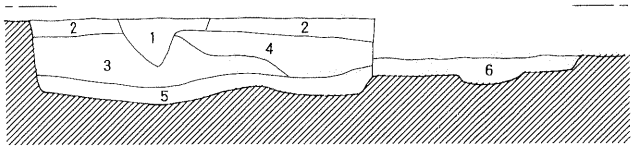
31号　(長辺)3.40×(短辺)2.65m、(深さ) 57cm
32号　(長辺)3.08×(短辺)2.24m、(深さ) 54cm
35号　(長辺)　×(短辺)　　m、(深さ) 50cm
36号　(長辺)2.80×(短辺)1.71m、(深さ)107cm

遺物は、全く出土していない。



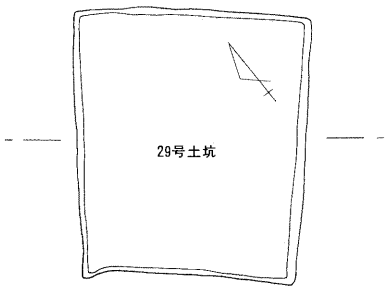


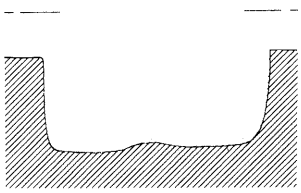


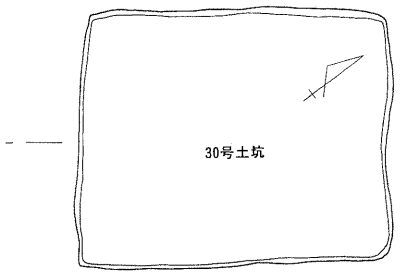


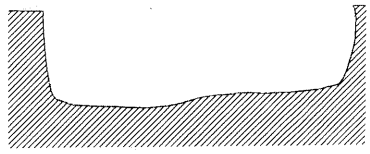
27・28号土坑土層

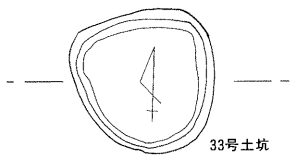
1　黄灰色（2.5 Y 5／1）粘性非常に弱い。炭化物を微量含む。
2　黄褐色（2.5 Y 5／4）粘性ややあり。焼土粒子を少量含む。
3　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）粘性あり。焼土ブロック・粒子を少量含む。
4　オリーブ黄色（5 Y 4／2）粘性あり。焼土ブロックを少量含む。
5　灰オリーブ色（5 Y 4／2）粘性やや強い。焼土ブロック・炭化物を少量含む。
6　にぶい黄褐色（10Y R 5／4）しまりがやや悪い。黒褐色（10Y R 3／1）が全面的混じる。焼土ブロック・炭化物を少量含む。

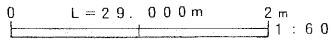




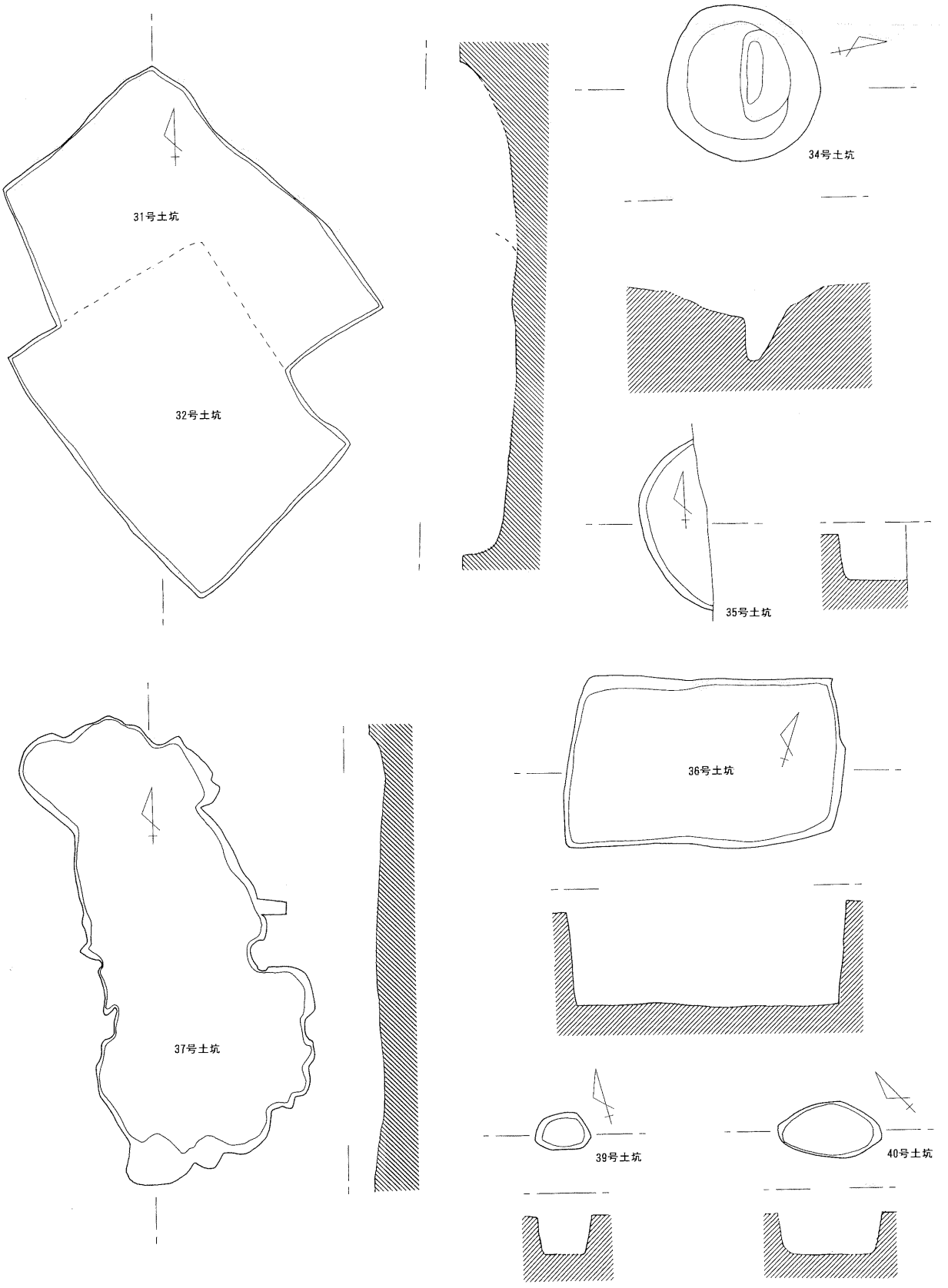








第130図　26～30・33号土坑



第131図　31・32・34～37・39・40号土坑

34号土坑（第131図）

T—7グリッドからU—7グリッドにかけて位置し、1号溝跡を構成するⅢ溝の底面に掘削されている。

1.56×1.62mを測り、ほぼ正円形を呈する。上面から20～30cmのところまで摺鉢状に落ち込み、そこから角度を変えて急に落ち込む。全体の深さは、90cmを測る。

覆土は、最下層が黒褐色粘土と暗褐色粘土の混在層で、その上位に白色軽石粒・炭化物粒を多量に含んだ黒色粘土層が堆積している。この最下層は1号溝跡の最下層(第11層)、上層は1号溝跡の下層(第9層)と同一であり、1号溝跡を構成するⅢ溝と全く同一時期に穿たれたものとされる。

遺物は、土師質杯が2点出土している。

37号土坑（第131図）

V—4グリッドを中心に、U—4・U—5グリッドにかけて位置している。

4.80×2.20m、深さ15cmを測り、不整形である。

覆土は、黄褐色粘土と黄灰色シルトの混在層であり、底面は波状を呈している。

遺物は、散乱した状況で検出され、須恵器蓋、土師器杯・甕がみられる。

42号土坑（第132図）

W—2グリッドに位置している。

76×61cm、深さ53cmを測り、長円形を呈する。底面は水平であり、壁もほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、黄灰色シルト層である。

遺物は、土師器杯が出土している。

45号土坑（第132図）

W—4グリッドに位置しており、5号溝跡に上面を削平されている。

77×68cm、深さ10cmを測り、長方形を呈する。底面は丸みをもつもののほぼ水平であるが、壁は緩傾斜で立ち上がる。

覆土は、黄灰褐色シルト層である。

遺物は、土師器杯・鉢が2点ずつ出土している。

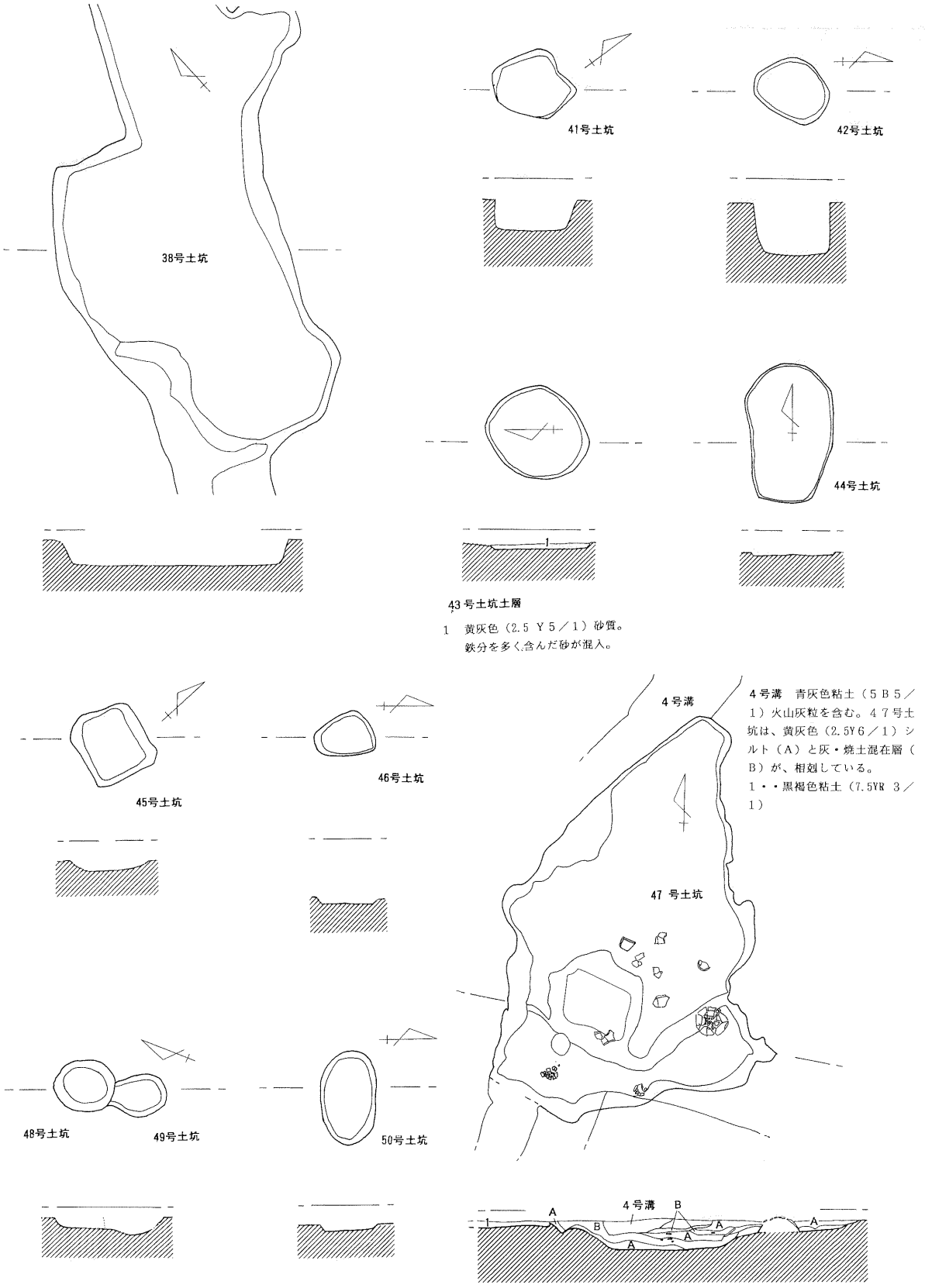
46号土坑（第132図）

W—5グリッドに位置しており、3号溝跡に上面を削平されている。

60×50(23)cm、深さ8cmを測り、台形を呈する。底面はほぼ水平であるが、壁は緩傾斜で立ち上がる。

覆土は、黄灰褐色シルトと浅黄色粘土(砂分を多量に含む)の混在層である。

遺物は、土師器甕が出土している。



第132図　38・41～50号土坑

47号土坑(第132図)

W—7グリッドに位置しており、4号溝跡によって西北隅部が削除されている。

壁面は、凹凸が激しいが、4.00×2.30m、深さ32cmを測り、長方形を呈するものと思われる。底面は段をなし、それぞれがほぼ水平であるが、壁は緩傾斜で立ち上がる。

覆土は、黄灰色シルト層と、灰及び焼土の混在層が相剋しており、全体に、投入された感が強い。

遺物は、相剋する両層から、土師器杯・甕が出土している。

54号土坑(第133図)

X—4グリッドからY—4グリッドにかけて、5号溝跡の東縁に沿って、これと平行して位置している。

8.50×0.95m、深さは最深部で21cmを測り、長方形を呈する。底面は起伏が激く、壁は緩傾斜で立ち上がる。

覆土は、白色軽石粒(浅間B軽石粒)と明黄褐色粘土ブロックを含む暗灰色粘土層であり、4号溝跡・5号溝跡と同一である。

遺物は、土師質高台椀が2点出土している。

57号土坑 (第133図)

Y—5グリッドに位置している。

形態・覆土共に、前にみた土坑と同一である。

3.00×1.80mの規模をもち、深さ76cmを測る。

遺物は、全く出土していない。

60号土坑 (第133図)

Z—5グリッド、7号溝跡が直角に屈曲する位置に、7号溝跡を切断して穿たれている。

1.06×1.00mの規模をもち、正円形を呈する。深さは80cmを測る。

覆土は、すべての土層に酸化鉄粒を含み(下層程多い)、下層から、灰色粘土層・黒褐色粘土層・灰黄色シルト層・灰黄色粘土層・浅黄色シルト層が堆積している。

遺物は、全く出土していない。

63号土坑 (第133図)

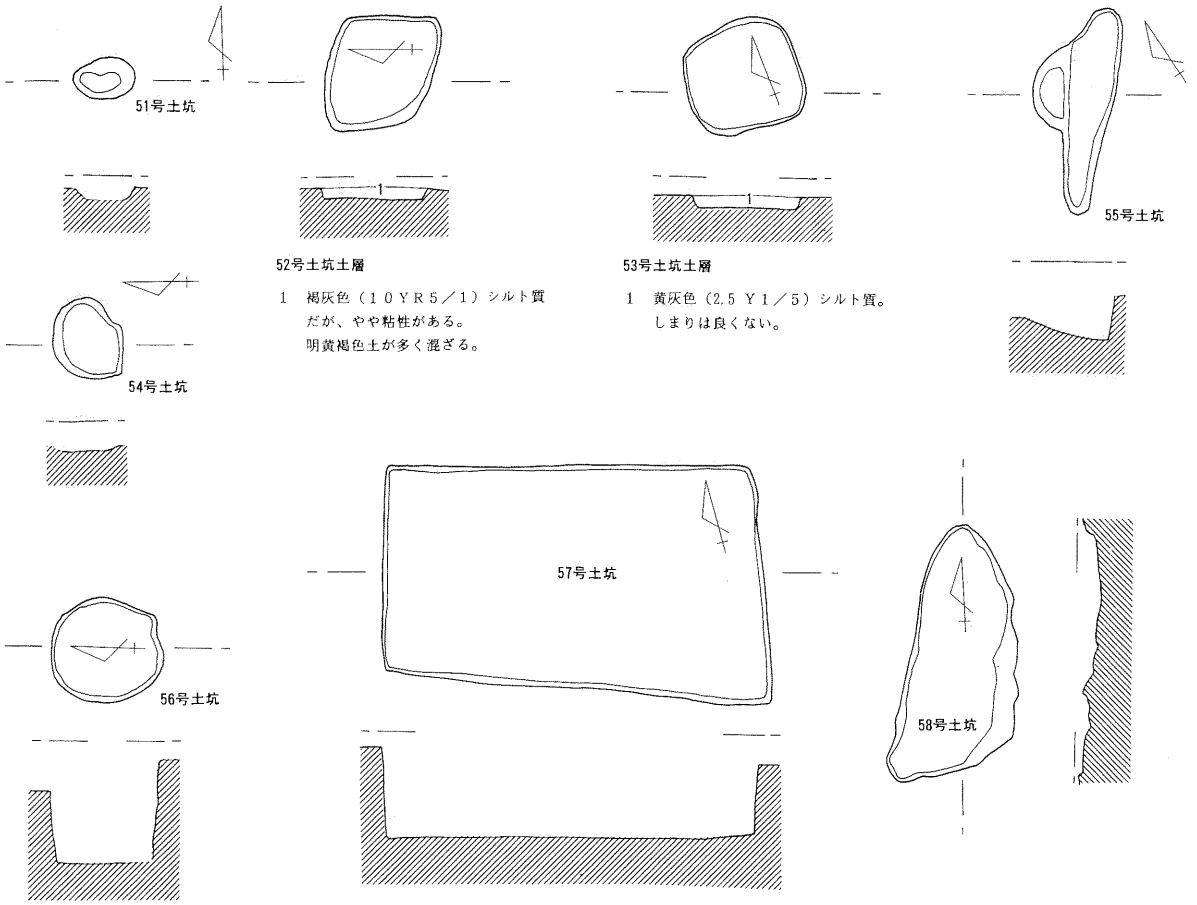
AA—4ポイント北側に位置し、16号溝跡と重複している。

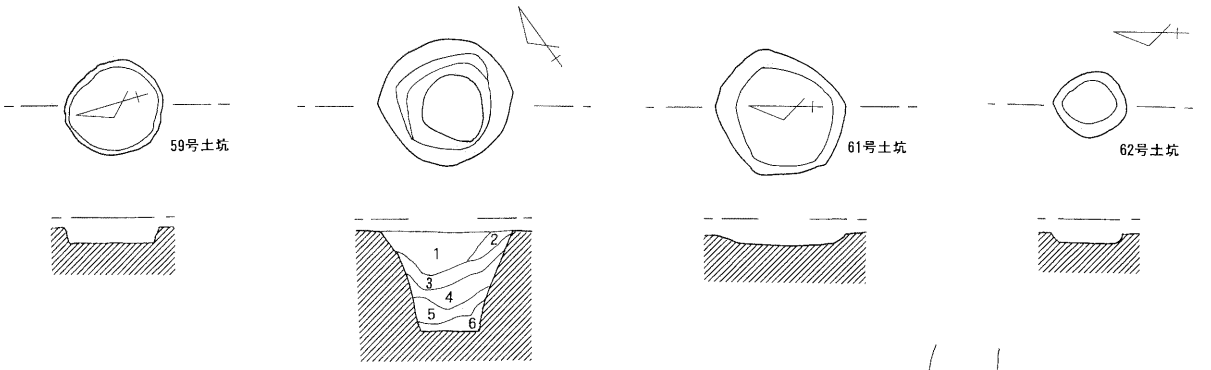
1.88×1.27mの規模をもち、長円形を呈する。深さは東側が一段窪み、20cmを測る。

覆土は、酸化鉄粒を含む灰色シルト層である。

遺物は、摺鉢が出土している。

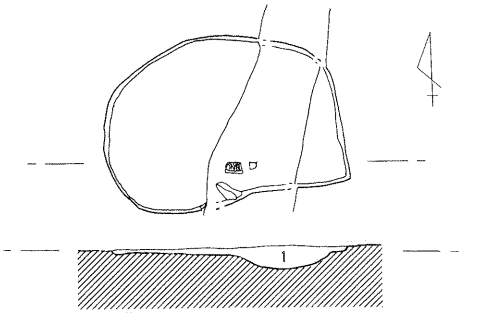
16号溝跡との前後関係は、明確でなく、あるいは同時期であった可能性も高い。





60号土坑土層

1 褐灰色（10YR4／1）シルト質。②の土が若干混ざる。
2 浅黄色（2.5 Y7／3）シルト質。酸化鉄が若干混ざる。
3 黄灰色（2.5 Y4／1）粘土質。比較的大きな酸化鉄のブロックが混ざる。
4 灰黄色（2.5 Y6／2）粘土に近いシルト質。比較的大きな酸化鉄のブロックが混ざる。
5 黒褐色（10YR3／1）粘土質。③④に比べて酸化鉄の含有率は低い。
6 灰色（5Y6／1）粘土質。⑤の土がブロックになって入る。
酸化鉄が混ざる。

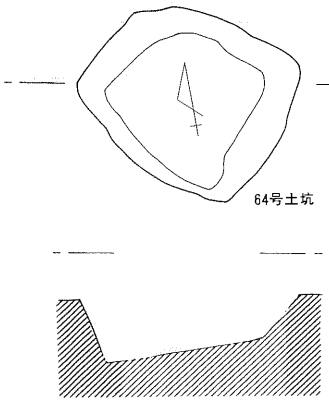


63号土坑土層

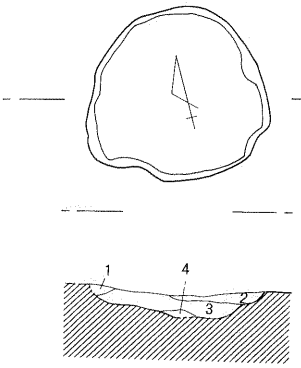
1 灰色（5Y1／5）シルト質で鉄分を少量含む。

0 L=29.000m 2m
1:60

第133図　51～63号土坑

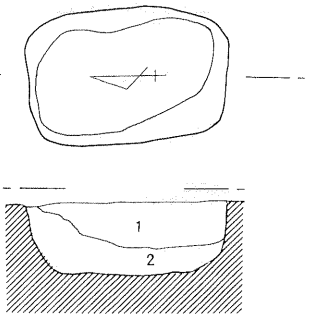


64号土坑



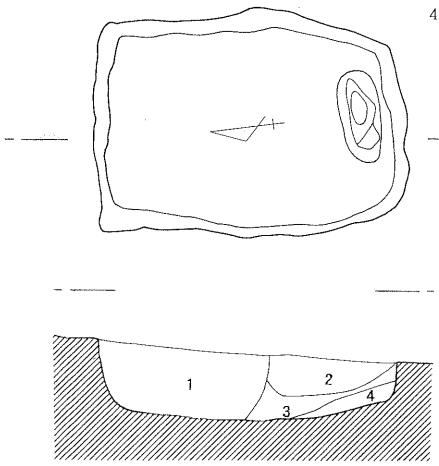
65号土坑土層

1 褐灰色（10YR5／1）シルト質で鉄分を少量含む。
2 黄灰色（2.5Y5／1）砂に近いシルト質。鉄分を少量含む。
3 黄灰色（2.5Y5／1）粘性が強く、鉄分と共に④の土を含む。
4 灰白色（10YR7／1）粘性が非常に強く、鉄分をごく少量含む。



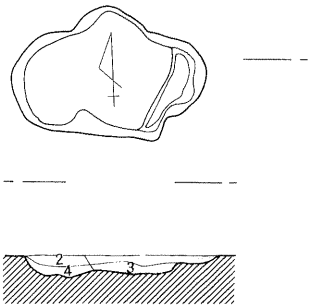
67号土坑土層

1 黒褐色（10YR3／2）シルト質。粘土ブロックが混ざる。粘性は少ないがしまりは良い。酸化鉄を含む。
2 暗褐色（10YR3／4）シルト質。粘土ブロックが混ざる。（①層よりは少ない）・粘性は乏しいがしまりは良い。①層より酸化鉄を多く含み、赤っぽく見える。



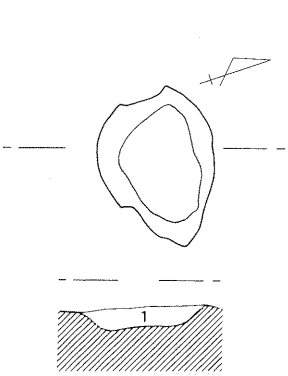
66号土坑土層

1 ②～④の土が混然と混ざり合っている。全体として粘性は強い。
2 褐灰色（10YR1／4）シルト質。黄灰色の粘土ブロックを大量に含む。
3 黄灰色（2.5Y1／5）粘性が強く、鉄分と共に④の土が混入している。
4 灰白色（2.5Y1／7）粘性が強く、鉄分のブロックが部分的に混入している



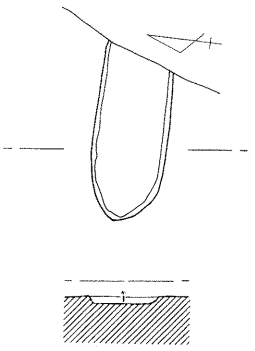
68号土坑土層

1 褐灰色（10YR4／1）粘性が強く、黒褐色土のブロックを含む。
2 黄灰色（2.5Y5／1）シルト質。やや粘性が強い。黒褐色土・黄灰色土を少量含む。
3 黄灰色（2.5Y6／1）粘性が強く、鉄分を多量に含む。部分的に①の土が混入している。
4 黄白色（2.5Y5／1）②に比べ、粘性が強く、鉄分も含む。



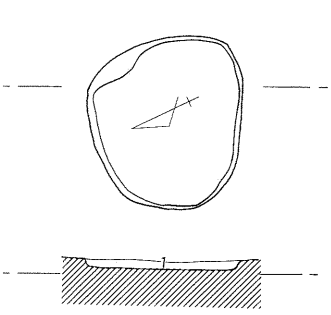
69号土坑土層

1 黄灰色（2.5Y1／4）砂質に近いシルト質。黄褐色土のブロックを少量含む。火山灰（浅間）が少量混入。しまりは良い。酸化鉄を含む。



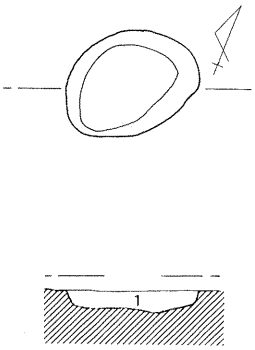
70号土坑土層

1 灰黄褐色（10YR4／2）



71号土坑土層

1 黄灰色（2.5Y1／6）粘土質。粘性が非常に強い。明黄褐色粒が随所に混入している。



72号土坑土層

1 褐色（10YR4／4）シルト質。粘性、しまり共に乏しいが硬質硬質である。

0 L＝29．000m 2m
1：60

第134図　64～72号土坑

64号土坑（第134図）

ＡＡ—６グリッドに位置し、８号溝跡を切断している。

1.57×1.35mの規模をもち、概ね長円形を呈する。底面は西側へ傾斜し、最深部で54cmを測る。

覆土は、酸化鉄粒を僅かに含む黄灰色粘土層である。

遺物は、土錘が出土している。

66号土坑（第134図）

ＡＡ—７グリッドに位置している。

形態・覆土共に、前にみた土坑と同一であり、１号溝(Ｖ溝)埋没後に穿たれている。

2.46×1.75mの規模をもち、深さ53cmを測る。

遺物は、全く出土していない。

75号土坑（第135図）

ＡＢ—３グリッドに位置し、東側は調査区域外に及んでいる。

規模は不明であるが、調査区域端で4.30mを測る。底面は凹凸が激しく、最深部で65cmを測る。

覆土は、下層から灰黄褐色シルト層・炭化物を含む灰黄褐色シルト層・鈍い黄褐色シルト層・黒褐色シルト層の順で堆積している。

遺物は、全く出土していない。

125号・126号土坑（138図）

ＡＢ—５グリッドからＡＣ—5グリッドにかけて位置している。

形態・覆土共に、前にみた土坑と同一であり、１号溝(Ｖ溝)埋没後に穿たれている。

規模は、以下のとおりである。

125号　(長辺)2.40×(短辺)1.60m、(深さ) 79cm

126号　(長辺)1.90×(短辺)1.70m、(深さ) 52cm

遺物は、全く出土していない。

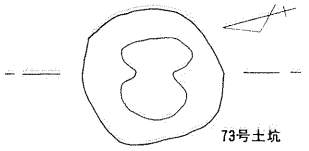
129号土坑（第139図）

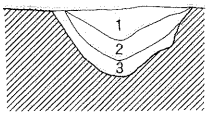
ＡＡ—９グリッドからＡＡ—10グリッドにかけて位置しており、１号溝(Ⅳ溝)の底面に穿たれている。

4.90×3.70mの規模をもち、長円形を呈する。断面形は摺鉢形を呈し、深さ55cmを測る。

覆土は、下層から炭化物を含む黒褐色粘土層・白色軽石粒(浅間Ｂ軽石粒)純層・黒色シルト層と続き、白色軽石粒(浅間Ｂ軽石粒)を含む黄灰色シルト層・黒色粘土層・灰黄色粘土層・褐灰色シルト層の順で堆積しており、１号溝(Ｖ溝)覆土と同一である。

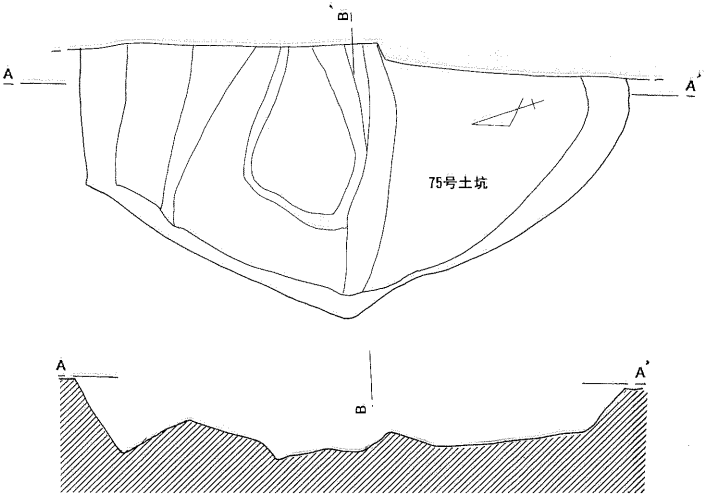
遺物は、全く出土していない。

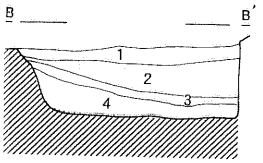




73号土坑土層

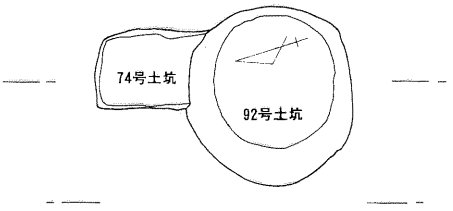
1　黒褐色（2.5 Y 3／1）粘性がややあり、灰白色の粘土ブロックを多く含む。
2　黒褐色（2.5 Y 3／1）①とほぼ同質だが、①より粘土ブロックの含有量が多い。
3　灰白色（2.5 Y 7／1）粘性が強く、①の黒褐色土を少量含む。

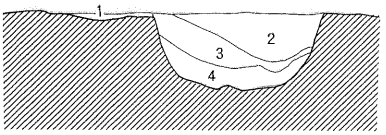




75号土坑土層

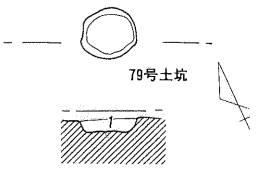
1　黒褐色（10YR3／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。
2　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性、しまりとも良い。
3　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。
　炭化物少量含む。
4　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。





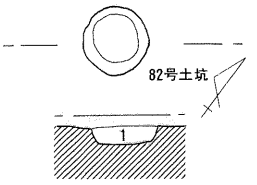
74・92号土坑土層

1　黄灰色（2.5 Y 4／1）しまりがなく、灰白色土をごく少量含む。
2　黒褐色（2.5 Y 3／1）やや粘性があり、灰白色土のブロックを少量含む。
3　灰白色土（5 Y 8／2）粘性が強い。鉄分をやや多く含み、黒褐色土を少量含む。
4　黒褐色土（2.5 Y 3／1）②と同じ。



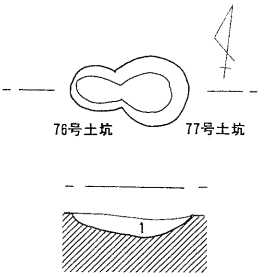
79号土坑土層

1　にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性は乏しいが硬質。



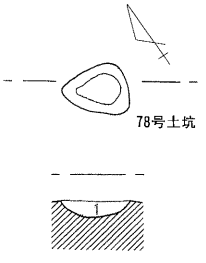
82号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも乏しいが硬質。



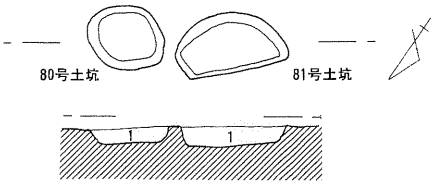
76・77号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。



78号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。
　炭化物少量含む。

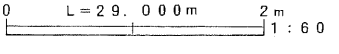


80号土坑土層

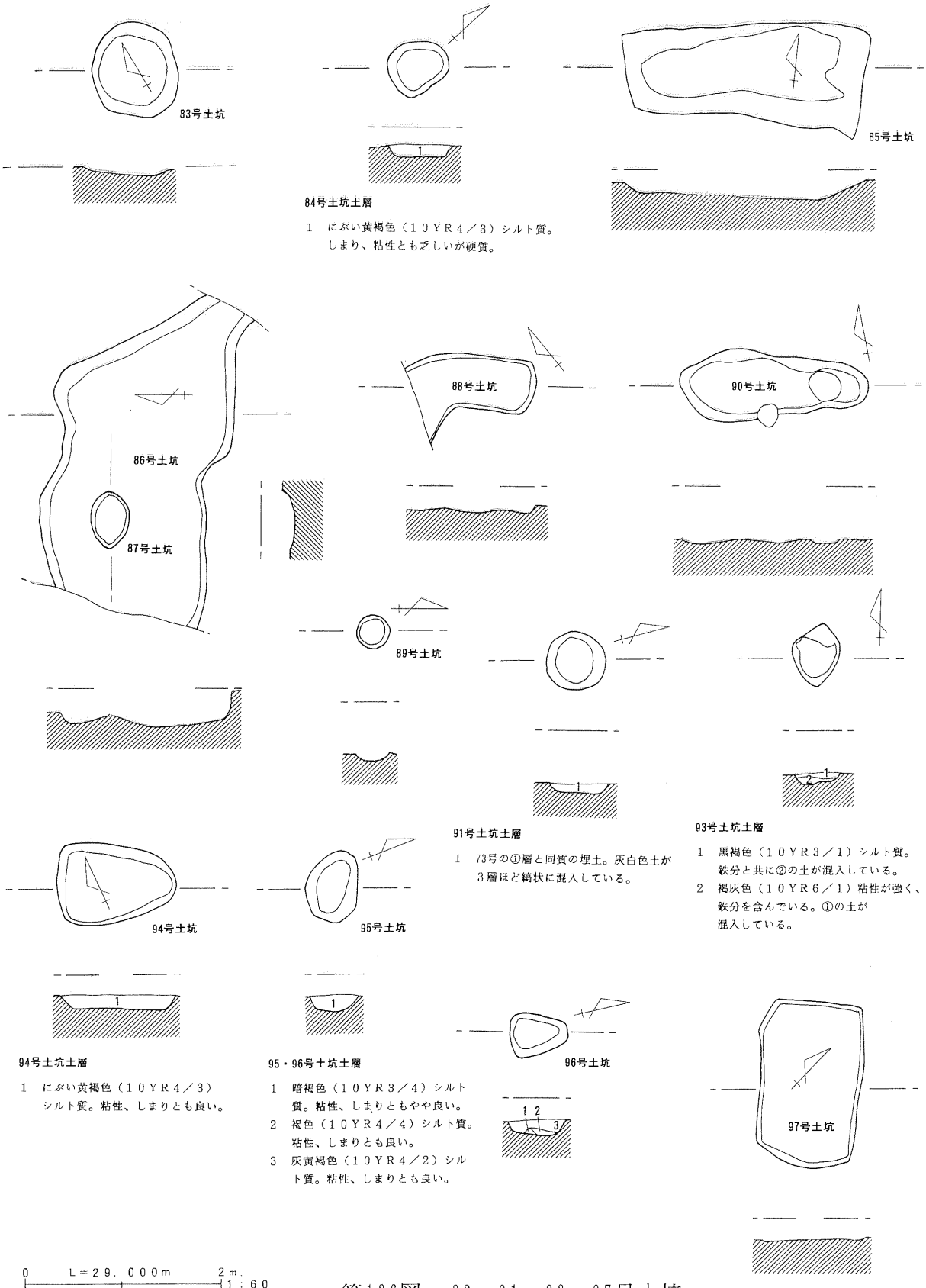
1　灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも乏しいが硬質。

81号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR5／2）シルト質。粘性、しまりとも乏しいが硬質。



第135図　73～82・92号土坑



84号土坑土層

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。しまり、粘性とも乏しいが硬質。

91号土坑土層

1 73号の①層と同質の埋土。灰白色土が3層ほど縞状に混入している。

93号土坑土層

1 黒褐色（10YR3／1）シルト質。鉄分と共に②の土が混入している。
2 褐灰色（10YR6／1）粘性が強く、鉄分を含んでいる。①の土が混入している。

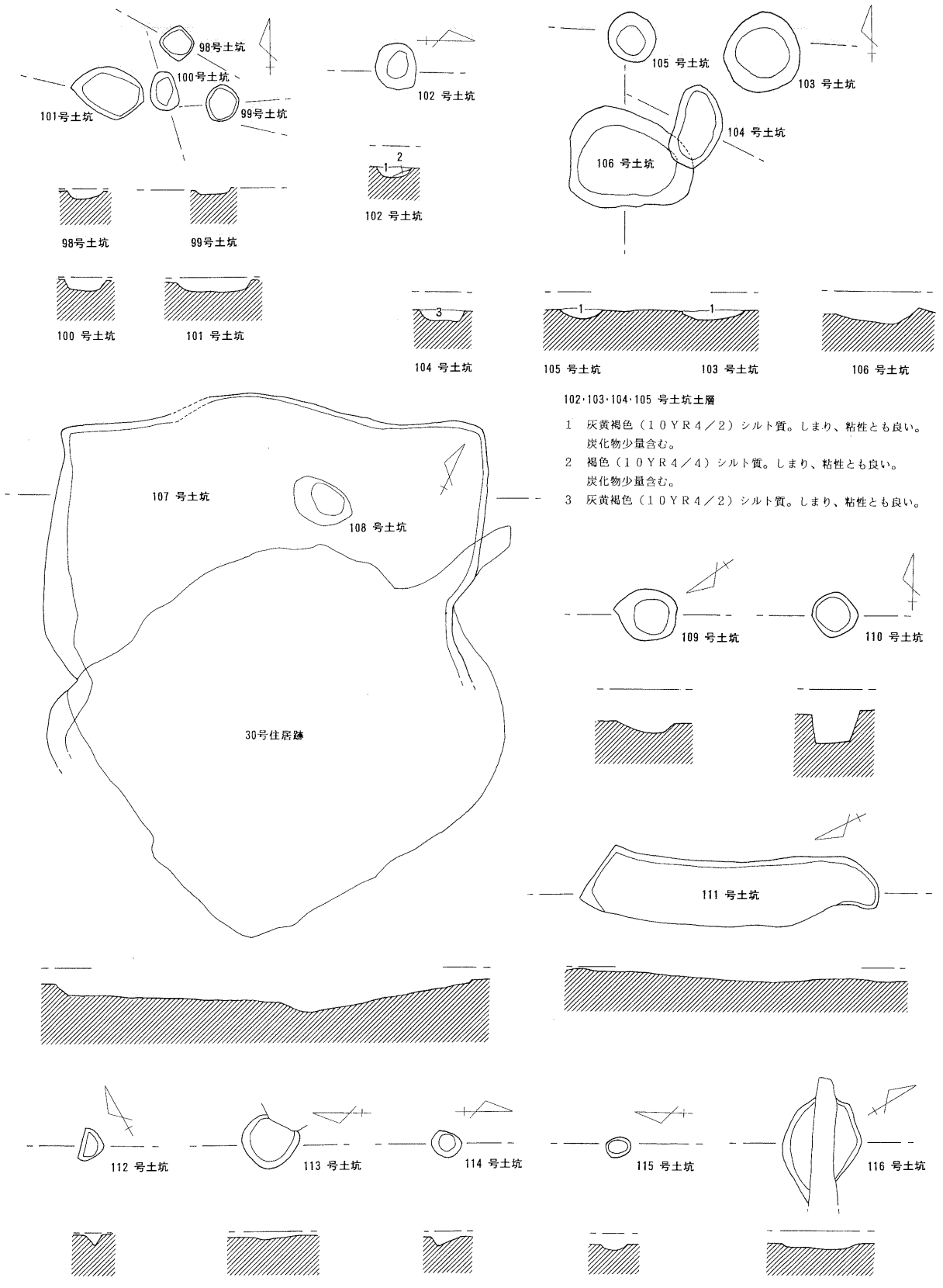
94号土坑土層

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性、しまりとも良い。

95・96号土坑土層

1 暗褐色（10YR3／4）シルト質。粘性、しまりともやや良い。
2 褐色（10YR4／4）シルト質。粘性、しまりとも良い。
3 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまりとも良い。

第136図　83～91・93～97号土坑



第137図　98～116号土坑

0　L＝29．000m　2m
1：60

133号土坑（第140図）

ＡＢ—８グリッドに位置しており、1号溝(Ｖ溝)と重複している。

6.30×4.32mの規模をもち、長円形を呈する。断面形は、壁が凹凸が激しいものの、全体では摺鉢形を呈し、深さを1.50mを測る。

覆土は、下層から⑦酸化鉄粒を僅かに含む灰色粘土層・⑥酸化鉄のブロックを含む灰色粘土層・④下面が酸化鉄面を成す灰黄色粘土層・②酸化鉄粒及び白色軽石粒(浅間Ｂ軽石粒)を含む灰黄褐色粘土層・①酸化鉄粒及び白色軽石粒(浅間Ｂ軽石粒)を含む灰黄褐色シルト層(上層である①層の方が粒が細かい)の順で堆積している。また、⑥層と④層の間には部分的に中間層の⑤層が、④層と②層の間には部分的に中間層の③層が入る。

この内②層は、129号土坑最上層と同一である。

遺物は、常滑焼の甕が出土している。

134号土坑（第140図）

ＡＢ—８グリッドに位置しており、133号土坑の南西部を切断している。

形態・覆土共に、前にみた土坑と同一であり、1号溝(Ｖ溝)埋没後に穿たれている。

2.41×1.56mの規模をもち、深さ70cmを測る。

遺物は、全く出土していない。

135号・136号土坑（第139図）

大部分がＡＢ—８グリッドに位置し、一部がＡＢ—９グリッドに及ぶ。南部は70号住居跡によって切断されている。

4.20m以上×2.75mの規模をもち、不整の長方形を呈する。深さは35cmを測る。

底面は、ほぼ水平を成し、南寄りにり、60×50cm、深さ6cmのピット(136号土坑)が穿たれている。

覆土は、下層に灰黄褐色粘土層、中間に酸化鉄粒を含む褐灰色シルト層、上層に酸化鉄細粒を含む灰黄色シルト層が堆積している。

136号土坑内には、灰黄褐色粘土層が入り、両土坑が同一遺構を成していたことを示す。

遺物は、土師器杯・甕、石錘、土錘、馬歯が出土している。

138号土坑（第139図）

ＡＢ—９グリッドに位置している。

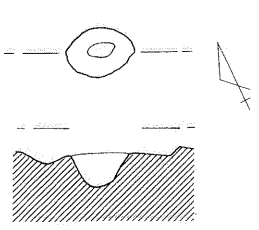
形態・覆土共に、前にみた土坑と同一であり、1号溝(Ⅳ)埋没後に穿たれている。

3.00×2.00mの規模をもち、深さ1.00mを測る。

遺物は、全く出土していない。

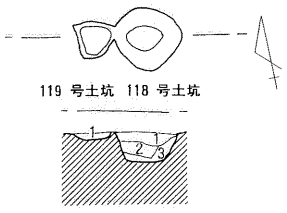
141号・143号土坑（以上第141図）

141号土坑は、ＡＢ—10グリッドからＡＣ—10グリッドに位置しており、西半は、調査区域外に



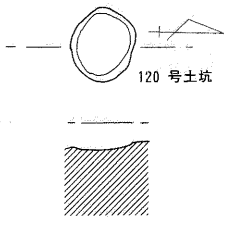
117 号土坑土層

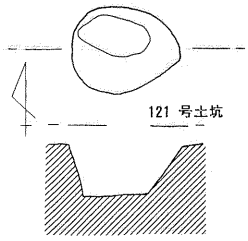
1 黒褐色（2.5 Y 3／2）シルト質。
しまり良い。
粘性がややある。鉄分を含む。

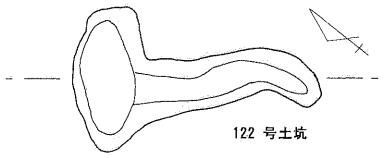


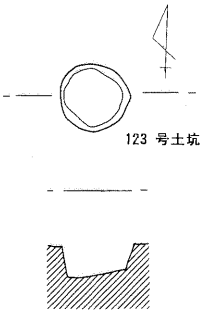
118･119 号土坑土層

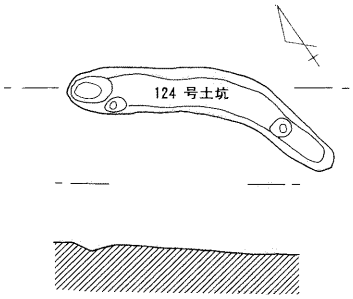
1 黒褐色（2.5 Y 3／2）シルト質。しまり良い。
粘性がややある。鉄分を含む。
2 暗褐色（10YR 3／3）シルト質。しまり良い。
粘性がある。粘土質に近い。炭化物を含み、①層より
酸化鉄を多く含む。
3 褐色（10YR 4／4）粘土質。しまり良い。粘性
が強い。酸化鉄を多く含む。

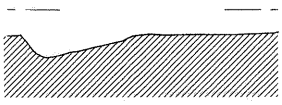


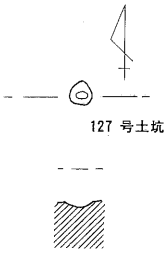


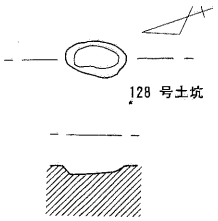


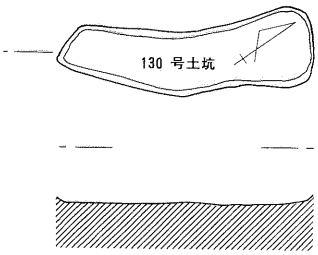


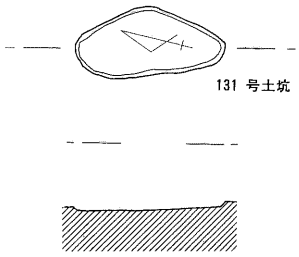


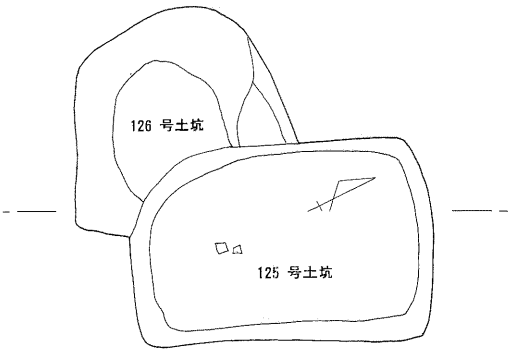


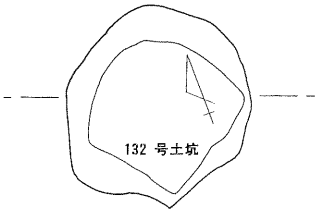


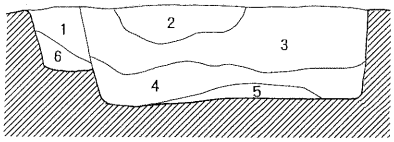






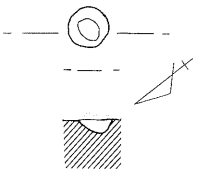






125･126 号土坑土層

1 灰黄色（2.5 Y 7／2）・明黄褐色（2.5 Y 7／6）混入土。シルト質。
2 黄灰色（2.5 Y 5／1）鉄分を多く含むと共に、明黄褐色土が多く入る。
3 黄灰色（2.5 Y 5／1）粘土に近いシルト質。②に比べて鉄分が少い。
明黄褐色土が多く入る。
4 黄灰色（2.5 Y 6／1）粘土質。鉄分のブロックが入る。
5 灰白色（2.5 Y 7／1）粘性が非常に強い。④に比べて鉄分のブロックを
多く含む。
6 褐灰色（10YR 5／2）粘性が強く、灰白色土と共に鉄分を少量含む

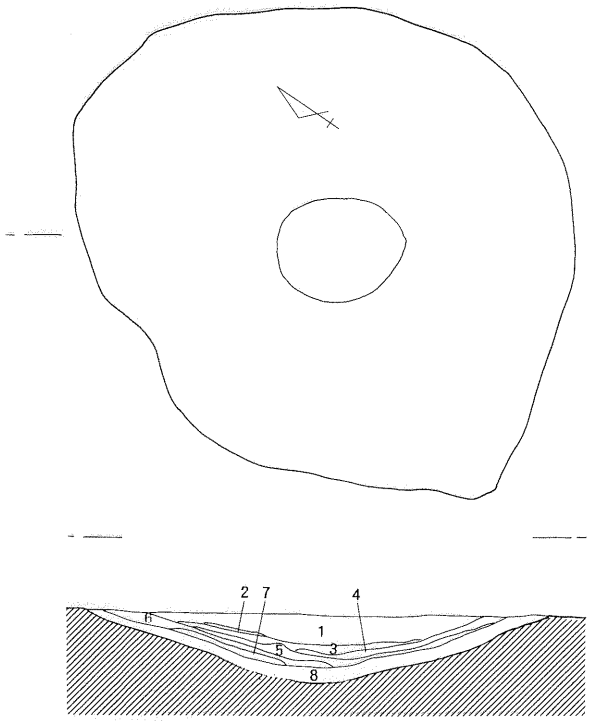


140 号土坑土層

1 黒褐色（10YR 3／2）砂に
近いシルト質。しまりに欠ける。

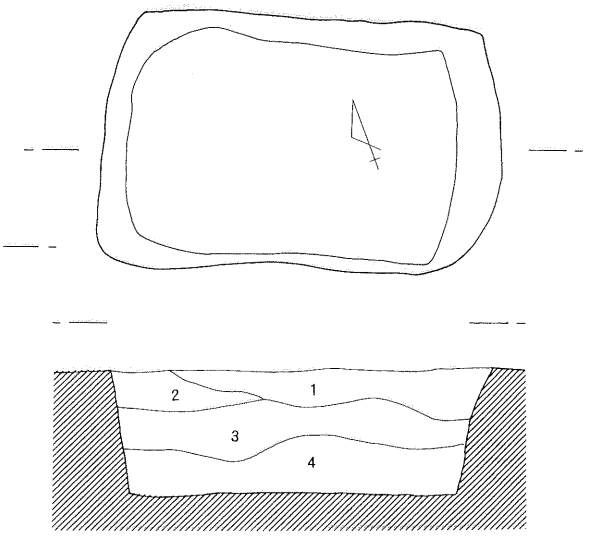
第138図　117～128・130～132・139・140号土坑

0　L＝29．000m　2m
1：60



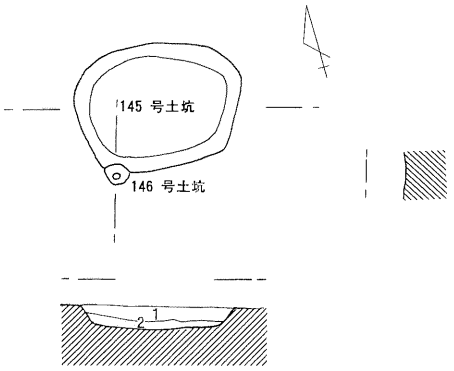
129 号土坑土層

1　褐灰色（１０ＹＲ４／4）砂質。火山灰が大量に混入している。
2　灰黄色（2.5 Ｙ６／２）粘土質。うすくスライス状に堆積している。
3　黒色（１０ＹＲ２／１）粘土質。⑤層の火山灰がまばらに混ざっている。
4　黄灰色（2.5 Ｙ４／１）シルト質。ほぼ１：１の割合で⑤層の火山灰が混ざる。
5　火山灰層。　砂っぽく、ややピンクがかった灰色を呈する。
　粘性がややある。鉄分を含む。
6　黒色（2.5 Ｙ２／１）砂質。非常にボロボロしている。
7　火山灰層。　⑤層と同じ。
8　黒色（2.5 Ｙ２／１）粘土質。炭化物が混ざる。



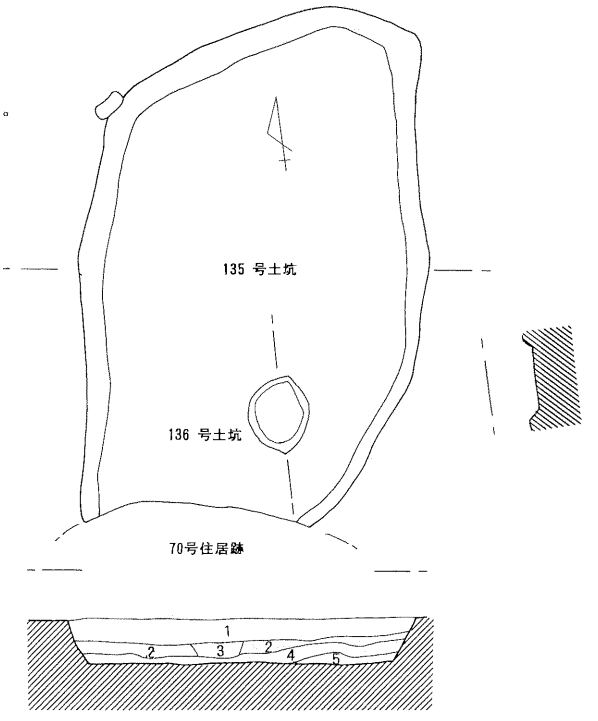
138 号土坑土層

1　灰色（５Ｙ５／１）粘土に近いシルト質。酸化鉄が混ざる。
2　浅黄色（2.5 Ｙ７／３）シルト質。①の土が約５０％混ざる
3　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）粘土質。酸化鉄を多く含んだ粒が混入。
4　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。③層よりも粘性が強い。



145 号土坑土層

1　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）シルト質。酸化鉄の
　ブロックが多く混ざる。
2　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）粘土に近いシルト質。
　①層の土と共に酸化鉄のブロックが混ざる。

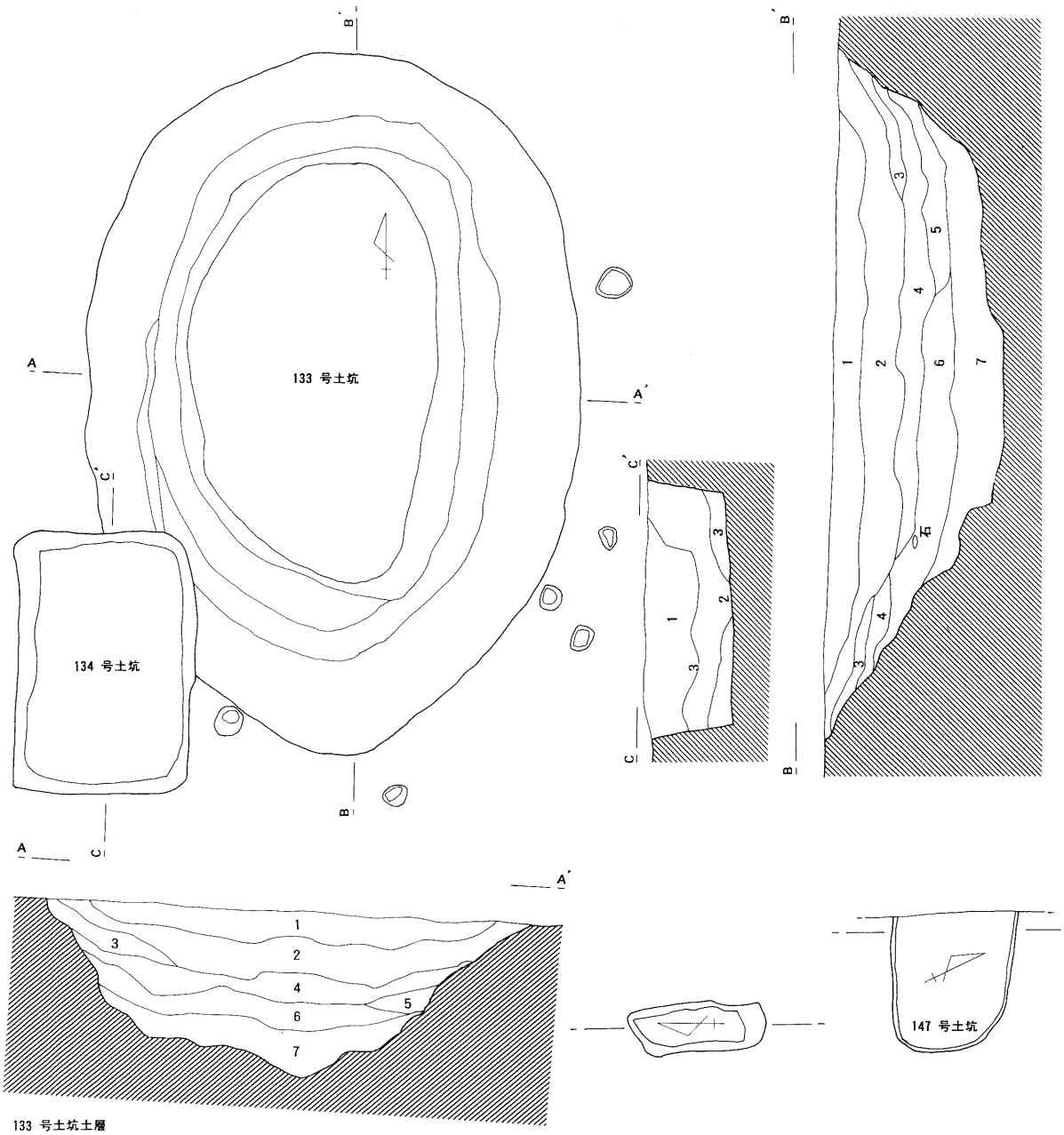


135 号土坑土層

1　灰黄色（2.5 Ｙ６／１）シルト質。しまりあり。酸化鉄の細かい粒が多い。
2　褐灰色（１０ＹＲ６／１）砂に近いシルト質。①層よりも酸化鉄の粒が大きい。
3　褐灰色（１０ＹＲ５／１）粘土質。
4　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）粘土質。粘性が強い。部分的に砂が混ざる。
5　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）粘土質。④層に近いが、やや粘性が弱い。

第139図　129・135・136・138・145・146号土坑

0　L＝29.000m　2m
1：60



133 号土坑土層

1 灰黄褐色（10YR6／2）粘土に近いシルト質。酸化鉄の細かい粒や火山灰が混ざる。
2 褐灰色（10YR5／1）粘土質。酸化鉄・火山灰が混ざる。（①よりも含有率が高い）
3 灰黄褐色（10YR5／2）粘土質。酸化鉄をわずかに含む。
4 灰黄色（2.5Y6／2）粘土質。下面に酸化鉄が帯状に入る。
5 灰色（5Y6／1）粘土質。酸化鉄のブロックが入る。④の土が混ざる。
6 灰色（7.5Y5／1）粘土質。粘性が非常に強い。酸化鉄のブロックが大量に混ざる。
7 灰色（7.5Y6／1）粘土質。⑥よりも更に粘性が強い。酸化鉄は⑥に比べて少ない

134 号土坑土層

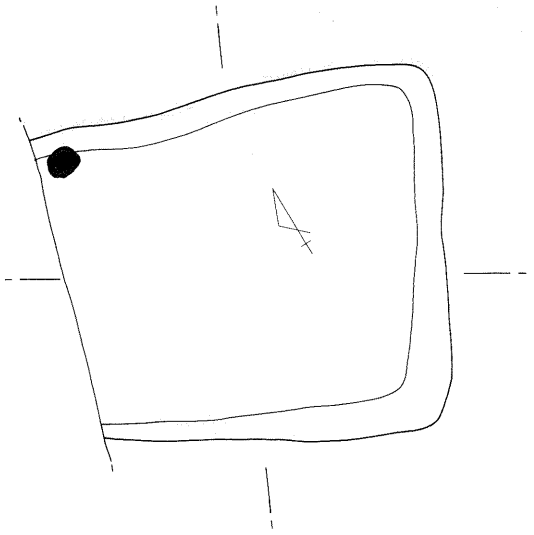
1 にぶい黄橙色（10YR6／3）シルト質と褐灰色（10YR5／1）粘土質が混然とした土。
2 褐灰色（10YR5／1）粘土質。酸化鉄を多く含む。
3 灰黄色（2.5Y6／2）砂に近いシルト質。酸化鉄を多く含む。

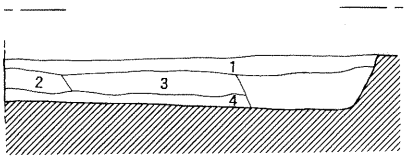
137 号土坑土層

1 黒褐色（2.5Y3／1）灰白色・シルト質のブロックが部分的に混入。固くしまっている。

第140図　133・134・137・147号土坑

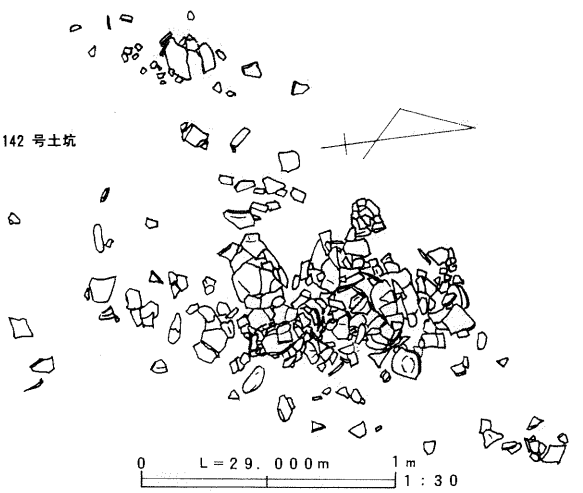
0　L＝29.000m　2m
1：60



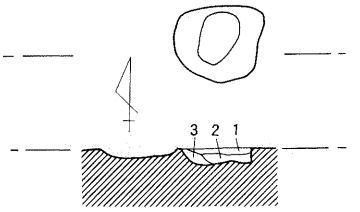


141 号土坑土層

1　明黄褐色（2.5 Y 6／6）粘土に近いシルト質。③層の土がブロック状に混ざる。
2　灰黄色（2.5 Y 6／2）シルト質。
3　浅黄色（2.5 Y 7／4）粘土質。酸化鉄のごく小さな粒が混ざる。
4　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）粘土質。酸化鉄のブロックが数多く混ざる。

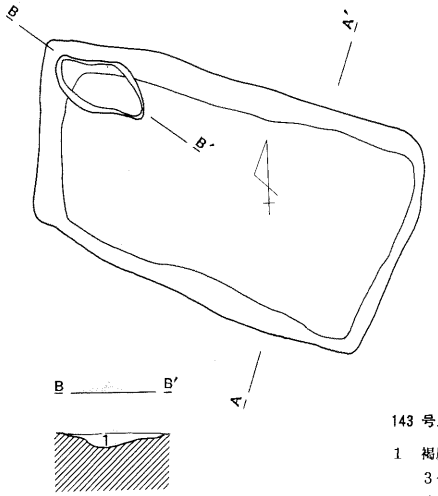


142 号土坑



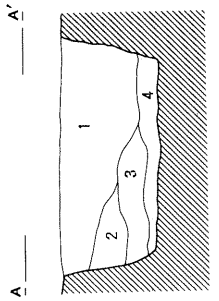
148 号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質。しまりは良い。粘性は弱い。鉄分を含む。
2　暗褐色（10YR 3／2）シルト質。①層よりも粘土質に近い。しまり良く粘性がある。鉄分を含む。
3　黒褐色（7.5 YR 3／1）粘土に近いシルト質。②層に近い。しまり良く粘性がある。鉄分の含有量は少ない。



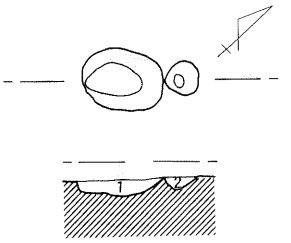
144 号土坑土層

1　黒褐色（10YR 3／2）砂に近いシルト質。しまりに欠ける。



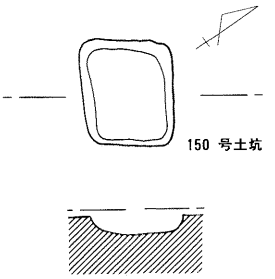
143 号土坑土層

1　褐灰色（10YR 4／1）シルト質。粘性が強い。3～5㎝大の粘土ブロックが数多く混入。
2　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）砂に近いシルト質。粘土のブロックが混入。
3　灰色（5Y 5／1）シルト質。酸化鉄のブロックが入る。
4　黄灰色（2.5 Y 5／1）砂に近いシルト質。部分的に砂が混ざる。

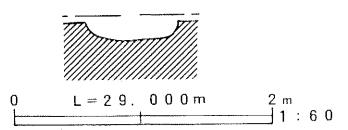


149 号土坑土層

1　灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質。やや粘性がありしまりも良い。
2　黒褐色（10YR 2／2）



150 号土坑



第141図　141～144・148～150号土坑

及んでいる。143号土坑は、ＡＣ―９グリッドからＡＣ―１０グリッドに位置している。

形態・覆土共に、前にみた土坑と同一であり、１号溝(Ⅳ)埋没後に穿たれている。

規模は、以下のとおりである。

141号　(長辺)　　×(短辺)2.30m、(深さ) 40cm

143号　(長辺)3.15×(短辺)1.85m、(深さ) 75cm

遺物は、全く出土していない。

142号土坑（第141図）

ＡＣ―８グリッドに位置しているが、掘込みは確認されておらず、土器が2.00×1.60ｍの範囲(長軸方位Ｎ―45°.―Ｅ)に、土師器甕(№５～13)・甑(№14～15)を中心に、土師器杯(№１)・高杯(№３～４)、須恵器高杯(№２)、土錘(№16～17)等が、最高３重に重なって、集中して出土。

土器を乗せている基盤層の形状は、中央部が周囲より約10cmほど窪みをもち、緩い摺鉢状を呈するものの、明確なものではない。

152号土坑（第142図）

ＡＣ―４グリッドに位置し、153号・154号土坑によって切断されている。

3.35×1.60ｍの規模をもち、不整の長円形を呈する。深さは15cm前後を測る。

緩やかな傾斜をもつ壁から、底面はほぼ水平を成している。

覆土は、灰黄褐色シルト層が堆積している。

遺物は、須恵器杯(№１)、土師器杯(№２)・甕(№３)、須恵器短頸壷(№４)等が出土している。

167号土坑（第142図）

ＡＣ―５グリッドに位置している。

1.35×0.80ｍの規模をもち、不整の長円形を呈する。深さは30cmを測る。

底面はほぼ水平を成し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、下層が酸化鉄粒を多量に含む黄褐色シルト層、中層が酸化鉄粒と炭化材粒を含む鈍い黄褐色シルト層、上層が酸化鉄粒を含む鈍い黄褐色シルト層である。

遺物は中間層に含まれ、土師器椀(№１)・鉢(№２・３)・台付甕(№４)等が出土している。

192号土坑（第144図）

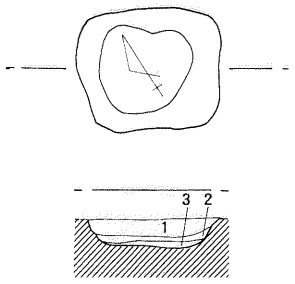
大部分がＡＤ―４グリッドに位置し、一部がＡＣ―４グリッド・ＡＤ―５グリッドに及んでいる。

7.40×2.30ｍの規模をもち、不整の長方形を呈する。

底面は、北端(深さ51cm)及び南端(深さ45cm)に段をもち、中央部はさらに窪んで、深さ95cmを測る。底面は凹凸が激しく、全体に弓状を呈している。

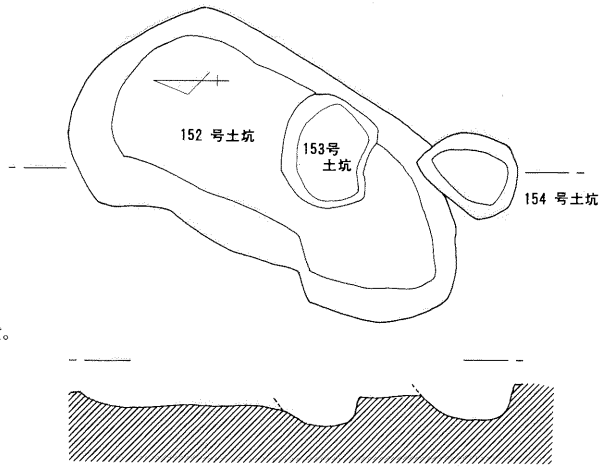
覆土は、酸化鉄粒を含む灰色粘土層を中心に堆積し、砂分・酸化鉄粒の含有率で分層されている。

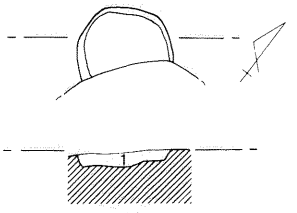
遺物は、木片・プラスチック片等が出土している。



151 号土坑土層

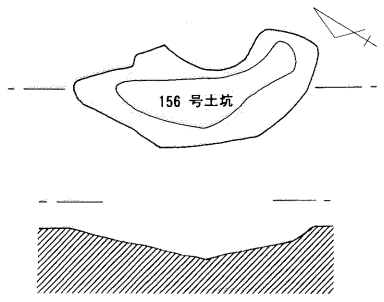
1 黒褐色（10YR3／2）シルト質。粘性、しまり共に良い。
2 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性、しまり共に良い。
3 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。粘性、しまり共に良い。炭化物を少量含む。

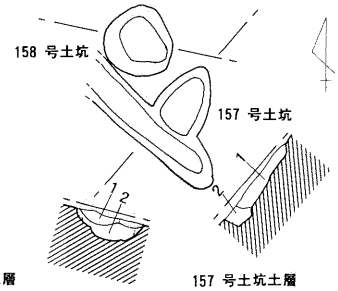




155 号土坑土層

1 暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）シルト質。しまりは良い。焼土・炭化物の小ブロックと、遺物（多量）を包含。



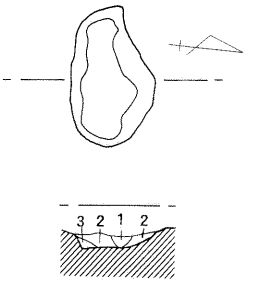


158 号土坑土層

1 灰黄褐色（10YR4／2）シルト質。しまりは良い。
2 にぶい黄褐色（10YR5／4）シルト質。しまりは良い。

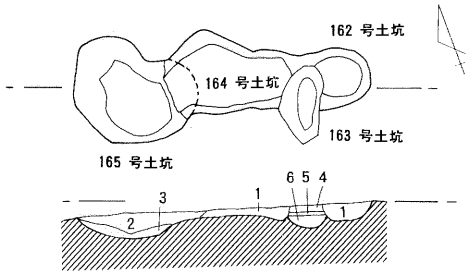
157 号土坑土層

1 褐色（10YR4／4）シルト質。
2 灰黄褐色（10YR5／2）シルト質。やや砂っぽい。



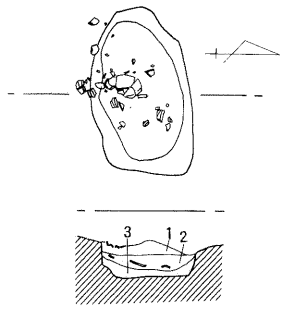
161 号土坑土層

1 黄褐色（2.5Y5／4）シルト質。やや粘性がある。
2 暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）シルト質。酸化鉄を多く含む。
3 黄灰色（2.5Y4／1）シルト質。



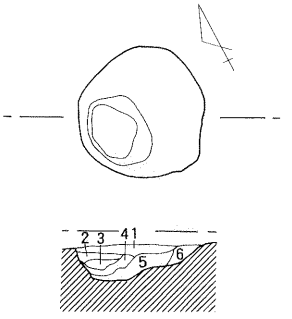
162・163・164・165 号土坑土層

1 黒褐色（7.5YR3／1）シルト質。しまり良い。
2 黒褐色（7.5YR3／2）シルト質。しまり良い。①層よりも明るい色調で、砂っぽい。遺物を多く含む。
3 黒色（10YR2／1）シルト質。②層より、砂分は少い。
4 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。やや粘性あり。
5 黒褐色（10YR3／1）炭化物を中心とする層。
6 にぶい黄褐色（10YR4／3）④層に近い。



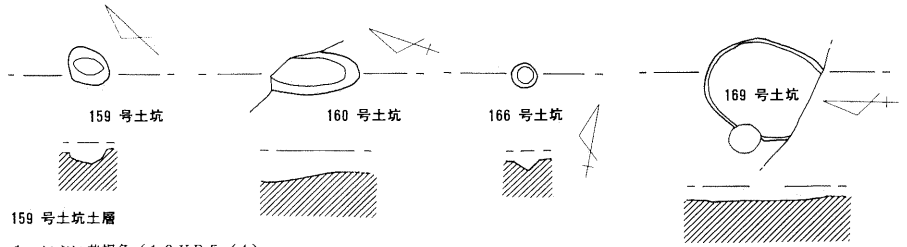
167 号土坑土層

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）シルト質。粘性、しまり共に悪い。酸化鉄を多く含む。
2 にぶい黄褐色（10YR5／4）シルト質。①層に近い土質だが、しまりは良い。酸化鉄の含有量は少い。少量の炭化物粒子を含む。
3 黄褐色（2.5Y4／1）シルト質。粘性、しまりとも良い。酸化鉄を多く含む。



168 号土坑土層

1 黄褐色（10YR5／6）シルト質。やや硬くしまりが良い。
2 黄褐色（10YR5／6）やや濃い灰色が混ざる。④層よりも砂っぽい。
3 褐灰色（10YR4／1）粘土質に近いシルト。
4 褐色（10YR4／6）シルト質。ほど良い硬さである。
5 黒褐色（10YR3／1）シルト質。④層と同じ褐色土が混ざる。
6 黄褐色（10YR5／6）シルト質。しまりが良い。

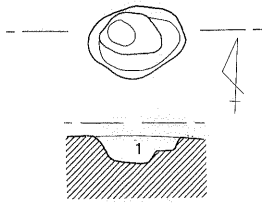


159 号土坑土層

1 にぶい黄褐色（10YR5／4）シルト質。しまり良く硬質。

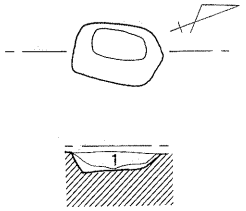
第142図　151～169号土坑

0　L＝29．000m　2m
1：60



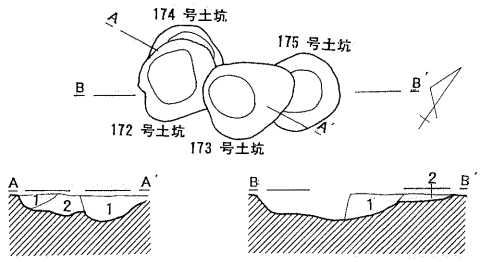
170 号土坑土層

1　黒褐色（7.5 ＹＲ３／２）砂っぽいシルト質。焼土粒子、焼土・炭化物の小粒子を含む。しまりはあまり良くない。



171 号土坑土層

1　黒褐色（7.5 ＹＲ３／２）砂っぽいシルト質。



172・173 号土坑土層

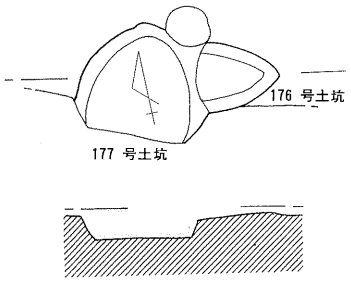
1　黒褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質。しまり良い。粘土粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。

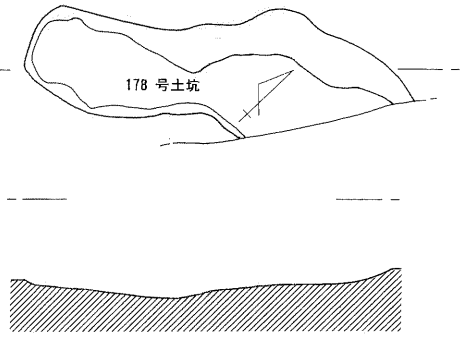
2　灰黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質。鉄分を多く含む。

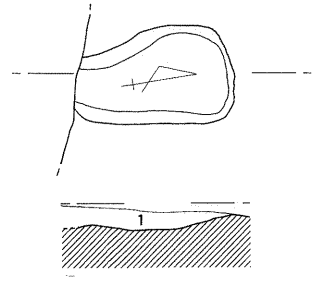
175 号土坑土層

1　黒褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質。しまり良い。焼土・炭化物の小粒子を少量含む。

2　褐色（１０ＹＲ４／４）シルト質。やや硬めである。

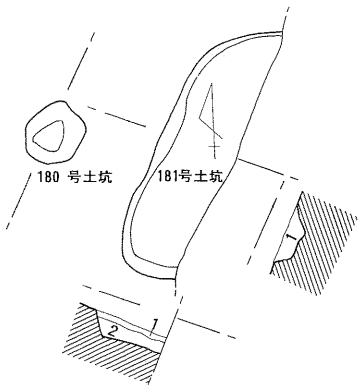


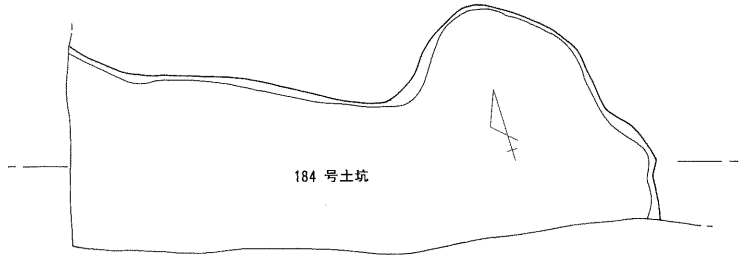




183 号土坑土層

1　褐灰色（１０ＹＲ４／１）しまりがない。黄褐色土粒が多く入る。





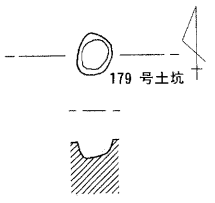
181 号土坑土層

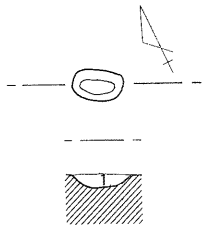
1　褐灰色（１０ＹＲ４／１）やや粘性を帯びたシルト質。黄褐色土が若干混ざる。

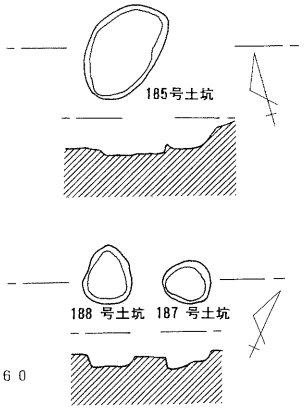
2　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）粘土質。炭がわずかに混ざる。

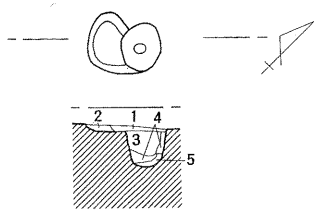
180 号土坑土層

1　灰黄褐色（2.5 Ｙ４／２）シルト質。やや砂っぽい。しまりは悪い。









186 号土坑土層

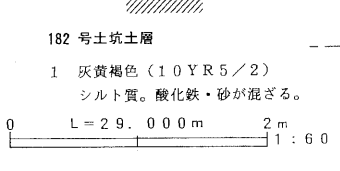
1　黒褐色（2.5 Ｙ３／２）シルト質。

2　オリーブ褐色（2.5 Ｙ４／６）シルト質。

3　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）シルト質。黄褐色土の小ブロックが混ざる。焼土ブロック・炭化物ブロックを少量含む。

4　暗オリーブ褐色（2.5 Ｙ３／３）粘土質に近いシルト質。

5　にぶい黄褐色（１０ＹＲ４／３）シルト質。

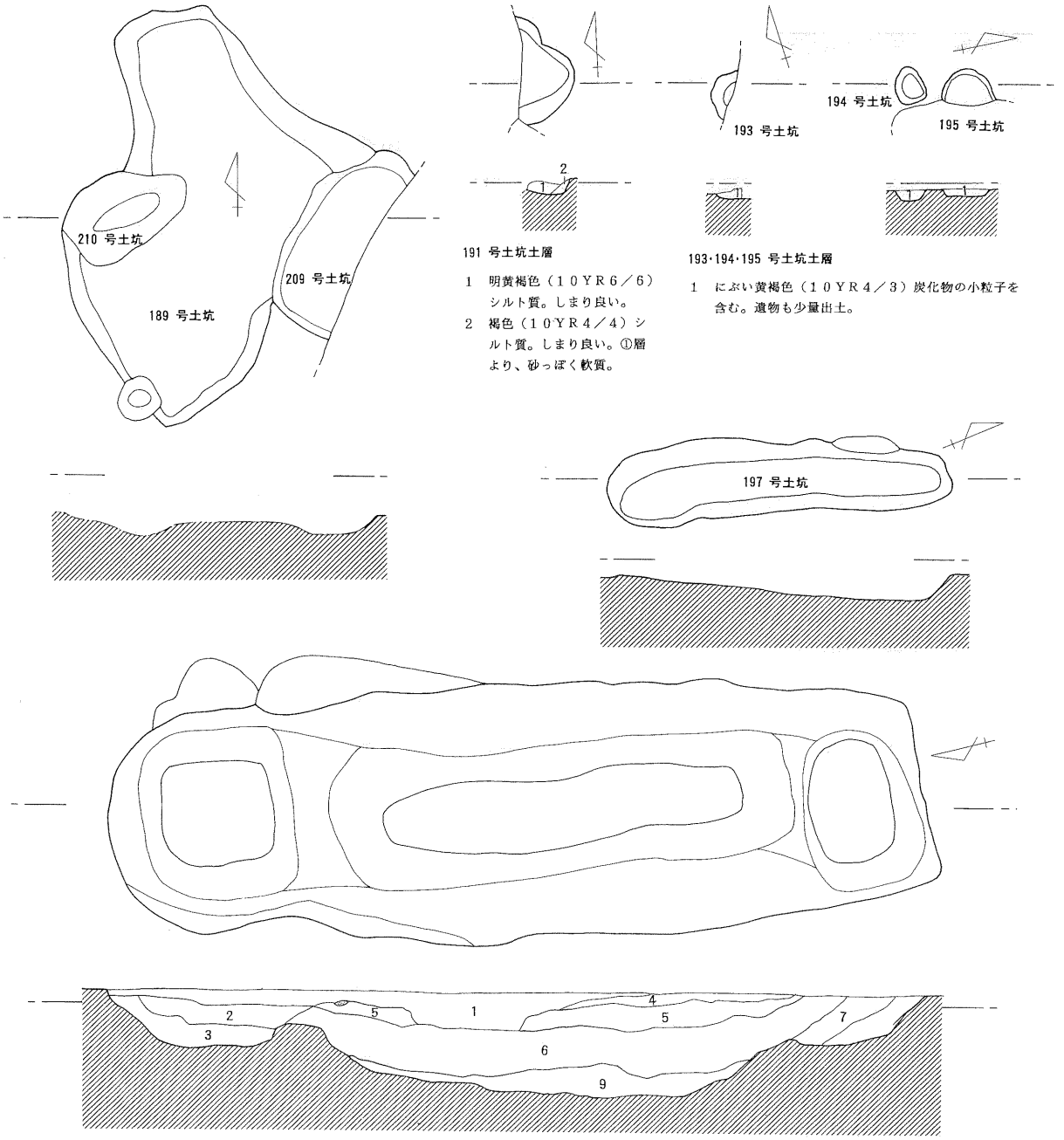


182 号土坑土層

1　灰黄褐色（１０ＹＲ５／２）シルト質。酸化鉄・砂が混ざる。

0　L＝２９．０００m　２m　1：６０

第143図　170～188号土坑



191 号土坑土層

1 明黄褐色（10YR6／6）シルト質。しまり良い。
2 褐色（10YR4／4）シルト質。しまり良い。①層より、砂っぽく軟質。

193・194・195 号土坑土層

1 にぶい黄褐色（10YR4／3）炭化物の小粒子を含む。遺物も少量出土。

192 号土坑土層

1 灰白色（5Y7／1）シルト質。鉄分を少量含む。部分的に黄橙色土を含む。
2 灰色（5Y6／1）粘性が強く、鉄分を多く含む。
3 灰色（5Y6／1）②層よりも粘性が強く、鉄分もより多く含む。
4 褐灰色（10YR6／1）シルト質。鉄分をやや含む。
5 黄灰色（2.5Y6／1）シルト質。鉄分をやや含む。
6 灰色（5Y5／1）粘土質。鉄分を多く含む。
7 にぶい黄橙色（10YR6／4）シルト質。灰色の粘土ブロックを含む。
8 灰色（5Y6／1）シルト質。鉄分を少量含む。
9 灰色（5Y5／1）⑥層よりも粘性が強く、より大きな鉄分のブロックを含む。

196 号土坑土層

1 黄褐色（2.5Y5／4）シルト質。しまりは良い。
2 にぶい黄褐色（10YR4／3）

198 号土坑土層

1 明褐色（7.5YR5／6）
2 褐色（7.5YR4／6）

0 L＝29.000m 2m
1：60

第144図　189～198・209・210号土坑

197号土坑（第144図）

大部分がＡＤ—５グリッドに位置し、一部がＡＣ—５グリッドに及んでいる。

3.10×0.70mの規模をもち、不整の長円形を呈する。

底面は、北端が最も深く25cmを測り、直線的に浅くなり、南端では壁をもたない。

覆土は、灰色粘土層が大部分に堆積している。

遺物は、陶器椀等が出土している。

209号土坑（第144図）

ＡＤ—４グリッドに位置しており、東半部が調査区域外に及んでいる。

規模は不明であるが、一辺は1.83mを測る。

底面は、壁から緩やかなカーブを描いている。

覆土は、灰褐色シルト層である。

遺物は、羽釜等が出土している。

220号土坑（第146図）

ＡＥ—４グリッドに位置しており、42号住居跡カマドによって切断されている。

規模は不明であるが、一辺は6.03mを測る。

底面は、平坦であり、安定している。

覆土は、下層がオリーブ褐色シルト層、中層が黄褐色シルト層、上層が炭化物粒を含む褐色シルト層である。

遺物は、須恵器蓋等が出土している。

224号土坑（第146図）

西半部は、池(調査区域外)によって削除されているものの、大部分がＡＥ—５グリッドに位置し、一部がＡＤ—５グリッドに及んでいる。また、56号住居跡・57号住居跡を削平している。

1.75×1.40mの規模をもち、不整の長方形を呈する。

底面は、起伏があり安定しない。

覆土は、黒褐色シルト層であり、57号住居跡覆土と区別がつかないが、57号住居跡カマド部分を削平しているところから、本土坑が新しいとされる。

遺物は、土師器甕、刀子等が出土している。

225号土坑（第146図）

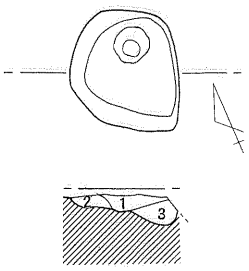
ＡＤ—８グリッドに位置しており、68号住居跡上面を削平している。

2.70×2.65mの規模をもち、不整の円形を呈する。深さは、22cmを測る。

底面は、起伏が少なく、平坦で安定している。

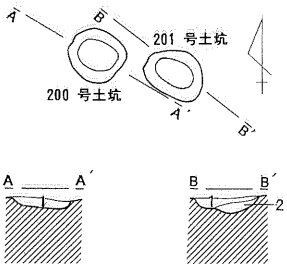
覆土は、下層が酸化鉄粒を含む灰色粘土層であり、上層が暗灰黄褐色シルト層である。

遺物は、土錘等が出土している。



199 号土坑土層

1　にぶい黄褐色（10YR5／4）
　少量の炭化物が混入。
2　明黄褐色（10YR6／8）
3　黄褐色（10YR5／8）
　炭化物・焼土ブロックが少量入る。
　遺物も出土。（東は197 号）

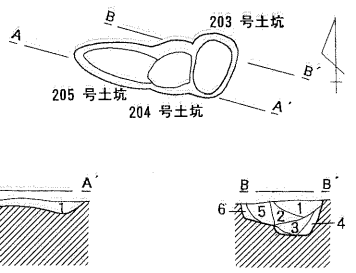


200 号土坑土層

1　明黄褐色（10YR5／6）粘土。

201 号土坑土層

1　明黄褐色（10YR6／8）粘土。灰色が混じる。
2　明黄褐色（10YR5／6）粘土。灰色が混じる。

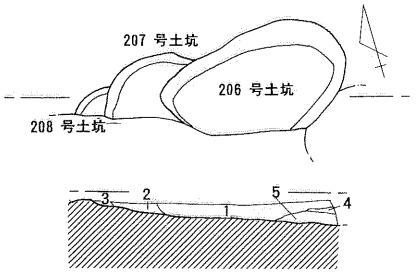


205 号土坑土層

1　明褐色（7.5 YR
　5／6）粘土。
　203・204号
　土坑6層と共通。
　灰が混じる粘土質。

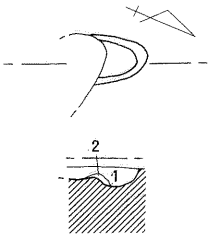
203・204 号土坑土層

1　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘土。
2　黄褐色（10YR5／6）粘土。
3　褐色（10YR4／6）粘土。
4　明褐色（10YR6／8）粘土。
5　黄褐色（10YR5／8）粘土。
6　明褐色（7.5 YR5／6）粘土。



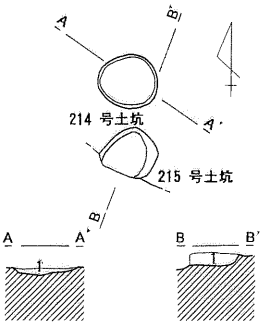
206・207・208 号土坑土層

1　黒褐色（2.5 Y3／1）シルト質。焼土粒子、炭化物粒子を含む。遺物も含む。
2　黄褐色（2.5 Y5／3）シルト質。硬質でしまり良い。
3　褐色（10YR4／4）シルト質。焼土が多く混じっている。
4　褐色（10YR4／4）50号住居の4層と同一。
5　暗オリーブ褐色（2.5 Y3／3）50号住居の7層と同一。
　若干50号住居6層混入が見られる。



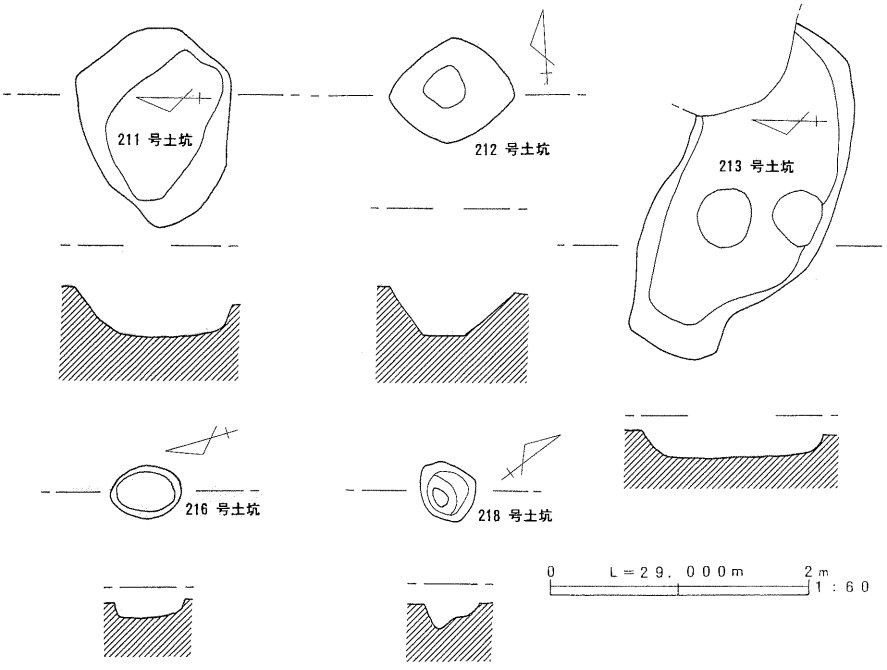
202 号土坑土層

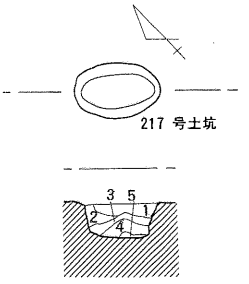
1　黄褐色（10YR5／6）粘土。
　灰色の粘土質粒子が混る。
2　黄褐色（10YR5／8）粘土。
　1層よりもやや明るく、砂気が
　少ない。



214・215 号土坑土層

1　黄褐色（2.5 Y5／4）シルト質。
　やや粘性がある。

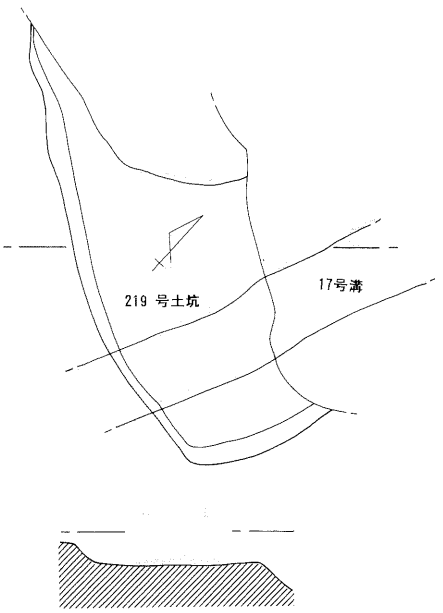


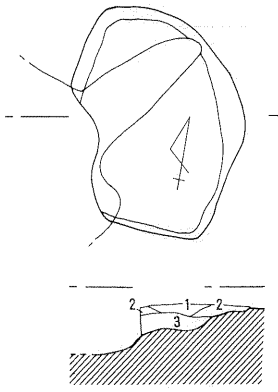


217 号土坑土層

1　黄褐色（2.5 Y5／3）シルト質。
　しまりは良くない。
　黄灰色土のブロックが混る。
2　黒褐色（10YR4／3）シルト質。
　しまりは良く、やや粘性がある。
　黄褐色土が混じる。
3　黒褐色（10YR4／3）シルト質。
　しまりは良く、粘性がある。
　黄褐色土が混じらない。
4　暗オリーブ褐色土（2.5 Y3／3）シル
　ト質。しまりは良くなく、粘性も弱い。
5　黒色（7.5 YR2／1）シルト質。
　しまりは良く、粘性強い。炭化有機物
　のようなものを多く含んでいる。

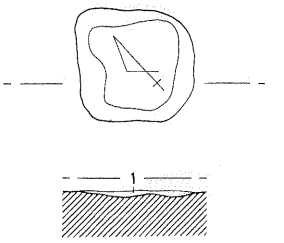
第145図　199～208・211～218号土坑





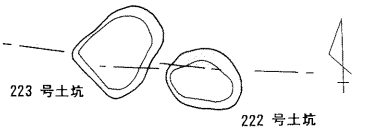
220 号土坑土層

1　褐色（１０ＹＲ４／４）シルト質。しまりは弱く、粘性も乏しい。炭化物の小粒子を含む。
2　黄褐色（2.5 Ｙ４／３）シルト質。砂気があり、しまり粘性とも弱い。
3　オリーブ褐色土（2.5 Ｙ４／３）シルト質。しまり粘性とも弱い。サラサラの土。



221 号土坑土層

1　黒褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質。粘性は弱い。

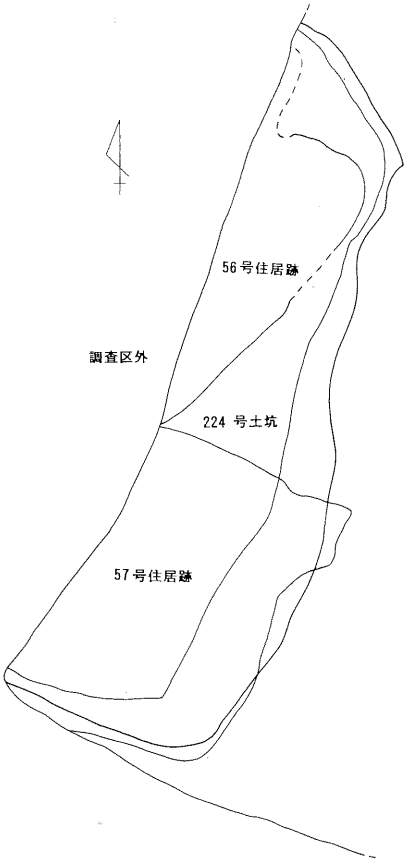


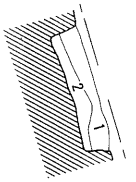
223 号土坑土層

1　黒褐色（7.5 ＹＲ２／２）褐色粘土粒子を含む、粘性の弱いシルト。
2　黒褐色（１０ＹＲ３／２）鉄分を多く含む、砂質の強いシルト。

222 号土坑土層

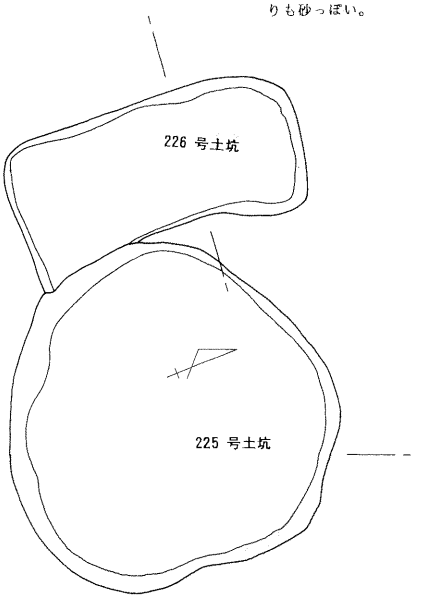
1　灰黄褐色（１０ＹＲ３／２）シルト質。しまりは良い。
2　にぶい黄褐色（１０ＹＲ５／３）シルト質。しまりは良い。
１・２層とも地山よりも砂っぽい。

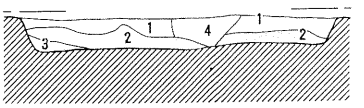




226 号土坑土層

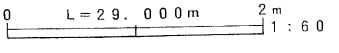
1　灰黄褐色（１０ＹＲ４／２）粘土質。酸化鉄のブロックが少量入る。
2　黄灰色（2.5 Ｙ４／１）粘土質。酸化鉄を多量に含んだ砂が入る。



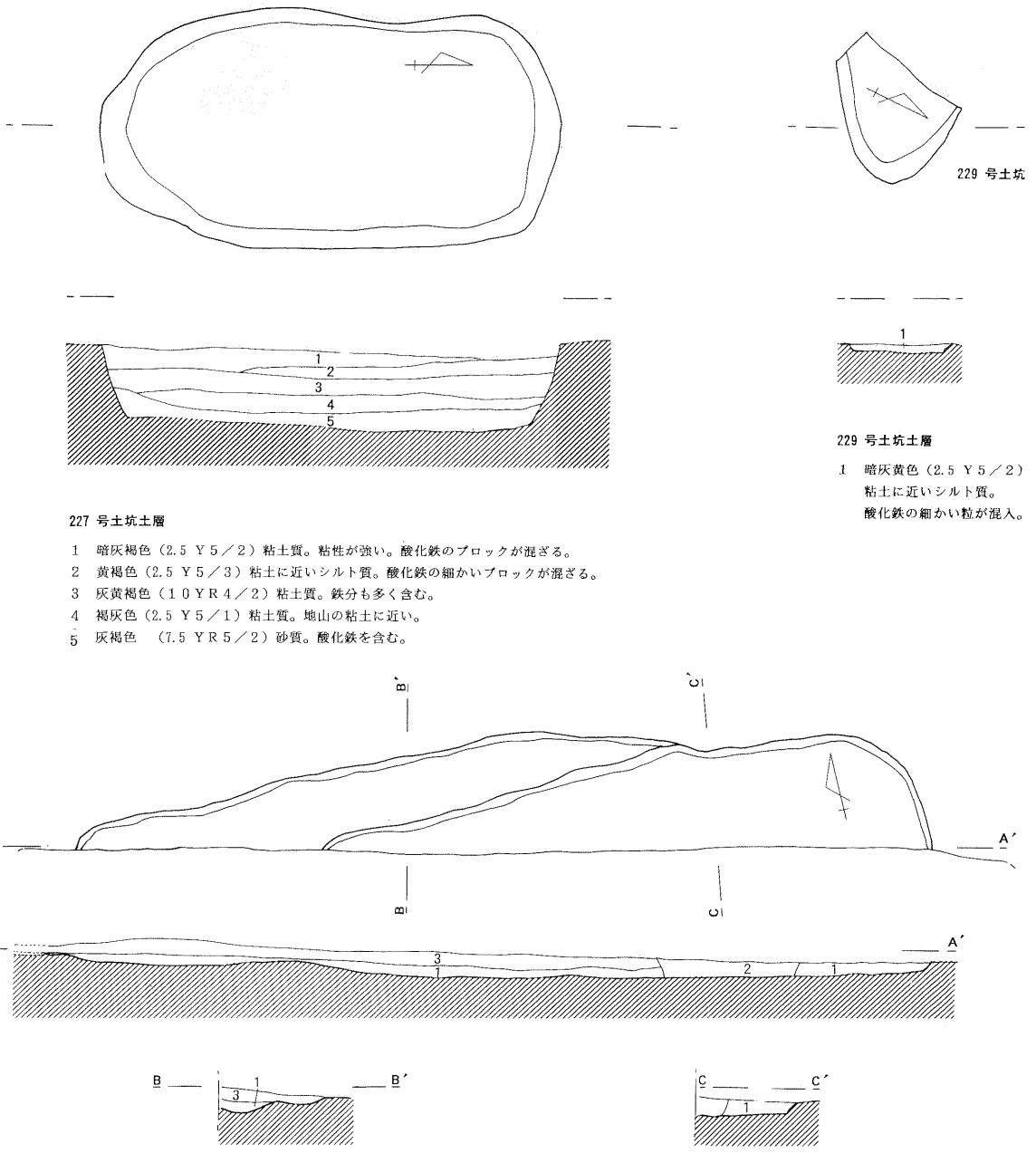


225 号土坑土層

1　暗灰黄褐色（2.5 Ｙ５／２）シルト質。やや粘性がある。酸化鉄を含む。
2　灰色（５Ｙ６／１）粘土質。酸化鉄が混ざる。
3　灰色（５Ｙ５／１）②層に比べて、粘性が強い。酸化鉄を含む。
4　黄灰色（2.5 Ｙ５／１）粘土質。①層の土が混入。



第146図　219～226号土坑



227 号土坑土層

1　暗灰褐色（2.5 Y 5／2）粘土質。粘性が強い。酸化鉄のブロックが混ざる。
2　黄褐色（2.5 Y 5／3）粘土に近いシルト質。酸化鉄の細かいブロックが混ざる。
3　灰黄褐色（10YR 4／2）粘土質。鉄分も多く含む。
4　褐灰色（2.5 Y 5／1）粘土質。地山の粘土に近い。
5　灰褐色　（7.5 YR 5／2）砂質。酸化鉄を含む。

229 号土坑土層

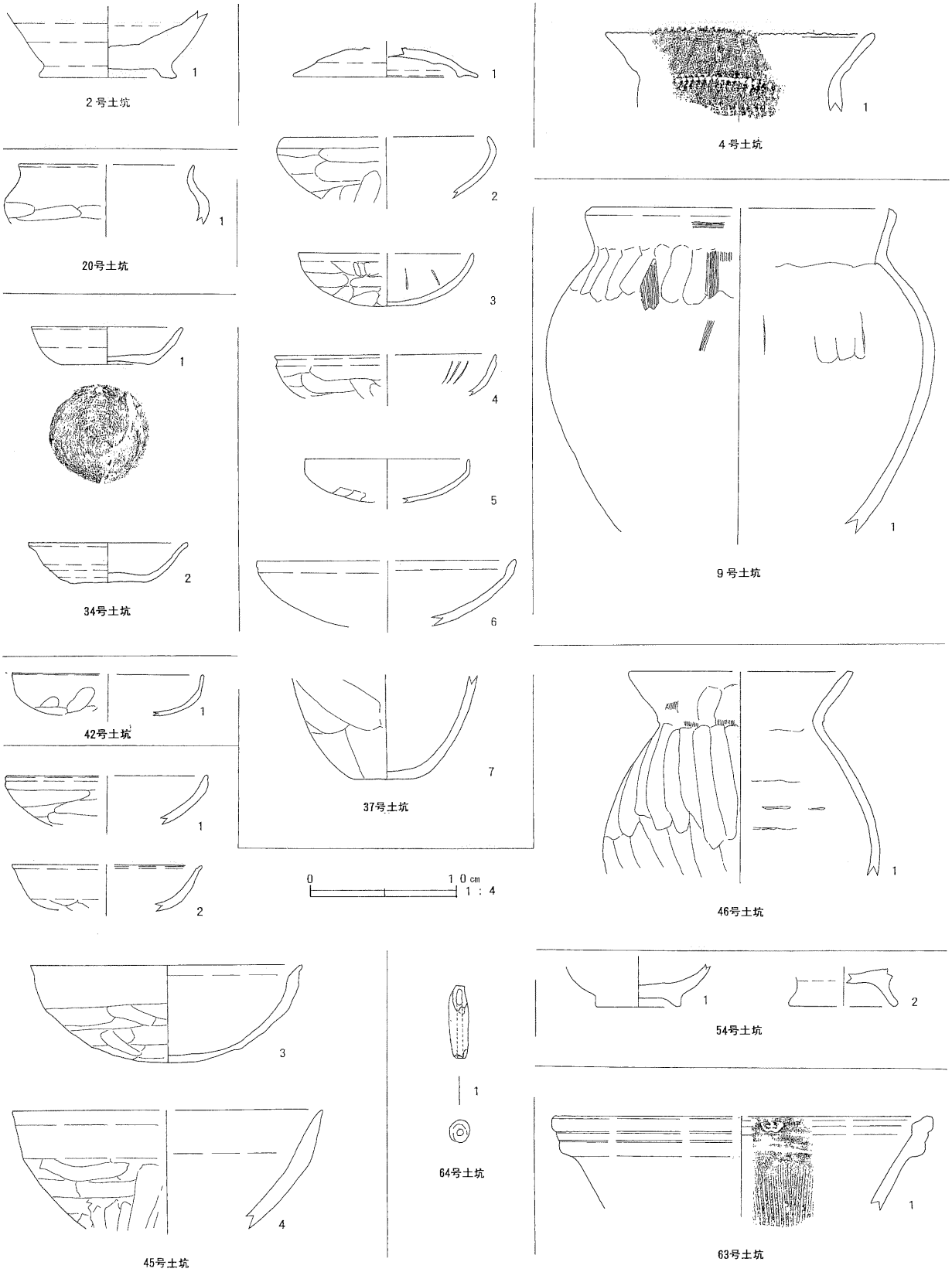
1　暗灰黄色（2.5 Y 5／2）
粘土に近いシルト質。
酸化鉄の細かい粒が混入。

228 号土坑土層

1　黄灰色（2.5 Y 4／1）シルト質。明黄褐色土のブロックが多く入る。
火山灰が混入。
2　褐灰色（10YR 4／1）やや粘性の強いシルト質。明黄褐色粒を少量含む。
3　黄灰色（2.5 Y 5／1）粘土質に近く、明黄褐色土がごく少量混入する。

第147図　227～229号土坑

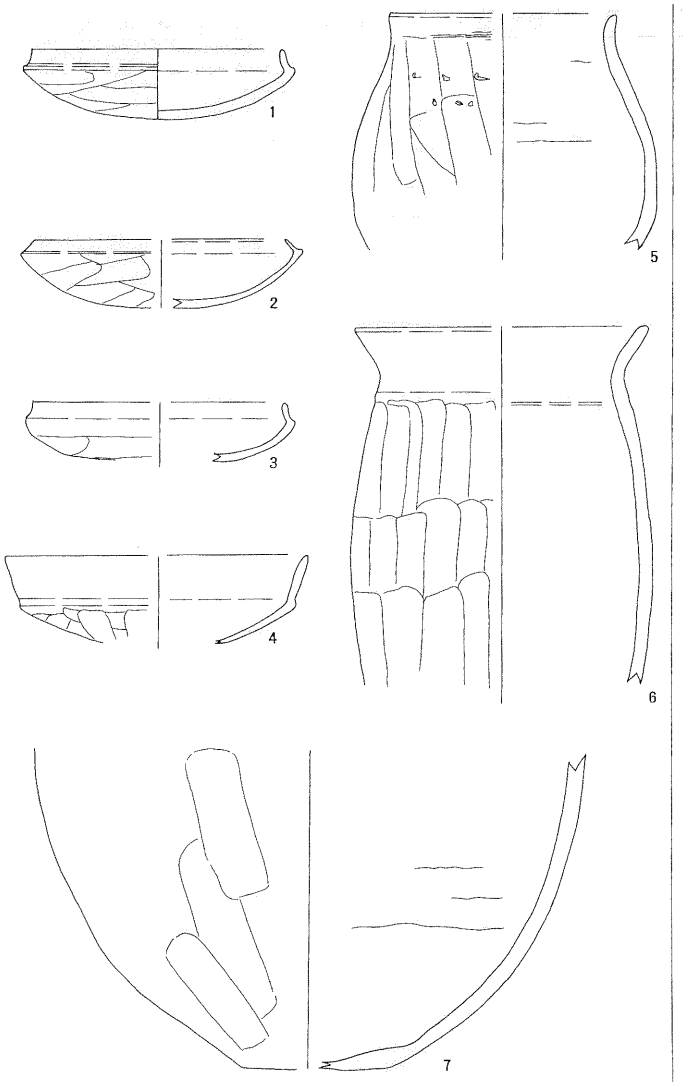
0　L＝29.000m　2m
1：60



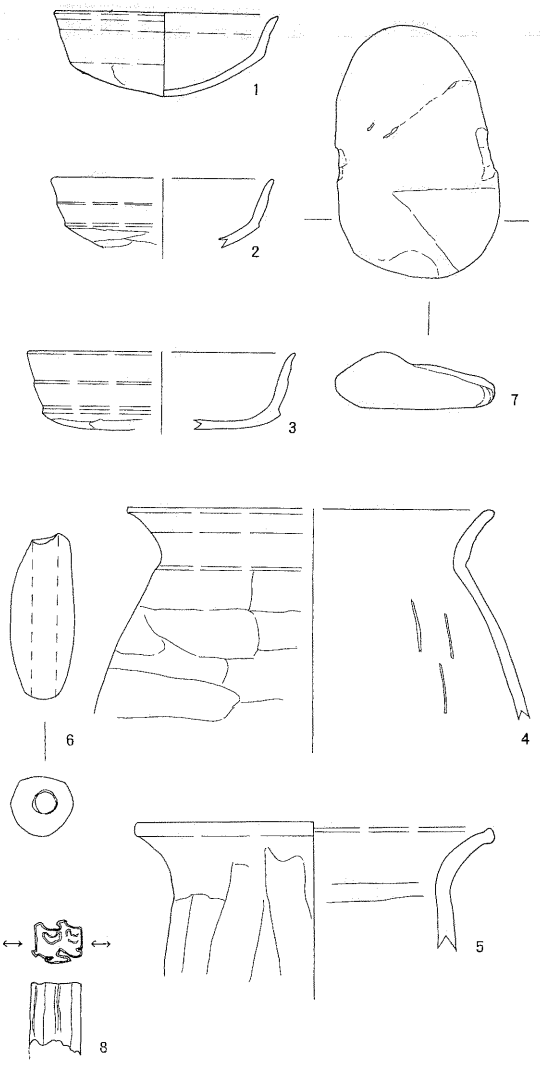
第148図　土坑出土遺物①

第６７表　土坑出土遺物観察表　（第１４８～１５２図）

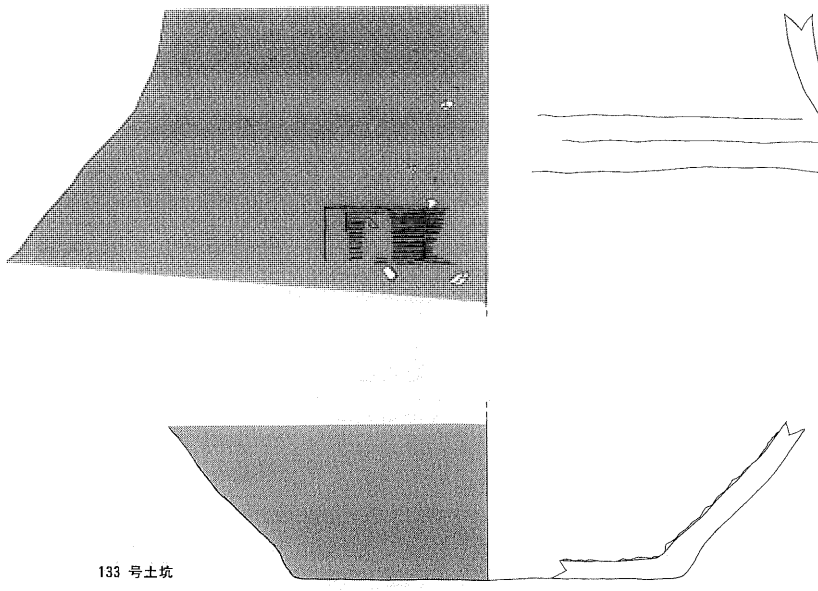
No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
2－1	灰釉壺	口径 器高 底径　９．４	② ①	②	灰白 (2.5Y 7/1)	下位 １／２	底、内面、ロクロ整形。外面胴部下位回転ヘラケズリ。底外面付け高台後ナデ。 内面と高台一部に灰釉。
4－1	土師器深鉢	口径（１８．２） 器高 底径	④② ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	口縁部 １／８	内面ナデ、外面刷毛目整形の後、ナデ。 口唇部刻み目による波状文。 頸部撚糸圧痕による簾状文（２段）。吸炭。
9－1	土師器甕	口径（２０．０） 器高 底径	① ② ③	②	灰褐 (7.5YR4/2)	底部 欠	口縁部横ナデ、一部縦ナデ。 胴部内面ナデ、外面ケズリ後縦のナデ。 炭化物付着。内外面吸炭、煤付着。二次加熱。
20－1	土師器坩	口径（１２．１） 器高 底径	① ③ ②	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	上位 １／５	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面横のケズリ。 内外面一部炭化物付着。
34－1	土師質杯	口径　１０．３ 器高　２．６ 底径　６．４	②⑥ ③ ①	②	浅黄橙 (7.5YR8/4)	完形	ロクロ整形。一部吸炭。 糸切り底、内面に指紋有り。 外面炭化物付着。
34－2	土師質杯	口径　１０．９ 器高　２．７ 底径　５．２	③④ ①⑥ ②	②	橙 (5YR 7/6)	４／５	ロクロ整形。 糸切り底。吸炭、二次加熱。
37－1	須恵器蓋	口径　１２．１ 器高　２．０ 底径	①⑥ ② ③	③	灰 (5Y 6/1)	２／３	体部外面回転ケズリ。中央部摘み接合痕。 吸炭。内面水拭き。 内面一部に炭化物付着。
37－2	土師器杯	口径　１４．０ 器高 底径	①⑥ ④ ③	②	明赤褐 (5YR 5/6)	１／６	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 吸炭、炭化物付着。
37－3	土師器杯	口径（１２．２） 器高　３．６ 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 7/8)	１／４	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、横方向連続のナデ。 外面ケズリ、吸炭、黒斑、炭化物付着。
37－4	土師器杯	口径（１５．０） 器高 底径	④⑥ ① ②	②	橙 (5YR 6/6)	口縁部 １／６	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、放射状暗文。 外面ケズリ、煤付着。内外面炭化物付着。
37－5	土師器杯	口径（１１．４） 器高（　３．０） 底径	② ④	③	明赤褐 (5YR 5/6)	２／３	口縁部ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面一部吸炭。
37－6	土師器杯	口径（１８．０） 器高 底径	④⑥ ② ①	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	口縁部 １／４	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、炭化物付着。 外面ケズリ。
37－7	土師器甕	口径 器高 底径（　４．０）	①④ ② ③	②	橙 (5YR 7/8)	下位 １／２	胴部内面ナデ、炭化物付着、外面ケズリ。 底面内外面ナデ。 二次加熱。
42－1	土師器杯	口径　１３．０ 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 (5YR 6/6)	上位 １／６	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。
45－1	土師器杯	口径（１３．７） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	上位 １／５	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ナデ。 炭化物付着。
45－2	土師器杯	口径（１３．０） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 (5YR 6/8)	１／４	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。
45－3	土師器鉢	口径　１８．６ 器高　６．８ 底径	①④ ② ③	②	橙 (5YR 7/6)	２／３	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、丹彩。外面上半横のケズリ、下半縦のケズリ、丹彩。黒斑、炭化物付着。
45－4	土師器鉢	口径（２１．２） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR7/8)	上半 １／４	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ。外面横のケズリ、吸炭。 炭化物付着。
46－1	土師器甕	口径（１５．３） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	③	にぶい橙 (7.5YR7/4)	上半 １／３	口縁部横ナデ後外面ケズリ。 体部内面ナデ後ヘラによるナデ。外面斜のケズリ、吸炭、煤付着。炭化物付着。二次加熱。
47－1	土師器杯	口径　１３．０ 器高　３．７ 底径	②④ ① ③	②	黒褐 (10YR 3/1)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面剥離、外面ケズリ。 全面煤付着。
47－2	土師器杯	口径（１３．４） 器高（　３．７） 底径	①④ ③ ②	①	にぶい赤褐 (5YR 4/3)	１／２	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ、炭化物付着。 全面煤付着。
47－3	土師器杯	口径（１３．２） 器高 底径	①② ④ ③	②	明赤褐 (2.5YR5/8)	１／４	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。黒斑。 全面煤付着。
47－4	土師器杯	口径（１５．８） 器高 底径	③④ ① ②	③	橙 (7.5YR6/6)	１／４	口縁部横ナデ、一部吸炭。 体部内面磨き様ナデ、一部剥離、外面ケズリ。



47号土坑



135 号土坑

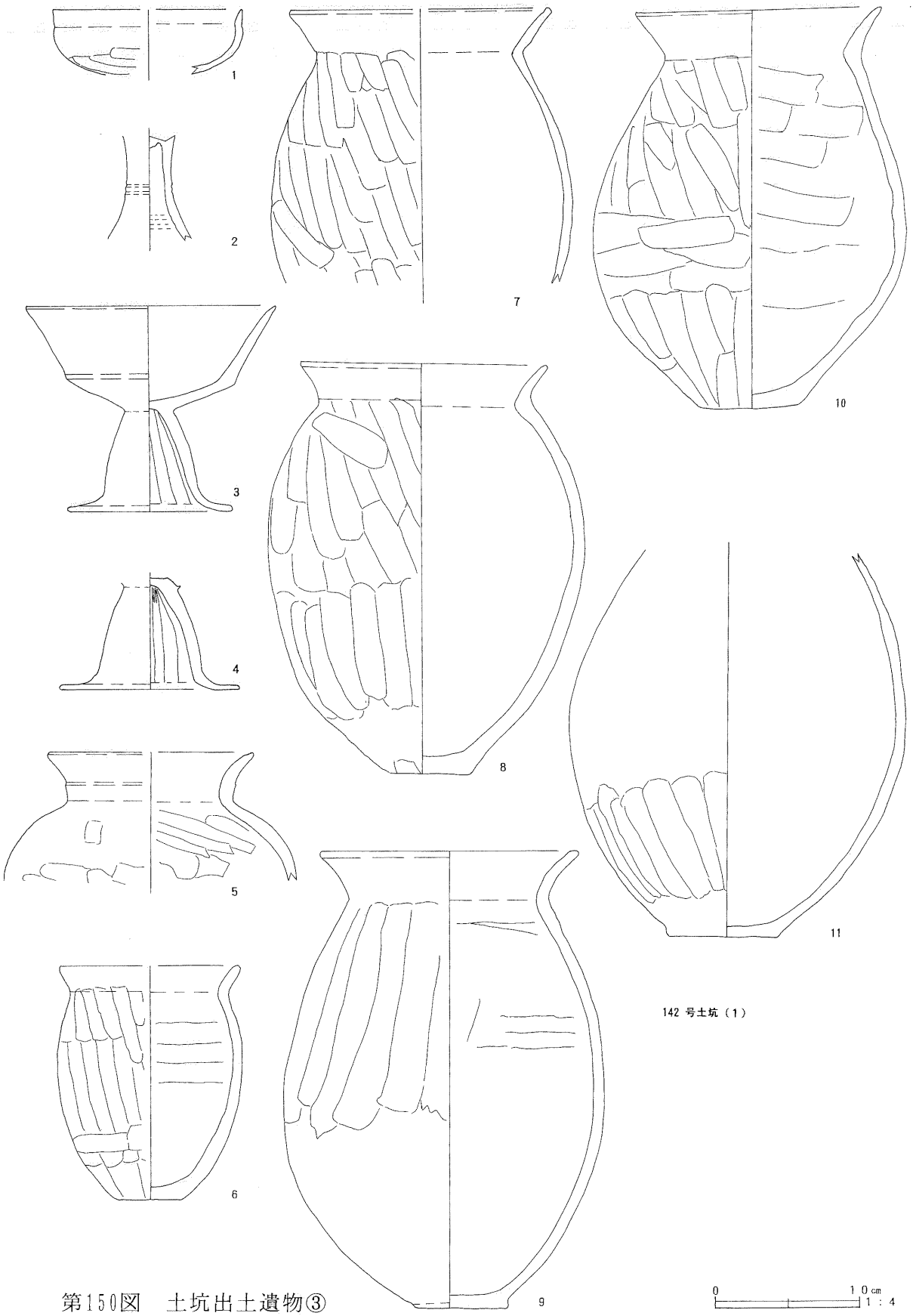


133 号土坑

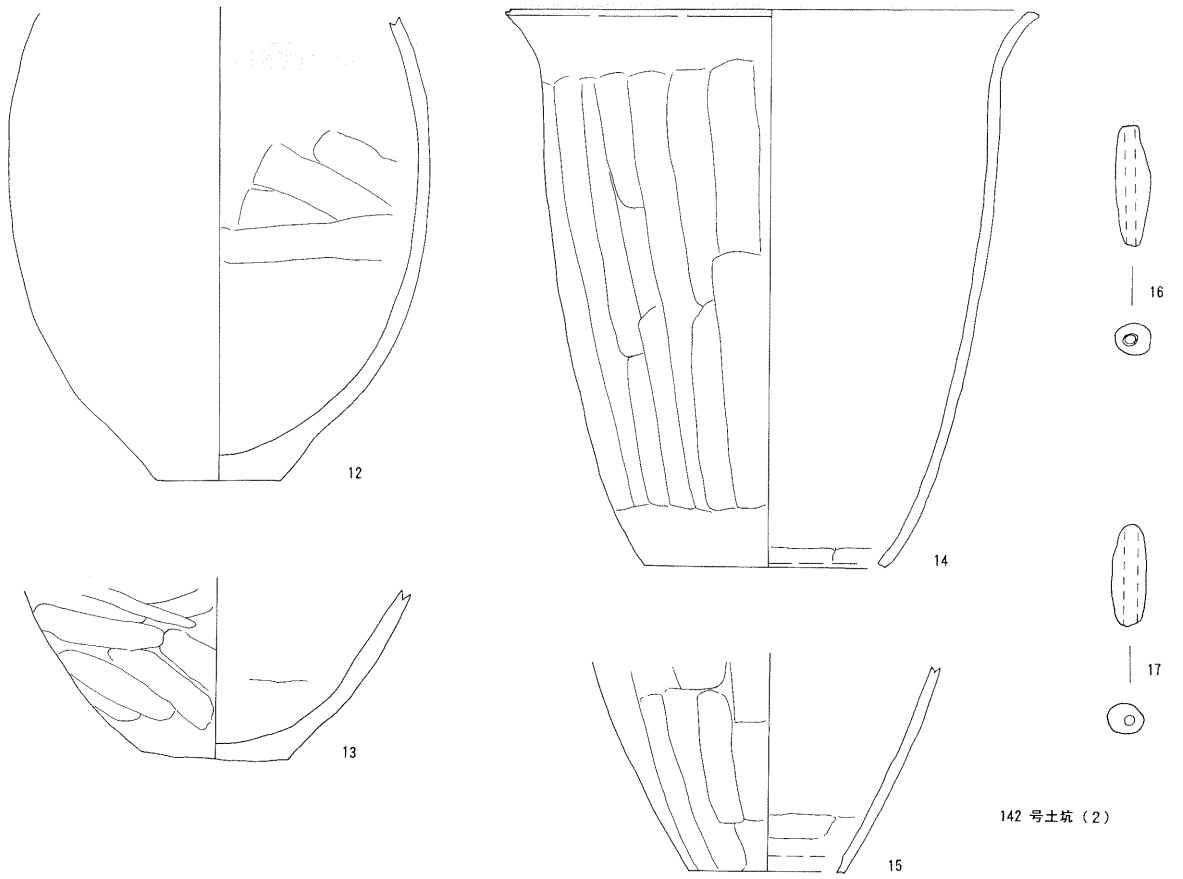
0 10cm
1 : 4

第149図　土坑出土遺物②

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
47－5	土師器甕	口径（12．1） 器高 底径	②④ ③⑥ ①	②	橙 （5YR 6/6）	1／4	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ、外面ケズリ後ナデ、吸炭、内外面に輪積痕を残す。 二次加熱による表面剥離。
47－6	土師器甕	口径（15．3） 器高 底径	① ② ③	②	にぶい赤褐 （7.5YR6/3）	上半 1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ、内外面吸炭。 二次加熱。
47－7	土師器甕	口径 器高 底径（ 7．8）	①④ ③⑥ ②	②	橙 （5YR 6/6）	上半の み	胴部内面ナデ、輪積痕を残す。 外面ケズリ後ナデ、内外面吸炭。 二次加熱。
54－1	土師質高台椀	口径 器高 底径 6．0	④③ ① ②	③	にぶい黄橙 （10YR 6/3）	底部 2／3	底部付け高台。 全面磨滅。二次加熱。
54－2	土師質高台椀	口径 器高 底径（ 7．6）	① ② ④	③	橙 （5YR 6/6）	底部 1／2	底部、糸切り後付け高台。 内面剥離。吸炭。二次加熱。
63－1	擂鉢	口径（25．9） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	①	赤 （10R 5/6）	口縁部 1／8	常滑。
64－1	土錘	最大径 1．4 長さ 5．0 孔径 0．4				完形	
133－1	常滑甕	頸部径（34．0） 器高 底径（20．0）	② ① ⑥	②	暗赤褐 （10YR 3/3）	頸部及び底部	頸部内面ナデ、輪積痕を残す。 外面全面灰釉、押印。 底部内面点状黒壁付着。外面灰釉。
135－1	土師器杯	口径 12．0 器高 4．4 底径	② ① ④	②	にぶい黄橙 （10YR 7/3）	完形	口縁部横ナデ（2段）。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面渦巻状のケズリ。 吸炭、炭化物付着。二次加熱。
135－2	土師器杯	口径 11．6 器高 底径	②④ ① ③	②	明赤褐 （2.5YR5/8）	口縁部 1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、炭化物付着。 外面ケズリ。
135－3	土師器杯	口径 14．0 器高 底径	②④ ① ③	②	橙 （5YR 6/8）	1／3	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 外面全体吸炭、炭化物付着。
135－4	土師器甕	口径 19．4 器高 底径	③⑥ ① ②	②	橙 （7.5YR7/6）	上位の み	口縁部横ナデ（2段）。 胴部内面横のナデ、外面横のケズリ。
135－5	土師器甕	口径 18．6 器高 底径	①⑥ ② ③	②	橙 （5YR 7/6）	上位の み	口縁部横ナデ。口唇部再調整。 胴部内面ナデ、外面縦のケズリ、一部煤付着。 外面全体吸炭、炭化物付着。
135－6	土錘	最大径 3．2 長さ 8．8 孔径 1．1				完形	
135－7	石錘	長さ 13．3 幅 8．5 厚さ 3．0					
135－8	馬歯						
142－1	土師器杯	口径（13．4） 器高 底径	③④ ① ②	②	赤 （10R 4/8）	上位 1／4	口唇部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリの後ナデ。 吸炭、炭化物付着。二次加熱。
142－2	須恵器高杯	口径 器高 底径	①③ ⑤④ ②⑥	③	灰白 （7.5Y 7/1）	脚部の み	内面ナデ、輪積痕を残す。 外面（上部）回転のケズリ、裾部ナデ。 2条の沈線（2段）。
142－3	土師器高杯	口径 17．6 器高 14．3 底径（11．7）	②④ ① ③	②	橙 （2.5YR6/8）	2／3	口縁部横ナデ、炭化物付着。 体部、脚部内外面ナデ。外面吸炭。
142－4	土師器高杯	口径 器高 底径 12．6	① ② ④	①	橙 （5YR 7/6）	脚部の み	内面縦のナデ付け後、横のナデ。外面ナデ。 裾部横ナデ、一部煤付着。
142－5	土師器壷	口径 14．5 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 （2.5YR6/6）	上位 1／2	有段口縁（横ナデによって上段部を作り出す） 上位内面ケズリ様のナデ。外面肩より上位ナデ、下位ケズリ。内外面一部吸炭。
142－6	土師器甕	口径 12．6 器高 16．3 底径 4．5	②⑥ ① ③	③	橙 （2.5YR6/8）	1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面木口状工具によるナデ。 外面斜のケズリ、一部吸炭。二次加熱。
142－7	土師器甕	口径 18．4 器高 底径	② ① ⑥	②	にぶい黄橙 （10YR 7/4）	胴半部 1／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。内面一部と外面に吸炭。

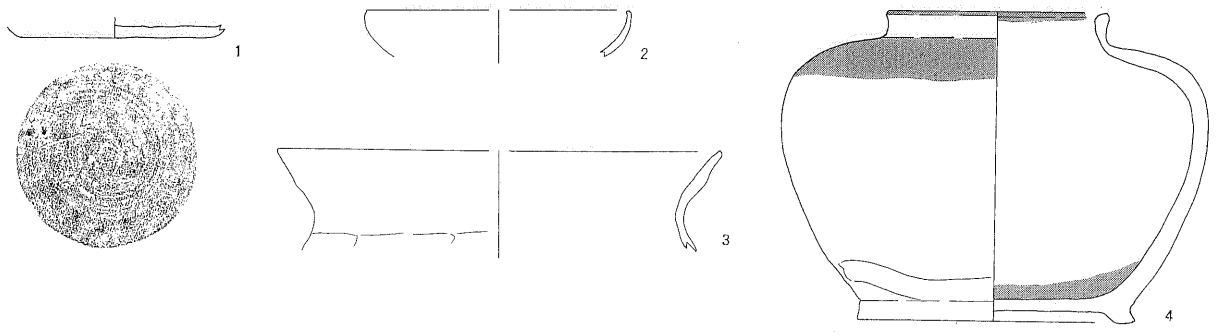


第150図　土坑出土遺物③

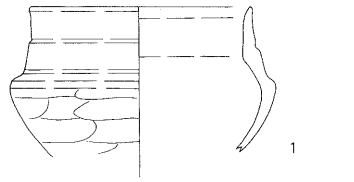


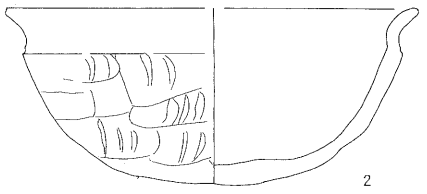
第151図　土坑出土遺物④

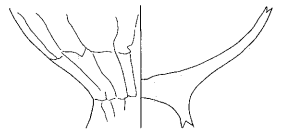
No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
142－8	土師器甕	口径　17．2 器高　28．7 底径　6．8	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR　7/6)	2／3	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、外面斜のケズリ。吸炭、炭化物付着。二次加熱。
142－9	土師器甕	口径（18．1） 器高（33．0） 底径　6．5	①⑥ ② ④	②	明赤褐 (2.5YR5/6)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面ナデ、輪積痕を残す。外面縦のケズリの後ナデ。底面中央に窪みあり。吸炭、炭化物付着。二次加熱。
142－10	土師器甕	口径　17．0 器高　28．3 底径　6．8	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR　6/6)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面木口状工具によるナデ、煤付着。外面斜のケズリ、吸炭、炭化物付着。二次加熱。
142－11	土師器甕	口径 器高 底径　7．5	①④ ②⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	胴部 2／3	胴部内面ナデ。外面上位、中位はケズリの後縦のナデ、下位は斜のケズリの後ナデ、吸炭。炭化物付着。二次加熱。
142－12	土師器甕	口径 器高 底径　6．5	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR　6/6)	胴部 2／3	胴部内面ナデ、中位の削り様ナデ、炭化物付着。外面縦のケズリ後ナデ、煤付着、吸炭。二次加熱。
142－13	土師器甕	口径 器高 底径　8．0	② ③ ①	②	橙 (7.5YR6/6)	底部 1／2	内面ナデ。外面斜のケズリ、吸炭。二次加熱。
142－14	土師器甑	口径　28．0 器高　29．3 底径（13．0）	③ ① ②	①	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。胴部内面横のナデ、孔部指頭によるナデ。外面縦のケズリ、孔底ケズリ。煤、炭化物付着。
142－15	土師器甑	口径 器高 底径　8．4	②⑥ ① ③	③	明赤褐 (2.5YR5/6)	底部 1／2	内面横のナデ、吸炭。外面縦のケズリ。体部内面ナデ、外面ケズリ。孔底ナデ。
142－16	土錘	最大径　1．8 長さ　6．4 孔径　0．5				完形	
142－17	土錘	最大径　1．8 残存長　5．4 孔径　0．6					



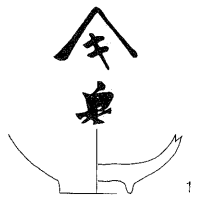
152 号土坑







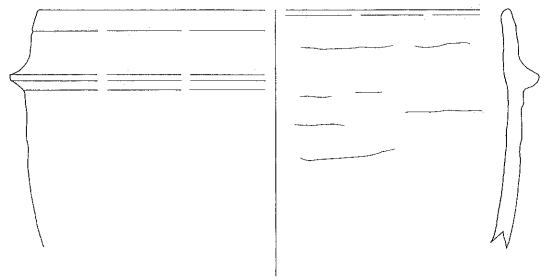
167 号土坑



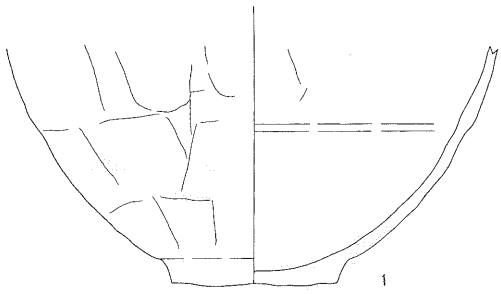
197 号土坑

225 号土坑

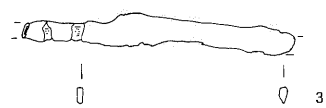
220 号土坑

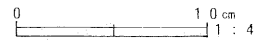


209 号土坑



224 号土坑





第152図　土坑出土遺物⑤

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
152-1	須恵器 杯	口径 器高 底径 10.0	⑤ ⑥	①	灰白 (2.5YR7/1)	底部のみ	ロクロ整形。 底面回転ヘラケズリ。
152-2	土師器 杯	口径（13.8） 器高 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR7/8)	口縁部 1／5	口縁部横ナデ。 体部内面横のナデ、外面横のケズリ。
152-3	土師器 甕	口径（23.2） 器高 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR7/8)	口縁部 1／2	口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横のケズリ。 二次加熱。
152-4	須恵器 短頸壷	口径 11.8 器高 16.4 底径 14.4	② ① ⑥	①	暗青灰 (5PB 3/1)	一部欠	ロクロ整形。 胴部下端横のケズリ。底面高台周囲回転ケズリ。口唇部、肩、内底面、自然釉。
167-1	土師器 杯	口径 11.8 器高 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (2.5YR6/8)	底部欠	口縁部横ナデ（2段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ、吸炭。 二次加熱。
167-2	土師器 鉢	口径（20.6） 器高 9.3 底径	①④ ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	3／4	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面横のケズリ、黒斑、吸炭。 内外面丹彩。
167-3	土師器 鉢	口径（16.8） 器高 底径	③④ ② ①	②	橙 (5YR 6/8)	下半 1／4	口縁部横ナデ（2段）。口唇部再調整。 体部内面ナデ、外面横のケズリ。 二次加熱。
167-4	土師器 台付甕	口径 器高 底径	①④ ② ③	②	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	底部のみ	底部内面ナデ。底面に接合痕。外面斜のケズリ。煤付着。内外面、吸炭、炭化物付着。 二次加熱。
197-1	陶器 椀	口径 器高 底径 3.8				底部のみ	内外面商標染付。 円弧染付の中心点。コンパス穴有り。
209-1	羽釜	口径（25.6） 器高 底径	②④ ①⑥ ③	③	橙 (2.5YR6/6)	上半 1／6	口縁部横ナデ（2段）。 胴部内面ナデ、輪積痕を残す。 外面ナデ、吸炭。
220-1	須恵器 蓋	口径（20.2） 器高 底径	② ①	①	灰白 (10YR 8/1)	口縁部 1／6	ロクロ整形。
224-1	土師器 甕	口径 8.8 器高 底径	①③ ②④ ⑥	②	赤 (10R 4/8)	下半 1／4	胴部内面ナデ、一部吸炭。外面縦のケズリ。 底部内面ナデ、外面一定方向のケズリ。 外面全体吸炭、一部炭化物付着。二次加熱。
224-2	支脚	口径 器高 底径 8.8	① ④ ③	①	明赤褐 (2.5YR5/6)	底部のみ	底部内面ナデ、白色物質付着。 外面ナデ。
224-3	刀子	口径 器高 底径					柄に木質残存。
225-1	土錘	最大径 2.4 長さ 7.2 孔径 0.5				完形	

6　井戸跡（付図４）

本年度調査区域のほぼ中央、４号溝内外に集中して、計４基が確認されている。

１号井戸跡（第153図）

Ｚ－５グリッドに位置している。

径1.00×1.00ｍを測り、全体の平面形は、正円形を呈している。

断面形は、上面から35cmの位置で径55×55cmに狭まり、全体で漏斗状を呈する。なお、調査中、壁の崩落があり、底まで調査を行っていないため（深さ1.02ｍまで調査）、深さは不明である。

覆土は、上層から、次の土層が堆積している。

①黄褐色粘土粒を含む褐灰色シルト層
②黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト層
③純炭化物層
④黄褐色粘土粒を含む褐灰色粘土層
⑤焼土粒を含む黒褐色粘土層
⑥酸化鉄大ブロック及び黄灰色シルト層
⑦多量の酸化鉄ブロックを含む黄灰色シルト層

遺物は、ほとんど出土していない。

２号井戸跡（第153図）

Ｚ－５グリッド、１号井戸跡の1.70ｍ北東に位置している。

径1.05×1.05ｍを測り、全体の平面形は、正円形を呈している。

また上面から40cmの位置で径0.60×0.65ｍに狭まり、断面形は、全体で漏斗状を呈する。深さは1.46ｍを測る。

覆土は、上層から、①黄褐色粘土粒を含む褐灰色シルト層、②黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト層と続き、１号井戸跡覆土の①層②層と同一での状況を呈している。

またこれに続く③層は、黄褐色粘土粒を含む灰褐色粘土層であり、１号井戸跡覆土の④層と同一である。

以下、④鈍い黄褐色粘土層、⑤褐灰色粘土層と堆積している。

遺物は、ほとんど出土していない。

３号井戸跡（第153図）

Ｙ－４グリッドからＹ－５グリッドにかけて、２号井戸跡の北東5.30ｍに位置している。

径2.15×2.15ｍを測り、全体の平面形は、正円形を呈している。

断面形は、上面から52cmの位置で径1.32×1.35ｍに狭まり、全体で漏斗状を呈する。なお、調査中、壁の崩落があり、底まで調査を行っていないため（深さ1.70ｍまで調査）、深さは不明である。

覆土は、上層から、次の土層が堆積している。

①白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）及び黄褐色粘土粒を含む褐灰色シルト層
②白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）及び黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト層
③白色軽石粒（浅間Ｂ軽石粒）及び黄褐色粘土ブ

ロックを含む黒褐色シルト層（②層に比して粘性が強い）
④酸化鉄ブロックを多量に含む褐灰色粘土層
⑤酸化鉄ブロック及び黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘土層
⑥酸化鉄大ブロック及び黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘土層
⑦少量の酸化鉄ブロック及び黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘土層
⑧酸化鉄ブロック及び黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘土層
⑨ごく少量の酸化鉄ブロック及び黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘土層
⑩酸化鉄ブロックを多量に含む灰黄色粘土層（⑨層中の一部に堆積）
遺物は、ほとんど出土していない。

4号井戸跡（第153図）

大部分はY－3グリッドに位置しているが、一部はY－2グリッドからX－3グリッドに及ぶ。3号井戸跡の東17mに位置している。

径2.53×2.42mを測り、全体の平面形は、正円形を呈している。

断面形は、上面から35cmの位置で径0.79×0.91mに狭まり、全体で漏斗状を呈する。なお、調査中、壁の崩落があり、底まで調査を行っていないため（深さ1.22mまで調査）、深さは不明である。

覆土は、上層から、次の土層が堆積している。
①多量の白色軽石粒（浅間B軽石粒）を含む黒色シルト層
②白色軽石粒（浅間B軽石粒）及び黄褐色粘土粒を含む褐灰色粘土層
③酸化鉄ブロックを多量に含む灰黄褐色シルト層
④炭化物を多量に含む黒色粘土層
⑤炭化物を含む黒色褐粘土層
遺物は、ほとんど出土していない。

4基の井戸跡は、形態上あるいは覆土の特徴によって、1号と2号、3号と4号の2グループに分けられる。

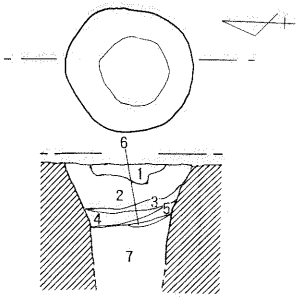
1号と2号については、円筒状の掘り込み部分のみであるが、3号と4号は、上面に八字状の開きをもち、下位に同様の筒状の掘り込みが作られている。また、3号と4号の上層には白色軽石粒（浅間B軽石粒）を含むものの、1号と2号覆土には軽石層が含まれないなど、形態上あるいは覆土にも違いと共通性が見いだされるのである。

ことばを変えれば、上面の拡大部分がみられる井戸跡には、上層に白色軽石粒がみられ、上面の拡大部分がみられない井戸跡には、上層に白色軽石粒がみられないということである。

よって、白色軽石粒は八字状の開き部分に所在する土層であり、1号と2号の井戸跡は、白色軽石粒（浅間B軽石粒）を含む覆土と共に、上面の拡大（八字状）部分が削平されたものであり、本来4基の井戸跡は、形態・覆土共に、3号と4号の井戸跡を基本形とした、同一性をもつものであった可能性は高いといえる。

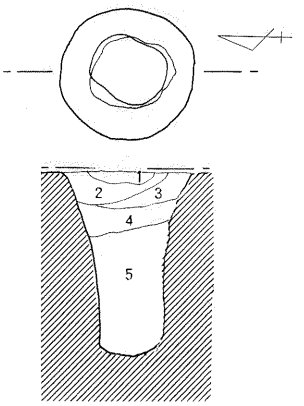
7　性格不明遺構

本年度調査区域には、土坑を中心とした馬蹄形の溝1基、及び土坑内に焼土と炭化物が集中して出土する遺構2基、計3基が確認されている。



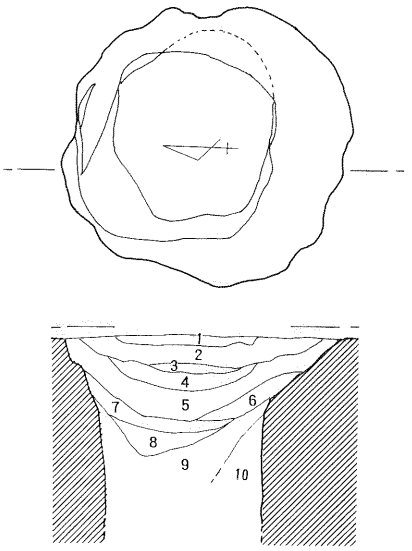
1号井戸跡

1　褐灰色（10YR6／1）シルト質。しまりに欠ける。黄褐色土が少量混入。
2　黒褐色（10YR3／2）やや粘性に富んだシルト質。黄褐色土のブロックが入る。
3　炭化物層。
4　褐灰色（10YR4／1）粘土質。黄褐色土が少量混入。
5　黄灰色(2.5Y6／1）シルト質。焼土が若干混ざる。
6　炭化物・焼土混在層。
7　黄灰色(2.5Y6／1）⑤層よりも粘性が強く、鉄分を多く含む。



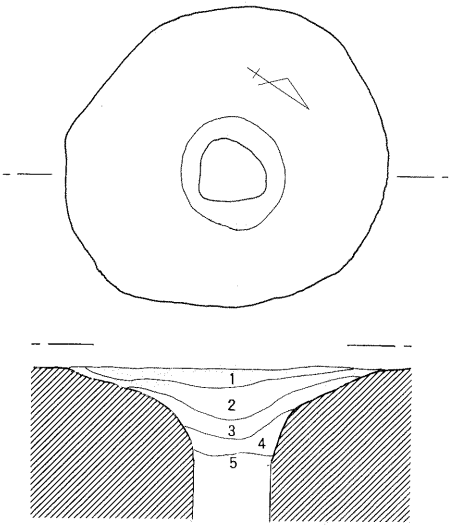
2号井戸跡

1　1号の①と同じ。
2　1号の②と同じ。
3　褐灰色（10YR4／1）粘土質。①の土が混入。
4　にぶい黄褐色（10YR4／3）粘性が非常に強い。粘土のブロックが少量入る。
5　褐灰色（10YR4／1）④よりも更に粘性が強い。



3号井戸跡

1　褐灰色（10YR6／1）シルト質。ややしまりに欠ける。黄褐色土が少量混入。火山灰混入。
2　黒褐色（10YR3／2）粘土に近いシルト質。黄褐色土のブロック・火山灰が混入。
3　黒褐色（10YR3／2）②に近いが、②に比べてやや粘性が強い。
4　褐灰色（10YR4／1）粘土質。鉄分の塊が随所に混入。
5　黒褐色（10YR3／1）粘土質。両端に黄褐色土のブロックが多い。鉄分の塊が混入。
6　黒褐色（10YR3／1）⑤に比べて粘性が強い。かなり大きい鉄分のブロックが入る。
7　黒褐色（7.5YR3／1）⑥とほぼ同じ。鉄分は少い。
8　黒褐色（2.5Y3／1）⑧、⑦に近いが鉄分の含有量が多い。
9　黒褐色（10YR3／2）粘性が非常に強い。鉄分はあまり見られない。
10　灰黄色（2.5Y7／2）鉄分を大量に含んだ粘土。壁土が崩落したものと考えられる。



4号井戸跡

1　黒色（10YR2／1）シルト質。細かい軽石状の火山灰が、多量に混ざる。
2　褐灰色（7.5YR4／1）粘土質。①に含まれている火山灰が、若干混ざる。
3　灰黄褐色。（10YR4／2）粘土に近いシルト質。酸化鉄が混ざる。
4　黒色(2.5Y1／2）粘土質。粘性が強い。有機物の物と思われる炭化物が、多量に混ざる。
5　黒褐色（10YR3／2）粘土質。粘性が強い。炭化物が点々と混ざる。

第153図　1～4号井戸跡

0　L=29.000m　2m
1：60

1号不明遺構（第154図）

大部分がU－5グリッドに位置しており、一部V－5グリッドに及んでいる。

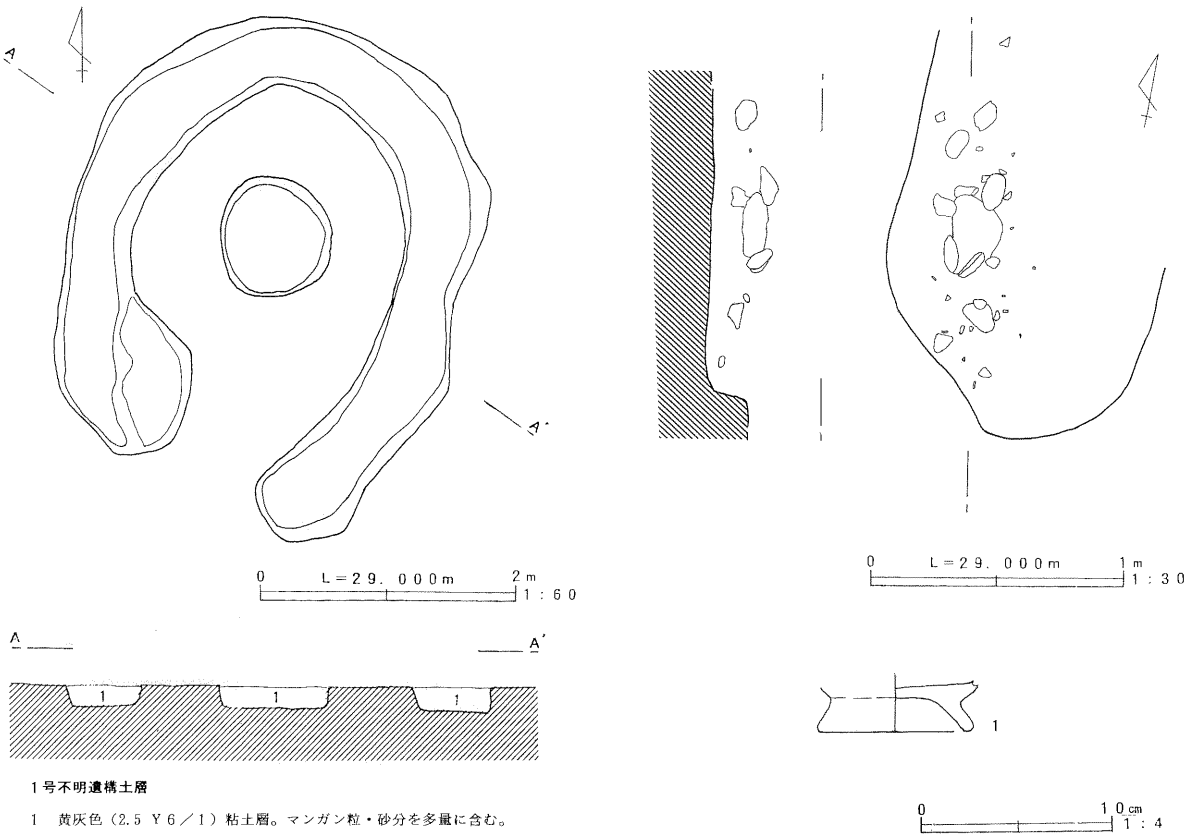
中央の円形土坑を中心として、幅50～60cm、深さ17cm前後の溝が卵形に囲繞している。溝の内径は2.00×3.15mを測り、南端部が幅72cmにわたってとぎれるため、全体の平面形は、馬蹄形をていしているといえる。外形は3.10×4.20mを測る。

溝底面は、ほぼ水平であり、安定している。しかし南西端部は、内側に脹らみをもち、中段を作り出している。脹らみ部（南西端部）の下段覆土中には、32×20×10cm大の河原石を中心にして、拳大の礫が集中して配されており、礫の間からは骨片も出土している。なお礫は、この部分のみの出土である。

遺物は、溝北側中央部から須恵器高台椀が出土している。

中央の円形土坑は、径0.89×1.02m、深さ16cmを測る。底面は、ほぼ水平であり、安定している。土坑から、遺物は出土していない。

覆土は、土坑・溝共共通しており、マンガン粒・砂を多量に含む黄灰色粘土層が堆積している。



第154図　1号不明遺構

第68表　不明遺構出土遺物観察表　（第154図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1 － 1	須恵器 高台椀	口径 器高 底径　8．2	② ① ④	③	灰白 (10YR 8/2)	底部 のみ	ロクロ整形。 糸切り後付け高台。

2号不明遺構（第155図）

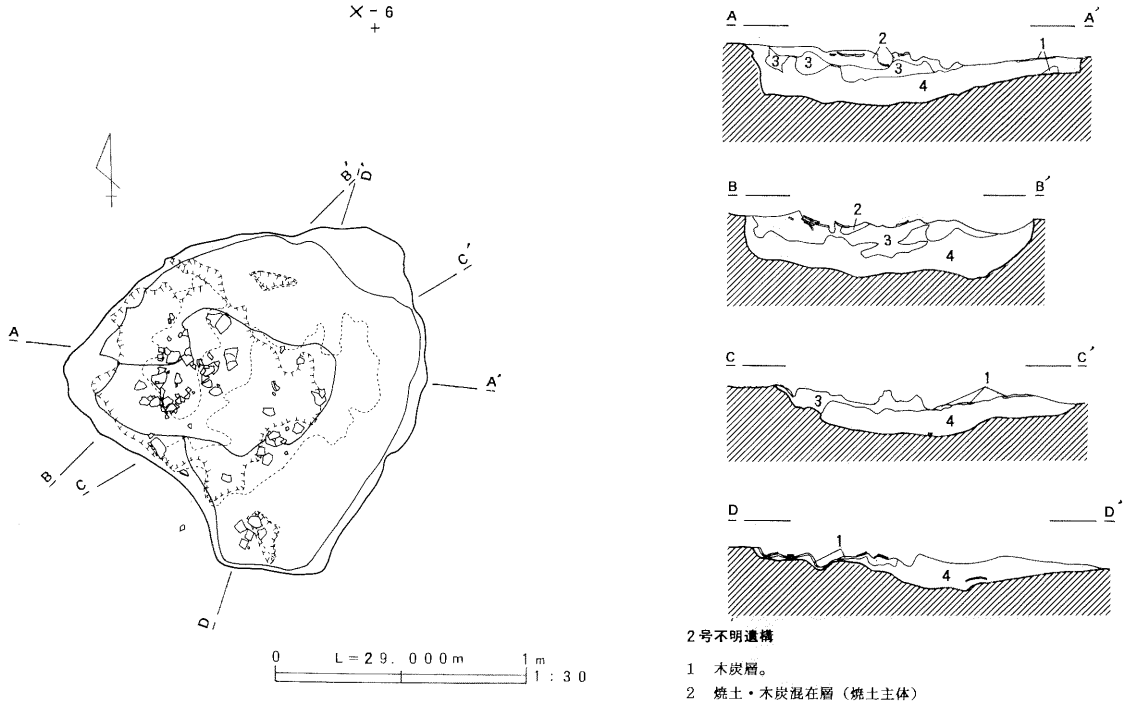
大部分がX－6グリッドに位置しており、一部X－5グリッドに及んでいる。

N－45°－Wを主軸として、全体の平面形は、凸形を呈している。長さ1.22m、幅は、北西側で1.04m、南東側で1.42mを測る。

南東側の幅が広い部分は、底が浅く、中央から斜めに傾斜して壁に達している。覆土は、灰褐色粘土・焼土粒・木炭粒が混在した灰オリーブ褐色粘土が堆積しており、部分的に焼土塊・木炭が含まれている。

北西側の幅が狭い部分の底面は、一段低くなって焼土化（図中T字範囲）し、灰層が分布（図中破線範囲）している。壁は、ほぼ直立している。下位の覆土は、南東側と共通しているが、特にこの部分の上面には焼土塊・木炭が混在し、部分によって焼土塊・木炭のどちらかが主体となって集中出土している。

遺物は、北西側を中心に土師器甕（コの字状口縁）細片が出土している。



2号不明遺構

1　木炭層。
2　焼土・木炭混在層（焼土主体）
　　焼土・木炭混在層（木炭主体）
3　焼土塊。
4　灰オリーブ褐色（5Y6／2）粘土層。灰褐色（7.5Y6／1）粘土混在層。炭化材粒・焼土粒を含む。

第155図　2号不明遺構

3号不明遺構（第156図）

Y－7ポイントを中心にして、X－6・X－7グリッド、Y－6・Y－7グリッドにかけて位置している。

N－75°－Eを主軸として、全体の平面形は、概ね三角形を呈している。長さ2.54m、幅は、西側で1.70mを測る。

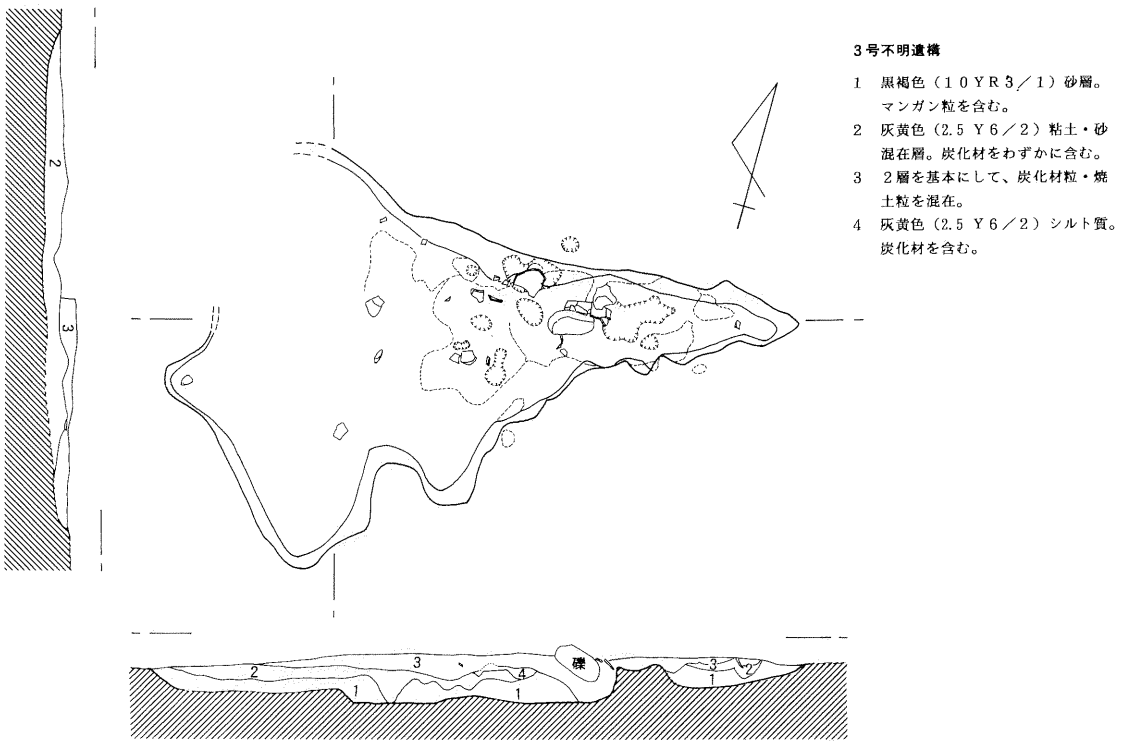
西側断面は、緩い弓状を呈している。中央部は、一段低くなってほぼ水平面を作っており、東側は、再び段をなして浅くなり、緩い弓状を呈しながら、奥壁へ移行する。

中央から東側へ移行する段の前面には、10×20cmの礫が立てられ、この周囲床面が最も強く焼土化している（図中T字範囲）。また灰層は、この礫前面に広く分布（図中破線範囲）している。

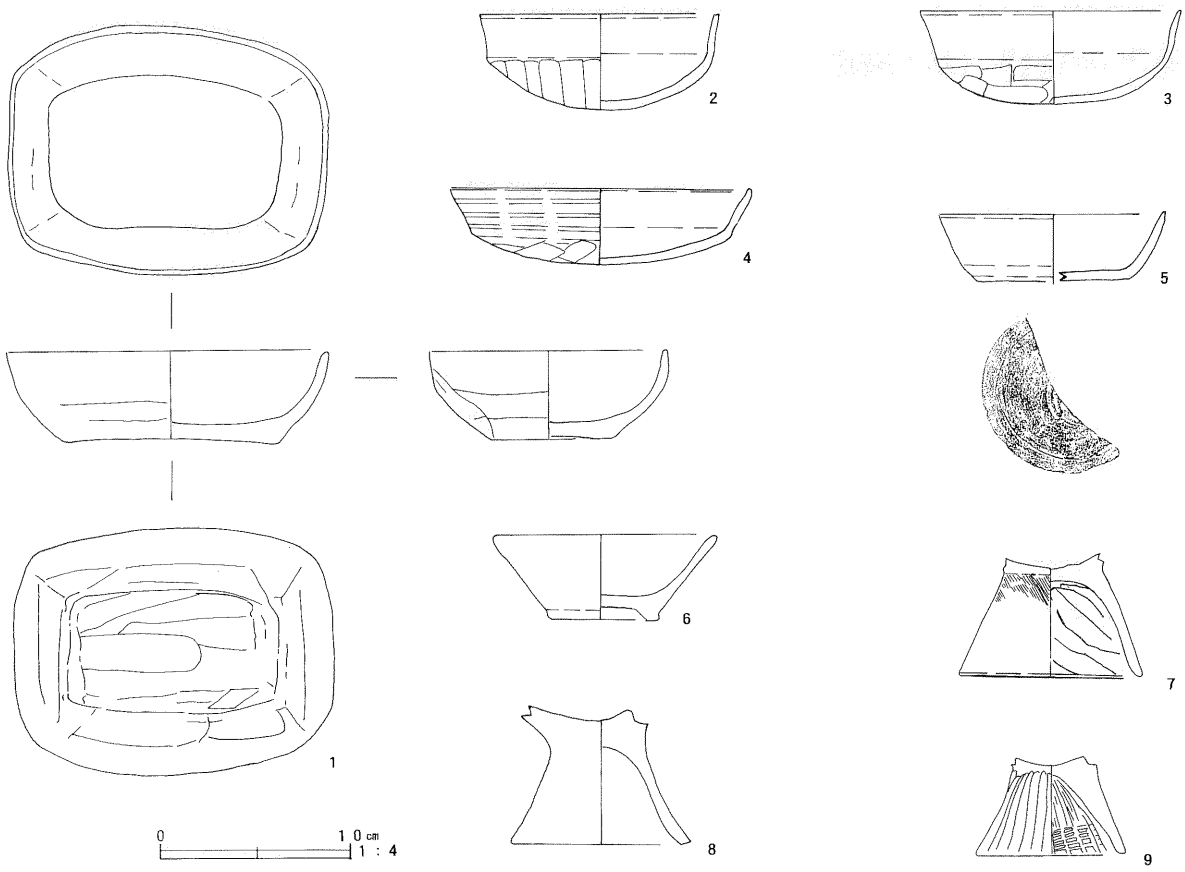
覆土は、下層がマンガン粒を含む黒褐色砂層、中層が砂及び炭化材粒を含む灰黄色粘土層、上層が焼土粒及び炭化材粒を含む灰黄色粘土層というように堆積している。

遺物は、土師器小片のみの出土である。

総体的にみると、住居跡カマドの構造であるといえる。



第156図　3号不明遺構

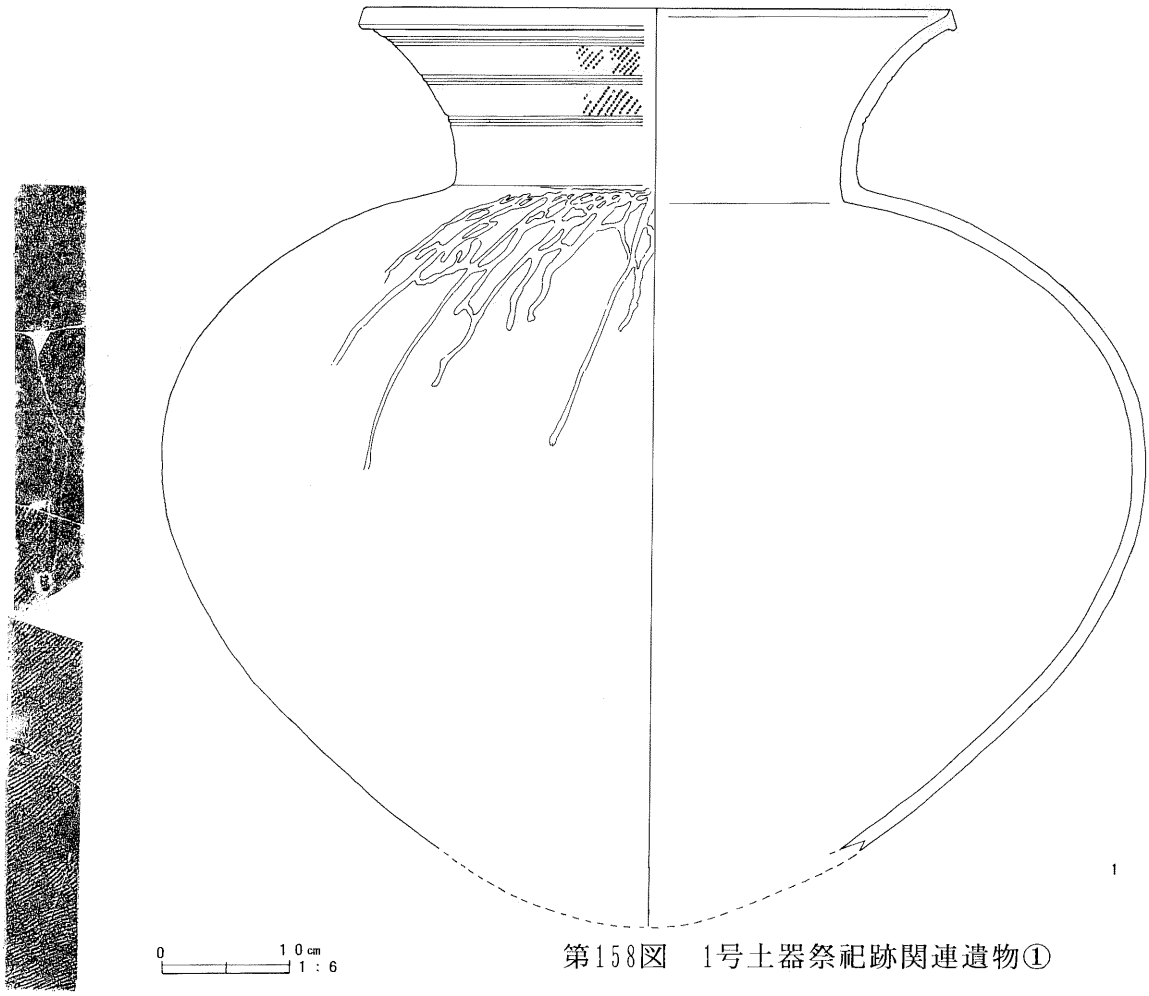


第157図　グリッド・トレンチ・表採遺物

第69表　表採等遺物観察表　（第157図）

No.	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調（土色帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	土師器 方形盤	口径横16.9 縦12.8 器高 4.7 底径横11.0 縦 6.5	③ ① ② ④ ⑥	②	橙 (5YR 6/6)	3／4	朱塗。 口縁部外面横のナデ。 体部内面全面ナデ、外面下半横のケズリ。 底部外面ケズリ。
2	土師器 杯	口径 12.4 器高 5.0 底径	① ② ③	②	橙 (2.5YR6/8)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、一部吸炭。外面一定方向のケズリ。吸炭、黒斑、炭化物付着。
3	土師器 杯	口径 13.7 器高 4.8 底径	②④ ①⑥ ③	②	橙 (5YR 6/6)	一部欠	口縁部横ナデ。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面吸炭。二次加熱。
4	土師器 杯	口径 16.0 器高 4.0 底径	③④ ①⑥ ②	②	橙 (2.5YR6/6)	3／4	口縁部横ナデ（3段）。 体部内面ナデ、外面ケズリ。 内外面炭化物付着。外面黒斑。二次加熱。
5	須恵器 杯	口径（11.9） 器高 3.9 底径（ 8.0）	②⑥ ① ⑤	②	灰 (N 6/)	1／4	ロクロ整形。 底部糸切り後、周辺部回転ケズリ。
6	土師質 杯	口径 12.0 器高 4.6 底径 6.0	②④ ① ③	③	浅黄橙 (10YR 8/3)	完形	ロクロ整形。表面剥離。 糸切り後付け高台。 内面一部吸炭。
7	土師器 台付甕	口径 器高 底径 9.7	②⑥ ① ③	②	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	台部のみ	内面ナデ付け。 外面上位刷毛目、下位ナデ。 底面内側に折り返し。内外面吸炭。煤付着。
8	土師器 台付甕	口径 器高 底径 9.8	①⑥ ② ③	②	橙 (7.5YR6/6)	台部のみ	内面ナデ。 外面表面剥離。 内外面吸炭。二次加熱。

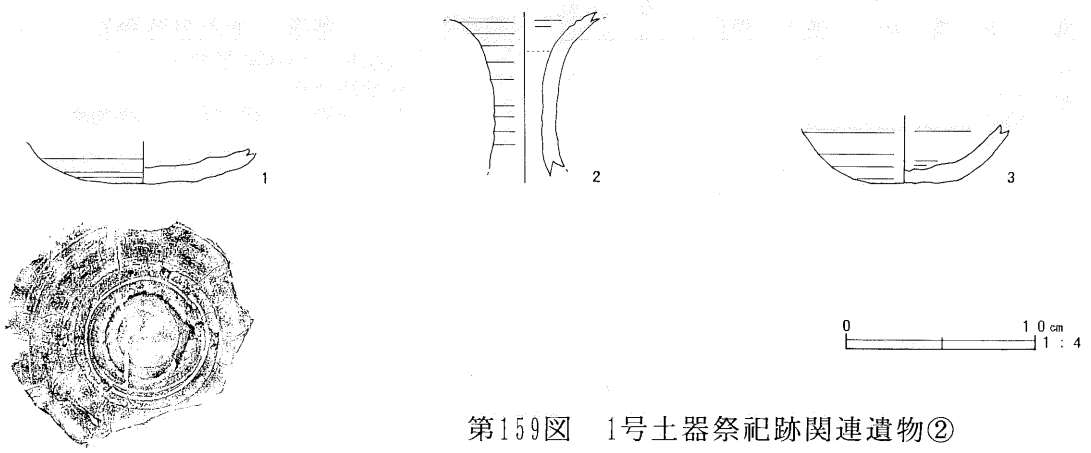
No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土 色 帖）	残存率	調整・手法の特徴等
9	土師器 台付甕	口径 器高 底径　7．8	②⑥ ① ③	②	にぶい橙 （5YR　6/4）	台　部 の　み	内面横への連続放射状ナデ付け。 外面磨き様ナデ。 内外面吸炭、煤付着。二次加熱。



第158図　1号土器祭祀跡関連遺物①

第７０表　１号土器祭祀関連遺物観察表①　（第１５８図）

No.	器　種	法　量（cm）	胎土	焼成	色　調 （土 色 帖）	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 甕	口径　４５．４ 器高　（７３） 胴径　７６．０	② ① ⑥	②	暗青灰 （5PB　4/1）	一部欠	口縁部内面横のナデ。外面２条沈線を３帯、その間に櫛状工具を斜に刺突した凝縄文。胴部内面ナデが加わる。外面平行叩き。肩より上位に飴状の自然釉が付着。底部には壁体及び他の甕片付着



第159図　1号土器祭祀跡関連遺物②

第71表　1号土器祭祀関連遺物観察表②　(第159図)

No.	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調(土色帖)	残存率	調整・手法の特徴等
1	須恵器 高杯	口径 器高 底径　7．5	② ① ⑥	②	灰白 (N　7/)	杯部 のみ	内面回転ナデ、底面指頭による押圧。 外面回転ケズリ。底面脚接合時のナデが加わる。接合痕あり。
2	灰釉 壺	口径 器高 底径　2．2	② ③	①	灰白 (N　7/)	底部 のみ	内面回転ナデ。 外面面取り様ケズリ。 内面灰付着。
3	灰釉 壺	口径 器高 底径	② ①	①	灰白 (2.5Y 7/1)	頸部 のみ	内面上位及び外面回転ナデ。 内面下位ナデ付け。 内面上位及び外面下位釉付着。

V　調査のまとめ

一本木前遺跡は、南から北へ流れる荒川古流路と重複する新奈良川の西岸に沿って位置し、南北700m、東西270m、面積は約189,000m² に及ぶと考えられている。平成10年度調査は、その内10,000m² を対象（A区）としたものである。

調査の結果、土器祭祀跡、溝跡、道路跡、井戸跡、住居跡、土坑、その他の遺構等、多数の遺構が検出された。

土器祭祀跡は、土器集中出土地点が3ヶ所検出されたことから、3基の存在が想定された。しかし、この内2号及び3号の土器包含土層から、浅間B軽石層が検出（付篇を参考）された。これによって、2号及び3号は、浅間B軽石層降下期に、1号土器祭祀跡を構成する土器群の一部と、周辺に所在した土器を収集し、2号及び3号の土器集中出土地点に再度集積されたものであり、土器類の示す時期に集積された状態を示すものではないと判断された。よって、本来の土器祭祀跡は、1号土器祭祀跡1ヶ所のみであったとしたものである。

古墳時代後期に属する1号土器祭祀跡は、人為的に掘削された（荒川古流路から引き込まれたと考えられる）入り江の最奥部に作り出された平坦面に展開されたものである。さらに、入り江南岸に沿って、滑石製模造品（鳥形）や須恵器大甕（第158図）等が配置されており、平坦面を中心としながら、入り江南岸に沿って拡大した土器祭祀場が想定されるものであった。さらに、須恵器大甕が出土した位置から入り江の中央部にかけて、須恵器長頸壺・高杯等（第159図）が出土している。入り江の最上層は、灰褐色シルトと黄褐色粘土であったが、重機による削平時に検出されたものであり、上層（平安時代遺物包含層）と入り江覆土最上層、いずれから出土したものか定かではないため、参考にとどめた。一方、入り江北岸側は、土器類がほとんど出土しておらず、使用された形跡もない。

このように1号土器祭祀跡は、平坦面北東隅の張出部（平坦面の一番入り江側）の敷礫上に置かれた馬の頭骨を扇の要とし、縁辺部に土師器（北側）・須恵器（東側）甕類を、中央部に土師器・須恵器の杯類及び滑石製模造品類を配するという特色を示すものであった。そして本土器祭祀場は、入り江南側にのみ沿って、さらに拡大すると想定されたのである。

溝跡は、46条確認されているが、浅間B軽石層－天仁元年(1108) 降下－の純層（付篇を参考）が堆積する1号溝を中心に存在している。1号溝跡は、上端幅が22m、深さ80cmに及ぶ大溝である。溝は、Ⅰ溝～Ⅴ溝の5本の溝で構成されており、Ⅰ溝～Ⅳ溝が浅間B軽石層降下直前に掘削されたものであり、Ⅴ溝が後に付加されたものであることが確認されている。他の溝は、大部分がこの前後の時期に属している。

この中にあって16号・17号溝は、江戸時代から現代まで改修され使用され続けた側溝であり、旧地籍図と一致する、村境の道路側溝であることが確認されたものである。

道路跡は、凝固した酸化鉄面を底とする長円形土坑によって構成され、関連する3号・4号・24号・25号溝からさらに北方に拡大していたものと考えられた。また、出土遺物がほとんどないものの、4号溝が1号溝と強い関連性をもつことから、道路跡自体も1号溝と時期差を余りもたない時期の所産であると考えられるものである。

井戸跡は、Y～Zの3～5グリッドに集中して、4基確認されている。位置・覆土・構造の共通性から、やはり4号溝・1号溝と強い関連性をもつものと考えられ、ほとんど時期差も認められない。

土坑は、調査区の北・中央・南の３地域に集中して、総数229基が検出されている。すべて単独であり、まとまりは確認できなかった。

その他性格の不明な遺構３基が確認されている。１号不明遺構は、円形土坑を中心にして、溝が南側に陸橋部をもって囲繞している。陸橋部西側の溝端部は内側に拡大され、礫及び骨片が出土している。骨片は火熱をうけているかどうか明瞭ではないが、埋葬の一形態を示すものと考えられる。

２号不明遺構は、焼土・炭等覆土の状況と土師器甕（コの字口縁）の出土状況から、土師器窯の可能性が強い。

３号不明遺構は、平安期普遍的にみられるカマドと共通の構造をもち、あるいは住居跡のカマドである可能性もあるが、西への面的な広がりは確認できなかった。本遺構の西に展開する71号住居跡のカマドである可能性もあるが、それぞれから出土した土器類にみられる時期差等から、その可能性は少ないといわざるを得ない。

住居跡は、土坑同様、調査区の北・中央・南の３地域に集中して検出されている。古墳時代後期・奈良時代～平安時代に及び、総数71基が確認された。住居跡は、総体的に古墳時代後期のものは規模が大きく、また形態も方形を基本としているものが多い。また、カマドを移築している場合が多い。

奈良時代～平安時代に移行すると、規模が小さくなり、また形態も長方形を基本としているものが多くなる。平安時代にはすべて長方形となるが、カマドを長辺側短辺側いずれに設置するか、まとまりは見出せない。平安時代に属する住居跡の内、44号住居跡の覆土からは、浅間Ｂ軽石層（付篇を参考）が検出されている。また、５号住居跡、９号住居跡、11号住居跡、13号住居跡、20号住居跡、27号住居跡、29号住居跡から鉄滓・羽口等が出土しており、小鍛冶の住居であった可能性が高い。これらの住居跡は、いずれも遺跡内の中央部から北部にかけて位置し、小鍛冶を営む住居が集落内で限定されていた可能性も、また高いといえる。

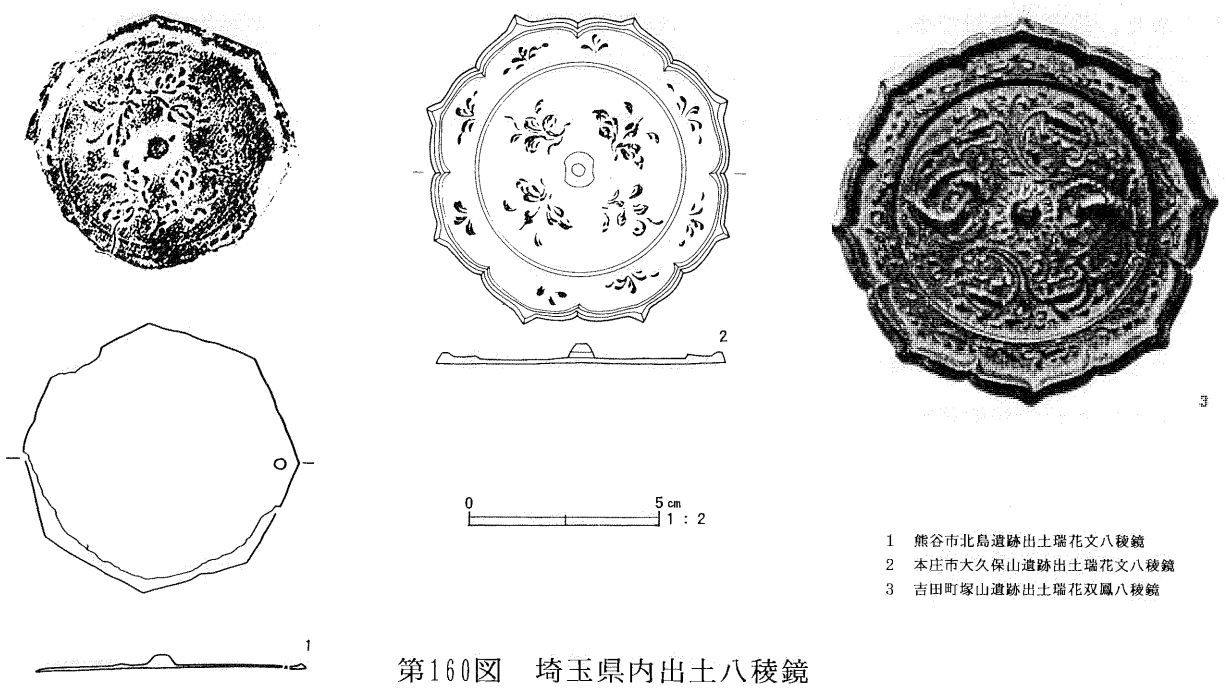
さて、このような住居跡群の調査結果の中から、13号住居跡及び同住居跡出土の八稜鏡について、以下に述べることとする。

埼玉県内では、住居跡からの八稜鏡出土は知られていないが、熊谷市上川上の北島遺跡、本庄市栗崎の大久保山遺跡、吉田町太田部の塚山遺跡の３遺跡から八稜鏡が検出されている。

北島遺跡第１４地点ＳＤ１

遺跡は、東西に広がる荒川の自然堤防上に位置し、第14地点はその最も東南端部に当たる。８世紀から12世紀に及ぶ集落遺跡であり、鏡の出土したＳＤ１は、幅6.50～9.95m、深さ1.40～2.60mを測る、南北に連なる溝である。浅間Ｂ軽石層降下時には、大部分が埋没していた様相がみられ、遺物は、西側から投棄されたものと推定されている。鏡は、西側テラス部分の底面から10cm浮いた位置から、背面を上に向け、溝底面に平行して出土している。

出土した鏡（第160図・１）は、瑞花文八稜鏡である。外区の３分の２が欠損しているが、推定鏡径は7.2cm、重さ18.9ｇを測る。縁は八稜を構成する円弧が不明瞭であり、また非常に薄くて軽い凹面鏡である。むしろ八角鏡としたほうが相応しい。この縁は蒲鉾形の細縁で、厚さ１㎜を測る。界圏は単圏細線で



1　熊谷市北島遺跡出土瑞花文八稜鏡
2　本庄市大久保山遺跡出土瑞花文八稜鏡
3　吉田町塚山遺跡出土瑞花双鳳八稜鏡

第160図　埼玉県内出土八稜鏡

あり、鈕は截頭円錐形であり、素鈕である。内区には一対の瑞花が配され、外区には飛雲文が配されている。

本例は、集落内において行われた水辺祭祀の中で、八稜鏡がどのように使用されたかを明示するものである。

大久保山遺跡ⅢＡ地区１号墓壙

大久保山遺跡ⅢＡ地区は、浅見山丘陵を構成する大久保山の東側南斜面に位置し、平安時代から近世に及ぶ大規模遺跡である。鏡の出土した１号墓壙は、谷津低地部に位置し、土坑内部に礫を敷き、その上に木棺を乗せ、さらに礫で覆うという形態を呈している。鏡は、被葬者の胸に置かれた状態で出土している。さらに被葬者の頭の先からは、短冊状の鉄製品も出土している。また棺外（被葬者の足先にあたる）からは、銅椀・土師質高台杯も出土している。

出土した鏡（第160図・２）は、瑞花文八稜鏡である。鏡径8.6cm、重さ50.75ｇを測る。縁は蒲鉾形をなし、厚さ2.6mmを測る。界圏は段圏である。鈕は截頭円錐形であり、素鈕である。内区には無文座鈕を中心に４本の瑞花が対称の位置に配されている。また、円形の界圏を挟んで外区には均整型の唐草文が配されている。しかし、１単位７点で形成された部分は５ヶ所、点数が３点で表現された部分が３ヶ所となっている。

本例は、木棺墓に埋納された副葬品の一として、八稜鏡の在り方を示す好例といえる。

塚山山岳信仰遺跡

遺跡は、標高870ｍの塚山山腹にある、大塚神社（石組の上に建立）を中心にした山岳信仰遺跡である。鏡は、大塚神社修復時に、基礎となっていた石組の下から銅製の錫杖と共に出土したものである。

出土した鏡（第160図・３）は、瑞花双鳳八稜鏡である。鏡径10.2cmを測り、蒲鉾縁を成す。界圏は段

圏であり、截頭円錐鈕である。内区には、花芯座紐を中心に、２羽の鳳凰と瑞花が対称の位置に配されている。また、円形の界圏を挟んで外区には草花文が配されている。

本例は、神社を中心とした山岳信仰に伴って、錫杖と共に八稜鏡が埋納されていたものであり、東日本における山岳信仰の一面を物語る、貴重な資料となっている。

なお、出土鏡以外では、鷲宮町の鷲宮神社に素文の八稜鏡が２面伝えられている。

このように、埼玉県内で検出されている八稜鏡は、溝中・墓壙・山岳信仰遺構からの出土であり、それぞれ集落内水辺の祭祀遺物、木棺墓に伴う副葬品、山岳信仰に伴う祭祀遺物という性格を有していた。住居跡から検出された例は、今まで見られなかったのである。

しかしながら、利根川を超えて群馬県内に入ると、様相は大きく変わり、住居跡からの検出数が増大している。高崎市正観寺遺跡、同天田・川押遺跡、同下大類遺跡、群馬町鳥羽遺跡、渋川市糀屋遺跡、富岡市本宿遺跡、同下高瀬上之原遺跡で八稜鏡が出土しているのである。さらに、山梨県、長野県、千葉県でも、住居あとからの八稜鏡（千葉県例は八花鏡）出土例が知られている。これらを加えると、関東甲信地方で13遺跡14例となる。以下に、その概要を記すこととする（第70表・その１、その２）。

１　一本木前遺跡１３号住居跡

13号住居跡床面から、鏡が出土している（第24図・口絵）。

本鏡は、直径9.0cm、縁厚0.26cm、鈕厚0.32cm、重量48ｇを測る銅鏡であり、一般に瑞花鴛鴦八稜鏡とよばれるものである。

外縁は八稜形を呈するが、八稜を構成する円弧が、明瞭な部分とそうでない部分がみられる。断面は三角縁である。界圏は円形であり、内区と段差をもつ。鈕座は花形であり、楕円形を呈する。四方に四葉が配されている。鈕は、鈕座と同様楕円形を呈している。孔が上位に穿たれているため、頂部はほとんど欠け、半球形の突起を２個並べたような形となっている。鏡面は、平面である。

鏡背文様は、外区に均整型の唐草文が各稜を中心にして配されている。しかし、１単位５点で形成された部分は、４ヶ所、点数が５点未満が３ヶ所、文様が欠けている部分が１ヶ所というように、省略化されている。内区には、鴛鴦と瑞花がそれぞれ２ヶ所ずつ対称の位置に配されている。鴛鴦は、鈕をはさんで外向きであり、顔は右が上向き、左が下向きに配されている。瑞花は、巻き蔓の表現が上下左右にみられ、一部鴛鴦の頭上にまで達している。

文様は全体に明瞭であり、鴛鴦の羽・足など細部も良く表現されている。ただし、外区の唐草文は、不明瞭な部分があることは、先に述べたとおりである。

また、本鏡の背面には、繊維（麻か？）を編み込んだ布痕が付着しており、布にくるまれていた様相を呈している。さらに、本鏡の下面からは、漆塗りの木片（付篇を参考）が本鏡と密着して出土しており、漆塗り木箱におさめられていた可能性を高めている。

本鏡が出土した13号住居跡は、本文中にも述べたとおり、カマド脇にピットを有する他、同時期の住居跡と大差なく、特別の格差は見出せない。しかし、中央部から北部地域に位置する他の住居跡同様、大量のスラッグ・炭化物及び砥石等が出土していることから、小鍛冶の住居跡であったと考えられる。

共伴遺物には、羽釜、土師質高台椀、滑石製臼玉等がある。このうち、高台椀（カマド及びカマド脇ピット内出土）の高台部が、低いままのものから、高さを増すものが混在してくるようになる。このこと等から、本住居跡の時期は、西暦1000年前後を示すものと考えられる。

遺跡の所在する『別府』は、武蔵国の別府の所在が推定される地である。また東600mには、式内社・奈良神社があり、傍らに、南北する東山道武蔵路が存在すると考えられている。さらに、本遺跡の北方には、男体山がその雄姿を見せており、僅かに目を北西に転ずれば、そこには赤城山が聳えたつ。

13号住居跡から瑞花鴛鴦八稜鏡を出土した一本木前遺跡は、このような地に位置しているのである。

2　高崎市正観寺遺跡Ｋ区72号住居跡

遺跡は、井野川に沿った台地上に展開される複合遺跡である。鏡は、72号住居跡の床面直上から出土している。出土した鏡は、八稜鏡の破片で、全体の1/3程が残存しており、推定径11.2cmを測る。文様は、草花文である。銅製帯金具、鉄鏃、鉄製鎌等が共伴しており、本住居跡の時期は、11世紀後半頃と考えられている。

3　高崎市天田・川押遺跡52号住居跡

遺跡は、井野川と染谷川の合流地点・台地上に展開されている。鏡は、52号住居跡の床面に密着して出土している。出土した鏡は、瑞花と双鳳が配された八稜鏡で、径10.5cmを測る。土師質高台杯・皿、羽釜等が共伴している。本住居跡の時期は、伴出土器から11世紀前半頃と考えられている。

4　高崎市下大類遺跡

遺跡は、井野川右岸の台地上に展開されている。住居跡から出土した鏡は、歪みが激しいものの、瑞花と双鳥を配した八稜鏡である。共伴土器等詳細は不明であるが、本住居跡の時期は、11世紀頃と考えられている。

5　群馬町鳥羽遺跡Ｇ38号住居跡

遺跡は、染谷川川右岸の台地上に展開されており、上野国国府・国分寺・国分尼寺に近在している。鏡は、G38号住居跡の床面直上から出土している八稜鏡であるが、文様は不詳であり、小片のため計測も不能である。須恵器杯・高台杯・高台椀等が共伴している。本住居跡の時期は、伴出土器から10世紀後半頃と考えられている。

6　同遺跡Ｎ１号住居跡

同遺跡では、Ｎ１号住居跡の壁立上がり肩面からも、鏡が出土している。草花文様をもつ八稜鏡であるが、摩耗が激しい。径7.7cm、重さ35.5ｇを測る。黒色土器椀、灰釉皿、砥石等か共伴している。本住居跡の時期は、伴出土器から11世紀頃と考えられている。

7　渋川市糀屋遺跡２号住居跡

遺跡は、榛名山系丘陵東端の南緩傾斜面に展開されている。鏡は、住居跡の北半中央付近から出土して

いる。出土した鏡は、摩耗と歪みが激しく、全体の1/4が残存するのみであるが、瑞花と双鳳を配した八稜鏡であり、推定径10cmを測る。羽釜等が共伴しており、本住居跡の時期は、伴出土器から11世紀頃と考えられている。

8　富岡市本宿遺跡ＭＴ127号住居跡

遺跡は、鏑川流域の河岸段丘に展開され、上野国一宮の貫前神社が近在している。鏡は、127号住居跡の覆土中（床上20cm）から出土している。出土した鏡は、瑞花双鳥文と思われる八稜鏡で、推定径8.8cmを測る。土師器杯・皿・甕等が共伴しており、本住居跡の時期は、11世紀前半と考えられている。

9　富岡市下高瀬上之原遺跡13号住居跡

遺跡は、鏑川流域の河岸段丘面・高瀬丘陵上に展開されており、上野国一宮の貫前神社２kmの地点である。鏡は、13号住居跡の北壁近くの、床上20cmから、出土している。出土した鏡は、文様は不明瞭で外区の3/5を欠くものの、瑞花双鳥文系の八稜鏡であると思われ、推定径7.6cmを測る。鉄製鈹具、鉄製刀子、銅鈴の他、土師器杯・高杯・蓋・椀・甕、須恵器杯・蓋等が共伴している。鏡をはじめ金属製品は、土器類とは出土状態が異なり、土器から時期を経た10世紀後半頃の所産と考えられている。

10　山梨県御坂町二ノ宮遺跡83号住居跡

遺跡は、金川扇状地の先端部に位置する大集落である。その内の83号住居跡の覆土中から八稜鏡が出土している。文様は不明瞭であるものの、瑞花文であると思われる。径9.0cmを測る。土師器杯・耳皿・甕等が共伴しており、本住居跡の時期は、11世紀前半と考えられている。

11　長野県栄村乗落遺跡

遺跡は、天水山からの支脈尾根上に展開される小集落である。炉をもつ住居跡の床面上から、瑞花双鳥八稜鏡が出土している。径は9.0cmを測る。土師器椀、灰釉椀、棒状鉄器、鉄滓等が共伴している。本住居跡の時期は、伴出土器から10世紀後半～11世紀初頃と考えられている。

12　同茅野市判ノ木山西遺跡14号住居跡

遺跡は、尾根上に展開された集落である。14号住居跡の覆土中（？）から、八稜鏡片が２面分出土している。いずれも火熱を受けたと思われ、遺存状態が悪く、文様は不詳である。また、いずれも1/8程の残存率であるが、第１例が推定径11.8cm、第２例が推定径11.1cmを測る。鉄製鎌、鉄鏃、刀子、手づくね土器、土師器杯・椀・皿・甕・羽釜、黒色土器、灰釉椀・皿が大量に共伴しておれ。10世紀後半頃の所産と考えられている。被災した状況も見られるという。

13　同茅野市横井阿弥陀堂遺跡30号住居跡

遺跡は、永明寺山麓に展開された集落である。30号住居跡の南隅覆土中に形成された窪地から、①径8.3cm、②径11.1cm、③径7.4cmと、大きさの異なる瑞花双鳳（鳥）八稜鏡が、３面分出土している。３枚の鏡は、一部が重なり、住居跡南コーナーの覆土第２層上面に形成された窪地に、麻糸で編んだ筵を敷い

た板の上に載せられた状態を呈していたという。本住居跡の時期は、平安時代後期と考えられている。調査者はまた、近在する溝の埋め戻しに伴い埋設されたものとし、溝に関する祭祀を想定されている。

14　同箕輪町大原第二遺跡１号住居跡

遺跡は、天竜川東岸の段丘、扇状地に立地している。１号住居跡東壁際の、床より10cm上から、文様は不詳であるものの、径6.8cmを測る八稜鏡が出土している。10世紀～11世紀の所産と考えられている。

15　千葉県千葉市小食土町文六第２遺跡Ａ－005住居跡

遺跡は、馬の背状に開析された、舌状台地に立地している。市内で最も高所である。出土した八花鏡は、Ａ－005住居跡の床上５cmより出土しているが、住居と鏡の廃棄時期に、大きな時間差は認められないという。八花鏡の文様は、２頭の獅子と２羽の鸞が交互に配され、間に雲を置いている。全体に不鮮明であるが、一般に狻猊双鸞八花鏡とよばれるものである。径9.7cmを測る。須恵器片口及びカマドから土師器杯・甕が共伴している。本住居跡の時期は、伴出土器から平安時代中頃と考えられている。

八稜鏡ではないが、類例として挙げておく。

住居跡出土の八稜鏡及び八稜鏡を出土した住居跡について、諸例と比較しながら本例の位置を確認していくこととする。

①時　　期　10世紀後半から11世紀全般に及び、不明確なところもあるが、ほぼこの時期に限定される。本例は、構成要素からすると、杉山洋氏による編年の第Ⅴ式にあたり、10世紀末から11世紀初頭の時期が与えられる。伴出遺物の時期と合致するものである。

②文　　様　瑞花（草花）文及び瑞花双鳥（鳳）文を基本とするが、バラエティーに富む。本例における瑞花鴛鴦文様の採用は、やはり第Ⅴ式にあたる。

③大 き さ　最小・大原第二遺跡例の6.8cmから、最大・判ノ木山西遺跡第一例の11.8cm（推定）まで、バラエティーに富む。時期的にも、新しいものほど大きさを増す傾向が見られる。しかし、床面から出土したものについては、乗落遺跡例の9.0cmから、正観寺遺跡例の11.2cm（推定）のものまで、大きめのサイズが集中している。本例は9.0cmであり、全体の中では平均的であるが、床面からの出土の中では、最も小型の部類に属している。

④数　　量　本例をはじめ、単一の住居跡からは、大部分が単独の出土である。単一の住居跡から複数出土した例は、阿弥陀堂遺跡の３枚、判ノ木山西遺跡の２枚であり、いずれも覆土中からの出土である。

⑤鏡の状態　鋳出の悪いもの、摩耗の激しいもの、歪みの有るもの等が約半数を占めている。鋳出の善し悪し、摩耗度、歪みの有無等について、あまり関心が払われた様相は伺えない。

⑥出土位置　本例（鏡面を上にして水平）をはじめ、床面（直上）からの出土で、住居の廃棄時に伴うものは、正観寺遺跡、天田・川押遺跡（床面に密着）、鳥羽遺跡Ｇ38号住居跡、乗落遺跡、文六第２遺跡がある。また、覆土中からの出土で、住居の埋没過程に伴うものには、下大類遺跡？、鳥羽遺跡遺跡Ｎ１号住居跡（壁立ち上がりの肩面）、糀屋遺跡（住居北半中央）本宿遺跡（床上20cm）、下高瀬上之原遺跡（住居の廃絶から時間の経過を経て、埋納された状態を

第７２表　関東甲信地方・住居跡出土の八稜鏡一覧　その１

番号	遺跡名	住居跡名	出土位置	鏡	共伴遺物	立地	時期
1	埼玉県熊谷市 一本木前遺跡	13号住居跡	床面直上	瑞花鴛鴦八稜鏡	土師質高台椀、羽釜、鉄滓、砥石、滑石製臼玉	沖積地	10世紀末～11世紀初
2	群馬県高崎市 正観寺遺跡	72号住居跡	床面直上	草花文八稜鏡片	銅製帯金具、鉄鏃、鉄製鎌	台地	11世紀後半頃
3	同　同 天田・川押遺跡	52号住居跡	床面密着	瑞花双鳳八稜鏡	土師質高台杯・皿、羽釜	台地	11世紀前半頃
4	同　同 下大類遺跡	住居跡	覆土中？	瑞花双鳥八稜鏡		台地	11世紀頃
5	同　群馬町 鳥羽遺跡	G38号住居跡	床面直上	？文八稜鏡片	須恵器杯・高台杯・高台椀	台地	10世紀後半頃
6	同 同	N１号住居跡	壁立上肩	草花文八稜鏡	黒色土器椀、灰釉皿、砥石	台地	11世紀頃
7	同　渋川市 糀屋遺跡	２号住居跡	覆土中？	瑞花双鳳八稜鏡片	羽釜	丘陵南斜面	11世紀頃
8	同　富岡市 本宿遺跡	MT１２７号住居跡	覆土中	八稜鏡片	土師器杯・皿・甕	段丘	11世紀前半頃
9	同　同 下高瀬上之原遺跡	13号住居跡	覆土中	瑞花双鳥八稜鏡	鉄製鉸具、刀子、銅鈴、土師器杯・高杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・蓋	丘陵	10世紀後半頃
10	山梨県御坂町 二の宮遺跡	83号住居跡	覆土中	瑞花（？）八稜鏡	土師器杯・耳皿・甕	扇状地	11世紀前半
11	長野県栄村 乗落遺跡	住居跡	床面直上	瑞花双鳥八稜鏡	土師器椀、灰釉椀、棒状鉄器、鉄滓	尾根	10世紀末～11世紀初
12	同　茅野市 判ノ木山西遺跡	14号住居跡	覆土中？	八稜鏡片２面	鎌、鉄鏃、刀子、手づくね土器 土師器杯・椀・皿・甕、羽釜、黒色土器、灰釉椀・皿	尾根	10世紀後半
13	同　同　横井 阿弥陀堂遺跡	30号住居跡	覆土中	瑞花双鳳八稜鏡 ３面		丘陵	平安時代後期
14	同　箕輪町 大原第二遺跡	１号住居跡	覆土中	？文八稜鏡		段丘・扇状地	10世紀後半～11世紀
15	千葉県千葉市 文六第２遺跡	A-005号住居跡	床面近く	狻猊双鸞八花鏡	土師器杯・甕	舌状台地	平安時代中頃

その２

番号	事項 / 住居跡名	床面より	覆土より	破片状態	複数出土	摩耗悪鋳歪み	大きさ 6cm大	7cm大	8cm大	9cm大	10cm大	11cm大	鉄滓伴出	鉄品あるいは砥石	特殊遺物伴出
1	一本木前遺跡13号住居跡	◎								◎			◎	◎	◎
2	正観寺遺跡72号住居跡	◎		◎								○		◎	◎
3	天田・川押遺跡52号住居跡	◎									◎				
4	下大類遺跡住居跡		○			◎									
5	鳥羽遺跡G38号住居跡	◎		◎		◎									
6	鳥羽遺跡Ｎ１号住居跡		○			◎		◎						◎	
7	糀屋遺跡２号住居跡		○	◎		◎					○				
8	本宿遺跡MT１２７号住居跡		◎	◎					○						
9	下高瀬上之原遺跡13号住居跡		◎	◎		◎		○						◎	◎
10	二の宮遺跡83号住居跡		◎							◎					
11	乗落遺跡住居跡	◎				◎				◎			◎	◎	
12	判ノ木山西遺跡14号住居跡		○	◎	◎2	◎						○ ○		◎	◎
13	阿弥陀堂遺跡30号住居跡		◎		◎3			◎	◎			◎			
14	大原第二遺跡１号住居跡		◎			◎	◎								
15	文六第２遺跡A-005号住居跡		◎				◎				◎				

＜表中○は、推定を示す＞

呈する)、二ノ宮遺跡、判ノ木山西遺跡（火熱を受けたと思われる)、阿弥陀堂遺跡（覆土土層の境目に形成された窪地に、麻糸で編んだ筵を敷いた板の上に意識的に乗せられた状態を呈する)、大原第二遺跡（床上10cm)。なお、出土状態の不明な例は、一応、覆土中からの出土例として扱った。

⑦出土状態 本例のように完形の状態で出土したものと、破片の状態の比率で出土したものとは、およそ半々であり、出土位置等によって、差は見出せない。

⑧伴出遺物 土器は、杯・椀・皿・甕を基本とし、時期によって羽釜の混ざる例が現れる。また、本例の臼玉のように特殊な遺物の出土した住居には、正観寺遺跡（銅製帯金具)、下高瀬上之原遺跡（鉄製鉸具、銅鈴)、判ノ木山西遺跡（手づくね土器）がある。また、本例は砥石であるが、鉄製品及び砥石の出土した住居には、正観寺遺跡（鉄鏃、鉄製鎌)、鳥羽遺跡Ｎ１号住居跡（砥石)、下高瀬上之原遺跡（鉄製刀子)、乗落遺跡（棒状鉄器)、判ノ木山西遺跡（鉄製鎌、鉄鏃、鉄製刀子）がある。さらに、本例と同様鉄滓を出土した住居には、乗落遺跡がある。

⑨住 居 跡 八稜鏡を出土した住居跡は、各遺跡内で一般的な様相を示し、構造上、特出する要素は見出せない。

⑩立地状況 八稜鏡を住居麻から出土した遺跡の立地は、大きく区分すると、山麓・尾根－高所に立地する遺跡、低平な台地上もしくは扇状地等－低所に立地する遺跡に分けられる。本例のように、低所に立地する遺跡としては、正観寺遺跡、天田・川押遺跡、下大類遺跡、鳥羽遺跡、本宿遺跡、二ノ宮遺跡、大原第二遺跡がある。また、高所に立地する遺跡としては、糀屋遺跡、下高瀬上之原遺跡、乗落遺跡、判ノ木山西遺跡、阿弥陀堂遺跡、文六第２遺跡がある。

⑪位　　置 本例の所在する『別府』は、武蔵国の別府の所在が推定される地である。また東600ｍには、式内社・奈良神社があり、傍らに、南北する東山道武蔵路が存在すると考えられている。さらに、本遺跡の北方には、男体山がその雄姿を見せており、僅かに目を北西に転ずれば、そこには赤城山が聳えたつ地である。群馬県内例は、同一地域に集中する様相をみせ、全て有力神社もしくは国府に近在している。まず上野国総社神社（国府）に近在する遺跡として、正観寺遺跡、鳥羽遺跡、天田・川押遺跡、下大類遺跡があり、上野国一宮の貫前神社に近在する遺跡として、本宿遺跡、下高瀬上之原遺跡がある。長野県内例は、諏訪盆地を中心として、その近在に判ノ木山西遺跡、阿弥陀堂遺跡が位置し、天竜川に沿ってやや下がった所に大原第二遺跡が位置している。いずれも、諏訪湖から派生する河川沿い（道路沿い）で、判ノ木山西遺跡、阿弥陀堂遺跡から釜無川沿いに南下すると、その終着点・甲斐国国府に近在する遺跡として、二ノ宮遺跡がある。なお、乗落遺跡は、信越国境の山地中にあって、千曲川近傍の交通路上に位置している。また、糀屋遺跡、文六第２遺跡については、今のところ他との関連は、うかがえない。

以上の結果によって、八稜鏡が住居跡の床面から出土した点を基に、一本木前遺跡例の位置をうかがってみることとする。

八稜鏡が住居跡の床面ではなく、覆土から出土した例は、９例（うち３例は推定）であった。

この中で、判ノ木山西遺跡14号住居跡は、土師器、黒色土器、灰釉陶器、鉄製鎌、鉄鏃、刀子等ととも

に、２枚分の八稜鏡が破片で出土している。覆土中の土器と、床面出土の土器との間に時期差はみられず、一気に埋まった状況を呈している。

下高瀬上之原遺跡13号住居跡は、北壁に作り出された覆土の傾斜面に沿って、鉄製鉸具、銅鈴、刀子、不明鉄塊等とともに、一部欠如した八稜鏡が出土している。カマド前の土器群とは出土状況が異なり、覆土上面（住居の廃絶から時間の経過を経ていることを示す）より、鉄製鉸具、銅鈴、刀子、不明鉄塊とともに集中して埋納された状態を呈している。

また、阿弥陀堂遺跡30号住居跡は、覆土土層の境目に形成された窪地に、麻糸で編んだ筵を敷いた板の上に、意識的に、欠けていない３枚の八稜鏡が一部重なって載せられた状態を呈するものであった。

これらの例によると、住居跡覆土出土の八稜鏡は、全てが同じ出土状況でなく、住居の廃絶直後もしくは、住居の廃絶からほとんど時間差をもたずに、雑然と覆土に含まれて検出される場合と、住居の廃絶からしばらく時間が経過した後に、覆土の窪み・傾斜を利用して、時には特別な装置を伴って検出される場合の、２種類があるようである。こうしてみると前者には、『埋置』という状況はみられず、むしろ『投棄』・『投供』という性格が与えられる。一方、後者は、鉄製鉸具、銅鈴、刀子等との集中出土の在り方や、敷物の存在や複数の八稜鏡が重ねられていた状況が伺えること、さらには時には敷物などの特別な装置を伴うこと等から、その性格は、まさに、『埋置』・『埋納』であると考えられるのである。

『埋納』と『投供』について坂井隆氏は、『埋納』を「信仰対象にたいする鎮め物的な意味あいを有し、物に溜まる使命をおびる行為」とし、『投供』を「鏡自体に祭祀の目的を込めて捨て去る身代わり的性格を有し、捨て去ることによってその使命を全て終了する行為。いわば使い捨てであるため、鏡は全て日本製の小型雑鏡である」と定義づけている。そして、「廃絶後の埋納」と分類した鏡の性格として、竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたものと考えられるもの、とした。さらに、この儀礼は、「埋納」であり、「投供」ではないとしたのである。

しかしながら、住居の廃絶からしばらく時間が経過した後に埋納された場合の性格としてこれを『埋納』とすることには同意であるが、『投供』については、「鏡自体に祭祀の目的を込めて捨て去る身代わり的性格を有し」であり、「捨て去ることによってその使命を全て終了する行為」であるものの、住居・溝など捨て去る場所に区別がある以上、捨て去る場所は明確に区別されており、「そこに捨て去る」という行為が重視されていたものである。よって「捨て去る」目的であり、「いわば使い捨てであるため」「鏡は全て日本製の小型雑鏡」でよいのであり、鋳出しの状況や、破片であるといった鏡自体の状況も全く無視されたものであっても、よいのである。

よって、前者の住居廃絶直後もしくは、住居の廃絶からほとんど時間差をもたずに、雑然と覆土に含まれて検出される場合には、出土状況や鏡自体の状況が示すとおり、竪穴住居の廃絶に対する『投供』儀礼と成し得るし、後者の住居の廃絶からしばらく時間が経過した後に埋納された場合には、竪穴住居の廃絶に対する『埋納』儀礼と成し得るのである。

さて、八稜鏡が住居跡の床面から出土した遺跡は、６遺跡であった。出土した八稜鏡は、欠けることなく完形品の状態のものと、破片のものの両者がみられた。破片の状態で検出された遺跡は、正観寺遺跡跡72号住居跡、鳥羽遺跡Ｇ38号住居跡である。鳥羽遺跡Ｇ38号住居跡は住居跡の中央部からの出土であるものの、正観寺遺跡72号住居跡は詳細が不明である。正観寺遺跡からは、銅製帯金具をはじめとして、鉄鏃、鉄製鎌等の遺物が供伴している。あるいは、鳥羽遺跡Ｇ38号住居跡両遺跡例・正観寺遺跡72号住居跡例と

も、住居跡中央部の一番窪みをもち、床面に近い覆土下層からの出土であったという可能性が考えられる。

もし、正観寺遺跡例が覆土からの出土であったものならば、鉄製鈹具、銅鈴、刀子、不明鉄塊などと供に八稜鏡が出土した下高瀬上之原遺跡13号住居跡と共通遺物を有することとなり、こうした鈹具や銅鈴等の特殊遺物が、所有者の身分を示すものでなく、竪穴住居の廃絶に対する『埋納』儀礼に伴う遺物であり、山岳信仰遺跡の伴出遺物とも共通性をもつことになる。

これらから考えてくると、鏡を所持していた者は、鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者であり、菊池誠一氏の、「鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者の存在の上に、有力者の私的所有物としての化粧道具」であった可能性は、無いといわざるを得ない。

一方、一本木前遺跡、天田・川押遺跡、乗落遺跡、文六第２遺跡では、完形品の八綾鏡が出土している。このうち、床面から密着して出土した天田・川押遺跡例、文六第２遺跡例では、住居・覆土・伴出遺物に強い特色はみられない。

これに対して、乗落遺跡例は、鏡の径が９cmであること、鉄滓が出土しており小鍛冶の存在が考えられること、時期が西暦1000年を挟んだ10世紀～11世紀初頃に比定されることなど、強い特色を示すとともに、本遺跡との間に多くの共通性も指摘できるのである。

住居跡床面出土の遺物は、いうまでもなく住居を廃棄した時点における、居住者の生活を最も端的に物語る、一つの有力な資料である。一般的な生活什器のみの伴出した天田・川押遺跡、文六第２遺跡と、一般的な什器に加えて鉄滓等を出土した一本木前遺跡、乗落遺跡では、自ずからその性格に区別がつけられる。しかし、乗落遺跡が尾根上に立地し、灰釉陶器片が多量に出土したのに対し、一本木前遺跡は低地の自然堤防上に立地し、灰釉陶器は破片も出土していないという、大きく異なる点もある。

かつて桐原健氏は、八稜鏡を出土した乗落遺跡の住居跡について「出土遺物や遺跡規模の小ささから、小鍛冶の職を有し、灰釉陶器の運搬にも携わった、山中流浪の山の民の居住したもの」であるとした。そして、鏡を所持する者について、「ある者は素朴な農耕民の鍛冶に対する畏怖心を十二分に利用し、ことさら人里離れた隠れ里的な山中において踏鞴をふんでの作業を行った」また「ある者は巫祝の徒として平地の里を訪れ、ホガイゴトを述べた」としたのである。

この両遺跡の対比によって浮かび上がる、『10世紀末～11世紀初頃』『小鍛冶の職を有する者が居住する住居からの出土』『一方が山地・もう一方が平地』『全く欠けていない八稜鏡が床面から出土』という問題は、一本木前遺跡例の位置を決する問題である。

菊池誠一氏は、鏡を出土した集落遺跡について、遺跡の立地と遺跡規模を基に、①山麓や地域内の高い所にある規模の小さな遺跡、②低地や扇状地にある規模の小さな遺跡、③台地・低地に立地し、付近に国府・国分寺・有力社寺などがあり、その地域の政治・文化の中心地域にある大規模な遺跡に３区分した。

この区分によれば、乗落遺跡は①にあたり、一本木前遺跡は③にあたる。そして、菊池氏の分類を基にしたそれぞれの性格づけとして、①②については、「鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者の存在」を、③については、前にみたとおり、「鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者の存在の上に、有力者の私的所有物としての化粧道具であった可能性」を指摘している。

坂井隆氏は、竪穴から出土した鏡の意味として、層位的な出土状況から、Ａ・廃絶後の埋納、Ｂ・廃絶時に存在、Ｃ・出土状態不明で鉄製品共伴に３区分した。

この区分によれば、乗落遺跡・一本木前遺跡ともに、Ｂである。そして坂井氏の分類の性格づけとして、

この区分によれば、乗落遺跡・一本木前遺跡ともに、Bである。そして坂井氏の分類の性格づけとして、A・竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの、B・竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの、もしくは最終使用の前に遺棄されたもの、C・いずれとも考えられるもの、とした。さらに、この儀礼は、「埋納」であり、「投供」ではないとしたことは、前に述べたとおりである。

菊池氏と坂井氏の分類を総合すると、乗落遺跡は、遺跡の立地を基にした区分では「鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者」が存在し、出土状況からの区分では「竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの、もしくは最終使用の前に遺棄されたもの」となる。

一方、一本木前遺跡は、遺跡の立地を基にした区分では「鏡を祭祀に使用する呪術的宗教者の存在の上に、有力者の私的所有物としての化粧道具であった可能性」であり、出土状況からの区分では「竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの、もしくは最終使用の前に遺棄されたもの」となる。

このように比べると、遺跡の立地が全く異なっても本質的な差がみられるわけてもなく、遺跡の立地を基にした区分では、不十分といわざるを得ない。むしろ、遺跡の立地状況が全く異なっても、土層など出土状況を基に、お互いに共通する要素を注視した区分のほうが現実的に思われる。しかしながら坂井氏の分類による性格づけの、「竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの、もしくは最終使用の前に遺棄されたもの」の両者は、現実には区分できない。そして、伴ノ木山西遺跡14号住居跡例のように、2次的な火熱を受けた鏡までが使用されていることからも、何らかの理由によって住居を去る時、『埋納』儀礼の主役を務める貴重な品を、そのまま放棄するであろうかという、疑問もある。むしろ、住居跡床面出土の八稜鏡は、「竪穴住居の廃絶に対する儀礼に使用されたもの」のみの性格づけが相応しいと思われる。

この八稜鏡が、何時集落内に出現したかについて、菊池氏は、「京の文化をいち早く受容することができた国庁・国分寺周辺の集落で始まり」とし、八稜鏡を基とした山岳信仰の広がり方については「山間部の集落への波及も同時に行われた」としたのである。

一方坂井氏は、鏡の集落内出現については、菊池氏の論を否定し、「唐式鏡の段階で日本海交通の要地の寺家（石川県羽昨市寺家遺跡）などで始まった竪穴への埋納儀礼が、律令国家が崩壊した時に内陸の山岳信仰と結び付いて八稜鏡の儀礼が生まれたと思われる」としている。また、八稜鏡を基とした山岳信仰の広がり方については「『山の民』が自らのそして東山道地域の多くの人々にとっての精神的基盤である山岳信仰のために使用・製作し、その信仰力の大きさに国庁周辺がひきずられた」としたのである。

出現について及び、その広がり方については、立地条件の差による時期差は認められず、どちらかへの伝播は考えられない。よって坂井氏の意見が妥当と考えられる。しかしながら、『山の民』の存在に疑問をもつものであり、むしろ、一つの特殊技能－例えば小鍛冶－をもつ者が、技術とともに山岳信仰を流布していったもの、とした方が妥当性は高いと考えられる。そして、こうした人々が、信仰対象の近在地や、信仰対象の望める地に居住したのも、また当然のことであろう。

八稜鏡115面が埋納され、八稜鏡祭祀が集中して展開された男体山に対する信仰などは、このような、東山道を中心にした、幅広い集落で行われた八稜鏡祭祀の広がりが根底にあったことは、想像に難しくない。

参考文献

(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　『北島遺跡Ⅳ』　1998
早稲田大学本庄校地文化財調査室　『大久保山Ⅶ』　1999
吉田町教育委員会　『秩父・吉田町遺跡分布調査報告書』　1981
高崎市教育委員会　『正観寺遺跡群３』　1981
高崎市教育委員会　『天田・川押遺跡』　1983
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　『鳥羽遺跡Ｇ・Ｈ・Ｉ区』　1986
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　『鳥羽遺跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区』　1990
渋川市教育委員会　『市内遺跡Ｉ』　1988
富岡市文化財保護協会　『本宿・郷土遺跡』　1981
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　「下高瀬上之原遺跡」　1994
山梨県教育委員会　『二之宮遺跡』　1987
桐原　健　「平安期に見られる山地居住民の遺跡」　『信濃』20-4　1968
長野県教育委員会　「判ノ木山西遺跡」　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その３－』　1981
茅野市教育委員会　『横井・阿弥陀堂遺跡』　1983
箕輪町教育委員会　『大原第二・三遺跡』　1978
石橋一恵　「千葉市文六第２遺跡出土の銅鏡について」　『貝塚博物館紀要』第11号　千葉市立加曽利貝塚博物館　1984
杉山　洋　「今様の鏡と古躰の鏡－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－」　『ＭＵＳＥＵＭ』ＮＯ481　1991
菊池誠一　「平安時代集落遺跡出土鏡の性格」　『物質文化』49　1987
斉藤忠他　『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書－』　1963　角川書店
前田洋子　「和鏡の用途の展開について」　『歴史における政治と民衆』　1986　日本史論叢会
田島桂男　『大類村史』　1979
坂井　隆　「元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡」　『元総社寺田遺跡Ｉ』　1993　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂井　隆　「八稜鏡の出土とその意味」　『書上下吉祥寺遺跡・書上下原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』　1988　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

付篇・一本木前遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

＜目　次＞

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．244
1．試料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．244
2．分析方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．245
（1）テフラ分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．245
（2）樹種同定　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．245
（3）赤外分光分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．245
3．結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．246
（1）テフラ分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．246
（2）樹種同定　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．248
（3）赤外分光分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．248
4．考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．248
（1）遺構の年代について　・・・・・・・・・・・・・・・p．248
（2）木片およびそれに付着した黒色物質について・・・p．249
引用文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p．250

＜図表・図版一覧＞

表1　テフラ分析結果

図1　木片付着黒色物質のＩＲスペクトル
図2　標準焼漆のＩＲスペクトル

図版1　軽石・砂の状況

はじめに

熊谷市東別府一本木に所在する一本木前遺跡は、関東平野北部の利根川中流低地に位置している。利根川中流低地は、熊谷市東部付近を境に上流側は妻沼低地、下流側は加須低地とよばれていることから、本遺跡は妻沼低地に立地している。妻沼低地の表層地質・地形については、堀口（1997）に、以下のように記載されている。妻沼低地は、最終氷期の浸食谷が完新世を通じて埋積されてきた地域であり、利根川よって形成された砂～砂礫質の扇状推積物が基盤となっている。緩傾斜ではあるが扇状地性の微地形も認められている。

今回の発掘調査により、中世の住居や溝、土器祭祀などの遺構と、それに付随して土器や木製品、鏡などの遺物が数多く検出された。中世の遺構の中には、軽石のような白色粒子が土層段面上で観察されたため、遺構の年代との関係が問題とされた。また、13号住居跡（ＳＪ-36）では、八稜鏡の下位より表面に何かを塗布されたような木片が検出された。今回の自然科学分析調査は、軽石とみられる白色粒子が認められた遺構の年代を推定することと、出土した木片の樹種とそれに付着する物質を明らかにすることを目的としている。

前者については、テフラ分析を行うことで土壌内に含まれる細粒な軽石などの火山噴出物（いわゆるテフラ）を観察し、テフラの同定を行う。さらに、層位と照らし合わせて遺構の構築、埋積にかかわる年代を検討する。木片及び木片に付着していた黒色物質については、この物質が何であるかを明らかにするため、樹種同定及び赤外分光分析を行い検討するこことする。赤外分光分析は、物質の多重結合や官能基の構造がわかるため、有機化合物の大まかな性状を簡易的に調査できる最適な方法である。また、あらかじめ試料物質が予想できるとき、標準試料など既知の赤外線吸収スペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができる（山田,1986）。今回の試料は、木片表面に塗られた物質である可能性が高いことから、漆を想定して分析を進めることにする。すなわち、標準試料となる漆の赤外線吸収スペクトルを測定し、黒色物質の赤外線吸収スペクトルと比較して漆か否かの判断を行う。

１．試料

今回テフラ分析により時期推定を行う遺構は、３号土器祭祀跡（ＳＸ-4.5）、１号溝（ＳＤ－１）、および44号住居跡（ＳＪ-12）である。３号土器祭祀跡では、Ｇ－Ｇ’断面を除いて３層に分層されている。最上位の一層内には、集積した土器が検出されており、黒褐色の土壌中に軽石のような白色粒子も確認されている。その下位の２層は暗褐色を呈する土壌で、１層同様に白色粒子が見られる。さらに下位の３層は、２層と類似するが酸化鉄を含むんでいる。このうちテフラ分析を行う試料は、Ａ－Ａ’断面で観察された１層内の土器だまり中の土壌（試料番号１）と２層最上部の土壌（試料番号２）、およびＤ－Ｄ’断面で観察された１層の土壌（試料番号３）、Ｅ－Ｅ’断面で認められた１層中土器だまり下位の土壌（試料番号４）の４点である。

１号溝では、溝の覆土は上位の１層から溝最下底の11層までの11層に分層されている。１層～５層は粘土ブロック、マンガン粒、軽石粒を含む灰白～黄灰色粘土層である。６層・７層は軽石粒を多少に含む黒褐色粘土層、８層は灰白色粘土層であり、９層は軽石粒、炭化物を多量に含む黒色粘

土層（泥炭層）、10層は軽石粒からなる純層、11層は黒褐色粘土と暗褐色粘土の混在層となっている。このうち７層（試料番号５）と10層（試料番号６）についてテフラ分析を行う。

44号住居跡では、住居の覆土は上位より８層～12層の５層に分層されている。８層は焼土が混じる炭化物を中心とする褐色土層、９層は下部に炭化物を主体とする灰層を含むにぶい赤褐色シルト層、10層は灰色シルトと白色粒子が混じる褐色シルト層、11層は10層より灰色シルトを多く含む褐色シルト層、12層は11層に類似したにぶい黄褐色シルト層である。このうち、Ｂ－Ｂ’断面において白色微粒子が観察された10層（試料番号７）についてテフラ分析を行う。

13号住居跡（ＳＪ-36）では、八稜鏡下(No.125）より木片Ｉと木片IIが出土している。どちらの試料も、土壌ごと採取された薄い板状の物質で、表面には黒色物質が認められる。試料の状態より判断して、木片Ｉについて樹種同定、木片IIに付着している黒色物質について赤外分光分析を行うこととする。

２．分析方法

以下に各分析の処理手順について述べる。

（１）テフラ分析

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対称として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と軽石型に分類する。

（２）樹種同定

試料は柔らかく、切片作成が不可能であったため、シャーレ内に蒸留水を入れ、その中で試料の一部を粉砕した。実体顕微鏡で観察しながら、光が透過する薄い破片を拾い出し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡による透過光観察と、落射蛍光装置を用いた観察を行った。

（３）赤外分光分析

黒色物質を木片表面より剥離し、105°Ｃで２時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕（200メッシュ以下）した。この微粉砕試料20～30mgをシュウ化カリウム（KBr）と１：100の割合で秤量し、メノウ乳鉢で粉砕・混合した後、ミニバンドプレス（島津製作所製ＭＨＰ－１）で加圧成形した。加圧成形試料を次の条件により測定した。

装置：島津製作所製ＦＴＩＲ-８１００Ａ

測光値（Measuring mode）　：%T

分解能（Resolution）　：4.0cm^{-1}

積算回数（No. o f Scan）　：40回

ゲイン（Gain）　：自動

ミラー速度（Detector）　:2.8mm/sec

アポダイズ関数（Apodization）　：HaPP-genzel

表1　テフラ分析結果

試料番号	遺構名	試料名	スコリア			火山ガラス		軽石			由来するテフラ
			量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
1	3号土器祭祀跡(SX-4・5	No. 893内第1層	−			+	cl・bw	++	GBr・sb<W・sg～sb	1.2	As-B, K-Ah, AT
2		No. 893内第2層	−			+	cl・bw	+	GBr・sb<W・sg～sb	1.0	As-B, K-Ah, AT
3		No. 978下(D7ロック1枚目)	−			+	cl・bw	(+)	GBr・sb	0.5	As-B, K-Ah, AT
4		No. 1006下(E7ロック3枚目)	−			+	cl・bw	(+)	GBr・sb	0.3	As-B, K-Ah, AT
5	1号溝・P-5(SD-1)	泥炭層上位混在層(第7層)	+	B・sg～sb, G・sb	1.0	−		+++	GBr・sb<W・sg～sb	4.0	As-B
6		泥炭層下位軽石純層(第10層)	+	B・sg～sb, G・sb	1.2	−		++++	GBr・sb<W・sg～sb	4.0	As-B
7	44号住居跡(SJ-12)	第10層	−			+	cl・bw	(+)	GBr・sb	0.5	As-B, K-Ah, AT

凡例　−：含まれない．(+)：きわめて微量．+：微量．++：少量．+++：中量．++++：多量．
B:黒色．G:灰色．GBr:灰褐色．W:白色．
g:良好．sg:やや良好．sb:やや不良．b:不良．
cl:無色透明．bw:バブル型．最大粒径はmm．

測定範囲：4600～400cm^{-1}

測定方法：ＫＢｒ錠剤法

3．結果

（1）テフラ分析

３号土器祭祀から採取された４試料からは、軽石と火山ガラスが検出され、スコリアは認められなかった。火山ガラスは、試料番号１～４の全点に微量含まれている。無色透明であり、緩い曲率をもった薄手平板上の形状を示すバブル型とよばれる形態である。この火山ガラスは、その形態の特徴より鬼界－アカホヤ火山灰（K-Ah；町田・新井、1978）および姶良Ｔｎ火山バイ（ＡＴ；町田・新井、1976）に由来すると考えられる。K-Ａｈは、約6300年前に九州地方の鬼界カルデラから噴出した広域テフラであり（町田・新井、1992）、ＡＴは、南九州の姶良カルデラを給源とし、約2.2-2.5万年前に噴出した広域テフラである（町田・新井、1992）。軽石は、試料番号１に少量、試料番号２に微量、試料番号３・４にきわめて微量含まれている。軽石の最大粒径は、試料番号１で1.2mm、試料番号２で1.0mmであり、きわめて微量しか含まれない試料番号３・４に比べてやや径の大きいものが認められる。試料番号１～４の全点に灰褐色を呈し発泡ががやや不良な軽石が含まれ、さらに試料番号１・２には白色を呈し発泡がやや良好～やや不良な軽石が微量含まれている。軽石の中には、斜方輝石の斑晶を包有するものもある。これらの軽石は、その特徴より、A.D.1108年（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（Ａｓ-Ｂ；新井、1979）に由来すると考えられる。

１号溝から採取された２試料からは、スコリアと軽石が検出され、火山ガラスは認められない。スコリアは、試料番号５・６のどちらにも微量含まれ、黒色を呈し発泡がやや良好～不良であるものと、灰色を呈し発泡がやや不良であるものが含まれている。最大粒径は試料番号５で1.2mm、試料番号６で1.0mmと、同じ試料中に含まれる軽石に比べて径は小さい。軽石は、試料番号５では中量、試料番号６では多量の軽石が認められ、最大径は4.0mmである。どちらにも灰褐色を呈し発泡がやや不良な軽石と、わずかに白色を呈し発泡がやや良好～やや不良な軽石が含まれており、斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。また、灰色を呈し破砕片のような形状の安山岩片も少量認めら

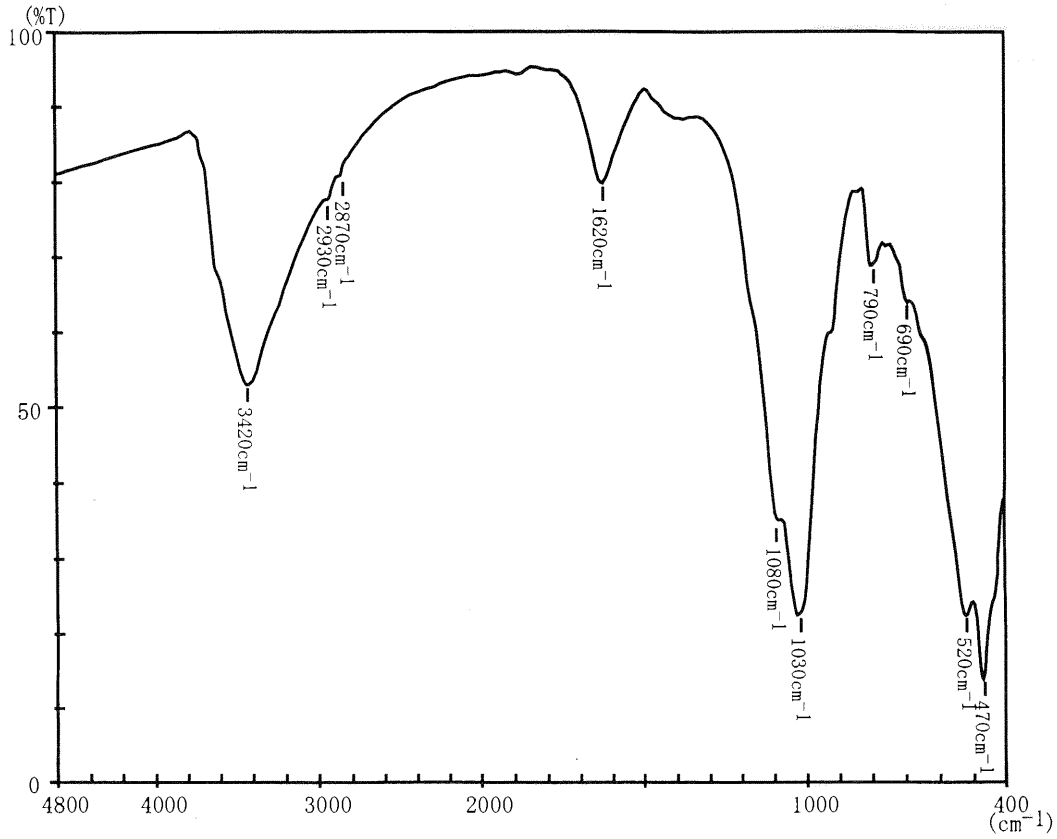


図１　木片付着黒色物質のＩＲスペクトル

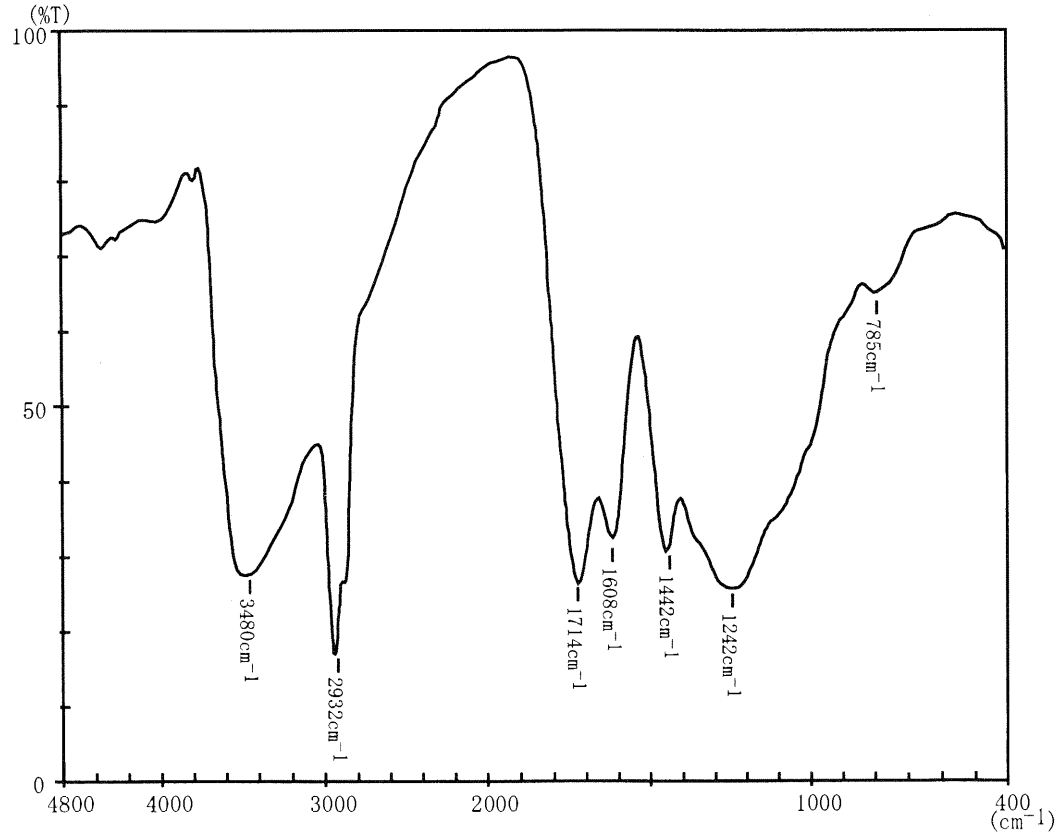


図２　標準焼漆のＩＲスペクトル

れる。このスコリアと軽石および安山岩片は、含有物とそれらの特徴から、前述のＡｓ-Ｂに由来するものである。

44号住居跡第10層の試料では、軽石と火山ガラスが検出され、スコリアは認められなかった。火山ガラスは、無色透明のバブル型のものが微量認められる。これらは上述のＫ-Ａｈおよびａｔに由来するものと考えられる。軽石は、灰褐色を呈し発泡がやや不良な軽石がきわめて微量認められる。軽石の特徴から、前述のＡｓ-Ｂに由来するものと考えられる。

以上の結果を表１に示す。

（２）樹種同定

試料は木片と考えられていたが、保存状態が悪く、組織はほとんど観察できない。僅かに見られる組織も潰れており、その特徴を把握することは困難である。そのため、今回の観察結果からは、試料がどのような物質に由来するのかは不明である。

（３）赤外分光分析　黒色物質の赤外線吸収スペクトルを図１に示す。

3420、1620、1030cm^{-1}に強い吸収帯、その他に2930、2870、1080、790、690、520、470cm^{-1}の吸収帯が認められる。

４．考察

（１）遺構の年代について

テフラ分析結果より、３号土器祭祀跡覆土１層および２層から、A.D.1108年（天仁元年）に噴火したＡｓ-Ｂが検出された。１層の試料番号１で少量、その下位の２層の試料番号２で微量含まれ、下層よりも上層に軽石が多く認められる。このような産状であることから、Ａｓ-Ｂが遺構下部埋積時に降下したとは考えにくい。したがって、覆土中のＡｓ-Ｂの産状や本地域におけるＡｓ-Ｂの産状を考慮すると、検出されたＡｓ-Ｂは植物根や、昆虫、動物などによる生物擾乱によって、上位から下位に拡散した可能性がある。したがって、３号土器祭祀は、Ａｓ-Ｂ降下当時すでに土器だまりが形成されており、埋積されていた可能性がある。Ｋ-ＡｈおよびＡｔの火山ガラスは、拡散している産状であることと、その噴出年代から、遺構が埋積される過程で周囲の土層から混入したものと思われる。

１号溝では、溝の最下底に近い部分にＡｓ-Ｂが濃集して認められる。断面で観察された状況と、熊谷付近では純層でなければほとんど認められないスコリアが認められること、比較的径の大きい軽石が新鮮な状態で認められることなどから、10層はＡｓ-Ｂ噴火時に降下埋積した軽石層がそのまま残存したものと考えられる。したがって１号溝は、Ａｓ-Ｂが降下したA.D.1108年（天仁元年）にかなり近い時宜に構築され、Ａｓ-Ｂ降下当時には溝として機能していたといえる。また、Ａｓ-Ｂ降下後は、溝内および溝の周囲から溝底付近にＡｓ-Ｂ軽石を含む埋積物が流れ込み、溝の埋積が続いたと考えられる。

44号住居跡では、覆土最上部の10層に認められたＡｓ-Ｂはごくわずかであった。このことと、住居の断面で軽石のような白色粒子がほかに観察されなかった状況を考慮すると、３号土器祭祀跡と同様に検出されたＡｓ-Ｂは植物根や、昆虫、動物などによる擾乱によって、10層の上位から10層内に拡散した可能性がある。したがって、44号住居は、Ａｓ-Ｂ降下当時にはすでに廃棄され、

埋積されていたと考えられる。

（2）木片およびそれに付着した黒色物質について

木片Ⅰの顕微鏡観察結果より、試料がとの物質に由来するのか特定できなかった。組織が潰れていることから、鞣している等の可能性も考えられる。

木片に付着した黒色物質については、同一条件で測定した標準焼漆の赤外線吸収（ＩＲ）スペクトル（図２）と比較し検討する。図１と図２を比較すると、黒色物質と標準焼漆とは異なる吸収帯を示している。特に、2900cm^{-1}付近の脂肪族飽和炭素（C-H基）に帰属する吸収帯が顕著である。このことから、黒色物質は焼漆と同じ化合形態ではないことがわかる。

一般に有機化合物と言われるものには脂肪族飽和炭素（C-H基）に帰属する吸収帯があり、遺跡などで検出される天然アスファルト、琥珀などにもその吸収帯は顕著に認められる。しかし、村江ほか（1993）の報告によると、加熱測定によって得られた琥珀の赤外線吸収スペクトルでは、2900cm^{-1}付近の吸収帯は500°C付近で消失する結果が得られている。これは、琥珀の脂肪族飽和炭素（C-H基）が芳香族化し、石炭の主成分に同化していくことによると考えられている。また、実験的ではあるが、当社で実施したアワ、ヒエなどを炭化させて赤外線吸収スペクトルを測定したデータ（未公表）においても、2900cm^{-1}付近の吸収帯は消失する結果となっている。

以上のことから、黒色物質の化合物名をここで明確に言及することはできないが、炭化した有機化合物の可能性が指摘される。なお、一度炭化したものの炭化前の化合物を赤外分光分析によって復元する調査は現段階では難しい。

引用文献

新井房夫（1997）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層.考古ジャーナル,179, p.41-52.

堀口萬吉（1997）利根川中流低地の変動と古代地震.地球科学,51, p.40-50

町田　洋・新井房夫（1976）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰.第四紀研究,１７, p.143-163

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス.276p, 東大出版

村江達士・下川修司・相原安津夫（1993）古植物樹脂の続成過程における変化に関する有機地球科学的研究.九大理研報（地球惑星）,18, p.13-23.

山田富貴子（1986）赤外線吸収スペクトル法.「機器分析のてびき　第１集」,p.1-18　化学同人

写 真 図 版

図版１　遺跡遠景（南より）

図版２　遺跡遠景（南より）

図版３　10年度調査区全景（南より）

図版 4

発掘調査風景 ①

発掘調査風景 ②

発掘調査風景 ③

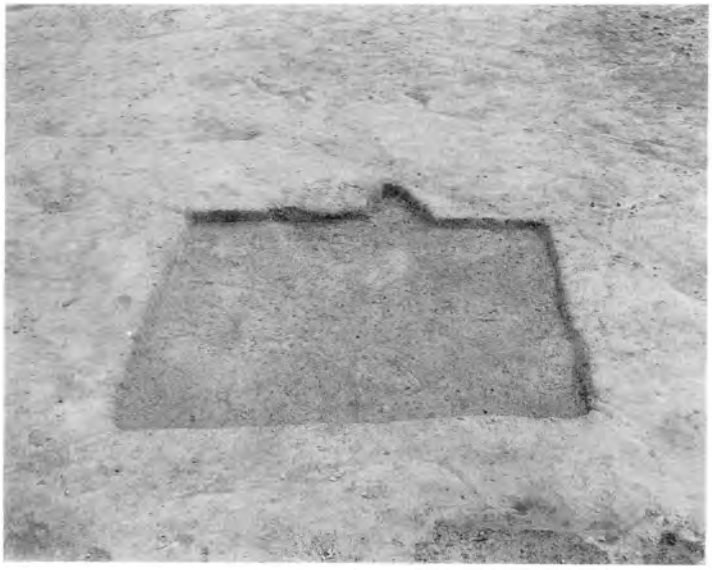
遺跡近景（北より）

遺跡近景（南より）

図版 6

1号住居跡

5号住居跡



6号住居跡

図版 7

7号住居跡

9号住居跡

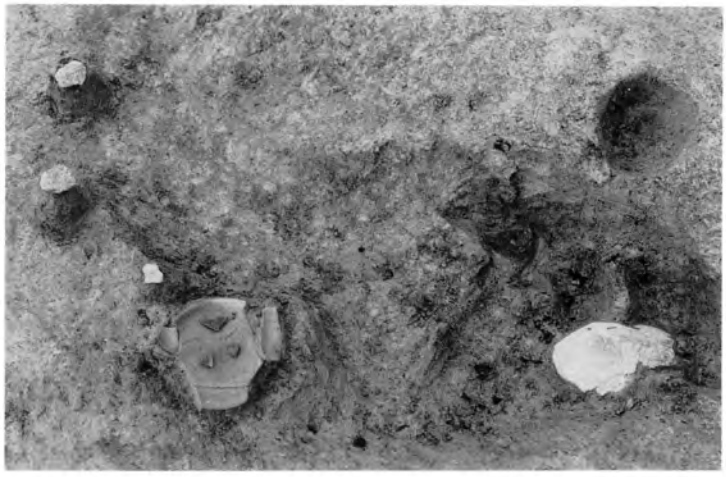
9号住居跡遺物出土状況

図版 8

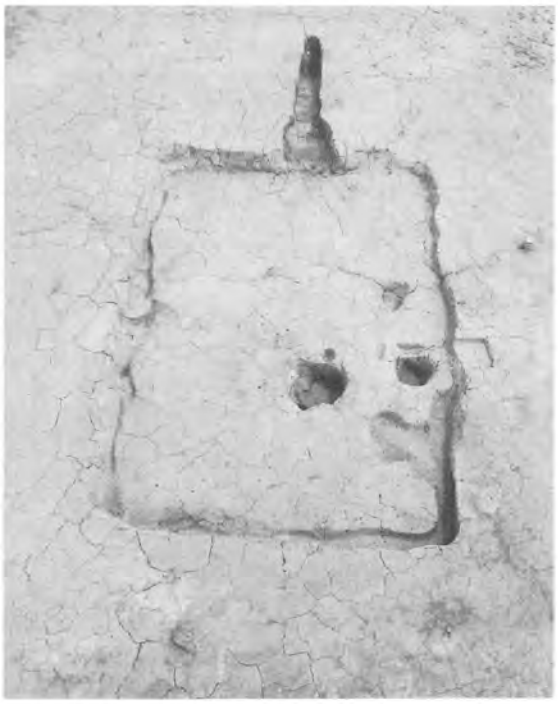
10号住居跡

11号住居跡検出状況

11号住居跡カマド



11号住居跡遺物出土状況



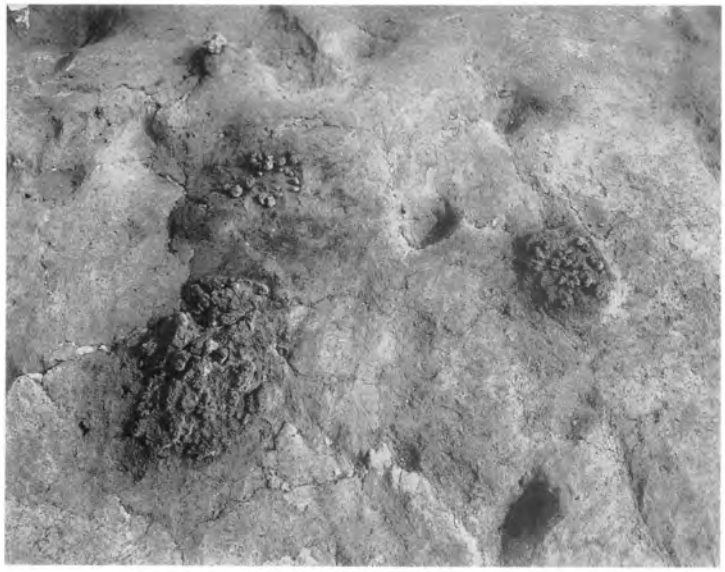
11号住居跡

12号住居跡

図版 10

13号住居跡検出状況

13号住居跡カマド



13号住居跡スラッグ出土状況①

13号住居跡スラッグ出土状況②

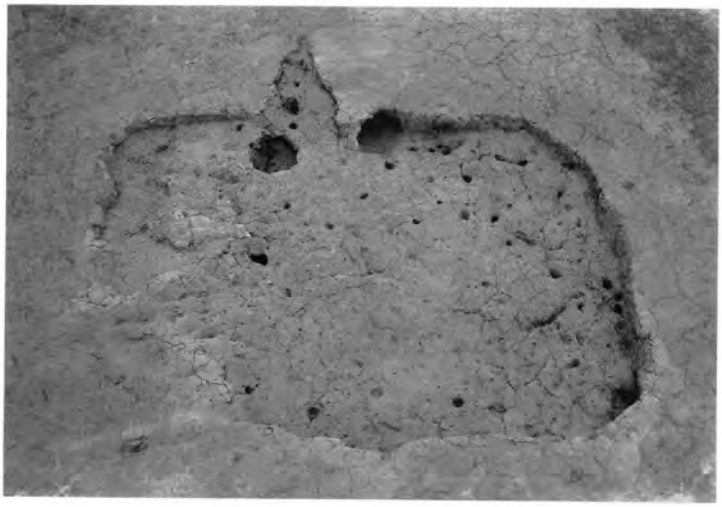
13号住居跡銅鏡出土状況

13号住居跡銅鏡下炭化材出土状況

図版 12

13号住居跡臼玉出土状況

13号住居跡カマド前ピット

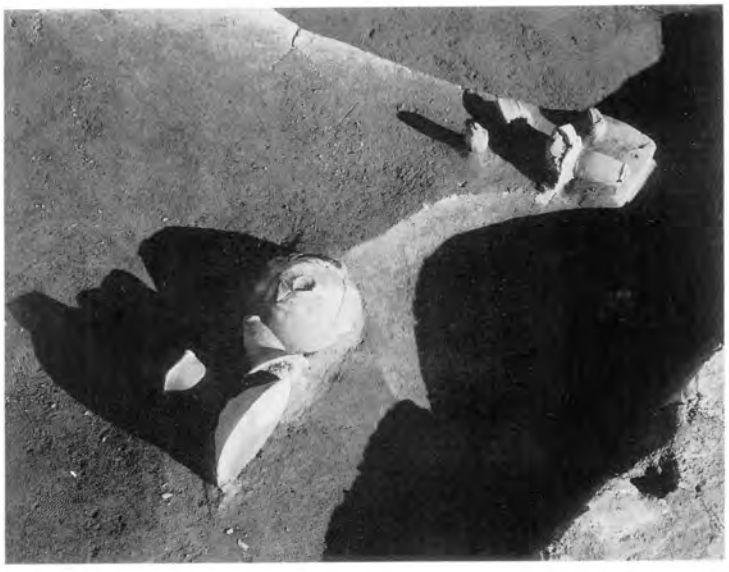


13号住居跡

図版 13

14号住居跡

14号住居跡遺物出土状況



15号住居跡遺物出土状況 ①

図版 14

15号住居跡遺物出土状況②

15号住居跡遺物出土状況③

16号住居跡検出状況

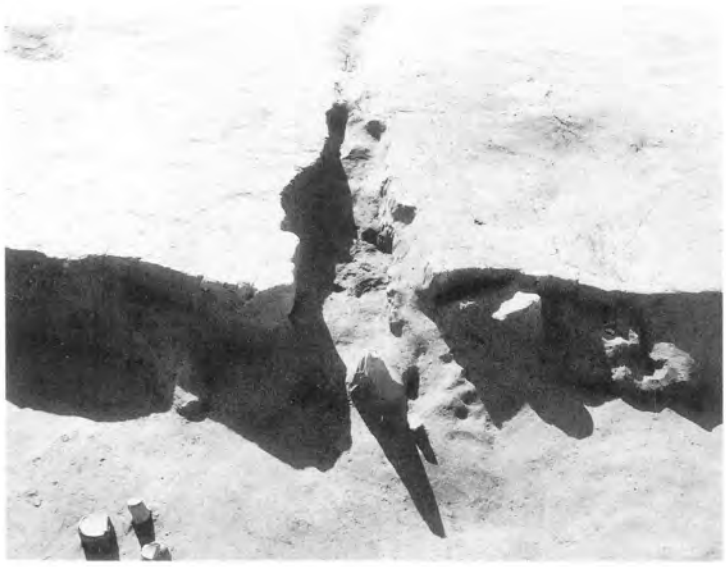
図版 15

16号住居跡カマド

16号住居跡

17号住居跡検出状況

図版 16



17号住居跡南カマド

17号住居跡北カマド遺物出土状況

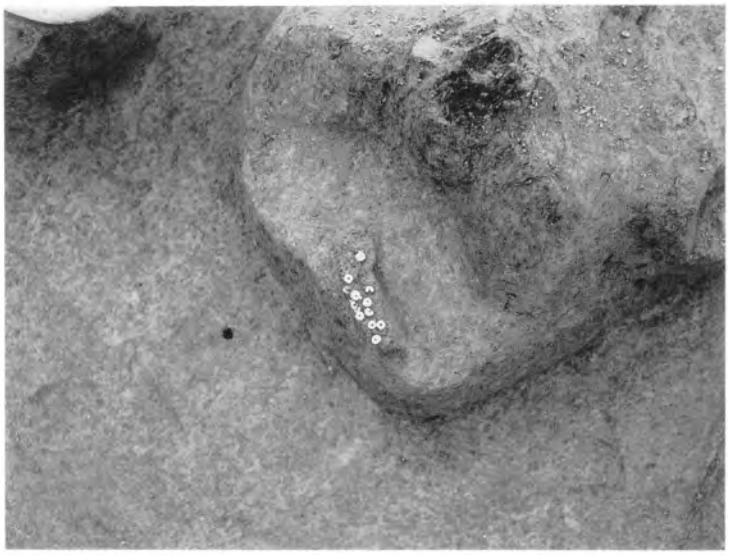
18号住居跡検出状況

18号住居跡遺物出土状況①

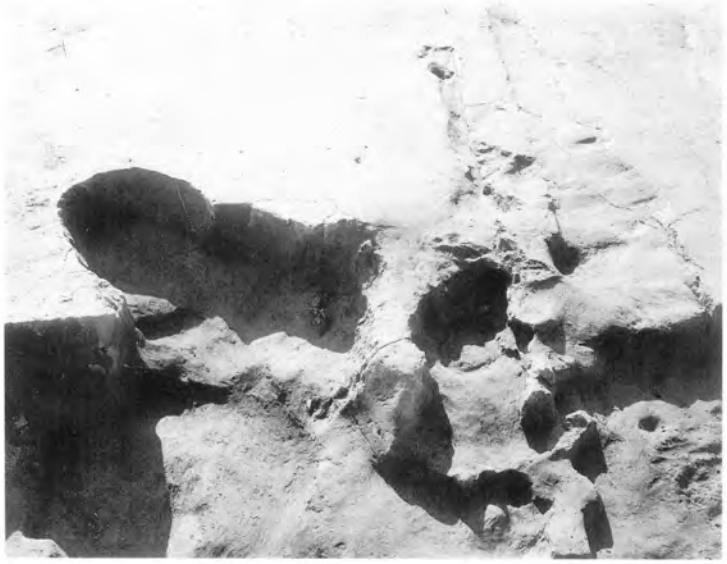
18号住居跡遺物出土状況②

18号住居跡遺物出土状況③

図版 18



18号住居跡遺物出土状況 ④



18号住居跡カマド

19号住居跡検出状況 ①

図版 19

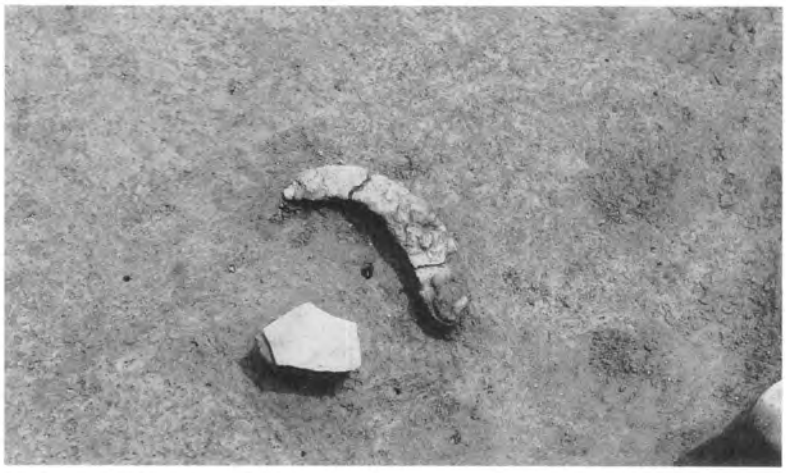
19号住居跡検出状況 ②

19号住居跡

20号住居跡検出状況

図版 20

20号住居跡カマド



20号住居跡遺物出土状況 ①

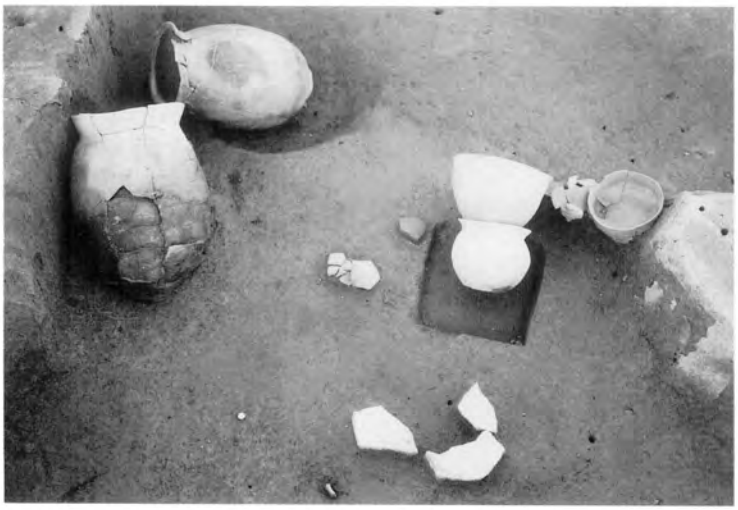
20号住居跡遺物出土状況 ②

21号住居跡遺物出土状況 ①

21号住居跡遺物出土状況 ②

21号住居跡遺物出土状況 ③

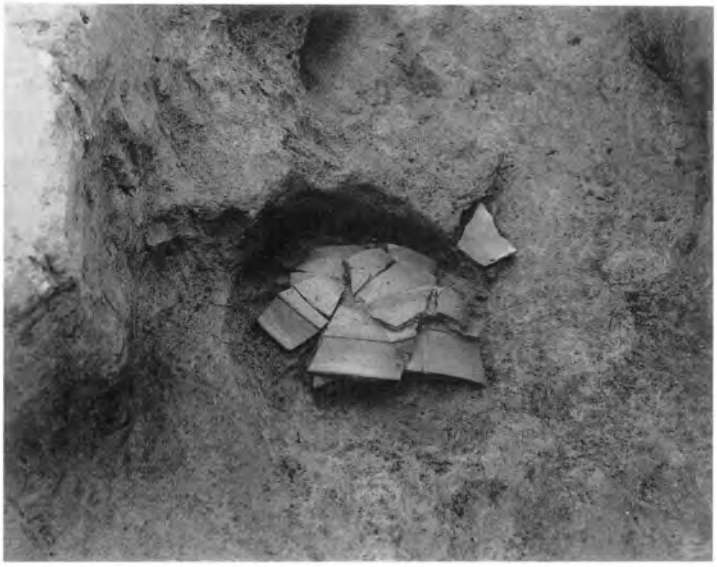
図版 22



21号住居跡遺物出土状況④

21号住居跡カマド

21号住居跡カマド内遺物出土状況①



21号住居跡カマド内遺物出土状況②

21号住居跡カマド内遺物出土状況③

21号住居跡カマド内遺物出土状況④

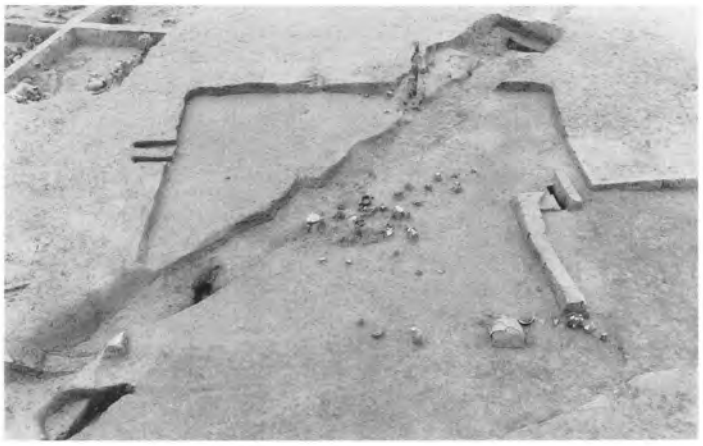
図版 24

22号住居跡検出状況

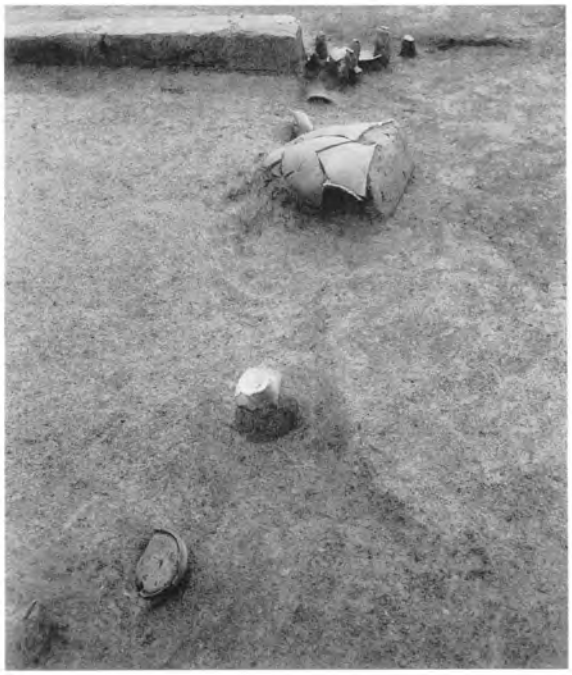
22号住居跡カマド
及び遺物出土状況

22号住居跡カマド内遺物出土状況

22号住居跡カマド支脚検出状況



23号住居跡検出状況



23号住居跡遺物出土状況 ①

図版 26

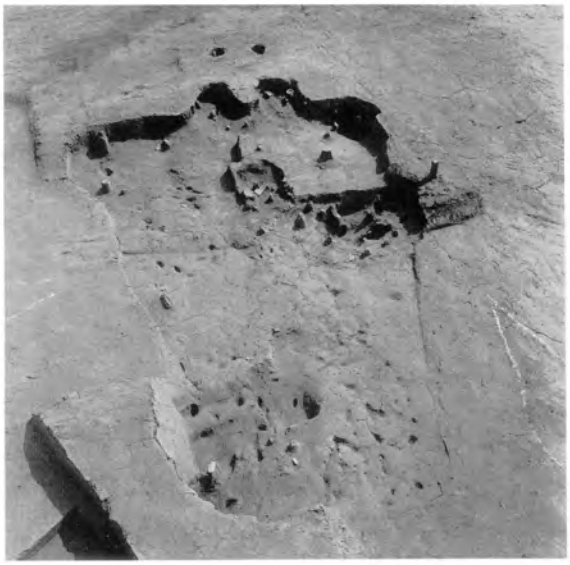
23号住居跡遺物出土状況②

23号住居跡カマド

24号住居跡

25号住居跡検出状況

25号住居跡カマド



26・27号住居跡検出状況

図版 28

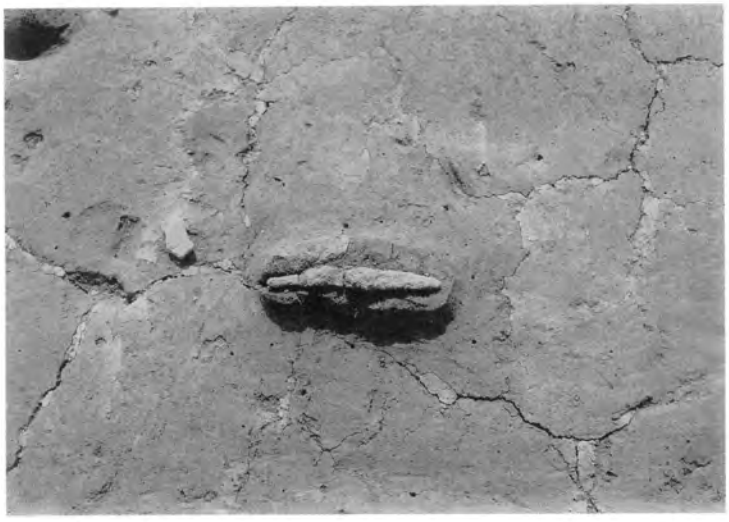
26号住居跡カマド検出状況

26号住居跡カマド

26・27号住居跡カマド

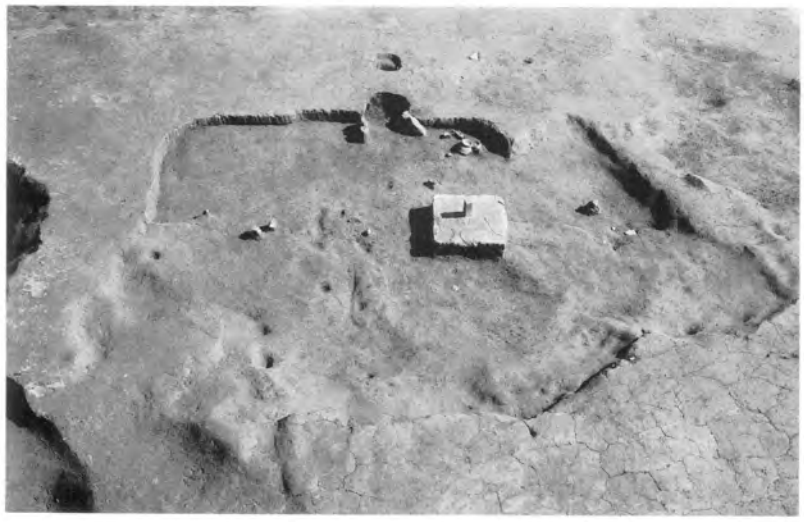
27号住居跡カマド検出状況

27号住居跡カマド

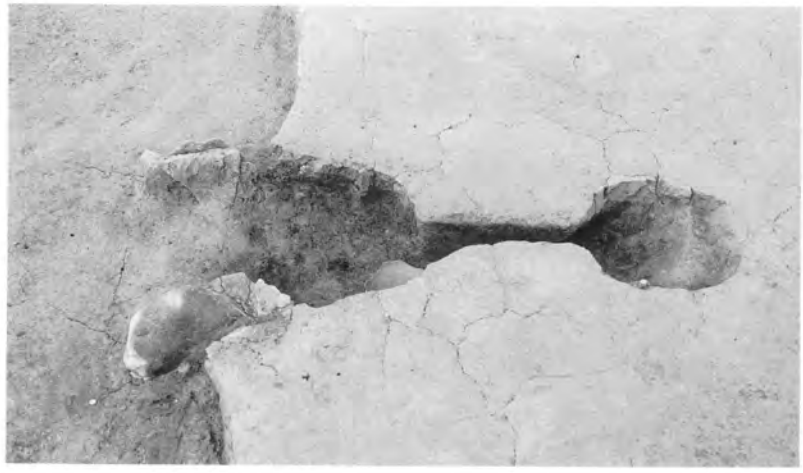


27号住居跡遺物出土状況

図版 30

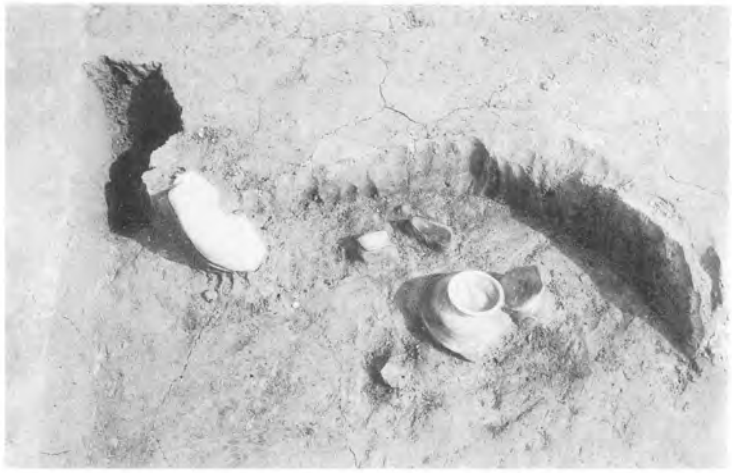


28号住居跡検出状況



28号住居跡カマド

28号住居跡カマド内遺物出土状況



28号住居跡カマド脇遺物検出状況

29号住居跡検出状況

29号住居跡カマド内遺物出土状況

図版 32

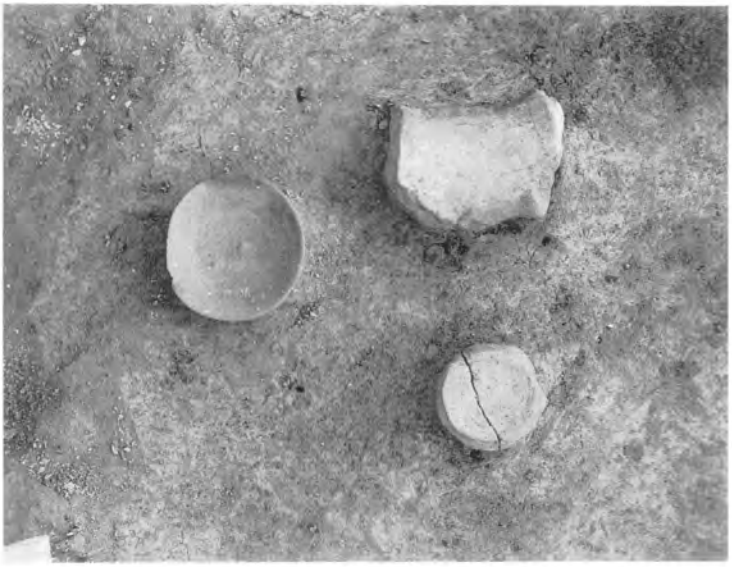
29号住居跡遺物出土状況

30号住居跡 ①

30号住居跡 ②

30号住居跡遺物出土状況①

30号住居跡遺物出土状況②



30号住居跡遺物出土状況③

図版 34

32号住居跡検出状況

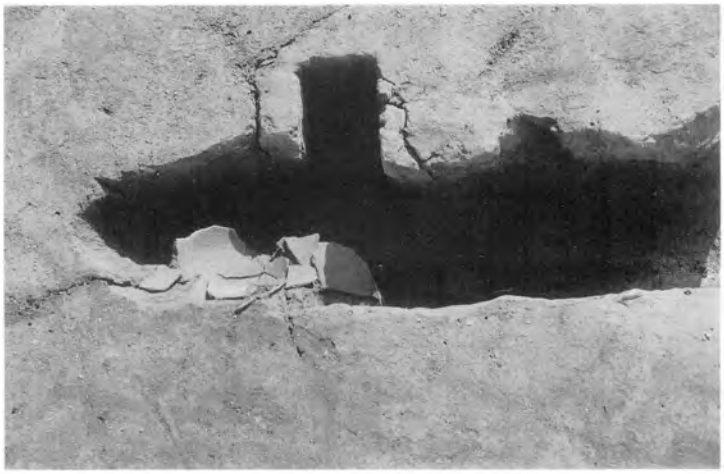
32号住居跡カマド

32号住居跡

図版 35

33号住居跡

34号住居跡



34号住居跡カマド

図版 36

39号住居跡遺物出土状況 ①

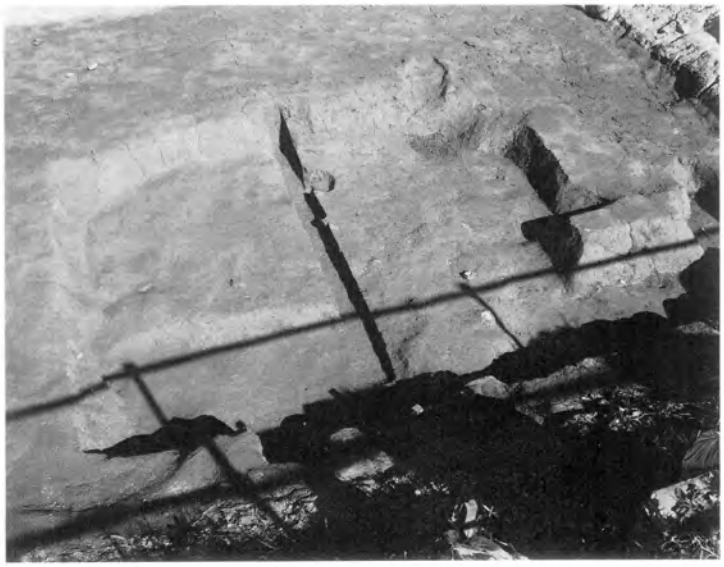
39号住居跡遺物出土状況 ②

39号住居跡遺物出土状況 ③

図版 37

40号住居跡

41号住居跡



42号住居跡

図版 38

43号住居跡遺物出土状況

43号住居跡

44号住居跡

図版 39

45号住居跡

47号住居跡遺物出土状況

48号住居跡

図版 40

50号住居跡

51号住居跡 ①

51号住居跡 ②

図版 41

51号住居跡遺物出土状況

51・52号住居跡

54号住居跡

図版 42

54号住居跡遺物出土状況

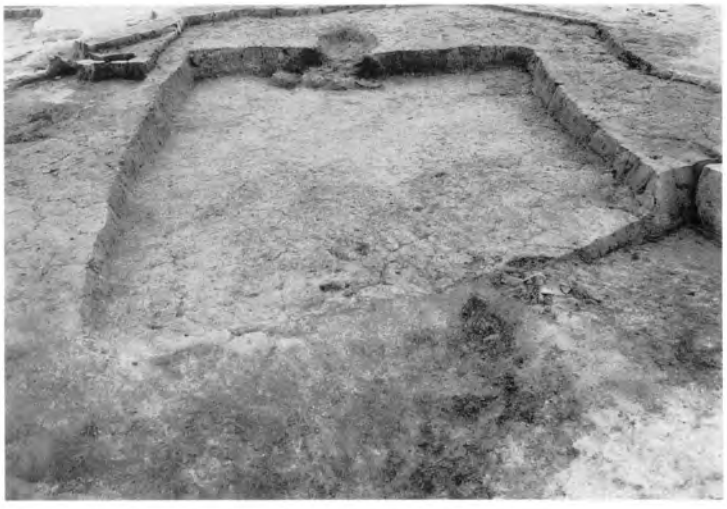
55号住居跡検出状況

55号住居跡遺物出土状況

図版 43

56号住居跡

59号住居跡

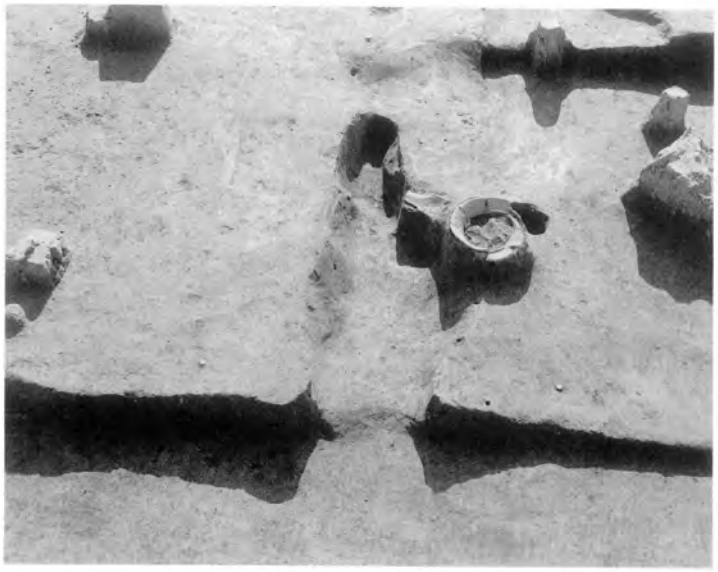


60号住居跡

図版 44

60号住居跡カマド及び遺物出土状況

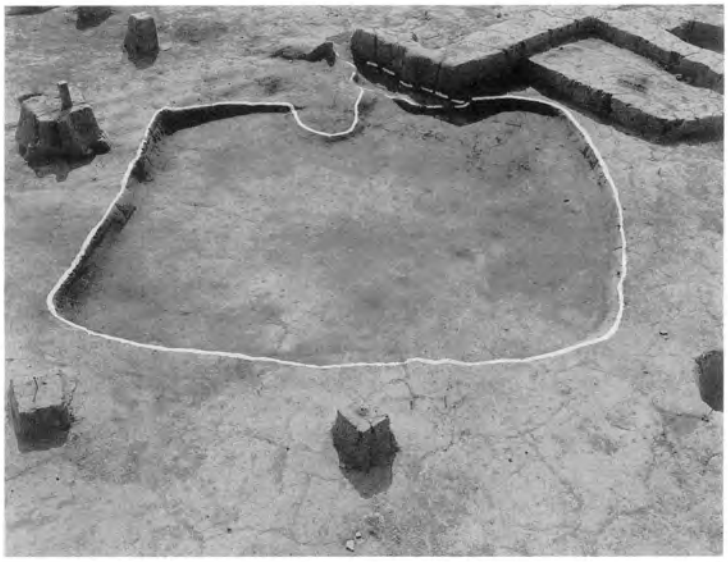
60号住居跡カマド



62号住居跡カマド

図版 45

63号住居跡

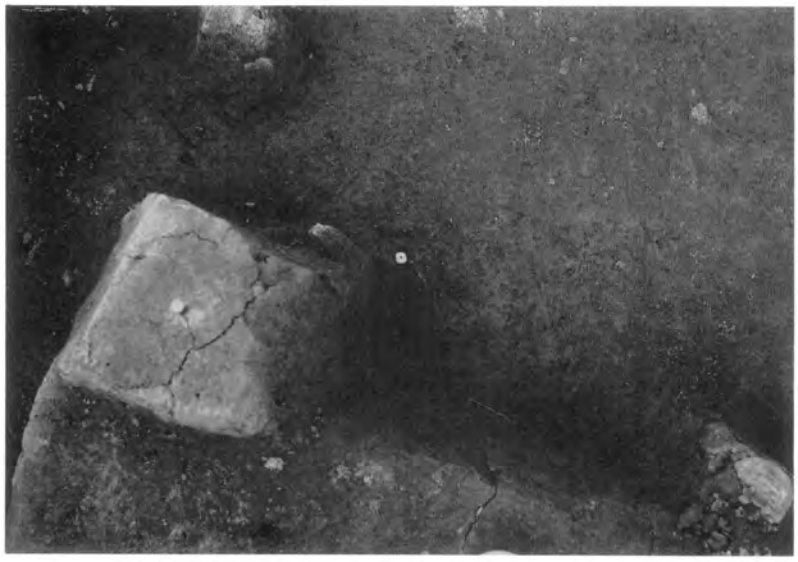


64号住居跡

65号住居跡

図版 46

65号住居跡遺物出土状況 ①



65号住居跡遺物出土状況 ②

65号住居跡カマド

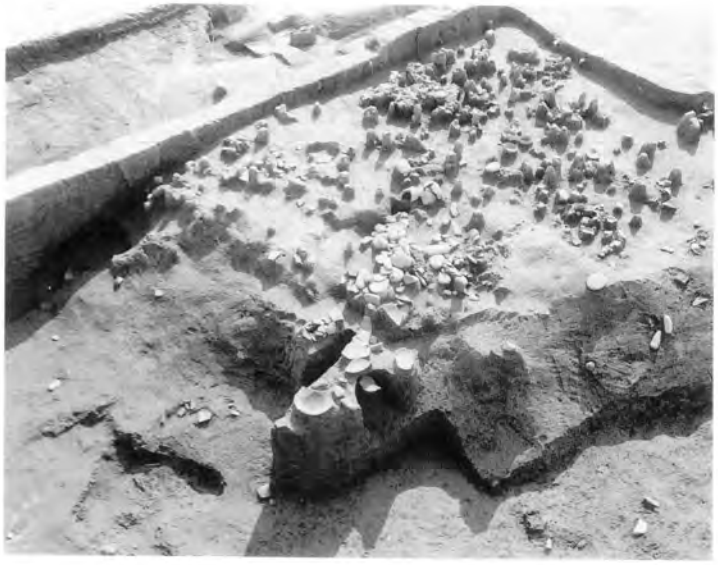
68号住居跡

70号住居跡

71号住居跡遺物出土状況

図版 48

1号土器祭祀跡検出状況 ①



1号土器祭祀跡検出状況 ②

1号土器祭祀跡遺物出土状況 ①

1号土器祭祀跡遺物出土状況②

1号土器祭祀跡遺物出土状況③

1号土器祭祀跡遺物出土状況④

図版 50

1号土器祭祀跡遺物出土状況 ⑤

2号土器祭祀跡検出状況 ①

2号土器祭祀跡検出状況 ②

2号土器祭祀跡長頸鏃出土状況

3号土器祭祀跡検出状況 ①

3号土器祭祀跡検出状況 ②

図版 52

3号土器祭祀跡検出状況 ③

3号土器祭祀跡遺物出土状況 ①

3号土器祭祀跡遺物出土状況 ②

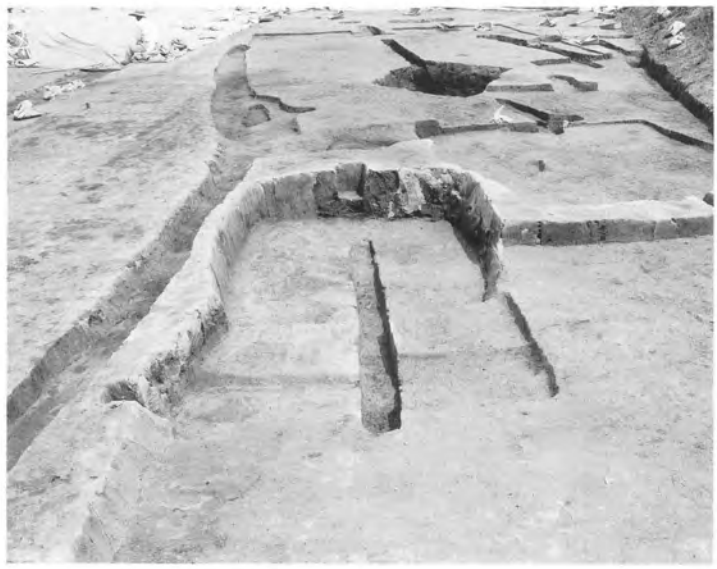
図版 53

道路状遺物構

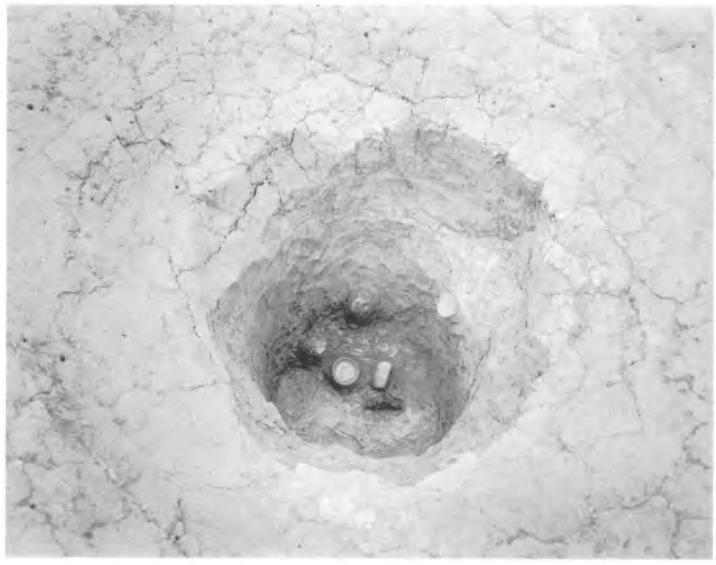
1号溝（北端）

1号溝（北側・分岐点）

図版 54



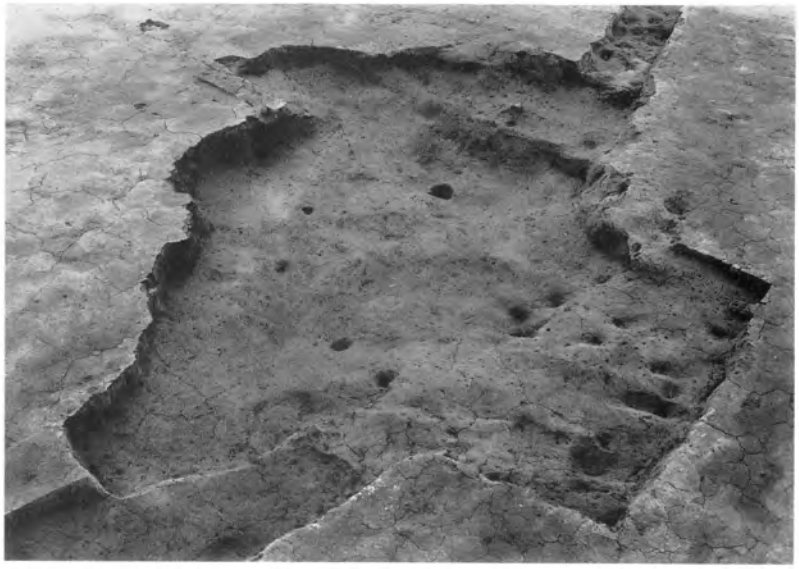
27・28号土坑



34号土坑

37号土坑

図版 55



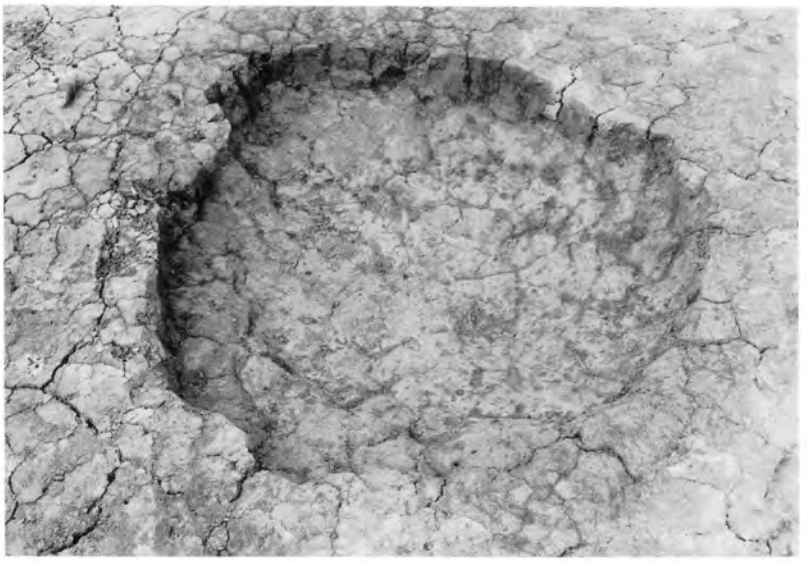
47号土坑

47号土坑遺物出土状況①

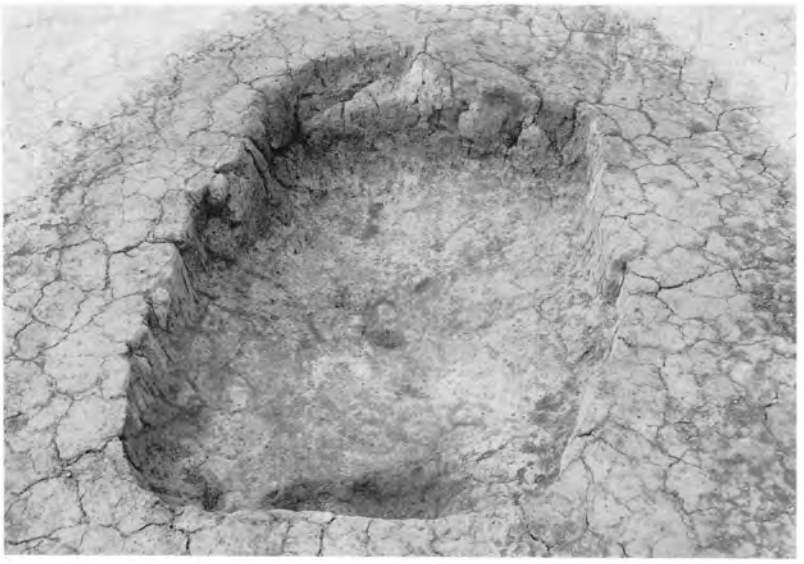
47号土坑遺物出土状況②

図版 56

64号土坑

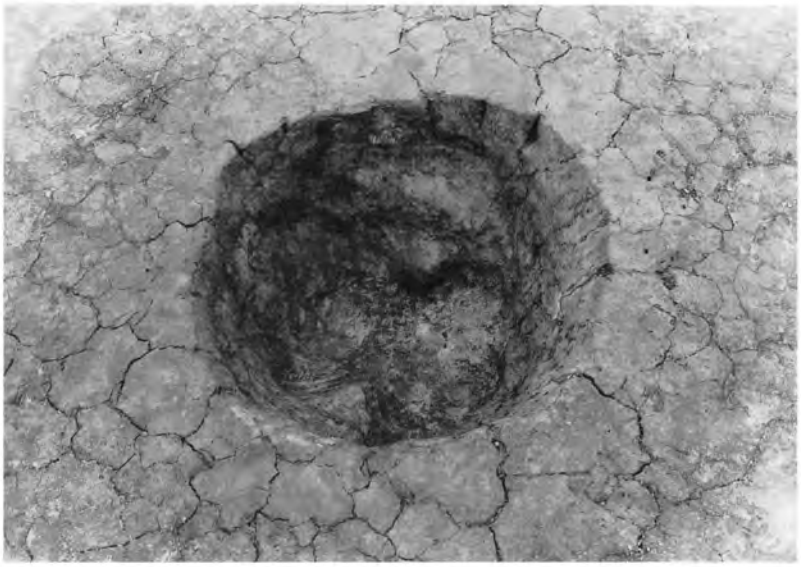


65号土坑

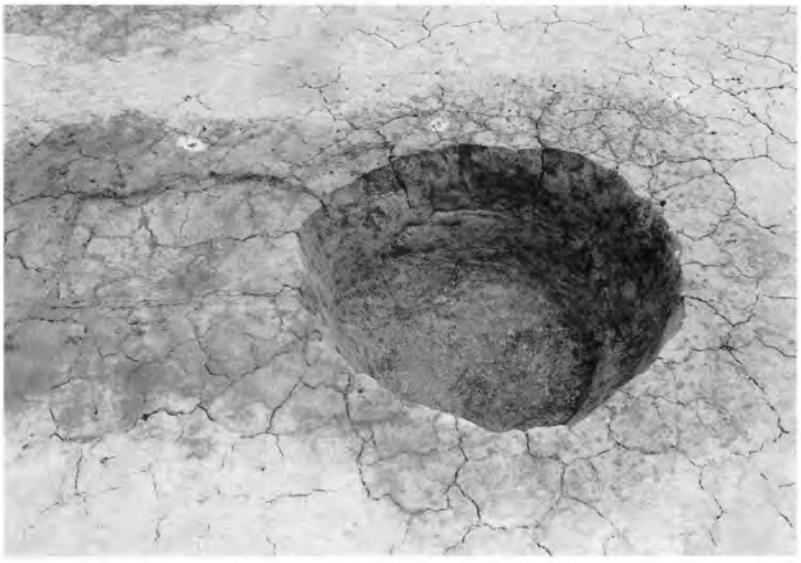


66号土坑

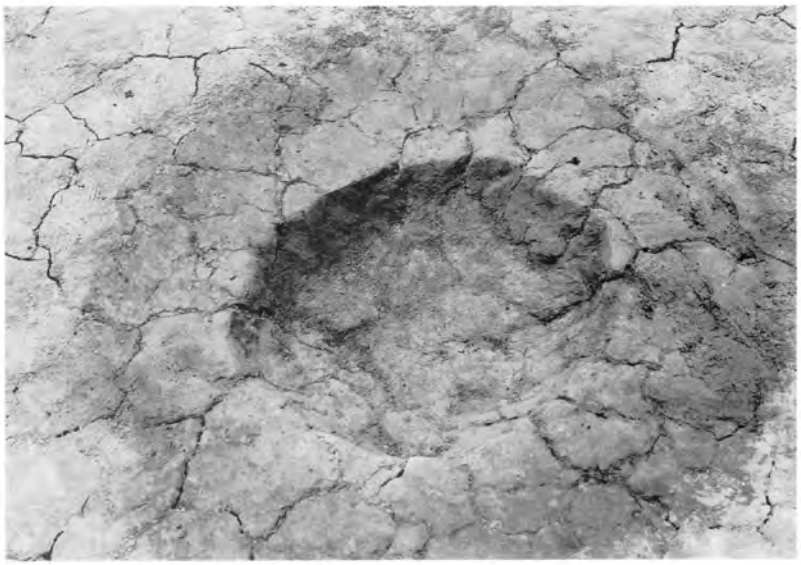
図版 57



73号土坑

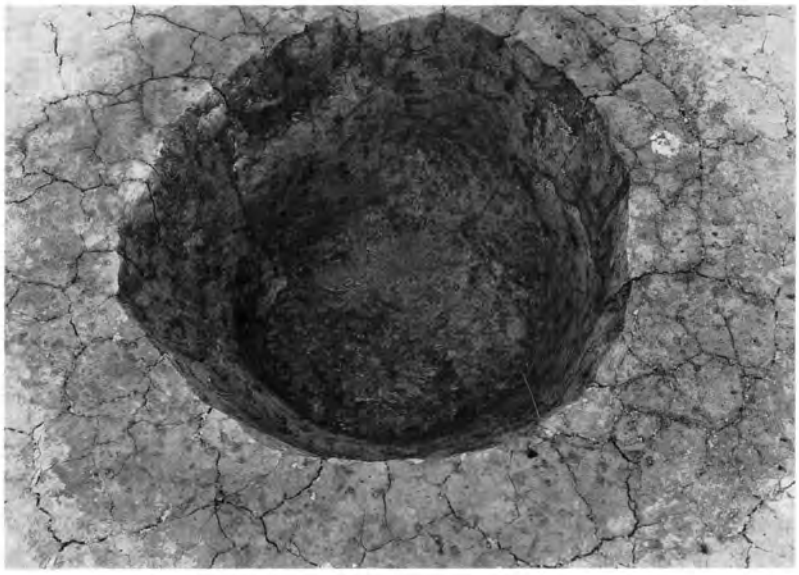


74号土坑



91号土坑

図版 58



92号土坑

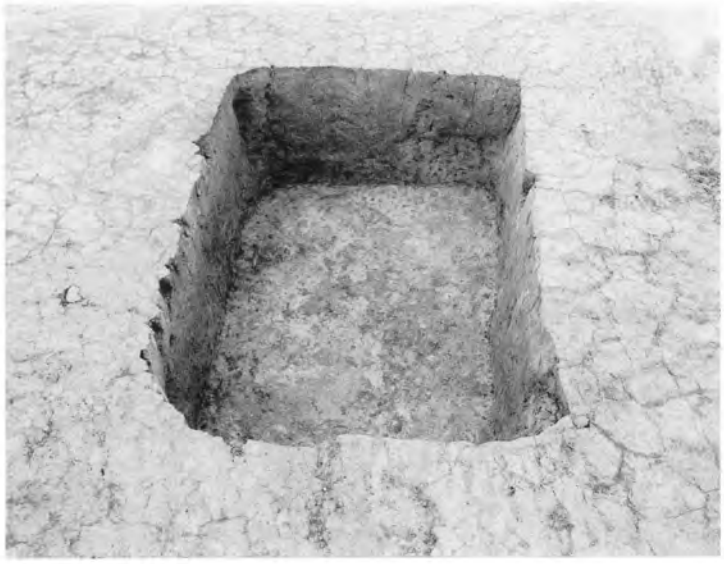
93号土坑

125・126号土坑

図版 59

129号坑断面

133号土坑



136号土坑

図版 60

142号土坑遺物出土状況

152号土坑遺物出土状況 ①

152号土坑遺物出土状況 ②

153号土坑遺物出土状況

167号土坑遺物出土状況 ①

167号土坑遺物出土状況 ②

図版 62

186号土坑遺物出土状況 ①

186号土坑遺物出土状況 ②

211号土坑

213号土坑

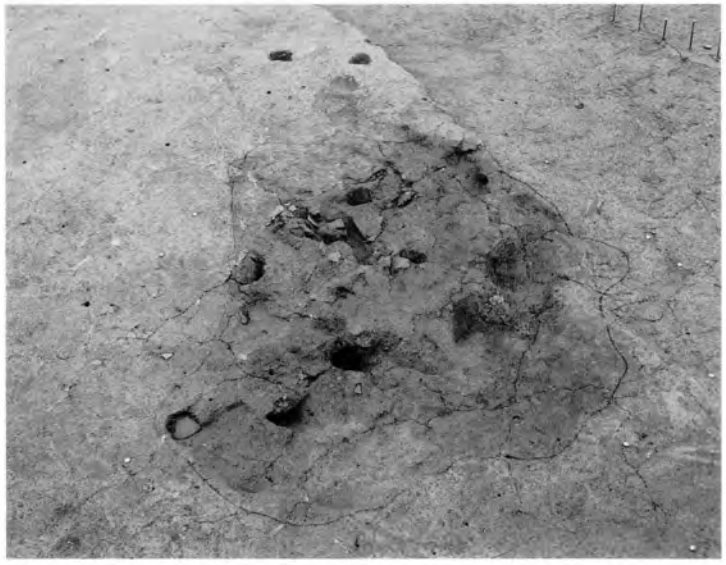
225号土坑遺物出土状況

227号土坑遺物出土状況

図版 64

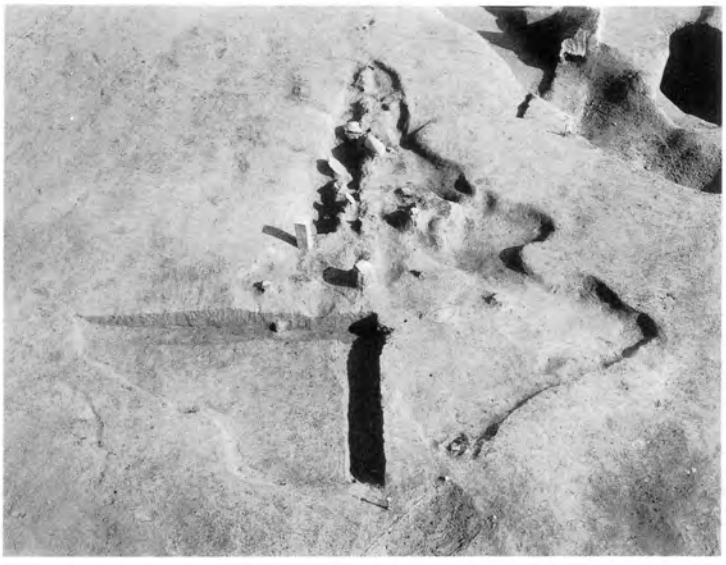
1号性格不明遺構

2号性格不明遺構

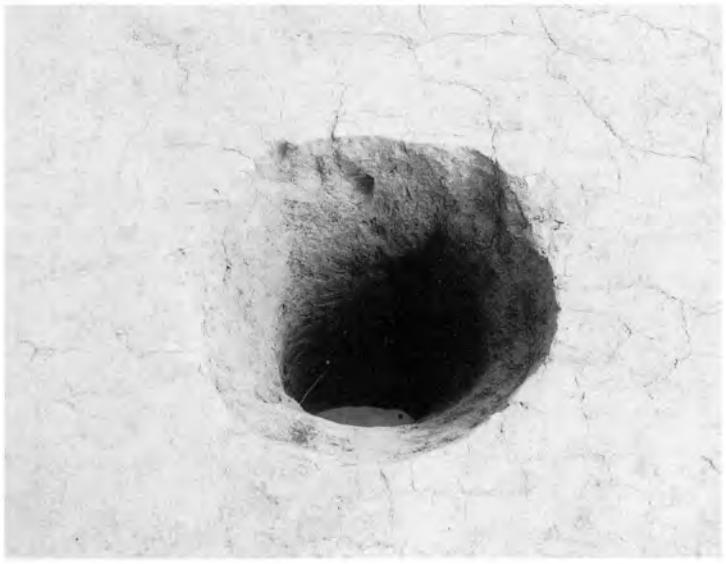


2号性格不明遺構遺物出土状況

3号性格不明遺構



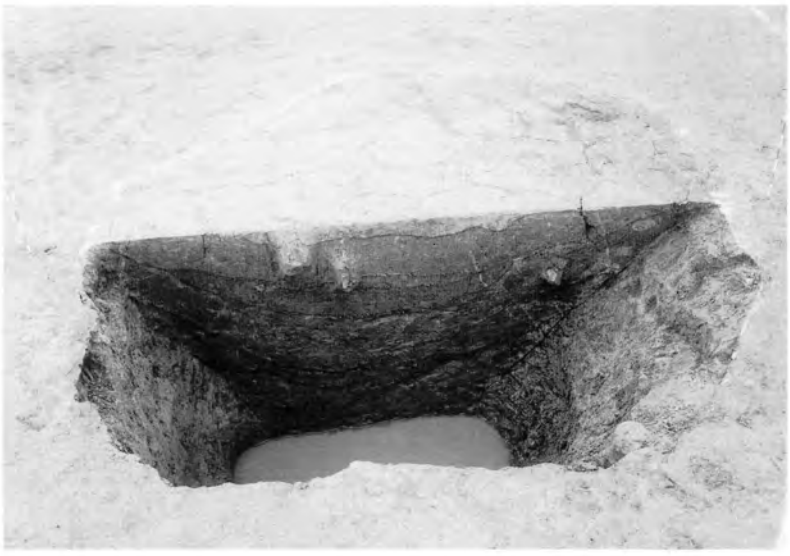
3号性格不明遺構遺物出土状況



1号井戸跡

図版 66

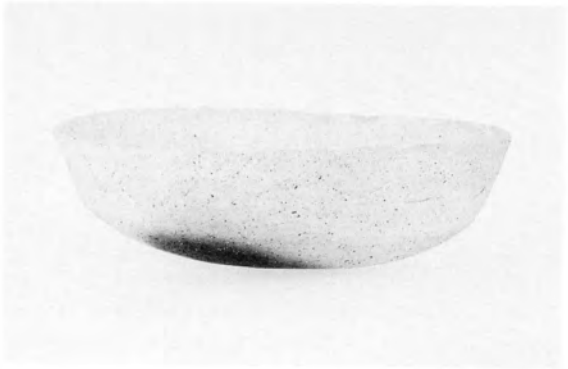
2号井戸跡



3号井戸跡断面

3号井戸跡

1号住居 No.1



8号住居 No.5

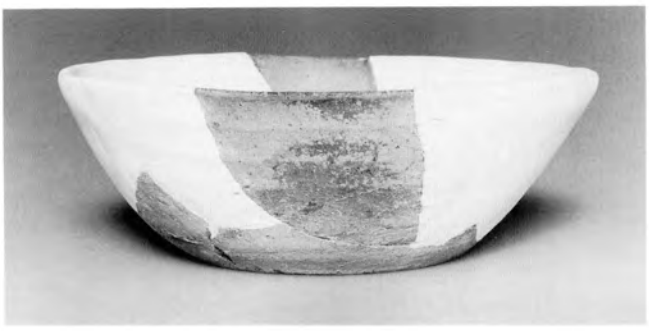
2号住居 No.2

8号住居 No.10

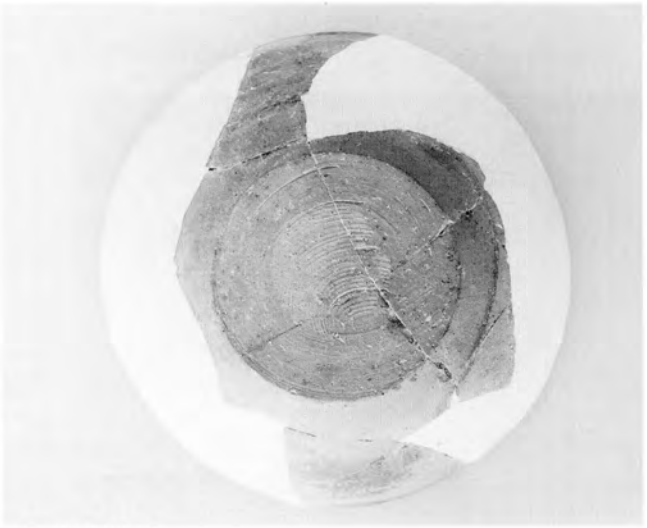
8号住居 No.4

9号住居 No.1

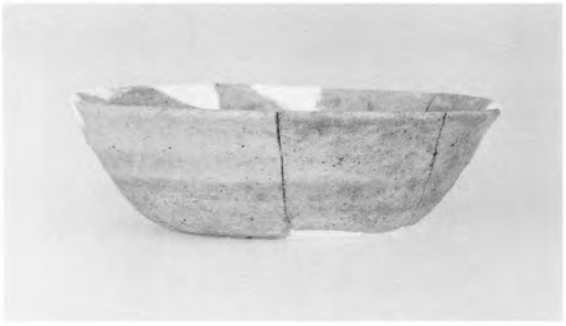
図版 68



9号住居 No.2



9号住居 No.4



9号住居 No.5

9号住居 No.3

11号住居 No.2

13号住居 No.2

11号住居 No.3

14号住居 No.1

12号住居 No.1

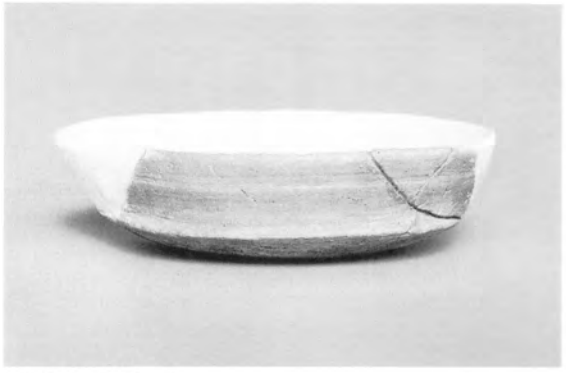
14号住居 No.2

13号住居 No.1

14号住居 No.4

図版 70

16号住居 No.1



16号住居 No.5

17号住居 No.2

18号住居 No.3

18号住居 No.4

18号住居 No.6

18号住居 No.7

18号住居 No.9

18号住居 No.14

18号住居 No.10

18号住居 No.15

18号住居 No.11

18号住居 No.16

18号住居 No.12

18号住居 No.17

図版 72

18号住居 No.18

19号住居 No.7

18号住居 No.21

19号住居 No.8

19号住居 No.2

19号住居 No.9

19号住居 No.3

19号住居 No.10

19号住居 No.11

19号住居 No.19

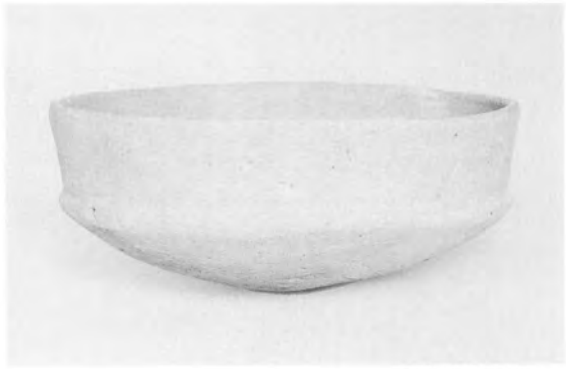
19号住居 No.13

19号住居 No.20

19号住居 No.14

19号住居 No.22

19号住居 No.16



21号住居 No.1

図版 74

21号住居 No.2

22号住居 No.2

21号住居 No.5

23号住居 No.3

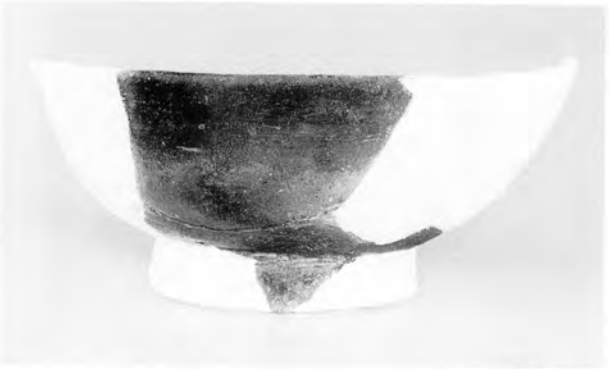
21号住居 No.6

23号住居 No.5

21号住居 No.7

23号住居 No.6

23号住居 No.8



26号住居 No.2

28号住居 No.3

24号住居 No.1

24号住居 No.2

29号住居 No.1

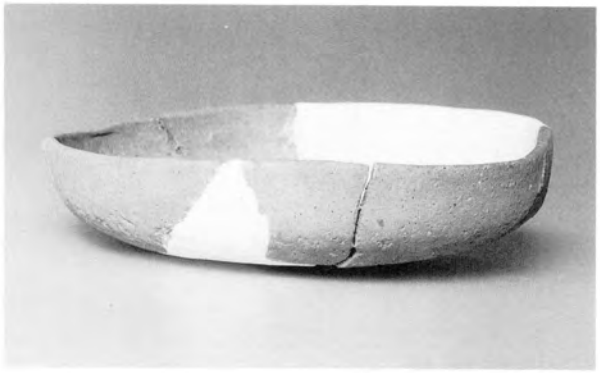
図版 76

29号住居 No.2

30号住居 No.1

30号住居 No.5

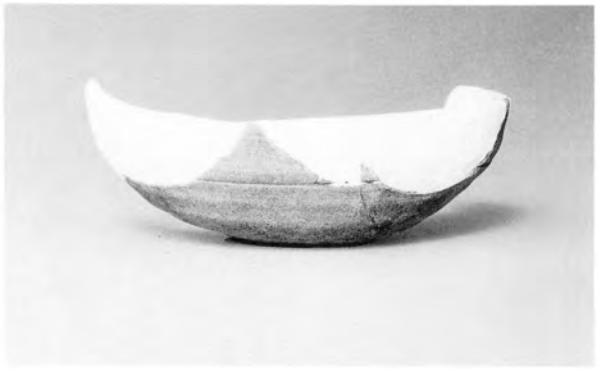
30号住居 No.6



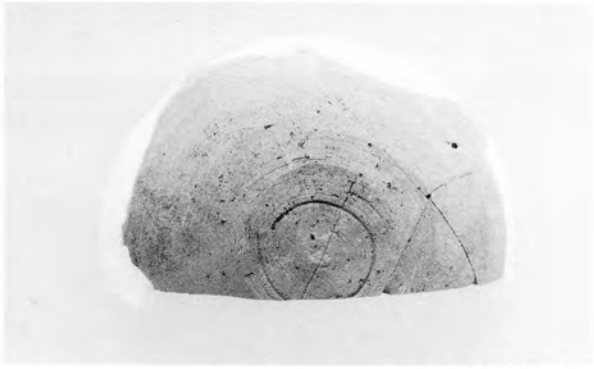
33号住居 No.2

30号住居 No.7

33号住居 No.3



30号住居 No.8



37号住居 No.1

図版 78

37号住居 No.4

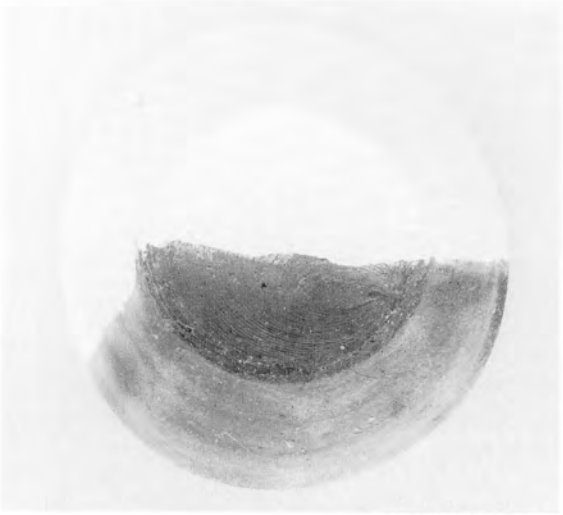
37号住居 No.5

37号住居 No.7

39号住居 No.3

39号住居 No.4

41号住居 No.1



40号住居 No.2

40号住居 No.4

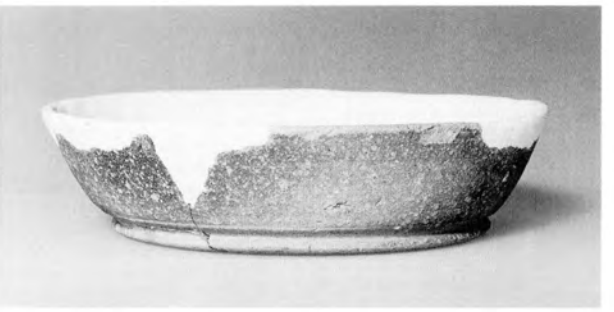
43号住居 No.1

40号住居 No.9

43号住居 No.3

図版 80

45号住居 No.1



47号住居 No.2

48号住居 No.3

47号住居 No.3

50号住居 No.2

47号住居 No.4

55号住居 No.3

57号住居 No.1

60号住居 No.3

60号住居 No.4

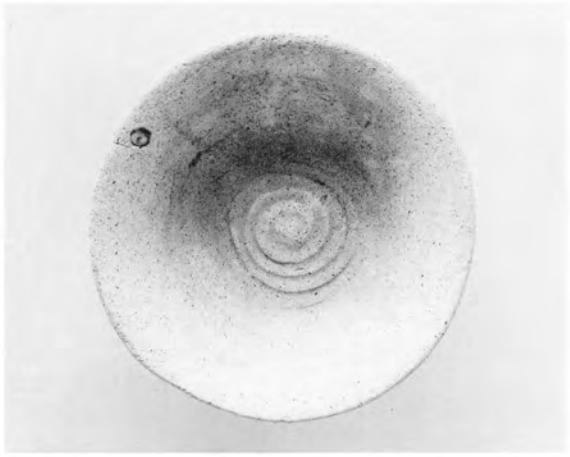
60号住居 No.1

60号住居 No.5

60号住居 No.2

60号住居 No.11

図版 82



61号住居 No.1

61号住居 No.2

61号住居 No.4

62号住居 No.2

64号住居 No.2

65号住居 No.8

65号住居 No.9

69号住居 No.2

1号土器祭祀 No.1

71号住居 No.2

1号土器祭祀 No.4

71号住居 No.3

1号土器祭祀 No.5

図版 84

1号土器祭祀 No.6

1号土器祭祀 No.19

1号土器祭祀 No.10

1号土器祭祀 No.21

1号土器祭祀 No.11

1号土器祭祀 No.23

1号土器祭祀 No.15

1号土器祭祀 No.24

1号土器祭祀 No.25

1号土器祭祀 No.38

1号土器祭祀 No.28

2号土器祭祀 No.3

1号土器祭祀 No.29

2号土器祭祀 No.7

1号土器祭祀 No.35

3号土器祭祀 No.3

図版 86

3号土器祭祀 No.6

3号土器祭祀 No.16

3号土器祭祀 No.7

3号土器祭祀 No.17

3号土器祭祀 No.11

3号土器祭祀 No.18

3号土器祭祀 No.15

3号土器祭祀 No.19

3号土器祭祀 No.20

3号土器祭祀 No.30

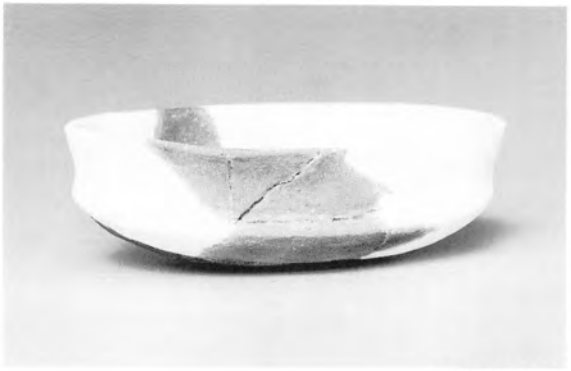
3号土器祭祀 No.21

3号土器祭祀 No.32

3号土器祭祀 No.25

3号土器祭祀 No.33

3号土器祭祀 No.29



1号溝No.3

図版88

1号溝No.5

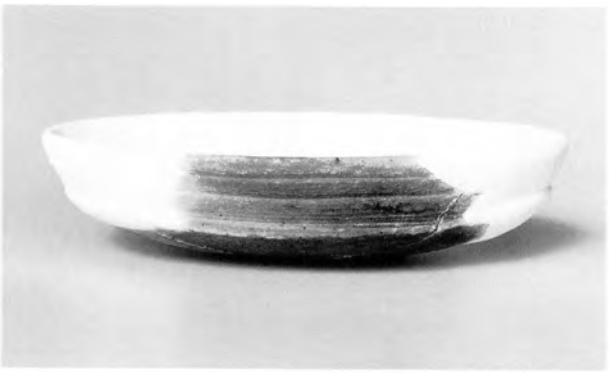
1号溝No.9

1号溝No.10

34号土坑No.1

34号土坑No.2

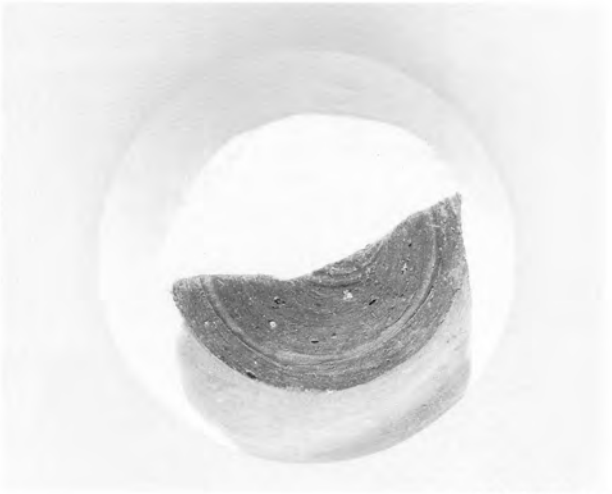
47号土坑No.1



その他No.4

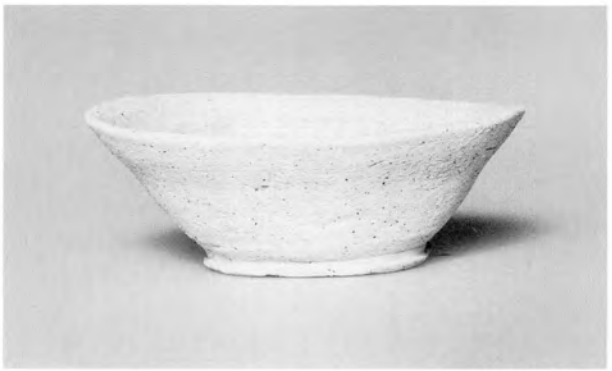
135号土坑No.1

その他No.2



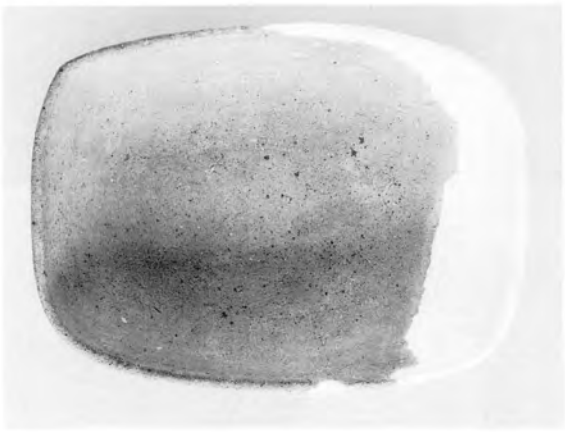
その他No.5

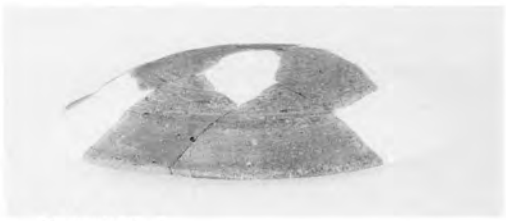
その他No.3



その他No.6

図版 90





37号土坑No.1

その他No.1

15号住居 No.1

16号住居 No.7

15号住居 No.2

15号住居 No.3

17号住居 No.3

図版 92

18号住居 No.22

64号住居 No.5

19号住居 No.24

142号住居 No.3

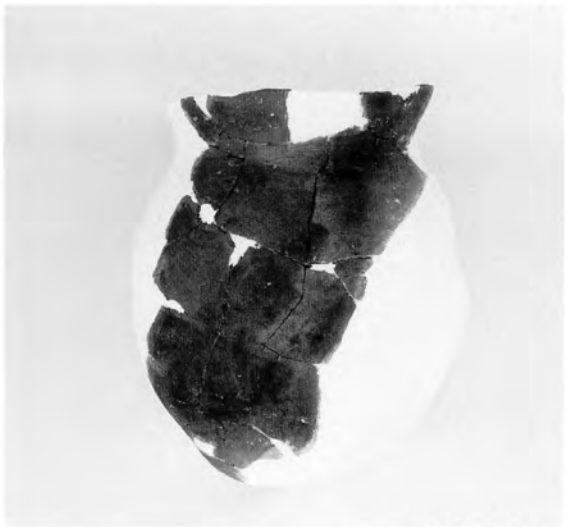
64号住居 No.4

6号住居 No.4

15号住居 No.6

8号住居 No.12

15号住居 No.7

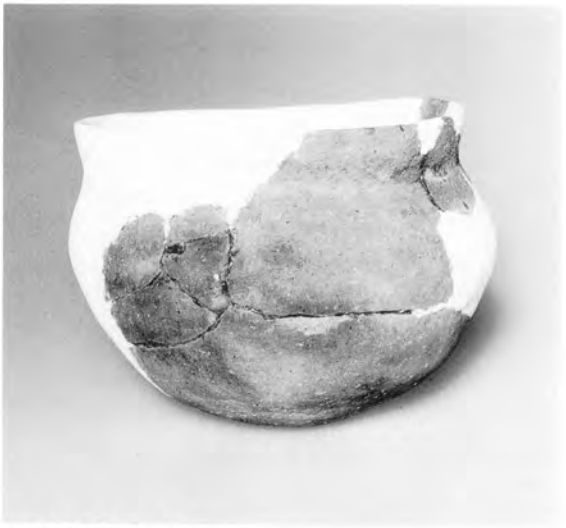


14号住居 No.7

15号住居 No.10

図版 94

16号住居 No.10



18号住居 No.25

18号住居 No.29

18号住居 No.31

18号住居 No.32

18号住居 No.34

19号住居 No.30

21号住居 No.8

19号住居 No.31

21号住居 No.9

20号住居 No.4

21号住居 No.10

図版 96

21号住居 No.11

21号住居 No.14

21号住居 No.12

21号住居 No.15

21号住居 No.13

21号住居 No.16

32号住居 No.4

60号住居 No.17

40号住居 No.13

64号住居 No.10

47号住居 No.5

67号住居 No.1

図版 98

70号住居 No.2

142号土坑 No.8

71号住居 No.8

142号土坑 No.9

142号土坑 No.6

142号土坑 No.10

1号土器No.44

1号土器No.46

1号土器No.45

1号土器関連須恵器大甕

図版 100

13号住居 No.4

27号住居 No.6

13号住居 No.5

30号住居 No.10

26号住居 No.5

1号溝 No.15

18号住居 No.41

19号住居 No.41

18号住居 No.42

19号住居 No.43

19号住居 No.33

19号住居 No.44

図版 102

21号住居 No.17

63号住居 No.2

21号住居 No.18

63号住居 No.4

23号住居 No.11

64号住居 No.6

67号住居 No.2

45号土坑 No.3

4号土坑 No.1

142号土坑 No.14

167号土坑 No.2

図版 104

39号住居 No.7

3号土器祭祀 No.38

1号土器祭祀 No.43

133号土坑 No.1

152号土坑 No.4

8号住居 No.15

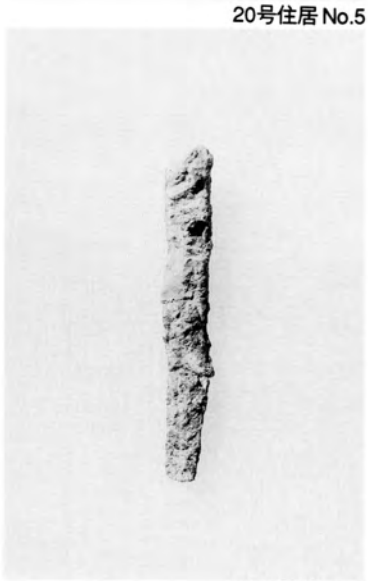
27号住居 No.18

45号住居 No.8

20号住居 No.5

29号住居 No.4

2号土器祭祀 No.12



20号住居 No.6

29号住居 No.5

224号住居 No.3

図版 106

1号住居 No.2

24号住居 No.4

8号住居 No.16

24号住居 No.5

8号住居 No.17

30号住居 No.17

13号住居 No.7

32号住居 No.12

37号住居 No.11

37号住居 No.12

39号住居 No.14

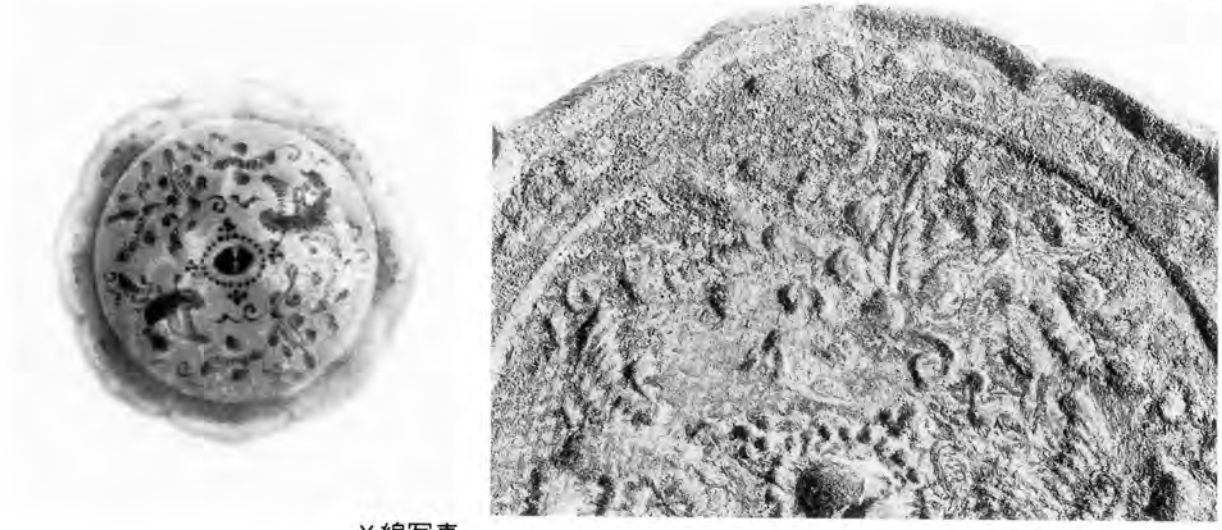
48号住居 No.5

62号住居 No.8

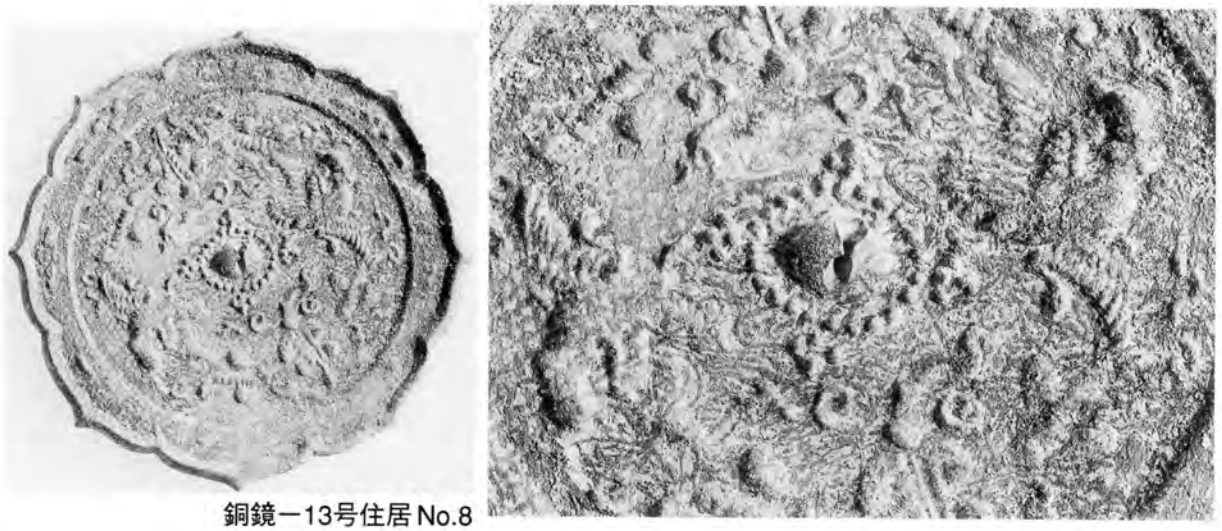
67号住居 No.2

135号土坑No.7

図版 108　各遺跡出土土錘

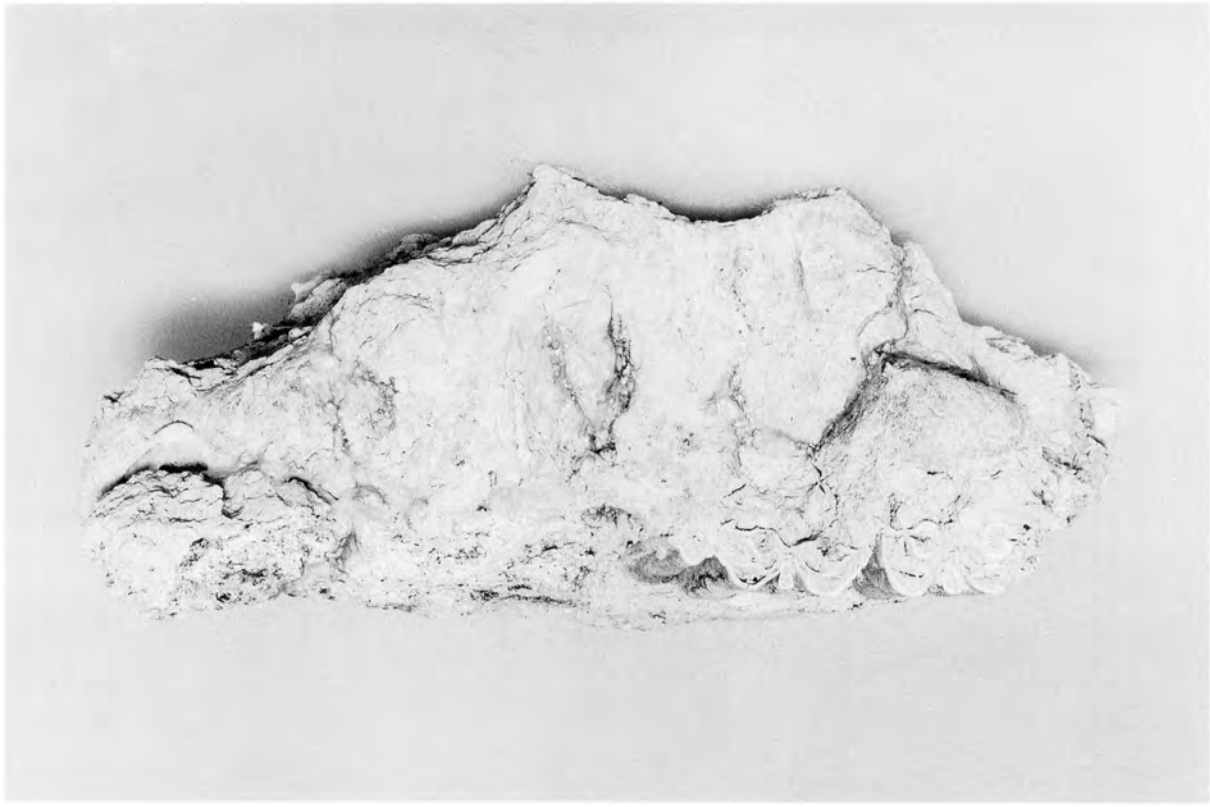


X線写真

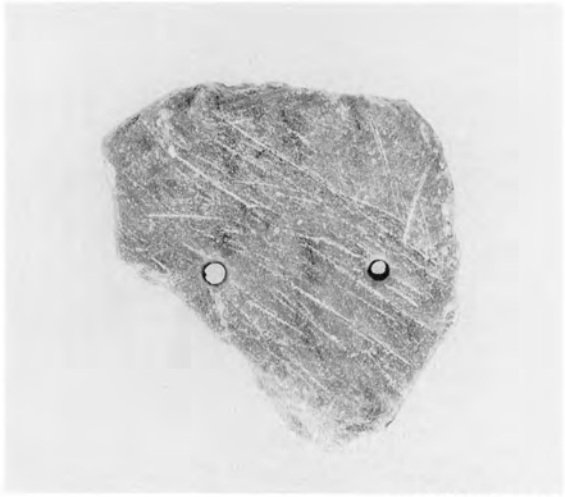


銅鏡－13号住居 No.8

図版 110



馬歯ー1号土器祭祀



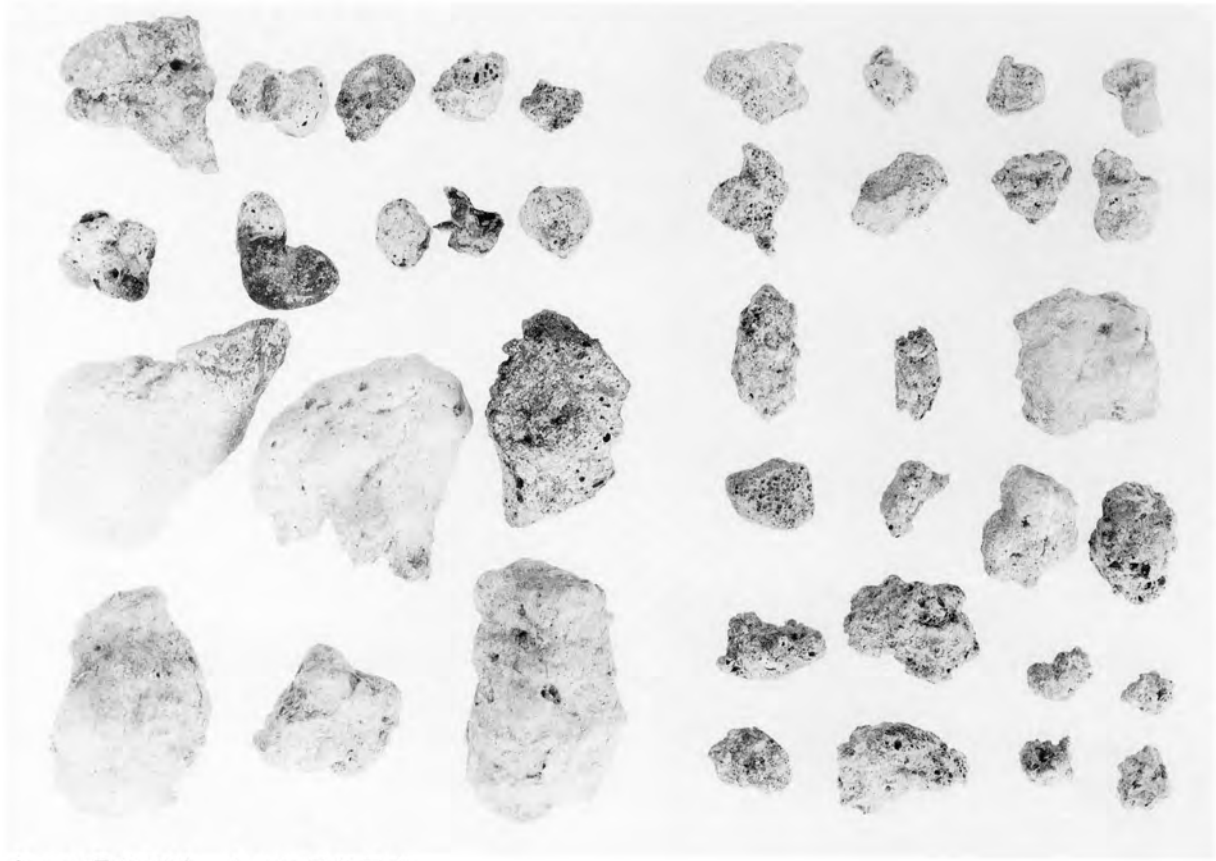
18号住居 No.43

1号土器祭祀 No.61

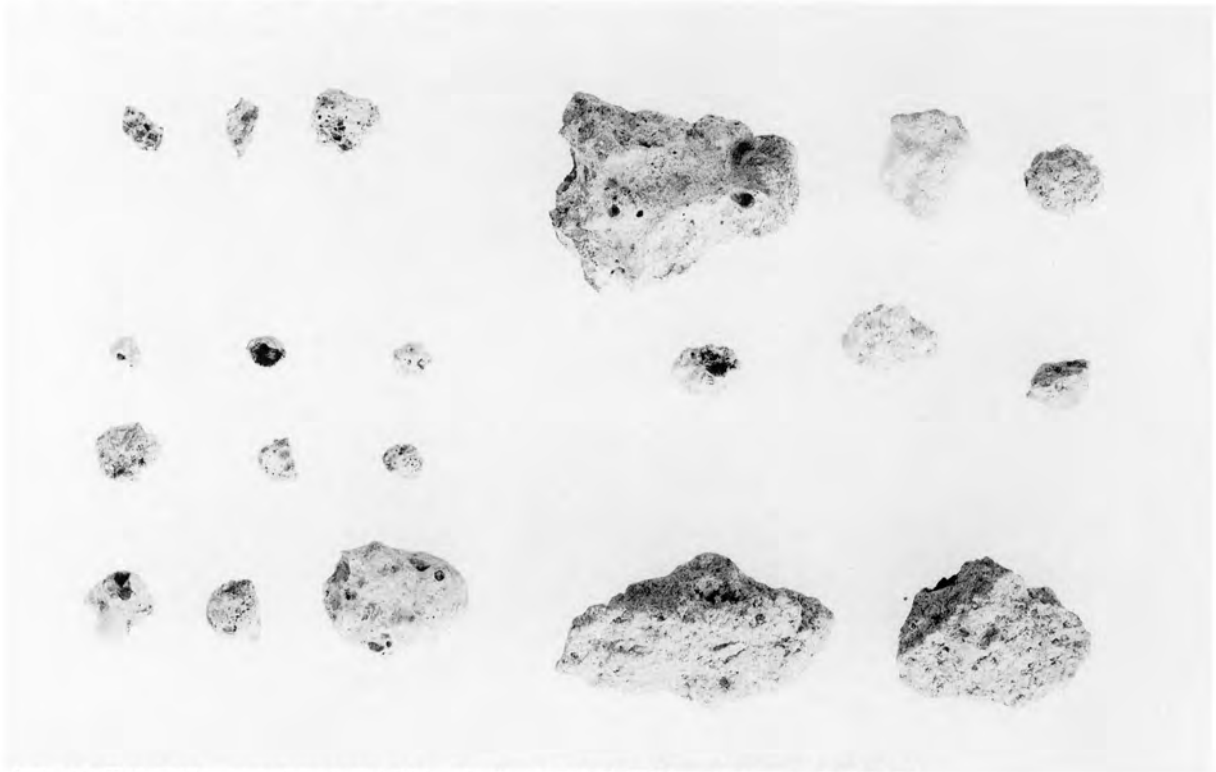
1号土器祭祀 No.62

57号住居 No.5

図版 112　鉄塊及びスラッグ

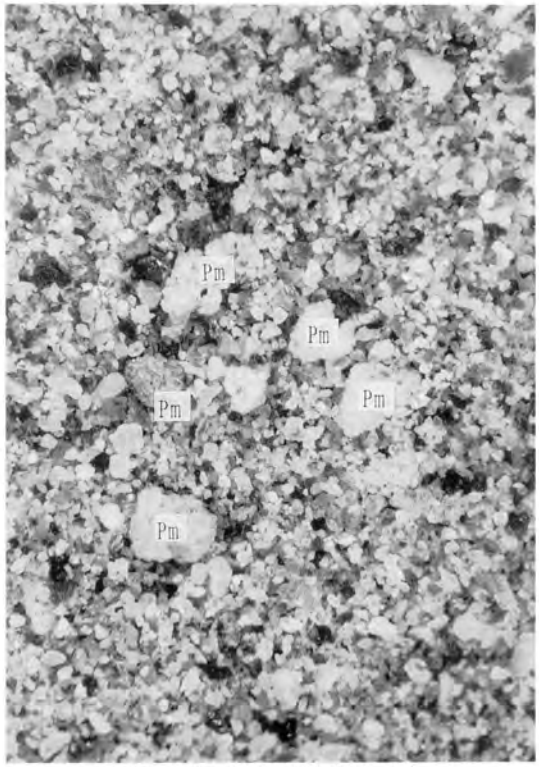


左：11号住居跡、右：13号住居跡

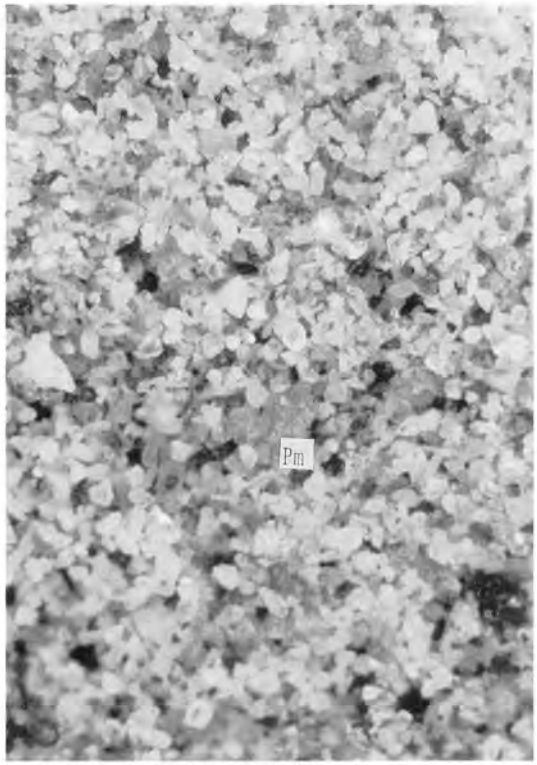


左上：5号住居跡、左下：9号住居跡、右上：27号住居跡、右下：42号住居跡

図版１　軽石・砂分の状況

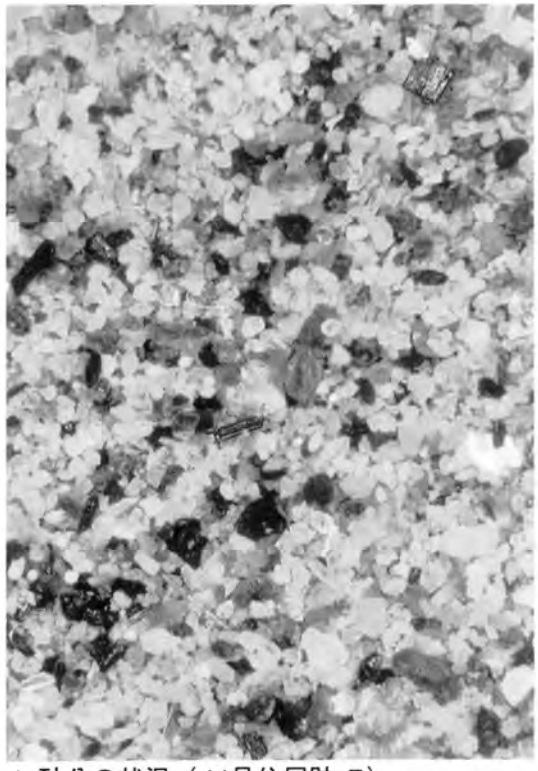


1. As-Bの軽石（3号土器祭祀跡;1）

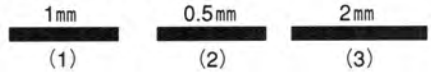


2. 砂分の状況（3号土器祭祀跡;4）

3. As-Bの軽石（1号溝;6）



4. 砂分の状況（44号住居跡;7）



Pm:軽石

報告書抄録

ふりがな	いっぽんぎまえいせき
書名	一本木前遺跡
副書名	平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	寺社下博
編集機関	熊谷市教育委員会
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 熊谷市教育委員会社会教育課内 TEL048-524-1111
発行年月日	西暦2000（平成12）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (° ′ ″)	東経 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
いっぽんぎまえ いせき 一本木前遺跡	さいたまけんくまがやし 埼玉県熊谷市 おおあざひがしべっぷ 大字東別府 あざいっぽんぎまえ 字一本木前1390他	11202	115	36°11′17″	139°21′39″	19980601 ～ 19990331	10,000	調節池 掘削

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
一本木前遺跡	集落跡	弥生時代	遺物包含層	弥生式土器	
		古墳時代	土器祭祀跡 1 住居跡 26	土師器、須恵器、石製模造品、砥石、土錘、石錘	土器祭祀跡は、人為的に掘削された入り江の最奥部に、馬頭骨を中心にして多量の土師器、須恵器、石製模造品が配置される。
		奈良・平安時代	住居跡 45 土坑 192 井戸 4 溝 44	土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、鉄製品、銅鏡、鉄滓、土錘、砥石、石製模造品	13号住居跡の床面から、多量の鉄滓とともに、銅鏡（瑞花鴛鴦八稜鏡）が出土。
		中世	土坑 33		
		近世	溝 2	磁器	

平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡

平成12年3月24日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行／熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社

さくらのまち“熊谷”